

**2021年度
大学院公共政策研究科
講義概要 (シラバス)**



法政大学

科目一覽

【発行日：2021/5/1】最新版のシラバスは、法政大学 Web シラバス (<https://syllabus.hosei.ac.jp/>) で確認してください。

公共政策学専攻_ (修士課程) 研究科共通科目	【X9000】	政治理論 [杉田 敦]	春学期授業/Spring	1
公共政策学専攻_ (修士課程) 研究科共通科目	【X9001】	行政学基礎 [土山 希美枝]	秋学期前半/Fall(1st half)	2
公共政策学専攻_ (修士課程) 研究科共通科目	【X9002】	比較行政研究 [申 龍徹]	春学期後半/Spring(2nd half)	3
公共政策学専攻_ (修士課程) 研究科共通科目	【X9003】	公共哲学基礎 [西村 清貴]	秋学期前半/Fall(1st half)	4
公共政策学専攻_ (修士課程) 研究科共通科目	【X9005】	政策学基礎 [瀧元 初姫]	春学期前半/Spring(1st half)	5
公共政策学専攻_ (修士課程) 研究科共通科目	【X9006】	現代政治分析研究 [白鳥 浩]	春学期前半/Spring(1st half)	6
公共政策学専攻_ (修士課程) 研究科共通科目	【X9007】	公共政策とジャーナリズム [白鳥 浩、読売新聞社講師]	春学期後半/Spring(2nd half)	7
公共政策学専攻_ (修士課程) 研究科共通科目	【X9008】	公共政策の社会理論 [池田 寛二]	春学期後半/Spring(2nd half)	8
公共政策学専攻_ (修士課程) 研究科共通科目	【X9009】	財政学基礎 [調整中]		9
公共政策学専攻_ (修士課程) 研究科共通科目	【X9010】	経済学基礎 [芦谷 典子]	春学期前半/Spring(1st half)	10
公共政策学専攻_ (修士課程) 研究科共通科目	【X9011】	環境哲学・倫理学 [吉永 明弘]	秋学期後半/Fall(2nd half)	11
公共政策学専攻_ (修士課程) 研究科共通科目	【X9012】	環境法基礎 [永野 秀雄、横内 恵、岡松 暁子]	春学期前半/Spring(1st half)	12
公共政策学専攻_ (修士課程) 研究科共通科目	【X9013】	地球環境学基礎 [藤倉 良]	春学期後半/Spring(2nd half)	13
公共政策学専攻_ (修士課程) 研究科共通科目	【X9014】	国際政治学基礎 [森 聡]	春学期授業/Spring	14
公共政策学専攻_ (修士課程) 研究科共通科目	【X9015】	国際協力論 [武貞 稔彦]	秋学期前半/Fall(1st half)	16
公共政策学専攻_ (修士課程) 研究科共通科目	【X9016】	サステイナビリティ研究入門A [杉戸 信彦、藤倉 良]	春学期授業/Spring	17
公共政策学専攻_ (修士課程) 研究科共通科目	【X9017】	サステイナビリティ研究入門B [杉戸 信彦、藤倉 良]	春学期授業/Spring	18
公共政策学専攻_ (修士課程) 研究科共通科目	【X9018】	SDGs への招待 [武貞 稔彦]	秋学期前半/Fall(1st half)	19
公共政策学専攻_ (修士課程) 研究科共通科目	【X9019】	政策法務論 [神崎 一郎]	春学期後半/Spring(2nd half)	20
公共政策学専攻_ (修士課程) 研究科共通科目	【X9020】	立法学研究 [神崎 一郎]	春学期前半/Spring(1st half)	21
公共政策学専攻_ (修士課程) 研究科共通科目	【X9021】	政策評価論 [南島 和久]	春学期後半/Spring(2nd half)	22
公共政策学専攻_ (修士課程) 研究科共通科目	【X9022】	社会調査法1 [小磯 明]	春学期後半/Spring(2nd half)	23
公共政策学専攻_ (修士課程) 研究科共通科目	【X9023】	社会調査法2 [中筋 直哉]	春学期後半/Spring(2nd half)	24
公共政策学専攻_ (修士課程) 研究科共通科目	【X9024】	社会調査法3 [見田 朱子]	秋学期後半/Fall(2nd half)	25
公共政策学専攻_ (修士課程) 研究科共通科目	【X9025】	社会調査法4 [見田 朱子]	秋学期前半/Fall(1st half)	26
公共政策学専攻_ (修士課程) 研究科共通科目	【X9026】	社会調査法5 [小磯 明]	秋学期前半/Fall(1st half)	27
公共政策学専攻_ (修士課程) 研究科共通科目	【X9027】	社会調査法6 [中筋 直哉]	春学期前半/Spring(1st half)	28
公共政策学専攻_ (修士課程) 研究科共通科目	【X9028】	社会調査法7 [見田 朱子]	秋学期前半/Fall(1st half)	29
公共政策学専攻_ (修士課程) 研究科共通科目	【X9029】	社会調査法8 [田嶋 淳子]	春学期後半/Spring(2nd half)	30
公共政策学専攻_ (修士課程) 研究科共通科目	【X9030】	政策分析評価技法 [阿部 一知]	春学期後半/Spring(2nd half)	31
公共政策学専攻_ (修士課程) 研究科共通科目	【X9031】	市民参加の理論と実践 [小島 聡、杉崎 和久、谷本 有美子]	春学期後半/Spring(2nd half)	32
公共政策学専攻_ (修士課程) 研究科共通科目	【X9032】	数理モデル概論 [松本 倫明]	秋学期後半/Fall(2nd half)	33
公共政策学専攻_ (修士課程) 研究科共通科目	【X9033】	地域コンサルティング論 [佐谷 和江]	春学期前半/Spring(1st half)	34
公共政策学専攻_ (修士課程) 研究科共通科目	【X9034】	ファシリテーション演習 [徳田 太郎]	秋学期後半/Fall(2nd half)	36
公共政策学専攻_ (修士課程) 研究科共通科目	【X9035】	CSR論 [長谷川 直哉]	春学期前半/Spring(1st half)	37
公共政策学専攻_ (修士課程) 研究科共通科目	【X9036】	政策研究概論 (外国語) ※韓国語 [申 龍徹]	春学期授業/Spring	38
公共政策学専攻_ (修士課程) 研究科共通科目	【X9037】	政策研究概論 (外国語) ※中国語 [毛 桂榮]	春学期授業/Spring	39
公共政策学専攻_ (修士課程) 研究科共通科目	【X9038】	公共政策論文技法1 [白鳥 浩、塚崎 裕子、小磯 明]	春学期前半/Spring(1st half)	41
公共政策学専攻_ (修士課程) 研究科共通科目	【X9039】	公共政策論文技法2 [瀧元 初姫]	春学期後半/Spring(2nd half)	42
公共政策学専攻_ (修士課程) 公共マネジメントコース専門科目	【X9040】	政策学研究 [瀧元 初姫]	秋学期前半/Fall(1st half)	43
公共政策学専攻_ (修士課程) 公共マネジメントコース専門科目	【X9043】	自治体議会論 [鍵屋 一]	春学期後半/Spring(2nd half)	44
公共政策学専攻_ (修士課程) 公共マネジメントコース専門科目	【X9044】	公務員制度研究 [合田 秀樹]	秋学期後半/Fall(2nd half)	45

公共政策学専攻_(修士課程) 公共マネジメントコース専門科目 【X9045】 都市政策概論 [杉崎 和久] 春学期後半/Spring(2nd half)	46
公共政策学専攻_(修士課程) 公共マネジメントコース専門科目 【X9046】 都市政策事例研究 [杉崎 和久] 秋学期後半/Fall(2nd half)	47
公共政策学専攻_(修士課程) 公共マネジメントコース専門科目 【X9047】 政策過程研究 [土山 希美枝] 春学期前半/Spring(1st half)	48
公共政策学専攻_(修士課程) 公共マネジメントコース専門科目 【X9048】 自治体福祉政策論 [鏡 諭] 秋学期前半/Fall(1st half)	49
公共政策学専攻_(修士課程) 公共マネジメントコース専門科目 【X9049】 行政法事例研究 [牧瀬 稔、橘田 誠] 春学期後半/Spring(2nd half)	50
公共政策学専攻_(修士課程) 公共マネジメントコース専門科目 【X9050】 コミュニティ制度論 [西谷内 博美] 秋学期前半/Fall(1st half)	51
公共政策学専攻_(修士課程) 公共マネジメントコース専門科目 【X9051】 日本政治史研究 [明田川 融] 春学期授業/Spring	52
公共政策学専攻_(修士課程) 公共マネジメントコース専門科目 【X9052】 地方自治論 [土山 希美枝] 秋学期後半/Fall(2nd half)	53
公共政策学専攻_(修士課程) 公共マネジメントコース専門科目 【X9053】 自治体経営論 [谷本 有美子] 春学期後半/Spring(2nd half)	54
公共政策学専攻_(修士課程) 公共マネジメントコース専門科目 【X9054】 比較公務員制度研究 [申 龍徹] 秋学期前半/Fall(1st half)	55
公共政策学専攻_(修士課程) 公共マネジメントコース専門科目 【X9055】 比較自治行政研究 [申 龍徹] 春学期前半/Spring(1st half)	56
公共政策学専攻_(修士課程) 公共マネジメントコース専門科目 【X9056】 防災危機管理研究 [鍵屋 一] 春学期前半/Spring(1st half)	57
公共政策学専攻_(修士課程) 公共マネジメントコース専門科目 【X9057】 雇用労働政策研究 [濱口 桂一郎] 秋学期前半/Fall(1st half)	58
公共政策学専攻_(修士課程) 公共マネジメントコース専門科目 【X9058】 政策過程事例研究 [鄭 智允] 秋学期後半/Fall(2nd half)	59
公共政策学専攻_(修士課程) 公共マネジメントコース専門科目 【X9059】 政策開発実践論 [富澤 守、小森 岳史、清水 英弥、高橋 良一] 秋学期後半/Fall(2nd half)	60
公共政策学専攻_(修士課程) 公共マネジメントコース専門科目 【X9061】 自治体政策実践論1 [中嶋 いづみ、押立 貴志、渡部 朋宏] 秋学期前半/Fall(1st half)	61
公共政策学専攻_(修士課程) 公共マネジメントコース専門科目 【X9063】 自治体政策実践論3 [宮崎 一徳、渡邊 勝道、青山 貴洋] 春学期後半/Spring(2nd half)	64
公共政策学専攻_(修士課程) 政策研究コース専門科目 【X9064】 ガバナンス研究 [芦立 秀朗] 春学期前半/Spring(1st half)	66
公共政策学専攻_(修士課程) 政策研究コース専門科目 【X9065】 リージョナリズムと非政府組織 [大芝 亮] 春学期集中/Intensive(Spring)	67
公共政策学専攻_(修士課程) 政策研究コース専門科目 【X9066】 企業論 [加藤 寛之] 春学期授業/Spring	68
公共政策学専攻_(修士課程) 政策研究コース専門科目 【X9067】 グローバル企業戦略論 [多田 和美] 秋学期前半/Fall(1st half)	69
公共政策学専攻_(修士課程) 政策研究コース専門科目 【X9068】 市民社会ガバナンス論 [柏木 宏] 春学期後半/Spring(2nd half)	70
公共政策学専攻_(修士課程) 政策研究コース専門科目 【X9069】 NPO論 [柏木 宏] 春学期前半/Spring(1st half)	72
公共政策学専攻_(修士課程) 政策研究コース専門科目 【X9070】 非営利セクター研究 [矢代 隆嗣] 春学期前半/Spring(1st half)	74
公共政策学専攻_(修士課程) 政策研究コース専門科目 【X9071】 市民社会論 [菅原 敏夫] 春学期前半/Spring(1st half)	75
公共政策学専攻_(修士課程) 政策研究コース専門科目 【X9072】 市民社会とコミュニティ [淵元 初姫] 春学期後半/Spring(2nd half)	76
公共政策学専攻_(修士課程) 政策研究コース専門科目 【X9073】 都市ガバナンス論 [植木 豊] 秋学期前半/Fall(1st half)	77
公共政策学専攻_(修士課程) 政策研究コース専門科目 【X9075】 文化政策研究 [松本 茂章] 春学期前半/Spring(1st half)	78
公共政策学専攻_(修士課程) 政策研究コース専門科目 【X9076】 シンクタンク論 [蒔田 純] 秋学期集中/Intensive(Fall)	80
公共政策学専攻_(修士課程) 政策研究コース専門科目 【X9078】 環境自治体政策研究 [馬場 健司、増原 直樹] 秋学期集中/Intensive(Fall)	81
公共政策学専攻_(修士課程) 政策研究コース専門科目 【X9079】 公共空間形成論 [申 龍徹] 秋学期後半/Fall(2nd half)	83

公共政策学専攻_(修士課程) 政策研究コース専門科目【X9080】ジェンダー政策研究[中野 洋恵] 春学期後半/Spring(2nd half)	84
公共政策学専攻_(修士課程) 政策研究コース専門科目【X9081】公共哲学研究[渊元 初姫] 秋学期後半/Fall(2nd half)	86
公共政策学専攻_(修士課程) 政策研究コース専門科目【X9082】イノベーション政策論[糸久 正人] 秋学期前半/Fall(1st half)	87
公共政策学専攻_(修士課程) 政策研究コース専門科目【X9083】外交政策論[宮本 悟] 春学期後半/Spring(2nd half)	88
公共政策学専攻_(修士課程) 政策研究コース専門科目【X9084】国際環境政策の社会学[島田 昭仁] 春学期授業/Spring	90
公共政策学専攻_(修士課程) 政策研究コース専門科目【X9085】地球環境生態学[鞠子 茂] 秋学期集中/Intensive(Fall)	91
公共政策学専攻_(修士課程) 政策研究コース専門科目【X9086】租税政策[櫻井 良治] 秋学期前半/Fall(1st half)	92
公共政策学専攻_(修士課程) 政策研究コース専門科目【X9087】比較公共政策論[桐谷 仁] 春学期後半/Spring(2nd half)	94
公共政策学専攻_(修士課程) 政策研究コース専門科目【X9088】費用便益分析[調整中]	95
公共政策学専攻_(修士課程) 政策研究コース専門科目【X9089】経済政策[金子 勝] 秋学期後半/Fall(2nd half) ..	96
公共政策学専攻_(修士課程) 研究指導科目【X9100】論文研究指導1A [杉崎 和久] 春学期授業/Spring	97
公共政策学専攻_(修士課程) 研究指導科目【X9101】論文研究指導1B [杉崎 和久] 秋学期授業/Fall	98
公共政策学専攻_(修士課程) 研究指導科目【X9102】論文研究指導1A [土山 希美枝] 春学期授業/Spring	99
公共政策学専攻_(修士課程) 研究指導科目【X9103】論文研究指導1B [土山 希美枝] 秋学期授業/Fall	100
公共政策学専攻_(修士課程) 研究指導科目【X9104】論文研究指導1A [名和田 是彦] 春学期授業/Spring	101
公共政策学専攻_(修士課程) 研究指導科目【X9105】論文研究指導1B [名和田 是彦] 秋学期授業/Fall	102
公共政策学専攻_(修士課程) 研究指導科目【X9106】論文研究指導1A [廣瀬 克哉] 春学期授業/Spring	103
公共政策学専攻_(修士課程) 研究指導科目【X9107】論文研究指導1B [廣瀬 克哉] 秋学期授業/Fall	104
公共政策学専攻_(修士課程) 研究指導科目【X9108】論文研究指導1A [渊元 初姫] 春学期授業/Spring	105
公共政策学専攻_(修士課程) 研究指導科目【X9109】論文研究指導1B [渊元 初姫] 秋学期授業/Fall	106
公共政策学専攻_(修士課程) 研究指導科目【X9110】論文研究指導1A [池田 寛二] 春学期授業/Spring	107
公共政策学専攻_(修士課程) 研究指導科目【X9111】論文研究指導1B [池田 寛二] 秋学期授業/Fall	108
公共政策学専攻_(修士課程) 研究指導科目【X9112】論文研究指導1A [糸久 正人] 春学期授業/Spring	109
公共政策学専攻_(修士課程) 研究指導科目【X9113】論文研究指導1B [糸久 正人] 秋学期授業/Fall	110
公共政策学専攻_(修士課程) 研究指導科目【X9114】論文研究指導1A [加藤 寛之] 春学期授業/Spring	111
公共政策学専攻_(修士課程) 研究指導科目【X9115】論文研究指導1B [加藤 寛之] 秋学期授業/Fall	112
公共政策学専攻_(修士課程) 研究指導科目【X9116】論文研究指導1A [白鳥 浩] 春学期授業/Spring	113
公共政策学専攻_(修士課程) 研究指導科目【X9117】論文研究指導1B [白鳥 浩] 秋学期授業/Fall	114
公共政策学専攻_(修士課程) 研究指導科目【X9118】論文研究指導1A [関口 浩] 春学期授業/Spring	115
公共政策学専攻_(修士課程) 研究指導科目【X9119】論文研究指導1B [関口 浩] 秋学期授業/Fall	116
公共政策学専攻_(修士課程) 研究指導科目【X9120】論文研究指導1A [多田 和美] 春学期授業/Spring	117
公共政策学専攻_(修士課程) 研究指導科目【X9121】論文研究指導1B [多田 和美] 秋学期授業/Fall	118
公共政策学専攻_(修士課程) 研究指導科目【X9122】論文研究指導1A [谷本 有美子] 春学期授業/Spring	119
公共政策学専攻_(修士課程) 研究指導科目【X9123】論文研究指導1B [谷本 有美子] 秋学期授業/Fall	120
公共政策学専攻_(修士課程) 研究指導科目【X9124】論文研究指導1A [中筋 直哉] 春学期授業/Spring	121
公共政策学専攻_(修士課程) 研究指導科目【X9125】論文研究指導1B [中筋 直哉] 秋学期授業/Fall	122
公共政策学専攻_(修士課程) 研究指導科目【X9126】論文研究指導2A [杉崎 和久] 春学期授業/Spring	123
公共政策学専攻_(修士課程) 研究指導科目【X9127】論文研究指導2B [杉崎 和久] 秋学期授業/Fall	124
公共政策学専攻_(修士課程) 研究指導科目【X9132】論文研究指導2A [廣瀬 克哉] 春学期授業/Spring	125
公共政策学専攻_(修士課程) 研究指導科目【X9133】論文研究指導2B [廣瀬 克哉] 秋学期授業/Fall	126
公共政策学専攻_(修士課程) 研究指導科目【X9134】論文研究指導2A [渊元 初姫] 春学期授業/Spring	127
公共政策学専攻_(修士課程) 研究指導科目【X9135】論文研究指導2B [渊元 初姫] 秋学期授業/Fall	128
公共政策学専攻_(修士課程) 研究指導科目【X9136】論文研究指導2A [池田 寛二] 春学期授業/Spring	129
公共政策学専攻_(修士課程) 研究指導科目【X9137】論文研究指導2B [池田 寛二] 秋学期授業/Fall	130
公共政策学専攻_(修士課程) 研究指導科目【X9142】論文研究指導2A [白鳥 浩] 春学期授業/Spring	131
公共政策学専攻_(修士課程) 研究指導科目【X9143】論文研究指導2B [白鳥 浩] 秋学期授業/Fall	132
公共政策学専攻_(修士課程) 研究指導科目【X9144】論文研究指導2A [関口 浩] 春学期授業/Spring	133
公共政策学専攻_(修士課程) 研究指導科目【X9145】論文研究指導2B [関口 浩] 秋学期授業/Fall	134
公共政策学専攻_(修士課程) 研究指導科目【X9150】論文研究指導2A [中筋 直哉] 春学期授業/Spring	135
公共政策学専攻_(修士課程) 研究指導科目【X9151】論文研究指導2B [中筋 直哉] 秋学期授業/Fall	136
公共政策学専攻_(博士後期課程) 必修科目(研究指導科目)【X9300】公共政策学特殊研究1A [杉崎 和久] 春学期授業/Spring	137
公共政策学専攻_(博士後期課程) 必修科目(研究指導科目)【X9301】公共政策学特殊研究1B [杉崎 和久] 秋学期授業/Fall	138

公共政策学専攻_ (博士後期課程) 必修科目 (研究指導科目) 【X9302】 公共政策学特殊研究 1 A [土山 希美枝] 春 学期授業/Spring	139
公共政策学専攻_ (博士後期課程) 必修科目 (研究指導科目) 【X9303】 公共政策学特殊研究 1 B [土山 希美枝] 秋 学期授業/Fall	140
公共政策学専攻_ (博士後期課程) 必修科目 (研究指導科目) 【X9304】 公共政策学特殊研究 1 A [名和田 是彦] 春 学期授業/Spring	141
公共政策学専攻_ (博士後期課程) 必修科目 (研究指導科目) 【X9305】 公共政策学特殊研究 1 B [名和田 是彦] 秋 学期授業/Fall	142
公共政策学専攻_ (博士後期課程) 必修科目 (研究指導科目) 【X9306】 公共政策学特殊研究 1 A [廣瀬 克哉] 春学 期授業/Spring	143
公共政策学専攻_ (博士後期課程) 必修科目 (研究指導科目) 【X9307】 公共政策学特殊研究 1 B [廣瀬 克哉] 秋学 期授業/Fall	144
公共政策学専攻_ (博士後期課程) 必修科目 (研究指導科目) 【X9308】 公共政策学特殊研究 1 A [糸久 正人] 春学 期授業/Spring	145
公共政策学専攻_ (博士後期課程) 必修科目 (研究指導科目) 【X9309】 公共政策学特殊研究 1 B [糸久 正人] 秋学 期授業/Fall	146
公共政策学専攻_ (博士後期課程) 必修科目 (研究指導科目) 【X9310】 公共政策学特殊研究 1 A [加藤 寛之] 春学 期授業/Spring	147
公共政策学専攻_ (博士後期課程) 必修科目 (研究指導科目) 【X9311】 公共政策学特殊研究 1 B [加藤 寛之] 秋学 期授業/Fall	148
公共政策学専攻_ (博士後期課程) 必修科目 (研究指導科目) 【X9312】 公共政策学特殊研究 1 A [白鳥 浩] 春学期 授業/Spring	149
公共政策学専攻_ (博士後期課程) 必修科目 (研究指導科目) 【X9313】 公共政策学特殊研究 1 B [白鳥 浩] 秋学期 授業/Fall	150
公共政策学専攻_ (博士後期課程) 必修科目 (研究指導科目) 【X9314】 公共政策学特殊研究 1 A [関口 浩] 春学期 授業/Spring	151
公共政策学専攻_ (博士後期課程) 必修科目 (研究指導科目) 【X9315】 公共政策学特殊研究 1 B [関口 浩] 秋学期 授業/Fall	152
公共政策学専攻_ (博士後期課程) 必修科目 (研究指導科目) 【X9316】 公共政策学特殊研究 1 A [多田 和美] 春学 期授業/Spring	153
公共政策学専攻_ (博士後期課程) 必修科目 (研究指導科目) 【X9317】 公共政策学特殊研究 1 B [多田 和美] 秋学 期授業/Fall	154
公共政策学専攻_ (博士後期課程) 必修科目 (研究指導科目) 【X9318】 公共政策学特殊研究 1 A [谷本 有美子] 春 学期授業/Spring	155
公共政策学専攻_ (博士後期課程) 必修科目 (研究指導科目) 【X9319】 公共政策学特殊研究 1 B [谷本 有美子] 秋 学期授業/Fall	156
公共政策学専攻_ (博士後期課程) 必修科目 (研究指導科目) 【X9320】 公共政策学特殊研究 1 A [中筋 直哉] 春学 期授業/Spring	157
公共政策学専攻_ (博士後期課程) 必修科目 (研究指導科目) 【X9321】 公共政策学特殊研究 1 B [中筋 直哉] 秋学 期授業/Fall	158
公共政策学専攻_ (博士後期課程) 必修科目 (研究指導科目) 【X9326】 公共政策学特殊研究 2 A [名和田 是彦] 春 学期授業/Spring	159
公共政策学専攻_ (博士後期課程) 必修科目 (研究指導科目) 【X9327】 公共政策学特殊研究 2 B [名和田 是彦] 秋 学期授業/Fall	160
公共政策学専攻_ (博士後期課程) 必修科目 (研究指導科目) 【X9328】 公共政策学特殊研究 2 A [廣瀬 克哉] 春学 期授業/Spring	161
公共政策学専攻_ (博士後期課程) 必修科目 (研究指導科目) 【X9329】 公共政策学特殊研究 2 B [廣瀬 克哉] 秋学 期授業/Fall	162
公共政策学専攻_ (博士後期課程) 必修科目 (研究指導科目) 【X9330】 公共政策学特殊研究 2 A [渊元 初姫] 春学 期授業/Spring	163
公共政策学専攻_ (博士後期課程) 必修科目 (研究指導科目) 【X9331】 公共政策学特殊研究 2 B [渊元 初姫] 秋学 期授業/Fall	164
公共政策学専攻_ (博士後期課程) 必修科目 (研究指導科目) 【X9336】 公共政策学特殊研究 2 A [加藤 寛之] 春学 期授業/Spring	165
公共政策学専攻_ (博士後期課程) 必修科目 (研究指導科目) 【X9337】 公共政策学特殊研究 2 B [加藤 寛之] 秋学 期授業/Fall	166

公共政策学専攻_ (博士後期課程) 必修科目 (研究指導科目) 【X9338】 公共政策学特殊研究 2 A [白鳥 浩] 春学期 授業/Spring	167
公共政策学専攻_ (博士後期課程) 必修科目 (研究指導科目) 【X9339】 公共政策学特殊研究 2 B [白鳥 浩] 秋学期 授業/Fall	168
公共政策学専攻_ (博士後期課程) 必修科目 (研究指導科目) 【X9346】 公共政策学特殊研究 2 A [中筋 直哉] 春学 期授業/Spring	169
公共政策学専攻_ (博士後期課程) 必修科目 (研究指導科目) 【X9347】 公共政策学特殊研究 2 B [中筋 直哉] 秋学 期授業/Fall	170
公共政策学専攻_ (博士後期課程) 必修科目 (研究指導科目) 【X9348】 公共政策学特殊研究 3 A [杉崎 和久] 春学 期授業/Spring	171
公共政策学専攻_ (博士後期課程) 必修科目 (研究指導科目) 【X9349】 公共政策学特殊研究 3 B [杉崎 和久] 秋学 期授業/Fall	172
公共政策学専攻_ (博士後期課程) 必修科目 (研究指導科目) 【X9352】 公共政策学特殊研究 3 A [名和田 是彦] 春 学期授業/Spring	173
公共政策学専攻_ (博士後期課程) 必修科目 (研究指導科目) 【X9353】 公共政策学特殊研究 3 B [名和田 是彦] 秋 学期授業/Fall	174
公共政策学専攻_ (博士後期課程) 必修科目 (研究指導科目) 【X9354】 公共政策学特殊研究 3 A [廣瀬 克哉] 春学 期授業/Spring	175
公共政策学専攻_ (博士後期課程) 必修科目 (研究指導科目) 【X9355】 公共政策学特殊研究 3 B [廣瀬 克哉] 秋学 期授業/Fall	176
公共政策学専攻_ (博士後期課程) 必修科目 (研究指導科目) 【X9356】 公共政策学特殊研究 3 A [渊元 初姫] 春学 期授業/Spring	177
公共政策学専攻_ (博士後期課程) 必修科目 (研究指導科目) 【X9357】 公共政策学特殊研究 3 B [渊元 初姫] 秋学 期授業/Fall	178
公共政策学専攻_ (博士後期課程) 必修科目 (研究指導科目) 【X9358】 公共政策学特殊研究 3 A [池田 寛二] 春学 期授業/Spring	179
公共政策学専攻_ (博士後期課程) 必修科目 (研究指導科目) 【X9359】 公共政策学特殊研究 3 B [池田 寛二] 秋学 期授業/Fall	180
公共政策学専攻_ (博士後期課程) 必修科目 (研究指導科目) 【X9364】 公共政策学特殊研究 3 A [白鳥 浩] 春学期 授業/Spring	181
公共政策学専攻_ (博士後期課程) 必修科目 (研究指導科目) 【X9365】 公共政策学特殊研究 3 B [白鳥 浩] 秋学期 授業/Fall	182
公共政策学専攻_ (博士後期課程) 必修科目 (研究指導科目) 【X9366】 公共政策学特殊研究 3 A [関口 浩] 春学期 授業/Spring	183
公共政策学専攻_ (博士後期課程) 必修科目 (研究指導科目) 【X9367】 公共政策学特殊研究 3 B [関口 浩] 秋学期 授業/Fall	184
公共政策学専攻_ (博士後期課程) 必修科目 (研究指導科目) 【X9372】 公共政策学特殊研究 3 A [中筋 直哉] 春学 期授業/Spring	185
公共政策学専攻_ (博士後期課程) 必修科目 (研究指導科目) 【X9373】 公共政策学特殊研究 3 B [中筋 直哉] 秋学 期授業/Fall	186
公共政策学専攻_ (博士後期課程) 必修科目 (研究指導科目) 【X9374】 公共政策学特殊研究 3 A [武貞 稔彦] 春学 期授業/Spring	187
公共政策学専攻_ (博士後期課程) 必修科目 (研究指導科目) 【X9375】 公共政策学特殊研究 3 B [武貞 稔彦] 秋学 期授業/Fall	188
公共政策学専攻_ (博士後期課程) 必修科目 (研究指導科目) 【X9376】 公共政策学特殊研究 3 A [永野 秀雄] 春学 期授業/Spring	189
公共政策学専攻_ (博士後期課程) 必修科目 (研究指導科目) 【X9377】 公共政策学特殊研究 3 B [永野 秀雄] 秋学 期授業/Fall	190
公共政策学専攻_ (博士後期課程) 必修科目 (研究指導科目) 【X9378】 公共政策学特殊研究 3 A [渡邊 誠] 春学期 授業/Spring	191
公共政策学専攻_ (博士後期課程) 必修科目 (研究指導科目) 【X9379】 公共政策学特殊研究 3 B [渡邊 誠] 秋学期 授業/Fall	192
公共政策学専攻_ (博士後期課程) 選択必修科目 (ワークショップ科目) 【X9400】 公共政策ワークショップ (公共) 1 A [渊元 初姫] 春学期授業/Spring	193
公共政策学専攻_ (博士後期課程) 選択必修科目 (ワークショップ科目) 【X9401】 公共政策ワークショップ (公共) 1 B [渊元 初姫] 秋学期授業/Fall	194

公共政策学専攻_ (博士後期課程) 選択必修科目 (ワークショップ科目) 【X9402】 公共政策ワークショップ (公共) 2	
A [淵元 初姫] 春学期授業/Spring	195
公共政策学専攻_ (博士後期課程) 選択必修科目 (ワークショップ科目) 【X9403】 公共政策ワークショップ (公共) 2	
B [淵元 初姫] 秋学期授業/Fall	196
公共政策学専攻_ (博士後期課程) 選択必修科目 (ワークショップ科目) 【X9404】 公共政策ワークショップ (公共) 3	
A [淵元 初姫] 春学期授業/Spring	197
公共政策学専攻_ (博士後期課程) 選択必修科目 (ワークショップ科目) 【X9405】 公共政策ワークショップ (公共) 3	
B [淵元 初姫] 秋学期授業/Fall	198
公共政策学専攻_ (博士後期課程) 選択必修科目 (ワークショップ科目) 【X9406】 公共政策ワークショップ (政策研究) 1 A [中筋 直哉、加藤 寛之] 春学期授業/Spring	199
公共政策学専攻_ (博士後期課程) 選択必修科目 (ワークショップ科目) 【X9407】 公共政策ワークショップ (政策研究) 1 B [中筋 直哉、加藤 寛之] 秋学期授業/Fall	200
公共政策学専攻_ (博士後期課程) 選択必修科目 (ワークショップ科目) 【X9408】 公共政策ワークショップ (政策研究) 2 A [中筋 直哉、加藤 寛之] 春学期授業/Spring	201
公共政策学専攻_ (博士後期課程) 選択必修科目 (ワークショップ科目) 【X9409】 公共政策ワークショップ (政策研究) 2 B [中筋 直哉、加藤 寛之] 秋学期授業/Fall	202
公共政策学専攻_ (博士後期課程) 選択必修科目 (ワークショップ科目) 【X9410】 公共政策ワークショップ (政策研究) 3 A [中筋 直哉、加藤 寛之] 春学期授業/Spring	203
公共政策学専攻_ (博士後期課程) 選択必修科目 (ワークショップ科目) 【X9411】 公共政策ワークショップ (政策研究) 3 B [中筋 直哉、加藤 寛之] 秋学期授業/Fall	204
サステナビリティ学専攻_ (修士課程) 研究科共通科目 【X9500】 行政学基礎 [土山 希美枝] 秋学期前半/Fall(1st half)	205
サステナビリティ学専攻_ (修士課程) 研究科共通科目 【X9501】 比較行政研究 [申 龍徹] 春学期後半/Spring(2nd half)	206
サステナビリティ学専攻_ (修士課程) 研究科共通科目 【X9502】 公共哲学基礎 [西村 清貴] 秋学期前半/Fall(1st half)	207
サステナビリティ学専攻_ (修士課程) 研究科共通科目 【X9503】 政策学基礎 [淵元 初姫] 春学期前半/Spring(1st half)	208
サステナビリティ学専攻_ (修士課程) 研究科共通科目 【X9504】 現代政治分析研究 [白鳥 浩] 春学期前半/Spring(1st half)	209
サステナビリティ学専攻_ (修士課程) 研究科共通科目 【X9505】 公共政策とジャーナリズム [白鳥 浩、読売新聞社講師] 春学期後半/Spring(2nd half)	210
サステナビリティ学専攻_ (修士課程) 研究科共通科目 【X9506】 公共政策の社会理論 [池田 寛二] 春学期後半/Spring(2nd half)	211
サステナビリティ学専攻_ (修士課程) 研究科共通科目 【X9507】 財政学基礎 [調整中]	212
サステナビリティ学専攻_ (修士課程) 研究科共通科目 【X9508】 経済学基礎 [芦谷 典子] 春学期前半/Spring(1st half)	213
サステナビリティ学専攻_ (修士課程) 研究科共通科目 【X9509】 環境哲学・倫理学 [吉永 明弘] 秋学期後半/Fall(2nd half)	214
サステナビリティ学専攻_ (修士課程) 研究科共通科目 【X9510】 環境法基礎 [永野 秀雄、横内 恵、岡松 暁子] 春学期前半/Spring(1st half)	215
サステナビリティ学専攻_ (修士課程) 研究科共通科目 【X9511】 地球環境学基礎 [藤倉 良] 春学期後半/Spring(2nd half)	216
サステナビリティ学専攻_ (修士課程) 研究科共通科目 【X9512】 国際政治学基礎 [森 聡] 春学期授業/Spring ..	217
サステナビリティ学専攻_ (修士課程) 研究科共通科目 【X9513】 国際協力論 [武貞 稔彦] 秋学期前半/Fall(1st half)	219
サステナビリティ学専攻_ (修士課程) 研究科共通科目 【X9514】 サステナビリティ研究入門A [藤倉 良、杉戸 信彦] 春学期授業/Spring	220
サステナビリティ学専攻_ (修士課程) 研究科共通科目 【X9515】 サステナビリティ研究入門B [藤倉 良、杉戸 信彦] 春学期授業/Spring	221
サステナビリティ学専攻_ (修士課程) 研究科共通科目 【X9516】 SDGs への招待 [武貞 稔彦] 秋学期前半/Fall(1st half)	222
サステナビリティ学専攻_ (修士課程) 研究科共通科目 【X9517】 政策法務論 [神崎 一郎] 春学期後半/Spring(2nd half)	223
サステナビリティ学専攻_ (修士課程) 研究科共通科目 【X9518】 立法学研究 [神崎 一郎] 春学期前半/Spring(1st half)	224
サステナビリティ学専攻_ (修士課程) 研究科共通科目 【X9519】 政策評価論 [南島 和久] 春学期後半/Spring(2nd half)	225

サステイナビリティ学専攻_ (修士課程) 研究科共通科目 【X9520】 社会調査法1 [小磯 明] 春学期後半/Spring(2nd half)	226
サステイナビリティ学専攻_ (修士課程) 研究科共通科目 【X9521】 社会調査法2 [中筋 直哉] 春学期後半/Spring(2nd half)	227
サステイナビリティ学専攻_ (修士課程) 研究科共通科目 【X9522】 社会調査法3 [見田 朱子] 秋学期後半/Fall(2nd half)	228
サステイナビリティ学専攻_ (修士課程) 研究科共通科目 【X9523】 社会調査法4 [見田 朱子] 秋学期前半/Fall(1st half)	229
サステイナビリティ学専攻_ (修士課程) 研究科共通科目 【X9524】 社会調査法5 [小磯 明] 秋学期前半/Fall(1st half)	230
サステイナビリティ学専攻_ (修士課程) 研究科共通科目 【X9525】 社会調査法6 [中筋 直哉] 春学期前半/Spring(1st half)	231
サステイナビリティ学専攻_ (修士課程) 研究科共通科目 【X9526】 社会調査法7 [見田 朱子] 秋学期前半/Fall(1st half)	232
サステイナビリティ学専攻_ (修士課程) 研究科共通科目 【X9527】 社会調査法8 [田嶋 淳子] 春学期後半/Spring(2nd half)	233
サステイナビリティ学専攻_ (修士課程) 研究科共通科目 【X9528】 政策分析評価技法 [阿部 一知] 春学期後半/Spring(2nd half)	234
サステイナビリティ学専攻_ (修士課程) 研究科共通科目 【X9529】 市民参加の理論と実践 [小島 聡、杉崎 和久、谷本 有美子] 春学期後半/Spring(2nd half)	235
サステイナビリティ学専攻_ (修士課程) 研究科共通科目 【X9530】 数理モデル概論 [松本 倫明] 秋学期後半/Fall(2nd half)	236
サステイナビリティ学専攻_ (修士課程) 研究科共通科目 【X9531】 地域コンサルティング論 [佐谷 和江] 春学期前半/Spring(1st half)	237
サステイナビリティ学専攻_ (修士課程) 研究科共通科目 【X9532】 ファシリテーション演習 [徳田 太郎] 秋学期後半/Fall(2nd half)	239
サステイナビリティ学専攻_ (修士課程) 研究科共通科目 【X9533】 政策研究概論 (外国語) ※韓国語 [申 龍徹] 春学期授業/Spring	240
サステイナビリティ学専攻_ (修士課程) 研究科共通科目 【X9534】 政策研究概論 (外国語) ※中国語 [毛 桂榮] 春学期授業/Spring	241
サステイナビリティ学専攻_ (修士課程) 研究科共通科目 【X9535】 公共政策論文技法1 [白鳥 浩、塚崎 裕子、小磯 明] 春学期前半/Spring(1st half)	243
サステイナビリティ学専攻_ (修士課程) 研究科共通科目 【X9536】 公共政策論文技法2 [淵元初姫・杉崎和久・中筋直哉・糸久正人・岡松暁子・長谷川直哉] 春学期後半/Spring(2nd half)	244
サステイナビリティ学専攻_ (修士課程) サステイナビリティ学専攻専門科目 【X9538】 環境私法 [永野 秀雄] 秋学期前半/Fall(1st half)	245
サステイナビリティ学専攻_ (修士課程) サステイナビリティ学専攻専門科目 【X9539】 環境政策法務と条例 [朝賀 広伸] 秋学期後半/Fall(2nd half)	246
サステイナビリティ学専攻_ (修士課程) サステイナビリティ学専攻専門科目 【X9540】 国際環境法 [岡松 暁子] 春学期前半/Spring(1st half)	247
サステイナビリティ学専攻_ (修士課程) サステイナビリティ学専攻専門科目 【X9543】 外交政策論 [宮本 悟] 春学期後半/Spring(2nd half)	248
サステイナビリティ学専攻_ (修士課程) サステイナビリティ学専攻専門科目 【X9544】 環境ガバナンスⅡ [横内 恵] 春学期後半/Spring(2nd half)	250
サステイナビリティ学専攻_ (修士課程) サステイナビリティ学専攻専門科目 【X9545】 環境社会論 [船戸 修一] 春学期前半/Spring(1st half)	251
サステイナビリティ学専攻_ (修士課程) サステイナビリティ学専攻専門科目 【X9546】 地域環境文化研究 [竹本 研史] 春学期後半/Spring(2nd half)	252
サステイナビリティ学専攻_ (修士課程) サステイナビリティ学専攻専門科目 【X9553】 環境経営論 [金藤 正直] 春学期授業/Spring	253
サステイナビリティ学専攻_ (修士課程) サステイナビリティ学専攻専門科目 【X9554】 サステイナビリティ・レポート [八木 裕之] 春学期授業/Spring	254
サステイナビリティ学専攻_ (修士課程) サステイナビリティ学専攻専門科目 【X9555】 環境経済論 [杉野 誠] 春学期前半/Spring(1st half)	255
サステイナビリティ学専攻_ (修士課程) サステイナビリティ学専攻専門科目 【X9556】 サステイナブル経営論 [長谷川 直哉] 春学期前半/Spring(1st half)	257
サステイナビリティ学専攻_ (修士課程) サステイナビリティ学専攻専門科目 【X9557】 環境と知的財産権 [中里 妃沙子] 春学期後半/Spring(2nd half)	258

サステイナビリティ学専攻_ (修士課程) サステイナビリティ学専攻専門科目 【X9558】 サステイナビリティ・コミュニケーション論 [川村 雅彦] 春学期後半/Spring(2nd half)	259
サステイナビリティ学専攻_ (修士課程) サステイナビリティ学専攻専門科目 【X9559】 環境ガバナンスⅢ [湯澤 規子] 秋学期前半/Fall(1st half)	261
サステイナビリティ学専攻_ (修士課程) サステイナビリティ学専攻専門科目 【X9560】 グローバル環境経営論 [白鳥和彦] 秋学期前半/Fall(1st half)	262
サステイナビリティ学専攻_ (修士課程) サステイナビリティ学専攻専門科目 【X9561】 開発経済論 [山田 英嗣] 春学期前半/Spring(1st half)	263
サステイナビリティ学専攻_ (修士課程) サステイナビリティ学専攻専門科目 【X9562】 国際環境協力論 [藤倉 良] 秋学期後半/Fall(2nd half)	265
サステイナビリティ学専攻_ (修士課程) サステイナビリティ学専攻専門科目 【X9563】 社会開発論 [吉田 秀美] 秋学期前半/Fall(1st half)	266
サステイナビリティ学専攻_ (修士課程) サステイナビリティ学専攻専門科目 【X9564】 国際協力フィールドスタディ [武貞 稔彦] 秋学期集中/Intensive(Fall)	267
サステイナビリティ学専攻_ (修士課程) サステイナビリティ学専攻専門科目 【X9566】 ヒューマン・エコロジー [山内 愛子] 春学期後半/Spring(2nd half)	268
サステイナビリティ学専攻_ (修士課程) サステイナビリティ学専攻専門科目 【X9568】 国際環境政策の社会学 [島田昭仁] 春学期授業/Spring	269
サステイナビリティ学専攻_ (修士課程) サステイナビリティ学専攻専門科目 【X9569】 環境工学の基礎 [藤倉 良] 春学期前半/Spring(1st half)	270
サステイナビリティ学専攻_ (修士課程) サステイナビリティ学専攻専門科目 【X9570】 環境資源・エネルギー政策論 [菊地 昌廣] 秋学期授業/Fall	271
サステイナビリティ学専攻_ (修士課程) サステイナビリティ学専攻専門科目 【X9571】 公衆衛生研究 [宮川 路子] 春学期前半/Spring(1st half)	272
サステイナビリティ学専攻_ (修士課程) サステイナビリティ学専攻専門科目 【X9572】 自然環境共生研究 [高田 雅之] 秋学期前半/Fall(1st half)	273
サステイナビリティ学専攻_ (修士課程) サステイナビリティ学専攻専門科目 【X9575】 地球環境生態学 [鞠子 茂] 秋学期集中/Intensive(Fall)	274
サステイナビリティ学専攻_ (修士課程) サステイナビリティ学専攻専門科目 【X9576】 サステイナビリティ学事例研究Ⅱ [杉戸 信彦] 秋学期前半/Fall(1st half)	275
サステイナビリティ学専攻_ (修士課程) 研究指導科目 【X9602】 論文研究指導 1 A [金藤 正直] 春学期授業/Spring	276
サステイナビリティ学専攻_ (修士課程) 研究指導科目 【X9603】 論文研究指導 1 B [金藤 正直] 秋学期授業/Fall	277
サステイナビリティ学専攻_ (修士課程) 研究指導科目 【X9604】 論文研究指導 1 A [北川 徹哉] 春学期授業/Spring	278
サステイナビリティ学専攻_ (修士課程) 研究指導科目 【X9605】 論文研究指導 1 B [北川 徹哉] 秋学期授業/Fall	279
サステイナビリティ学専攻_ (修士課程) 研究指導科目 【X9606】 論文研究指導 1 A [小島 聡] 春学期授業/Spring	280
サステイナビリティ学専攻_ (修士課程) 研究指導科目 【X9607】 論文研究指導 1 B [小島 聡] 秋学期授業/Fall	281
サステイナビリティ学専攻_ (修士課程) 研究指導科目 【X9608】 論文研究指導 1 A [杉戸 信彦] 春学期授業/Spring	282
サステイナビリティ学専攻_ (修士課程) 研究指導科目 【X9609】 論文研究指導 1 B [杉戸 信彦] 秋学期授業/Fall	283
サステイナビリティ学専攻_ (修士課程) 研究指導科目 【X9610】 論文研究指導 1 A [高田 雅之] 春学期授業/Spring	284
サステイナビリティ学専攻_ (修士課程) 研究指導科目 【X9611】 論文研究指導 1 B [高田 雅之] 秋学期授業/Fall	285
サステイナビリティ学専攻_ (修士課程) 研究指導科目 【X9612】 論文研究指導 1 A [高橋 五月] 春学期授業/Spring	286
サステイナビリティ学専攻_ (修士課程) 研究指導科目 【X9613】 論文研究指導 1 B [高橋 五月] 秋学期授業/Fall	287
サステイナビリティ学専攻_ (修士課程) 研究指導科目 【X9614】 論文研究指導 1 A [武貞 稔彦] 春学期授業/Spring	288
サステイナビリティ学専攻_ (修士課程) 研究指導科目 【X9615】 論文研究指導 1 B [武貞 稔彦] 秋学期授業/Fall	289
サステイナビリティ学専攻_ (修士課程) 研究指導科目 【X9616】 論文研究指導 1 A [辻 英史] 春学期授業/Spring	290
サステイナビリティ学専攻_ (修士課程) 研究指導科目 【X9617】 論文研究指導 1 B [辻 英史] 秋学期授業/Fall	291
サステイナビリティ学専攻_ (修士課程) 研究指導科目 【X9618】 論文研究指導 1 A [永野 秀雄] 春学期授業/Spring	292
サステイナビリティ学専攻_ (修士課程) 研究指導科目 【X9619】 論文研究指導 1 B [永野 秀雄] 秋学期授業/Fall	293
サステイナビリティ学専攻_ (修士課程) 研究指導科目 【X9620】 論文研究指導 1 A [長谷川 直哉] 春学期授業/Spring	294
サステイナビリティ学専攻_ (修士課程) 研究指導科目 【X9621】 論文研究指導 1 B [長谷川 直哉] 秋学期授業/Fall	295
サステイナビリティ学専攻_ (修士課程) 研究指導科目 【X9622】 論文研究指導 1 A [藤倉 良] 春学期授業/Spring	296
サステイナビリティ学専攻_ (修士課程) 研究指導科目 【X9623】 論文研究指導 1 B [藤倉 良] 秋学期授業/Fall	297
サステイナビリティ学専攻_ (修士課程) 研究指導科目 【X9624】 論文研究指導 1 A [松本 倫明] 春学期授業/Spring	298
サステイナビリティ学専攻_ (修士課程) 研究指導科目 【X9625】 論文研究指導 1 B [松本 倫明] 秋学期授業/Fall	299
サステイナビリティ学専攻_ (修士課程) 研究指導科目 【X9626】 論文研究指導 1 A [宮川 路子] 春学期授業/Spring	300
サステイナビリティ学専攻_ (修士課程) 研究指導科目 【X9627】 論文研究指導 1 B [宮川 路子] 秋学期授業/Fall	301
サステイナビリティ学専攻_ (修士課程) 研究指導科目 【X9628】 論文研究指導 1 A [湯澤 規子] 春学期授業/Spring	302

サステナビリティ学専攻_ (修士課程) 研究指導科目	[X9629] 論文研究指導 1 B	[湯澤 規子]	秋学期授業/Fall	. 303
サステナビリティ学専攻_ (修士課程) 研究指導科目	[X9630] 論文研究指導 1 A	[吉永 明弘]	春学期授業/Spring	304
サステナビリティ学専攻_ (修士課程) 研究指導科目	[X9631] 論文研究指導 1 B	[吉永 明弘]	秋学期授業/Fall	. 305
サステナビリティ学専攻_ (修士課程) 研究指導科目	[X9632] 論文研究指導 1 A	[横内 恵]	春学期授業/Spring	. 306
サステナビリティ学専攻_ (修士課程) 研究指導科目	[X9633] 論文研究指導 1 B	[横内 恵]	秋学期授業/Fall	... 307
サステナビリティ学専攻_ (修士課程) 研究指導科目	[X9634] 論文研究指導 1 A	[渡邊 誠]	春学期授業/Spring	. 308
サステナビリティ学専攻_ (修士課程) 研究指導科目	[X9635] 論文研究指導 1 B	[渡邊 誠]	秋学期授業/Fall	... 309
サステナビリティ学専攻_ (修士課程) 研究指導科目	[X9636] 論文研究指導 2 A	[金藤 正直]	春学期授業/Spring	310
サステナビリティ学専攻_ (修士課程) 研究指導科目	[X9637] 論文研究指導 2 B	[金藤 正直]	秋学期授業/Fall	. 311
サステナビリティ学専攻_ (修士課程) 研究指導科目	[X9638] 論文研究指導 2 A	[小島 聡]	春学期授業/Spring	. 312
サステナビリティ学専攻_ (修士課程) 研究指導科目	[X9639] 論文研究指導 2 B	[小島 聡]	秋学期授業/Fall	... 313
サステナビリティ学専攻_ (修士課程) 研究指導科目	[X9640] 論文研究指導 2 A	[高田 雅之]	春学期授業/Spring	314
サステナビリティ学専攻_ (修士課程) 研究指導科目	[X9641] 論文研究指導 2 B	[高田 雅之]	秋学期授業/Fall	. 315
サステナビリティ学専攻_ (修士課程) 研究指導科目	[X9642] 論文研究指導 2 A	[高橋 五月]	春学期授業/Spring	316
サステナビリティ学専攻_ (修士課程) 研究指導科目	[X9643] 論文研究指導 2 B	[高橋 五月]	秋学期授業/Fall	. 317
サステナビリティ学専攻_ (修士課程) 研究指導科目	[X9644] 論文研究指導 2 A	[武貞 稔彦]	春学期授業/Spring	318
サステナビリティ学専攻_ (修士課程) 研究指導科目	[X9645] 論文研究指導 2 B	[武貞 稔彦]	秋学期授業/Fall	. 319
サステナビリティ学専攻_ (修士課程) 研究指導科目	[X9646] 論文研究指導 2 A	[永野 秀雄]	春学期授業/Spring	320
サステナビリティ学専攻_ (修士課程) 研究指導科目	[X9647] 論文研究指導 2 B	[永野 秀雄]	秋学期授業/Fall	. 321
サステナビリティ学専攻_ (修士課程) 研究指導科目	[X9648] 論文研究指導 2 A	[長谷川 直哉]	春学期授業/Spring	322
サステナビリティ学専攻_ (修士課程) 研究指導科目	[X9649] 論文研究指導 2 B	[長谷川 直哉]	秋学期授業/Fall	323
サステナビリティ学専攻_ (修士課程) 研究指導科目	[X9650] 論文研究指導 2 A	[藤倉 良]	春学期授業/Spring	. 324
サステナビリティ学専攻_ (修士課程) 研究指導科目	[X9651] 論文研究指導 2 B	[藤倉 良]	秋学期授業/Fall	... 325
サステナビリティ学専攻_ (修士課程) 研究指導科目	[X9652] 論文研究指導 2 A	[宮川 路子]	春学期授業/Spring	326
サステナビリティ学専攻_ (修士課程) 研究指導科目	[X9653] 論文研究指導 2 B	[宮川 路子]	秋学期授業/Fall	. 327
サステナビリティ学専攻_ (博士後期課程) 必修科目 (研究指導科目)	[X9702] サステナビリティ特殊研究 1 A	[金藤 正直]	春学期授業/Spring 328
サステナビリティ学専攻_ (博士後期課程) 必修科目 (研究指導科目)	[X9703] サステナビリティ特殊研究 1 B	[金藤 正直]	秋学期授業/Fall 329
サステナビリティ学専攻_ (博士後期課程) 必修科目 (研究指導科目)	[X9704] サステナビリティ特殊研究 1 A	[北川 徹哉]	春学期授業/Spring 330
サステナビリティ学専攻_ (博士後期課程) 必修科目 (研究指導科目)	[X9705] サステナビリティ特殊研究 1 B	[北川 徹哉]	秋学期授業/Fall 331
サステナビリティ学専攻_ (博士後期課程) 必修科目 (研究指導科目)	[X9706] サステナビリティ特殊研究 1 A	[小島 聡]	春学期授業/Spring 332
サステナビリティ学専攻_ (博士後期課程) 必修科目 (研究指導科目)	[X9707] サステナビリティ特殊研究 1 B	[小島 聡]	秋学期授業/Fall 333
サステナビリティ学専攻_ (博士後期課程) 必修科目 (研究指導科目)	[X9708] サステナビリティ特殊研究 1 A	[杉戸 信彦]	春学期授業/Spring 334
サステナビリティ学専攻_ (博士後期課程) 必修科目 (研究指導科目)	[X9709] サステナビリティ特殊研究 1 B	[杉戸 信彦]	秋学期授業/Fall 335
サステナビリティ学専攻_ (博士後期課程) 必修科目 (研究指導科目)	[X9710] サステナビリティ特殊研究 1 A	[高田 雅之]	春学期授業/Spring 336
サステナビリティ学専攻_ (博士後期課程) 必修科目 (研究指導科目)	[X9711] サステナビリティ特殊研究 1 B	[高田 雅之]	秋学期授業/Fall 337
サステナビリティ学専攻_ (博士後期課程) 必修科目 (研究指導科目)	[X9712] サステナビリティ特殊研究 1 A	[高橋 五月]	春学期授業/Spring 338
サステナビリティ学専攻_ (博士後期課程) 必修科目 (研究指導科目)	[X9713] サステナビリティ特殊研究 1 B	[高橋 五月]	秋学期授業/Fall 339
サステナビリティ学専攻_ (博士後期課程) 必修科目 (研究指導科目)	[X9714] サステナビリティ特殊研究 1 A	[武貞 稔彦]	春学期授業/Spring 340
サステナビリティ学専攻_ (博士後期課程) 必修科目 (研究指導科目)	[X9715] サステナビリティ特殊研究 1 B	[武貞 稔彦]	秋学期授業/Fall 341
サステナビリティ学専攻_ (博士後期課程) 必修科目 (研究指導科目)	[X9716] サステナビリティ特殊研究 1 A	[辻 英史]	春学期授業/Spring 342
サステナビリティ学専攻_ (博士後期課程) 必修科目 (研究指導科目)	[X9717] サステナビリティ特殊研究 1 B	[辻 英史]	秋学期授業/Fall 343

サステイナビリティ学専攻_ (博士後期課程) 必修科目 (研究指導科目) 【X9718】 サステイナビリティ特殊研究 1 A [永野 秀雄] 春学期授業/Spring	344
サステイナビリティ学専攻_ (博士後期課程) 必修科目 (研究指導科目) 【X9719】 サステイナビリティ特殊研究 1 B [永野 秀雄] 秋学期授業/Fall	345
サステイナビリティ学専攻_ (博士後期課程) 必修科目 (研究指導科目) 【X9720】 サステイナビリティ特殊研究 1 A [長谷川 直哉] 春学期授業/Spring	346
サステイナビリティ学専攻_ (博士後期課程) 必修科目 (研究指導科目) 【X9721】 サステイナビリティ特殊研究 1 B [長谷川 直哉] 秋学期授業/Fall	347
サステイナビリティ学専攻_ (博士後期課程) 必修科目 (研究指導科目) 【X9722】 サステイナビリティ特殊研究 1 A [藤倉 良] 春学期授業/Spring	348
サステイナビリティ学専攻_ (博士後期課程) 必修科目 (研究指導科目) 【X9723】 サステイナビリティ特殊研究 1 B [藤倉 良] 秋学期授業/Fall	349
サステイナビリティ学専攻_ (博士後期課程) 必修科目 (研究指導科目) 【X9724】 サステイナビリティ特殊研究 1 A [松本 倫明] 春学期授業/Spring	350
サステイナビリティ学専攻_ (博士後期課程) 必修科目 (研究指導科目) 【X9725】 サステイナビリティ特殊研究 1 B [松本 倫明] 秋学期授業/Fall	351
サステイナビリティ学専攻_ (博士後期課程) 必修科目 (研究指導科目) 【X9726】 サステイナビリティ特殊研究 1 A [宮川 路子] 春学期授業/Spring	352
サステイナビリティ学専攻_ (博士後期課程) 必修科目 (研究指導科目) 【X9727】 サステイナビリティ特殊研究 1 B [宮川 路子] 秋学期授業/Fall	353
サステイナビリティ学専攻_ (博士後期課程) 必修科目 (研究指導科目) 【X9728】 サステイナビリティ特殊研究 1 A [湯澤 規子] 春学期授業/Spring	354
サステイナビリティ学専攻_ (博士後期課程) 必修科目 (研究指導科目) 【X9729】 サステイナビリティ特殊研究 1 B [湯澤 規子] 秋学期授業/Fall	355
サステイナビリティ学専攻_ (博士後期課程) 必修科目 (研究指導科目) 【X9730】 サステイナビリティ特殊研究 1 A [吉永 明弘] 春学期授業/Spring	356
サステイナビリティ学専攻_ (博士後期課程) 必修科目 (研究指導科目) 【X9731】 サステイナビリティ特殊研究 1 B [吉永 明弘] 秋学期授業/Fall	357
サステイナビリティ学専攻_ (博士後期課程) 必修科目 (研究指導科目) 【X9732】 サステイナビリティ特殊研究 1 A [横内 恵] 春学期授業/Spring	358
サステイナビリティ学専攻_ (博士後期課程) 必修科目 (研究指導科目) 【X9733】 サステイナビリティ特殊研究 1 B [横内 恵] 秋学期授業/Fall	359
サステイナビリティ学専攻_ (博士後期課程) 必修科目 (研究指導科目) 【X9734】 サステイナビリティ特殊研究 1 A [渡邊 誠] 春学期授業/Spring	360
サステイナビリティ学専攻_ (博士後期課程) 必修科目 (研究指導科目) 【X9735】 サステイナビリティ特殊研究 1 B [渡邊 誠] 秋学期授業/Fall	361
サステイナビリティ学専攻_ (博士後期課程) 必修科目 (研究指導科目) 【X9740】 サステイナビリティ特殊研究 2 A [武貞 稔彦] 春学期授業/Spring	362
サステイナビリティ学専攻_ (博士後期課程) 必修科目 (研究指導科目) 【X9741】 サステイナビリティ特殊研究 2 B [武貞 稔彦] 秋学期授業/Fall	363
サステイナビリティ学専攻_ (博士後期課程) 必修科目 (研究指導科目) 【X9742】 サステイナビリティ特殊研究 2 A [藤倉 良] 春学期授業/Spring	364
サステイナビリティ学専攻_ (博士後期課程) 必修科目 (研究指導科目) 【X9743】 サステイナビリティ特殊研究 2 B [藤倉 良] 秋学期授業/Fall	365
サステイナビリティ学専攻_ (博士後期課程) 必修科目 (研究指導科目) 【X9744】 サステイナビリティ特殊研究 2 A [宮川 路子] 春学期授業/Spring	366
サステイナビリティ学専攻_ (博士後期課程) 必修科目 (研究指導科目) 【X9745】 サステイナビリティ特殊研究 2 B [宮川 路子] 秋学期授業/Fall	367
サステイナビリティ学専攻_ (博士後期課程) 必修科目 (研究指導科目) 【X9746】 サステイナビリティ特殊研究 3 A [金藤 正直] 春学期授業/Spring	368
サステイナビリティ学専攻_ (博士後期課程) 必修科目 (研究指導科目) 【X9747】 サステイナビリティ特殊研究 3 B [金藤 正直] 秋学期授業/Fall	369
サステイナビリティ学専攻_ (博士後期課程) 必修科目 (研究指導科目) 【X9748】 サステイナビリティ特殊研究 3 A [杉戸 信彦] 春学期授業/Spring	370
サステイナビリティ学専攻_ (博士後期課程) 必修科目 (研究指導科目) 【X9749】 サステイナビリティ特殊研究 3 B [杉戸 信彦] 秋学期授業/Fall	371

サステナビリティ学専攻_ (博士後期課程) 必修科目 (研究指導科目) 【X9750】 サステナビリティ特殊研究 3 A [武貞 稔彦] 春学期授業/Spring	372
サステナビリティ学専攻_ (博士後期課程) 必修科目 (研究指導科目) 【X9751】 サステナビリティ特殊研究 3 B [武貞 稔彦] 秋学期授業/Fall	373
サステナビリティ学専攻_ (博士後期課程) 必修科目 (研究指導科目) 【X9752】 サステナビリティ特殊研究 3 A [長谷川 直哉] 春学期授業/Spring	374
サステナビリティ学専攻_ (博士後期課程) 必修科目 (研究指導科目) 【X9753】 サステナビリティ特殊研究 3 B [長谷川 直哉] 秋学期授業/Fall	375
サステナビリティ学専攻_ (博士後期課程) 必修科目 (研究指導科目) 【X9754】 サステナビリティ特殊研究 3 A [藤倉 良] 春学期授業/Spring	376
サステナビリティ学専攻_ (博士後期課程) 必修科目 (研究指導科目) 【X9755】 サステナビリティ特殊研究 3 B [藤倉 良] 秋学期授業/Fall	377
サステナビリティ学専攻_ (博士後期課程) 必修科目 (研究指導科目) 【X9756】 サステナビリティ特殊研究 3 A [宮川 路子] 春学期授業/Spring	378
サステナビリティ学専攻_ (博士後期課程) 必修科目 (研究指導科目) 【X9757】 サステナビリティ特殊研究 3 B [宮川 路子] 秋学期授業/Fall	379
サステナビリティ学専攻_ (博士後期課程) 選択必修科目 (専門科目) 【X9800】 環境法基礎 D [永野 秀雄、横内 恵、岡松 暁子] 春学期前半/Spring(1st half)	380
サステナビリティ学専攻_ (博士後期課程) 選択必修科目 (専門科目) 【X9801】 地球環境学基礎 D [藤倉 良] 春 学期後半/Spring(2nd half)	381
サステナビリティ学専攻_ (博士後期課程) 選択必修科目 (専門科目) 【X9802】 国際協力論 D [武貞 稔彦] 秋学 期前半/Fall(1st half)	382
サステナビリティ学専攻_ (博士後期課程) 選択必修科目 (専門科目) 【X9803】 市民参加の理論と実践 D [小島 聡、杉崎 和久、谷本 有美子] 春学期後半/Spring(2nd half)	383
サステナビリティ学専攻_ (博士後期課程) 選択必修科目 (専門科目) 【X9804】 数理モデル概論 D [松本 倫明] 秋学期後半/Fall(2nd half)	384
サステナビリティ学専攻_ (博士後期課程) 選択必修科目 (専門科目) 【X9805】 環境社会論 D [船戸 修一] 春学 期前半/Spring(1st half)	385
サステナビリティ学専攻_ (博士後期課程) 選択必修科目 (専門科目) 【X9806】 環境経営論 D [金藤 正直] 春学 期授業/Spring	386
サステナビリティ学専攻_ (博士後期課程) 選択必修科目 (専門科目) 【X9808】 環境私法 D [永野 秀雄] 秋学期 前半/Fall(1st half)	387
サステナビリティ学専攻_ (博士後期課程) 選択必修科目 (専門科目) 【X9809】 自然環境共生研究 D [高田 雅之] 秋学期前半/Fall(1st half)	388
サステナビリティ学専攻_ (博士後期課程) 選択必修科目 (専門科目) 【X9812】 環境工学の基礎 D [藤倉 良] 春 学期前半/Spring(1st half)	389
サステナビリティ学専攻_ (博士後期課程) 選択必修科目 (専門科目) 【X9814】 環境経済論 D [杉野 誠] 春学期 前半/Spring(1st half)	390
サステナビリティ学専攻_ (博士後期課程) 選択必修科目 (専門科目) 【X9816】 公衆衛生研究 D [宮川 路子] 春 学期前半/Spring(1st half)	391
サステナビリティ学専攻_ (博士後期課程) 選択必修科目 (専門科目) 【X9817】 サステイナブル経営論 D [長谷川 直哉] 春学期前半/Spring(1st half)	392
サステナビリティ学専攻_ (博士後期課程) 選択必修科目 (専門科目) 【X9819】 国際環境法 D [岡松 暁子] 春学 期前半/Spring(1st half)	393
サステナビリティ学専攻_ (博士後期課程) 選択必修科目 (専門科目) 【X9820】 国際環境協力論 D [藤倉 良] 秋 学期後半/Fall(2nd half)	394
サステナビリティ学専攻_ (博士後期課程) 選択必修科目 (専門科目) 【X9821】 国際協力フィールドスタディ D [武 貞 稔彦] 秋学期集中/Intensive(Fall)	395
サステナビリティ学専攻_ (博士後期課程) 選択必修科目 (専門科目) 【X9822】 ヒューマン・エコロジー D [山内 愛子] 春学期後半/Spring(2nd half)	396
サステナビリティ学専攻_ (博士後期課程) 選択必修科目 (専門科目) 【X9824】 サステナビリティ学事例研究 D II [杉戸 信彦] 秋学期前半/Fall(1st half)	397
サステナビリティ学専攻_ (博士後期課程) 選択必修科目 (専門科目) 【X9827】 環境ガバナンス D II [横内 恵] 春学期後半/Spring(2nd half)	398
サステナビリティ学専攻_ (博士後期課程) 選択必修科目 (専門科目) 【X9828】 環境ガバナンス D III [湯澤 規 子] 秋学期前半/Fall(1st half)	399

POL500P1 - 001

政治理論

杉田 敦

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

政治理論上の重要問題について、英語文献を講読し議論することで、知見を深める。

【到達目標】

権力、民主政治など政治理論上の重大な問題について、研究上必要な知識の習得。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻公共マネジメントコースにおいては「DP1」「DP4」に関連している。公共政策学専攻政策研究コースにおいては、ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、特に「DP1」は特に関連している。

【授業の進め方と方法】

毎回、英語文献を講読して議論する。

対面で行う予定だが、感染症の状況次第では遠隔で実施することもある。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】**春学期**

回	テーマ	内容
第1回	文献講読 1	テキストを読んでディスカッションする 1
第2回	文献講読 2	テキストを読んでディスカッションする 2
第3回	文献講読 3	テキストを読んでディスカッションする 3
第4回	文献講読 4	テキストを読んでディスカッションする 4
第5回	文献講読 5	テキストを読んでディスカッションする 5
第6回	文献講読 6	テキストを読んでディスカッションする 6
第7回	文献講読 7	テキストを読んでディスカッションする 7
第8回	文献講読 8	テキストを読んでディスカッションする 8
第9回	文献講読 9	テキストを読んでディスカッションする 9
第10回	文献講読 10	テキストを読んでディスカッションする 10
第11回	文献講読 11	テキストを読んでディスカッションする 11
第12回	文献講読 12	テキストを読んでディスカッションする 12
第13回	文献講読 13	テキストを読んでディスカッションする 13
第14回	文献講読 14	テキストを読んでディスカッションする 14

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

各自が必要とする時間を用いて、事前にテキストを熟読し、事後に論点を整理する。

【テキスト（教科書）】

その都度指定する。

【参考書】

特になし

【成績評価の方法と基準】

参加状況、知識の獲得状況を総合的に判断し、平常点100点。

【学生の意見等からの気づき】

今後、アンケートをふまえて対応する。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>政治学

<研究テーマ>政治理論

<主要研究業績>

『権力論』、『境界線の政治学 増補版』（いずれも岩波現代文庫）

【Outline and objectives】

This class aims to help you have advanced knowledges in political theory through reading academic literature in English.

POL500P1 - 002

行政学基礎

土山 希美枝

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

行政学の基礎を学ぶ。都市型社会という社会構造と、そこでの（国・自治体）政府の役割、そこからみえる行政機構の役割を理解する。そのために、行政機構の成立を歴史的にふまえ、国・自治体の行政機構とその基礎理論を知り、行政と市民との関係性の展開を整理し、今日の課題を考察する。

【到達目標】

この講義の到達目標は以下のとおり。
・都市型社会における（国・自治体）政府と、その機構としての行政の構造について理解できること。
・行政機構とそれによって生み出される〈政策・制度〉を、歴史的、政策的、市民的な視角によってとらえることができること。
・今日的課題についての考察をすすめるための行政学の基礎的理解ができること、

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻公共マネジメントコースにおいては「DP1」「DP4」に関連している。公共政策学専攻政策研究コースにおいては、ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、特に「DP1」は特に関連している。サステナビリティ学専攻「行政学基礎」においては、ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP4」に関連している。

【授業の進め方と方法】

基本的に、テキスト及び配布資料の読解と議論、考察により進行する。受講生は分担してテキストの指定された章または配布資料について要点と論点をまとめて講義で報告し、教員が解説しながら議論と考察をすすめる。導入や総括などでは教員による講義中心の回もある。報告、議論とそれらへのコメントによりフィードバックする。なお、原則として対面講義とする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

秋学期前半

回	テーマ	内容
第1回	導入	講義の基本方針と進め方、テキスト読解の役割分担。
第2回	近代化と行政の歴史	政府（国・自治体）と行政機構の歴史を学ぶ（第1部）
第3回	行政組織の理論	行政の組織と管理の理論を学ぶ（第2部Ⅰ）
第4回	国政府の組織	国政府の行政機構と組織の編成を学ぶ（第2部Ⅱ、Ⅲ）
第5回	公務員制度と人事	公務員制度と公務員人事の動向を学ぶ（第2部Ⅳ）
第6回	官僚制の理論	官僚制の基礎理論を学ぶ（第3部Ⅱ）
第7回	自治体行政の歴史	自治体行政の位置付けとその変遷を歴史的に学ぶ（配布資料）
第8回	自治体行政と計画	自治体行政における計画を学ぶ（配布資料）
第9回	自治体行政と分権改革	分権改革と政府間関係を学ぶ（配布資料）
第10回	行政改革の潮流	行政改革のあゆみと現状、課題を学ぶ（第6部Ⅰ、Ⅱ）
第11回	行政と市民の関係	行政と市民の関係を学ぶ（第3部Ⅴ、配布資料）
第12回	行政と市民をめぐる制度	行政と市民の関係を制度から学ぶ（第3部Ⅴ、配布資料）
第13回	行政と評価	行政と評価（配布資料）
第14回	総括	行政の今日的課題

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とする。テキスト、配布資料、参考資料の精読を期待する。また、日頃から時事問題にたいする関心と良質な情報の収集に勤しむことを期待する。

【テキスト（教科書）】

村上弘・佐藤満編著『よくわかる行政学 第2版』ミネルヴァ書房、2016年。ほか、適宜指示する。

【参考書】

石橋章市朗・佐野亘・土山希美枝・南島和久『公共政策学』ミネルヴァ書房、2018年。
今村都南雄・武藤博己・沼田良・佐藤克廣・南島和久『ホーンブック基礎行政学 第3版』北樹出版、2015年。
松下圭一『政策型思考と政治』東京大学出版会、1991年。

【成績評価の方法と基準】

授業への参加：議論への参加（25%）、コメント（25%）の様子、授業の成果：授業内での報告（25%）、期末レポート（25%）の各評価により判断する。

【学生の意見等からの気づき】

本年度が科目の初年度であるため、反映するべき意見を受け取っていない。

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉公共政策、地方自治、政治学
〈研究テーマ〉社会構造と政策・政治の変容、自治体政策、自治体議会論。
〈主要研究業績〉『高度成長期「都市政策」の政治過程』日本評論社、2007年。
『質問力でつくる政策議会』公人の友社、2017年。

【Outline and objectives】

We'll learn the basics of administrative science.

It consists of such elements;

the administrative structure of the national and local governments and their basic theory;

development of the relationship between the administration and the citizens;

today's issue of local and national administration.

POL500P1 - 003

比較行政研究

申 龍徹

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

比較行政研究の学際的理解及び比較研究手法の習得

【到達目標】

- ①比較行政研究の理論展開を分析することにより、比較行政研究の理論的背景を理解できる（比較行政運動の展開）。
- ② OECD 加盟国における多様な行政現象の中から事例分析を行い、国際比較の方法論を体系的に習得できる（主要国の行政システムの展開と特徴）。
- ③実際の行政活動の改善に役立つ政策案が提案できる専門能力の習得ができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻公共マネジメントコースにおいては「DP2」「DP3」に関連している。公共政策学専攻政策研究コースにおいては、ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、特に「DP2」は特に関連している。サステイナビリティ学専攻「比較行政研究」においては、ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP4」に関連している。

【授業の進め方と方法】

国際化の深化という現代社会の行政現象を分析する上で欠かせない比較行政研究を研究対象とするこの授業は、講義と発表で進める。講義では、比較行政研究の学際的な発展過程について理解を深めるとともに、OECD 加盟国の行政制度及び行政過程、個別行政の特徴に関する国際比較を通じて、現在の行政課題に対する政策対案の作成を可能とする政策形成能力の向上を目指す。前半は講義を中心に、後半は受講者の発表と討論で構成する。発表では、受講者が設定したテーマ（行政課題）に対し、国内や OECD 諸国との事例の比較・分析を通じて、もっとも有効と思われる対案の作成を目指す。原則として対面で授業を実施すること、新型コロナウイルス感染状況を踏まえ、十分な安全性が確保されないと判断された場合には、オンラインに切り替える。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期後半

回	テーマ	内容
1.2 回目	授業の概要説明	個人課題の設定、発表スケジュールの調整
3.4 回目	比較行政の概念と歴史的展開及び比較行政と発展行政の理論統合	形成期、沈滞期、転換期、跳躍期の比較行政研究 比較行政研究と発展行政論の関係、理論的統合
5.6 回目	行政システムの国際比較 A	英米独仏の行政システムの比較分析
7.8 回目	行政システムの国際比較 B	北欧諸国の行政システムの比較分析
9.10 回目	行政システムの国際比較 C	NICs の行政システム及び日韓の行政システムの比較分析
11.12 回目	比較行政研究事例分析	受講者の事例発表・討論
13.14 回目	比較行政研究の課題と展望	比較行政研究の課題と展望について理解を深める。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

事前に講義レジュメ及び参考資料などをアップする。

【参考書】

特に限定しないが、主に参考している資料は、以下の通り。

Eric E. Otenyo & Nancy S. Lind (2006). Comparative Public Administration: The Essential Readings (Research in Public Policy Analysis and Management Vol.15), New York, Elsevier.
 Heady Ferrel (2001). Public Administration: A Comparative Perspective, New York, Marcel Dekker.

【成績評価の方法と基準】

質問力 (25 %)、調査力 (25 %)、構成力 (25 %)、プレゼンテーション (25 %) の 4 つによる絶対評価 (100 %)

【学生の意見等からの気づき】

関心のあるテーマの発表が課題として課されるので、事前準備が必要です。

【担当教員の専門分野】

<専門領域> 行政学、比較行政
 <研究テーマ> 比較自治行政、行政文化
 <主要研究業績>

『現代日本の公務員人事—政治・行政改革は人事システムをどう変えたか』（執筆分担、第一法規、2019）

『公務員制度改革という時代』（執筆分担、敬文堂、2017）

『東アジアの公務員制度』（共編著、法政大学出版局、2013）

『アジアの中の日本官僚：歴史と現在』（執筆分担、勉誠出版、2010）

『韓国行政・自治入門』（単著、公人社、2006）

『自治体経営改革』（執筆分担、公人社、2006）

【Outline and objectives】

Interdisciplinary understanding of comparative administrative research and acquisition of comparative research method

PHL500P1 - 004

公共哲学基礎

西村 清貴

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

「公共性」、「市民社会」といった公共哲学における基本的概念の歴史的由来と、現代公共哲学における意義を学ぶことを目的とする。

【到達目標】

「公共性」、「市民社会」といった公共哲学における基本的概念、そして「国家」、「共同体」、「個人」、「市場」といった公共哲学において重要な諸概念の思想史的意義について理解したうえで、現代の代表的公共哲学において、これらの諸概念にどのような意義が与えられているかを理解できることを目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻公共マネジメントコースにおいては「DP2」「DP3」に関連している。公共政策学専攻政策研究コースにおいては、ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、特に「DP4」は特に関連している。サステナビリティ学専攻「公共哲学基礎」においては、ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP4」に関連している。

【授業の進め方と方法】

公共政策研究科の「公共哲学基礎」と政治学研究科の「公共哲学研究Ⅰ」とを合併開講する。講義を行うほか、文献を講読する。

講義については、「国家」、「共同体」、「個人」、「市場」といった公共哲学にとって重要と思われる諸概念が生成されるにあたり大きく貢献した思想家を取り扱う。

文献講読については、トマス・ホブズ『リヴァイアサン』について各参加者に割り振られた箇所について報告してもらう。本書は、公共哲学や政治哲学の古典中の古典である。古典として今日においても読まれていることの意義をしっかりと味わってもらいたい。なお、分量の関係で全体を通読するのは難しいため、最もよく知られた箇所（13-30章）をゼミでの講読の対象とするが、可能であれば、その前後についても通読しておいてもらいたい。

本講義は、2コマ続きを8回行う4期制の科目であるが、以下の「授業計画」では、1コマずつ記載している。初日と最終日を除いて、1コマ目が講義、2コマ目が文献講読、というように進める予定である。

なお、今後のコロナ感染状況に関する大学の方針等により変更はあり得るが、原則として、対面で授業を行う。

なお、学期末にレポートを提出してもらう。レポートについては講評を付して返却する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

秋学期前半

回	テーマ	内容
第1回 (1日目 前半)	イントロダクション	講義の目的や内容について説明する
第2回 (1日目 後半)	政治社会の成立	古代や中世において政治がいかなる営みであったかを見る
第3回 (2日目 前半)	カントにおける啓蒙と公共性	公共哲学において頻繁に取り上げられる「理性の公共的使用」という用語法を中心にカントの思想を見る
第4回 (2日目 後半)	文献講読	テキスト 13、14 章

第5回 アダム・スミスと市場
(3日目
前半)

しばしば公共性と対立する概念として取り上げられる市場という概念についてアダム・スミスを中心として見る
テキスト 15、16 章

第6回 文献講読
(3日目
後半)

第7回 ヘーゲルと市民社会／
(4日目
前半)

近代的な意味での市民社会と国家との峻別を確立したヘーゲルの思想を見る

第8回 文献講読
(4日目
後半)

テキスト 17、18 章

第9回 ハンナ・アレントと公
(5日目
前半)

今日の公共哲学において最も著名な論者の一人であるハンナ・アレントの公共性論を『人間の条件』を中心にみる
テキスト 19、20、21 章

第10回 文献講読
(5日目
後半)

第11回 ハーバマスと公共性
(6日目
前半)

「公共性の構造転換」を中心にユルゲン・ハーバマスの議論を見る

第12回 文献講読
(6日目
後半)

テキスト 22、23、24 章

第13回 文献講読
(7日目
前半)

テキスト 25、26、27 章

第14回 文献講読
(7日目
後半)

テキスト 28、29、30 章

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

毎回、報告者であるにもかかわらず、テキストの該当箇所を事前に読んでおき、授業における発言についてあらかじめ考えておくこと。

【テキスト（教科書）】

ホブズ、水田洋訳『リヴァイアサン』（岩波文庫）。全4巻本であるが、直接教科書とするのは第1巻および第2巻（1992年改訂）

【参考書】

西村清貴『法思想史入門』（成文堂、2020年）

【成績評価の方法と基準】

報告 40 パーセント、学期末レポート 40 パーセント、その他授業への貢献度（討論等）20 パーセント。

【学生の意見等からの気づき】

該当なし

【学生が準備すべき機器他】

特になし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 法思想史・法哲学

<研究テーマ> 19世紀ドイツ法思想

<主要研究業績> 西村清貴『近代ドイツの法と国制』（成文堂、2017年）

西村清貴『法思想史入門』（成文堂、2020年）

【Outline and objectives】

This lecture aims to learn the historical origins of basic concepts in public philosophy such as "publicness" and "civil society" and their significance in contemporary public philosophy.

POL500P1 - 006

政策学基礎

渊元 初姫

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

政治学からの政策研究へのアプローチについて、基礎的な知識と分析手法の習得を目指す、入門的な位置づけの科目である。学部までの段階で政治学を専攻していない受講生も想定し、政治学の基礎概念の習得ができるように配慮する。取りあげる主要な論点は、政策と政治過程の関係、政治的正統性と政策的合理性の関係、制度研究と政策研究の関係などである。

【到達目標】

政策研究一般の中で、政治学からのアプローチの特性を把握し、対象とする政策領域に対する適切な研究設問を立てることができるようになる。その上、学術論文の作成の際に、適切な文脈の中で活用することができることを到達目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻公共マネジメントコースにおいては「DP1」「DP4」に関連している。公共政策学専攻政策研究コースにおいては、ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、特に「DP4」は特に関連している。サステイナビリティ学専攻においては、ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP4」に関連している。

【授業の進め方と方法】

教員による講義と受講者による課題報告とで構成します。講義では、政策研究の基本的知識について整理します。受講者は、個人の研究関心に沿って課題を設定して報告します。課題に対しては、授業中に参加者全員による質疑・議論を行い、講評を行うことによってフィードバックします。

授業方式は原則として対面授業とします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】**春学期前半**

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	政策に関する諸学問分野の中で政治学からのアプローチの特徴とは何か。あわせて政策に関する諸学問分野の中で、政治学の隣接諸学の基本的な特徴を整理する。
第2回	公共政策学の誕生前史	公共政策学の誕生についてそのルーツを探る。
第3回	公共政策学の成立	公共政策がアメリカで成立したことの背景を整理する。
第4回	公共政策学の発展	公共政策学の発展とその挫折について検討する。
第5回	公共政策学の変容	公共政策学の変容と、多様な政策科学のアプローチについて学ぶ。
第6回	公共政策の構成と特徴	公共政策の構成要素及び公共政策がもつ特徴について整理する。
第7回	受講者による課題報告	受講者が設定したテーマ（例えば、公共政策学の歴史に関する論点など）について報告・質疑を行う。
第8回	政策のライフ・ステージと政策過程	政策過程を段階に分けて整理する概念を検討する。
第9回	受講者による課題報告	受講者が設定したテーマ（例えば、政策段階論に関する論点など）について報告・質疑を行う。
第10回	政策過程における参加者	政策過程におけるアクターの役割について考える。
第11回	受講者による課題報告	受講者が設定したテーマ（例えば、政策過程におけるアクターに関する論点など）について報告・質疑を行う。
第12回	政策をめぐる価値の対立	政策がめざすべき諸価値について検討し、それらの対立関係について考える。
第13回	受講者による課題報告	受講者が設定したテーマ（例えば、政策をめぐる価値の対立に関する論点など）について報告・質疑を行う。
第14回	まとめ	講義のまとめを行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

特に使用しません。

【参考書】

必要に応じて授業中に紹介します。

【成績評価の方法と基準】

課題報告（30%）及び期末レポート（50%）に加え、授業中の質疑や討論における発言（20%）により評価します。

【学生の意見等からの気づき】

公共政策学を理解するために、その歴史的な成り立ちを丁寧に説明することが重要であると思いました。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞ 比較政治学、コミュニティ政策、福祉政策

＜研究テーマ＞ ポスト福祉国家時代の市民社会論、地域社会における社会的包摂、英国・スコットランドの地方自治・自治体内分権

＜主要研究業績＞

「スコットランドの地域評議会－制度の基本的構想とその機能の実際」名和田是彦編（2009）『コミュニティの自治－自治体内分権と協働の国際比較』pp.81-118、日本評論社

「地域社会における社会的連帯とジェンダー・クォータ」三浦まり・衛藤幹子編著（2014）『ジェンダー・クォータ－世界の女性議員はなぜ増えたのか』pp.203-26、明石書店

「スコットランドにおける権限移譲とジェンダー・クォータ」三浦まり・衛藤幹子編著（2019）『都市・地域政策研究の現在』pp.131-42、地域開発研究所

【Outline and objectives】

The overall aim of this course is to introduce students to a range of political theories and concepts used in the academic study of public policy, such as rationalism, incrementalism and institutionalism. The course aims to be accessible for those who have not studied politics before, and is suitable for students looking for a multi-disciplinary experience.

現代政治分析研究

白鳥 浩

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

現代政治の総合的理解を目指す。

【到達目標】

同上。詳細は【授業の進め方と方法】に記載。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻公共マネジメントコースにおいては「DP2」「DP4」に関連している。ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻政策研究コースにおいては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、特に「DP1」は特に強く関連している。ディプロマポリシーのうち、サステイナビリティ学専攻においては「DP2」「DP3」に関連している。

【授業の進め方と方法】

- ①現代政治の今日的展開の姿を主に研究者を志望とする学生を対象とし、デモクラシーの視点及び脱冷戦時代の視点から分析し、現代政治分析の理念と手法を明らかにする
 - ②具体的には、国際・国内・地域社会における公的課題の解決に向けて、自治体と住民・市民組織との新たな関係の再構築
 - ③国際・国内のガバナンスの理念に立脚した政治システムと機構の改革方向
 - ④冷戦後の構造変化と政府の新たなあり方などの課題を具体的に考え、そのための仕組みや政策のあり方を設計することを目的とする
 - ⑤さらに、将来のデモクラシーについて履修した学生諸君と共に考える
 - ⑥対面により講義を行う。最後の講義で講義内容のまとめや、課題に対する講評や解説によるフィードバックを試みる。また講義計画は講義の展開により、若干の変更もありうる。
- 変更の可能性もあるが対面講義を基本とする。また、学生へのフィードバックにおいては、適宜、講義、報告のたびに行うものとする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり/Yes

【授業計画】

春学期前半

回	テーマ	内容
第1回	現代政治分析とは	同左
第2回	現代政治学の基礎	同左
第3回	政治学の基礎概念	同左
第4回	政治学の理論	同左
第5回	現代日本政治の基礎	同左
第6回	現代日本政治の変動	同左
第7回	日本政治の現在	同左
第8回	日本政治の構造	同左
第9回	構造的視座による理解	同左
第10回	国際的視座の中の日本	同左
第11回	国民国家の国際化	同左
第12回	比較の中の日本政治	同左
第13回	多様なデモクラシー	同左
第14回	日本政治の理論的解明	同左

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

講義時に適宜指示。

【参考書】

- ①白鳥浩『都市対地方の日本政治』芦書房、2009年

【成績評価の方法と基準】

試験、レポートと講義への積極性による総合評価（100％）。

【学生の意見等からの気づき】

学生との双方向のコミュニケーションを大切にしたい。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

現代政治分析（国際・国内比較）・政治理論

<研究テーマ>

1. 日本の現代政治
2. グローバリズムと国民国家の変容
3. 地方政治研究
4. 政党に関する理論
5. 現代政治のデモクラシー

<主要研究業績>白鳥浩『都市対地方の政治学』芦書房、2004年

白鳥浩『市民・選挙・国家—シュタイン・ロッカンの政治理論—』東海大学出版会、2002年

Hiroshi Shiratori, "Le mouvement référendaire au Japon après la Guerre froide. Une analyse comparative inspirée de Rokkan," *Revue française de science politique*, vol.51, Numero.4, 2001.

【Outline and objectives】

This course aims to attain student's understanding of modern politics. In order to reach that goal, it is needed to study modern politics in a systematical way. It starts out from clarification of the definitions of important notions which appears on literatures of political science.

POL500P1 - 008

公共政策とジャーナリズム

白鳥 浩、読売新聞社講師

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

現代社会における政策とジャーナリズムの総合的理解。

【到達目標】

本講座の目的は、「新聞が行っている報道、論説、提言などの実際を現役記者等が紹介し、新聞メディアの機能、影響力、課題について解説・分析することで、大学院生の視野を広げ、新聞など活字文化への関心を高める」こととする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻公共マネジメントコースにおいては「DP3」「DP4」に関連している。ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻政策研究コースにおいては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、特に「DP3」は特に強く関連している。ディプロマポリシーのうち、サステイナビリティ学専攻においては「DP2」「DP3」に関連している。

【授業の進め方と方法】

本講義は読売新聞特別講座である。第一線のジャーナリストをお招きし、新聞社の調査、分析と報道の実際と、論説提言のあり方を学ぶ。講義は、毎回異なるジャーナリストのオムニバス講義によって行う。以下は予想される講義のトピックであるが、変更もありうる。また講義計画は対面を中心とするが、講義の展開により、若干の変更もありうる。

変更の可能性もあるが対面講義を基本とする。また、学生へのフィードバックにおいては、適宜、講義のたびに行うものとする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】**春学期後半**

回	テーマ	内容
(1)	新聞とジャーナリズム	同左
(2)	政治とジャーナリズム	同左
(3)	安全保障政策とジャーナリズム	同左
(4)	外交政策とジャーナリズム	同左
(5)	社会保障政策とジャーナリズム	同左
(6)	医療政策とジャーナリズム	同左
(7)	経済政策とジャーナリズム	同左

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

講義当日の読売新聞朝刊を必ず持参して、講義に臨む事。

【参考書】

講義時に適時指示。

【成績評価の方法と基準】

出席、毎回の講義で課される課題への取り組み、毎回の感想文、さらにレポートなどを総合的に考慮して評価（100%）。

【学生の意見等からの気づき】

学生との双方向のコミュニケーションを大切にしたい。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

現代政治分析（国際・国内比較）・政治理論

<研究テーマ>

1. 日本の現代政治
2. グローバリズムと国民国家の変容
3. 地方政治研究
4. 政党に関する理論
5. 現代政治のデモクラシー

<主要研究業績>白鳥浩『都市対地方の政治学』若書房、2004年

白鳥浩『市民・選挙・国家—シュタイン・ロッカンの政治理論—』東海大学出版会、2002年

Hiroshi Shiratori, "Le mouvement référendaire au Japon après la Guerre froide. Une analyse comparative inspirée de Rokkan," *Revue française de science politique*, vol.51, Numero.4, 2001.

【Outline and objectives】

This course offers advanced understanding of the public policy on each policy fields, international politics, domestic politics, public administration, local government, International economy and so on. Lecturers are all distinguished journalists from the Yomiuri Shinbun, Yomiuri News Paper Company.

SOC500P1 - 009

公共政策の社会理論

池田 寛二

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

主として社会学に立脚した公共政策の基礎理論の修得を目的とする。

【到達目標】

公共政策の理論を受講生が各自の研究テーマに活用できるようになることが到達目標である。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻公共マネジメントコースにおいては「DP1」「DP2」に関連している。ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻政策研究コースにおいては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、特に「DP1」は特に強く関連している。ディプロマポリシーのうち、サステイナビリティ学専攻においては「DP2」「DP4」に関連している。

【授業の進め方と方法】

主に社会学の視点から公共政策の実態と問題点を経験科学的に解明するとともに、それを政策的に解決するための理論的な視座について講義する。少人数の場合は、討論も取り入れる。各回の講義後にリアクションペーパーを書かせ、次回の冒頭で口頭でフィードバックする。原則として、授業は対面で実施する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

なし/No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

春学期後半

回	テーマ	内容
第1回	序論：公共政策の理論的課題	経験科学と規範理論
第2回	社会理論と公共政策の関係	「中範囲の理論」（マートン）の重要性を中心に検討する。
第3回	格差と資本主義（1）	社会学における資本主義と格差の理論を検討する。
第4回	格差と資本主義（2）	資本主義と公共政策の関係を理論的に考察する。
第5回	格差と資本主義（3）	『大転換』（ボランニー）と『21世紀の資本』（ピケティ）の間の社会変動を考察する。
第6回	持続可能な社会の公共政策（1）	リスク社会論（ベック）からの考察。
第7回	持続可能な社会の公共政策（2）	エコロジーの近代化論からの考察。
第8回	持続可能な社会の公共政策（3）	自然資本論と社会関係資本論の統合可能性をめぐる考察。
第9回	市場経済社会と公共政策（1）	経済社会学の理論的視座の検討。
第10回	市場経済社会と公共政策（2）	グローバル化とローカルな社会の持続可能性をめぐる理論的検討。
第11回	市場経済社会と公共政策（3）	サブシディアリティの原理と「ポリアーキー」（ダール）の理論的意義の考察。
第12回	政策事例分析への社会理論の応用可能性（1）	気候変動政策とエネルギー政策（再エネ、原発…）を事例とする考察。
第13回	政策事例分析への社会理論の応用可能性（2）	地域再生政策（都市政策、農村政策、農林漁業政策…）を事例とする考察。
第14回	総括	中心的論点の整理と補足。公共政策研究への社会理論の活用法の確認。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

ウルリヒ・ベック、1998『危険社会—新しい近代への道』（法政大学出版局）、カール・ボランニー、2009『大転換—市場社会の形成と崩壊』（東洋経済新報社）、トマ・ピケティ、2014『21世紀の資本』（みすず書房）、ロバート・ダール、2014『ポリアーキー』（岩波文庫）、『ハーバート・スペンサー コレクション』所収の「政府の適正領域」（2017、ちくま学芸文庫）など

【参考書】

池田寛二、2013「3.11以後の気候変動政策と原発政策のゆくえ」『公共政策志林』第1号、など逐次指示する

【成績評価の方法と基準】

出席（20%）、とりあげた文献についての「中間レポート」（40%）、および、期末レポート（40%）

【学生の意見等からの気づき】

この講義は、受講生各自の研究テーマに応用可能な社会理論の理解を目指している。したがって、受講生各自の問題関心に引き寄せて講義内容を受けとめ、積極的に質問して欲しい。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>環境社会学、社会学理論、東南アジア地域研究
<研究テーマ>環境・エネルギー政策、地域政策
<主要研究業績>池田ほか編著、2012『環境をめぐる公共圏のダイナミズム』（法政大学出版局）等。

【Outline and objectives】

The purpose of this lecture is to make students learn basic theories of public policy based on sociology.

ECN500P1 - 010

財政学基礎

調整中

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本研究では、財政学全般の理論的・制度的側面に重点を置きながら、政策分析をするために不可欠な「財政学」の基礎を復習し、理論的發展と制度的改革の方向性を考究していく。また、本講義では財政学の特定分野に特化しないで、財政学主要項目を全般的に対象とするので、現実問題について幅広く受講生自ら考える力を養うことができる。

【到達目標】

財政の抱える問題点や課題への対応策について自らの見解を熟成して討論できる水準に達することを目標としている。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻公共マネジメントコースにおいては「DP1」「DP4」に関連している。ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻政策研究コースにおいては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、特に「DP1」は特に強く関連している。ディプロマポリシーのうち、サステイナビリティ学専攻においては「DP2」「DP4」に関連している。

【授業の進め方と方法】

1. 財政の理論と実際そして財政制度の基本的な知識を復習し、財政制度および政策の経済的意義と問題点を明らかにする。併せて、実際に起こりつつある財政問題を題材に輪読をし、報告・討論等を行う。
2. 新型コロナウイルス感染症対応が可能な場合は対面講義とする。また、講義冒頭で前時間の出席票相当提出物に受講者が記載した内容等に担当者が回答する。また個別に質問・照会したいことがある場合は講義中に担当者がそれを提起したとき、あるいは講義終了後に時間を設けるので、対面・遠隔ともに受講者はその場で解決するようにする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期後半

回	テーマ	内容
第1回	I. 緒論（財政と財政学）	1. 財政学研究の意義（教科書：はじめに、第1章）
第2回	I. 緒論（財政と財政学）	2. 財政と財政民主主義（教科書：第1～4章）
第3回	II. 予算論（教科書：第5～7章）	1. 予算原則 2. 予算・決算過程の制度的枠組み
第4回	II. 予算論	3. 財政計画と予算（教科書：第8章）
第5回	III. 公共経済学の基礎理論（教科書：第9章）	1. 市場の失敗 2. 公共財の理論（続・市場の失敗） 3. 政府の失敗
第6回	VI. 経費論（教科書：第10、11、14章）	1. 財政制度と国民経済計算 2. 費用便益分析
第7回	VI. 経費論（社会保障制度と教育財政）	1. 社会保障の財政問題（教科書：第12章） 2. 教育財政の問題（教科書：第13章）
第8回	VIII. 「財政学」と学位論文	各自の学位論文の財政学的側面の報告(1)
第9回	IV. 租税論	1. 租税の理論（教科書：第15章）
第10回	IV. 租税論（教科書：第16～19章）	2. 国税（所得税・法人税・相続税・消費税等） 3. 地方税（住民税・固定資産税・事業税等）
第11回	V. 公債論（教科書：第20～22章）	1. 公債原則と負担論 2. 公債管理政策
第12回	V. 公債論（教科書：第22章）	3. 財政赤字と日本の公債問題
第13回	VII. 財政政策論（財政政策のマクロ経済学）（教科書：第23、24章）	1. フィスカル・ポリシー 2. IS-LM分析
第14回	VIII. 「財政学」と学位論文	各自の学位論文の財政学的側面の報告(2)

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

準備学習にあたり2時間以上かけて、各回のシラバスに掲載されている教科書の該当箇所を読み、学部あるいは高等学校校までに学んだ内容を確認し、不明語句ないし不明内容を明らかにしておく必要がある。また外国文献にも目を通し、最新事情を把握しておく。各回の講義終了後には予習時の不明点を解明したことを確認すべく、教科書、配付資料、外国参考文献等を頼りに2時間以上かけて復習すること。

【テキスト（教科書）】

佐藤進・関口浩著『財政学入門 [新版]』同文館、令和元年。

【参考書】

1. Hovey S. ROSEN & Ted GAYER, *Public Finance (10th ed)*, McGraw-Hill/Irwin, 2013.
2. Jonathan GRUBER, *Public Finance and Public Policy (5th ed)*, Worth Publisher, 2016.
3. その他の参考文献はその都度提示するが、社会学部「財政学Ⅰ」および「財政学Ⅱ」シラバス掲載の参考文献を取りあえずあげておく。

【成績評価の方法と基準】

報告内容（70%）を中心に、討論への参加（15%）、出席票のコメント（15%）、講義最終回指定提出物（必須）等を加味して評価する。

【学生の意見等からの気づき】

本講義を通じて財政分析の力をつけるためには、まず各種統計の所在を突き止めて受講生自ら最新の統計を駆使した報告をする必要がある。

【学生が準備すべき機器他】

遠隔講義・演習を受信したり、学習支援システムの掲示を閲覧・印刷等できる装置を、大学の貸与を含めて、受講者各自で準備されたい。

【その他の重要事項】

1. 学部時代に必ずしも経済・政策系の学部で「財政学」を学んでいない学生の受講も多いので、財政学の基礎に基盤を置きながら、修士論文執筆に不可欠な、やや高度な内容にも踏み込むことができることを期待したい。
2. 春学期後半（4学期制の第2学期）の時間帯の講義となるため、新年度当初の意気込みが薄れる時期に開講となる。新年度当初の新鮮な気持ちを忘れないで、講義に挑んでほしい。
3. 各講義の順番をシラバスとは入れ替えることがある。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

財政学、地方財政論、租税論、教育財政論、財政学を基盤とした教育・福祉政策

【研究テーマ】

固定資産税をめぐる問題、教育財源としての財産税（固定資産税）、租税制度全般、地方税財政、日米教育財政

【研究業績（近年）】

「沖縄県財政の歳入構造」『公共政策志林』第4号、法政大学大学院公共政策研究科、平成28年。
「沖縄県財政と県税収入」『公共政策志林』第5号、法政大学大学院公共政策研究科、平成29年。
『財政学入門 [新版]』（佐藤進と共著）同文館、令和元年。
「新型コロナウイルス感染症蔓延下の財政投融资」『生活経済政策』289号、生活経済政策研究所、令和3年。

【Outline and objectives】

We review the basics of "public finance" to do a policy analysis, and study the theory and the practice of it.

ECN500P1 - 011

経済学基礎

芦谷 典子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この授業では、ミクロ・マクロの分野をまたぐ経済学の基礎を学びます。経済学の原理と方法から入り、ミクロ経済学基礎、マクロ経済学の基礎の順に、必須のトピックを網羅していきます。加えて、学んだ基礎理論をどのように応用し、論文執筆に繋げるかを念頭に置いた形でのディスカッションを取り入れていく予定です。講義の進行は、受講者主体のアクティブ・ラーニングを基本とします。

【到達目標】

①経済学の入門的教科書を1冊読み終える、②読みこなし知識をディスカッションが可能なレベルに引き上げる、③さらに論文執筆に生かす

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻公共マネジメントコースにおいては「DP1」「DP4」に関連している。ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻政策研究コースにおいては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、特に「DP1」は特に強く関連している。ディプロマポリシーのうち、サステイナビリティ学専攻においては「DP2」「DP4」に関連している。

【授業の進め方と方法】

担当者による講義と受講者によるプレゼン、ディスカッションを取り入れたアクティブ・ラーニング方式。復習・自習による知識定着を目指すため、e-ラーニングを取り入れる。初回講義時にスケジュールを確認のうえ、受講者毎の担当箇所を決定。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】**春学期前半**

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	授業の進め方/自己紹介/研究テーマ・関心領域の紹介
第2回	経済学への誘い	経済学の原理と実践：経済学の方法と問い：最適化：最善をつくす；需要、供給と均衡
第3回	ミクロ経済学1	消費者とインセンティブ
第4回	ミクロ経済学2	生産者とインセンティブ
第5回	ミクロ経済学3	完全競争と見えざる手
第6回	ミクロ経済学4	貿易
第7回	マクロ経済学1	国の富：マクロ経済全体を定義して測定する
第8回	マクロ経済学2	経済成長
第9回	マクロ経済学3	雇用と失業
第10回	マクロ経済学4	クレジット市場
第11回	マクロ経済学5	金融システム
第12回	マクロ経済学6	景気変動
第13回	経済理論の研究テーマへの応用①	(テーマ1・2)
第14回	経済理論の研究テーマへの応用②	(テーマ3・4)

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とします。

また、プレゼン担当回は、3時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

『アセモグル/レイブソン/リスト 入門経済学』 東洋経済新報社、2020年

※購入が必要。教科書と共にe-ラーニングを活用します。

【参考書】

適宜紹介します。

【成績評価の方法と基準】

①平常点：80%

②プレゼンテーション（口頭試験）：20%

【学生の意見等からの気づき】

受講生の多くが経済学の初学者であり、また社会人であることを考慮のうえ、教科書を選定しました。効率的な予習復習の実行と知識の定着を目指すため、e-ラーニングを取り入れます。教科書を1冊読みこなすことは決して容易なことではありませんが、これまでの受講生の意見や活動状況からみて、より高い達成感および満足感につながるものと確信しています。

【学生が準備すべき機器他】

特にありません。

【その他の重要事項】

非対面時はzoom活用の予定です。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>経済理論および経済統計

<研究テーマ>不動産と国際経済（金融、貿易、開発、環境、補償）

<主要研究業績>"The Modified Phillips Curve as a Possible Answer to Japanese Deflation," *Advances in Economics and Business*, 5 (10), 2017; "Determinants of Potential Seller/Lessee Benefits in Sale-Leaseback Transactions," *International Real Estate Review*, 18 (1), 2015; "Perfect" Real Estate Liquidity and Adjustment Paths to Long-run Equilibrium," *Journal of International Economic Studies*, 27 (5), 2013; "The Robustness of Cartels Facilitated by Anti-dumping Regulations," *Australian Economic Papers*, 43 (3), 2004 ほか。

【Outline and objectives】

Economics can be divided into "micro" and "macro". The "micro" part views individual actors of the economy, such as consumers, households and firms and the market economics of larger scale producers. We examine demand and supply and other market mechanisms. The "macro" part takes an overall look at the economy starting with measuring economic performance, followed by learning the model of circular flow. This makes it possible to grasp how households, firms and governments interact with each other, and also understand the role of the financial sector in countries as well as in the world economy. Some topics might include rather unfamiliar notion, but all will enrich your ability to think as an economist and to analyze those decision-making processes of all individuals, consumers, firms, and governments.

PHL500P1 - 013

環境哲学・倫理学

吉永 明弘

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

環境哲学・環境倫理学の基本的文献の内容を紹介する。あわせて参加者に自由発表を課すことで、主体的に環境問題に取り組んでもらう。

【到達目標】

環境哲学・環境倫理学の基本的文献の内容を把握し、それをもとに現実の環境問題に対する自分なりの構えをもつことができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻公共マネジメントコースにおいては「DP1」「DP3」に関連している。ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻政策研究コースにおいては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、特に「DP2」は特に強く関連している。ディプロマポリシーのうち、サステイナビリティ学専攻においては「DP1」「DP2」に関連している。

【授業の進め方と方法】

対面で行う。環境哲学・倫理学の文献の解説と、参加者による発表を中心に進める。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期後半

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	この授業の進め方を説明する
第2回	現代倫理学の射程	現代倫理学の基本文献を紹介する
第3回	欧米の環境倫理	欧米の環境倫理の基本文献を紹介する
第4回	グローバルな環境倫理	グローバルな環境倫理に関する文献を紹介する
第5回	ローカルな環境倫理	ローカルな環境倫理に関する文献を紹介する
第6回	科学技術の倫理	科学技術の倫理を論じた文献を紹介する
第7回	公害と環境正義	公害と環境正義に関する文献を紹介する
第8回	自然保護から生物多様性保全へ	自然保護・生物多様性保全に関する文献を紹介する
第9回	意見交換会（1）	授業内容に関する意見交換を行う
第10回	環境問題と社会科学	社会科学の視点から環境問題を論じた文献を紹介する
第11回	地域環境保全と市民の力	地域環境や市民運動に関する文献を紹介する
第12回	場所論と風土論	場所論と風土論の基本文献を紹介する
第13回	景観保全と都市環境	景観保全と都市環境に関する文献を紹介する
第14回	意見交換会（2）	授業内容に関する意見交換を行う

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

教科書をよく読んでおくこと。本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

吉永明弘『ブックガイド 環境倫理』勁草書房、2017年

【参考書】

吉永明弘『都市の環境倫理』勁草書房、2014年

吉永明弘・福永真弓編『未来の環境倫理学』勁草書房、2018年

吉永明弘・寺本剛編『環境倫理学』昭和堂、2020年

【成績評価の方法と基準】

意見交換会での発言（20%）と期末レポート（80%）。

【学生の意見等からの気づき】

ディスカッションの時間を増やすことにしました。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>環境倫理学

<研究テーマ>都市の環境倫理、災後と人新世代の環境倫理

<主要研究業績>

『都市の環境倫理』

『ブックガイド 環境倫理』

『未来の環境倫理学』

いずれも勁草書房より刊行

【Outline and objectives】

Environmental Reading and Presentation

LAW500P1 - 014

環境法基礎

永野 秀雄、横内 恵、岡松 暁子

実務教員：**【授業の概要と目的（何を学ぶか）】**

この授業では、これまで環境法を学んだことのない大学院生のために、環境法の全体像と概略を示すことを目的としている。このため、環境問題を、民事法、行政法、国際法の3分野から概略的な説明を行う。また、受講生が法律の素人であることを前提に、授業を行う。

【到達目標】

環境法の知識のない学生が、その全体像を把握することが、到達目標である。環境分野で仕事をする上で不可欠な知識を身につけて欲しい。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻公共マネジメントコースにおいては「DP1」「DP4」に関連している。ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻政策研究コースにおいては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、特に「DP1」は特に強く関連している。ディプロマポリシーのうち、サステイナビリティ学専攻においては「DP1」「DP2」に関連している。

【授業の進め方と方法】

まず、環境法がどのような法律分野から構成されており、環境問題に対して、どのような機能を果たしているのかについて概観する。また、基本的な文獻リサーチ方法についても説明する。次に、環境私法について、私人間の環境紛争で、民法に規定された不法行為という考え方がどのように機能するのかを学ぶ。そして、最後に、実際に起こった公害事案をもとにしながら、判例法の妥当性を検証する。

次に、環境行政法について、日本における環境行政法の展開を学んだ後、個別規制法と環境アセスメント、自然保護法及び環境行政訴訟を概観する。

最後に、国際的な環境問題を検討するにあたり必要となる国際法の基本理論を学ぶ。国際社会の基本単位である国家の役割、国際法の特徴を概観した後、受講者の関心がある国際環境問題を取り上げながら、国際社会における紛争解決の仕組み、国家責任等について適宜判例を紹介しつつ検討し、国際環境問題への国際法からのアプローチの仕方を習得する。

また、授業は、対面授業を予定しているが、コロナウイルスの感染が拡大した場合には、リアルタイムのライブ型配信授業とする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】**春学期前半**

回	テーマ	内容
1	環境法の概観（1）（永野秀雄）	環境問題と環境法
2	環境法の概観（2）（永野秀雄）	①環境法とは何か、②環境法の構成
3	環境私法（1）（永野秀雄）	①環境私法とは何か、②不法行為の基礎理論
4	環境私法（2）（永野秀雄）	損害賠償請求と差止請求
5	環境私法（3）（永野秀雄）	①環境訴訟における因果関係の立証、②複合汚染と共同不法行為
6	環境私法（4）（永野秀雄）	公害事案に基づく議論
7	環境行政法（1）（横内恵）	日本における環境行政法の展開
8	環境行政法（2）（横内恵）	個別規制法と環境アセスメント
9	環境行政法（3）（横内恵）	自然保護法
10	環境行政法（4）（横内恵）	環境行政訴訟
11	国際環境法（1）（岡松暁子）	国際法の基本原則と国際環境問題
12	国際環境法（2）（岡松暁子）	国際環境問題における国家責任法とその限界
13	国際環境法（3）（岡松暁子）	持続可能な開発と国際環境法の発展
14	国際環境法（4）（岡松暁子）	判例研究

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

教科書は使用しない。プリントを適宜配布する。

【参考書】

北村喜宣『環境法（第5版）』（有斐閣ストゥディア、2020年）。

黒川哲志・奥田進一編『環境法へのフロンティア』（成文堂、平成27年）。
 繁田泰宏・佐古田彰・岡松暁子・小林友彦他編著『ケースブック国際環境法』（東信堂、2020年）。

【成績評価の方法と基準】

配分：授業内での発表、議論への参加・貢献度30%、期末レポート70%。
 評価基準：3人の講師が、授業中に、それぞれ2つのテーマを提示する。この合計6つのテーマの中からレポートを1つ作成し、担当講師に提出する。選択したテーマにつき、判例や法律論文等を最低5つ以上参照して、レポートを書くこと。論点、構成、内容の理解度から評価する。

【学生の意見等からの気づき】

環境法の知識のない学生にも、そのレベルに幅があるので、学生の理解を確認しながら進めていきたい。

【学生が準備すべき機器他】

パソコンとパワーポイント、プロジェクター、ビデオ

【担当教員の専門分野等】

永野 秀雄

<専門領域>日米比較法（特に、環境法、労働法、先端技術法）

<研究テーマ>「環境監査と法」、「サイバーセキュリティと法」

<主要研究業績>（環境関連のもの）

①単著『電磁波訴訟の判例と理論—米国の現状と日本の展望』（三和書籍、2008年）。

②「気候変動と企業統治」鈴木幸毅・所伸之編著『環境経営学の扉—社会科学からのアプローチ』（文真堂、2008年）171-184頁。

③「米国における高レベル放射性廃棄物の処分と問題点」人間環境論集6巻2号（2006年）11-21頁。

横内 恵

<専門領域>環境法、公法（憲法・行政法）

<研究テーマ>環境リスクの法的制御、廃棄物処理法制

<主要研究業績>

①「順応型リスク制御と比例性：ドイツ遺伝子技術法の閉鎖系規律手続を題材として」大塚直編『環境法研究』7号（信山社、2017年）13-45頁。

②「廃棄物処理法に基づく生活環境影響調査の対象地域に関する一考察—高城町事件と東海村事件を事例として」大阪経大論集67巻3号（2016年）113-134頁。

③「科学的不確実性を伴う環境リスクに対する法的制御の可能性と限界」OUCFブックレット8号「中国の食・健康・環境の現状から導く東アジアの未来」（2016年）62-74頁。

岡松 暁子

<専門領域>国際法（国際原子力法、国際海洋法、国際環境法）

<研究テーマ>条約の履行確保、核不拡散、原子力の平和利用

<主要研究業績>

1. 繁田泰宏・佐古田彰・岡松暁子・小林友彦他編著『ケースブック国際環境法』（東信堂、2020年）。

2. 「国境を越える核関連物質・機器の国際管理」中野勝郎編著『境界線の法と政治』（法政大学出版局、2016年）105-131頁。

3. 「国際原子力機関の保障措置」山本武彦・庄司真理子編『軍縮・軍備管理』（現代国際関係学叢書第2巻）（志学社、2017年）127-142頁。

【Outline and objectives】

This course provides a basic introduction of environmental law for graduate students. Students will gain a brief explanation of environmental problems from three legal fields of civil law, administrative law and international law. This course presumes that students are not legal majors.

SES500P1 - 015

地球環境学基礎

藤倉 良

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

環境問題とは人間活動が自然生態系に及ぼす物理的、化学的、生物的作用とその反作用である。「何がおきているのか」を理解し、「どうすればよいのか」を考えるためには、科学知識が欠かせない。本講義では気候変動を中心しつつ、オゾン層保護、酸性雨など環境問題や、エネルギーや淡水などの資源問題について、発生メカニズムと対処に関する科学の基礎を修得し、地球規模や国境を超える環境問題に対処する基礎力を養うことを目指す。

【到達目標】

以下を説明できるだけの科学的基礎力を養う。
 人口増加と減少パターンの発生理由。
 オゾンホールが南極上空にできる理由。
 温室効果のメカニズムと気候変動の科学の不確実性。
 日本では酸性雨の生態影響が顕在化していない理由。
 生物多様性を保全しなければならない理由。
 資源のもつ意味。
 淡水、土壌、金属などの資源のもつ役割。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻公共マネジメントコースにおいては「DP1」「DP4」に関連している。ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻政策研究コースにおいては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、特に「DP2」は特に強く関連している。ディプロマポリシーのうち、サステナビリティ学専攻においては「DP1」「DP2」に関連している。

【授業の進め方と方法】

中学卒業レベルの理科の知識を習得していることを前提にして、パワーポイントを用いて講義を進める。パワーポイントはハードコピーを毎回配布し、授業支援システムにもアップする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

なし/No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

春学期後半

回	テーマ	内容
第1回	序論	地球環境問題を取りまく諸状況
第2回	人口	人口が増加する要因、都市の人口問題
第3回	オゾン層	オゾン層が破壊されるメカニズム、オゾン層破壊物質、ウィーン条約、モントリオール議定書、国内対策
第4回	気候変動①	地球温暖化のメカニズム、将来予測
第5回	気候変動②	I P C C、国際社会、国際交渉、パリ協定
第6回	気候変動③	緩和策と適応策
第7回	越境する大気汚染	酸性雨、光化学オキシダント、PM2.5
第8回	生物多様性	生物多様性保全の意義、生態系サービス、遺伝資源
第9回	資源とは何か	「資源」の持つ意味、「資源の呪い」、資源に関する楽観論と悲観論
第10回	水資源	世界の水資源、国際流域の課題
第11回	土壌資源、窒素とリン	土壌の成り立ち、機能、窒素とリンの循環、リン資源
第12回	エネルギー資源①	化石燃料

第13回 エネルギー資源②

原子力、新エネルギー

第14回 金属資源

ベースメタル、レアメタル、リサイクル

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

藤倉良・藤倉まなみ 『文科系のための環境科学入門』 有斐閣

【参考書】

講義中に指示する。

【成績評価の方法と基準】

最終回に行う試験(100%)またはレポート(100%)で評価する。

【学生の意見等からの気づき】

中学校卒業程度の理科の知識があれば理解できるように心がけるが、高校卒業程度の知識が必要な場合もある。

【学生が準備すべき機器他】

とくにない。

【担当教員の専門分野等】

環境システム科学、国際環境協力

【担当教員の関連する業績】

- 1.Ryo Fujikura, Mikiyasu Nakayama, Shanna N. McClain, and Scott Drinkall (2019) Addressing the Health Problems After Immigration Faced by the Marshallese in Springdale, Arkansas: Lessons Learned from the City of Vienna, Journal of Disaster Research, Vol.14, No.9, pp.1309-1316, doi: 10.20965/jdr.2019.p1309
- 2.Ryo Fujikura, Shams Asadi, Laura Kraus and Mikiyasu Nakayama (2019) Toward Successful Integration of Climate Immigrants: Lessons Learned from the Good Practice of the City of Vienna, International Journal of Environmental Science and Development, Vol.10(6): 171-177, doi: 10.18178/ijesd.2019.10.6.1167
- 3.Naoya Tsukamoto and Ryo Fujikura (2018) Evaluation of Japan's Policy for CO2 Reduction at the First Commitment Period of the Kyoto Protocol, International Journal of Environmental Science and Development, Vol.9, No.12 pp.368-374, doi: 10.18178/ijesd.2018.9.12.1131
- 4.Michael Lerner, Ryo Fujikura, Mikiyasu Nakayama & Manami Fujikura (2016) The Influence of Limits to Growth and Global 2000 on U.S. Environmental Governance, International Journal of Social Science Studies, Vol. 4, No. 8, 52-63, doi:10.11114/ijsss.v4i8.
- 5.Tetsuo Kida and Ryo Fujikura (2015) Pollution Risks Accompanied with Economic Integration of ASEAN Countries and the Fragmentation of Production Processes, International Journal of Social Science Studies, Vol.3, No.5, DOI: 10.11114/ijsss.v3i5.915
- 6.Tetsuo Kida and Ryo Fujikura (2014) A chance in Myanmar induced by the minimum wage policy in Thailand: A case study of Myawaddy industrial area, International Journal of Social Science Studies, Vol.3, No.1, pp.38-46
- 7.Ryo Fujikura and Tomoyo Toyota (Editor) (2012) Climate Change Mitigation and International Development Cooperation, (p.264) Earthscan, London
- 8.Ryo Fujikura and Masato Kawanishi (Editor) (2010) Climate Change Adaptation and International Development - Making Development Cooperation More Effective, Earthscan, London

【Outline and objectives】

Environmental problems are physical, chemical and biological consequences and reactions on natural ecosystems caused by human activities. In order to understand "what is happening" and "what should be done", scientific knowledge is indispensable. In this lecture, students will learn the basics of science regarding mechanisms and countermeasures of environmental problems such as climate change, ozone layer protection, acid rain and resource problems such as energy and freshwater.

POL500P1 - 016

国際政治学基礎

森 聡

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本講義の目的は、国際政治学に関する基礎知識を修得するとともに、専門知識を体系的に学習するための準備を行うことにある。

複雑さを増してやまない国際社会の諸問題を、広い視野から理解したり説明したりするのに必要な国際政治学や国際関係論と呼ばれる学問分野の基本概念や理解・認識の枠組み（パラダイムないしリサーチ・プログラム）を解説する。現在進行中の国際政治経済、国際安全保障の話題を随時取り上げる。

【到達目標】

次の三つの到達目標を目指して、＜国際政治学ないし国際関係論の主要パラダイム＞について学ぶ。

第一に、国際政治学における基本的な用語・概念や主要なテーマについての知識を身につける。

第二に、国際政治学ないし国際関係論を捉えるための分析枠組みにまつわる諸々のポイントを正確に理解する。

第三に、現実の国際社会の諸事象を、基本的な概念や分析枠組みを使って理解し、諸資料を活用しながら実証的に説明できる初歩的な能力を修得する。

また、2年次以降に、国際政治の専門的なテーマに関する理論を扱う学術論文を正確に理解するための基礎理解力を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻公共マネジメントコースにおいては「DP1」「DP3」に関連している。ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻政策研究コースにおいては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、特に「DP1」は特に強く関連している。サステナビリティ学専攻においては、ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」に関連している。

【授業の進め方と方法】

春学期は、Zoomによるライブ形式での開講とする。

授業計画を変更する場合には、学習支援システムでその都度告知する。学習支援システムからの授業に関する通知メールを確認されたい。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし/No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
1	国際政治学のあゆみ	主要パラダイムの概観。学問としての国際政治学の発展の歴史。
2	国際政治学における分析の枠組み	理論とは何か。分析レベルの問題。リサーチ・プログラムとは何か。
3	競争の国際政治—理論編	リアリズムの中核概念。古典的リアリズムとは何か。構造的リアリズムとは何か。攻撃的・防衛的リアリズム。
4	競争の国際政治—事例編	米中対立、米露対立の原因と展開。
5	協調の国際政治—理論編	リベラリズムの中核概念。観念的・商業的・共和的リベラリズムとは何か。ネオリベラル制度論とは何か。ネオ・ネオ論争。リベラリズムへの批判。
6	協調の国際政治—事例編	国際貿易・金融システムの仕組み。気候変動をめぐる国際政治。

7	観念の国際政治—理論編	コンストラクティビズムの中核概念。適切性の論理と結果の論理とは何か。規範と文化に関する諸理論。コンストラクティビズムへの批判。
8	観念の国際政治—事例編	人権と制裁・介入の国際政治。
9	中間レビュー	前半の諸理論の振り返り
10	対外政策の理論—「点」からみる国際政治	対外政策を動かす国内要因を理解する。指導者、政党、利益集団、世論など。
11	対外政策の事例	第三次世界大戦を回避した米ソの危機外交
12	国際秩序の理論—「面」からみる国際政治	国家が共通の規則や制度に拘束されていると考えている時に生まれる国際関係を理解する。
13	国際秩序の事例	冷戦終結後の大國間秩序の変容
14	総括	学期中の主要課題に関する解説・講評を行う。学期末レポート課題の説明など。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は2時間程度を目安とします。

【テキスト（教科書）】

テキストは特に指定しない。学習支援システムで講義用資料を配信する。

【参考書】

必要に応じて授業中に示す。以下を購入する義務はないが、要すれば適宜参照されたい。

- ・田中明彦・中西寛編『新・国際政治経済の基礎知識（新版）』、有斐閣ブックス、2004年、2400円。
- ・小笠原高雪・栗栖薫子・広瀬佳一・宮坂直史・森川幸一編『国際関係・安全保障用語辞典』、ミネルヴァ書房、2013年、3000円。
- ・世界地図。

【成績評価の方法と基準】

成績は、レポート課題により評価する予定。

【学生の意見等からの気づき】

- ・毎回、授業の冒頭で、前回後半の講義内容を振り返って、記憶を喚起する。
- ・複雑な概念を扱う際には、二回の講義を利用して説明を行う。

【学生が準備すべき機器他】

講義用アウトライン（見出し入りレジюме）を学習支援システムにアップロードするので、履修者は各自でそれをダウンロードして、授業に持参するとよい。アウトラインに、授業で使用するパワーポイントや講義の内容を書き込んでいくとよい。

【国際政治学、現代アメリカの対外政策】

<専門領域> 国際政治学、戦後アメリカの外交と安全保障

<研究テーマ> 先端技術と国際政治、パワーシフトと国際秩序、現代アメリカのインド太平洋戦略など

<主要研究業績>

- ・川島真・森聡編著『アフターコロナ時代の米中関係と世界秩序』、東京大学出版会、2020年。
- ・"US Technological Competition with China: The Military, Industrial and Digital Network Dimensions," *Asia Pacific Review*, Vol.26, No.1 (2019), pp.77-120.
- ・"U.S. Defense Innovation and Artificial Intelligence," *Asia Pacific Review*, Vol.25, No.2 (Fall 2018), pp.16-44.
- ・「統合作戦構想と太平洋軍—マルチ・ドメイユン・バトル構想の開発と導入」、土屋大洋編著、『アメリカ太平洋軍の研究—インド・太平洋の安全保障』、千倉書房、2018年7月。
- ・「リベラル国際主義への挑戦—アメリカの二つの国際秩序観の起源と融合」、『レヴァイアサン』第58号（2016年4月）、23-48頁。
- ・「アメリカのアジア戦略と中国」、北岡伸一・久保文明監修『希望の日米同盟—アジア太平洋の海洋安全保障』、中央公論社、2016年、39-91頁。
- ・『ヴェトナム戦争と同盟外交—英仏の外交とアメリカの選択 1964-1968年』、東京大学出版会、2009年（日本アメリカ学会清水博賞受賞）。
- など

【Outline and objectives】

This is an introductory course on international politics. The objective of this course is to gain knowledge of basic concepts of international relations in order to lay the foundation for systematically learning advanced theories of international relations. Students would be exposed to the main paradigms or research programs relating to international politics.

ARSL500P1 - 017

国際協力論

武貞 稔彦

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本講義のテーマは貧困削減のための国際協力、開発援助のありようである。SDGs（持続可能な開発目標）に示されているように、戦後国際社会の大きな課題の一つ-貧困-に立ち向かうために行われている営みである開発援助や国際協力は、どのような動機や意図をもって行われ、どのような効果をこれまでもたらしてきたかを検討し、将来の国際協力のあり方、さらには国際社会のあり方についても議論する。

【到達目標】

授業の到達目標は、(1) 現代の国際社会の中で行なわれる様々な国際協力や援助、特に、貧困、開発、環境をめぐる国際協力や援助の歴史と制度について基礎的な知識を獲得すること、(2) 国際協力や援助をめぐる現代の主要なトピックに関する基礎的な知識を獲得すること、および、(3) 誰が何のためにどのような国際協力や援助を行なっているのか、について批判的に見る目を養うことである。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻公共マネジメントコースにおいては「DP3」に関連している。ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻政策研究コースにおいては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、特に「DP2」は特に強く関連している。サステイナビリティ学専攻「国際協力論」においては、ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP4」に関連している。

【授業の進め方と方法】

各回の講義は、①教員による講義、②基本的な文献に関する学生の報告、③ディスカッションで構成する。事前に指定された文献を読んで各回の授業に参加することが必須であり、予習に十分な時間を割くことが必要となる。ただし、講義の方法や内容については、受講者の数や関心などに応じて変更する可能性がある。

報告対象とする文献については、2021 年度秋学期開始前に学習支援システム（Hoppii）を通じて通知/配布予定。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

秋学期前半

回	テーマ	内容
第 1 回	オリエンテーション 国際協力はなぜ行なわれるのか	国際協力という取り組みが必要とされる理由や背景-途上国の貧困と先進国との格差-について概観する
第 2 回	国際協力をめぐる歴史と制度 (1) 経済成長と国際協力	第二次世界大戦後の国際社会秩序形成と、その後 1970 年代までの国際協力の取り組みを、国際社会の政治/歴史の文脈に位置づけて概観する。
第 3 回	国際協力をめぐる歴史と制度 (2) 経済成長路線から人間開発路線へ	1980 年代、90 年代の国際協力の変遷をたどり、基本的な考え方/取り組みの重点の変化を概観する。
第 4 回	国際協力をめぐる歴史と制度 (3) 環境と持続可能な開発	2000 年代以降の国際協力の変遷を国際社会における課題設定や変動の中に位置づける
第 5 回	日本による国際協力	日本による国際協力の歴史と制度について概観する。そのうえで、その成果および評価を検討する。
第 6 回	「開発」とは何か: 開発と文化、社会科学	現在すすめられている開発の到達目標（行き着く先）について文化や社会科学の方法論の観点も含め批判的に検討する。
第 7 回	アフリカ	国際協力における近年の「大きな課題（問題）」であるアフリカについて、何が「問題」となっているのか、その由来や対応を含めて概観する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

特に指定しません。

【参考書】

斎藤文彦『国際開発論』（日本評論社）、下村恭民他『国際協力』（有斐閣）、外務省『日本の経済協力』（ODA 白書）を基本書とします。他は適宜紹介します。

【成績評価の方法と基準】

成績評価は、期末レポート (50%)、各回の担当報告の内容 (30%)、授業やディスカッションへの貢献 (20%) を総合的に判断して行う。

【学生の意見等からの気づき】

過去には議論の時間の充実（拡大）を求める声があったことから、授業運営には留意することとする。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 開発の自然環境・社会環境への影響、開発援助、開発と倫理
<研究テーマ> 「望ましい（望ましくない）「開発」とは何か」「ダム建設に伴う立ち退きと補償、生活再建」
<主要研究業績>

"Japanese Experience of Involuntary Resettlement: Long-Term Consequences of Resettlement for the Construction of the Ikawa Dam," *International Journal of Water Resources Development*, Routledge, Vol. 25, Issue 3, September 2009, pp. 419- 430,
『開発介入と補償：ダム立ち退きをめぐる開発と正義論』勁草書房 2012 年,
"Participation and diluted stakes in river management in Japan: the challenge of alternative constructions of resource governance" in Sato, J. ed., *Governance of Natural Resources: Uncovering the social purpose of materials in nature*. United Nations University Press, pp.141-161, July 2013

【実務経験のある教員による授業】

担当者は、途上国への経済協力に携わっていた経験がある。本講義においては、途上国駐在も含めた経済協力実務で得られた知見が活用されている。

【Outline and objectives】

This course is an advanced course for International Development and Development Assistance. Development is one of the global issues in the current world as shown in the Sustainable Development Goals (SDGs). International Development Assistance has been perceived not only as a strong tool for development of many societies and/or economies but also as a way to strengthen world peace. The class consists of lectures and readings focusing on the history and the objectives of international development efforts and relationship between rich countries and poor countries putting a special emphasis on Japan's role in the international society.

Completing the course, students are expected;

- 1) to acquire basic knowledge on history and institutions in international development efforts,
- 2) to acquire basic knowledge on current/important issues in international development, and
- 3) to critically analyze who engages in international development efforts and why.

SES500P1 - 018

サステナビリティ研究入門A

杉戸 信彦、藤倉 良

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

サステナビリティ学の基礎を知る。

【到達目標】

これからサステナビリティ学を研究していく上での出発点として、サステナビリティ学専攻を構成するさまざまな研究領域において、その基礎概念や方法論について概観を得るとともに、それらの領域においてサステナビリティ概念はどのように扱われているのかについて理解する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻公共マネジメントコースにおいては「DP2」「DP3」に関連している。ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻政策研究コースにおいては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、特に「DP2」は特に強く関連している。ディプロマポリシーのうち、サステナビリティ学専攻においては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連している。

【授業の進め方と方法】

サステナビリティ学専攻の教員が各1回を担当するオムニバス形式でおこなう。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

なし/No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション：サステナビリティ研究の目指すもの。（藤倉）	修士課程研究の進め方。学術論文とは何か。
第2回	地域のサステナビリティ問題とは？（小島）	最近の時事問題から、地域のサステナビリティを読み解く。
第3回	日常を見つめる暮らしの経済学（湯澤）	衣食住を中心とした身近な事象から現在と過去の社会のありようを考察し、サステナビリティとは何かを考える。
第4回	地球惑星科学から考えるサステナビリティ（松本）	地球の歴史における地球環境の不可逆な進化を考え、サステナビリティについて考察する。
第5回	環境倫理学とサステナビリティ（吉永）	環境倫理学の基本主張の根幹にサステナビリティの考え方があることを説明する。
第6回	環境法とサステナビリティ（永野）	環境法は、サステナビリティを維持するための執行力をもった規範
第7回	途上国支援の場におけるサステナビリティ（武貞）	途上国支援や国際協力の場における、SDGsを始めとするサステナビリティにかかわる課題を概観する。
第8回	生物多様性と持続可能な資源管理（高田）	持続可能な自然資源利用について、生物多様性との関わりからの観点から現状の課題と取り組みなどを紹介する。
第9回	21世紀を健康に生きていくために（宮川）	健康を守っていくことはまさにヒトがサステナブルであることに他ならない。日本は世界一の長寿を誇っているが、その背景に潜む様々な問題について紹介する。
第10回	国際法からのアプローチ（岡松）	国際法はサステナブルな国際社会の構築に貢献できるのか。
第11回	企業・地域と環境・サステナビリティ経営（金藤）	日本企業で現在実践されている環境経営やサステナビリティ経営の基礎構造（戦略、組織、管理の流れ）を、実践例を利用しながら習得することを目的とする。
第12回	歴史学と「サステナビリティ」（辻）	歴史（学）を学ぶことはサステナビリティ研究にどのように役立つのか、参加者の関心のもとづいたアクティブラーニングをおこなう。
第13回	サステナブル経営の国際的潮流（長谷川）	COP21（気候変動枠組条約締結国会議）で合意されたパリ協定が提起した「脱炭素革命」と企業経営のこれからの考え。
第14回	ハザードとレジリエンス／総括（杉戸）	自然災害リスクを考慮したサステナビリティとは何かを考える。／授業内容についてのディスカッション、レポート課題の発表

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

とくになし。

【参考書】

その都度教員が指示する。

【成績評価の方法と基準】

授業最終回に提示するテーマからひとつを選択し、それにもとづくレポートを作成する（100%）。

【学生の意見等からの気づき】

とくになし。

【Outline and objectives】

"Introduction to Sustainability Studies (A)" is an introductory course to learn interdisciplinary approaches to study sustainability and related issues.

SES500P1 - 019

サステナビリティ研究入門B

杉戸 信彦、藤倉 良

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

サステナビリティ学の最前線を知る。

【到達目標】

サステナビリティ学専攻を構成するさまざまな研究領域において、その最新の研究状況や問題点について概観を得るとともに、専攻所属の教員の研究内容について理解を深め、各自の今後の研究の方向性を考える。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻公共マネジメントコースにおいては「DP2」「DP3」に関連している。ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻政策研究コースにおいては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、特に「DP2」は特に強く関連している。ディプロマポリシーのうち、サステナビリティ学専攻においては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連している。

【授業の進め方と方法】

サステナビリティ学専攻の教員が各1回を担当するオムニバス形式でおこなう。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

なし/No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	リスク認知論：リスクの定義（藤倉）	一般人と専門家のリスク認知の違い。マスメディアとリスク報道。
第2回	サステナビリティに向きあう自治体（小島）	最近の事例から、サステナビリティ問題に関する自治体政策の現在を俯瞰する。
第3回	暮らしの比較史研究（湯澤）	時代、地域による違いに着目した暮らしの比較研究から、サステナビリティをめぐる課題と可能性について議論する。
第4回	太陽活動と気候変動（松本）	太陽活動と気候変動に関する科学の最前線に関するレビューを行う。
第5回	都市とサステナビリティ（吉永）	都市に住むことが地球環境のサステナビリティに与える影響について解説する。
第6回	米国の公開企業と気候変動リスク（永野）	米国連邦証券取引委員会「気候変動に関する情報開示指針」の検討
第7回	貧困／格差とサステナビリティ（武貞）	先進国と途上国の関係から、一国の社会や国際社会におけるサステナビリティを考える。
第8回	持続可能な人と自然との共生（高田）	サステナブルな社会構築のための国際法益となる価値の創設について。
第9回	現代社会の健康課題（宮川）	人間がよく生きるために必要な条件にはいろいろあるが、その中で一つテーマを選び、現状を紹介、問題提起を行い、全員でディスカッションする。
第10回	近年の国際環境問題の特質（岡松）	サステナブルな社会構築のための国際法益となる価値の創設について。
第11回	環境・サステナビリティ経営と会計（金藤）	「サステナビリティ研究入門A」で学習した内容に基づいて、地域の環境経営やサステナビリティ経営の取組事例の特徴を明らかにするとともに、グループワークを通して新たな地域ビジネスを検討し、提案することを目的とする。
第12回	ドイツの参加政策と市民社（辻）	1970年代から2010年代までのドイツの市民的参加の発展をたどり、日本との比較について考える。
第13回	企業価値とサステナビリティ（長谷川）	社会的責任投資、国連責任投資原則（ESG投資）、スチュワードシップ・コードを中心に企業価値のあり方を巡る政策動向について紹介する。
第14回	災害事象の発生予測と土地条件の評価／総括（杉戸）	災害の自然地理学的研究の現状と課題を考える。／授業内容についてのディスカッション、レポート課題の発表

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

とくになし。

【参考書】

その都度教員が指示する。

【成績評価の方法と基準】

授業最終回に提示するテーマからひとつを選択し、それにもとづいて作成したレポートで評価する（100%）。

【学生の意見等からの気づき】

とくになし。

【Outline and objectives】

"Introduction to Sustainability Studies (B)" is an introductory course to learn the latest studies and research in sustainability studies.

SES500P1 - 020

SDGs への招待

武貞 稔彦

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

2030年までの国際目標である「持続可能な開発目標（SDGs: Sustainable Development Goals）」（以下 SDGs）について、多様な分野で実現に向け取り組んでいる専門家の講義を受ける。それらを通じ、SDGs についての理解を深めると同時に、各人が自身の関心分野を切り口に、将来の持続可能な社会の構想実現に寄与するための足がかりを得る。SDGs Plus 履修証明プログラムの入り口として設置されているものである。

【到達目標】

グローバルな射程を持ち、多様かつ一部は実現に困難が予想される目標も含んだ SDGs については、主に国際機関、政府や NGO / NPO が主体的に活動するものと思われがちである。しかし SDGs では、民間企業や市民がその担い手として重要であると認識されている。持続可能な社会について学ぶ受講生として、① SDGs に関する基礎的な知識を持ち、人に説明することができるようになること、② SDGs にあげられた各種課題を「自分ごと」として捉えることができる当事者としての意識を涵養すること、が本講義の目標である。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻公共マネジメントコースにおいては「DP1」「DP3」に関連している。ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻政策研究コースにおいては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、特に「DP1」「DP3」は特に強く関連している。ディプロマポリシーのうち、サステイナビリティ学専攻においては「DP1」「DP2」に関連している。

【授業の進め方と方法】

本セミナーでは、SDGs に関わって実際の現場で活躍されている講師を招き、具体的な活動や努力、体験などの話を聴講する。各講師の知見やさまざまな経験に触れることによって、受講者の SDGs や現代社会における課題に対する意識や理解が深まることが期待される。

受講者は各回にコメントペーパー（講師からの質問への回答や、講師や講義内容への質問を記すもの）の記入と提出が求められる。

同時に可能な範囲で参加者によるアクティブラーニングの要素を取り入れ、受講者の思い、考え、意見などを発信する機会も設ける予定である。

最終回には各受講者にショートプレゼンテーションを実施してもらう予定である。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期前半

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	講義の目的、進め方等の説明。講義の全体像の解説。
第2回	セミナー	外部講師による講義
第3回	セミナー	外部講師による講義
第4回	セミナー	外部講師による講義
第5回	セミナー	外部講師による講義
第6回	セミナー	外部講師による講義
第7回	プレゼンテーションと総括	受講者によるショートプレゼンテーションと総括

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

テキストは使用しない。必要に応じ外部講師によるプリント（資料）が配布される。

【参考書】

外部講師や教員が必要に応じて紹介する。

【成績評価の方法と基準】

平常点（参加姿勢、コメントペーパーの内容、授業中の発言など）40%、プレゼンテーション30%、レポート30%の総合評価による。

【学生の意見等からの気づき】

オンライン実施の経験も踏まえ、参加者のコミュニケーションのバリエーションや方法の工夫に努める。

【その他の重要事項】

講演後に質問時間が設けられるので、積極的に質問を行うこと。

本セミナーの詳しいテーマおよび外部講師については、掲示板および研究科ウェブサイトで発表する。

【実務経験のある教員による授業】

担当者（コーディネーター）は、途上国への経済協力に携わっていた経験がある。本講義においては、途上国駐在も含めた経済協力実務で得られた知見が活用されている部分がある。

【Outline and objectives】

This course is to introduce and give basic understandings of the Sustainable Development Goals, which is internationally agreed goals and strategies toward sustainable societies. Each class will consist of lecture, discussion among participants and guest speaker's lectures.

LAW500P1 - 051

政策法務論

神崎 一郎

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

【授業概要】

第一次分権改革以降、自治体の法務担当者を中心に、「政策法務」ということが唱えられている。しかしながら、国の中央官庁の法務担当者の中で「政策法務」という言葉は一般的ではない。この差に着目し、自治体政策法務について解き明かしつつ、自治体法務が直面する問題点等を検討する。

【授業目的】

現在の自治体法務が直面している問題点を検討するとともに、条例論を学ぶ。

【到達目標】

- ・自治体政策法務のイメージをつかむ。
- ・条例案立案のポイントをつかむ。
- ・条例に関する基礎的な知識を得、簡単な制度設計・条文作成を行うことができるようになる。
- ・なお、立法学や政策法務論の現状として、政治的分析や組織論的なものにとどまるものが多く見られる。本講義では、法律による行政の原則にのっとり、すべての立法面、行政面における事象には条文の根拠があるという発想に立ち、逐一、条文の根拠に立ち戻って考察していきたいと考えている。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻公共マネジメントコースにおいては「DP2」「DP3」に関連している。公共政策学専攻政策研究コースにおいては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、特に「DP3」は特に強く関連している。サステイナビリティ学専攻においては、ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP4」に関連している。

【授業の進め方と方法】

- ①本講義においては、自治体法務を全般的に取り扱うが、中心は条例論となる。
 - ②授業は、講義を中心とするが、立法演習の回については、参加者をいくつかのグループに分け、グループ内で議論しつつ、与えられた条件において、与えられた政策目的を達成するための行政規制システムを設計し、発表・議論を行う。
 - ③本講義の最後の2回を立法演習（条例演習）に当てる。立法演習が、講義内容の総まとめとなる。立法演習において、提示した事例を解決するための制度設計をしてもらい、各学生が報告する。報告に対する講評が学生へのフィードバックとなる。
- ※講義は、原則として対面で実施する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期後半

回	テーマ	内容
1-2	政策法務論総論	1. はじめに～「政策法務」とは？ 2. 自治体法務の歴史～戦前から戦後の連続性、第一次分権改革前の自治体法務の実情、自治体の立法技術の課題など
3-4	憲法第八章（地方自治）をめぐる日本政府とGHQの攻防	1. GHQ 民政局内における条文の変遷とその意味するところ～ホームルール制とチャーター 2. 日本側草案の起草～民政局案との対比 3. チャーター制定権の変貌
5-6	基本法・基本条例について～特に、自治基本条例を中心に	1. 基本法・基本条例の法規範的性格の稀薄性 2. 法体系上の位置づけ 3. 自治基本条例の意義 4. 民主的契機としての住民投票 5. 議会基本条例の意義
7-8	条例論	1. 条例の定義 2. 条例の類型 3. 法律と条例の関係～徳島市公安条例事件最高裁判法の基準とそのあてはめ
9-10	立法事実と比例原則	1. 分権改革前の判例 2. 比例原則 3. 分権改革後の判例 4. 違憲審査基準論と合理性の基準 5. 合理性を基礎づけるものとしての立法事実
11-12	政策目的の設定と目的達成手段の選択	政策法務にとって重要な「政策目的の設定」と「目的達成手段の選択」について検討する。
13-14	条例案立法演習	提示した事例について制度設計・条文作成まで行う（演習形式）。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

事前配付資料又は文献を読むこと。

【テキスト（教科書）】

講義録を配付する予定である。

【参考書】

大森政輔・鎌田薫編『立法学講義（補遺）』商事法務（2011年）
神崎一郎『「政策法務」試論～自治体と国のパララックス（1）（2）』（自治研究 2009年2月・3月・第一法規）
「地方議会の立法機関性—議会による立法事実の構築・審査の視点から」北村喜宣ほか編集『鈴木庸夫先生古稀記念・自治体政策法務の理論と課題別実践』第一法規（2017年）

【成績評価の方法と基準】

平常点 30%・立法演習 40%・報告 30%。

立法演習は、演習に参加した上で、自分の成果物の発表・他の学生との議論を評価する。自らの設計した法制度の合理性をいかに説得力をもって発表できるか、自らの成果物を踏まえて他の学生の成果物に対する批判や評価を合理的に行うことができるかが評価のポイントである（「授業の到達目標」の2点目）。本講義の成績評価に当たり、立法演習への参加は必須である。

なお、随時、指定した課題について事前に検討し、講義において報告する機会を設ける（「授業の到達目標」の3点目）。

【学生の意見等からの気づき】

該当なし

【その他の重要事項】

コンパクトなものでよいので六法を持参することが望ましい。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>立法学

<研究テーマ>立法過程論・自治体政策法務論・条例論

<主要研究業績>

- ①「法律と条例の関係における『比例原則』『合理性の基準』『立法事実』（自治研究 2009年8月・第一法規）
- ②「『政策法務』試論～自治体と国のパララックス（1）（2）」（自治研究 2009年2月・3月・第一法規）
- ③「地方議会の立法機関性—議会による立法事実の構築・審査の視点から」北村喜宣ほか編集『鈴木庸夫先生古稀記念・自治体政策法務の理論と課題別実践』第一法規（2017年）
- ④「基本法と基本条例」自治実務セミナー 2018年3月号

【Outline and objectives】

As the transfer of central government authorities to local governments progresses, local governments will wield more administrative power. To decentralize administrative powers, it is vital that municipal governments merge to improve their legal capabilities. In this class, we will study how to develop legal ability of local authorities.

LAW500P1 - 052

立法学研究

神崎 一郎

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

【授業概要】

我が国の法学は、もっぱら法解釈を中心に発展してきた。昭和 21 年に、既に末弘巖太郎博士は、法令立案の作業がもっぱら関係官僚の職業的な熟練によって行われているのみであって、立法者としての優れた能力とはいかなるものであり、その能力をどのようにして養成すればよいかといった問題についての科学的な考究が全くなされていないことを指摘している。以降、様々な研究成果が蓄積されてきているが、本講義は、それらを踏まえ、「立法学」を体系化する作業を試みるものである。「立法」を政治評論的に見るにとどまるのではなく、法的視点も含めて検討していきたい。

【授業目的】

我が国の国家作用を基礎付ける法律について、企画・制定から運用にいたるまでについて、立体的な知識を得るとともに思考の訓練をする。

【到達目標】

・我が国の立法について、企画立案段階から制定施行段階までの正確な知識を得る。
 ・法令の構造や政策目的達成手段に関する知識を得、簡単な制度設計・条文化作成を行うことができるようになる。
 ・なお、立法学や政策法務論の現状として、政治的分析や組織論的なものとどまるものが多く見られる。本講義では、法律による行政の原則にのっとり、すべての立法面、行政面における事象には条文の根拠があるという発想に立ち、逐一、条文の根拠に立ち戻って考察していきたいと考えている。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻公共マネジメントコースにおいては「DP2」「DP4」に関連している。ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻政策研究コースにおいては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、特に「DP3」は特に強く関連している。サステイナビリティ学専攻においては、ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP4」に関連している。

【授業の進め方と方法】

①本講義においては、立法過程の諸段階の分析にとどまらず、立法作業の際に依拠すべき「立法事実」、規制立法を設計する上での行政手法の選択、実際の立法作業の現場における思考などにも立ち入りたい。
 ②授業は、講義を中心とするが、必要に応じて、参加者の調査と発表、ディスカッションを組み合わせる。
 ③本講義の最大の特徴は、最後の 2 回を行う立法演習である。講義において会得した発想法、ツールを用いて、与えられた課題に対し、合理的な法制度設計を行い、自分が設計した法制度について報告し、討議を行う。これに対する講評が学生へのフィードバックの位置付けになる。
 ※本講義は、原則として対面を実施する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期前半

回	テーマ	内容
1-2	立法学総論～立法学とは	1. 序論～立法学とは 2. 現代立法の状況と特質～我が国の法体系、法令の数、戦後日本の立法動向など
3-4	立法過程論①～国会提出前の企画立案段階	1. 内閣による法案提出プロセス 2. 政党内の意思決定システム 3. 議員立法のプロセスの特徴 4. 民主党政権下における立法過程の変容～ウエストミンスター・モデルとの比較
5-6	立法過程論②～国会審議段階	1. 国会審議過程の現状と課題 2. 内閣提出法案・議員提出法案それぞれの役割と課題 3. ねじれ国会下における立法傾向 4. ねじれ国会を経験して、ねじれ解消後に何が起きたか
7-10	法律とは何か～法律の一般性と抽象性	1. 「法律」とは何か 2. 現実の法律の傾向～個別特例法の増加など 3. 「法律事項」とは何か
11-12	政策目的の設定と目的達成手段の選択	立法を行う上で重要となる政策目的の設定と目的達成手段の選択について検討する。
13-14	立法演習	提示した事例について制度設計を行う（演習形式）。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

事前配付資料又は文献を読むこと。

【テキスト（教科書）】

講義録を配付する予定である。

【参考書】

大森政輔・鎌田薫編『立法学講義（補遺）』商事法務（2011 年）

【成績評価の方法と基準】

平常点 30 % ・立法演習 40 % ・報告 30 % 。

立法演習は、演習に参加した上で、自分の成果物の発表・他の学生との議論を評価する。自らの設計した法制度の合理性をいかに説得力をもって発表できるか、自らの成果物を踏まえて他の学生の成果物に対する批判や評価を合理的に行うことができるかが評価のポイントである（「授業の到達目標」の 2 点目）。本講義の成績評価に当たり、立法演習への参加は必須である。
 なお、随時、指定した課題について事前に検討し、講義において報告する機会を設ける（「授業の到達目標」の 3 点目）。

【学生の意見等からの気づき】

該当なし

【その他の重要事項】

コンパクトなものでよいので六法を持参することが望ましい。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>立法学

<研究テーマ>立法過程論・自治体政策法務論・条例論

<主要研究業績>

- ①「法律と条例の関係における『比例原則』『合理性の基準』『立法事実』（自治研究 2009 年 8 月・第一法規）
- ②「『政策法務』試論～自治体と国のパララックス (1)(2)」（自治研究 2009 年 2 月・3 月・第一法規）
- ③「地方議会の立法機関性―議会による立法事実の構築・審査の視点から」北村喜宣ほか編集『鈴木庸夫先生古稀記念・自治体政策法務の理論と課題別実践』第一法規（2017 年）
- ④「基本法と基本条例」自治実務セミナー 2018 年 3 月号

【Outline and objectives】

In this class, we will study lawmaking process. In last 2 lectures, sutudents will draft articles as the climax of the class.

政策評価論

南島 和久

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

1990年代以降、日本の公的部門において評価がブームとなった。自治体では行政評価と呼ばれる手法が定着し、国では中央省庁等改革に伴い政策評価制度が導入された。しかし、そもそも政策評価が何であるのか、どのようにすればこれを活用できるのかといった点については、十分な議論が交わされてこなかった。この科目では、これら公的部門の評価について議論する。その際、歴史を踏まえつつ理論的な検討を行うとともに海外の取組との比較も視野に入れる。

【到達目標】

本科目では、政策評価論を構成する基礎概念を順次紹介する。これら基礎概念の理解を本科目の基礎的な到達目標とする。ポイントは以下の3点である。

- ①政策評価の類型に関する理解
政策分析、業績測定、プログラム評価の概念の理解
- ②政策評価の歴史に関する理解
PPBS、GAOのプログラム評価、GPRA/GPRAMAの史的展開
日本の政策評価の史的展開に関する理解
- ③政策評価の理論に関する理解
ロジックモデル、評価階層、アカウントビリティの理解
政策分析とプログラム評価、業績測定とプログラム評価の論争
政策評価にかかる実用主義と科学主義に関する論争など

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻公共マネジメントコースにおいては「DP1」「DP4」に関連している。ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻政策研究コースにおいては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、特に「DP3」は特に強く関連している。サステナビリティ学専攻においては、ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP4」に関連している。

【授業の進め方と方法】

授業は、1回2時間続きで実施する。スケジュールは授業計画の内容をイメージしているが、これは計画段階のものであり、各回のテーマは受講生の関心を考慮して変更することがある。テーマに沿った形での討論を交える。学生へのフィードバック方法については講義内もしくはメールにて行う。原則として講義は対面で行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

春学期後半

回	テーマ	内容
第1回	導入	この科目について、成績評価の方法についてなど
第2回	政策の概念	政策の合理性、体系性、循環性、ロジックモデル
第3回	評価の概念	政策分析、プログラム評価、業績測定の違い
第4回	政策分析	費用便益分析、公共事業評価、規制評価
第5回	業績測定と自治体①	事務事業評価、総合計画の評価
第6回	業績測定と自治体②	計画と評価、マニフェストと評価
第7回	業績測定と独立行政法人①	NPMと評価、独法の歴史、3つの独法形態と評価
第8回	業績測定と独立行政法人②	地方独立行政法人、公立大学の評価、公立病院の評価
第9回	国の府省の評価①	中央省庁等改革と評価、総務省の行政評価局調査、政策評価法
第10回	国の府省の評価②	府省の自己評価、3つの評価方式、行政事業レビューと政策評価、EBPM
第11回	アメリカの評価①	PPBS、プログラム評価、GPRA
第12回	アメリカの評価②	GPRAMA、データドリブン、エビデンスベースド、APGs、CAPGs、評価の日米比較
第13回	評価理論①	評価の類型論、評価階層の理論（システマティックアプローチ）
第14回	評価理論②	評価をめぐる学説、科学主義と実用主義の対立

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

南島和久『政策評価の行政学：制度運用の理論と分析』見洋書房、2020年。
南島和久編『JAXAの研究開発と評価』見洋書房、2020年。

山谷清志監修、大島巖、源由理子編著『プログラム評価ハンドブック』見洋書房、2020年。

【参考書】

今村・武藤・佐藤・沼田・南島『ホーンブック基礎行政学（第3版）』北樹出版、2015年。
石橋・佐野・土山・南島『公共政策学』ミネルヴァ書房、2018年。
行政管理研究センター編『詳解・政策評価ガイドブック』ぎょうせい、2008年。
佐藤竺監修、今川晃・馬場健編著『市民のための地方自治入門（新訂版）』実務教育出版、2009年。
益田直子『アメリカ行政活動検査院』木鐸社、2010年。
松田憲忠・岡田浩編著『よくわかる政治過程』ミネルヴァ書房、2018年。
武藤博己編著『公共サービス改革の本質』、2014年。
広田照幸『組織としての大学』岩波書店、2013年。
山谷清志『政策評価の理論とその展開』見洋書房、1997年。
山谷清志『政策評価の実践とその課題』萌書房、2006年。
山谷清志編著『公共部門の評価と管理』見洋書房、2010年。
山谷清志『政策評価』ミネルヴァ書房、2012年。
山谷清志編『政策と行政』見洋書房、2021年（5月刊行予定）。

【成績評価の方法と基準】

平常点及び報告（40%）、期末レポート（60%）

【学生の意見等からの気づき】

とくになし。

【学生が準備すべき機器他】

とくになし。

【その他の重要事項】

初回の講義にて案内します。万が一初回講義に欠席する場合には連絡してください。メールアドレスは、najima@jura.niigata-u.ac.jp（「@」と「.」は全角となっています。）

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>行政学、公共政策学
<研究テーマ>政策評価の制度運用
<主要研究業績>『政策評価の行政学』（見洋書房）、『それでも大学が必要』と言われるために』（創成社）、『ホーンブック基礎行政学（第3版）』（北樹出版）、『公共サービス改革の本質』（敬文堂）、『東アジアの公務員制度』（法大出版）、『組織としての大学』（岩波書店）、『公共部門の評価と管理』（見洋書房）、『市民のための地方自治入門』（実務教育出版）など

【Outline and objectives】

Since 1990's, policy evaluation system become a boom in the Japanese public sector. In the municipality, performance measurement has become established. In central government, a policy evaluation system was introduced to the ministries and agencies. However, sufficient debate has not been exchanged. We will conduct a theoretical study while considering the history, and also consider comparison with overseas initiatives.

SOC500P1 - 054

社会調査法 1

小磯 明

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

1. 社会調査の全体像、社会調査の歴史的経緯について概説する。
2. 社会調査の様々な手法について検討する。
3. 質的調査と量的調査双方の基本事項を理解する。
4. 調査倫理など調査に伴う問題を学ぶ。

【到達目標】

1. 社会調査の基本事項、歴史を簡潔に説明できる。
2. 量的調査と質的調査の相違を識別できる。
3. 社会調査のプロセスを具体的に述べることができ、実際に調査を始めることができる。
4. 倫理違反といった概念について具体的に説明できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻公共マネジメントコースにおいては「DP2」「DP4」に関連している。ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻政策研究コースにおいては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、特に「DP1」は特に強く関連している。ディプロマポリシーのうち、サステイナビリティ学専攻においては「DP2」「DP4」に関連している。

【授業の進め方と方法】

社会調査の基本事項を理解し、全体像を把握するために、次のように授業を進めていく。

1. 社会調査の歴史的経緯を学びつつ、様々な社会調査の手法を説明する。
2. 質・量双方の調査研究の特性について、調査の企画・実施、成果の発表に至るまでの流れを具体的に解説する。
3. 調査倫理の問題を踏まえつつ、社会調査の意義についての理解を促す。授業は原則対面で実施する講義形式によって進められるが、必要に応じて、グループ討議などの形式をとることがある。授業への学生の積極的参加を促すためアクションペーパーを提出してもらおう。授業計画は概ね以下を予定しているが、授業の展開によっては若干変更する可能性がある。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期後半

回	テーマ	内容
第 1 回	社会調査の基本的な考え方 1	・社会調査の諸定義と目的 ・社会調査の諸類型
第 2 回	社会調査の基本的な考え方 2	・量的調査と質的調査 ・成果の公表
第 3 回	社会調査の歴史 1	・社会調査の源流：人口調査、貧困調査 ・民族誌の系譜：文化人類学、シカゴ学派社会学
第 4 回	社会調査の歴史 2	・日本の社会調査：国勢調査、都市及び農村調査、SSM 調査等
第 5 回	社会調査の設計 1	・社会調査の全過程：着想から成果の公表まで
第 6 回	社会調査の設計 2	・問いと対象の設定 ・調査・分析手法の選択 ・手法による手順の違い：研究における「仮説」の位置
第 7 回	量的調査の方法と実例 1	量的調査のステップ：仮説の操作化、調査票の作成、サンプリング、実施、データの入力と分析
第 8 回	量的調査の方法と実例 2	・実例に基づく量的調査実施過程の追体験
第 9 回	質的調査の方法と実例 1	・質的調査のステップ：関連資料の収集、参与観察、聞き取り調査の実施、データの整理と分析
第 10 回	質的調査の方法と実例 2	・実例に基づく質的調査実施過程の追体験
第 11 回	理論と調査との関係 1	・理論命題と理論枠組 ・先行理論の位置づけ
第 12 回	理論と調査との関係 2	・認識の深まりと問いの洗練
第 13 回	調査倫理	・調査者と被調査者との関係 ・学問としての倫理、調査における倫理
第 14 回	調査の社会的意義	・社会調査と価値判断の問題

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

講義の内容が多岐にわたるため、特に指定しない。

【参考書】

都度、講義の引用・参考文献を紹介する。

【成績評価の方法と基準】

平常点（出席・討議）50%、課題レポートを 50%。

【学生の意見等からの気づき】

受講生の研究テーマを踏まえた講義にしたい。

【学生が準備すべき機器他】

特になし。

【その他の重要事項】

特になし。

【専門領域】

<専門領域>社会調査法、福祉社会学、社会政策学

【研究テーマ】

コミュニティにおける医療と福祉形成の現代的解明、地域の産業政策の形成

【主要研究業績】

単著『地域と高齢者の医療福祉』2009 年、御茶の水書房。
論文「小規模・高齢化集落の高齢者と地域福祉－長野県泰阜村の高齢者生活調査から」『福祉社会学研究』第 8 号、2011 年。
論文「地域福祉は住民のもの－協同組合・非営利組織の視点から」『日本の地域福祉』第 31 巻、2018 年。

【Outline and objectives】

Consider various methods of social survey

社会調査法2

中筋 直哉

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

社会学の社会調査法のうち、統計学の応用による、大人数の社会意識や集合行動の構造の解明を目的とするサーベイ型の調査法について概説する。まずこの調査法の成立の歴史的経緯と基本的な論点を踏まえた上で、調査計画から結果の統計解析までのプロセスを概観するとともに、その時々を生じる実践的課題について詳論する。さらに、社会意識調査を政策形成に活用する方途についても考察したい。

【到達目標】

サーベイ型の社会調査に関する基本的知識、特に調査の計画から報告書の作成までの一連の流れを理解し、知識として習得すること

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻公共マネジメントコースにおいては「DP2」「DP4」に関連している。ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻政策研究コースにおいては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、特に「DP1」は特に強く関連している。ディプロマポリシーのうち、サステイナビリティ学専攻においては「DP2」「DP4」に関連している。

【授業の進め方と方法】

教室で対面で実施（予定）。実習的な作業をとまなう、各回2時限の連続講義。課題やレポートについては事後に全員に対してフィードバックする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

春学期後半

回	テーマ	内容
1	概論 1	社会科学的認識と計量的社会調査の関係について
2	概論 2	近代日本における計量的社会調査の展開と課題
3	調査の設計 1	調査票調査の企画・設計（質問文案をレポートとして提出）
4	調査の設計 2	質問文と選択肢の構成（調査票作成作業を実習形式で行う）
5	サンプリング 1	サンプリングの統計学的基礎
6	サンプリング 2	サンプリングの種類と実施上の問題
7	調査の実際 1	計量的社会調査における調査者と被調査者の関係
8	調査の実際 2	調査票の配布・回収をめぐる諸問題
9	データの集計と整理 1	コーディングとデータクリーニングの方法
10	データの集計と整理 2	コーディングから度数分布表作成までの過程（仮想的な調査データを用いて実習形式で行う）
11	調査データの読み方	基本統計量とデータ分布の概説
12	展開的講義	政策形成と社会意識調査
13	まとめ 1	社会調査を政策形成に活用する方途について（講義）
14	まとめ 2	社会調査を政策形成に活用する方途について（討論）別途レポート提出および筆記試験を実施

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業中に指示した課題を指示された期日までに自宅で用意し、提出すること。授業終了後参考書入手・熟読して、重要箇所を復習すること。本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

特に指定しない

【参考書】

授業中に適宜指示する

【成績評価の方法と基準】

授業への積極的参加 30%、課題提出 15% ×2回、筆記試験 40%。

【学生の意見等からの気づき】

最近の現場での社会調査の応用についての批評的講義を増やす

【学生が準備すべき機器他】

各自自宅でパソコンを使用した作業が必要。学習支援システムへのアクセスが必須。

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉地域社会学
〈研究テーマ〉地域社会の構造分析

〈主要研究業績〉『よくわかる都市社会学』（2013、ミネルヴァ書房）、『群衆の居場所』（2005、新曜社）

【Outline and objectives】

This lecture aims to study basic methods of social research for sampling data by questionnaire.

SOC500P1 - 056

社会調査法3

見田 朱子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

社会科学における統計データの利用法。
「統計データ」を読み、書（描）き、利用するための基本概念や方法を理解する。具体的には、統計資料の整理の仕方、基本的な統計量の読み方、図表の読み方、作成方法について。また、変数間の関係を記述する方法やその読み取り方についても解説するので身に付けてほしい。

さらに「非統計（質的）データ」を読むときの基本事項の学習を踏まえ、社会調査におけるデータ活用方法についての理解を促す。なお、Excel および無料の統計ソフト R 等を用いた実習を通じてデータ分析の実践的理解を深める。

【到達目標】

統計データの形式を整えたり、変数を操作化することができる。
統計データの情報を要約することができる。
統計ソフトを用いて変数間の相関や連関を調べることができる。
統計ソフトを用いて推定や仮説検定を行うことができる。
統計データをグラフや表によって可視化することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻公共マネジメントコースにおいては「DP2」「DP4」に関連している。ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻政策研究コースにおいては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、特に「DP1」は特に強く関連している。ディプロマポリシーのうち、サステイナビリティ学専攻においては「DP2」「DP4」に関連している。

【授業の進め方と方法】

授業は、対面での講義と演習をとりまぜて進める。PC 操作の可能な学習室を利用予定。

「社会統計」と「社会調査」の仕組みを根本的に理解するための講義を行う。また Excel や統計ソフト R の技術的な習得が一つの重要な目標であるため、PC 操作の実習は必須である。発表や課題提出は社会調査の結果報告に欠かせないため、Word や PowerPoint 等の扱い方を含めた、基本的なレポート（論文）の書き方についても指導する。

クラスの親睦を深め、具体的なテーマに接するため、授業内発表の機会も設ける予定である。また、リアクションペーパーではなく、都度の質問や対話やメールでの補足を受け付ける予定。

成績は、受講人数にもよるが、授業内での小課題と発表、レポートによる予定である。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期後半

回	テーマ	内容
第 1 回	1 統計データの基本事項 2 統計データの基本概念	・統計データの目的と種類 ・社会（学）理論とデータとの関係 ・測定と変数の種類 ・記述統計と推測統計 ・データの解釈
第 2 回	3 統計資料の整理 4 度数分布	・統計資料の整理 ・データファイルの作成 ・2 次資料と公開データ・単純集計と度数分布表 ・図の種類 ・相対度数による表示の機能と問題
第 3 回	5 分布と統計量 1 6 分布と統計量 2	・平均 ・分散 ・標準偏差 ・中央値 ・分位数 ・標準化 ・（標準）正規分布
第 4 回	7 検定の基礎知識 8 クロス表 1	・母集団と標本データ ・仮説 ・独立変数と従属変数 ・因果関係 ・クロス表の作成と読み取りの一般原則 ・DK と NA ・情報の圧縮
第 5 回	9 クロス表 2 10 相関 1	・関連性の読み取り：オッズ比とリスク比 ・第 3 変数とエラロレーション ・散布図 ・相関係数

第 6 回	11 相関 2 12 復習と補足	・相関関係と因果関係 ・擬似相関 ・結果の解釈と提示の方法 ・作図のオプション
第 7 回	13 非統計データについて 14 総括	・「量的データ」：変換方法と利用方法 ・テキストデータの扱い方 ・社会調査の基本事項に関するまとめと成績評価に関わる作業

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

杉野勇『入門・社会統計学：2 ステップで基礎から [R で] 学ぶ』法律文化社、2017 年。（データ資料を利用します。web 上にも公開部分があり、授業プリント・資料も配布する予定。初回授業では未購入で構いません。）

【参考書】

G.W. ボーンシュテット / D. ノーキ著、海野道郎・中村隆監訳、1992、『社会統計学—社会調査のためのデータ分析入門』ハーベスト社。

盛山和夫、2004、『社会調査法入門』有斐閣。

『入門・社会統計学』サポートウェブ (<http://sgn.sakura.ne.jp/text/textbook.html>)

R Tips (<http://cse.naro.affrc.go.jp/takezawa/r-tips/r.html>)

他（授業中に適宜紹介）

【成績評価の方法と基準】

課題提出によって評価。
課題は、複数回ある小課題（合計 40%）、期末の発表（30%）および期末レポート課題（30%）を指す。

また、授業期間中の授業貢献度（クラス全体の理解を助ける質問や意欲的な取り組みなど）を 10-20%程度取り入れる場合がある。

※出席が 2/3 に満たない場合は無条件に「不可」

【学生の意見等からの気づき】

学生の反応をみながら講義と実習のバランスを工夫する。双方向の授業を心がけたい。

【学生が準備すべき機器他】

実習演習・資料配布・課題提出等のためにメールや授業システム等を利用予定。必ず準備すべきものは特になが、自習のためにはパソコン等の演算機器が必要になる。自宅に用意できない場合は登校して学習する必要が出てくる。

【その他の重要事項】

社会調査士資格認定のためのカリキュラム「C」科目に相当する。

オフィスアワーについては、基本的に授業中に質問時間を設ける。

その他の機会については初回授業でお知らせする。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 社会意識、比較社会学

<研究テーマ> 「幸福」の社会学

<主要研究業績>

『「幸福の基準」及びその設定における『近代化』の影響』『SSJDA Research Paper Series — World Values Survey (世界価値観調査) を用いた実証研究：労働・幸福・リスク』SSJDA - 40, 東京大学社会科学研究所, pp.96-117, 2009 年。

【Outline and objectives】

Learning how to use statistical data in social science research: Beginner level.

Understand basic concepts and methods for reading, writing (drawing) statistical data. Specifically, how to organize statistical data, how to read basic statistics, and how to understand and create tables and graphs. Then, also we learn how to know and describe (and read) relationships between variables. Furthermore, based on the learning about basic non-statistical (qualitative) data, encourage understanding of "data" analysis in social survey research.

*We use PC; Excel and statistical package "R".

社会調査法 4

見田 朱子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

既存の、あるいはオリジナルに収集されたデータセットについて、基礎的な統計処理を経てレポートを作成するまでのスキルを身につけることを目的とする。

主な内容は、既存の統計調査の検討、学術的調査と実務的調査の違い、統計の理論的背景、R の使用方法などである。あわせて、数値データの解釈に必要なとなる現代社会の諸相についての知識も得る。

【到達目標】

本講義の到達目標は以下の4点である。

- ①定量的社会調査の基礎知識を得る
- ②定量的社会調査をともなう学術論文を理解できるようになる
- ③自身の論文作成において定量的社会調査を活用できるようになる
- ④行政、ビジネス等の実務において定量的社会調査を活用できるようになる

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻公共マネジメントコースにおいては「DP2」「DP4」に関連している。ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻政策研究コースにおいては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、特に「DP1」は特に強く関連している。ディプロマポリシーのうち、サステイナビリティ学専攻においては「DP2」「DP4」に関連している。

【授業の進め方と方法】

授業は、対面での講義と演習をとりまぜて進める。PC 操作の可能な学習室を利用予定。

2 コマ連続のクラスだが、1 コマずつ別の単元で区切る場合と、連続して1つの単元に取り組む場合、あるいは前半と後半を講義と実習に振り分けることなどがある。講義もだが、特に実習は遅刻や欠席によって進行についていけなくなるので留意されたい。

リアクションペーパーを兼ねた小課題、期末にはレポートと発表を兼ねた課題を出す予定である。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期前半

回	テーマ	内容
第1回	序論	社会調査、統計学の歴史
第2回	確率論の基礎	フィッシャー以後の統計学の基礎となる確率論
第3回	確率分布とは	前講を受けて、確率分布の考え方について学ぶ
第4回	正規分布の意味と性質	標本誤差の定理を素材に正規分布について学ぶ
第5回	統計的検定の基礎	帰無仮説の考え方
第6回	カイ二乗検定	独立性の検定の考え方
第7回	t 検定	二群間の平均値の差の検定方法について
第8回	相関関係の分析法1	回帰分析について
第9回	相関関係の分析法2	重回帰分析について
第10回	R の使用方法 1 - 1	データセットの取扱法とデータクリーニング
第11回	R の使用方法 1 - 2	単純集計表の作成とその解説
第12回	R の使用方法 2 - 1	クロス集計表の作成とその解説
第13回	R の使用方法 2 - 2	基礎的な因子分析とその解説
第14回	報告書の作成	社会調査データを文章化するテクニック（参加者への個別レポート作成指導）

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

実習は Windows パソコンで無料の統計ソフト R を使用して行う。このため、特別なスキルは必要ないが、エクセルやワードをごく一般的なレベルで使える程度のスキルが必要である。できれば R を予めダウンロードしておくこと。またパソコンスキルに自信のない受講者は事前に Windows パソコンに十分に慣れておく必要がある。本授業の準備学習・復習時間は各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

教科書は特に使用しないが、下記の書籍を適宜参照すると理解の助けとなる。この書籍の公開データなどを利用してもらう予定である。

また、R の操作方法については Web 上に公開されているページなどを紹介する。

杉野勇『入門・社会統計学: 2 ステップで基礎から [R で] 学ぶ』法律文化社、2017 年。

【参考書】

石川淳志他編 1998, 『見えないものを見る力——社会調査という認識』八千代出版

G.W. ボーンシュエット / D. ノーキ著, 海野道郎・中村隆監訳, 1992, 『社会統計学—社会調査のためのデータ分析入門』ハーベスト社。

【成績評価の方法と基準】

実習的な小課題 30 %
授業中の理解・貢献状況 10 %
期末レポート・発表 60 %
で評価する。

【学生の意見等からの気づき】

・実習の進行について、パソコンに慣れていないと「早すぎる」と感じられるかもしれない。不安を感じる場合は、受講までにパソコンにできるだけ慣れておくことが望ましい。エクセルが一応使えるというレベルを念頭においている。

・本講義参加者は、学生である以外に仕事を持っていることが多い。授業の進行速度や課題提出、遅刻や早退などについては初回授業で相談のうえクラス運営をする予定である。

・社会調査法 1～3（特に 3）は、必須ではないが既習であることが望ましい。例年、「3」より先に本講「4」を履修したいという相談がある。履修予定等さまざまな事情はあるだろうから、できる限り対応したいと思うが、理解度としてはやはり難しいところがあると感じている。「3」からは積み重ねの関連性が非常に高い科目なので、非常な努力の覚悟が必要になる。履修相談に来るのは構わない。

【学生が準備すべき機器他】

パソコン (Windows) および周辺機器。Mac や Linux でも履修可能だが、授業は Windows を前提として行う。iPad 等のタブレット端末は使用できない。Excel もしくはこれと同等に使用できる表計算ソフト。ただし Excel 以外のソフトを使用する場合、それに合わせた特別な指導や補助はできない。できれば R をインストールしておくこと。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 社会意識、比較社会学

<研究テーマ> 「幸福」の社会学

<主要研究業績>

『「幸福の基準」及びその設定における「近代化」の影響』『SSJDA Research Paper Series — World Values Survey (世界価値観調査) を用いた実証研究 : 労働・幸福・リスク』SSJDA - 40, 東京大学社会科学研究所, pp.96-117, 2009 年。

【Outline and objectives】

This course introduces the skill of quantitative research data.

At the end of the course, participants are expected to analyze statistical data using R.

SOC500P1 - 058

社会調査法5

小磯 明

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

質的データの収集と分析の具体的方法について学ぶ。とくにフィールドワークに必要な技法や倫理的な問題についての理解を深める。

【到達目標】

フィールドワークにおける質的調査の実施に向け、基本的な調査計画が設計できることを目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻公共マネジメントコースにおいては「DP2」「DP4」に関連している。ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻政策研究コースにおいては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、特に「DP1」は特に強く関連している。ディプロマポリシーのうち、サステイナビリティ学専攻においては「DP2」「DP4」に関連している。

【授業の進め方と方法】

まず、質的調査の考え方や設計の仕方について解説したうえで、フィールドワークにおける質的データの収集と分析に必要な技法について解説する。つぎに、フィールドワークの基本的な収集・分析手法である、聞き取り調査、参与観察、ドキュメント分析の各項目について、事例を使って具体的な解説を行い、質的データの収集・分析方法について理解を深める。さらに、分析結果の提示（論文・報告書の執筆）を念頭におき、被調査者との関係など倫理的な問題についての理解を促す。授業計画は概ね以下を予定しているが、受講生の人数や問題関心によって若干変更する可能性がある。授業は原則対面で実施する。授業への積極的参加を促すためリアクションペーパーを提出してもらおう。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】**秋学期前半**

回	テーマ	内容
1	質的調査の考え方	・質的調査とは何か ・収集／分析の目的と方法 ・量的調査との関係
2	質的調査の設計	・テーマ／題材／問いの設定 ・仮説の設定 ・先行研究との関係
3	フィールドワーク①	・フィールドワークとは何か ・データ収集方法の種類と組み合わせ
4	フィールドワーク②	・フィールドワークの実際
5	フィールドワーク③	・陥りやすい罠 ・脱却するための方法
6	聞き取り調査①	・聞き取り調査の手順 ・インタビューの種類と方法 ・テープ起こし
7	聞き取り調査②	・ライフヒストリー分析 ・構造分析
8	聞き取り調査③	・インタビューの実際
9	参与観察①	・観察の種類 ・参与観察の内容 ・フィールドノーツの作成
10	参与観察②	・参与観察の事例
11	ドキュメント分析①	・ドキュメント分析の内容 ・分析対象の種類
12	ドキュメント分析②	・ドキュメント分析の事例
13	調査結果のまとめ方	・論文／報告書の執筆
14	成果の公表とその問題	・調査倫理規定 ・プライバシー保護 ・被調査者保護をめぐる諸問題

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業はパワーポイントを使用して行う予定。教材は印刷して配布するので、復讐に役立てて欲しい。

【テキスト（教科書）】

講義の内容が多岐にわたるため、特に指定しない。

【参考書】

都度、講義の引用・参考文献を紹介する。

【成績評価の方法と基準】

平常点（出席・討議）50％、課題レポート50％。

【学生の意見等からの気づき】

受講生の研究テーマを踏まえた講義にしたい。

【学生が準備すべき機器他】

特になし。

【専門領域】

社会調査法、福祉社会学、社会政策学。

【研究テーマ】

コミュニティにおける医療と福祉形成の現代的解明、地域の産業政策の形成。

【主要研究業績】

単著『地域と高齢者の医療福祉』2009年、御茶の水書房。

単著『公害病高齢者とコンビナート：倉敷市水島の環境再生』2020年、御茶の水書房。

論文「小規模・高齢化集落の高齢者と地域福祉－長野県泰阜村の高齢者生活調査から」『福祉社会学研究』第8号、2011年。

【Outline and objectives】

Learn about specific methods of collecting and analyzing qualitative data

社会調査法6

中筋 直哉

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

社会学および政策科学の研究の実際場面で社会調査を活用するには、研究の目的および研究に適用する社会理論と有機的に結びついたかたちで調査をデザインし、データを分析することが欠かせない。この科目では、社会学の調査研究の古典を複数講読することを通して、それら各々のユニークな問題関心とそこから導き出された独特の調査設計・データ分析法を学び、さらに履修者各自の問題関心に応じた調査デザイン・データ分析法を構想し、相互討論を通して洗練することを試みる。

【到達目標】

受講生各自の問題関心に基づく調査計画、およびその調査に基づく修士論文の執筆計画を立案できること

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻公共マネジメントコースにおいては「DP2」「DP4」に関連している。ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻政策研究コースにおいては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、特に「DP3」は特に強く関連している。ディプロマポリシーのうち、サステイナビリティ学専攻においては「DP2」「DP4」に関連している。

【授業の進め方と方法】

教室で対面で実施（予定）。講義と履修者による発表および討論。各回2時間の連続講義で、授業での発表についてはその都度授業内で、試験答案については事後に全員に対してフィードバックする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

春学期前半

回	テーマ	内容
1	総論 1	社会学・政策科学と社会調査
2	総論 2	社会調査の諸類型
3	総論 3	社会調査の倫理と真正性
4	フィールドワークの光と影 1	B. マリノフスキ『西太平洋の遠洋航海者』をめぐって 1
5	フィールドワークの光と影 2	同上 2
6	個人の歴史と社会の歴史を重ね合わせ 1	A. クラインマン『八つの人生の物語』をめぐって 1
7	個人の歴史と社会の歴史を重ね合わせ 2	同上 2
8	テキストデータの分解・再構築 1	小林直毅編『「水俣」の言説と表象』をめぐって 1
9	テキストデータの分解・再構築 2	同上 2
10	社会関係を計量する 1	C. フィッシャー『友人のあいだで暮らす』をめぐって 1
11	社会関係を計量する 2	同上 2
12	政策科学に貢献する社会調査 1	辻中豊ほか『現代日本の自治会・町内会』をめぐって 1
13	政策科学に貢献する社会調査 2	同上 2
14	総括的討論	各自の問題関心に基づく調査デザインの発表と相互討論

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

各自テキスト以外の関連文献を収集し、比較検討すること。本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

上記授業計画の「内容」に記載

【参考書】

毎回ごとに授業中に指示

【成績評価の方法と基準】

授業への積極的参加 30%、報告の内容評価 30%、筆記試験 40%。よく考えられた報告を行うことと、筆記試験において修士論文に相応しい調査計画を立案できていることがAの条件。

【学生の意見等からの気づき】

最新の研究を紹介する。

【学生が準備すべき機器他】

学習支援システムへのアクセスが必須。

【担当教員の専門分野等】

（専門領域）地域社会学
（研究テーマ）地域社会の構造分析

〈主要研究業績〉『よくわかる都市社会学』（2013、ミネルヴァ書房）、『群衆の居場所』（2005、新曜社）

【Outline and objectives】

This lecture aims to study various relations sociological theory and method by reading and discussing classics of sociology.

SOC500P1 - 061

社会調査法7

見田 朱子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

昨今、統計パッケージの普及によって、複雑な統計解析も容易に行えるようになってきた。しかしその反面、それぞれの統計手法の基礎や特徴を理解しないまま分析がされることも少なくない。

そこで本講義では、統計学の基礎を確認しつつ、まずは分散分析と線形回帰モデルの学習を通じて、交互作用項を中心とした多変量解析の基本的な考え方を学ぶ。さらに線形回帰モデルとの差異に注目しながら、ロジスティック回帰分析について学習する。また、探索的分析手法として主成分分析と因子分析についても習得する。これらの分析手法は、統計パッケージ R による実習を通じて、実践的に修得することが目指される。

その際には、統計パッケージの単なる使用方法の習得ではなく、各手法の考え方やその結果の意味を理解することに重点を置く。

【到達目標】

本講義の目標は、線形回帰モデルなどの学習を通じて、多変量解析の基本的な考え方を修得することである。

座学と実習を通じて各分析手法の考え方や仮定について理解し、自ら説明できるようになることが目標である。それと同時に、統計パッケージ R を用いた実習によって、実際に分析するための技術の修得も目指す。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻公共マネジメントコースにおいては「DP2」「DP4」に関連している。ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻政策研究コースにおいては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、特に「DP3」は特に強く関連している。ディプロマポリシーのうち、サステイナビリティ学専攻においては「DP2」「DP4」に関連している。

【授業の進め方と方法】

本講では、対面の講義と実習を通じて多変量解析の考え方や仮定について学習する。各回の授業は講義とともに適宜統計パッケージの操作実習をほさむことで理解を深める形でおこなう予定である。

表計算ソフト Excel のほか、統計ソフトとしては無料の R を用いる。R の基本的な操作方法は社会調査法3、4などで学んでいることが望ましいが、必須ではない。

履修人数にもよるが、リアクションペーパーはなく、都度の質問や対話やメールによって補足をしていきたい。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期前半

回	テーマ	内容
1	多変量解析に向けた準備1	社会学と多変量解析、基本統計量の算出、標準化、共分散と相関係数
2	多変量解析に向けた準備2	統計的推測と仮説検定、検定の全体図
3	分散分析	基本的な考え方、級内平均と級間平均、一元配置、多元配置、実習
4	線形回帰分析と最小二乗法（OLS）	線形回帰分析における仮定
5	基本統計量と OLS 推定量の関係	分散分析表の読み方や決定係数について学習
6	重回帰分析	統制・偏相関、多重共線性、修正済み決定係数、結果の t 検定・F 検定
7	実習と補足：分析の準備～結果の解釈	ダミー変数とその作り方、直接効果と間接効果、交互作用
8	ロジスティック回帰分析の基礎	オッズとロジット、回帰係数の解釈、回帰係数とモデルの検定
9	分析方法の整理	仮説検定のための分析と、探索的分析
10	主成分分析と因子分析	考え方の基礎、主成分、潜在因子と観測因子、因子負荷量、寄与率
11	主成分分析の実習	主成分分析表の図示と解釈
12	因子分析の実習	因子分析表の解釈
13	データの選び方、分析方法の選択方法、補足	「データ」について、判別分析とクラスタ分析の紹介
14	まとめ	まとめと成績評価にかかわる作業

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

杉野勇『入門・社会統計学：2 ステップで基礎から [R で] 学ぶ』法律文化社、2017 年。

（データ資料を利用します。web 上にも公開部分があり、授業プリント・資料も配布するので、初回授業では未購入で構いません。）

【参考書】

G.W. ボーンシュテット／D. ノーキ著、海野道郎・中村隆監訳、1992。『社会統計学—社会調査のためのデータ分析入門』ハーベスト社。

盛山和夫、2004。『社会調査法入門』有斐閣。

『入門・社会統計学』サポートウェブ（<http://sgn.sakura.ne.jp/text/textbook.html>）

R Tips（<http://cse.naro.affrc.go.jp/takezawa/r-tips/r.html>）

他、授業内で適宜紹介する。

【成績評価の方法と基準】

小課題提出（40%）と期末試験（60%）によって評価。

期末試験はレポートとする。人数によっては、発表も取り入れる。

授業時間内外でのクラスへの貢献度（クラス全体の理解を促す質問、意欲的な取り組みなど）も考慮する。

※出席が 2/3 に満たない場合は自動的に「不可」となる。

【学生の意見等からの気づき】

・学生の反応をみながら講義と実習のバランスを工夫する。双方向の授業を心がけたい。

・本講義参加者は、学生である以外に仕事を持っていることが多い。授業の進行速度や課題提出、遅刻や早退などについては初回授業で相談のうえクラス運営をする予定である。

【学生が準備すべき機器他】

実習演習・資料配布・課題提出等のためにメールや授業システム等を利用予定。必ず準備すべきものは特にないが、自習のためにはパソコンおよび周辺機器、Excel と R のインストールが必須となる。自宅にこれらを準備できない場合は次週のために登校するなどの必要がある。

R のインストールは授業での案内後でもよい。

【その他の重要事項】

専門社会調査士資格認定のためのカリキュラム「I」科目に相当する。シラバス内容にある通り、多変量解析とその応用を扱う。推測統計の基礎については理解していること、少なくとも履修済みのものとして授業を進めるため、未履修あるいは同時並行して学習することは望ましくない。ただし、自信がない程度であれば本講を是非履修して、分析技術を実用的なものとしてほしい。

オフィスアワーについては、基本的に授業中に質問時間を設ける。

その他の機会については初回授業でお知らせします。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 社会意識、比較社会学

<研究テーマ> 「幸福」の社会学

<主要研究業績>

『「幸福の基準」及びその設定における「近代化」の影響』『SSJDA Research Paper Series — World Values Survey（世界価値観調査）を用いた実証研究：労働・幸福・リスク』SSJDA - 40, 東京大学社会科学研究所, pp.96-117, 2009 年。

【Outline and objectives】

Advanced class: Social statistical analysis (multivariate data analysis)

We learn:

Interaction term through variance analysis and linear regression model, then logistic regression analysis, at last, exploratory analysis method – principal component analysis and factor analysis.

It is a practical class using a statistical package soft "R".

社会調査法 8

田嶋 淳子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

質的調査法の基本的理解と、その実践的力を身につけることを目的とする。まず、インタビューや参与観察などのフィールドワークや、ドキュメント分析などの質的調査法について、その発展の歴史を踏まえながら、現在の到達点について理解する。その上で、具体的に質的調査を行う上で重要な論点となりうることについて、実践的な観点から考察し、議論する。さらに、受講者自身の持つデータや、教員が仮に提供するデータをもとにワークショップを行い、具体的な手法を選び身につけるための手がかりを得よう試みる。

【到達目標】

さまざまな質的調査法に関する基本的理解を踏まえたうえで、新聞・雑誌記事、資料文書、映像、放送、音楽などの質的データの分析法（内容分析等）を理解するとともに、その一部についての実践的な能力を習得すること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻公共マネジメントコースにおいては「DP2」「DP4」に関連している。ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻政策研究コースにおいては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、特に「DP3」は特に強く関連している。ディプロマポリシーのうち、サステイナビリティ学専攻においては「DP2」「DP4」に関連している。

【授業の進め方と方法】

本講義は6月5日より講義を開始します。詳細は学習支援システムのお知らせを参照してください。基本的にオンラインでの授業を予定しています。質的調査法についての歴史と具体的な手法に関する現在の到達点について解説した上で、実際の質的調査において直面する課題や問題について解説します。その上で、受講生のデータあるいは各自の関心がある領域の質的資料を任を持ち寄り、具体的に分析するプロセスをワークショップ形式で経験します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

春学期後半

回	テーマ	内容
第1回	質的調査とは何か	量的調査との違い／調査倫理の問題
第2回	質的調査法の歴史と到達点1	インタビュー／参与観察／ドキュメント分析／観察
第3回	質的調査法の歴史と到達点2	エスノグラフィー／ライフヒストリー／GTA／会話分析
第4回	実践的課題1（資料を集める）	質問とは何か／ラポールをめぐる論争／調査者の立ち位置
第5回	実践的課題2（資料を分析する）	記録をつくる／テーマをたてる／データの特性を整理する
第6回	実践的課題3（資料を記述する）	書くとはどういうことか／調査倫理ふたたび
第7回	ワークショップ1	データ・質的資料の持ち寄り
第8回	ワークショップ2	最初の感想とそこから見えるもの
第9回	ワークショップ3	どう記録をつくるのか
第10回	ワークショップ4	テーマをたてる
第11回	ワークショップ5	データの特性を理解する
第12回	ワークショップ6	改めてテーマをたてる
第13回	ワークショップ7	ふたたびデータの特性を考える
第14回	総合討論	質的調査法の意義

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

必要に応じて、資料を授業支援システムにアップします。

【参考書】

- 岸政彦・石岡丈昇・丸山里美 2016『質的社会調査の方法』有斐閣
- 佐藤郁哉,2008『質的データ分析法—理論・方法・実践』新曜社。

【成績評価の方法と基準】

討議への参加（40%）、演習課題への取り組み（60%）

【学生の意見等からの気づき】

非該当

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>国際社会学

<研究テーマ>中国系移住者コミュニティの比較社会学的研究、移住第2世代問題

<主要研究業績> 2010『国際移住の社会学—東アジアのグローバル化を考える』明石書店、2019『イタリアにおける中国系ニューカマーズの定着とコミュニティ形成過程』『華僑華人研究』第16号、20-39ページ。2021『イタリアにおける中国系移住者家族の変遷』『移民政策研究』第13号掲載予定。

【Outline and objectives】

The aim of this course is to help students acquire the necessary skills and knowledge needed to achieve a performance in their qualitative survey.

POL500P1 - 063

政策分析評価技法

阿部 一知

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

- ①公的主体が実施する経済政策の効果について、経済学的な分析方法の枠組と手順を理解
- ②日本あるいは海外の経済政策のいくつかの例を取り上げ、目的・効果の分析方法と結果を議論
- ③政策・プロジェクト評価手法の概略について理解

【到達目標】

公共経済学に基づいた政策評価の基本的枠組を入門的に理解する。代表的手法として費用便益分析の基本的考え方を学ぶ。政策評価の手順に慣れる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻公共マネジメントコースにおいては「DP1」「DP2」に関連している。ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻政策研究コースにおいては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、特に「DP1」は特に強く関連している。ディプロマポリシーのうち、サステイナビリティ学専攻においては「DP2」「DP4」に関連している。

【授業の進め方と方法】

全体7回程度の講義において、最初の4回程度は、公共的な政策の分析の枠組と手順について教科書にそって紹介する。基本となるのは、厚生経済学の応用としての公共経済学に基づいた理論である。また、その応用分野として、費用便益分析などのプロジェクト評価や、政策の評価手順などについても触れる。これらは講義と質疑を中心とする。

残り3回程度は、実際の政策を取り上げて、ディスカッションを行いながら事例研究する。具体事例は、学生の希望を取りながら選択する。原則として、1週間前に材料を示すので、それに基づいた準備があることを前提に講義する。講義は原則対面で行う。毎回の講義で、学生の理解の確認のため課題を提示し、ディスカッションすることで理解を深める。また、フォードバックとして、メールで直接学生と質問応答や追加説明を行う。

講義は原則対面で行う。毎回の講義で、学生の理解の確認のため課題を提示し、ディスカッションすることで理解を深める。また、フィードバックとして、メールで直接学生と質問応答や追加説明を行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

春学期後半

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション、政策分析の基本的な考え方	科目の全般的な内容、講義の進め方、教科書の説明。
第2回	分析の手順	ストーリー教科書第1章
第3回	政策分析の手法（外部性モデル、選好の定義など）	厚生経済学の基礎の説明。政策決定モデルの紹介。
第4回	政策分析の手法（外部性モデル、選好の定義など）	ストーリー教科書第2～3章、第6章。厚生経済学の基礎の説明（続き）
第5回	政策分析の手法（費用便益分析入門など）	政策決定モデルの紹介。ストーリー教科書第2～3章、第6章。費用便益分析一般の説明。
第6回	政策分析の手法（費用便益分析入門など）	ストーリー教科書8～10章。費用便益分析一般の説明（続き）
第7回	政策分析の手順、公共選択、公共主体が政策を実施する根拠	ストーリー教科書8～10章。公共選択理論の説明。ストーリー教科書11～13章。
第8回	事例研究の準備	事例研究のテーマ希望聴取など準備。
第9回	政策分析の手順など確認。	政策分析の手順（問題確定、選択肢提示、効果分析、評価）
第10回	事例研究(1)	事例研究：具体的な政策（教員が提示）を取り上げて研究
第11回	事例研究(2-1)	事例研究：具体的な政策を取り上げて研究
第12回	事例研究(2-2)	事例研究：具体的な政策を取り上げて研究
第13回	まとめ、補足的なディスカッション	全体のまとめ。
第14回	まとめ、補足的なディスカッション 筆記試験（あるいはレポート）	全体のまとめ。 筆記試験（レポートとする場合は、レポートの作成についての説明）

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

前の講義で、事前に読んでおく資料・教科書該当ページを指示する。また、参考資料をウェブで示す。本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

ストーリー、ゼックハウザー「政策分析入門」 勁草書房

【参考書】

指定教科書よりも網羅的・体系的でないが、より新しい教科書として、バーダック「政策立案の技法」東洋経済新報社、を勧める（講義でも一部使用する）。その他の資料は、授業中に適宜指示する。配布できる資料は、ウェブで公開する。

【成績評価の方法と基準】

授業中の参加（20%）と期末試験（80%、レポートにする場合もある）

【学生の意見等からの気づき】

事例研究をより幅広く行うため、課題の学生からの希望聴取を、第2回目から口頭でも行うこととした。

【担当教員の専門分野】

経済政策（貿易投資の経済効果、マクロ経済対策など）、応用経済学（応用計量経済モデルを含む）。研究者データベース参照

<https://ra-data.dendai.ac.jp/tduhp/KgApp?kyoinId=ymkkgkysggy>

【Outline and objectives】

1. To understand the framework and procedures to analyze the economic effects of public policies,
2. To discuss several examples of economic policies in Japan and other countries, on their objectives and scope,
3. To understand policy/project evaluation methods.

市民参加の理論と実践

小島 聡、杉崎 和久、谷本 有美子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

市民参加は、政治学や行政学、さらに公共政策学の永遠のテーマといえるが、現代では、他の学問分野や個別の政策領域においても重要なテーマになっている。この授業では、市民参加の理論と動向から現代の政策過程とガバナンスについて俯瞰した上で、都市計学分野における市民参加に焦点を合わせて実践的な検討を行う。この授業は、参加学生が、市民参加を通して、歴史・理論・実践動向を学びながら、制度・手続、社会技術の手法とその活用、参加のガバナンス・マネジメントなどについて、学際的かつ政策領域横断的な視野を身につけることが目的である。

【到達目標】

この授業に参加することによる学生の到達目標は、以下のとおりである。

- ・市民参加の歴史・理論・実践に関する基礎知識と教養を習得する
- ・自治体政策と市民参加に関する基礎知識と教養を習得する。
- ・都市計学分野における市民参加の動向について理解する。
- ・市民参加の手法選択、市民参加の制度・手続の設計と運用、参加のガバナンス・マネジメントに関する政策思考力を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻公共マネジメントコースにおいては「DP3」「DP4」に関連している。ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻政策研究コースにおいては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、特に「DP3」は特に強く関連している。ディプロマポリシーのうち、サステイナビリティ学専攻においては「DP1」「DP4」に関連している。

【授業の進め方と方法】

講義の前半は、市民参加総論として、デモクラシーと市民参加の歴史や、理論と実践の動向、自治体政策と市民参加に関する概説を扱う。講義の後半は市民参加各論として、都市計学分野における市民参加について、運動から参加への制度化、市民だけではなく企業なども含む民間主体による都市空間の管理・運営について扱う。また数名のゲストスピーカーを招き、実務上の経験知などについて講義と討論を行う。討論は質疑応答にとどまらず、市民参加に関する研究会のスタイルで行う。最終回は、総括的な講義を行い、今後を展望する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期後半

回	テーマ	内容
1	市民参加総論（1）	マスメディアの形成史と市民参加、政策過程と市民参加の関係、熟議デモクラシーと現代の参加手法について検討する。
2	市民参加総論（2）	日本の現代史における市民参加の軌跡、自治体政策をめぐる市民参加の動向と論点について検討する。
3	住民投票とローカルデモクラシー	近年の事例を題材にしながら、直接民主制と間接民主制との関係性や公共政策の争点化等の観点で住民投票を検討する。
4	都市計学分野における参加の展開	法定都市計画への対抗概念としてのまちづくり運動から都市計画における参加の制度化の過程を検討する。
5	都市計学分野における参加事例	都市計学分野における市民参加の事例についてゲストから話題提供を踏まえて検討する。
6	市民参加の実効性を高めるための試み	市民参加の課題の持つ課題とその解決することを目的とした取組についてゲスト講師からの話題提供を踏まえて検討する。
7	市民参加の課題と展望	補足的な講義とともに、市民参加の課題と展望について討論し、授業全体を統括する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

この授業に参加する学生は、以下の時間外学習を行う。

- ・事前に配布する資料を読む。
- ・事前に提示する事項について概略を調べる。
- ・授業内で提示するテーマについてレポートを執筆する。

【テキスト（教科書）】

特に用いない。

【参考書】

①篠原一編『討議デモクラシーの挑戦 ミニ・パブリックスが拓く新しい政治』（岩波書店、2012）

②米野史健ほか編『住民主体の都市計画 まちづくりへの役立て方』（学芸出版社、2009年）。

上記以外の参考文献については、授業内で紹介する。

【成績評価の方法と基準】

平常点（参加姿勢）（80%）、最終レポート（20%）の総合評価とする。参加姿勢については、講義に対する履修態度、毎回行う質疑応答、討論への積極性等を重視する。

【学生の意見等からの気づき】

・現代の市民参加はきわめて幅広い理論と実践領域にわたり、一人の教員がカバーしきれないのが実状です。こうしたことから、学際的なアプローチと専門家をゲストスピーカーとしてお招きすることで実践知を涵養する授業構成の有効性を実感しています。

【学生が準備すべき機器他】

必要に応じて、パソコンからプロジェクターに画像を投影する。

【担当教員の専門分野等】

小島 聡

〈専門領域〉行政学、地方自治論

〈研究テーマ〉地域の持続可能性と自治体政策

〈主要研究業績〉

『自治体経営改革』（共著）（ぎょうせい、2004年）

『分権時代の地方自治』（共著）、（三省堂、2007）

『フィールドから考える地域環境 持続可能な地域社会をめざして』（共編著）、（ミネルヴァ書房、2012）

杉崎和久

〈専門領域〉都市計画、市民参加手法

〈研究テーマ〉公共的意思決定における市民参加のあり方、まちづくりの現代史

〈主要研究業績〉

『市民参加と合意形成』（共著）（学芸出版社、2005年）

『住民主体の都市計画』（共著）（学芸出版社、2009年）

谷本有美子

〈専門領域〉行政学、地方自治、市民自治

〈研究テーマ〉中央政府における地方自治、国による自治体統制、人口減少時代の自治体政策と市民自治、大都市行政区の民主的統制

〈主要研究業績〉

『「地方自治の責任部局」の研究—その存続メカニズムと軌跡 [1947-2000]』（公人の友社、2019年）

『分権社会と協働』（共著）（ぎょうせい、2001年）

『分権改革の動態』（共著）（東京大学出版会、2008年）

『大都市行政区の「区民会議」と市民参加のアジェンダ—神奈川県内の指定都市を題材に』（2016）『横浜市立大学論叢 人文科学系列』第67巻第1号

【Outline and objectives】

The purpose of this lecture is to acquire interdisciplinary and interdisciplinary views on citizen participation by participating students.

COS500P1 - 065

数理モデル概論

松本 倫明

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本科目では、コンピュータシミュレーションを用いた現状分析と将来予測のためのモデル化の手法について研究することを目的とする。

【到達目標】

はじめに代表的なシミュレーション事例を概観し、シミュレーションがどのように自然科学あるいは社会科学に寄与しているかを理解する。前半は、限りある資源（有限な資源）のもとで人間社会や生態系の動向を、システムダイナミクスを用いて定量的にモデル化する。これを通して環境問題を考える上での基本的な概念を考察していく。後半は、地球温暖化の数理モデルの概要を学び、地球環境問題について総括的に考える。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻公共マネジメントコースにおいては「DP1」「DP2」に関連している。ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻政策研究コースにおいては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、特に「DP3」は特に強く関連している。ディプロマポリシーのうち、サステイナビリティ学専攻においては「DP1」「DP2」に関連している。

【授業の進め方と方法】

対面授業を行う。

本授業は、講義とコンピュータ実習を織り交ぜながら進める。コンピュータ実習によって、受講生は授業を深く理解することができる。また高度な数学的知識は必要とはしない。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】**秋学期後半**

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンスと環境モデル概論	本講義を受講するためのガイダンスを行う。環境モデルと環境シミュレーションを概観する。
第2回	システムダイナミクスによる環境モデル1	人口爆発と指数関数的成長の数理モデル。
第3回	システムダイナミクスによる環境モデル2	有限世界における成長の限界の数理モデルを用いた人口爆発モデル。
第4回	システムダイナミクスによる環境モデル3	有限世界における成長の限界とフィードバックによる系の応答を考慮した人口爆発モデル。生態系モデル・COVID-19への応用。
第5回	地球温暖化モデル1	地球温暖化の予測モデルとその結果の概要。
第6回	地球温暖化モデル2	地球温暖化の予測モデルと対策について考察。
第7回	総合討論	授業のまとめとして、総合討論を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

特に使用しない。資料を授業時に配布する。

【参考書】

開講時に紹介する。

【成績評価の方法と基準】

平常点ならびに討論への参加状況 60%、実習課題 40%とする。

【学生の意見等からの気づき】

なし。

【学生が準備すべき機器他】

授業では情報実習室を使用する。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 理論天文学

<研究テーマ> 星形成、太陽圏と宇宙天気

<主要研究業績>

① "An origin of arc structures deeply embedded in dense molecular cloud cores", Matsumoto, T., Onishi, T., Tokuda, K., & Inutsuka, S.-i. 2015, MNRAS, 449, L123

② "Star Formation in Turbulent Molecular Clouds with Colliding Flow", Matsumoto, T., Dobashi, K., & Shimoikura, T. 2015, ApJ, 801, 77

③ "Protostellar Collapse of Magneto-turbulent Cloud Cores: Shape During Collapse and Outflow Formation", Matsumoto, T., & Hanawa, T. 2011, ApJ, 728, 47

【Outline and objectives】

Students investigate several problems using computers via quantitative analyses.

地域コンサルティング論

佐谷 和江

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

- ①本講義では地域コンサルティングの具体的なケースについて、発意・背景、コンサルティングの過程、成果・課題を分析・評価して提示する。
- ②また、コンサルティングに関する手法の演習を行う。
- ③さらに、地域自治やローカルガバナンスという枠組みの中で、実現のための体制やシステムのあり方、その中で地域コンサルティングの位置づけなどについて、方向性を示す。

【到達目標】

- ①地域コンサルティングの理論や方法論を実践的に学び、それを踏まえて、他事例について説明することができる。
- ②基礎的な地域コンサルティング能力を習得することができる。加えて、コンサルティングという職種研究を通じてキャリアデザインの一助とすることができる。
- ③地域コンサルティングの位置づけやシステムのあり方について、討論を重ねる。その結果、ローカルガバナンスについての自説を説明することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻公共マネジメントコースにおいては「DP3」「DP4」に関連している。ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻政策研究コースにおいては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、特に「DP3」は特に強く関連している。ディプロマポリシーのうち、サステイナビリティ学専攻においては「DP1」「DP4」に関連している。

【授業の進め方と方法】

コンサルティングとは、専門性を活かして、企業や行政などに対して外部から客観的に現状を把握し、問題点を指摘し、対策案を提示する業務を行うことである。地域コンサルティングは、自治体や住民に対して行うことが多い。ローカルガバナンスの主体である住民、NPO、行政、企業とは異なり、意志決定に参画するものではないが、それらに与える影響は小さくない。

本講義ではケーススタディや手法のスタディ・演習を行う中で、地域コンサルティングに関する理論や方法論を実践的に学ぶ。

授業形式（対面）

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

春学期前半

回	テーマ	内容
1	講義概論	授業の概要や地域コンサルティングにおいて重要なキーワードを紹介する。手法としては「話し方」を学ぶ。
2	全市レベルの計画作成を支援するコンサルティング	練馬区や港区をケースに全市レベルの計画作成を支援するコンサルティングを学ぶ。手法としては「ファシリテーション」を学ぶ。
3	地域施設の運営組織形成を支援するコンサルティング	新宿区落合三世モデル事業をケースに地域施設の運営組織形成を支援するコンサルティングを学ぶ。手法としては「ファシリテーション・グラフィックス」を学ぶ。

4	地縁型・テーマ型コミュニティ組織のコンサルティング	横浜市まち普請事業や川崎市の区民会議等をケースに地縁型・テーマ型コミュニティ組織のコンサルティングを学ぶ。手法としては「ロールプレイング」を学ぶ。
5	地域活性化（コミュニティビジネス）のコンサルティング	墨田区玉の井地区をケースに地域活性化のためのコミュニティビジネスへのコンサルティングを学ぶ。手法としては「プロセス・デザイン」を学ぶ。
6	社会貢献する人材育成のコンサルティング	江戸川総合人生大学をケースに社会貢献する人材育成のコンサルティングを学ぶ。手法としては「ワークショップのプログラム作成」を学ぶ。
7	講義の総括とレポート発表	これまでの講義の総括を行う。また、各自レポートを発表し、ディスカッションする。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

各ケースのURLを下記に示すので、事前に概要を把握する。

○第2回：練馬区都市計画マスタープラン改定支援/12～15年度
<http://www.city.nerima.tokyo.jp/kusei/machi/masterplan/>
 港区まちづくりマスタープラン改定支援/15～16年度
<https://www.city.minato.tokyo.jp/sougoukeikaku/kankyo-machi/toshikekaku/kekaku/master-plan.html>

○第3回：新宿区落合三世モデル事業/06年度～08年度
<http://wp.3sedai.com/>

○第4回：横浜市まち普請事業 左近山地区/07年度
<https://www.city.yokohama.lg.jp/kurashi/machizukuri-kankyo/toshiseibi/suishin/machibushin/machibusin.html>

川崎市「区民会議運営」/10年度～現在
<http://www.city.kawasaki.jp/250/page/0000017573.html>

○第5回：墨田区玉の井地区/08～11年度
<https://teratama.tokyo/>
<http://ameblo.jp/tamanoicafe/>

○第6回：江戸川総合人生大学/04年度～現在
<http://www.sougou-jinsei-daigaku.net/>

本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

教科書は使用しない。講義時に資料を配付する。

【テキスト（教科書）】

教科書は使用しない。講義時に資料を配付する。

【参考書】

- ①都市のイメージ/ケヴィン・リンチ/1960、翻訳1968、新版2007/岩波書店
- ②アメリカ大都市の死と生/ジェイン・ジェイコブス/1961、翻訳2010/鹿島出版会
- ③人間の街：公共空間のデザイン/ヤン・ゲール/2014/鹿島出版会
- ④まちづくりキーワード事典/三船康道+まちづくりコラボレーション/2009/学芸出版
- ⑤稼ぐまちが地方を変える 誰も言わなかった10の鉄則/木下 斉/2015/NHK出版新書

【成績評価の方法と基準】

平常点30%：地域コンサルティングに関する理論や方法論を積極的に学んでいるか。

討論への参加40%：基礎的なコンサルティング能力の習得のための演習等に積極的に取り組んでいるか。

レポート・発表30%：地域コンサルティングの位置づけなどについて、具体的なケースを踏まえて方向性を検討し、発表してもらうが、その際、適切なケースを把握し、十分に考察を行っているか。

【学生の意見等からの気づき】

紹介する事例を更新するとともに、それぞれのケースにおいて、各主体の関わり方をわかりやすく説明する。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

都市計画、地域計画、コミュニティマネジメント

<研究テーマ>

自治体の都市政策、コミュニティのエンパワーメント、地区計画制度

<主要研究業績>

○60プロジェクトによむ日本の都市づくり/2011/朝倉書店

- まちづくりキーワード事典「市民まちづくり」／2009／学芸出版
- 逗子市まちづくり条例にみる四つの条例の意義／2005／季刊まちづくりNo. 5／学芸出版
- 市民参加と非営利市民組織～NPOの発展は市民参加をどのように促進しているのか～／2003／地域開発 Vol.471／（財）日本地域開発センター
- コミュニティをエンパワーメントするための制度設計の研究－新潟県岩船地域ニューにいがた里創プラン事業をケースとして－／2001／日本都市計画学会学術研究論文集／日本都市計画学会

【Outline and objectives】

- ① In this lecture, you will learn specific examples of regional consulting.
- ② We will also practice consulting methods.
- ③ In addition, we will discuss the structure of the system and the role of regional consulting within the framework of local autonomy and local governance.

SOS500P1 - 067

ファシリテーション演習

徳田 太郎

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

複雑化・多様化する社会における政策プロセスに必要なスキルとマインドの一つとして「ファシリテーション」を挙げることができる。ファシリテーションとは、参加型の場をつくることで、多様な人々による共創や協働を支援・促進する働きかけである。本科目においては、政策過程における参加や熟議の位置づけ、その中でのファシリテーションの意義、効果的なファシリテーションを行うための基礎的な知識や技術、およびファシリテーターとして行動するための心構えを、講義と演習を通じて理解・習得する。

【到達目標】

・参加者主体の合意形成や課題解決の方法論と、そのような場におけるファシリテーションの意義や役割を説明することができるようになる。
 ・政策過程における参加や協働の鍵となる「当事者としての主体性」や「相互作用による創造性」を育むための働きかけができるようになる。
 ・演習での体験を通じ、多様な人々の個性を活かし、ともに協力しあうチームを育んでいくためのリーダーシップを発揮できるようにする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻公共マネジメントコースにおいては「DP2」「DP3」に関連している。ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻政策研究コースにおいては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、特に「DP3」は特に強く関連している。ディプロマポリシーのうち、サステイナビリティ学専攻においては「DP1」「DP3」に関連している。

【授業の進め方と方法】

対面授業にて実施する。各回とも、講義と演習を織り交ぜながら進める。
 ・第1回：オリエンテーションとして、授業の内容と進め方を確認する。
 ・第2回：講義と質疑応答を中心に、政策過程と参加・熟議の関連を学習する。
 ・第3～4回：講義と質疑応答を中心に、ファシリテーションに関する基本的な考え方を学習する。
 ・第5回～第10回：話しあいにおけるファシリテーションの技術を、各回それぞれ異なる技術に焦点を当てつつ、演習と解説を中心に習得する。
 ・第11回～第13回：それまでに学んだスキルとところを活かして、実際に参加型の場を企画・運営し、相互にフィードバックを行う。
 ・第14回：まとめの講義を行う。
 ＊各回とも、各授業時間の最後の10分程度を「振り返りシート」の作成に充てる。振り返りシートについては、次の回にコメントの上で返却する。また演習におけるファシリテーターとしての（また参加者としての）言動については、その都度フィードバックを行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

秋学期後半

回	テーマ	内容
第1回 (1-前)	オリエンテーション	授業の内容と進め方を確認する（講義）
第2回 (1-後)	政策過程と参加・熟議	政策過程におけるファシリテーションの位置づけを確認する（講義）
第3回 (2-前)	ファシリテーションとは何か	ファシリテーション・ワークショップの全体像を学ぶ（講義・演習）
第4回 (2-後)	話しあいとは何か	話しあいにはモードがあることを学ぶ（講義・演習）
第5回 (3-前)	話しあいの場をつくる技術①空間のデザイン	物理的な「場」の影響を学ぶ（講義・演習）
第6回 (3-後)	話しあいの場をつくる技術②オリエンテーション	「方向づけ」の方法を学ぶ（講義・演習）
第7回 (4-前)	話しあいの場をつくる技術③チェックイン	「雰囲気づくり」を学ぶ（講義・演習）
第8回 (4-後)	話しあいの場をホールドする技術①発問	話しあいの「活性化」を学ぶ（講義・演習）
第9回 (5-前)	話しあいの場をホールドする技術②可視化	話しあいの「構造化」を学ぶ（講義・演習）
第10回 (5-後)	話しあいの場をホールドする技術③意見の吟味	意見の集約方法を学ぶ（講義・演習）
第11回 (6-前)	プログラムを組み立てる技術	参加型の場を企画する方法を学ぶ（講義・演習）
第12回 (6-後)	①	参加型の場（ミーティング）の運営を体験する（演習）
第13回 (7-前)	②	参加型の場（ワークショップ）の運営を体験する（演習）
第14回 (7-後)	まとめ	全体のまとめを行う（講義）

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

・第2回～第4回：予習として、テキストをよく読み、疑問点・質問事項を明確にする。復習として、テキストやノートを読み返し、学んだことを整理する。（各120分程度）
 ・第5回～第10回：予習として、各回の授業で指示するテーマにつき、テキストをもとに、「どのようなときに」「どのような働きかけを」「どのような点に留意して」行うと効果的かを説明できるよう準備する。復習として、学んだことをどのように実践・活用・応用できるかを考え、ノートにまとめる。（各120分程度）
 ・第11回～第13回：予習として、講義内容全体を振り返り、しっかりと準備をして演習に臨む。復習として、演習を通して学んだことや不十分なところを整理し理解する。（各120分程度）

【テキスト（教科書）】

徳田太郎・鈴木まり子『ソーシャル・ファシリテーション：「ともに社会をつくる関係」を育む技法』（北樹出版、2021年、1,600円＋税、978-4-7793-0652-5）。授業は、テキストを予習していることを前提に進める。

【参考書】

・中野民夫・森雅浩・鈴木まり子・富岡武・大枝奈美『ファシリテーション：実践から学ぶスキルとこころ』（岩波書店、2009年）
 ・堀公俊『ファシリテーション・ベーシック：組織のパワーを引き出す技法』（日本経済新聞出版社、2016年）

【成績評価の方法と基準】

到達目標に記した3点について、各回の振り返りシートの質と量（約50%）、発言や質問・演習など授業への参加度（約50%）から、総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

本年度授業担当者変更によりフィードバックできません。

【その他の重要事項】

演習を中心とした授業です。受講希望者は、必ず第1回授業に出席してください。やむを得ない事情で出席できない場合には、事前にメールにて担当教員に連絡の上、個別に対応策をご相談ください（宛先：thirdvalue@gmail.com 件名：法政大学大学院ファシリテーション演習）。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>
 政治理論（デモクラシー論）／ファシリテーション論
 <研究テーマ>
 熟議デモクラシーの理論と実践／その中でのファシリテーションの位置づけ
 <主要研究業績>
 ・「アイルランドの憲法改正における熟議と直接投票」『法學志林』118巻3-4号、2020-2021年
 ・「対話／熟議の場を生成するファシリテーション」『総合人間学』14号、2020年
 ・『はじめての地域づくり実践講座：全員集合！を生み出す6つのリテラシー』（分担執筆）北樹出版、2018年

【Outline and objectives】

Facilitation is one of the skills and mindsets necessary for the policy process in an increasingly complex and diverse society. It is an approach that supports and promotes co-creation and collaboration among diverse people by creating a participatory space. In this class, you will understand and acquire the position of participation and deliberation in the policy process, the significance of facilitation in this process, the basic knowledge and skills for effective facilitation, and the mindset for acting as a facilitator through lectures and exercises.

MAN500P1 - 224

CSR論

長谷川 直哉

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この授業は、「サステナビリティ経営と企業責任」と「企業家に学ぶ ESG 経営」の二つのテーマを隔年ごとに講義します。2021 年度は「企業家に学ぶ ESG 経営」を取り上げます。明治期～現代に至る日本企業の経営者が、企業と社会の関係をどのように捉えて経営を展開してきたのかを SDGs や ESG の視点から再評価し、現代企業に求められるサステナビリティ経営のあり方について検討します。

【到達目標】

SDG に関する基本的な知識を習得したうえで、現代企業のサステナビリティ経営や脱炭素経営の実態を正しく評価する能力を涵養します。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻「CSR 論」においては公共マネジメントコースの「DP3」に関連している。ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻政策研究コースにおいては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、特に「DP3」は特に強く関連している。ディプロマポリシーのうち、サステナビリティ学専攻「サステナブル経営論」においては「DP1」「DP4」に関連している。

【授業の進め方と方法】

以下のテーマを中心に、教員による講義と受講者による報告等をおこなって行います。

- (1) 企業活動のケーススタディ
- (2) 経営思想・経営理念の背景と変遷
- (3) 企業観と企業統治のあり方
- (4) ステークホルダーコミュニケーション
- (5) 非財務的要素と企業価値

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

なし/No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

春学期前半

回	テーマ	内容
第 1 回	伊庭貞剛 [住友財閥]	「自利利他公私一如」の事業精神
第 2 回	鈴木馬左也 [住友財閥]	「以德招利」の経営
第 3 回	岡田良一郎 [大日本報徳社]	「財本徳末主義」の経営
第 4 回	金原明善 [金原治山治水財団]	「ソーシャルビジネス」の先駆者
第 5 回	ウィリアム・メレル・ヴォーリズ [近江兄弟社]	「スチュワードシップ」に基づく経営
第 6 回	高峰謙吉 [三共]	「研究とビジネス」の両利き経営
第 7 回	豊田佐吉 [豊田式織機]	「ニンベンのついた自動化」の実現
第 8 回	鈴木道雄 [鈴木式織機]	社会の変化を掴む「経営構想力」
第 9 回	石橋正二郎 [ブリヂストン]	「理想」を目指して「独創」の道を進む経営
第 10 回	大原孫三郎 [倉敷紡績・クラレ]	「労働理想主義」の実践
第 11 回	波多野鶴吉 [グンゼ]	「人財マネジメント」を通じた価値創造
第 12 回	矢野恒太 [第一生命]	「相互主義」による生命保険事業の確立
第 13 回	各務鎌吉 [東京海上]	「リスクマネジメント」を通じた社会課題の解決
第 14 回	平生鈺三郎 [東京海上・甲南学園]	「共働互助の精神」による経営と教育の実践

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

指定した教科書・参考書や当該企業が発行する非財務報告書を参照しながら、この授業で取り上げた企業家の理念やビジョンが、現代の経営にどのように活かされているのかについて自己学習を深めて下さい。詳細については、初回授業において説明します。本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

レジュメを毎回配布します。

【参考書】

Naoya.HASEGAWA (2020) "Sustainable Management of Japanese Entrepreneurs in Pre-War Period from the Perspective of SDGs and ESG"(English Edition),Palgrave Macmillan

長谷川直哉著『SDGs で読み解く責任経営の系譜－時代を超えた企業家の使命』文真堂、2021 年

長谷川直哉編著『企業家活動に学ぶ ESG 経営』文真堂、2019 年

長谷川直哉編著『統合思考と ESG 投資－長期的な企業価値創出メカニズムを求めて』文真堂、2018 年

長谷川直哉編著『価値共創時代の戦略的パートナーシップ』文真堂、2017 年
長谷川直哉編著『企業家活動でたどるサステナブル経営史』文真堂、2016 年

【成績評価の方法と基準】

期末レポート：80 %

発表・討議：20 %

【学生の意見等からの気づき】

毎回、企業家活動のケースを取り上げ、多様なバックボーンを持つ参加者の自由な討議を中心に授業を進めます。

【学生が準備すべき機器他】

パソコン

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

サステナブル経営・企業倫理・責任投資・ビジネスヒストリー

<研究テーマ>

企業と社会のサステナビリティ

<主要研究業績>

「企業社会の変容と共通価値の創造」『損害保険研究第 76 巻第 3 号』2014 年
「利益の質保証－企業価値評価を巡る投資家の責任－」『日本経営倫理学会誌第 20 号』2013 年

【実務経験】

損害保険会社の資産運用部門において、約 15 年間投資業務を担当しました。1999 年、ESG 投資の先駆的な取り組みである SRI（社会的責任投資）ファンドを組成し、ファンドマネジャーとして企業の ESG（非財務）側面を評価する手法を開発しました。また、(公財)国際金融情報センターに出身し、カントリーリストや国際金融システムに関する調査・研究に従事しました。

【関連資格】

日本証券アナリスト協会認定アナリスト（CMA）

【Outline and objectives】

This class covers two themes, "Sustainability Management and Corporate Responsibility" and "ESG Management Learned from Entrepreneurs" every other year. In 2021, we will give a lecture on "ESG management learned from entrepreneurs". In the class, we will re-evaluate the activities of Japanese companies from the Meiji era to the present day from the perspective of SDGs and ESG. Based on the results of the analysis, we will consider the ideal form of sustainability management required of modern companies.

政策研究概論（外国語）※韓国語

申 龍徹

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本の公共政策の仕組みと運用に関する理解

【到達目標】

この授業は、主に韓国からの留学生を対象とし、母語語（韓国語）により、日韓比較の視点から、日本の政治行政システムの基礎的な知識を説明し、日本の公共政策の制度的基盤や基本的な仕組みなどに関する基礎的知識の理解を目指す。この知識の活用により、より効果的な比較分析を行い、完成度の高い論文執筆ができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻公共マネジメントコースにおいては「DP2」「DP3」に関連している。ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻政策研究コースにおいては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、特に「DP3」は特に強く関連している。ディプロマポリシーのうち、サステイナビリティ学専攻においては「DP2」「DP3」に関連している。

【授業の進め方と方法】

授業は、日本の政治行政に関する基礎的な知識の習得を目指し、政治体制・行政システム・地方自治制度・公務員制度・公共事業などテーマごとに基本的な仕組みと現況を説明し、受講者の質疑に応答する形式で進める。受講者の登録状況を勘案し、日本語と韓国語を兼用する。

原則として対面で授業を実施すること、新型コロナウイルス感染状況を踏まえ、十分な安全性が確保されないと判断された場合には、オンラインに切り替える。

受講生には、期末に課題レポートの提出及びその発表を求め、質疑応答を行う。課題レポートについては、学際的なコメントを付けてフィードバックする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
(1)	歴史	明治維新、戦後改革
(2)	体制	憲法、議院内閣制
(3)	国会	国会の構成と政党制
(4)	選挙	選挙制度の仕組みと現況（国・地方）
(5)	55年体制	自民党の長期政権の形成と崩壊
(6)	行政	行政組織の構成と役割
(7)	行政改革 A	行政改革の歴史と内容
(8)	行政改革 B	省庁再編と行政改革
(9)	自治制度	地方自治法と自治体改革
(10)	地方分権	地方分権改革の内容
(11)	少子高齢化社会	少子高齢化の現況と対策
(12)	政策過程	政策決定と執行のプロセス（予算策定プロセス等）
(13)	公共事業	公共事業の仕組み
(14)	公務員制度	国家公務員・地方公務員の法制度

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

事前にレジュメや参考資料などをアップする。

【参考書】

レジュメ及び関連する参考資料をアップする。

【成績評価の方法と基準】

参加度（50%）と理解度（50%）による絶対評価

【学生の意見等からの気づき】

パワーポイントによる講義を基本に、受講者との質疑応答を交えながら進める。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>行政学、比較行政

<研究テーマ>比較自治行政、公共空間形成

<主要研究業績>

- ①『東アジアの公務員制度』（共編著、法政大学出版社、2013）
- ②『韓国行政自治入門』（単著、公人社、2006）
- ③「日韓の地方公務員制度比較に関する予備的考察—＜民主性＞と＜能率性＞の交差」『法學志林』（105 - 1、法政大学、2007）
- ④「住民参加制度の日韓比較」『自治総研』（33-6、通号 344、地方自治総合研究所、2007）
- ⑤「市民活動の法制度と支援に関する日韓比較」『自治総研』（33 - 4、通号 342、地方自治総合研究所、2007）

【Outline and objectives】

Understanding of Japanese public policy mechanism and operation

POL502P1 - 068

政策研究概論（外国語）※中国語

毛 桂榮

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

公共政策に関する基礎文献を中国語で講読することを中心に勉強し、学生が政策分析の基礎を固めることができるように教授します。

文献は、日本語、中国語、英語のものですが、履修者と相談しながら、適宜変更もします。また、学生の要望にできるだけ応えるように日程の調整もします。しかし、基礎文献を理解することが大事で、じっくり資料を理解することを薦めます。

ゼミの進行に関しては、基本的に中国語をもって行いますが、適宜、日本語も使用します。

なお、この科目は公共政策論を中国語を利用してしながら、公共政策論の専門科目を勉強するようにカリキュラムを設定しており、中国語を勉強することを目的にした授業ではありません。この点に関しては、十分理解してください。

【到達目標】

以下の内容、提示する基礎文献を基本にじっくり「解説」します。資料・論文を要約した上で議論をする形で進めます。半年、基本文献15本以上を熟読するようにします。

言葉・概念の問題だけではなく、社会科学における議論の仕方、論文の書き方も含めて、資料を利用してながら、解説し討論します。

ゼミの最終回（適宜調整）に関しては、学生が関心する政策課題を事例として、研究発表を行う予定にしています。政策研究の手法を修得することを目指します。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻公共マネジメントコースにおいては「DP2」「DP3」に関連している。ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻政策研究コースにおいては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、特に「DP3」は特に強く関連している。ディプロマポリシーのうち、サステナビリティ学専攻においては「DP2」「DP3」に関連している。

【授業の進め方と方法】

基本は、対面授業です。

(1) 新型コロナウイルスの流行により、一部オンライン授業はあるが、本ゼミは、法政大学の方針に則り、「対面」を基本とする予定です。

(2) もちろん、柔軟に「オンライン」も必要に応じて調整します。

(3) また、ゼミの進め方は：基本文献の要約からスタートし、議論を深めていきます。資料の事前予習、また関連文献の復習・勉強も必要です。基本文献を中心に、関連する分野の研究資料なども、ある程度把握できるようにしていきましょう。最後は、各自の発表をもって基礎修得の確認をおこないます。

(4) 勉強に関する質問は、(本システムか LINE を通じて) 常時受付ます。またゼミでは、質疑応答の時間も用意します。さらに、報告、提出するレポートに関しても、随時、コメントを返しますので、利用してください。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	予定の打ち合わせ。また先行研究を読むことについて。履修する場合、事前で担当者まで連絡を希望。連絡があった場合、第一回目の資料をメールで送信します。 maoguirong@gmail.com	文献「若い大学院生へ」を配布。日本語。
第2回	行政学の研究史、公共政策論の先行研究について	前回の配布資料を踏まえて議論。次回の資料「行政学の歴史」など資料を配布、中語語。
第3回	行政学の歴史における公共政策研究	西尾行政学第4章、日本語と中国語を講読。またフィールドワークに関して、指示と相談。
第4回	さらにもう一つ専門文献を読む	行政学の基礎概念所収「行政と組織」論文など行政、政策と管理などの論文を読む。参照：「組織と行政」1書も必要文献。
第5回	USA PA 歴史。英文資料を読む。	英文資料を持って勉強。公共政策研究の歴史も確認。
第6回	公共政策論研究の歴史、並びにガバナンス概念に関する英文資料一つも解説	資料「アメリカ公共政策論の台頭」を講読。また英文：Reflections on governance。状況に応じて、この勉強を2回に分けて進めることも可能
第7回	日本の行政学研究と教育	中国語資料「日本行政学史」（公開資料、毛桂榮執筆）
第8回	日本の公共政策研究の歴史	「日本の公共政策研究」論文を読む。日本公共政策学会の機関誌に掲載された論文に関する分析論文、中国語論文も参照。
第9回	「公共性」概念の研究	論文「公共性」に関する論文、または、「公共政策とは何か」を読む。
第10回	decision theory 「非決定」、「権力の3つの顔」のことも勉強。	英文資料、日本語資料を講読資料事前予習
第11回	政策形成における政治家と官僚	Bureaucrats and Politicians in Western...1981の終章を読む。毛「政府と行政」も参照。
第12回	官僚制の概念	資料「官僚制への視点」今村「行政学の基礎理論」所収を読む。西尾「新版・行政学」官僚制論2章も参照。
第13回	政策リサーチ手法	東大出版「政策リサーチ入門」の文章2つ：事例研究
第14回	学生の各自発表、フィールドワーク調査の結果を踏まえて	研究発表。学生が関心する課題について分析・発表。修士論文などの検討・相談も可能。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

西尾『行政学の基礎概念』（東大出版。中国語譯もあり、それは法政大学の図書館にも所蔵ある。一部資料は配布する予定）、今村『行政学の基礎理論』（三領書房）、秋吉ほか「公共政策学の基礎」（有斐閣）、伊藤修一郎「政策リサーチ入門」（東大出版）のほか、配布する資料を必ず読むこと

【参考書】

日本公共政策学会の機関誌を読むこと

【成績評価の方法と基準】

授業での報告40%、討論60%で総合評価する

【学生の意見等からの気づき】

1、大量に読書すること。

- 2、しっかり考え、よく質問すること。
 - 3、欠席することは、絶対しないように。
- 最後まで頑張りましょう。

【学生が準備すべき機器他】

配布資料は、デジタルの形式でも渡します。その最適の方法を確認するが、量的には、電子メールは、オススメ。その他：微信、LINEも可能。相談の上、決める。

【その他の重要事項】

事前の連絡がある場合、maoguirong @の G メールです。
少人数のクラスですので、読書の負担がかなりあります。
注意：新型肺炎の流行もあり、以上の予定は、適宜変更していく。履修者と相談しながら、やっていきます。
成績は、討論、報告などを踏まえて総合判断する。

【担当教員の専門分野等】

行政学、日本行政などを研究。著書「日本の行政改革」「比較の中の日中行政」があり、また「行政の概念」、「公務員の用語と概念」の論文（中国語、日本語）などがある。最近は、中国の公務員制度などを研究中、複数論文を公表。論文のほとんどは、ネットで検索・入手可能。

【Outline and objectives】

The aim is to study the basic literatures on public policy and policy analysis. The literatures are papers and books on Japanese, Chinese and English. It is important to read the basic literatures.

BSP500P1 - 069

公共政策論文技法 1

白鳥 浩、塚崎 裕子、小磯 明

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

政策科学の先端的研究の現場に触れる。

【到達目標】

政策科学分野における学術論文の作法を習得すること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻公共マネジメントコースにおいては「DP2」「DP3」に関連している。ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻政策研究コースにおいては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、特に「DP1」は特に強く関連している。ディプロマポリシーのうち、サステイナビリティ学専攻においては「DP2」「DP3」に関連している。

【授業の進め方と方法】

博士号を取得した政策研究を行っている研究者による、先端的研究の紹介を中心として、政策科学が抱えている現代の問題をアカデミックに理解することを目指す本講義は、複数教員による分担講義として展開される。そこでは、現代の政策科学が抱える、アクチュアルな問題が提示される。学術的な価値の高い修士論文の執筆を目指す大学院生に、専門研究者レベルのスタンダードを明示することとなる。講義は対面を中心とする。講義計画は講義の展開により、若干の変更もありうる。

変更の可能性もあるが対面講義を基本とする。また、学生へのフィードバックにおいては、適宜、講義のたびに行うものとする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期前半

回	テーマ	内容
1	政策科学の最先端と政策へのアカデミックなアプローチ（白鳥）	政策科学の定義と歴史、政策と学術研究の関係
2	ケーススタディの問題関心と先行研究の分析 1(小磯)	問題提起と分析
3	理論的フレームワークとデータの収集 1(小磯)	フレームワークの提示、データへのアクセス
4	分析結果と学会内での研究上の位置 1(小磯)	分析の位置、研究の意義
5	ケーススタディの問題関心と先行研究の分析 2(塚崎)	問題提起と分析
6	理論的フレームワークとデータの収集 2(塚崎)	フレームワークの提示、データへのアクセス
7	分析結果と学会内での研究上の位置 2(塚崎)	分析の位置、研究の意義

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

講義中適宜指示

【参考書】

講義中適宜指示

【成績評価の方法と基準】

出席および毎回の講義への取り組み 30 %、レポート 70 %。レポートについては、各自の研究テーマの学術的価値を的確に表現できているかどうかを評価する。

【学生の意見等からの気づき】

論文執筆過程での具体的なトラブル・課題をより具体的に解説する。

【担当教員の専門分野等】

白鳥 浩

<専門領域>

現代政治分析（国際・国内比較）・政治理論

<研究テーマ>

1. 日本の現代政治

2. グローバリズムと国民国家の変容

3. 地方政治研究

4. 政党に関する理論

5. 現代政治のデモクラシー

<主要研究業績>白鳥浩『都市対地方の政治学』芦書房、2004 年

白鳥浩『市民・選挙・国家—シュタイン・ロッキンの政治理論—』東海大学出版会、2002 年

Hiroshi Shiratori, "Le mouvement référendaire au Japon après la Guerre froide. Une analyse comparative inspirée de Rokkan," Revue française de science politique, vol.51, Numero.4, 2001.

塚崎 裕子

<専門領域>労働政策、ジェンダー政策

<研究テーマ>外国人雇用、ダイバーシティと雇用、地方移住と雇用

<主要業績>

塚崎裕子 (2008)「外国人専門職・技術職の雇用問題—職業キャリアの観点から」、明石書店

塚崎裕子 (2012)「日本の職場風土と外国人高度人材のキャリア」、こころと文化・第 11 巻・第 2 号、pp.163-168

塚崎裕子 (2013)「グローバル人材の多様性—国を問わず働く人材と二国間をつなぐ人材を中心に—」、日本労務学会誌・第 14 巻・第 2 号、pp.27-51

Yuko Tsukasaki, "Impact of Spousal Violence on Employment at the Post-Leaving Stage in Japan", Violence and Victims, forthcoming

小磯 明

<専門領域>福祉社会学、社会政策、地域政策

<研究テーマ>コミュニティにおける医療と福祉形成の現代的解明、地域の産業政策の形成

<主要研究業績>

小磯明『地域と高齢者の医療福祉』御茶の水書房、2009 年。

小磯明『医療機能分化と連携』御茶の水書房、2013 年。

共著『サステイナブルな地域と経済の構想』御茶の水書房、2016 年。

小磯明『公害病高齢者とコンビナート：倉敷市水鳥の環境再生』御茶の水書房、2020 年。

論文「小規模・高齢化集落の高齢者と地域福祉—長野県泰阜村の高齢者生活調査から」『福祉社会学研究』第 8 号、2011 年。

論文「地域福祉は住民のもの—協同組合・非営利組織の視点から」『日本の地域福祉』第 31 巻、2018 年。

【】

小磯 明

<専門領域>福祉社会学、社会政策、地域政策

<研究テーマ>コミュニティにおける医療と福祉形成の現代的解明、地域の産業政策の形成

<主要研究業績>

小磯明『地域と高齢者の医療福祉』御茶の水書房、2009 年。

小磯明『医療機能分化と連携』御茶の水書房、2013 年。

共著『サステイナブルな地域と経済の構想』御茶の水書房、2016 年。

小磯明『公害病高齢者とコンビナート：倉敷市水鳥の環境再生』御茶の水書房、2020 年。

論文「小規模・高齢化集落の高齢者と地域福祉—長野県泰阜村の高齢者生活調査から」『福祉社会学研究』第 8 号、2011 年。

論文「地域福祉は住民のもの—協同組合・非営利組織の視点から」『日本の地域福祉』第 31 巻、2018 年。

【】

塚崎 裕子

<専門領域>労働政策、ジェンダー政策

<研究テーマ>外国人雇用、ダイバーシティと雇用、移動とキャリア

<主要業績>

塚崎裕子 (2008)「外国人専門職・技術職の雇用問題—職業キャリアの観点から」、明石書店

塚崎裕子 (2013)「グローバル人材の多様性—国を問わず働く人材と二国間をつなぐ人材を中心に—」、『日本労務学会誌』第 14 巻・第 2 号、pp.27-51

塚崎裕子 (2020)「キャリアによる国内人口移動の違いと世代効果」『人口問題研究』第 76 巻第 3 号、pp.375-393

Yuko Tsukasaki, "Impact of Spousal Violence on Employment at the Post-Leaving Stage in Japan", Violence and Victims, forthcoming

【Outline and objectives】

This course offers our Ph.D. holder's knowledge on tips to write a thesis. The lecture is mainly on the framework of writing academic paper.

SOS500P1 - 070

公共政策論文技法 2

淵元 初姫

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

主として修士課程1年生を対象として、修士論文を執筆する上でのポイントとなる事項について、各専攻及びコースの教員による講義と修士論文執筆者の報告という形で授業を展開する。1年生は是非とも受講してほしい。

【到達目標】

修士論文を執筆する上でのポイントを理解する。
換言すれば、修士論文を書くための学習方法、修士論文の構成の考え方、文献資料探索の進め方、調査の進め方、執筆の進め方、論文指導の受け方、発表会での報告、文章の訂正について、修士論文の完成に至るまでの過程を体得することを目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻公共マネジメントコースにおいては「DP2」「DP3」に関連している。ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻政策研究コースにおいては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、特に「DP1」は特に強く関連している。ディプロマポリシーのうち、サステイナビリティ学専攻においては「DP2」「DP3」に関連している。

【授業の進め方と方法】

修士論文を書くための初歩から実践までを理解するために、教員と院生（修士号取得者）による報告によって講義を進める。原則として、教員は各専攻及びコースからそれぞれ1～2名が講義を担当する。また、修士号取得者は原則として各コースからそれぞれ2名（博士課程の在籍院生や修士課程修了者など）が担当し、修士論文の執筆に関する経験を報告する。各回とも、前半に各報告を受け、後半はその質疑とする。

第7回目の授業では各受講者によるリサーチ・プロポーザルの報告を行う。報告に対しては、授業中に参加者全員による質疑・議論を行い、講評を行うことによってフィードバックする。

授業方式は原則として対面授業とする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

春学期後半

回	テーマ	内容
1	講義の全体概要とスケジュール	講義の全体概要とスケジュールを示し、修士論文の執筆に関する標準的スケジュールについて説明する。
2	修士論文の執筆に向けて	研究テーマの選定や、先行研究の調査等について説明する。
3	教員1による修士論文執筆の経験 報告に対する討論	本学専任教員による講義 報告に対する討論
4	学位取得者1による修士論文執筆の経験	本学院生による講義 報告に対する討論
5	教員2による修士論文執筆の経験	本学専任教員による講義 報告に対する討論
6	学位取得者2による修士論文執筆の経験	本学院生による講義 報告に対する討論
7	教員3による修士論文執筆の経験	本学専任教員による講義 報告に対する討論
8	学位取得者3による修士論文執筆の経験	本学院生による講義 報告に対する討論
9	教員4による修士論文執筆の経験	本学専任教員による講義 報告に対する討論
10	学位取得者4による修士論文執筆の経験	本学院生による講義 報告に対する討論
11	教員5による修士論文執筆の経験	本学専任教員による講義 報告に対する討論
12	学位取得者5による修士論文執筆の経験	本学院生による講義 報告に対する討論
13	修士論文のプロポーザル作成に向けた準備	これまでの講義と報告に基づき、各自の研究における「問い」を明らかにし、それについて検討を加える。
14	まとめ	総括討論を行い、各自の課題を明確にする。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

特になし。必要に応じて、各教員、各修了生よりレジュメを配布する。

【参考書】

特になし。必要に応じて、授業内で紹介する。

【成績評価の方法と基準】

質疑における発言とコメント票の記入内容（50%）、期末レポート（50%）を判断して、評価する。

【学生の意見等からの気づき】

修士論文執筆に当たっての心構えに始まり、学術研究の意義や方法、論文執筆上の作法などについて、専攻やコースを超えた複数の教員や修了生から学ぶ機会となっているようです。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 比較政治学、コミュニティ政策、福祉政策

<研究テーマ> ポスト福祉国家時代の市民社会論、地域社会における社会的包摂、英国・スコットランドの地方自治・自治体内分権

<主要研究業績>

「スコットランドの地域評議会－制度の基本的構想とその機能の実際」名和田是彦編（2009）『コミュニティの自治－自治体内分権と協働の国際比較』pp.81-118、日本評論社

「スコットランドにおける権限移譲とジェンダー・クォータ」三浦まり・衛藤幹子編著（2014）『ジェンダー・クォーター世界の女性議員はなぜ増えたのか』pp.203-26、明石書店

「地域社会における社会的連帯の再編：居場所づくりにみる三人称的連帯の可能性」金安岩男・牧瀬稔編著（2019）『都市・地域政策研究の現在』pp.131-42、地域開発研究所

【Outline and objectives】

MA or PhD students in their first year are welcome to sign up to this course. Each lecture will provide students with an understanding of writing a Masters dissertation or PhD thesis. Upon completion of this course, students should be able to develop good academic practice.

POL500P1 - 101

政策学研究

淵元 初姫

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

政治学からの政策研究へのアプローチについて、政策過程研究の方法論のうち、実証的な政策研究に必要なものを取りあげ、修士課程での研究の中で活用できるように、その特徴、適した分析対象、期待される分析結果などについて考察する。

【到達目標】

政策過程研究の主要な理論、枠組、モデルについて概要を把握し、研究テーマに応じた分析方法の的確な選択、応用ができるようになることを到達目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻公共マネジメントコースにおいては「DP1」「DP4」に関連している。ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻政策研究コースにおいては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、特に「DP4」は特に強く関連している。

【授業の進め方と方法】

教員による講義と受講者による課題報告とで構成します。講義では、政策研究一般におけるアプローチ方法について整理します。受講者は、個人の関心に沿って課題を設定し、政策研究の分析方法を応用して報告します。課題に対しては、授業中に参加者全員による質疑・議論を行い、講評を行うことによってフィードバックします。

授業方式は原則として対面授業とします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

秋学期前半

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	実証的な政策研究とは何か。また、なぜ政策の分析に理論・モデル・フレームワークを用いる必要があるのかを論じる。
第2回	政策研究のフレームワーク	政策研究における理論・モデル・フレームワークの概念を整理し、現代の政策研究の枠組みがどのように展開してきたかを振り返る。
第3回	政策研究におけるモデルの基礎1	アクターに着目したモデルについて学ぶ。
第4回	政策研究におけるモデルの基礎2	方法論に着目したモデルについて学ぶ。
第5回	政策決定における合理性と不確実性	合理性とは何か、合理的な意思決定は可能か検討する。
第6回	政策決定と制度・利益・アイデア	政策決定における3つの「I」について学ぶ。
第7回	受講者による課題報告	受講者が設定したテーマ（例えば、政策決定と3つの「I」に関する論点など）について報告・質疑を行う。
第8回	アリソンの3つのモデル	G. アリソンによる対外政策決定研究のための3つの概念レンズから学ぶ。
第9回	受講者による課題報告	受講者が設定したテーマ（例えば、アリソンの3つのモデルに関する論点など）について報告・質疑を行う。
第10回	キングダンの政策の窓モデル	J. キングダンの政策の窓モデルから学ぶ。
第11回	受講者による課題報告	受講者が設定したテーマ（例えば、キングダンの政策の窓モデルに関する論点など）について報告・質疑を行う。
第12回	政策とデータ	政策立案に際してその根拠となる政府統計について考える。
第13回	受講者による課題報告	受講者が設定したテーマ（例えば、政策とデータに関する論点など）について報告・質疑を行う。
第14回	まとめ	講義のまとめを行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

事前に提示された文献等がある場合は予習を行い、授業の後は、その内容や資料等について復習を行ってください。課題報告のための準備と、授業の最終回に提出する期末レポートの作成を行う必要があります。

【テキスト（教科書）】

特に使用しません。

【参考書】

必要に応じて授業中に紹介します。

【成績評価の方法と基準】

課題報告（30%）及び期末レポート（50%）に加え、授業中の質疑や討論における発言（20%）により評価します。

【学生の意見等からの気づき】

受講生による課題報告については、少しテーマを絞ったほうがよいかと考えました。受講生の皆さんと相談しながら工夫したいと思います。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 比較政治学、コミュニティ政策、福祉政策
 <研究テーマ> ポスト福祉国家時代の市民社会論、地域社会における社会的包摂、英国・スコットランドの地方自治・自治体内分権
 <主要研究業績>
 「スコットランドの地域評議会－制度の基本的構想とその機能の実際」名和田是彦編（2009）『コミュニティの自治－自治体内分権と協働の国際比較』pp.81-118、日本評論社
 「スコットランドにおける権限移譲とジェンダー・クォータ」三浦まり・衛藤幹子編著（2014）『ジェンダー・クォーター世界の女性議員はなぜ増えたのか』pp.203-26、明石書店
 「地域社会における社会的連帯の再編：居場所づくりにみる三人称的連帯の可能性」金安岩男・牧瀬稔編著（2019）『都市・地域政策研究の現在』pp.131-42、地域開発研究所

【Outline and objectives】

We now turn to more detail on how policies are actually made. The course will look at how policy agenda is set and how policy issues are constructed and framed. It will also explore how we can evaluate public policy. Important themes will include the role of ideas, institutions and interests in the policy-making process. The course will employ a number of case studies to give life to the theories and concepts explored.

自治体議会論

鍵屋 一

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

自治体議会の歴史、意義を学び、議会の課題、国内外における先進事例を調査研究することにより、二元代表機関としての議会・議員のあり方について理解を深める。これにより、執行機関との緊張関係の下で住民福祉の向上を図る議会・議員となることを目指す。

【到達目標】

研究活動の基本となる議会の意義、歴史、先進事例を調査研究し、学生間、講師とともに討議を行いそれぞれの問題意識に合わせて課題を深掘りしていく。これにより、現実の自治体議会の抱える課題と今後の議会改革方策を浮き彫りにする。学生の洞察力を深め、討議による集合知を紡ぎだす。学生が積極的に討議に参加し、自らと他者の理解を深める主体となっているかを評価する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻公共マネジメントコースにおいては「DP2」「DP3」に関連している。ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻政策研究コースにおいては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、特に「DP4」は特に強く関連している。

【授業の進め方と方法】

授業形式☑️対面授業。主として松下圭一「政策型思考と政治」の議会関係部分を講師が解説し、重要部分について討議、集合知の紡ぎ出しを行う。また、現実の自治体議会のニュース、トピックスを積極的に取り上げ、解説、討議を行うことで学生の洞察力を高める。授業の最後には、学生からの質問、コメントを求め、その場でフィードバックを行う。また、授業後にメール等による質問も受け付けてフィードバックを行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期後半

回	テーマ	内容
第1回	1.2 議会の成立、歴史、意義と歴史	議会の成立過程、歴史、意義を学ぶ
第2回	3.4 各国の議会	わが国、および各国の議会の歴史、意義を学ぶ
第3回	5.6 各国の自治体議会の歴史	わが国、および各国の自治体議会の歴史、意義を学ぶ
第4回	7.8 各国の自治体議会の課題	わが国、および各国の自治体議会の現状と課題を学ぶ
第5回	9.10 自治体議会のあり方について	現実の自治体議会の課題、今後の方向性を学ぶ
第6回	11.12 自治体議会改革について	自治体改革の歴史と概要を学ぶ
第7回	13.14 災害時の自治体議会・議員について	災害時の自治体議会・議員のあるべき行動規範について考える

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

学生の住む自治体議会のホームページ、直近の議事録を読む。直近の自治体改革の動向を示す書籍、ホームページ等を調査しておく。本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

政策型思考と政治、松下圭一、東京大学出版会、1991年、4,644円
なお、講師が必要な部分を資料として提供するので、購入する必要はない。

【参考書】

江藤俊昭「自治体議会学 議会改革の実践手法」等
自治体議会改革フォーラムホームページ、www.gikai-kaikaku.net

【成績評価の方法と基準】

討議への参加など平常点 70 %
振り返りシート 30 %

【学生の意見等からの気づき】

学生からは、講義内容が濃密であるとの意見があった。理解が難しいと思われる部分については、質疑を促すとともに丁寧に解説していきたい。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>自治体、防災
<研究テーマ>自治体議会・議員の災害対策
<主要研究業績>紀要論文、議員研修

【Outline and objectives】

Learn the history and significance of the local council and study and study the issues of the council and advanced cases in and outside of Japan to deepen the understanding of the council and members of parliament as a dual representative body. In this way, we aim to become a member of parliament and parliamentarians who will improve the welfare of residents under tensions with the local government enforcement agencies.

POL500P1 - 105

公務員制度研究

合田 秀樹

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本の公務員制度について、国家公務員制度を中心に、国際比較（英米独仏）の中で、その制度及び実態について考察する。

【到達目標】

日本の公務員制度について、国際比較の中で、その制度がどのようなものかという理解を得る。また、実際の運用がどうなっているかについて理解を深める。さらに、今後のあるべき姿について提言を考える能力を身に付ける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻公共マネジメントコースにおいては「DP2」「DP3」に関連している。ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻政策研究コースにおいては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、特に「DP4」は特に強く関連している。

【授業の進め方と方法】

対面で行う。日本の公務員制度について、総論の後に、いくつかの主要分野について、現行の制度を解説するとともに、運用についても紹介する。学生の理解を踏まえて、それらの制度及び運用が、どのような目的、要因によって行われているかを考える。参照軸として、主要諸外国の例との比較を行う。近年進められている公務員制度改革についても考察を行う。各回の授業の前半では教員がその回取り上げる分野について解説し、後半ではその分野の中で学生が取り上げたい個別テーマについて学生及び教員による討議を行う。授業の中で学生から提起された質問や論点に対しては、授業の中で教員から説明するとともに、学生が更なる研究を進めるために役立つ助言を行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期後半

回	テーマ	内容
1.2	公務員制度の総論及び歴史	日本の公務員制度の全体像を示すとともに、第2次世界大戦後の国家公務員法の成立過程を見る。
3.4	採用と昇進	国家公務員の採用、昇進について考える。2009年度から実施の新人事評価制度も取り上げる。
5.6	給与	国家公務員の給与の決定過程について考える。
7.8	サービスと倫理、研修	国家公務員に課せられているサービス規定や、公務員倫理の問題について考える。あわせて、研修による人材育成について考える。
9.10	身分保障と公平審査	国家公務員の身分保障について考えるとともに、救済制度としての公平審査について考える。派遣・出向も扱う。
11.12	退職管理、天下り	国家公務員の退職管理の問題について考えるとともに、天下り問題について考える。
13.14	公務員制度改革	公務員制度改革のこれまでの展開について検証し、今後の改革について検討する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

特定の教科書は使用しません。

【参考書】

村松岐夫編著「公務員人事改革—最新米・英・独・仏の動向を踏まえて—」（2018学陽書房）
 村松岐夫編著「最新公務員制度改革」（2012学陽書房）
 西尾勝著「行政学 [新版]」（2001有斐閣）
 森園幸男ほか編「逐条国家公務員法全訂版」（2015学陽書房）
 人事院HP <https://www.jinji.go.jp/top.html>
 内閣官房内閣人事局HP <http://www.cas.go.jp/jp/gaiyou/jimu/jinjikyoku/>
 内閣官房（旧）国家公務員制度改革推進本部HP <http://www.gyokaku.go.jp/koumuin/>

【成績評価の方法と基準】

平常点50%（毎回の授業において、その回における課題を理解して自らの理解の上立って議論に貢献しているか）
 小論文（レポート）50%（自ら選択する課題について考察を行った小論文）

【学生の意見等からの気づき】

学生自らが問題点を発見し考察を深めることができるようにしています。

【その他の重要事項】

中央人事行政機関である人事院に30年以上在職し、国家公務員の人事行政の制度及び運用を実際に担当している。さらに、国際連合日本政府代表部において国際機関職員の人事にも関わった。これらの経験を踏まえて、日本の国家公務員の人事管理の制度及び運用がどのように行われているかを、国際比較の観点も踏まえながら、学生に紹介し、議論を行っていく。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 公務員制度
 <研究テーマ> 国際比較の中の我が国公務員制度
 <主要研究業績>

「有為で多様な人材の育成・確保」2014年度日本行政学会研究会報告（「有為で多様な人材の確保・育成」日本行政学会編「年報行政研究 50 行政の専門性と人材育成」（2015年、ぎょうせい）所収）
 「公務員に求められる資質・能力」2008年度日本行政学会研究会報告
 村松岐夫編著「公務員人事改革」（2018年、学陽書房）
 森園幸男ほか編「逐条国家公務員法全訂版」（2015年、学陽書房）（共著）

【Outline and objectives】

This class studies the Japanese civil service system, especially national one, in international comparison – compared with that of the U.K., U.S.A., Germany and France. In this class, not only the system but also its actual implementation will be analysed.

都市政策概論

杉崎 和久

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

現在、多様な主体が活動をする都市空間において、秩序ある土地利用を制御する仕組みである近代都市計画の構造、現代的な課題を理解することを目的とする。

【到達目標】

秩序ある土地利用を制御する仕組みである都市計画法等の仕組みを理解した上で現代都市において表出さしているさまざまな課題の構造を把握した上で対応方策を議論できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻公共マネジメントコースにおいては「DP1」「DP4」に関連している。ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻政策研究コースにおいては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、特に「DP4」は特に強く関連している。

【授業の進め方と方法】

まず都市計画法など現在の都市における空間制御の仕組みを講義する。次に現代の都市で起きている課題をとりあげ、その課題に関する文献を輪読する。そして、具体的な自治体における取組をとりあげ、その内容について議論をする。

課題については、授業の中で発表、討論を行い、その中で講評を行う。

授業は原則「対面」で行うが、一部「リアルタイムオンライン授業」を行うこともある。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり/Yes

【授業計画】

春学期後半

回	テーマ	内容
1	オリエンテーション	授業の進め方、参考資料等についての説明を行う。
2	講義：都市空間制御システム1	近代都市計画の成立
3	講義：都市空間制御システム2	都市計画法の概要
4	文献講読1	担当者が輪読内容を発表し、受講者間で意見交換を行う。
5	文献講読2	担当者が輪読内容を発表し、受講者間で意見交換を行う。
6	文献講読3	担当者が輪読内容を発表し、受講者間で意見交換を行う。
7	総括議論	具体的な施策を踏まえて、今後必要となる対応について議論を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

輪読する文献は、受講者の関心等を踏まえて、指定する。

【参考書】

必要に応じて、教員が参考資料の配布や参考文献の紹介をする。

【成績評価の方法と基準】

平常点（60%）、担当課題の発表内容（40%）で行う。

【学生の意見等からの気づき】

特になし

【学生が準備すべき機器他】

オンライン講義に対応するための通信機器と通信環境。

zoomによるオンライン講義と学習支援システムを通じて資料・音声データを配布します。

【その他の重要事項】

この授業は対面授業とリアルタイムオンライン授業を組み合わせで行う予定です（受講生の通信環境等により変更することもあります）。

第1回講義はzoomによるオンラインで行います。履修を希望される方は、第1回講義前に仮登録あるいは本登録をしてください。必要なID等は学習支援システムに登録しているメールアドレスに連絡いたします。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>都市計画、市民参加手法

<研究テーマ>公共的意思決定における市民参加のあり方、住民主体のまちづくりを支える支援システム、まちづくりの現代史

<主要研究業績>『住民主体の都市計画』（分担執筆）学芸出版社、2009年「まちづくりセンターを取り巻く課題」『季刊まちづくり』2011年3年

「参加のプロセスマネジメント」『地方自治職員研修』2013年9月号

【Outline and objectives】

The purpose of this lecture is to understand the problems in city space and the system of urban planning.

都市政策事例研究

杉崎 和久

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

多様な主体が活動をする都市空間において、適切な都市施設配置や秩序ある土地利用を制御する仕組みである近代都市計画は、都市における活動などが成長することを前提としたシステムである。しかし、都市の成長とともに生活空間の環境に変化を与えるなど新たな地域課題が生じることがある。市民によるまちづくり活動はこれらを顕在化させ、都市計画を変化させる役割を果たしてきた。本講義では、市民によるまちづくり活動の経緯、事例等を把握し、これらの活動の果たした役割を理解することを目的とする。

【到達目標】

この授業を通じて、都市空間において発生する生活場の変化に対して、市民が主体となるまちづくり活動を通じて、都市空間に関する新たな課題や価値が提起され、法定都市計画に変化を与える過程を理解すること

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻公共マネジメントコースにおいては「DP2」「DP3」に関連している。ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻政策研究コースにおいては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、特に「DP4」は特に強く関連している。

【授業の進め方と方法】

受講生が、分担して最新の都市計画に関する理論・制度・事例等のトピックを調査、発表、議論を行う。教員は適宜、解説等を行う。さらに、トピックに関連した地域（東京周辺）のフィールドワークを行う。

課題については、授業の中で発表、討論を行い、その中で講評を行う。

授業は原則「対面」で行うが、一部「リアルタイムオンライン授業」を行うこともある。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

秋学期後半

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション（まちづくりの展開過程）	授業の進め方、参考資料等についての説明を行う。また、市民によるまちづくり活動の展開過程について説明する。
第2回	市民まちづくりの事例紹介1	現代の都市空間に対する受講者の関心を共有する。
第3回	市民まちづくりの事例紹介2	担当者が事例調査結果を発表し、受講者間で意見交換を行う。
第4回	事例発表1	担当者が事例調査結果を発表し、受講者間で意見交換を行う。
第5回	事例発表2	担当者が事例調査結果を発表し、受講者間で意見交換を行う。
第6回	事例発表3	担当者が事例調査結果を発表し、受講者間で意見交換を行う。
第7回	総括議論	具体的な施策を踏まえて、今後必要となる対応について議論を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

輪読する文献は、受講者の関心等を踏まえて、指定する。

【参考書】

必要に応じて、教員が参考資料の配布や参考文献の紹介をする。

【成績評価の方法と基準】

平常点（60%）、担当課題の発表（40%）で行う。

【学生の意見等からの気づき】

特になし

【その他の重要事項】

この授業は zoom によるオンライン講義と学習支援システムを使った資料・音声配信によるオンデマンド講義を組み合わせて行う予定です（受講生の通信環境等により変更することもあります）。

第1回講義は zoom によるオンラインで行います。履修を希望される方は、第1回講義前に登録をしてください。必要な ID 等は学習支援システムに登録しているメールアドレスに連絡いたします。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>都市計画、市民参加手法

<研究テーマ>公共的意思決定における市民参加のあり方、住民主体のまちづくりを支える支援システム、まちづくりの現代史

<主要研究業績>『住民主体の都市計画』（分担執筆）学芸出版社、2009年

『まちづくりセンターを取り巻く課題』『季刊まちづくり』2011年3年

『参加のプロセスマネジメント』『地方自治職員研修』2013年9月号

【Outline and objectives】

The purpose of this lecture is to understand the role of community-based activities in changing urban planning.

政策過程研究

土山 希美枝

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

政策は、こんにちの社会（都市型社会）で生きるひとびとの「いとなみの基盤」である。

都市型社会の構造と特質を知り、こんにちにいたるまで歴史的にどのような政策類型が蓄積されてきたかを理解し、政策主体と〈政策・制度〉のありかたを理解する。そのうえで、政策過程がどのように進むのかを学ぶ。

この講義を通じて、各自の研究対象とする政策分野を政策学からとらえるための視角を養うこととなる。

【到達目標】

この講義の到達目標は以下である。

- ・公共政策が展開される前提であるこんにちの社会構造（都市型社会）の特質を理解する
- ・歴史的に形成されてきた政策類型をふまえる
- ・公共政策の過程の基礎を学び
- ・各自の研究対象とする政策分野をとらえる政策学の視角を得る

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻公共マネジメントコースにおいては「DP1」「DP2」に関連している。ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻政策研究コースにおいては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、特に「DP4」は特に強く関連している。

【授業の進め方と方法】

テキストの読解と議論、考察により進行する。受講生はテキストの指定された章について分担して要点と論点をまとめ、教員が解説しながら議論と考察をすすめる。必要に応じて補足資料が提供される。報告、議論とそれらへのコメントによりフィードバックする。なお、原則として対面講義とする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

春学期前半

回	テーマ	内容
第1回	導入	の講義の目的、テキストの概説と進めかた、報告の分担など
第2回	講義「政治・政策と市民」	都市型社会における〈政策・制度〉と市民の関係を学ぶ（第1章）
第3回	都市型社会の特性	都市型社会と政策の特性を学ぶ（第2章）
第4回	都市型社会の成立	政策の歴史と類型を学ぶ（第3章）
第5回	政策の資源：政策主体	都市型社会における政策主体の多様化を学ぶ（第6章）
第6回	政策の資源：政治技術と政策手法	政治技術と政策手法を学ぶ（第7章）
第7回	政策の資源：政府と資源の調達	政策の資源とその調達、政府の機能の転換を学ぶ（第8章）
第8回	政策型思考の特質	政策型思考の特質と論理を学ぶ（第9章）
第9回	政治思考の特質	政治思考と〈決断〉の特質を学ぶ（第10章）
第10回	政策過程：決定	政策決定を学ぶ（第12章）
第11回	政策過程：開発と管理	政策開発と管理を学ぶ（第13章）
第12回	政策過程：実施	政策実現の手法と手続きを学ぶ（第15章）
第13回	政策過程：評価	政策の効果、転換を学ぶ（第16章）
第14回	講義と総括	講義「都市型社会の政策過程とその理論」（第20章）

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とする。テキスト、配布資料、参考資料の精読を期待する。また、日頃から時事問題にたいする関心と良質な情報の収集に勤むことを期待する。

【テキスト（教科書）】

松下圭一『政策型思考と政治』東京大学出版会、1991年。

【参考書】

土山希美枝『高度成長期「都市政策」の政治過程』日本評論社、2007年。
石橋章市朗・佐野亘・土山希美枝・南島和久『公共政策学』ミネルヴァ書房、2018年。

【成績評価の方法と基準】

授業への参加：議論への参加（25%）、コメント（25%）の様子、
授業の成果：授業内での報告（25%）、期末レポート（25%）の各評価により判断する。

【学生の意見等からの気づき】

本年度が科目の初年度であるため、反映するべき意見を受け取っていない。

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉公共政策、地方自治、政治学

〈研究テーマ〉社会構造と政策・政治の変容、自治体政策、自治体議会論。

〈主要研究業績〉『高度成長期「都市政策」の政治過程』日本評論社、2007年。

『質問力でつくる政策議会』公人の友社、2017年。

【Outline and objectives】

Policies (and their systems) are the "foundation of life" for people living in today's society (urban-type society).

We'll learn the structure and characteristics of urban-type society, and understand the policy process.

It will develop your perspective for your research from the perspective of policy studies.

SOW500P1 - 111

自治体福祉政策論

鏡 論

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

現在社会保障給付費は100兆円を超えている。国の予算においては、社会保障関係費として一般会計の4割近くを支弁している。自治体において、介護保険制度や高齢者福祉制度の運営が課題となっている。高齢者の生活を支える自治体政策を通して、これからの更なる高齢社会に向かう人々の暮らしに、どのような給付と負担の関係を構築する必要があるのかを考える。

今日の社会保障制度改革においては、給付の縮減を是とした改正が続いているが、安心できる暮らしを維持していく事が可能かを議論する。財源負担の在り方や世代間の給付と負担のバランス等を学ぶ。

【到達目標】

2000年に制度化された介護保険は、今や10兆円を超える規模の給付となり、この後もさらに拡大を続けようとしている。この介護保険制度を中心とした社会保障における給付と負担の形について研究をして、政策の在り方を議論する。

キーワードは次の通り。

- ・介護保険制度の課題と市町村対応
- ・地域包括ケアの課題
- ・介護予防日常生活支援事業の可能性
- ・介護と医療の連携の課題
- ・判断能力を欠く状況になった場合の意思決定
- ・成年後見制度の効果と課題

上記それぞれの項目について理解する

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻公共マネジメントコースにおいては「DP3」「DP4」に関連している。ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻政策研究コースにおいては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、特に「DP4」は特に強く関連している。

【授業の進め方と方法】

本授業は対面授業で、実施する。しかし、社会情勢により、対面授業が難しい場合は、ブレンド型授業を実施し、通学が困難な状況にも対応する。また、次の各項目等について講義と院生の発表により研究する。授業における質問やレポートにかかる解説は、質問等があった次の回の授業で対応する。

さらに、映像資料を用いた分かり易い説明を行う。

各項目については、以下の通り。

- ・日本の将来予測から社会保障のあり方について
- ・介護保険制度創設と自治体高齢者福祉行政の変化の理解
- ・措置制度から契約への変化が意味するものの理解
- ・2006年・2012年・2015年・2018年制度改革の課題
- ・介護予防と地域支援事業の課題把握
- ・在宅医療と地域包括ケアの機能と役割の理解
- ・一人暮らし高齢者・認知症高齢者支援の実態把握
- ・意思能力のない人の医療同意についての問題提起

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

秋学期前半

回	テーマ	内容
第1.2回	オリエンテーション&高齢者をとりまく諸情報の整理と社会保障・自治体福祉政策	(1) 社会変化と社会保障 (2) 自治体福祉政策の必然性 (3) 2020年介護保険改正後の議論
第3.4回	介護保険制度(1) ☆介護保険制度の理念と課題 (介護保険によって自治体福祉政策がどのように変わったか)	発表 A (1) 措置から契約へ (2) 介護の社会化 (3) サービスの質の担保と効率（民間サービスの参入と課題・ケアマネジメントの課題） (4) 介護保険事業計画・高齢者保健福祉計画の策定 (5) 給付と負担・保険料決定の仕組み
第5.6回	介護保険制度(2) ☆介護保険改正のめざしたもの (介護保険における給付と負担)	発表 B (1) 介護保険と地方分権（三位一体改革の影響） (2) 介護予防・日常生活支援総合事業とは何か（地域支援事業創設） (3) 崩れた給付と負担のバランス (4) 自立支援介護とは何か

第7.8回	介護保険制度(3) ☆地域包括支援センターと介護予防の政策的効果	発表 C (1) 地域包括支援センターの創設 (2) 地域包括ケアとは何か (3) 介護予防・日常生活支援総合事業の課題 (4) 医療との連携の形 (5) 地域の見守りネットワーク
第9.10回	介護保険制度(4) ☆介護サービス事業の現状と課題 (介護保険外の高齢者ケアの課題は何か・地域ネットワークについて)	発表 D (1) 高齢者虐待・介護放棄 (2) 独居の認知症高齢者 (3) 生活支援の難しさ (4) 精神疾患者の支援
第11.12回	介護保険制度(5) ☆施設サービスと地域密着サービス (在宅と施設高齢者サービスの選択)	発表 E (1) 高齢者福祉施設の種類と目的 (2) 特養を利用する人とは (3) ユニット個室化の課題 (4) 地域密着サービスとは (5) 住んでみたい施設づくり
第13.14回	高齢者ケア ☆判断能力を欠く状況における権利擁護 (介護保険外の高齢者ケアの課題と地域ネットワークについて)	発表 F (1) 成年後見制度の概要 (2) 成年後見制度利用支援事業・生活支援事業（旧地域福祉権利擁護制度） (3) 市民後見制度の課題 (4) 任意後見制度と法人後見 (5) 判断能力を欠く者の医療侵襲行為の阻却事例

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とする。

内容としては、テキストを読み問題をまとめる。

事後学習は、授業の内容から質問をまとめ、次回の授業時に質問をする。

【テキスト（教科書）】

教科書は、「介護保険制度の強さと脆さ」、鏡論編著、公人の友社刊、2017年4月発行、定価2600円＋税を使用する。

さらに適宜参照資料としてプリント配布する。

【参考書】

「総介護社会」岩波新書刊 小竹雅子著

「総括・介護保険の10年～2012年改正の論点～」公人の友社刊 鏡 論編著

「自治体現場から見た介護保険」公人の友社刊 鏡 論著

【成績評価の方法と基準】

授業での発表及びディスカッションによる総合評価とする。課題発表については、70%以上の配点とする。その他は講義中の発言及び質問、さらにディスカッション等を30%の評価対象とする。

【学生の意見等からの気づき】

アンケートによる要望に沿うように対応する。また、初回のオリエンテーションの際に、院生からの要望について意見を徴収する。

【学生が準備すべき機器他】

適宜映像資料を活用する。

【その他の重要事項】

オフィスアワーは、授業終了後実施する。

自治体福祉行政に身を置き、介護保険制度の創設及び運営にかかわった実務経験を生かして、現場での知見を基に院生に情報提供していく。

【担当教員の専門分野】

自治体福祉政策、介護保険制度、地方自治

【Outline and objectives】

We discuss and understand issues and responses based on actual issues in local government sites on the issues of care insurance system and the elderly care of local governments.

The social welfare policy in the municipality begins with the history that the benefit is provided to the poor and the anti-poverty as the agency delegation clerical work and measures are limited to the target person. However, it became a system to support the life of the elderly, etc. by the universal social insurance system today. Moreover, the subject is a municipality. The policy that the elderly can live with peace of mind is about the balance of benefits and burdens between generations. In local Government policy "Benefits and Burdens" discuss the relationship between.

行政法事例研究

牧瀬 稔、橋田 誠

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

地方創生の時代は、地方自治体の役割が強く求められます。そこで、この授業は自治体行政法（条例）を中心に、条例の「解釈論」ではなく「政策論」という観点から進めます。この授業は、条例を紹介しつつ、政策法務の観点から講義を進めます。自治体行政法の視点にたった政策づくりという講義を実施します。

【到達目標】

条例をはじめ自治体の政策づくりは、地域志向かつ住民参画などを基調に創出されており、自治体ごとに異なるため、能動的な魅力があります。それら事例を知ることで、受講生が政策形成能力を身につけることを目標とします。政策形成能力とは「問題を発見し、その問題を解決するため、一定の政策目標を立て、それを実現するために必要なしくみ・しかけをつくり上げる能力」と捉えます。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻公共マネジメントコースにおいては「DP2」「DP3」に関連している。ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻政策研究コースにおいては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、特に「DP2」は特に強く関連している。

【授業の進め方と方法】

本授業は原則対面で開催します。授業は講師による概説の後、受講生の発表と討論によって進めます。前半は講師からの講義（問題提起）とし、後半は参加者での討議とします。受講生は政策条例の事例を取り上げ、その事例に関し政策的視点から考察します。そして授業の最終日に、プレゼンテーションしてもらいます（受講生と相談して決定します）。授業は、適宜、リアクションペーパーの提出を求めます。またフィードバックは授業の前後に時間をとり実施します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

春学期後半

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス、講義の概要 説明など	この授業の進め方について説明する。
第2回	政策条例の概要	条例とは何か、政策的意味を持つ条例、議員提案による条例の制定などを紹介する。
第3回	特徴的な政策条例	政策条例の実際、政策条例を成功するノウハウとは何か。特徴的な政策条例を紹介する。
第4回	政策条例の効果	生活安全条例、交通安全条例などの政策条例の効果を言及する。
第5回	政策条例の効果	迷惑防止条例、地域産業等の振興条例などの政策条例の効果を言及する。
第6回	政策条例の限界と意義	政策条例の限界や意義について、事例を踏まえながら、紹介する。
第7回	受講者による報告・まとめ	受講者が政策条例を選択し、その効果や限界などを報告する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

自らの生活している地方自治体の政策条例に関心を持ってください。本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

使用しません。授業は、毎回資料を配付します。

【参考書】

牧瀬稔（2008）『議員が提案政策条例のポイント～政策立案の手法を学ぶ』東京法令出版

牧瀬稔（2009）『条例で学ぶ政策づくり入門』東京法令出版

牧瀬稔（2017）『「型」からスラスラ書ける あなたのまちの政策条例』第一法規

【成績評価の方法と基準】

成績評価は、最終報告（プレゼンとレポート）60%、討議参加40%とします。出席は、出席することが前提であるため、評価基準には入れていません。

【学生の意見等からの気づき】

毎年、学部卒業から進学してきた学生、社会人の学生をはじめ年齢も幅広い状況があります。そのため、この授業は「基本的」な内容を進めるようにしています。

【学生が準備すべき機器他】

特にありません。

【その他の重要事項】

授業予定は、おおよそ、上記の流れを考えています。受講生と相談し、講義内容の変更も考えます。また、その時のトピックスとなっている事例を取り上げ、講義することも検討しています（その場合は、上記の流れが変更・修正されます）。なお、教育効果を狙うため、受講生と相談して、オンライン（Zoom）で実施する回も検討します（原則は対面で開催します）。

【担当教員】牧瀬稔】

法政大学大学院博士課程修了。博士（人間福祉）。自治体政策学、地域政策を専門とし、北上市、東大和市、西条市等の自治体の政策アドバイザーをしています。

【担当教員】橋田誠】

弘前大学大学院博士課程修了。博士（学術）。行政法、地方自治論を専門とし、地方と大都市部の関係を研究テーマに弘前大学客員研究員を務めています。

【Outline and objectives】

In the age of regional revitalization, the role of local government is strongly required. Therefore, this lesson will focus on the ordinance, not on the "interpretive theory" of the ordinance, but on the "policy theory". In this class, we introduce the ordinance and proceed with the lecture from the viewpoint of policy and legal affairs. We carry out lecture called policy making from viewpoint of the regulations.

POL500P1 - 113

コミュニティ制度論

西谷内 博美

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

コミュニティとは、合併によって制度的枠組を失った身近な地域のまとまりである。という観点から、このコミュニティを再制度化する政策ないし制度を国際比較的に考察する。これによってコミュニティ政策というものについて基礎的な理解を得ることが目的である。

【到達目標】

・「参加」と「協働」、「地域的まとまり」や「都市内分権」といった概念を獲得、あるいは再考・整理することで、さまざまなコミュニティの制度について比較考察することができる。
・コミュニティの制度について、それぞれの地域の歴史文化的特性を踏まえたうえで、制度の特徴や課題について考察し説明することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻公共マネジメントコースにおいては「DP2」「DP3」に関連している。ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻政策研究コースにおいては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、特に「DP4」は特に強く関連している。

【授業の進め方と方法】

対面授業。おおそ、講義が2/3、受講生による課題発表が1/3程度です。講義は、think-pair-share等アクティブラーニングの手法を取り入れ、受講生の主体的な参加を促します。課題発表へのフィードバックは授業内で実施されます。すなわち、担当となる発表のさいに、発表された内容についてクラス全体で検討・議論をするなかで、課題の取り組みに対する量的・質的なフィードバックも行われます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

秋学期前半

回	テーマ	内容
第1回前半	オリエンテーション	授業の内容と進め方を共有する。
第1回後半	コミュニティ制度論の視角	たとえば「参加」と「協働」といった、コミュニティの制度を分析するための本授業におけるキー概念を共有する。
第2回前半	日本におけるコミュニティの制度化	日本におけるコミュニティの制度について概観し、考察する。
第2回後半	地域運営の条件	ミルトン・コトラーの4条件について考察する。
第3回前半	ドイツにおけるコミュニティの制度化	ドイツにおけるコミュニティの制度について概観し、考察する。
第3回後半	自治会・町内会	日本の自治会・町内会に関して、民間原理の側面と、制度的な側面について考察する。
第4回前半	スコットランドにおけるコミュニティの制度化	スコットランドにおけるコミュニティの制度について概観し、考察する。
第4回後半	ライティングの技法	期末レポートの課題を提示するとともに、英米型のライティングメソッドを共有する。
第5回前半	フランスにおけるコミュニティの制度化	フランスにおけるコミュニティの制度について概観し、考察する。
第5回後半	インドにおけるコミュニティの制度化I	インド農村部におけるコミュニティの制度について概観し、考察する。
第6回前半	アメリカにおけるコミュニティの制度化	アメリカにおけるコミュニティの制度について概観し、考察する。
第6回後半	インドにおけるコミュニティの制度化II	インド都市部におけるコミュニティの制度について概観し、考察する。
第7回前半	フィリピンにおけるコミュニティの制度化	フィリピンにおけるコミュニティの制度について概観し、考察する。
第7回後半	日本におけるコミュニティ政策の展開	日本におけるコミュニティ政策の展開を概観し、その制度的特徴及び今後の課題について考察する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

講義内容を予習・復習し理解を深めてください。とりわけ第1回後半で実施するキー概念の共有は極めて重要です。また、各自、担当課題の報告準備（学習、調査、資料作成）をしてもらいます。

【テキスト（教科書）】

特に指定しません。

【参考書】

名和田是彦編, 2009, 『コミュニティの自治』日本評論社。

【成績評価の方法と基準】

期末レポート35%、課題報告（レジュメ作成を含む）35%、授業内での討論・発言30%

【学生の意見等からの気づき】

本年度授業担当者変更によりフィードバックできません

【学生が準備すべき機器他】

LMSを通じて資料配布を行います。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞環境社会学、コミュニティ論、国際協力論

＜研究テーマ＞廃棄物管理、開発と社会

＜主要研究業績＞

2018『白老における「アイヌ民族」の変容』東信堂。

2016『開発援助の介入論』東信堂。

2011『デリー準州のバギダリ（Bhagidari）政策』『国際開発研究』67-80。

【Outline and objectives】

I start in this lecture from the theoretical idea that the "community" in the context of Japanese policy making means the neighborhood unit which lost its institutional framework through the merge. I will analyze the history and the recent tendency of Japanese community policy, paying special attention to international comparison with those in European, American and Asian countries.

日本政治史研究

明田川 融

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

近年、あらためて日本政治史において対日占領期の持つ意味を問う研究が上梓されている。本授業は、連合国—といっても主力は米国であったが—による対日占領と、米国による琉球／沖縄占領とを比較しながら、第二次大戦後の日本占領について再検討・再評価を試みるものである。いわゆる日本本土占領および琉球／沖縄占領にかかわる一次資料・研究論文・文献の精読を踏まえたうえで、受講生と議論を行いたい。

【到達目標】

受講生は、占領史に関する先行研究を踏まえたうえで、日本政治史における対日、対琉球／沖縄占領の光と影の所産を的確に把握・評価できるようにすることが求められる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻公共マネジメントコースにおいては「DP1」「DP3」に関連している。ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻政策研究コースにおいては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、特に「DP4」は特に強く関連している。

【授業の進め方と方法】

テキストとしては、福永文夫『日本占領史 1945-1952 東京・ワシントン・沖縄』（中央公論新社、2014年）および櫻澤 誠『沖縄現代史 米国統治、本土復帰から「オール沖縄」まで』（中央公論新社、2015年）を精読し、議論する。なお、2回目以降となるが、授業のはじめに課題（試験やレポート等）に対して講評し、受講生に対してフィードバックを行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	対日占領性政策の立案	SWINCC150 シリーズ、JCS1380 シリーズ、ボツダム宣言、ブラックリスト作戦の形成
第2回	対日占領のはじまり	その究極目的
第3回	統治体制の变革	象徴天皇制と主権在民への道
第4回	双面神の憲法構想	「平和憲法」と沖縄要塞化の相関
第5回	対日早期講和の提唱と安保問題	いわゆる芦田メモと沖縄の将来に関する昭和天皇メッセージ
第6回	戦後政党政治の起動	占領初期における本土と沖縄の政党活動
第7回	対日政策の転換	PPS28 シリーズ～NSC13 シリーズの形成
第8回	講和論争	日米で二分される国論
第9回	講和準備研究作業	NSC60/1 への道、A・B・C・D 作業
第10回	講和交渉	日米の外交指導
第11回	対日講和条約の成立	第3条（潜在主権方式）の形成を中心に
第12回	日米安保条約の成立	「安保条約の論理」を中心に
第13回	サンフランシスコ体制	その光と影を考察する
第14回	日本、琉球／沖縄占領とは何だったのか	日本政治史における占領の意味を考察する

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

この授業を履修する大学院生は、自ら関連する文献や資料を読んだり、レポート課題に取り組んだりすることにより、各々が適当と判断する時間の、授業時間外学習が必要となる。参考までに、大学設置基準によれば、この授業の準備学習・復習時間は各2時間が標準となる。

【テキスト（教科書）】

福永文夫『日本占領史 1945-1952 東京・ワシントン・沖縄』中央公論新社、2014年。
櫻澤 誠『沖縄現代史 米国統治、本土復帰から「オール沖縄」まで』中央公論新社、2015年。

【参考書】

思想の科学研究会編『共同研究／日本占領』徳間書店、1972年。
竹前栄治『GHQ』岩波書店、1983年。
五百旗頭真『米国の日本占領政策 戦後日本の設計図』上・下、中央公論社、1985年。
坂本義和・R. E. ウォード編『日本占領の研究』東京大学出版会、1987年。
袖井林二郎『吉田茂＝マッカーサー＝往復書簡集 1945-1951』法政大学出版局、2000年。
賀茂道子『ウォー・ギルト・プログラム GHQ 情報教育政策の実像』法政大学出版局、2018年。

【成績評価の方法と基準】

平常点のみ（100%）。やや詳しくは、授業への積極的な貢献度（出席等）、報告（レジュメ）の内容やプレゼンテーションぶり、議論のようすなどをみて総合的に判断する。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【学生が準備すべき機器他】

学習支援システムやオンラインによる授業に参加できるような機器およびネット環境

【その他の重要事項】

重要なお知らせ（2021年2月20日）

新型コロナウイルスにより、授業の開始日や方法等につき重要な連絡がなされる可能性がありますので、受講生は本 Web シラバスおよび学習支援システムを小まめにチェックするようにしてください。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 日米関係史、日本政治外交史

<研究テーマ> 日米地位協定の成立過程
沖縄と日米安保体制の歴史
日本と核兵器との関係史

<主要研究業績および刊行物>

・『日米行政協定の政治史—日米地位協定研究序説—』法政大学出版局、1999年。
・『沖縄基地問題の歴史—非武の島、戦の島—』みすず書房、2008年（第30回沖縄協会・沖縄研究奨励賞【社会科学部門】受賞）。
・『日米地位協定—その歴史と現在—』みすず書房、2017年。
・波多野澄雄・河野康子監修（明田川補）『沖縄返還関係資料』（第1回配本分、全7巻）現代史料出版、2017年。
・『核兵器と『国民の特殊な感情』』1～6（雑誌『みすず』に2013年6月号より2015年8月まで不定期連載）。
・ジョン・ハーシー『ヒロシマ 増補版』法政大学出版局、2003年（共訳）。
・ジョン・W. ダワー著『昭和 戦争と平和の日本』みすず書房、2010年（監訳）。
・ジョン・W. ダワー／ガバン・マコーマック著『転換期の日本へ 「バックス・アメリカナ」か「バックス・アジア」か』NHK出版、2014年（共訳）。
・『占領期年表 1945-1952 年 沖縄・憲法・日米安保』創元社、2015年（監修）。
近年、広島・長崎・ビキニを経験した日本の核兵器に対する「国民感情」と政府の安全保障政策との連関について研究をまとめるべく、資料収集や分析視覚の検討を行っている。

また、1950年代半ばの沖縄で米軍により強行された土地強制収用にさいして、住民代表である立法院（県議会のような組織）がなしたことを、なしかつたことの実証にも取り組んできた。

現在は、波多野澄雄・筑波大学名誉教授ならびに河野康子・法政大学名誉教授による監修で刊行が進められている沖縄施政権返還交渉関係資料集の編集補佐がおもな仕事となっている。

【Outline and objectives】

In recent years, remarkable literatures on Allied occupation of Japan proper and American occupation of Ryukyu (Okinawa) islands have been published. Political history of Japan 1 is an essay to revise and re-evaluate occupation of Japan. In this class, comparison perspective between occupation of Japan proper and that of Ryukyu (Okinawa) is used. Students must read a lot of articles, literatures, and historical documents.

POL500P1 - 115

地方自治論

土山 希美枝

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

政策は、こんにちの社会（都市型社会）で生きるひとびとの「いとなみの基盤」である。

都市型社会の構造と特質を知り、こんにちにいたるまで歴史的にどのような政策類型が蓄積されてきたかを理解し、政策主体と〈政策・制度〉のありかたを理解する。そのうえで、政策過程がどのように進むのかを学ぶ。

この講義を通じて、各自の研究対象とする政策分野を政策学からとらえるための視角を養うこととなる。

【到達目標】

この講義の到達目標は以下である。

- ・公共政策が展開される前提であるこんにちの社会構造（都市型社会）の特質を理解する
- ・歴史的に形成されてきた政策類型をふまえる
- ・公共政策の過程の基礎を学び
- ・各自の研究対象とする政策分野をとらえる政策学の視角を得る

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻公共マネジメントコースにおいては、「DP1」「DP4」に関連している。ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻政策研究コースにおいては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、特に「DP4」は特に強く関連している。

【授業の進め方と方法】

テキストの読解と議論、考察により進行する。受講生はテキストの指定された章について分担して要点と論点をまとめ、教員が解説しながら議論と考察をすすめる。必要に応じて補足資料が提供される。報告、議論とそれらへのコメントによりフィードバックする。なお、原則として対面講義とする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

秋学期後半

回	テーマ	内容
第1回	導入	の講義の目的、テキストの概説と進めかた、報告の分担など
第2回	講義「政治・政策と市民」	都市型社会における〈政策・制度〉と市民の関係を学ぶ（第1章）
第3回	都市型社会の特性	都市型社会と政策の特性を学ぶ（第2章）
第4回	都市型社会の成立	政策の歴史と類型を学ぶ（第3章）
第5回	政策の資源：政策主体	都市型社会における政策主体の多様化を学ぶ（第6章）
第6回	政策の資源：政治技術と政策手法	政治技術と政策手法を学ぶ（第7章）
第7回	政策の資源：政府と資源の調達	政策の資源とその調達、政府の機能の転換を学ぶ（第8章）
第8回	政策型思考の特質	政策型思考の特質と論理を学ぶ（第9章）
第9回	政治思考の特質	政治思考と〈決断〉の特質を学ぶ（第10章）
第10回	政策過程：決定	政策決定を学ぶ（第12章）
第11回	政策過程：開発と管理	政策開発と管理を学ぶ（第13章）
第12回	政策過程：実施	政策実現の手法と手続きを学ぶ（第15章）
第13回	政策過程：評価	政策の効果、転換を学ぶ（第16章）
第14回	講義と総括	講義「都市型社会の政策過程とその理論」（第20章）

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とする。テキスト、配布資料、参考資料の精読を期待する。また、日頃から時事問題にたいする関心と良質な情報の収集に勤むことを期待する。

【テキスト（教科書）】

松下圭一『政策型思考と政治』東京大学出版会、1991年。

【参考書】

土山希美枝『高度成長期「都市政策」の政治過程』日本評論社、2007年。
石橋章市朗・佐野亘・土山希美枝・南島和久『公共政策学』ミネルヴァ書房、2018年。

【成績評価の方法と基準】

授業への参加：議論への参加（25%）、コメント（25%）の様子、
授業の成果：授業内での報告（25%）、期末レポート（25%）の各評価により判断する。

【学生の意見等からの気づき】

本年度が科目の初年度であるため、反映するべき意見を受け取っていない。

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉公共政策、地方自治、政治学

〈研究テーマ〉社会構造と政策・政治の変容、自治体政策、自治体議会論。

〈主要研究業績〉『高度成長期「都市政策」の政治過程』日本評論社、2007年。
『質問力でつくる政策議会』公人の友社、2017年。

【Outline and objectives】

Policies (and their systems) are the "foundation of life" for people living in today's society (urban-type society).

We'll learn the structure and characteristics of urban-type society, and understand the policy process.

It will develop your perspective for your research from the perspective of policy studies.

自治体経営論

谷本 有美子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

「自治体経営」が意味する概念は幅広い。1990年代以降、自治体において「経営」の概念が積極的に登場したのは、NPM理論の影響が多である。それらは主に行政改革の側面から、民間企業の経営手法を新たな行政スタイルとして導入を図る動きとして活発化した。また、大都市による「都市経営」や地域開発に伴う「地域経営」など、自治体の事業者的な側面に着目した概念も広義の「自治体経営」と解しうる。加えて、2000年代以降は政策実施を民間セクターが担う例が拡大し、政府セクターと民間セクターとの境界線が曖昧となりつつあることから、近年の自治体経営は「公共経営」としての色彩を強めている。

そこでこの授業では、まず「公共経営」に関わる基本的な制度と理論を学ぶ。その上で、21世紀の自治体が直面する「地域の持続可能性」という公共課題を前提に、自治体が民間セクターとの連携や地域資源の活用を図る際の政策責任や民主的統制の問題も視野に入れながら、これからの自治体経営とガバナンスのあり方について理念的に検討する。

【到達目標】

- ・自治体経営に関わる基本的な理論や制度を理解する
- ・多角的な観点から制度運用を研究する術を身につける
- ・公共政策の制度設計に関わる理念的な思考力を養う

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻公共マネジメントコースにおいては「DP3」「DP4」に関連している。ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻政策研究コースにおいては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、特に「DP2」は特に強く関連している。

【授業の進め方と方法】

この授業は対面授業で行う。

前半は、テキストと参考書等を利用した講義と受講生間の討議を通じ、公共経営に関わる基本的な制度や理論、及び運用の実際についての理解を深める。後半は、受講生による事例報告や論点提起を中心にテーマに即した討議を行い、既存のしくみや制度論を超えた多角的な観点から自治体経営のあり方や今後の可能性について考察する。

発表やレポート等に対する講評は授業内に適宜行い、全体にフィードバックします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

春学期後半

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクションー自治体経営と公共経営	既存の自治体経営論や公共経営論の視座を俯瞰する（テキスト第1章参照）
第2回	行政改革とNPMの潮流	日本の行政改革の歴史や傾向と90年代のNPM改革を把握する（テキスト第2章参照）
第3回	民間委託の歴史と現在	自治体における民間委託の展開を学び、運用の課題を検討する（テキスト第3章参照）
第4回	第三セクターとNPOの動向	民間との連携による公共サービスの供給という観点から、自治体による第三セクターとNPOの活用動向を検討する（テキスト第4章参照）
第5回	PFI・PPPと市場化テストの現在	2000年代に政府主導で促進された民間活用の仕組みと導入の実際を検討する（テキスト第5章及び第6章参照）
第6回	指定管理者制度・独立行政法人制度の効用	施設の管理部門への民間活用や政策実施部門の組織分離が導入された現状を踏まえ、自治体経営への効用を検討する（テキスト第7章及び第8章参照）
第7回	公務従事者の多様化と人材活用	非正規職員の増加や会計年度任用職員制度が導入される中での人的資源のマネジメントを考察する（テキスト第12章参照）
第8回	政策評価と議会の役割	自治体行政における政策評価制度と二元代表制を担う議会によるガバナンスとの関係性について考察する（テキスト第11章参照）
第9回	人口減少時代の都市政策	都市政策に関わるゲストスピーカーの報告
第10回	都市政策と自治体経営	第9回の報告を受けて、全体で討議を行う
第11回	持続可能な地域社会と多様な協働	テーマに関する事例報告を受講生が行い、全体で討議を行う

第12回	自治体におけるAI活用	テーマに関する事例報告を受講生が行い、全体で討議を行う
第13回	自治体の政策責任と民主的統制	自治体による政策責任や民主的統制についての理念を踏まえ、前回までの自治体経営のあり方についての討議を振り返りながら、総合的に検討する
第14回	自治体間の協体制と「公・共・私」のベストミックスを考える	近年、政府が提唱する公共サービスの新たな提供手法について、ガバナンスの観点から考察する

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

事前にテキストを通読し、複数の参考書を読む。

事例報告や論点提起のための準備を行う。

討議の論点事項を中心に追加情報を収集し、精査する。本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

外山公美ほか(2014)『日本の公共経営－新しい行政』北樹出版

【参考書】

稲継裕昭(2013)『自治体行政の領域－「官」と「民」の境界線を考える』ぎょうせい

片木淳・藤井浩司(2012)『自治体経営学入門』一藝社

トニー・ボベール、エルク・ラフラー／みえガバナンス研究会訳(2008)『公共経営入門 公共領域のマネジメントとガバナンス』公人の友社

松永佳甫編著(2015)『公共経営学入門』大阪大学出版会

武藤博己編著(2004)『【自治体改革◆第2巻】自治体経営改革』ぎょうせい

ヤン＝エリック・レーン／稲継裕昭訳(2017)『テキストブック 政府経営論』勁草書房

その他、授業中に適宜紹介する。

【成績評価の方法と基準】

授業内報告30%、平常点20%、最終レポート50%

【学生の意見等からの気づき】

受講生からの質疑を踏まえ、後日授業で補足説明や追加資料の提供を行います。

【学生が準備すべき機器他】

特になし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>行政学、地方自治、市民自治

<研究テーマ>中央政府における地方自治、国による自治体統制、人口減少時代の自治体政策と市民自治、大都市行政区の民主的統制

<主要研究業績>

『「地方自治の責任部局」の研究－その存続メカニズムと軌跡 [1947-2000]』(2019) 公人の友社

『「透明性」・「誠実性」・「戦術性」－「転職」を迫られる地方公務員』(2001)『分権社会と協働』(共著) ぎょうせい

『国による「上から」の自治体統制の持続と変容』(2008)『分権改革の動態』(共著) 東京大学出版会

『大都市行政区の「区民会議」と市民参加のアジェンダ－神奈川県内の指定都市を題材に』(2016)『横浜市立大学論叢 人文科学系列』第67巻第1号

【Outline and objectives】

The concept of "management of local government" is broad. The NPM theory which was introduced to Japan in the 1990s, a new administrative style, were made use of mainly in the aspect of administrative reform, as a movement to introduce the management methods of private companies. Such as "city management" by large cities and "regional management" accompanying regional development, although they are focus on the business aspects of local governments, can also be interpreted as "management of local government" in a broad sense. The phenomenon that private sector and the voluntary sector has been taking charge of policy implementation since the 2000s raised needs of the local governments to work on "public management". First, students learn the basic systems and theories related to "public management". Then, assuming the public issues of "local sustainability" that local governments face, we'll consider the management of local government which cooperating with the private sector and using regional resources, while taking into account the issues of policy responsibilities and democratic control.

比較公務員制度研究

申 龍徹

実務教員：

[Outline and objectives]
Interdisciplinary understanding of comparative bureaucracy
International Comparison of Public Service System Reform

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

比較官僚制の学際的な理解及び公務員制度改革の国際比較

【到達目標】

- ①官僚制に対する学際的理解を深めるとともに、官僚制がもつ現代的な病理現象の発生メカニズムが理解できる。
- ②政府・行政機能の転換が求められる中、公的セクターの担い手である公務員制度の現状と改革課題について、国際比較の観点から比較分析できる。
- ③官僚制及び公務員制度における日本の特徴を識別し、具体的かつ個別的な対応策を提案できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻公共マネジメントコースにおいては「DP3」に関連している。ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻政策研究コースにおいては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、特に「DP4」は特に強く関連している。

【授業の進め方と方法】

この授業は、前半の講義と後半は受講者の発表による。講義では、比較官僚制研究の学際的な理解を深めることにより、政府官僚制の病理現象に対する分析能力の向上を目指すとともに、政府や行政機能の転換が求められている現代社会における公的サービスの担い手のあり方について e-HRM などの人的資源管理などの手法も取り入れた官民比較、OECD 加盟国を中心とする国際比較を行う。発表は、比較官僚制に関する先行研究の紹介・分析、事例分析による学際的な分析手法の習得、個人が設定した課題の発表を中心に構成する。受講生には、期末に課題レポートの提出及びその発表を求め、質疑応答を行う。課題レポートについては、学際的なコメントを付けてフィードバックする。原則として対面で授業を実施すること、新型コロナウイルス感染状況を踏まえ、十分な安全性が確保されないと判断された場合には、オンラインに切り替える。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期前半

回	テーマ	内容
1.2 回目	比較官僚制研究の意義、特性、研究動向	比較官僚制理論の国際的・国内的状況を検討する。
3.4 回目	先行研究の分析①	官僚制の病理現象と行政文化との関係
5.6 回目	先行研究の分析②	戦後の公務員法制の形成と国際比較について理解する。
7.8 回目	現状分析①	上級職公務員制度の国際比較（英・米・仏・独・日・韓）
9.10 回目	現状分析②	公務員制度改革動向の国際比較（HRM、成果主義、人事評価）
11.12 回目	課題発表①	受講者の課題発表と討論
13.14 回目	課題発表②	受講者の課題発表と討論

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

事前に講義レジメと関連する参考資料などをアップする。

【参考書】

事前に講義レジメと関連する参考資料などをアップする。

【成績評価の方法と基準】

質問力 (25 %)、調査力 (25 %)、構成力 (25 %)、プレゼンテーション (25 %) の 4 つの要素による絶対評価

【学生の意見等からの気づき】

後半では受講生の課題発表が必須ですので、発表テーマなどを事前に準備してください。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 行政学、比較行政
<研究テーマ> 比較自治行政、行政文化
<主要研究業績>

『現代日本の公務員人事—政治・行政改革は人事システムをどう変えたか』（執筆分担、第一法規、2019）

『公務員制度改革という時代』（執筆分担、敬文堂、2017）

『東アジアの公務員制度』（共編著、法政大学出版社、2013）

『東アジアの行政文化研究の形成と課題：文化決定論から〈文化理論〉及び〈競争価値モデル〉の応用へ』（単著、公共政策志林、2014）

『アジアの中の官僚制度：歴史と現在』（共著、勉誠出版、2011）

比較自治行政研究

申 龍徹

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

自治行政をめぐる学際的な理論と国際動向の比較

【到達目標】

- ①比較自治行政研究の学際的な動向を理解できる。
- ②ローカルガバナンスの形成過程、改革動向に関する国際比較を通じて自治行政の国際化・世界化の推移が分析できる。
- ③自治行政が抱える様々な個別課題の国際比較を通じて、その解決方法を提案できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻公共マネジメントコースにおいては「DP1」「DP3」に関連している。ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻政策研究コースにおいては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、特に「DP4」は特に強く関連している。

【授業の進め方と方法】

この授業は、前半の講義と後半の受講生の発表で構成する。講義では、自治行政研究の学際的な基盤である主要概念の分析のほか、自治行政の制度・政策の国際比較を通じて自治行政の国際化（世界化）現象を理解するとともに、自治行政をめぐる制度改革や政策競争の現状把握を利用して、現実社会において求められている政策課題についてその解決方法の提案を目指す。受講者の発表は、個人の関心に沿った課題設定を行い、その解決策を内外の事例分析により得られた知見を利用し、新しい政策案の提示が求められる。受講生には、期末に課題レポートの提出及びその発表を求め、質疑応答を行う。課題レポートについては、学際的なコメントを付けてフィードバックする。原則として対面で授業を実施すること、新型コロナウイルス感染状況を踏まえ、十分な安全性が確保されないと判断された場合には、オンラインに切り替える。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

春学期前半

回	テーマ	内容
1.2 回目	オリエンテーション	比較自治行政研究の意義、範囲、背景、方法
3.4 回目	概念の整理	自治体学、自治体行政学、ローカルガバナンスなど、類似する概念の比較
5.6 回目	政府間関係（IGR）	政府間関係の国際比較（英米独仏）
7.8 回目	国際比較 A	地方分権と自治体改革の動向
9.10 回目	国際比較 B	公共政策及び行政サービス改革
11.12 回目	事例分析 A/B	受講者の事例発表・討論
13.14 回目	事例分析 C/D	受講者の事例発表・討論

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

事前に、講義レジュメ及び関連する参考資料などをアップする。

【参考書】

事前に、講義レジュメ及び関連する参考資料などをアップする。

【成績評価の方法と基準】

質問力（25%）、調査力（25%）、構想力（25%）、プレゼンテーション（25%）の 4 つの要素による絶対評価

【学生の意見等からの気づき】

後半において受講生の課題発表が必要ですので、事前に発表テーマなどを考えておいてください。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 行政学、比較行政

<研究テーマ> 比較自治行政、行政文化

<主要研究業績>

『東アジアの公務員制度』（共編著、法政大学出版局、2013）

『東アジアの行政文化研究の形成と課題：文化決定論から〈文化理論〉及び〈競争価値モデル〉の応用へ』（単著、公共政策志林、2014）

『アジアの中の官僚制度：歴史と現在』（共著、勉誠出版、2011）

【Outline and objectives】

Comparison of interdisciplinary theory and international trends over autonomous administration

防災危機管理研究

鍵屋 一

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

東日本大震災の発生以後、国土強靱化など防災対策の重要性が叫ばれている。そして、災害には大地震、風水害、火山など自然災害、原子力災害など大規模な事故、テロなど人為的災害など多様に存在する。現代は危機の時代であり、防災危機管理は、市民、行政、団体、企業にとって避けて通れないテーマとなっている。本授業は、大学院生が防災危機管理に強い人材になるよう支援する。

【到達目標】

- ①日本の国・自治体の防災危機管理の現状と課題を理解する。
- ②現状の政策と被害軽減の具体例を研究する。
- ③今後の国・自治体の防災危機管理政策のあるべき姿を研究する。
- ④大学院生自身の危機対応力を高める。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻公共マネジメントコースにおいては「DP3」に関連している。ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻政策研究コースにおいては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、特に「DP4」は特に強く関連している。

【授業の進め方と方法】

授業形式☑️対面授業

授業では、自然災害を中心に防災対策の現状と課題を理解し、現実的な解決政策を研究する。その際、わが国の防災文化、法制度、行政構造、市民意識を念頭において政策的アプローチを重視した講義を行う。

また、ワークショップ形式も併用し、自らの頭で考え、仲間や講師と議論することで、より深い理解につながるように努めていく。授業の最後には、学生からの質問、コメントを求め、その場でフィードバックを行う。また、授業後であってもメール等による質問も受け付けてフィードバックを行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

春学期前半

回	テーマ	内容
1	ガイダンス及び国・自治体の防災危機管理政策の概観	講師の自己紹介、防災危機管理の講義の狙い、概要の説明。PPTおよび中央防災会議資料を使用して国、自治体の防災危機管理政策の全体像を説明する。
2	大災害時の市民、行政の活動	阪神淡路大震災時の対応をした行政職員の生々しい記録を読む。その後、グループワークでKJ法を使用しながら大災害の市民、行政の行動の実態を理解し、課題を抽出する。
3	地震防災と耐震化	地震防災の最重要課題である耐震化の政策の変遷について解説する。現在の、専門家や地域の取り組みを紹介しながら、今後の推進方策を検討する。
4	災害時要配慮者支援	高齢者や障害者は、災害時には特別な支援が必要である。事前どのような準備が必要かを説明し、それが日常生活の延長上にあり、また地域コミュニティの絆を高めた事例を検討する。

- | | | |
|---|------------------|---|
| 5 | 防災教育、ボランティア | 東日本大震災では、防災教育に取り組んだ岩手県沿岸地域の子ども生存率が極めて高かった。防災教育の内容と効果を考える。また被災地においてボランティアの存在感が高まっている。ボランティアがどのように進化したかを議論する。 |
| 6 | 地域防災計画、防災条例、政策評価 | 東日本大震災を受けて地域防災計画の見直しが進んでいる。その具体例を検討する。また防災条例の制定過程とその効果について議論する。防災の政策評価のあり方と活用について検討する。 |
| 7 | 企業の事業継続（BCP） | 企業は災害時に災害対応するだけでなく、自らの事業を継続していかなければならない。その計画がBCPであり、その内容と効果について検討する。 |
| 8 | 行政のBCPと地域継続計画 | 行政も災害対応だけでなく通常の業務もBCPで継続する必要がある。さらに、行政の業務だけでなく地域全体が持続可能な計画を作成する可能性について検討する。 |

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

防災政策は生きているものであり、最新の状況を把握することが重要である。内閣府「防災情報のページ」「防災白書」を事前に見ておいていただきたい。

また、ボランティアなどの活動体験があれば望ましい。

【テキスト（教科書）】

教科書は使用しない。授業では、PPTや論文を使用するが、その資料を毎回配付する。

【参考書】

鍵屋一「地域防災力強化宣言」ぎょうせい・2005年

鍵屋一「よくわかる自治体の地域防災・危機管理」学陽書房・2019年令和2年「防災白書」

【成績評価の方法と基準】

質疑への参加 70%（講義中の質疑、意見表明などを積極的に行ったものを高く評価する）

リアクションペーパー等 30%

【学生の意見等からの気づき】

実務体験が評価されているので、今後もリアリティある講義を行いたい。また、学生と積極的に議論していきたい。

【学生が準備すべき機器他】

パソコン

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

地域防災、危機管理

<研究テーマ>

防災危機管理政策、建築物の耐震化、災害時要援護者支援、防災教育、人材育成、事業継続（BCP）

<主要研究業績>

・『都市災害を生き残る』『現代用語の基礎知識 2009』2008年、自由国民社

・『ひな型でつくる福祉防災計画』（共著）2020年、東京都福祉保健財団

・『地域防災力強化宣言』2005年、ぎょうせい

【Outline and objectives】

The modern age is an age of crisis, and disaster risk management has become an unavoidable theme for citizens, governments, organizations, and businesses. This class will help graduate students to become strong in disaster prevention and crisis management.

雇用労働政策研究

濱口 桂一郎

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

公労使三者構成の審議会において労使団体と政府（厚生労働省）の間で行われる対立と妥協のメカニズムを中心に、その延長戦としての国会における審議や修正も含め、具体的な労働立法の政策決定過程を跡づける形で、労働法制の内容を説明する。いわば、完成品としての労働法ではなく、製造過程に着目した労働法の講義である。

【到達目標】

現代日本におけるさまざまな雇用労働問題を、表層的なマスコミ報道等に踊らされることなく、雇用システムと労働法制の複雑な関係を踏まえて理解し、説明できるようになること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻公共マネジメントコースにおいては「DP3」に関連している。ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻政策研究コースにおいては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、特に「DP4」は特に強く関連している。

【授業の進め方と方法】

この授業は原則として対面授業を予定している。各コマとも、前半は下記テキスト（『日本の労働法政策』）に沿って概略の説明を行い、後半はそれに基づきフリーディスカッションとする。あらかじめテキストを読んできたことを前提に、毎回のトピックについて各自の職業経験に基づく意見を尋ねることがあるので、各自用意しておくことが望ましい。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期前半

回	テーマ	内容
第 1.2 回	イントロダクション、労働力需給調整システム、労働市場のセーフティネット	全体の概観、労働者派遣事業と職業紹介事業、雇用保険、生活保護、求職者支援制など
第 3.4 回	雇用政策の諸相、高齢者・障害者の雇用就業政策	雇用政策思想、外国人雇用対策、高齢者、障害者など
第 5.6 回	職業教育訓練政策、労働基準監督システム、労災保険、労働安全衛生政策	職業訓練、職業教育、若年者、過労死・過労自殺、過重労働・メンタルヘルス・受動喫煙など
第 7.8 回	労働時間政策、賃金処遇政策	時間外・休日労働、年休、裁量労働制、最低賃金など
第 9.10 回	賃金処遇政策、労働契約政策	非正規均等待遇、解雇規制、有期契約、労働条件変更、フリーランスなど
第 11.12 回	男女平等政策、ワークライフバランス、ハラスメント	男女平等、育児・介護休業、セクハラ・パワハラなど
第 13.14 回	集团的労使関係システム	労働組合、労使協議制、個別労使紛争など

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

『日本の労働法政策』労働政策研究・研修機構（2018 年）
 なお、刊行から若干時間が経っているため、アップデートした PDF ファイルを受講者に配布する予定。

【参考書】

濱口桂一郎『新しい労働社会』岩波新書（2009 年）
 濱口桂一郎『日本の雇用と労働法』日経文庫（2011 年）
 濱口桂一郎『若者と労働』中公新書ラクレ（2013 年）
 濱口桂一郎『日本の雇用と中高年』ちくま新書（2014 年）
 濱口桂一郎『働く女子の運命』文春新書（2015 年）
 濱口桂一郎・海老原嗣生『働き方改革の世界史』ちくま新書（2020 年）
 なお、関連する論文等が講師ホームページにアップされているので、適宜読むこと。

<http://hamachan.on.coocan.jp/>

【成績評価の方法と基準】

参加人数にもよるが、今のところレポート作成を予定している。

【学生の意見等からの気づき】

該当なし

【担当教員の専門分野等】

< 専門領域 >

労働法政策

< 研究テーマ >

日本と EU の労働法政策、日本の個別労働紛争の分析

< 主要研究業績 >

『EU の労働法政策』、『日本の労働法政策』、『日本の雇用終了』、『日本の雇用紛争』、『団結と参加』（いずれも労働政策研究・研修機構）

【Outline and objectives】

Explain the contents of labor legislation in such a way as to trace the decision making process. It is not a lecture on labor law as a finished product, but one on labor law focusing on the manufacturing process.

POL500P1 - 121

政策過程事例研究

鄭 智允

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この授業では、政策過程理論を応用して個別行政分野の政策を考察する。まず、『政策形成の過程：民主主義の公共性』を用いて基本的な理論を確認する。次に事例研究を通じて政策過程についての理解を深める。例えば、市町村合併とその影響、災害と廃棄物処理などの事例から、各々のアクターが制度の中でどのように責任を負い対応していくのか。また、既存制度の中でアクターが外部もしくは内部の環境要因によって政策をどのように形成・漸進させていくのかを分析する。この過程を通じて政策過程に関する理解を高める。

【到達目標】

既存の政策形成過程の理法を理解し、個々の政策過程事例を考察する中で政策過程の視点・考え方など、政策過程に関する幅広い知識を習得することを旨とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻公共マネジメントコースにおいては「DP3」「DP4」に関連している。ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻政策研究コースにおいては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、特に「DP4」は特に強く関連している。

【授業の進め方と方法】

授業は対面で行う。まず政策過程の全対象について、事例を用いて復習する。その後、参加者の報告順を決め、報告およびそれについて質疑・討論の方法を進める。また、リアクションペーパーにおける質問事項等に対しては、次の授業で説明する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期後半

回	テーマ	内容
第 1.2 回	ガイダンス	授業の概要を説明し、講義の狙いとテーマを確認する。受講生各自の研究テーマ・関心分野を紹介する。
第 3.4 回	政策過程とその主体について	政策過程の理論を確認する。政策過程に参加する主体とその行動について各政策段階で検討する。
第 5.6 回	政策と官僚、そして規制	官僚はなぜ規制したがるのか、その原因について考える。
第 7.8 回	政策事例① 天災と人災	発災から 10 年目を迎える東日本大震災を事例として政策のあり方を考察する。
第 9.10 回	政策事例② 災害廃棄物	災害廃棄物の処理をめぐって、制度の構築と課題について考察する。
第 11.12 回	政策事例③ 合併と公共施設の再編	市町村合併がもたらしたことについて、公共施設の統廃合問題から考察。
第 13.14 回	政策事例④ 大都市制度と政策	大都市制度と政策のあり方について考察する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

最初の授業で指示する。

【参考書】

C.E. リンドブロム、E.J. ウッドハウス著『政策形成の過程：民主主義と公共性』（東京大学出版会、2004 年）
ハーバート・カウフマン著『官僚はなぜ規制したがるのか』（勁草書房、2015 年）
松本三和夫『構造災』（岩波新書、2012 年）
その他、必要に応じて紹介する。

【成績評価の方法と基準】

授業における積極的議論参加（60%）、レポート（40%）を判断して、評価する。

【学生の意見等からの気づき】

特になし

【学生が準備すべき機器他】

特になし

【その他の重要事項】

特になし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 行政学、地方自治、環境政策
<研究テーマ> 国策と地方自治
<主要研究業績>

「合併政令市の引力と遠心力」浜松市行政区再編住民投票で問われた行革と自治区意識」『自治総研』2020 年（第 499 号 pp.86 - 122）

「土砂災害危険区域と行政改革による行政の撤退戦略—浜松市北区引佐町鎮玉地域を事例に—」『年報中部の経済と社会』2019 年（pp.69 - 80）

「指定廃棄物処理における自治のテリトリー」『自治総研』2019 年（第 489 号 pp.45 - 82）

「『区内処理の原則』と広域処理」『自治総研』2014 年（第 428 号 pp.29-46、第 429 号 pp.45-65、第 430 号 pp.35-53）

「災害廃棄物の処理をめぐって」『月刊自治研』2012 年（第 637 号 pp.56-65）

「『漂着ごみ』に見る古くて新しい公共の問題」小原・寄本編著『新しい公共と自治の現場』コモンズ 2011 年（pp.202-216）

「廃棄物問題から考える合併・参加・住民組織の論点」『環境自治体白書 2008 年版』環境自治体会議編 2008 年（pp.40-52）

『市民参加・合意形成手法事例とその検証』（共著）市民がつくる政策調査会 2005 年

【Outline and objectives】

In this lecture, we will consider policy in individual administrative fields by applying policy process theory. First, we confirm the basic theory by using "Policy-Making Process" (Charles E. Lindblom and Edward J. Woodhouse 2004). Next, we will deepen our understanding of policy processes through case studies. We analyze what kind of responsibility is taken care of in the system and how the main actor forms and progresses policies by external or internal environmental factors in existing system. This process enhances understanding of policy processes.

政策開発実践論

富澤 守、小森 岳史、清水 英弥、高橋 良一

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

自治体の政策・制度設計と行政技術の開発手法を研究する。

【到達目標】

人口減少時代への対応に迫られた自治体政策について、先駆自治体の実践例を考察するとともに、市民本位の政策づくりについて研究する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻公共マネジメントコースにおいては「DP3」「DP4」に関連している。ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻政策研究コースにおいては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、特に「DP4」は特に強く関連している。

【授業の進め方と方法】

自治体政策の実践例を基調に、「対面」にて講義を実施する。講義については、事前にレジュメを配布する。受講者からの質問や疑問点は、授業のなかで議論しながら進めていく。議論の内容を踏まえて、期末レポートを作成する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】なし/No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

秋学期後半

回	テーマ	内容
第1回	個人情報保護と情報公開（富澤守）	個人情報保護・情報公開の法律、条例の意義と課題。
第2回	地方財政（富澤守）	収入、租税の役割、単年度予算と債務負担。
第3回	自治体（総合）計画は必要か？（小森岳史）	これまでの自治体計画の成果について、政策開発の面から考察する。
第4回	有効な自治体（総合）計画にするために（小森岳史）	自治体運営の仕組みとして総合計画を有効に機能させるための計画システムのあり方を考察する。
第5回	自治体の都市政策（清水英弥）	解決策の見えない自治体の都市政策について考察する。
第6回	自治体の環境政策（清水英弥）	自治体の環境政策について、具体例をあげながら考察する。
第7回	自治体の建築・開発政策（清水英弥）	自治体の建築・開発政策について、具体例をあげながら考察する。
第8回	自治体の公民館について（清水英弥）	自治体の公民館の現状と課題について考察する。
第9回	自治体の財産と危機管理（富澤守）	公有財産管理と損失補。具体的な訴訟や行政救済。
第10回	社会的価値と自治体契約（富澤守）	法務契約を基点とした公契約条例から契約手法による政策の実現。
第11回	公共政策と財政計画（高橋良一）	様々な市民ニーズに対応するため各々の自治体政策が構築されてきたが、総合計画と表裏一体をなす財政計画について考察する。
第12回	地域づくりと財政の役割（高橋良一）	連携や協働、行財政改革をキーワードにしながら、財政の観点から国と地方自治体、規模が異なる自治体同士などの今後の地域づくりを考える。

第13回 自治体の監査制度①（高橋良一） 自治体の財務や業務の適正性を住民に保証する監査の重要性が注目されている。自治体における監査や内部統制について考察する。

第14回 自治体の監査制度②（高橋良一） 自治体の監査制度の今日的な課題や住民訴訟の前置制度としての住民監査請求について、事例を見ながら考察する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とします。本授業のテーマに関する著書・論文等を可能な限り熟読し、事前に学習しておくこと。

【テキスト（教科書）】

使用しない。授業の前に、レジュメを配布します。

【参考書】

富澤守、『自治体政策と訴訟法務』（共著）、学陽書房、2007年
 富澤守、『自治体改革 第8巻 地方財政改革』（共著）、ぎょうせい、2004年
 富澤守、『保育問題の本質を問う』（共著）、都市問題、2017年所収
 富澤守、『法務契約を基点とした公契約条例』、イマジン出版、2017年所収
 富澤守、『選挙をめぐる事件と制度の見直し』イマジン出版、2019年所収
 小森岳史、「武蔵野市方式の継承と発展」、神原勝・大矢野修編書、『総合計画の理論と実務』、公人の友社、2015年所収
 高橋良一、「自治体監査の現場から－監査委員監査の今日的課題」、イマジン出版、『実践自治ビーコンオーソリティ』、2017年 Vol. 70（夏号）所収
 高橋良一、「自治体監査の現場から－監査委員監査の今日的課題2」、イマジン出版、『実践自治ビーコンオーソリティ』、2017年 Vol. 71（秋号）所収
 高橋良一、「住民監査請求・住民訴訟の諸課題」、イマジン出版、『実践自治ビーコンオーソリティ』、2020年 Vol. 81（春号）所収
 神野直彦、「分かち合い」の経済学、岩波書店、2010年
 清水英弥、「人口減少時代における都市計画行政－入間市の取組み事例をみる－」、イマジン出版、『実践自治ビーコンオーソリティ』、2016年 Vol. 65（春号）所収
 松下圭一、『自治体は変わるか』、岩波新書、1999年
 松下圭一、『社会教育の終焉』【新版】、公人の友社、2003年
 田村明、『まちづくりの実践』、岩波新書、1999年

【成績評価の方法と基準】

授業における積極的議論参加（70%）、期末レポート（30%）を総合的に判断して評価する。

【学生の意見等からの気づき】

内容を検討のうえ、可能なものは授業に反映する。

【学生が準備すべき機器他】

特になし

【その他の重要事項】

必要な時は授業で説明する。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

【富澤守】

自治体政策（行政法務・財務・契約）
再開発（再開発・まちづくり）

【小森岳史】

自治体計画（総合計画）
自治体政策開発（公共施設）

【高橋良一】

自治体政策（財政計画、行財政改革）
自治体監査（住民監査請求、行政不服審査）

【清水英弥】

自治体政策（都市問題、環境問題、公民館問題）

【Outline and objectives】

Study policy and institution design of municipalities and development method of administrative technology.

POL500P1 - 125

自治体政策実践論 1

中嶋 いつみ、押立 貴志、渡部 朋宏

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

・地方自治体が、政府として成立し、政策を進めていくうえで欠かせない、総合計画論、住民論、事故調査論の3つのテーマについて、オムニバス形式で授業を行う。3つのテーマを通じて、自治体政策及び自治体に対する国の政策を分析する視点を学ぶ。

・各テーマの概要は以下の通り。

・総合計画論：自治体の9割が策定しているといわれる自治体総合計画について、戦後から現在までを通史的に概観するとともに、現在のあり方について、市民参加や地方政治など多様な角度から考察する

・住民論：東日本大震災及び福島原発事故により避難生活を余儀なくされた住民をテーマとして「住民論」の基礎を学ぶとともに、自治の現場で発生している課題を研究につなげる手法の修得を目的とする。

・事故調査論：国の運輸安全委員会等の事故調査の制度と実務から、刑事手続きの関係を考察し、その問題点を取り上げる。今後増えると考えられる自治体が管理する各種施設内での事故に対する事故調査に、自治体職員として備えるべきことを、法的側面や実務の側面から考察しておくことは重要である。これらを通じて事故調査制度の問題点を理解することにより、制度が果たす効果と負の側面を的確に見つめることの重要性に注目する。

【到達目標】

・自治体総合計画について歴史的経緯と現状を見る中で、自治体行政の基盤について理解し、学んだ自治体行政についての課題やアプローチ・方法論を必要に応じて各自の学位論文に活かすことができる。

・住民に関する先行研究、関連する各種判例、地方自治制度・住民登録制度の歴史的経過を踏まえ、住民概念の形成過程を理解する。また、より実践に即した研究課題へのアプローチ、方法論を学び、自己の研究テーマを深化させる。

・事故調査の重要な点は科学技術の発展に必要な事故や失敗の情報共有であるが、一方で情報共有・情報公開に伴う社会的批判や責任追及という実態がある。その意義と目的を考察し、現代社会のあるべき方向性を構想することに到達することが目標である。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻公共マネジメントコースにおいては、「DP1」「DP4」に関連している。ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻政策研究コースにおいては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、特に「DP4」は特に強く関連している。

【授業の進め方と方法】

・原則として対面で授業を実施（新型コロナウイルス感染状況を踏まえ、十分な安全性が確保されないと判断された場合には、オンラインに切り替える）

・3人の講師によるオムニバス形式での講義を行う。原則として、毎回、講師がパワーポイントなどの資料を準備して講義を行い、レジュメを配布する。

・講義によるほか、総合計画論、住民論、事故調査論のそれぞれのテーマに関し、アクティブラーニングを基本として進める。学生による発表と討論等の諸形式を織り交ぜながら実施する。

・発表や討論について、講師がコメントすることはもちろん、講師への質問や講師との意見交換を行うことで学生へのフィードバックを行う。レポート提出を指示した際には、それについての評価・コメントを次回講義等でフィードバックする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

秋学期前半

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション・自治体総合計画の歴史的経緯(中嶋)	自治体総合計画とは何かを概説し、戦後から現在までの歴史的経緯を考察する。自治体総合計画をめぐる課題を抽出する。
第2回	自治体政治、市民参加と自治体総合計画(中嶋)	自治体政治、市民参加と自治体総合計画の関係について、事例に基づいて分析する。
第3回	自治体総合計画を分析する視点(中嶋)	自治体総合計画についての先行研究を概説し、自治体総合計画を分析する視点を検討する。
第4回	法・条例と自治体総合計画(中嶋)	地方自治法・その他の国法と自治体総合計画の関係、自治体における条例と総合計画の関係を明らかにするための方法を検討し、調査データ等に基づいて考察する。 *自らの住居地や関心のある自治体の総合計画について、報告を希望する場合は、それについてディスカッションを行う。
第5回	東日本大震災と福島原発事故避難の実態(1)(渡部)	初回はイントロダクションとともに、福島原発事故によりほぼ全域が避難指示区域に指定された自治体のうち、最も早く避難指示が解除された双葉郡楢葉町を事例に、基礎的自治体が直面している様々な行政課題について考察する。
第6回	東日本大震災と福島原発事故避難の実態(2)(渡部)	福島原発事故において避難指示区域外の自治体で避難を選択した住民(自主避難者)の状況と避難者に対する損害賠償の実態から、基礎自治体が直面している行政課題について理解を深める。
第7回	住民概念の考察(1)(渡部)	住民概念の法的位置づけや先行研究を概説したうえで、福島原発事故において特例的に認められた原発避難者特例法について考察する。
第8回	住民概念の考察(2)(渡部)	住民及び住民に深く関連する住所、選挙権、被選挙権等の判例研究を行い、住民の基礎概念について理解を深める。
第9回	地方自治制度における住民概念(渡部)	明治期以降の地方自治制度において住民概念がいかにして構築されてきたのかについて考察する。
第10回	住民登録制度の歴史的考察(渡部)	住民登録制度の歴史的経過を踏まえ、今後のあるべき住民登録制度について考察する。また、これまでの授業で取り上げた「住民」についての論点を踏まえ、ディスカッションにより全体のまとめを行う。

- 第11回 事故調査の制度と実務 (押立) 科学技術の発展はより安全・安心な社会を形成することになるが、そのためには事故調査結果の活用が必要である。一方、事故では、過失犯罪捜査という責任追及も行われ、事故調査と刑事手続きは分離できない要素も持ち合わせている。責任追及や社会的批判に萎縮するあまり事故調査への協力が抑制的になれば、安心な社会形成を阻むことに繋がりがかねない。事故調査論では、オリエンテーション及び身近な事故事例 VTR を紹介し、国の運輸安全委員会、消費者事故調査委員会の制度や、自治体が管理する学校、病院、各種施設に対する事故調査の概要を説明する。
- 第12回 事故調査制度の制度比較 (刑事手続きとの関係性) (押立) 行政機関の行う事故調査と、警察の過失犯罪捜査は、同時並行に行われる。証拠物件の扱い、相互協力の限界など、法的側面からの問題を取上げる。また、事故調査の各種制度を比較検討し、その目的や、制度相互調和を研究する。ディスカッションを通じて、制度研究における解決方策の導出、研究方法など多面的に、行政学研究、公共政策学研究からの視点で深度化する。
- 第13回 自治体における事故調査 (押立) 自治体における行政調査、事故調査についての対応を研究する。自治体職員が行う事故調査は今後増えたと考えられ、事故調査への準備、立ち入り、連絡調整、報告書の取扱い、刑事手続きへの配慮など実務上の問題を取り上げる。特に憲法が規定する人権保障や適正刑事手続きの保障と、事故調査、行政調査との関係性を研究する。
- 第14回 事故調査制度と制度調和 (事故調査をより効果的なものとする研究) (押立) 講義、質疑を踏まえて、グループディスカッションを行う。事故調査論の講義のまとめとして、事故調査結果の活用による、科学では解決できない被害者感情や、責任追及の過失犯罪捜査という負の社会資産を認識する。共生社会の実現や、安心・安全社会形成に向け、将来に向けた事故調査制度と、刑事手続きのあり方を研究する。

【授業時間外の学習 (準備学習・復習・宿題等)】

準備学習・復習時間は特に必要ないが、時間内は集中し、積極的に質問や意見提出を行い、ディスカッションに参加する。報告、ディスカッションを行う場合は、調査・取りまとめで 2~4 時間程度。
・各人が各回のテーマに関連する情報を集め問題意識を高めておくことが望ましい。

【テキスト (教科書)】

特に指定しない。各回、レジュメや資料を配布する。

【参考書】

(中寫分)

神原勝・大矢野修編 (2015)『総合計画の理論と実務』公人の友社
東京市政調査会編 (2009)『地方自治史を掘る』東京市政調査会
松下圭一 (1999)『自治体は変わるか』岩波新書

(渡部分)

戸田典樹編著 (2016)『福島原発事故 漂流する自主避難者たち 実態調査からみた課題と社会的支援のあり方』明石書店
今井照・自治体政策研究会・編著 (2016)『福島インサイドストーリー 役場職員が見た原発避難と震災復興』公人の友社
戸田典樹編著 (2018)『福島原発事故 取り残される避難者 直面する生活問題の現状とこれからの支援課題』明石書店

渡部朋宏著 (2020)『住民論 統治の対象としての住民から自治の主体としての住民へ』公人の友社

(押立分)

必要に応じて適宜紹介する。

【成績評価の方法と基準】

講義への出席、意見発表や議論の積極性 (80%)

レポート提出または発表 (20%)

【学生の意見等からの気づき】

学生の論文作成テーマとかかわることから履修する場合もそうでない場合も、講義テーマと学生の関心が重なり、様々な質問・意見から相互に学びあうことができる。講義中の質疑による理解の深まりに期待したい。

【学生が準備すべき機器他】

特になし

【その他の重要事項】

・住民論の講師は現職の自治体職員であり、問題意識を明確にして授業に臨んでいただければ、実践的・実務的な情報を得て、議論を交わすことができる。

・事故調査論の講師は、事故調の事故調査官経験者、国の首席鉄道安全監査官及び交通安全対策室長の経験者である。実務者、制度研究者として、法的側面、実務的側面の両面から説明を行う。事故調査論は、制度の比較研究であるため、可能な限り、受講者の制度比較研究手法等についての問いにも応えていく。

・総合計画論の講師は、市民参加や総計審の委員などの経験者でもある。

・多様な講師による講義であることを活かし、可能な限り、受講者の学位論文の核となるリサーチクエスト等についての問いにも応えていく。

【中寫】

<専門領域> 地方自治

<研究テーマ> 自治体総合計画、自治基本条例、市民参加

<主要研究業績>

「自治体総合計画の意義と課題」(2018, 博士論文)

「望ましい自治体監査機能のあり方についての研究」『かながわ政策研究・大学連携ジャーナル』No.2 (2011.11、共著)

「参加と協働をどう考えるか」東京都市町村職員研修所論集『翔』11号 (2007)

「地域共同管理の組織と参加」『総合都市研究』36号 (1989, 共著)

【渡部】

<専門領域> 地方自治、公共政策、住民論

<研究テーマ> 住民概念、原発事故避難、原発事故損害賠償、基礎的自治体連携

<主要研究業績>

①「福島原発事故避難の実態と「住民」概念の転換—統治のための住民から住民による自治へ—」『自治体学』vol.31-1 (2017.11)

自治体学会【自治体学研究奨励賞受賞】

②「震災復興の現状と課題」『地方自治職員研修』通巻708号 (2018.3)

③「人口減少社会における「住民」概念の考察—福島原発事故避難自治体の実態から—」『自治実務セミナー』2018年12月号

④「「住民」概念の研究—統治される対象としての住民から自治の主体としての住民へ—」『公共政策志林』第7号 (2019.3)

⑤『住民論—統治の対象としての住民から自治の主体としての住民へ』公人の友社 (2020)

【押立】

<専門領域> 事故調査論、行政調査論、安全リスク論、適正刑事手続論

<研究テーマ>

事故調査制度、行政調査制度、リスク事故を報告する心理、安全社会システム、人権保障と適正刑事手続。

<主要研究業績>

①『事故調査制度に関する研究－刑事手続きとの関係からの考察－』（2019, 博士論文）、②「鉄道信号の安全性・信頼性の歴史の変遷」（2017, 日本信頼性学会）、③「刑事裁判の証拠として使用される事故調査報告書のあり方について」（2016, 日本学術会議安全工学シンポジウム予稿集）、④「事故調査への協力を萎縮させる刑事休職制度の改善考察」（2018, 日本学術会議）、⑤「鉄道における保安システムの階層的構成と安全水準の構成方策について」（2020, 日本学術会議）、⑥「鉄道事故の対応と関係者」（2017, 信号工業協会誌）、⑦「鉄道安全対策とリスク分析－レジリエンス力の手がかりまで－」（2017, 日本技術士会 IT21 講演会予稿集）

【Outline and objectives】

This lecture is an omnibus on the three themes , local government's comprehensive planning theory, resident theory, and accident investigation theory. These are indispensable for local government's policy selection、policy making and existance requirement. Through three themes, students can learn the point of view to analyze the local government policy and the national policy for local governments.

自治体政策実践論3

宮崎 一徳、渡邊 勝道、青山 貴洋

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

『シェアリング・ソサイエティ』（都市政策・地域防災・立法政策）
少子高齢化の進展等を起因とする様々な社会問題への対応の困難さは、従来からの制度の枠組みにとらわれない、新たな政策展開の必要性を生じさせている。『シェアリング・ソサイエティ』は、人々が社会に対し能動的な関わりを持ち協力することによって、様々な問題を解決していかうとする取組であると考ええる。

渡邊は、地域経済のステージとしての都市の発現から都市計画の理論、イデオロギーによる地域経済の理論と実際の地域での事例のうち、特に都市における「シェアリング」の実践理論である「現代総有」の事例であるデベロップメントトラスト・従業員所有会社・コミュニティービジネスなどの事業体の制度や所有と管理の形態について学ぶことで、これらの自治体と地域経済、社会に対する役割の理解を目指す。

宮崎は、多面的な政策提言、それを支える主権者意識等を論ずることにより、政策立案を官僚機構と議員立法が「シェアリング」している実態、必要性に関する理解を目指す。

青山は、「市民」による地域防災力をテーマに、災害時初期段階の共助による事例から、「自助・共助・公助」の防災における「シェアリング」の実態と必要性に関する理解を目指す。

本講義は、3人の講師がそれぞれの部分のみを担当するのではなく、基本的に常時3人で、それぞれの事象の中にある「シェアリング」の内容を認識し、議論しながら行うものである。

【到達目標】

院生が『シェアリング・ソサイエティ』の事例を通して、そうしたものの政府・自治体と経済、社会に対する役割を理解することができる。講義を通し、院生がそれぞれの研究対象の背景にある社会の動きについて、自ら考えを深め、既定概念にとらわれない研究の展開をもたらしことを目指す。人々の能動性を、一般的な政策展開と言われるものと比べ、より多く求めるとも考えられることから、人々の関わり方についての議論は普遍的なものという点で、どんな研究対象を扱う院生に対しても幅広く有益なものになると考える。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻公共マネジメントコースにおいては、「DP1」「DP4」に関連している。ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻政策研究コースにおいては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、特に「DP4」は特に強く関連している。

【授業の進め方と方法】

基本、対面での講義方式で行う。知識の蓄積に応じ、グループディスカッション等により汎用的能力の育成を図る。状況によりオンライン併用もあり得る。適宜、各人の研究における関心事項に関し、講義で得た知見との関係等について発表をしてもらい、それに各講師が所見を述べることや、レポート作成に関し、個別に協議を行うこと等で、フィードバックを行いたいと考える。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり/Yes

【授業計画】

春学期後半

回	テーマ	内容
第1回	『シェアリング・ソサイエティ』のイノベーションとルールメイキング（渡邊、宮崎、青山）	イントロダクション、3講師から担当概要等説明。土地基本法改正、現代総有の展開。
第2回	「議員立法の役割」（宮崎）	内閣官房・内閣府の拡大と対応、「基本法類」の分析、「議員立法の役割」。都市と地域経済についての基礎知識。協働型commonsとコミュニティについて学ぶ。産業革命以後の社会改良家の都市について学ぶ。
第3回	コミュニティと社会改良家の都市（渡邊）	レッチワース田園都市（渡邊）
第4回	レッチワース田園都市（渡邊）	レッチワース成立の背景について学ぶ。都市の経営と地域経済について理解する。田園都市が近代都市計画に与えた影響について。社会主義圏では地域経済をどう考えたかを理解する。英国のD.T.などのシステム等について理解する。総有型社会の成立について考える。
第5回	社会主義と地域経済、開発トラスト（渡邊）	

第6回	総有型事業地区研究・ネットコミュニケーション（渡邊）	①丸亀商店街のシステムを学ぶ。②富山市八尾町、松阪市御城番屋敷のシステムを学ぶ。③大丸有地区のシステムを学ぶ。④神奈川県真鶴町の美の条例の背景と地域経済への影響について。ネットテクノロジーが都市に与える役割について学ぶ。
第7回	「自助・共助・公助」概論（青山）	①自助、共助、公助とは（福祉と防災の視点） ②広領域を担う共助（互助領域と公共領域） ③共助と市民
第8回	公助と自助の実態（青山）	①公助（自治体の食料備蓄状況と配布の課題） ②自助（家庭備蓄の現実と重要性、なぜ「備蓄」は進まないか）
第9回	災害時空白期間における二つの共助（青山）	①避難所における共助とリーダーシップ ②ボランティアによる避難所良好運営の刺激
第10回	「自助・共助・公助」による地域防災力（青山）	①被災地域での共助の取り組み ②シェアリング・ソサイエティと地域防災力
第11回	多面的政策提言（宮崎）	議員立法の実態、国会審議のしくみ、多面的政策提言（「市民立法」、「草の根ロビイング」、パブリックアフェアーズ）。提案型地方分権改革。シティズンシップ教育とアドボカシー。
第12回	地方分権と政策提言（宮崎）	<大手町周辺でフィールドワーク> 大丸有のまちづくり調査
第13回	地域の問題の解決のために1（渡邊・宮崎・青山）	<大手町周辺でフィールドワーク> 全体のまとめ。何を学んだのか、何に問題意識を持ったのか。
第14回	地域の問題の解決のために2（渡邊・宮崎・青山）	

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

参考書を事前に読むほか、講義資料に関連する案件につき、調査・検索し、まとめる。本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

青山貴洋『地域防災イノベーション 自助・共助・公助で「空白期間」を乗り切る』文芸社、2020年。
その他、講師が配布する講義資料。

【参考書】

五十嵐敬喜編著『現代総有論』法政大学出版局、2016年。
五十嵐敬喜『議員立法』三省堂、1994年。
宮崎一徳『議員立法の役割』法政大学大学院学術機関リポジトリ（後掲参照）
青山貴洋『「自助・共助・公助」と「市民」による地域防災力—食料危機管理政策からみた災害時空白期間における相互補完的防災体制の可能性—』法政大学学術機関リポジトリ（後掲参照）

【成績評価の方法と基準】

授業での学習状況や参加度である「平常点」30%、期末試験（レポート）70%。

【学生の意見等からの気づき】

講義とは別に講師と受講生の有志で行った大手町周辺でのフィールドワークが好評であったので、講義の中で行うこととする。

【学生が準備すべき機器他】

特になし。

【その他の重要事項】

授業終了後に教室で質問を受け付ける。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>
<研究テーマ>
<主要研究業績>

【渡邊勝道】

<専門領域>公共政策学（都市政策）、都市・建築計画学
<研究テーマ>共有・協同（総有）によるポスト資本主義社会の構築
<主要研究業績>
①渡邊勝道「空間共有への軌跡」、『現代総有論』五十嵐敬喜編 法政大学出版局 2016年
②渡邊勝道「ユートピアと田園都市」、『KEIKAN』日本景観学会誌 2015年
③渡邊勝道「五十嵐都市論を読み解く」法政大学法学誌林 2014年

【宮崎一徳】

<専門領域>公共政策学（立法過程論）
<研究テーマ>議員立法、多面的政策提言、内閣官房・内閣府の拡大
<主要研究業績>
①宮崎一徳『議員立法の役割』法政大学学術機関リポジトリ
<https://hosei.repo.nii.ac.jp/>で論文検索。
②宮崎一徳「議員立法を結実させる取組み」『公共政策志林 第6号 2018年3月』法政大学大学院公共政策研究科
③宮崎一徳「基本法類」の構造分析『公共政策志林 第5号 2017年3月』法政大学大学院公共政策研究科

【青山貴洋】

<専門領域>公共政策学（災害時食料危機管理政策）
<研究テーマ>地域の食料安全保障、災害食、自助・共助・公助論
<主要研究業績>

- ①青山貴洋「『自助・共助・公助』と『市民』による地域防災力—食料危機管理政策からみた災害時空白期間における相互補完的防災体制の可能性—」法政大学学術機関リポジトリ
- ②青山貴洋「地域の食料安全保障」緊急時の地域食料対策によるミクロ的食料安全保障政策の探求と定量的分析への挑戦 (http://furusato-genki.jp/local_food_security_aoyama_20160212.pdf)
- ③青山貴洋「日本の食料安全保障政策における課題と解決に向けた一考察—農地と生産者問題からみた食料安全保障政策と緊急事態食料安全保障指針分析—」『公共政策志林第3号 2015年3月』法政大学大学院公共政策研究科 (PP.61-78)
- ④青山貴洋「平成28年(2016年)熊本地震の自治体対応からみる食料供給時系列検証」『日本災害食学会誌 (VOL.5 NO.1)』 (PP.7-17)
- ⑤青山貴洋「災害の脅威に立ち向かうための合理的備蓄体制への道筋～熊本地震による食料供給状況と各都道府県の食料備蓄状況の検証より～」『現代社会の脅威にいかに向かうか』公益財団法人公共政策調査会、警察大学校警察政策研究センター、平成28年度懸賞論文集 (PP.78-93)
- ⑥青山貴洋「災害時初期段階の良好な避難所運営をめぐる地域力と共助組織に関する論考」『公共政策志林第6号 2018年3月』法政大学大学院公共政策研究科 (PP.39-54)

【Outline and objectives】

Financial problem of today's Japanese government and local governments by development of the declining birthrate and a growing proportion of elderly people, and difficulty of the correspondence to personal various needs and occurrence of pursuit of the quality are making necessity of the new policy development which isn't seized with an institutional structure from the past gain.

"Sharing society" is made a subject in this lecture as the state of the society of which new policy development is desired. People try to settling various problems by cooperating with active concerning to society in those.

Watanabe deals with theory of an urban planning, theory of regional economic by an ideology and a case in the actual area from manifestation in the city as a stage of regional economic.

A case of "Contemporary So-yu" is indicated as the case in the actual area. That's a development trust, is an employee property company and is a community business.

Watanabe aims to understand the role to those local government, regional economic and society by a member of a class's learning these systems and the form of the property and the management.

Miyazaki pays attention to the role of "legislation by member" in particular. It's to study pluralism-like policy proposal and sovereign awareness and indicates the reality with which a bureaucratic institution and a citizen "share" in policy making.

Aoyama practices area the regional disaster prevention power by "citizen" with a theme of a lecture. A case by mutual assistance in an early stage is studied at the time of an accident, and the reality of the "share" in disaster prevention of "self-help, mutual assistance and official help" is indicated.

3 lecturers always participate in a lecture basically, and it's advanced while sharing argument.

POL500P1 - 201

ガバナンス研究

芦立 秀朗

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

いわゆる「ガバナンス論」の第一人者の著作を英語・日本語で講読し、最終的にはそれらの理論枠組みを用いて学生が実際の政策形成過程を分析し、授業内で発表する。

【到達目標】

近年の行政改革で散見される参加型（住民参加・国民参加）とも関係の深い、「ネットワークによるガバナンス」の議論を自分なりに説明できるようになること。それらの議論を実際の政策形成過程に当てはめて説明できるようになること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻公共マネジメントコースにおいては「DP3」「DP4」に関連している。ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻政策研究コースにおいては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、特に「DP2」は特に強く関連している。

【授業の進め方と方法】

この授業は対面で実施される。この授業では「ガバナンス論」の第一人者の著作を英語・日本語で講読する。受講生は要点を日本語のレジュメにまとめて、発表することが求められよう。補足の解説や著作の内容に関する議論も行う。最終的にはそれらの理論枠組みを用いて実際の政策形成過程を分析し、発表してもらおう。課題については、次回の授業あるいはメールにてフィードバックを行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり/Yes

【授業計画】

春学期前半

回	テーマ	内容
第1回	「ガバナンス論」とは何か（1）	この授業の目的と進め方について解説し、到達目標を確認する。
第2回	「ガバナンス論」とは何か（2）	「ガバナンス論」について説明した短い文献を講読し、レジュメの作り方について学ぶ。
第3回	「政府の道具」の議論	「ガバナンス論」の前提としてフッドらによる「政府の道具」の議論について学ぶ。
第4回	行政改革に関する議論	「ガバナンス論」の前提としてガイ・ピーターズによる「政府の道具」の議論や行政改革について学ぶ。
第5回	第一世代の「ガバナンス論」（1）	ローズの著作（英書）を講読し、第一世代の「ガバナンス論」の内容を理解する。
第6回	第一世代の「ガバナンス論」（2）	ガイ・ピーターズの著作（英書）を講読し、第一世代の「ガバナンス論」の内容を理解する。
第7回	ローカル・ガバナンスの最前線（1）	群馬県を事例に、地方政治と国政の関係を理解する。
第8回	ローカル・ガバナンスの最前線（2）	群馬県を事例に、地方行政について理解する。
第9回	「ガバナンス論」の最前線	「ガバナンス論」をはじめとする政治・法律・公共政策のキーコンセプトを理解する。
第10回	期末レポートについての構想の中間報告とそれに基づく議論	各自が関心のある問題の一つ取り上げ、各自がその見解を討議する。
第11回	第二世代の「ガバナンス論」（1）	トルフィングの著作（英書・和訳）を講読し、第二世代の「ガバナンス論」の内容を理解する。
第12回	第二世代の「ガバナンス論」（2）	ソレンセンの著作（英書・和訳）を講読し、第二世代の「ガバナンス論」の内容を理解する。
第13回	具体的な社会問題の検証（1）	これまで学んだ「ガバナンス論」を実際の分析に用いるとどうなるか、担当者が執筆した論文を講読しながら、考える。
第14回	具体的な社会問題の検証（2）	現在問題となっている社会問題を取り上げ、各自がその見解を討議する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

様々な著作の一部を扱うのでテキストは特に指定しない。初回に文献リストを配布するので、図書館で借りる等すること。

【参考書】

岩崎正洋 [編著] (2011) 『ガバナンス論の現在』 東京：勁草書房
村上弘・佐藤満 [編著] (2016) 『よくわかる行政学 第2版』 京都：ミネルヴァ書房

【成績評価の方法と基準】

期末レポート 40%と平常点 60%で評価する。平常点は文献の理解の程度、授業への貢献、報告内容で総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

2019年度より授業を担当しているが、過年度の受講生からは英語で文献を読む習慣付けになったとコメントを得ている。

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉 行政学
〈研究テーマ〉 ガバナンス、援助行政
〈主要研究業績〉

・「援助行政への参加と政策への支持の関係-JGSS-2006 データから-」『産大法学』第48巻、第1・2号、2015年。
・「幹部人事と政治介入制度」大谷基道・河合晃一編『現代日本の公務員人事』第一法規、2019年。
・「二〇〇〇年代前半への回帰なのか- 京都二区-」白鳥浩編著『二〇一四年衆院選：「一強多弱」の完成』ミネルヴァ書房、2021年。

【Outline and objectives】

In this class, students will first learn theories of “governance,” and be asked to apply them to the current policies in Japan.

POL500P1 - 202

リージョナリズムと非政府組織

大芝 亮

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

国際関係における非政府組織（NGO）の活動・課題について、グローバリズム、リージョナリズム、ナショナリズムの3つの次元から考察する。次に、さまざまな地域協力の活動について具体的にとりあげる。具体的活動を見るなかで、あらためて、国際秩序のありかたについて、考察する。

【到達目標】

国際関係について、理論的に分析するとはどういうことかについて、理解する。また、抽象論だけでなく、地域協力枠組みの具体例を事例として、実証分析できる能力を養う。

③ 授業の進め方と方法 必須

基本的に、毎週ごとのテーマに関連する論文を取り上げ、皆で議論する。履修者は、数回、論文についての要約と論点提示を行う。なにか、いま、国際政治でとりあげるべき問題＝パズルの発見を行う。また、パズルの解決方法を考察する。そのための糸口として、この授業では、リージョナリズムという概念および非政府組織というアクターに焦点をあてる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻公共マネジメントコースにおいては「DP3」「DP4」に関連している。ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻政策研究コースにおいては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、特に「DP4」は特に強く関連している。

【授業の進め方と方法】

基本的に、毎週ごとのテーマについて、簡単に紹介したのち、関連する論文を取り上げ、皆で議論する。履修者は、数回、論文についての要約と論点提示を行う。事前リーディングのアサイメントについては、集中講義であることを配慮して、実際に対応できるようにする（和文・英文、文献の分量など）。論文要約、論点提示、展開した議論の内容に対して、その都度、コメントを行うことで、フィードバックする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期集中

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	講義の目的等の説明
第2回	リージョンとは？	多様なリージョン概念と政治的含意について
第3回	グローバル・ガバナンスとは？	ガバナンスとガバメントの相違
第4回	リージョナル・ガバナンスとは？	グローバル、リージョナル、ナショナル、ローカルのそれぞれのレベルでのガバナンス
第5回	リージョナリズムとトランスナショナル	グローバリズムを補足？ 競合？
第6回	非政府組織と公共	公共の担い手はだれか？ 公と私
第7回	NGO の分類	NGO の分類と新しいタイプの登場
第8回	地域的枠組みと NGO	水問題と EU
第9回	地域的枠組みと NGO	森林問題と EU
第10回	地域的枠組みと NGO	種子問題と TPP
第11回	地域的枠組みの事例	中国の戦略
第12回	地域的枠組みの事例	日本の戦略
第13回	地域的枠組みの競合とフォーラム・ショッピング論	アジアの重層的システム
第14回	総括	リージョナリズムの担い手としての非政府組織

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

翌日、とりあげる文献を事前に目を通しておくこと。本授業の準備学習・復習時間は各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

国際関係の理論について、基礎的知識のあることを前提としているが、理論についてあまり詳しくない場合には、以下のテキストが参考になる。

【参考書】

・国際関係の理論について、基礎的知識のあることを前提としているが、最初の数回ほど、入門的テキストを使用する。大芝亮『国際政治理論』ミネルヴァ書房、2016年。

・授業でとりあげる文献は PDF で配布する。

【成績評価の方法と基準】

毎回の議論、および最終時間に研究発表を行う。これらに基づいて成績を評価する。

【学生の意見等からの気づき】

適宜、実態を示すビデオを活用する。

毎週とりあげるテーマに関連して、自主的に、新聞記事なり、国際組織・NGO等の報告書なりを調べ、授業の際に、簡単に皆に対して報告することを歓迎する。

【その他の重要事項】

原則、対面授業とする。ただし、教員が地方在住のこともあり、状況に応じてオンラインで授業を行うこともある。集中講義の具体的日程（夏休み期間中）については、履修者が確定した段階で、履修者と協議して決定する。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>国際関係論、国際機構・NGO 研究

<研究テーマ>世界銀行の資金配分

<主要研究業績>大芝亮他『パワーから読み解くグローバル・ガバナンス論』、有斐閣、2016年。大芝亮『国際政治理論』ミネルヴァ、2016年。大芝亮編『日本の外交 対外政策 課題別』岩波書店、2013年。

【Outline and objectives】

The goal of the course is to understand the basic structure of international relations focusing on regionalism and non-state organizations.

MAN500P1 - 203

企業論

加藤 寛之

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この授業のテーマは、受講生が企業に関する正確な理解をもつことにおきます。次のような問い、企業とは何か、企業はなぜ存在するのか、企業は経済活動上どんな役割を果たすのか、への答えを説明します。経済学の企業論は20世紀に入って生まれた理論です。その概要を理解することが目的です

【到達目標】

基礎理論を踏まえつつ、最新の理論的成果と現代企業が直面する主要な活動を学ぶことを通じて、受講生各自が、様々な企業を分析理解できるようになることが目標です。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻公共マネジメントコースにおいては「DP3」に関連している。ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻政策研究コースにおいては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、特に「DP2」は特に強く関連している。

【授業の進め方と方法】

個別企業のケースを取り上げながら説明します。そのためパワーポイントを使った説明が主になります。原則対面で実施します。フィードバックは毎回課題を提出してもらい、その都度コメントします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】**春学期**

回	テーマ	内容
第1回	現代の企業社会	企業の発展と企業の理論・ディスカッション
第2回	損益計算書	5つの利益、付加価値・ディスカッション
第3回	貸借対照表	ROE、ROA・ディスカッション
第4回	キャッシュフロー計算書	黒字倒産・ディスカッション
第5回	近代企業の登場	専門経営者・ディスカッション
第6回	所有と支配の分離	経営者支配・ディスカッション
第7回	財閥の形成と解体	企業集団、買収・合併・ディスカッション
第8回	資本主義と企業の発展	工場と経営体の誕生 経営管理の生成・ディスカッション
第9回	経営管理の系統図	科学的管理法・ディスカッション
第10回	経営管理の諸理論	大量生産方式、コンティンジェンシー理論・ディスカッション
第11回	組織のデザイン	機能別組織 事業部制組織・ディスカッション
第12回	日本型組織デザイン	日本型組織デザインの特殊性と普遍性・ディスカッション
第13回	構造は戦略に従う	戦略と組織の適合性・ディスカッション
第14回	資源の束としての企業	ペンローズ 資源配分・ディスカッション

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

事前に参考文献をいくつか指定するので読んでおくこと。問題意識を持って講義に臨んでください。

【テキスト（教科書）】

テキストは用いません。プリントを配布します。

【参考書】

毎回の講義の最後に、参考文献をお知らせします。

【成績評価の方法と基準】

成績評価基準は、企業の理論を理解し説明できること、に置きます。

評価方法は、次の二つの要素の総合です。

毎回の簡単な宿題 50%、授業への貢献度 50%。

【学生の意見等からの気づき】

毎回の簡単な宿題提出の際に質問や、自分の修論に関係するであろう取り上げてもらいたいテーマについて学生からの反応に応じて授業内容やスタイルをカスタマイズしていきます。

【学生が準備すべき機器他】

講義では必要に応じてパワーポイントを利用します。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 地域産業論・戦略論・企業論

<研究テーマ> 造船産業各社の戦略・国際分業・産業集積の研究

<主要研究業績>

「船舶開発と造船産業——ビジネス・システムの不確実性がもたらす複雑性へのマネジメント」藤本隆宏編『人工物複雑化の時代』（有斐閣）

「日本の造船産業における企業競争力の変動とその要因分析—国際競争力構図の変化と新たな取り組み—」柳町功他編著『韓日産業競争力比較研究』（三星経済研究所）

「造船産業の競争構図の変容と雁行形態論・塩路モデルの再検討」（『アジア経営研究』）

「日韓競争力転換のメカニズム—造船産業の事例—」（『組織科学』）

「資源蓄積の機能不全—成熟・衰退期への適応が再成長期の制約に化けるメカニズム」（『経営学論集』）

【Outline and objectives】

The theme of this class is for students to have an accurate understanding of corporations. We will explain the answers to the following questions: what is a corporation, why do corporations exist, and what role do corporations play in economic activity? The theory of the firm in economics is a theory that emerged in the 20th century. The purpose of this course is to provide an overview of this theory.

Translated with www.DeepL.com/Translator (free version)

MAN500P1 - 204

グローバル企業戦略論

多田 和美

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本授業では、グローバル企業の経営戦略に関する基本理論を学びます。今日、市場や経済のグローバル化はたしかに進展する一方で、各国・各地域の相違も根強く存在します。このような経営環境において、グローバル企業にはいかなる戦略が必要なのか。この問題に関して、理論的・実践的に分析するための基本概念を学ぶことを目的とします。

【到達目標】

授業では、下記の2点に到達することを目標とします。

- 1) グローバル企業の戦略に関する基本理論を理解し、活用できる。
- 2) 授業で学んだ知識をもとに、グローバル企業の戦略を論理的かつ実践的に分析できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻公共マネジメントコースにおいては「DP3」に関連している。ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻政策研究コースにおいては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、特に「DP2」は特に強く関連している。

【授業の進め方と方法】

授業は、教科書を使用し、対面による演習形式を中心に実施します。授業中に提示した課題や論点は、随時、解説（フィードバック）します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

秋学期前半

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	グローバル企業による戦略の概要
第2回	国際経営環境の分析	CAGE フレーム・ワーク
第3回	海外直接投資の理論①	優位性の命題、内部化理論、OLI パラダイム
第4回	海外直接投資の理論②	ディスカッション
第5回	グローバル企業の国際競争の歴史①	グローバル企業の変遷
第6回	グローバル企業の国際競争の歴史②	ディスカッション
第7回	グローバル企業の組織デザイン①	グローバル企業の発展と組織構造
第8回	グローバル企業の組織デザイン②	ディスカッション
第9回	トランスナショナル経営①	グローバル統合とローカル適応
第10回	トランスナショナル経営②	ディスカッション
第11回	海外子会社の経営①	海外子会社特有の優位性と経営課題
第12回	海外子会社の経営①	ディスカッション
第13回	研究発表①	プレゼンテーションとディスカッション
第14回	研究発表②	プレゼンテーションとディスカッション

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

毎回の授業において、相応の準備学習と復習が必要になります。特に、プレゼンテーションを担当する回は入念な準備が必要です。本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

中川功一・林正・多田和美・大木清弘（2015）『はじめての国際経営』有斐閣。

【参考書】

浅川和宏（2003）『グローバル経営入門』日本経済新聞社。

大木清弘（2017）『コア・テキスト国際経営』新世社。

吉原英樹（2015）『国際経営（第4版）』有斐閣。

【成績評価の方法と基準】

授業への貢献：70%、期末レポート:30%で評価します。

【学生の意見等からの気づき】

授業改善アンケートの結果をはじめ、学生からの意見や要望は、随時、授業改善に活かすように努めます。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

国際経営論

<研究テーマ>

国際研究開発、新興国市場戦略

<主要研究業績>

法政大学学術研究データベースの担当教員のサイトを参照してください。

<http://kenkyu-web.i.hosei.ac.jp/Profiles/107/0010650/profile.html>

【Outline and objectives】

The aim of this course is to understand the fundamentals of international business from the theoretical and practical points of view. The course is mainly composed of the followings:

- 1)Basic theory of international business
- 2)Basic framework of international business
- 3)Advantages/disadvantages of international business

市民社会ガバナンス論

柏木 宏

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

NPO 論Ⅰを NPO に関する歴史や制度、現状と課題などの概論、入門編とすると、NPO 論Ⅱは NPO をどのように運営していくのかを示す、マネジメント編として位置づけることができる。したがって、NPO のマネジメントの基本である、ヒト、カネ、プランを中心に、具体的な手法を提示し、議論、NPO の運営能力の基本を獲得する。なお、以上の点について、コロナ禍において、NPO のマネジメントに生じた変化を含めた考察を行う。

【到達目標】

上記の授業の概要と目的を踏まえ、NPO マネジメントの基礎となる、ヒューマンリソース、資金、プランニングなどを中心に、マネジメント手法を理解することで、NPO の運営状況の分析や経営を担う基礎的な能力を獲得する。なお、政治学専攻「NPO 論2」においては、ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連、特に「DP1」は特に強く関連、「DP2」「DP3」は強く関連している。公共政策学専攻「市民社会ガバナンス論」においては、ディプロマポリシーのうち、公共政策学公共マネジメントコースにおいては「DP1」「DP3」に関連している。ディプロマポリシーのうち、公共政策学政策研究（市民社会ガバナンス）コースにおいては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、特に「DP4」は特に強く関連している。連帯社会インスティテュート「NPO 論（現状と課題）Ⅱ」においては、ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP3」に関連、特に「DP1」に強く関連している。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻公共マネジメントコースにおいては「DP1」「DP3」に関連している。ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻政策研究コースにおいては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、特に「DP4」は特に強く関連している。

【授業の進め方と方法】

・教員による講義
各回の講義の資料は、事前にウェブにアップしておく。これを読み、講義内容のイメージをえるとともに、質問、意見などを考えておく。この予習を行っていることを前提として、授業を進めていく。毎回の講義は、原則として 3 分の 2 程度を教員からのプレゼンテーションとする。残りの時間で質疑応答を含めた議論を行い、最後にまとめをする。
・学生の発表
講義への理解度を確保するとともに、不明瞭な点を明確にするため、期間中に講義のまとめ（ふりかえり）のセッションを実施する。また、授業に関連したテーマのレポートの作成を行う。作成に先立ち、アウトラインを作成、授業で発表する。レポートは、レジュメに基づいて発表を行う。ふりかえり、アウトライン、レポートの発表の際には、教員・受講生からフィードバックを受ける。
・オフィス・アワー
講義の疑問点やふりかえり、レポートの作成に関する指導を受ける。
・授業の形式
授業は、Zoom を使用し、オンライン授業形式で行う。Zoom の ID・パスワード等については、初回授業までに学習支援システム（Hoppii）に掲載する。授業開始後、新型コロナウイルスの感染状況が改善し、対面授業が可能となった場合は、対面授業に切り替える。その場合、事前通知を行い、2 週間後より対面授業に切り替える。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】

回	テーマ	内容
第 1 回	オリエンテーション	本授業の進め方や評価方法などについて説明するとともに、受講生の NPO マネジメントの知識や関心を聞き、今後の授業に反映させる。
第 2 回	NPO マネジメントの特色	NPO のマネジメントが企業や行政のマネジメントとどう異なるかについて検討することを通じて、その特色を理解する。
第 3 回	ヒューマンリソースのマネジメント 1	NPO が活用するヒューマンリソースは、ボランティアとスタッフ、理事に大別できる。この三者がどのように連携することで、効果的な組織運営が可能になるか考える。
第 4 回	ヒューマンリソースのマネジメント 2	ボランティアとスタッフ、理事のそれぞれに対するマネジメントの手法について考える。

第 5 回	資金のマネジメント 1	NPO の事業の受益者の多くは、十分な支払い能力がない。このため、非営利の社会的企業は、ファンドレイジングが必要となる。ファンドレイジングをどのように行うか、考える。
第 6 回	資金のマネジメント 2	ファンドレイジングで獲得した資金も含め、適切な財務管理を行う必要がある。これらの意義や手法について検討する。
第 7 回	授業のふりかえり	第 2 回から 6 回までの授業で興味を持った点と分かりにくかった点を事前に提出させ、それらの内容を議論、検討し、授業内容の深化をはかる
第 8 回	レポートのアウトラインの発表	最終回に発表を行うレポートのアウトラインを示し、フィードバックを受ける。
第 9 回	プログラムプランニング	NPO の実態は、個々の事業、すなわちプログラムである。これをいかに企画立し、実施していくのかについて検討する。
第 10 回	戦略計画	変化の激しい現代において、NPO も内外の変化に対応していかなければ、継続、発展はできない。このため、組織の内外環境を分析し、優先順位をつけて運営を進めるための戦略計画について検討する。
第 11 回	NPO の設立	組織は、設立しなければ機能しない。営利であれば株式会社、非営利であれば NPO 法人や一般社団・財団など法人格の取得を行うことになる。ここでは、NPO 法人の設立について考える。
第 12 回	NPO の世代交代	NPO においても、設立から時間が経過すると、世代交代の問題が出てくる。営利企業との比較も含め、これらを進める手法を検討する。
第 13 回	授業のふりかえり	第 9 回から 12 回までの授業で興味を持った点と分かりにくかった点を事前に提出させ、それらの内容を議論、検討し、授業内容の深化をはかる。
第 14 回	レポートの発表	授業に関連したテーマで作成したレポートを発表し、教員と院生からのフィードバックを受けるとともに、NPO の運営方法や運営の現状、課題などについて、議論する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

・講義に関する学習
事前にウェブにアップされた授業資料を読み、授業内容のイメージをえるとともに、質問、意見などを考えておく。この予習に加え、復習として、講義のメモや授業中の質問、回答、議論などについて、毎回、簡単に整理しておく。
・発表に関する学習
授業期間中に 2 回ふりかえりを提出する。さらに、レポートに関して、アウトラインとレポート（発表用レジュメと本文）を期限（オリエンテーションで提示）までに提出する。なお、これらの学習時間については、予習・復習が各回 30 分程度、ふりかえりの作成が 1 回につき 1 時間（2 回なので 2 時間）、レポートのアウトラインは 2 時間、レポートの作成（発表用レジュメと本文）は 10 時間程度を要する。

【テキスト（教科書）】

柏木宏著『NPO マネジメントハンドブック』明石書店、2004 年。

【参考書】

柏木宏共編著『コロナ禍における日米の NPO』明石書店、2020 年。
受講生の希望と必要に応じて、随時、紹介する。

【成績評価の方法と基準】

配分：平常点（授業中の議論への参加度など）50%、「ふりかえり」とレポート 50%。
レポートの評価基準：授業内容との関連性、学術性、創意工夫、表記、論旨。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【学生が準備すべき機器他】

オンライン授業に必要な PC や Wi-Fi 設備などを用意したうえで、学習支援視システム利用できる環境の準備が必要。

【その他の重要事項】

特になし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>
NPO 論、NPO マネジメント

<研究テーマ>

日米の NPO、社会運動

<主要研究業績>

- ・『アメリカの外国人労働者』明石書店、1991 年
- ・『企業経営と人権』解放出版社、1993 年
- ・『アメリカのなかの日本企業』日本評論社、1994 年
- ・『災害ボランティアと NPO』共編著、朝日新聞社、1995 年
- ・『ボランティア活動を考える』岩波書店、1996 年
- ・『NPO インターシップの魅力』共編著、アルク、1998 年

- ・『アメリカの労働運動の挑戦』労働大学、1999年
- ・『NPO マネジメントハンドブック』明石書店、2004年
- ・『指定管理者制度と NPO』明石書店、2007年
- ・『NPO と政治』明石書店、2008年
- ・『創造都市経済と都市地域再生』共著、大阪公立大学共同出版会、2011年
- ・『みんなで考える広域複合災害』共著、大阪公立大学共同出版会、2013年
- ・『高齢者が動けば社会が変わる』共著、ミネルヴァ書房、2017年
- ・『未来を切り拓く女性たちの NPO 活動』共著、明石書店、2019年
- ・『コロナ禍における日米の NPO』共編著、明石書店、2020年

【Outline and objectives】

This class focuses on how to manage a nonprofit organization. By learning management of its human resources, financial resources and planning methods, students would obtain basic skills to manage a nonprofit organization.

NPO論

柏木 宏

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

NPO（民間非営利組織）は、サービス活動の提供による社会・地域問題への対応と、社会変革に向けたアドボカシー活動の両輪によって成り立っている。これらの活動により、NPOは、市民セクターの形成・発展の中心的な役割を担うとともに、市民社会を構築するための重要なツールとして機能している。日本におけるNPOは、1998年のNPO法成立によって具体化、顕在化したといえるが、「NPOの先進国、アメリカ」では、1世紀以上前から生成し、1960年代以降、急速に発展している。本授業では、NPOに関する基本的な概念の整理、こうした日米におけるNPOの歴史的背景や意義、現状と課題などについて理解することを目的とする。

【到達目標】

上記の授業の概要と目的を踏まえ、NPOに関する基本的な知識を幅広く獲得するとともに、コロナ禍における現状や課題を含めた理解を深めることを目標とする。

なお、政治学専攻「NPO論1」においては、ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連、特に「DP1」は特に強く関連、「DP2」「DP3」は強く関連している。公共政策学専攻「NPO論」においては、ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻公共マネジメントコースにおいては「DP3」に関連している。ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻市民社会ガバナンスコースにおいては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、特に「DP4」は特に強く関連している。連帯社会インスティテュート「NPO論（現状と課題）I」においては、ディプロマポリシーのうち、「DP1」に関連している。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻公共マネジメントコースにおいては「DP3」に関連している。ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻政策研究コースにおいては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、特に「DP4」は特に強く関連している。

【授業の進め方と方法】

・教員による講義
各回の講義の資料は、事前にウェブにアップしておく。これを読み、講義内容のイメージをえるとともに、質問、意見などを考えておく。この予習を行っていることを前提として、授業を進めていく。毎回の講義は、原則として3分の2程度を教員からのプレゼンテーションとする。残りの時間で質疑応答を含めた議論を行い、最後にまとめをする。

・学生の発表
講義への理解度を確認するとともに、不明瞭な点を明確にするため、期間中に講義のまとめ（ふりかえり）のセッションを実施する。また、授業に関連したテーマのレポートの作成を行う。作成に先立ち、アウトラインを作成、授業で発表する。レポートは、レジюмеに基づいて発表を行う。ふりかえり、アウトライン、レポートの発表の際には、教員・受講生からフィードバックを受ける。

・オフィス・アワー
講義の疑問点やふりかえり、レポートの作成に関する指導を受ける。

・授業の形式
授業は、Zoomを使用し、オンライン授業形式で行う。ZoomのID・パスワード等については、初回授業までに学習支援システム（Hoppii）に掲載する。授業開始後、新型コロナウイルスの感染状況が改善し、対面授業が可能となった場合は、対面授業に切り替える。その場合、事前通知を行い、2週間後より対面授業に切り替える。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	本授業の進め方や評価方法などについて説明するとともに、受講生のNPOに関する知識や関心を聞き、今後の授業に反映させる。
第2回	非営利と公益の概念整理	NPOにとって最も重要といえる「非営利」と「公益」というふたつの概念を整理、理解する。
第3回	ボランティア活動とNPO	ボランティア活動とNPO活動の同質性と異質性、また関係性について検討、理解する。

第4回	NPO法の成立とその後	阪神淡路大震災後のボランティア活動の広がり、その影響もあり1998年に成立したNPO法の背景と成立過程、法の概要を整理するとともに、同法の成立後のNPOの発展や税制優遇制度の導入など、同法に関連した重要な動きやコロナ禍にNPOが直面した課題などを概観する。
第5回	世界のNPO	ジョンズ・ホプキンス大学の調査をベースに、世界のNPOを概観する。
第6回	アメリカのNPO	世界最大のNPOセクターをもつアメリカで、NPOがどのように発展し、制度が築かれてきたのかについて考える。そのうえで、コロナ禍を含めたアメリカのNPOセクターの現状について最新のデータを用いて把握するとともに、課題についても検討する。
第7回	授業のふりかえり	第2回から6回までの授業で興味を持った点と分かりにくかった点を事前に提出させ、それらの内容を議論、検討し、授業内容の深化をはかる。
第8回	レポートのアウトラインの発表	最終回に発表を行うレポートのアウトラインを示し、フィードバックを受ける。
第9回	NPOのサービス活動	NPOのサービス活動とアドボカシー活動が、どのように関連して展開され、NPOのサービスの充実や社会課題に関する政策の形成に寄与しているのか、理論的に検討する。
第10回	NPOのアドボカシー活動	日本とアメリカにおけるNPOのサービス活動とアドボカシー活動について、その実態について事例を含め、検討、理解する。
第11回	NPOの協働に関する理論の検討	NPOと行政・企業の関係の理論的な枠組みを検討する。
第12回	NPO協働に関する事例研究	日米においてNPOと行政・企業の間で、どのように協働が展開されているのか、事例を含め、検討する。
第13回	授業のふりかえり	第9回から12回までの授業で興味を持った点と分かりにくかった点を事前に提出させ、それらの内容を議論、検討し、授業内容の深化をはかる。
第14回	レポートの発表	授業に関連したテーマで作成したレポートを発表し、教員と院生からのフィードバックを受けるとともに、NPOの社会的役割や現状、課題などについて、議論する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

・講義に関する学習
事前にウェブにアップされた授業資料を読み、授業内容のイメージをえるとともに、質問、意見などを考えておく。この予習に加え、復習として、講義のメモや授業中の質問、回答、議論などについて、毎回、簡単に整理しておく。

・発表に関する学習
授業期間中に2回ふりかえりを提出する。さらに、レポートに関して、アウトラインとレポート（発表用レジюмеと本文）を期限（オリエンテーションで提示）までに提出する。なお、これらの学習時間については、予習・復習が各回30分程度、ふりかえりの作成が1回につき1時間（2回なので2時間）、レポートのアウトラインは2時間、レポートの作成（発表用レジюмеと本文）は10時間程度を要する。

【テキスト（教科書）】

特定のテキストは定めない。授業中に配布する資料を用いて、授業を行う。

【参考書】

柏木宏編著『コロナ禍における日米のNPO』明石書店、2020年。
その他、受講生の希望と必要に応じて、随時、紹介する。

【成績評価の方法と基準】

配分：平常点（授業中の議論への参加度など）50%、「ふりかえり」とレポート50%。
レポートの評価基準：授業内容との関連性、学術性、創意工夫、表記、論旨。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【学生が準備すべき機器他】

オンライン授業に必要なPCやWi-Fi設備などを用意したうえで、学習支援システム利用できる環境の準備が必要。

【その他の重要事項】

特になし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>
NPO論、NPOマネジメント
<研究テーマ>
日米のNPO、社会運動
<主要研究業績>
・『アメリカの外国人労働者』明石書店、1991年
・『企業経営と人権』解放出版社、1993年

- ・『アメリカのなかの日本企業』日本評論社、1994年
- ・『災害ボランティアとNPO』共編著、朝日新聞社、1995年
- ・『ボランティア活動を考える』岩波書店、1996年
- ・『NPO インターンシップの魅力』共編著、アルク、1998年
- ・『アメリカの労働運動の挑戦』労働大学、1999年
- ・『NPO マネジメントハンドブック』明石書店、2004年
- ・『指定管理者制度とNPO』明石書店、2007年
- ・『NPOと政治』明石書店、2008年
- ・『創造都市経済と都市地域再生』共著、大阪公立大学共同出版会、2011年
- ・『みんなで考える広域複合災害』共著、大阪公立大学共同出版会、2013年
- ・『高齢者が動けば社会が変わる』共著、ミネルヴァ書房、2017年
- ・『未来を切り拓く女性たちのNPO活動』共著、明石書店、2019年
- ・『コロナ禍における日米のNPO』共編著、明石書店、2020年

【Outline and objectives】

Nonprofit organizations (NPOs) have two primary roles; to deal with social and community problems by providing services and to advocate these problems to solve them. By these works, NPOs take a leading role in developing civil society. NPOs in Japan were recognized in 1998 through the law promoting nonprofit activities. In the US, NPOs started more than a century ago and have developed rapidly since the 1960s. This class analyzes their significance and examines the history and current situations in the US and Japan.

非営利セクター研究

矢代 隆嗣

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

現代社会における非営利セクターの位置づけを理解した上で、非営利組織についての現状と課題を整理する。その上で民間非営利組織であるNPO (Non Profit Organization) に焦点を当て、公的課題解決における役割について整理する。また、地域課題解決に向けてのNPOと行政、また企業との協働についても考察を深める。

【到達目標】

・現代社会における非営利セクターの位置づけと民間非営利組織に関する基礎知識を理解すること。
 ・公的課題解決に向けた非営利組織の経営・事業マネジメントの重要性と実践でのポイントを理解すること。
 ・地域課題解決に向けた民間非営利組織の活動、他セクター（政府、民間企業）との協働の現状と課題について理解するとともに、課題解決の方向性をまとめること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻公共マネジメントコースにおいては「DP3」に関連している。ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻政策研究コースにおいては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、特に「DP4」は特に強く関連している。

【授業の進め方と方法】

授業は基本的に講義形式で進めるが、各回のテーマに関する事例を活用したクラス内討議を行う演習を組み込み実務での実践につなげるスキル強化も図る。また、授業では受講生からの研究報告とそれに関する質疑応答・討議を行う。講師は発表への講評を行うとともに、質疑応答・討議でのファシリテーターを担う。（授業形式：対面）

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期前半

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	授業のねらい、全体構造、講義の進め方、評価方法について説明する。
第2回	非営利セクターとは	現代社会における非営利セクター（サードセクター）を他セクターとの比較を通じて、その特徴を説明する。
第3回	日本の非営利セクター	日本の非営利セクターの特性、活動状況を説明する
第4回	非営利組織の特性	非営利組織、その分類概念、行動原理、市民社会との関係について説明する。また、政府の失敗、市場の失敗、非営利の失敗について説明する。
第5回	非営利組織と新しい公共	新しい公共について整理するとともに、その担い手としての非営利組織の役割を考察する。
第6回	非営利組織と公共サービス	公共サービスにおける非営利組織の活動分野（保健・医療、福祉、教育、環境、まちづくり、その他）を概観する。準市場についての考察も行う。
第7回	社会的企業・コミュニティビジネス	社会的企業、コミュニティビジネス、社会的起業家について説明するとともに、社会における社会的企業の位置づけ・役割を考察する。
第8回	民間非営利組織（NPO）とは	特定非営利活動（NPO法）とその背景を概観し、NPOの組織特性や組織マネジメントの特徴を整理する。
第9回	NPOの戦略・事業プロセスマネジメント	NPOの戦略と事業プロセス（立案・実施・評価）におけるマネジメントポイントを考察する。
第10回	NPOと行政の協働	地域課題解決における協働（Coproduction）について整理した上で協働の現状と課題について説明するとともに課題解決の方向性を考察する。
第11回	NPOと行政の協働の事例	地域課題解決に向けたNPOと自治体の協働事例から協働の実態と課題を整理するとともにその克服の方向性を考察する。
第12回	NPOと行政の協働マネジメント	NPOと行政の協働における成果に向けたマネジメント対象について説明するとともにそのマネジメントのポイントを考察する。

第13回 NPOと企業の協働

NPOと企業の協働の現状と課題を説明するとともにその解決の方向性を考察する。

第14回 まとめ

地域課題解決における非営利組織の課題と展望について

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

特になし。講義毎に必要な応じて資料配布する。

【参考書】

雨森孝悦『テキストブック NPO 非営利組織制度・活動・マネジメント（第2版）』東洋経済新報社、2012年
 今田忠『概説市民社会論』関西学院大学出版会、2014年
 岡本仁宏編『市民社会セクターの可能性』関西学院大学出版会、2015年
 河合明宜、大橋正明『新訂 NPO マネジメント』放送大学振興会、2017年
 川口清史編（2005）『よくわかる NPO・ボランティア』ミネルヴァ書房
 坂本浩也編著『市民社会論』法律文化社、2017年
 佐藤慶幸『NPOと市民社会』有斐閣、2002年
 尾尾雅夫・吉田忠彦『非営利組織』有斐閣、2009年
 矢代隆嗣『NPOと行政による《協働》活動における「成果要因」』公人の友社、2013年
 矢代隆嗣『自治体の政策形成マネジメント入門』公人の友社、2017年
 矢代隆嗣『NPOと行政の協働事業マネジメント～共同から協働による地域の課題を解決する』公人の友社、2020年
 サラモン,L.M. 他今田忠訳『台頭する非営利セクター』ダイヤモンド社、1996年
 サラモン,L.M. 江上哲監訳『NPOと公共サービス 政府と民間のパートナーシップ』ミネルヴァ書房、2007年
 ベストブ,V. 藤田他訳『福祉社会と市民民主主義』日本経済評論社、2000年
 リビエツ,A. 井上泰夫訳『サードセクター「新しい公共」と「新しい経済」』藤原書店、2011年

【成績評価の方法と基準】

授業での発言、演習・討議への参画度（50%）、報告発表と質疑応答（30%）、期末レポート（20%）

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 地域協働研究、地域課題と非営利組織研究、自治体政策マネジメント研究

<研究テーマ> 自治体と非営利組織の協働、自治体政策マネジメント、事業評価、地域課題解決能力開発

<主要研究業績> 『NPOと行政による《協働》活動における成果要因』（公人の友社、2013年）

【Outline and objectives】

After understanding placing by the nonprofit sector in modern society, organize the current situation and issues on non-profit organizations. Then, focus on NPO which is private nonprofit organization on it and organize the role in solving public issues. In addition, we will deepen our consideration of the coproduction between NPOs and the government for resolving regional issues, and the companies also consider about coproduction between NPOs and enterprises.

SOC500P1 - 209

市民社会論

菅原 敏夫

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

現代市民社会の実相と市民社会論の再検討。自由、平等、信頼、互酬を理念とする市民社会の劣化と危機を見据えて、再構築を急ぐ。

【到達目標】

市民社会の強化につながる論点を習得する。市民社会の現代的構築の論点を習得する。現代市民社会形成の批判的主体となる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻公共マネジメントコースにおいては「DP2」「DP3」に関連している。ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻政策研究コースにおいては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、特に「DP4」は特に強く関連している。

【授業の進め方と方法】

世界的に市民社会への関心が高まっている。政治的民主主義と開放経済のもとで、市民社会をよりよくガバナリングしていくことの意味を捉え、市民社会論が果たすべき役割を考える。現代市民社会の考察（観察と研究）は参与的で、社会と観察者個人は相互的な役割を果たす。そのただなかでの、市民社会、個人、集団の相互連関について考察する。現代の市民社会をその変化の中で主体的にとらえる。また、市民社会論形成の思想史を追体験し検証をおこなう。事前に示す文献を元に講義と討論を行う。志願した報告者が報告をする方式が望ましい。基本的内容は講義形式を予定する。市民社会の歴史的存在形態を一瞥し、近代以降の市民社会（狭義の市民社会）に関心を集中する。ジョン・ロックを出発点とし、米国、日本の市民社会論の特徴を明らかにする。討論の中から問題点が浮かび上がるように工夫したい。2015年は、松下圭一が亡くなり、ベネディクト・アンダーソンも亡くなった年だった。それから6年目、市民社会を歴史的に振り返る必要が強まっている。そうした課題の探求にもこたえたい。

毎授業時とも「討議」の時間が確保されているので、グループディスカッション、ディベートのような運用を工夫し、「討議」から学ぶ学習のフィードバック、思考のループを体験的に感得する方法の現れに留意する。

授業は原則対面で実施する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

春学期前半

回	テーマ	内容
第1回	市民社会の歴史俯瞰	シュテファン＝ルートヴィヒ・ホフマン『市民結社と民主主義 1750-1914』を参考に市民社会と市民結社の関係を最新の研究動向から考える。
第2回	市民社会の歴史と現代への課題・問題機制	『市民結社と民主主義 1750-1914』以後、現代の課題。民主主義の危機。コミュニティ・オーガナイジングも参考に。市民社会と市民結社の関係を最新の研究動向から考える。
第3回	市民社会の思想史	ジョン・ロックとともに考える。『統治二論』
第4回	市民社会の思想史と市民社会論の受容、展開	ジョン・ロックとともに考える。『統治二論』
第5回	市民社会の哲学	松下圭一『ロック「市民政府論」を読む』も参照しつつ。市民社会の反省、ロバート・D・パットナムとともに考える。『孤独なボウリング』
第6回	市民社会の哲学の変容と反省	市民社会の反省、ロバート・D・パットナムとともに考える。『孤独なボウリング』併せて、『哲学する民主主義』、『われらの子ども』も参照する。スコチボル、E・オストロム。
第7回	現代の市民社会と公共性の構造転換	ユルゲン・ハバーマスとともに考える。『第2版公共性の構造転換』
第8回	現代の市民社会と公共性の再構築へ向けて	ユルゲン・ハバーマス『コミュニケーションの行為の理論』も参照。公共性、公共圏のその後。
第9回	リバタリアニズムとコミュニティニズム	自由と共同体に関する制度。ロールズ『正義論』。
第10回	リバタリアニズムとコミュニティニズム	自由と共同体に関する制度。ウォルツァー『正義の領分』。普遍主義と特定主義。
第11回	ソーシャルチェンジの理論	CSO（市民社会団体）の実践から学ぶ。

第12回	ソーシャルチェンジの実践	国家的なものとの市民社会の相克。ナショナリズムの再定義。「想像の共同体」の再発見。
第13回	市民社会ガバナンス	ソーシャル・ガバナンスと市民社会ガバナンス。「新しい公共」。東日本大震災で問われる市民社会の復興と構築。傷ついた市民社会。市民社会の現代的再構築。まとめ。
第14回	市民社会ガバナンス再構築	

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

シュテファン＝ルートヴィヒ・ホフマン『市民結社と民主主義 1750-1914』、ジョン・ロック『統治二論』、ロバート・D・パットナム『孤独なボウリング』、ユルゲン・ハバーマス『第2版公共性の構造転換』、ロールズ『正義論』、ウォルツァー『正義の領分』は市民社会を考えるための必須の文献となっている。新訳等も現れて学びやすい分野である。事前の学習として一定の密度で目を通しておくことが望ましい。本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

授業計画で示した文献をその講義のテキスト（議論の基点となる材料）とする。

【参考書】

テキストと同じ。

【成績評価の方法と基準】

平常点10%、各回の授業において各自の報告発表・討議を行った場合50%の枠内で加点、各回の討論への参加・貢献を40%で評価。

【学生の意見等からの気づき】

学生の議論を適切に構築し、各自の気づきを尊重する。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>公共性論・市民社会論・市民経済学

<研究テーマ>公私協働領域の研究

<主要研究業績>・「参院選と両院のねじれ」『ハンギョレ経済研究所レビュー』2010年9月号

・「公益法人改革の行方」『日経グローバル』2010年7月号

・「新しい公共と信頼の再構築」『JP総研リサーチ』2010年12月。「公共サービスと地域資源」『DIO』2018年1月号「地域を支える公共サービスと共同の仕組み」『労働の科学』2019年12月号

【Outline and objectives】

Our objectives are observation of modern Civil society and reconsideration on Civil society theory. We try to reconstruct the Civil society theory.

市民社会とコミュニティ

淵元 初姫

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

公共政策研究科の「市民社会とコミュニティ」と政治学研究科の「コミュニティ論研究1」との合併開講で、地域コミュニティに関する政策論を学ぶための科目の一つとして設置されている。本科目ではコミュニティ・レベルで展開している諸主体の公共的な動きを、事例研究を通じて考え、理論的な整理を行う。

日本では、合併によって失われた制度枠組を自治会・町内会が民間的に回復するという特異な経過を辿ったほか、民間（「市民社会」）側の多彩な営為が生活を支えてきたことを論じていく。

【到達目標】

日本のコミュニティの基礎的組織（自治会・町内会や地区社会福祉協議会、地区民生委員協議会、消防団など）や地域で活動するNPOなどについて理解し、その現代的、日本的特徴を理解することを目標とします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻公共マネジメントコースにおいては「DP2」「DP3」に関連している。ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻政策研究コースにおいては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、特に「DP4」は特に強く関連している。

【授業の進め方と方法】

教員による講義と受講者による課題報告とで構成します。課題に対しては、授業中に参加者全員による質疑・議論を行い、講評を行うことによってフィードバックします。

授業方式は原則として対面授業とします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

春学期後半

回	テーマ	内容
第1回	福祉国家の変容とコミュニティ	福祉国家の形成と変容に伴い、人との間の「つながり」がどのように変化してきたのかを論ずる。
第2回	市民社会の概念史	日本人の市民社会意識を考えるため、市民社会の概念史を確認する。
第3回	都市化とコミュニティ	都市の発展により、コミュニティにおけるネットワークがどのように変化したのかを考える。
第4回前 半	日本における自治会・町内会	自治会・町内会の基本的特質と歴史を論ずる。
第4回後 半	受講者による課題報告	受講者が設定したテーマ（例えば、日本の自治会・町内会に関する論点など）について報告し、質疑応答を行う。
第5回前 半	スコットランドの住民組織	スコットランドの地域評議会について説明する。
第5回後 半	受講者による課題報告	受講者が設定したテーマ（例えば、各国の住民組織に関する論点など）について報告し、質疑応答を行う。
第6回前 半	コミュニティにおける「居場所」づくり	近年活発に取り組まれているサロン活動、コミュニティ・カフェなどの事例を検討する。
第6回後 半	受講者による課題報告	受講者が設定したテーマ（例えば、コミュニティにおける居場所作りに関する論点など）について報告し、質疑応答を行う。
第7回前 半	コミュニティの「再生」	現代におけるコミュニティの「再生」について事例に基づいて検討を行う。
第7回後 半	受講者による課題報告	受講者が設定したテーマ（例えば、コミュニティの「再生」に関する論点など）について報告し、質疑応答を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

事前に提示された文献等がある場合は予習を行い、授業の後は、その内容や資料等について復習を行ってください。

課題報告のための準備と、授業の最終回に提出する期末レポートの作成を行う必要があります。

【テキスト（教科書）】

特に使用しません。

【参考書】

必要に応じて、授業中に紹介します。

【成績評価の方法と基準】

課題報告（30%）及び期末レポート（50%）に加え、授業中の質疑や討論における発言（20%）により評価します。

【学生の意見等からの気づき】

市民社会やコミュニティに対する受講生の分析視角が多様であり、その多様性を理解するためにも相互に議論する機会をより多く設けることが必要であると思いました。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 比較政治学、コミュニティ政策、福祉政策

<研究テーマ> ポスト福祉国家時代の市民社会論、地域社会における社会的包摂、英国・スコットランドの地方自治・自治体内分権

<主要研究業績>

「スコットランドの地域評議会－制度の基本的構想とその機能の実際」名和田是彦編（2009）『コミュニティの自治－自治体内分権と協働の国際比較』pp.81-118、日本評論社

「スコットランドにおける権限移譲とジェンダー・クォータ」三浦まり・衛藤幹子編著（2014）『ジェンダー・クォーター世界の女性議員はなぜ増えたのか』pp.203-26、明石書店

「地域社会における社会的連帯の再編：居場所づくりにみる三人称的連帯の可能性」金安岩男・牧瀬稔編著（2019）『都市・地域政策研究の現在』pp.131-42、地域開発研究所

【Outline and objectives】

Community governance in many countries has gone through great transformations in the last half century. The course seeks to provide an understanding of these changes in community policy and why they have come about. The course analyses the ideological and political factors which have shaped the development of civil society in industrial countries in the past and are shaping it in the present.

SOC500P1 - 211

都市ガバナンス論

植木 豊

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この講義では、公共性と「都市ガバナンス」をテーマに講義を行う。今日、公共的な問題を解決するためには、中央政府といった単独主体だけでは不十分になりつつある。都市の問題を、地方政府・企業・非営利組織・自治会等の連繋によって解決する様式が求められつつある。このように、公共的な問題を、地元地域の複数主体連繋（ガバナンス）によって解決していく様式の成立如何を議論していく。

【到達目標】

複数主体間連携による問題解決（ガバナンス型問題解決）の成否要因を分析できるようになることを目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻公共マネジメントコースにおいては「DP3」「DP4」に関連している。ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻政策研究コースにおいては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、特に「DP4」は特に強く関連している。

【授業の進め方と方法】

対面講義形式。配布資料に基づいて講義を進めていき、合わせて、扱った問題について、議論していく。その際、講義内容に基づいた論文作成／アウトライン作成演習等の課題を課し、返却時に議論を含めたフィードバックを行う予定である。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

なし/No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

秋学期前半

回	テーマ	内容
第1回	I ガバナンスとは何か —総論— (1) ガバナンスをめぐる 様々な議論	ガバナンス論をめぐる概観
第2回	(2) 公共性とガバナンス の実際—思考実験による 例解—	具体的な事例を基にして、ガバナンス 論の分析枠組みの概略を知る。
第3回	II ガバナンス論登場の 社会的背景	ガバナンス論が登場した背景を「制度 の失敗」という観点から捉え返す。
第4回	(1) 「制度の失敗」 (2) 「市場の失敗」	「市場の失敗」を社会学の観点から考 察する。
第5回	(3) 「市場の失敗」に対 する国家の介入	福祉国家論と「土建国家」論の具体的 事例を理解する。
第6回	(4) 「国家の失敗」	福祉国家の失敗と「土建国家」の失敗 の要因を把握する。
第7回	(5) 「国家の失敗」に対 する新自由主義的処方箋 の失敗	欧米、日本における新自由主義の登場 とその帰結を考察する。
第8回	III 中間考察—公共性 とガバナンス	ガバナンス論登場の背景を把握した上 で、ガバナンス論の課題・分析枠組み を理解する。
第9回	(1) ガバナンスにおける デューイ的公共性とハー バーマスの公共圏の交差 —その1	ガバナンス型問題解決は、デューイ的 公共性とハーバーマスの公共圏との交 差場面で主題化されることを把握する。
第10回	(2) ガバナンスにおける デューイ的公共性とハー バーマスの公共圏の交差 —その2	デューイ的公共性とハーバーマスの公 共圏の分析枠組みを理解する。
第11回	IV ガバナンスの実際 規範理論と経験理論	ガバナンス論の現状を、規範理論と経 験理論の観点から考察する。
第12回	(1) ガバナンスの分析枠 組み	具体的な事例を念頭に、何をどう分析 すべきかを考察する。
第13回	(2) 複数主体間連携によ る問題解決の実際	具体的な事例をガバナンス論の分析枠組 みを用いて考察する。
第14回	まとめ	ガバナンス型問題解決の行方と課題を 考える。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

配布資料（専門書・論文・新聞記事等のコピー）を予習・復習に用いること。本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

なし。毎回、論文・新聞記事等のコピーを配布。

【参考書】

Mark Bevir ed. (2011) The Sage Handbook of Governance, Sage.
マーク・ベヴィア『ガバナンスとは何か』NTT出版。

【成績評価の方法と基準】

ガバナンスに関する小論文を学期末に提出してもらい、この小論文で成績を評価する（100%）。

【学生の意見等からの気づき】

受講生の問題関心は、理論志向、事例志向など様々であると思われるので、受講生の要望に適宜応じていく予定。

たとえば、2016年度は事例分析を多くし、2017年度2019年度は理論分析を多くした。

【学生が準備すべき機器他】

特になし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>社会学
<研究テーマ>社会理論、都市論
<主要研究業績>

著書

植木豊『プラグマティズムとデモクラシー— デューイ的公衆と「知性の社会的使用」』ハーベスト社

訳書

ジョン・デューイ『公衆とその諸問題』ハーベスト社

『プラグマティズム古典集成— パース、ジェイムズ、デューイ』作品社

『G・H・ミード著作集成— プラグマティズム、社会、歴史』作品社

【Outline and objectives】

The aim of this lecture is to provide an analytical framework for urban governance. Given that a single governmental body is not sufficient to solve public problems under today's complicated urban conditions, it is worth noting that co-operations of different kinds of urban associations are emerging as means for solving urban problems. The lecture discusses in what way urban governance can solve them.

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

自治体の文化政策についての理解を深め、論議することをテーマとする。狭義の自治体文化政策は文化施設の設置と運営、文化事業の展開が中心になるだろうが、本授業では広義の自治体文化政策にも話を広げたい。観光振興や景観保全など文化を通じたまちづくりにも言及する。

（対面授業を予定するが、感染拡大の状況次第で、ZOOM等を用いたリアルタイムのオンライン授業に変更される可能性がある）

【到達目標】

中央政府の文化政策を総括したうえで、近年に展開されている自治体文化行政あるいは文化政策の経緯と現状を修得する。その後、都内を中心とした自治体文化政策の事例を学ぶ。現地を踏査することで、現状把握に努める。

視察をもとに、受講生は自らの出身地あるいは現在の居住地のありようについて調べ、討議し、21世紀の地域づくりを考える。観光振興や景観保全に関する政策についても取り上げ、受講生の視野を広げたい。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻公共マネジメントコースにおいては「DP1」「DP3」に関連している。ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻政策研究コースにおいては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、特に「DP3」は特に強く関連している。

【授業の進め方と方法】

本研究科では、21年度において、原則として対面授業を行う。（感染拡大等に伴い緊急事態になった場合、オンライン授業に変更される可能性もあり、その際は追って指示する）

授業では、広義の文化政策を積極的に取り上げようと考えている。文化による地域活性化、まちづくりである。文化施設の設置あるいは文化事業の実施によって、まちの空気が変わっていく……。そのような先駆的事例を紹介しつつ、都内を歩いて現場を体験したいと想定している。

身近な課題である都心再開発、観光振興、都市景観などについて、具体的な事例を挙げながら論議を重ね、わが国の将来像を検討する。受講生とともに21世紀のまちづくりを考えていく。

しかし、政策は「生きもの」なので、適宜、新しいニュースが入れば、授業計画を変更して、新たなことに言及する可能性があることを了承願いたい。

視察については、シラバス作成時点で具体的な場所を明記できない。市ヶ谷という都心に立地する法政の地理的利点を生かしたいと考えている。

受講生は自らの関心のある都市、たとえば出身地や居住地の取り組みについて調査を行い、適宜、発表することで、論議の材料を提供する。

授業にはリアクションペーパーの提出を求める。先述の論議や同ペーパーを受けて受講生と意見交換を重ね、フィードバックしていく。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

春学期前半

回	テーマ	内容
第1回	◆ガイダンス／授業の進め方	・授業目的の説明。どのように授業を展開するかの言及。および大学院での勉学の心得。
第2回	◆中央政府が展開した文化政策の歴史と特徴	・明治以降に展開した中央政府の文化政策の過程を振り返る。

- | | | |
|------|---------------------|--|
| 第3回 | ◆自治体が展開した文化政策の歴史と特徴 | ・戦後に始まった県や市町村の文化政策の歩みを振り返る。 |
| 第4回 | ◆東京での試み | ・東京各区は、競い合いながら文化のまちづくりを進めており、経緯と現状を学ぶ。 |
| 第5回 | ◆京都市の文化政策 | ・京都芸術センターの設立過程と現状を報告する。自治体の文化施設のありようと指定管理者制度に触れる。 |
| 第6回 | ◆横浜市等の文化政策 | ・横浜市などの動きについても言及する。黄金町での取り組みやアート系映画館「シネマ・ジャック&ベティ」の活動などである。 |
| 第7回 | ◆都内での現地踏査 | ・都内のまちを歩き、文化施設を訪れ、実態を把握する。
（シラバス作成時は未定）
（交通費、入場料は自己負担であることを、あらかじめ了承する） |
| 第8回 | ◆都内での現地踏査 | ・都内のまちを歩き、文化施設を訪れ、実態を把握する。
（シラバス作成時は未定）
（交通費、入場料は自己負担であることを、あらかじめ了承する） |
| 第9回 | ◆京都市の観光政策 | ・京都の観光政策について説明を行い、東京のまちづくりと比較する。 |
| 第10回 | ◆京都市の景観政策 | ・わが国で最も厳しいとされる京都市の景観条例について説明を行い、東京のまちづくりと比較する。 |
| 第11回 | ◆都内での現地踏査 | ・都内のまちを歩き、文化施設を訪れ、実態を把握する。
（シラバス作成時は未定）
（交通費、入場料は自己負担であることを、あらかじめ了承する） |
| 第12回 | ◆都内での現地踏査 | ・都内のまちを歩き、文化施設を訪れ、実態を把握する。
（シラバス作成時は未定）
（交通費、入場料は自己負担であることを、あらかじめ了承する） |
| 第13回 | ◆受講生からの報告 | ・受講生が自ら関心のある都市の現状を報告して論議する。 |
| 第14回 | ◆まとめ | ・これまでの学びや視察を踏めて全員で討議する。 |

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

（授業開始前、あるいは授業初回に受講生と相談して、以下のうちから指定する）

- ・松本茂章『日本の文化施設を歩く 官民協働のまちづくり』水曜社、2015年
- ・松本茂章編『岐路に立つ指定管理者制度 一変容するパートナーシップ』水曜社、2019年
- ・松本茂章編『文化で地域をデザインする 社会の課題解決と文化をつなぐ現場から』学芸出版社、2020年
- ・松本茂章編『はじまりのアートマネジメント』水曜社、2021年3月刊行予定

【参考書】

松本茂章『官民協働の文化政策 人材・資金・場』水曜社、2011年
このほか、必要があれば、適宜、授業中に指示する。

【成績評価の方法と基準】

出席点 50%（単位取得には3分の2以上の出席が必要）
平常点 20%（授業中の発表、発言、出席カードのコメントなど）
期末レポート 30%

【学生の意見等からの気づき】

文化施設等を訪ねるフィールドワークは毎年好評なので継続する。法政大学公共政策研究科は都心にあり、地理的に恵まれている。この環境を生かして都内各地に足を運ぶ予定である。

【学生が準備すべき機器他】

特になし。

【その他の重要事項】

文化政策研究は、市民社会ガバナンスコースの専門科目に含まれているものの、自治体文化政策を主に取り上げるので、ぜひ公共マネジメントコースの院生にも受講していただきたい。自治体職員やNPO職員、あるいはこれらを目指す院生にも参考になる、と考えている。政策は日々動いているので、新たな取り組みが展開したり話題になったりした場合、ニュースとして直近の動きを取り上げる場合がある。視察に関しても、ゲストの都合や天候などを考慮して変更される場合がある。このため、上記の授業計画の内容や順番は変更される可能性があることを事前に了承願いたい。

視察に関しては、交通費、入館料は自己負担であることを、あらかじめ了承して受講すること。

社会人受講生の場合、仕事に追われるため、日々の通学は大変だと思われるが、頑張って出席していただければ……と願う。やる気のある院生の受講を期待する。

講義のなかで、おりをみて、修士論文作成に臨む姿勢や図書館の利用等についても助言する。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

政策科学、文化政策学、まちづくり政策論

<研究テーマ>

自治体文化政策の現状と課題、文化による地域デザイン、文化施設研究、指定管理者制度

(日本アートマネジメント学会や日本文化政策学会などに所属)

<主要研究業績>

◆単著

松本茂章『芸術創造拠点と自治体文化政策 京都芸術センターの試み』(水曜社、2006年)

松本茂章『官民協働の文化政策 人材・資金・場』(水曜社、2011年)

松本茂章『日本の文化施設を歩く 官民協働のまちづくり』(水曜社、2015年)

◆共編著

中川幾郎、松本茂章編『指定管理者は今どうなっているのか』(水曜社、2007年)

など

◆共著

『入門 文化政策』(ミネルヴァ書房、2008年)

『地域の自律的蘇生と文化政策の役割』(学文社、2011年)

『都市自治体の文化芸術ガバナンスと公民連携』(公益財団法人日本都市センター、2018年)

など

【Outline and objectives】

This course is designed for students who want to learn the actual situation and problems of community development with cultural activities in Japan. We are going to focus especially on municipal cultural policies, including tourism promotion, landscape conservation, and revitalization of central urban area. At the same time, however, it is possible to deepen your understanding of governmental cultural policies, with which municipalities have to build a mutually complementary relationship in order to realize these policies. Each of the cities or towns familiar to students is an important subject for our study. The main objective of this course is to extend the whole knowledge of cultural policies through concrete examples enough to discuss with each other and consider together the community development with arts and culture in the 21st century. Sometimes field research in Tokyo will be conducted.

シンクタンク論

蒔田 純

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

政策形成過程、統治機構、政官関係、国家-社会関係等、公共政策に関わる基礎的要素の概念的な意味と具体的な成り立ちに関する理解を踏まえ、それらにおいてシンクタンクがどのように位置づけられ、どのような役割を果たしているか、について考察する。

【到達目標】

・海外および国内の主要なシンクタンクについて、その機能と政策形成過程における役割について把握することができる。
 ・政策形成過程、統治機構、政官関係、国家-社会関係等、公共政策に関わる基礎的概念を踏まえた上で、シンクタンクという視点を通して、それらの仕組みや特徴、課題等について理解することができる。
 ・「仮説」⇒「検証」という科学的思考の基礎を踏まえて、公共政策の文脈の中で、シンクタンクと他の諸要素との因果関係について論理的に説明することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻公共マネジメントコースにおいては「DP3」「DP4」に関連している。ディプロマポリシーのうち、公共政策学政策研究コースにおいては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、特に「DP4」は特に強く関連している。

【授業の進め方と方法】

基本的に対面授業とする。
 授業前半では、「シンクタンクとは何か」「シンクタンク論を学ぶ意義とは何か」について踏まえた上で、国家-社会間関係や政策形成過程等、公共政策の概念をシンクタンクの視点から考察し、加えて、政策形成への人材供給や資金の在り方等、シンクタンクをめぐる主要な論点について検討する。これに基づき後半では、機能や母体等の観点からシンクタンクを分類した上で、海外・日本のそれぞれにおけるシンクタンクについて、その政策形成における位置づけや役割について具体的に論ずる。
 特定の教科書は使用せず、毎回、レジュメを配布する。授業を行う上では、概念的な説明のみではなく、できるだけ具体的に現実における動きを踏まえた講義とすることを心掛けたい。場合によっては、実際にシンクタンクで働く方やその関係者等、各回のテーマに沿うゲストスピーカーを招聘し、実際におけるシンクタンクの働きをお話いただく。

授業は一方的な講義ではなく、受講者による質問・意見交換を歓迎する。一つの質問を基に教室中に議論が起るような、参加型の学習空間としたい。授業後半では受講者に何らかのプレゼンテーションを行ってもらおう。

受講者には授業の最後にリアクションペーパーを提出してもらい、次回講義時に口頭にて、あるいは、講義後にメール等にて、それに対するフィードバックを行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

秋学期集中

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	授業内容・日程等の説明、講師の自己紹介など
第2回	シンクタンクとは	シンクタンクの定義、歴史、機能など
第3回	国家と社会	国家-社会間関係、「政策ネットワーク論」など
第4回	政策形成とシンクタンク	政策形成過程の基礎、シンクタンクから見た政策形成過程
第5回	シンクタンクの人材	リボルビングドア、政治任用など
第6回	シンクタンクの資金	フィランソロピー、501(C)3 など
第7回	シンクタンクの分類	コントラクト、アカデミック、アドボカシーなど
第8回	海外のシンクタンク①	米国を中心に海外のシンクタンクについて
第9回	海外のシンクタンク②	欧州を中心に海外のシンクタンクについて
第10回	日本のシンクタンク	日本のシンクタンクについて
第11回	立法補佐機関とシンクタンク	議会の立法活動を補佐する機関としての立法補佐機関とシンクタンクの関係性について
第12回	団体とシンクタンク	利益集団・圧力団体とシンクタンクの関係性について
第13回	自治体シンクタンク	自治体が創設したシンクタンクについて
第14回	まとめ	全体のまとめと今後の展望

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

特定の教科書は使用しない。

【参考書】

Alex Abella, 2009. *Soldiers of Reason: The RAND Corporation and the Rise of the American Empire*, Mariner Books.
 船橋洋一. 2019. 『シンクタンクとは何か—政策起業家の時代』中央公論新社.
 飯尾潤. 2007. 『日本の統治構造』中央公論新社.
 小池洋次（編著）. 2010. 『政策形成』ミネルヴァ書房.
 宮田智之. 2017. 『アメリカ政治とシンクタンク—政治運動としての政策研究機関—』東京大学出版会.
 Shimizu, Mika. 2015 “Think Tanks and Policy Analysis: Meeting the Challenges of Think Tanks in Japan”, in Yukio Adachi, Sukehiro Hosono and Jun Iio eds., *Policy Analysis in Japan*, Policy Press at the University of Bristol, Chap.14.
 Smith, James A. 1991. *The Idea Brokers: Think Tanks and the Rise of the New Policy Elite*, Free Press.
 鈴木崇弘. 2007. 『日本に民主主義を起業する—自伝的シンクタンク論』第一書林.
 鈴木崇弘. 2011. 「日本になぜ（米国型）シンクタンクが育たなかったのか？」『季刊政策・経営研究』pp.30-50.
 鈴木崇弘・上野真城子. 1993. 『世界のシンク・タンク—「知」と「治」を結ぶ装置』サイマル出版会.
 鈴木崇弘・風巻浩・中林美恵子・上野真城子・成田喜一郎. 2005. 『シチズン・リテラシー—社会をよりよくするために私たちにできること』教育出版
 Smith, James, 1993. *The Idea Brokers: Think Tanks And The Ruse if The New Policy Elite*, Free Press.
 Suzuki, Takahiro. 2015. “Policy Analysis and Policymaking by Japanese Political Parties”, in Yukio Adachi, Sukehiro Hosono and Jun Iio eds., *Policy Analysis in Japan*, Policy Press at the University of Bristol, Chap.11.
 建林正彦・曾我謙悟・待鳥聡史. 2008 『比較政治制度論』有斐閣.
 横江公美. 2008. 『アメリカのシンクタンク 第五の権力の真相』ミネルヴァ書房.
 横江公美. 2004. 『第五の権力 アメリカのシンクタンク』文藝春秋.
 Weaver, R., 2002. *Think Tanks and Civil Societies: Catalysts for Ideas and Action*, Routledge.

【成績評価の方法と基準】

出席・質疑・討論参加 40 %、レポート 30 %、プレゼンテーション 30 %
 <評価基準>
 質疑・討論参加：積極性、分析力、批判力、問題提起性等
 レポート・プレゼンテーション：分析力、論理性、新規性、簡潔性等

【学生の意見等からの気づき】

基本的な政治学用語、政治学的な考え方についても適宜、解説を行う。

【その他の重要事項】

レポートの提出期限、内容等については適宜指定する。
 やむを得ず授業を欠席する際は、事前あるいは事後にその理由につき連絡すること。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>政治過程、議会、利益団体、政治教育、政策分析
 <研究テーマ>政治過程における民間アクターの役割、政策形成における政策ネットワークの役割、テクノロジーと政治、主権者教育の効果 など
 <主要研究業績>
 「地方議員のなり手不足問題と直接民主制型の意思決定—ブロックチェーンを用いた新たな投票システムの検討—」『季刊行政管理研究』170号、2020年、pp.38-47.
 「政治をいかに教えるか—知識と行動をつなぐ主権者教育—」弘前大学出版会、2019年。
 「暗号資産による政治献金「合法」解釈と今後の展開」『月刊選挙』73巻1号、2019年、pp.15-19.
 「政府—議会関係から見た行政組織編成権に関する一考察」『季刊行政管理研究』No.155、pp.29-39、2016年。
 「団体形成から見る政策ネットワークの変化—医薬品ネット販売の規制緩和を事例として—」『政治社会論叢』第4号、pp.55-70、2016年。

“Chap.8, A Policy Analysis of the Japanese Diet from the Perspective of Legislative Supporting Agencies”, in Yukio Adachi, Sukehiro Hosono and Jun Iio eds., *Policy Analysis in Japan*, Policy Press at the University of Bristol, 2015, pp.123-138.
 『立法補佐機関の制度と機能—各国比較と日本の実証分析』晃洋書房、2013年。

【Outline and objectives】

Examining how think-tanks play a role in the political process, based on the understandings regarding the concept meanings and concrete structures of fundamental factors about public policy including policy process, political structure, politician-bureaucrats relationship and nation-society relationship.

環境自治体政策研究

馬場 健司、増原 直樹

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

地方自治体の環境基本条例・環境基本計画を中心として、気候変動・エネルギー、生物多様性保全、廃棄物・資源循環、水循環・地下水保全等の分野別条例や関連行政計画・施策の政策プロセスを題材として取上げ、基礎理論の習得とともにフィールドでの事例研究を行う。

【到達目標】

地方自治体における環境政策関連の条例や計画、各種施策の立案・決定・実施・評価過程、とりわけ市民参加や合意形成についての理論と実際を学ぶことにより、実践的な政策立案能力の基礎を修得することを目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻公共マネジメントコースにおいては「DP1」「DP3」に関連している。ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻政策研究コースにおいては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、特に「DP4」は特に強く関連している。

【授業の進め方と方法】

自治体環境政策へのアプローチに必要な基本的な政策過程論、市民参加、合意形成論の理論や視点、手法についての概略の講義の後、受講者による事例研究対象の条例、行政計画などの各種行政文書および関連文献に関するサーベイ、フィールドでのステークホルダーへのインタビュー調査などを行い、その結果を報告書にとりまとめて報告会を実施する。講義と校外実習を併せ持つ課題解決型学習（PBL）を短期集中的に行う。原則として対面で行う。フィードバックはインタビュー調査実施時などに適時行い、最終的な報告会においても行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

秋学期集中

回	テーマ	内容
第1回	講義の進め方・自治体環境政策過程の概観	受講者の問題関心を確認しつつ、講義の進め方について解説する。そのうえで自治体環境政策へアプローチする際に必要となる政策過程論の基本的な視点について概説する。
第2回	自治体環境政策過程の分析事例	自治体環境政策へアプローチする際に必要となる政策過程論の基本的な視点から分析したいくつかの事例について概説する。
第3回	自治体環境政策過程における市民参加手法の概観	全国の自治体環境政策における市民参加手法の方法論について概説する。
第4回	自治体環境政策過程における市民参加手法の適用事例	自治体環境政策における市民参加手法のいくつかの適用事例について概説する。
第5回	自治体環境政策過程におけるステークホルダー分析の概観	自治体環境政策過程を分析する際に必要となるステークホルダー分析などの合意形成手法の方法論について概説する。
第6回	自治体環境政策過程のステークホルダー分析の適用事例	自治体政策過程におけるステークホルダー分析などの合意形成手法のいくつかの適用事例について概説する。

第7回	事例研究の準備：基本的な文献調査	事例研究対象の条例、行政計画などの各種行政文書や関連文献のサーベイにより、政策過程の経緯や背景などについて理解を深める。
第8回	事例研究の準備：ステークホルダーと論点の仮定的抽出と調査票の設計等	文献調査の結果を踏まえ、ステークホルダーや論点を仮定的に抽出し、インタビュー調査に向けた調査票の設計などを行う。
第9回	事例研究の実施：インタビュー調査の実施	ステークホルダーへのインタビュー調査など、フィールドでの事例研究を行う。
第10回	事例研究の小括：インタビュー調査結果の小括	インタビュー調査結果などを暫定的に小括としてとりまとめる。
第11回	事例研究の実施：追加的なインタビュー調査の実施	追加的なステークホルダーの抽出とインタビュー調査など、フィールドでの事例研究を行う。
第12回	事例研究の小括：追加的なインタビュー調査結果の小括	追加的なインタビュー調査結果などを暫定的に小括としてとりまとめる。
第13回	事例研究のとりまとめ：ステークホルダー分析などの実施と考察	調査結果を総合的に用いてステークホルダー分析などを実施し、考察を加えて、事例研究の成果を報告書としてとりまとめる。
第14回	事例研究の最終報告	報告書としてとりまとめた事例研究の成果を、各人（チーム）から報告し、質疑応答を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

適宜プリントを配布する。

【参考書】

随時指定する。

【成績評価の方法と基準】

出席および事例研究への参加状況（50%）、報告書への貢献状況（50%）によって評価する。

【学生の意見等からの気づき】

特になし

【学生が準備すべき機器他】

インタビュー調査実施の際、記録用パソコン等の準備が必要な場合がある。

【その他の重要事項】

受講者と調整のうえオナータムセッション期間中に集中的に実施する。

【馬場健司】

<専門領域>環境政策論、合意形成論
<研究テーマ>自治体環境政策過程、環境問題解決の社会的意思決定
<主要研究業績>

・Tanaka, M. and Baba, K., Eds., Resilient Policies in Asian Cities; Adaptation to Climate Change and Natural Disasters, Springer, 2019. ISBN:978-981-13-8598-8

・Baba, K. et al., Attitudes of Farmers and Rural Area Residents Toward Climate Change Adaptation Measures: Their Preferences and Determinants of Their Attitudes, Climate, 7(5), 71-81, 2019.

・Baba, K., Masuhara, N., and Kimura, M. Scenario-based Approach to Local Water-energy-food Nexus Issues with Experts and Stakeholders, Endo et al. Eds. "The Water-Energy-Food Nexus Human-Environmental Security in the Asia-Pacific Ring of Fire", 321-333, 2018, Springer.

・Baba, K. et al. Climate Change Adaptation Strategies of Local Governments in Japan, Oxford Research Encyclopedia of Climate Science, 1-27, 2017.

・"IPCC AR5 WGII Ch.24" (contributing author, 2014)

以下のサイトも参考にされたい

https://researchmap.jp/Kenshi_Baba/?lang=japanese

【増原直樹】

<専門領域>地域エネルギー・環境政策、市民参加論

<研究テーマ>資源ネクサスの現状解析と合意形成（小水力発電、地熱発電等）

<主要研究業績>

・増原直樹（2020）ローカル SDGs から見える地域の強み：富士山麓自治体を事例として. *BIOCITY* (84):94-99.

・増原、岩見、松井（2019）地域における SDGs 達成に向けた取り組みと課題：先進地域における目標・指標設定の傾向. *環境情報科学学術研究論文集*, 33, pp.43-48.

・馬場、増原、遠藤編著（2018）地熱資源をめぐる水・エネルギー・食料ネクサス. 近代科学社.

・増原直樹（2016）市区町村の環境政策分野における「計画の簇生」現象の解明. *環境情報科学学術研究論文集*, 30, pp.19-24.

・Naoki Masuhara, Kenshi Baba, Akihiro Tokai (2016) Clarifying relationships between participatory approaches, issues, processes, and results, through crosscutting case analysis in Japan's environmental, energy, and food policy areas. *Environment Systems and Decisions*. DOI:10.1007/s10669-016-9613-6.

[Outline and objectives]

1. To learn about environmental policy process cases which focus on environmental basic ordinances and plans of local government,
2. To carry out related field studies such as climate change, renewable energy, waste and groundwater management issues and so on.

POL500P1 - 220

公共空間形成論

申 龍徹

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

都市公園政策を通して、近代的な公共空間（Open spaces/Public Spaces）の形成と変容を理解する。

【到達目標】

近代・現代社会の公共空間としての定着した公園緑地政策の形成過程を通じて、遊覧のための自然空間が物理的な施設へと変化して行く機能変化を実証的に分析できる。

また、防災・景観や市民文化の形成の場として変容していく公園のマクロ的な政策形成のプロセスを通じて、公共空間に求められている機能の現代的理解と市民自治・市民文化を基盤とする空間管理のあり方を実証的に検証できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻公共マネジメントコースにおいては「DP1」「DP3」に関連している。ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻政策研究コースにおいては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、特に「DP4」は特に強く関連している。

【授業の進め方と方法】

この授業は、前半の講義と後半の受講生の課題発表で進める。主な内容は、明治維新以降、欧化の近代文明の象徴として移植された近代的な都市公園の政策形成過程を対象に、①欧化の象徴たる公園が如何なる経路を通じて欧米とは異なる日本の変容を成し遂げたのか、そのメカニズムを実証的な資料に基づき詳細を解明する。その上、②この分析の結果を踏まえ、公共空間及び施設に対する行政管理における構造的課題の究明と新しい公共空間管理の視点を提案する。受講者は、関心ある公共施設の課題について、その解決方法の提案（対案）が求められる。

受講生には、期末に課題レポートの提出及びその発表を求め、質疑応答を行う。課題レポートについては、学際的なコメントを付けてフィードバックする。原則として対面で授業を実施すること、新型コロナウイルス感染状況を踏まえ、十分な安全性が確保されないと判断された場合には、オンラインに切り替える。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】**秋学期後半**

回	テーマ	内容
1.2 回目	公共空間の象徴としての公園	公共空間の象徴としての公園（parks）の誕生と伝播
3.4 回目	公園空間の類型	近代的公園の歴史的展開（英・米・独・日）
5.6 回目	公園機能の変容	公園機能の複合化・多様化、マネジメントの社会化
7.8 回目	公共空間の機能変化	市民文化としての公園と創り続ける公共空間
9.10 回目	課題発表①	受講者の課題発表と討論
11.12 回目	課題発表②	受講者の課題発表と討論
13.14 回目	総括討論	総括討論

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

事前に講義レジュメ及び関連する参考資料などをアップする。

【参考書】

事前に講義レジュメ及び関連する参考資料などをアップする。

【成績評価の方法と基準】

質問力（25%）、調査力（25%）、構想力（25%）、プレゼンテーション（25%）の4つの要素による絶対評価

【学生の意見等からの気づき】

講義の後半では受講生の課題発表を行いますので、発表テーマなどの事前準備が必要です。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>行政学、比較行政

<研究テーマ>比較自治行政、公共空間形成、行政文化の国際比較

<主要研究業績>

『都市公園政策形成史：協働型社会における緑とオープンスペースの原点』（申龍徹著、法政大学出版局、2004）

『都市公園政策の歴史的変遷過程における「機能の社会化」と政策形成（1～6・完）』『法學志林』（100-2～104-2、法政大学、2003～2006）

「自治体の公共空間整備とパークマネジメント」『自治総研』（30-7、通号309、2004）

【Outline and objectives】

Formation and transformation of modern public spaces (Open spaces / Public Spaces)

GDR500P1 - 221

ジェンダー政策研究

中野 洋恵

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この授業は、ジェンダーの視点から政策について考察することを目的とする。1999年に男女共同参画社会基本法が施行されてから様々な分野でジェンダー政策が進められている。しかしGGGI（グローバルジェンダーギャップ指数）で比較すると日本の順位は100位以下が続いている。2019年12月に発表されたランキングは153ヶ国中121位で過去最低となった。本講義では、現在の日本のジェンダー政策の現状と課題を把握し、その要因を分析した上で課題解決の方策についてディスカッションを行う。ディスカッションを通じて考えたことを振り返り、ジェンダー政策の理解を深めるとともに今後を展望する。

【到達目標】

・21世紀の我が国社会を決定する最重要課題と位置づけられた男女共同参画社会を実現するための基本法である「男女共同参画基本法」と基本法に基づいて5年ごとに定められる「男女共同参画基本計画」について理解する。
 ・2020年12月に策定された「第5次男女共同参画基本計画」で強調されている視点、「あらゆる分野における女性の活躍」、「安全・安心な暮らしの実現」、「男女共同参画社会の実現に向けた基盤の整備」、「推進体制の整備・強化」について理解する。
 ・現在の政策を理解した上で、国際的な動向も踏まえディスカッションにおいて課題を把握し、今後必要とされる改善策を提案する。
 特に今年度はコロナの影響についても言及する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻公共マネジメントコースにおいては「DP1」「DP3」に関連している。ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻政策研究コースにおいては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、特に「DP4」は特に強く関連している。

【授業の進め方と方法】

ジェンダーに関わる政策についてテーマごとに講義と発表、グループディスカッションによって進める。毎回、リアクションペーパーを提出する。授業の初めに、前回の授業で提出されたリアクションペーパーからいくつか取り上げ、全体に対してフィードバックを行う。

最終レポートを提出する。

授業は「対面」で実施する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

春学期後半

回	テーマ	内容
第1.2回	イントロダクション	国内外の男女共同参画に関する動向を理解する ○第2次世界大戦以降の国際社会の動き 国連女性の地位委員会（CSW）、女子差別撤廃条約（CEDAW）国際婦人年（1975年）以降の世界女性会議 持続可能な開発目標（SDGs）世界経済フォーラムが発表するGGGIなどから国際社会の変遷を捉える。 ○国内の動向 1975年に総理府に設置された婦人問題企画推進本部、女子差別撤廃条約の批准、国内行動計画、雇用機会均等法、男女共同参画社会基本法、配偶者からの暴力の防止及び被害者の保護に関する法律、女性の職業生活における活躍推進に関する法律、政治分野における男女共同参画の推進に関する法律などから国内の変遷を捉える。
第3.4回	女共同参画基本法と男女共同参画基本計画	1999年に施行された「男女共同参画基本法」の基本理念を理解するとともに、2020年12月に策定された第5次男女共同参画基本計画の12分野のうち一つの分野を選んで報告し議論する。

第5.6回 ワーク・ライフ・バランス 働き方改革

勤続年数を重視しがちな年功的な処遇、長時間労働や転勤が当然というこれまでの男性中心の働き方を前提とする労働慣行（男性中心型労働慣行）を是正するとともに、いわゆるM字カーブ問題等がいまだに解決しない中で女性も男性もワーク・ライフ・バランス（仕事と生活の調和）を実現するためにはどのような解決策があるのか、実態や政策を踏まえて議論する。特に現在の政策的課題として関心が高まっている男性の育児休業についても検討する。

第7.8回 女性の活躍推進

2003年、男女共同参画推進本部は「社会のあらゆる分野において2020年までに、指導的地位に占める女性の割合が、少なくとも30%程度になるよう期待する（202030）」との目標を設定した。その後の動向を踏まえて、クオータ制やポジティブアクションについて議論する。

第9.10回 女性に対する暴力

重大な人権侵害である女性に対する暴力について配偶者等からの暴力、ストーカーなどに加えて、最近ではデートDV、デートレイプドラッグ、JKビジネス、AV出演強要など問題が多様化している。こうした状況を踏まえ、暴力の根絶を図るための方策について議論する。

第11.12回 教育・メディア

○男女共同参画を推進し多様な選択を可能にするために学校教育はどうすればいいのか、教育現場をジェンダーの視点で見たときの課題を捉える。理工系を選択する女子学生が少なく研究者、技術者の女性割合が少ない状況を踏まえ、女子学生・生徒の理工系分野の選択促進及び理工系人材の育成のための方策を考える。また学校現場の管理職の女性割合が少ない要因についても考える。

○意識形成にメディアの与える影響は大きい。メディアの中で女性がどのように描かれているかについて広報媒体や映像を見ながら分析し、性別役割分担意識の解消のための広報・啓発のあり方について議論する。

第13.14回 新たな課題－自然災害やコロナなどのリスクに対応するジェンダー政策

東日本大震災等の経験から、性別、年齢や障害の有無等社会的立場によって影響が異なることが明らかにされたことから女性と男性で災害から受ける影響に配慮し、ジェンダーの視点から防災復興体制を確立することが求められている。何が問題だったのかを踏まえ、解決の方策について議論する。また、新型コロナウイルス感染症の拡大は、特に女性への影響が深刻であることが報告されている。リスクに対してどのように「対応すればいいのか」を考える。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

毎回レジュメや参考資料を配付する

【参考書】

・第5次男女共同参画基本計画
http://www.gender.go.jp/about_danjo/basic_plans/4th/index.html
 ・内閣府「仕事と生活の調和」推進サイト ワーク・ライフ・バランスの実現に向けて
<http://www.cao.go.jp/wlb/index.html>
 ・女性に対する暴力
 若年層を対象とした性的な暴力の啓発教材
http://www.gender.go.jp/policy/no_violence/index.html
 NVEC 実践研究第9号「ジェンダーに基づく暴力」
 ・内閣府男女共同参画局女性活躍推進法見える化サイト
http://www.gender.go.jp/policy/suishin_law/index.html
 ・厚生労働省女性活躍推進法特集ページ
<https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000091025.html>
 ・内閣府男女局 理工チャレンジ（リコチャレ）
<http://www.gender.go.jp/c-challenge/>
 ・科学技術振興機構 ダイバーシティ推進
<http://www.jst.go.jp/diversity/index.html>
 ・初等中等教育における男女共同参画
 国立女性教育会館
<https://www.nwec.jp/research/hqtuvq000002ko2.html>

【成績評価の方法と基準】

授業参加とリアクションペーパーの提出（30%）

最終レポート（50%）

グループワークへの参画状況（20%）

【学生の意見等からの気づき】

本年度授業担当者変更によりフィードバックできません

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞

ジェンダー研究 社会教育

＜研究テーマ＞

女性のキャリア形成

ジェンダー統計

＜主要研究業績＞

「国際比較調査にみる日本の結婚、子育てに関する意識」

「データが語る大学の男女共同参画」

【Outline and objectives】

Gender based policies have been advancing in various fields after the Basic Act for Gender Equal Society was established in 1999. However, when comparing to other countries on the GGGI (Global Gender Gap Index), Japan continues to rank below 100. At this lecture, we will understand the current state and issues of gender based policies facing present day Japan, and after analyzing the main causes, will discuss policies to solve these issues.

Concretely dissecting the Fourth Basic Plan for Gender Equality, we will deepen knowledge from policies on the promotion of women's active participation, work-life balance, violence based on gender, and gender equality in education and the media. We will analyze the current situation and issues in Japan based on statistical data and cases, and think of a plan to solve these issues through a discussion.

公共哲学研究

淵元 初姫

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

公共政策研究科の「公共哲学研究」と政治学研究科の「公共哲学研究 2」とを合併開講する。政策論の理論的な基礎をなす考え方を培うことを目指して設置されている科目である。

「公共」ほかにいくつかの基礎的概念について、その原理的な内容、歴史、背景となっている社会構造や政策的方向性などについて、一定の理解を獲得するために、若干の基礎的な理論枠組を講義形式で確認した上で、主として文献講読を行う。

【到達目標】

目前の政策研究の対象としては近年「新しい公共」という政策用語が流行しているが、より広い原理的な見地から「公共」というものを発想できるようにしたい。そのために、基本的理解を助ける講義を行うほか、やや難解と思われる文献を講読するので、これらの各章の内容をおおむね理解できるようにする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻公共マネジメントコースにおいては「DP2」「DP3」に関連している。ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻政策研究コースにおいては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、特に「DP4」は特に強く関連している。

【授業の進め方と方法】

やや難解と思われる文献の講読を行なうが、どの文献を選択するかは、受講者のニーズを考慮して決めるのが適切であると考え。そこで、以下の授業計画では、仮に文献として、ロバート・パットナムの『哲学する民主主義：伝統と改革の市民的構造』を取り上げたとした場合の予定を記入している。文献講読の進め方をイメージする上で参考にしていただきたい。受講者の希望に応じて文献を変更する場合、下記の授業計画は全く異なった進行になる。原則として授業では、受講者がそれぞれ章ごとにレジュメを作成し、各授業ではその報告に基づいて文献の検討を行う。報告に対しては、授業中に参加者全員による質疑・議論を行い、講評を行うことによってフィードバックする。授業方式は原則として対面授業とする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期後半

回	テーマ	内容
第 1 回	導入的講義	現代日本の「公共」言説の特徴の確認を行う。
第 2 回	文献講読：ロバート・パットナム『哲学する民主主義：伝統と改革の市民的構造』第 1 章	「はじめに－制度パフォーマンスの研究」
第 3 回	文献講読：ロバート・パットナム『哲学する民主主義：伝統と改革の市民的構造』第 2 章	「ルールの変更－制度発展の 20 年」
第 4 回	文献講読：ロバート・パットナム『哲学する民主主義：伝統と改革の市民的構造』第 3 章	「制度パフォーマンスを測定する」
第 5 回	文献講読：ロバート・パットナム『哲学する民主主義：伝統と改革の市民的構造』第 4 章	「制度パフォーマンスを説明する」
第 6 回	文献講読：ロバート・パットナム『哲学する民主主義：伝統と改革の市民的構造』第 5 章	「市民共同体の起源を探る」
第 7 回	文献講読：ロバート・パットナム『哲学する民主主義：伝統と改革の市民的構造』第 6 章	「社会資本と制度の成功」

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

文献を事前に精読してください。授業の後は、その内容について復習を行ってください。

文献の内容報告のための準備と、授業の最終回に提出する期末レポートの作成を行う必要があります。

【テキスト（教科書）】

ロバート・パットナム『哲学する民主主義：伝統と改革の市民的構造』（NTT出版）を文献講読の対象として仮置きしますが、第一回目の授業で受講者と相談の上、文献を変更することもあり得ます。受講希望者は、どんな文献を読みたいかを考えておいてください。

【参考書】

上記のほか、リチャード・セネット『公共性の喪失』（晶文社）、ハンナ・アレント『人間の条件』（ちくま学芸文庫）などは、難解ながら基本文献として推奨されます。そのほかの参考書は、必要に応じて授業中に紹介します。

【成績評価の方法と基準】

レジュメによる報告（30%）及び期末レポート（50%）に加え、授業中の質疑や討論における発言（20%）により評価します。

【学生の意見等からの気づき】

一人につき各章を担当し、レジュメを持ち寄り検討するという進め方のほか、パラグラフごとに読み合わせを行ったり、場合によっては一文ごとに原著を確認しながら一冊の文献を丁寧に読んでいきます。一人では理解が難しかったり、誤読してしまうような点についても、複数人で検討をすることによる気づきにつながり、新たな視点を得ることに役立つと思います。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 比較政治学、コミュニティ政策、福祉政策
<研究テーマ> ポスト福祉国家時代の市民社会論、地域社会における社会的包摂、英国・スコットランドの地方自治・自治体内分権
<主要研究業績>

「スコットランドの地域評議会－制度の基本的構想とその機能の実際」名和田是彦編（2009）『コミュニティの自治－自治体内分権と協働の国際比較』pp.81-118、日本評論社

「スコットランドにおける権限移譲とジェンダー・クォータ」三浦まり・衛藤幹子編著（2014）『ジェンダー・クォータ－世界の女性議員はなぜ増えたのか』pp.203-26、明石書店

「地域社会における社会的連帯の再編：居場所づくりにみる三人称的連帯の可能性」金安岩男・牧瀬稔編著（2019）『都市・地域政策研究の現在』pp.131-42、地域開発研究所

【Outline and objectives】

The course draws upon the developing international literature on public philosophy from Western Europe and North America. Reading materials will be selected in agreement with participants.

MAN500P1 - 223

イノベーション政策論

糸久 正人

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本授業の目的は、1) 企業におけるイノベーションマネジメントと2) 国のイノベーション政策について学びます。イノベーションとは新結合による創造的破壊を意味し、経済発展の原動力となります。しかし、近年、グローバル化とIoT化を背景としてイノベーションをめぐる環境は大きく変容し、こうした変化に対応したマネジメントや政策が求められています。本授業では、こうした比較的新しいトピックスも踏まえつつ、イノベーションに関する理解を深めます。

【到達目標】

- ・イノベーションに対する理解
- ・企業におけるイノベーションマネジメントに関する理解
- ・国のイノベーション政策に関する理解
- ・企業や公共組織においてイノベーションを推進するための実践知

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻公共マネジメントコースにおいては「DP1」「DP3」に関連している。ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻政策研究コースにおいては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、特に「DP2」は特に強く関連している。

【授業の進め方と方法】

授業形式は、教員による講義と参加者全員のディスカッションをひとつのセットとして、各回に取り上げたテーマを多面的理解することを目指します。ディスカッションでは主体的な発言が求められます。講義の最後にフィードバックを行います。なお、講義は原則対面で実施する予定です。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

秋学期前半

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業の目的と到達目標の確認
第2回	イノベーションとは？	イノベーションの定義、類型、課題について
第3回	製品アーキテクチャ論 (1)	製品アーキテクチャ（インテグラル型、モジュラー型）の理解、企業におけるアーキテクチャの位置取り戦略、国の競争力
第4回	製品アーキテクチャ論 (2)	製品アーキテクチャ（インテグラル型、モジュラー型）の理解、企業におけるアーキテクチャの位置取り戦略、国の競争力
第5回	ビジネスエコシステムとプラットフォーム戦略 (1)	企業の枠を超えたビジネスエコシステム（ビジネスの生態系）という発想を理解し、価値獲得のためのプラットフォーム戦略について理解する
第6回	ビジネスエコシステムとプラットフォーム戦略 (2)	企業の枠を超えたビジネスエコシステム（ビジネスの生態系）という発想を理解し、価値獲得のためのプラットフォーム戦略について理解する
第7回	標準とイノベーション (1)	標準（standard）の基本的意義とイノベーションの関係について理解する
第8回	標準とイノベーション (2)	標準（standard）の基本的意義とイノベーションの関係について理解する
第9回	イノベーションの実践 (1)	ゲスト講師を呼んで、イノベーション活動を実践する上での課題について考える

第10回	イノベーションの実践 (2)	ゲスト講師を呼んで、イノベーション活動を実践する上での課題について考える
第11回	つながる世界のイノベーション政策 (1)	製品やサービスがつながる世界を想定し、具体的なイノベーション政策について理解する
第12回	つながる世界とイノベーション政策 (2)	製品やサービスがつながる世界を想定し、具体的なイノベーション政策について理解する
第13回	中小企業政策とイノベーション (1)	中小企業政策の歴史を概観し、中小企業の活性化について考える
第14回	中小企業政策とイノベーション (2)	中小企業政策の歴史を概観し、中小企業の活性化について考える

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

議論に参加するために、各回テーマに関して事前に予習することが望ましいです。

【テキスト（教科書）】

授業内で指示します。

【参考書】

授業内で指示します。

【成績評価の方法と基準】

平常点：40%、議論への参加：20%、期末レポート：40%

【学生の意見等からの気づき】

なるべく多くの事例を取り上げたいと思います。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

Technology & Innovation Management

Operation Management

<研究テーマ>

集合行為としてのコンソーシアムベースの標準化に関する研究

自動車産業を対象としたIoT化に伴う技術ベースの変遷に関する研究

日本の生産システムの海外移転と進化に関する研究

<主要研究業績>

糸久正人 (2020) 「次世代モビリティに向けたエコシステム間競争：IoT化に伴う価値創造と配分のジレンマ」『世界経済評論』

糸久正人 (2020) 「自動車産業に破壊的イノベーションは起きるのか？」『赤門マネジメントレビュー』

Olejniczak, T., Miszczyński, M., and Itohisa, M. (2019) "Between closure and Industry 4.0: strategies of Japanese automotive manufacturers in Central and Eastern Europe in reaction to labour market changes," *International Journal of Automotive Technology and Management*.

公文博・糸久正人 (2019) 『アフリカの日本企業—日本的経営生産システムの移転可能性』時潮社。

糸久正人・安本雅典 (2018) 「コンセンサス標準をめぐる企業行動：知識量が標準アーキテクチャの導入に及ぼす影響」『組織科学』

糸久正人 (2018) 「自動運転をめぐる技術知識とエコシステムの拡大」『日本機械学会誌』

Olejniczak, T. and Itohisa, M. (2017) "Hybridization revisited: New insights from the Evolutionary Approach," *Journal of Management and Business Administration*, vol.25, No.2.

糸久正人 (2016) 「複雑性の増大とコンセンサス標準：標準化活動がもたらす競争優位」『研究技術計画』

富田純一・糸久正人 (2015) 『コア・テキスト生産管理』新世社

糸久正人 (2012) 「標準化に対するユーザーとサプライヤーのコンセンサス：コンフリクトを克服した互恵性の達成」『研究技術計画』

【Outline and objectives】

This lecture aims to give you a comprehensive understanding of innovation policy in terms of 1) innovation management at a firm level and 2) innovation policy at the national level. Innovation has a meaning of creative destruction by new combinations of technology, market, process, and so on; therefore, innovation is an economic growth engine. However, a circumstance in innovation has been changing rapidly because of globalization and IoT (Internet of Things). It is necessary for management and policy to consider these conditions.

外交政策論

宮本 悟

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本の戦後外交史や領土問題、外交政策理論について学んだうえで、外交政策がどのようにして決定されるのかについて理解していく。重要なことは、国際社会や日本が直面している外交問題や領土問題について知識を深め、国際政治学における外交政策論を理解した上で、現実の外交政策を考察する際に応用できるようになることである。

【到達目標】

外交政策について、(1) 日本の外交政策の歴史的な経緯と現状の説明をでき、(2) 日本が置かれている領土や外交上の問題とその対処について理解を深め、(3) 実際の外交政策の決定過程について学んだうえで、その理論的な知識を実際の問題に応用できる能力を身につけることを目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻公共マネジメントコースにおいては「DP1」「DP3」に関連している。ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻政策研究コースにおいては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、特に「DP4」は特に強く関連している。ディプロマポリシーのうち、サステイナビリティ学専攻においては「DP2」「DP4」に関連している。

【授業の進め方と方法】

2021年度は対面で実施する予定である。戦後日本外交史と日本の領土については、全体的に理解していくことが目的であり、基本的には講義形式によって授業を進めていくが、教員側の一方的な講義ではなく、受講者と対話をしながら授業を進めることを重視する。質問があれば、講義の途中でも遠慮なく質問してかまわないし、教員側からも積極的に受講者に問いかける。

対外政策の選択については、受講者側の発表について教師も含めて討議しながら、理解を深めていく。従って、授業が充実したものになるかは、受講者側の積極的な参加にかかっている。受講者の発表に対するフィードバックは、その都度、授業内でコメントすることにする。重要なことは、領土や安全保障上の問題に対して、外交政策が必ずしも合理的に決定されるわけではないことを理解し、実際の外交政策を理解するための応用力をつけることである。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし/No

【授業計画】

春学期後半

回	テーマ	内容
第1回	戦後日本外交史(1)	戦後日本外交史のあらましと占領期における日本とGHQの交渉について学ぶ。テキスト:五百旗頭真編『戦後日本外交史』第三版補訂版。
第2回	戦後日本外交史(2)	戦後日本外交史について50年代を学ぶ。テキスト:五百旗頭真編『戦後日本外交史』第三版補訂版。
第3回	戦後日本外交史(3)	戦後日本外交史について60年代を学ぶ。テキスト:五百旗頭真編『戦後日本外交史』第三版補訂版。
第4回	戦後日本外交史(4)	戦後日本外交史について70年代を学ぶ。テキスト:五百旗頭真編『戦後日本外交史』第三版補訂版。
第5回	戦後日本外交史(5)	戦後日本外交史について80年代を学ぶ。テキスト:五百旗頭真編『戦後日本外交史』第三版補訂版。

第6回	戦後日本外交史(6)	戦後日本外交史について冷戦後を学ぶ。テキスト:五百旗頭真編『戦後日本外交史』第三版補訂版。
第7回	戦後日本外交史(7)	戦後日本外交史について全体像を議論する。テキスト:五百旗頭真編『戦後日本外交史』第三版補訂版。
第8回	日本の領土(1)	領土の概念や北方領土問題についての歴史的経緯やその問題点を探る。テキスト:芹田健太郎『日本の領土』。
第9回	日本の領土(2)	竹島問題と尖閣諸島問題についての歴史的経緯やその問題点を探る。テキスト:芹田健太郎『日本の領土』。
第10回	対外政策の選択(1)	外交とは何かを学ぶ。テキスト:中西寛、石田淳、田所昌幸『国際政治学』。
第11回	対外政策の選択(2)	国内政治と対外政策の連関について学ぶ。テキスト:中西寛、石田淳、田所昌幸『国際政治学』。
第12回	対外政策の選択(3)	ゲーム理論で国家間の戦略的依存関係について学ぶ。テキスト:中西寛、石田淳、田所昌幸『国際政治学』。
第13回	対外政策の選択(4)	国際情勢についての認識と行動から戦争が勃発する原因について学ぶ。テキスト:中西寛、石田淳、田所昌幸『国際政治学』。
第14回	対外政策の選択(5)	ゲーム理論で国家間の戦略的依存関係について学ぶ。テキスト:中西寛、石田淳、田所昌幸『国際政治学』。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

『戦後日本外交史』第三版補訂版、五百旗頭真編、有斐閣、2014年、2,200円

『日本の領土』芹田健太郎、中央公論新社、2010年、755円。ただし、授業で使用するのは一部分なので、その部分は最初の授業で配布する。

『国際政治学』中西寛、石田淳、田所昌幸、有斐閣、2013年、3,520円。ただし、授業で使用するのは一部分なので、その部分は最初の授業で配布する。

【参考書】

『新訂第5版 安全保障学入門』防衛大学校安全保障学研究会編、株式会社亜紀書房。

『決定の本質—キューバ・ミサイル危機の分析』グレアム T. アリソン(著)、宮里 政玄(訳)、中央公論新社、1977年。絶版。

【成績評価の方法と基準】

70%：平常点と、授業における発言内容の充実度

30%：発表：「対外政策の選択」に関して、自分の研究にどのように応用できるのか最後の授業で一人一人発表してもらう。

【学生の意見等からの気づき】

過度な学生の負担はない授業内容にしています。受講者の発表は短い時間でかまいません。

勤務後に授業に来られる方がおられたら、時間を考慮しますので、申し出てください。

【学生が準備すべき機器他】

対面授業では授業支援システムは使いません。オンライン授業ではZOOMを使います。

【その他の重要事項】

大学院の方針によって全てオンライン授業になる可能性があります。対面授業でも第8回の講義ではパワーポイントを使って説明します。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>国際政治学、比較政治学、政軍関係論、安全保障論
<研究テーマ>東アジアの安全保障、経済制裁、北朝鮮研究
<主要研究業績>

"North Korea's Foreign Policy: A Non-isolated Country with Expanding Relations" Takashi Inoguchi ed., The SAGE Handbook of Asian Foreign Policy, Dec. 2019, Sage Publishing.

「北朝鮮流の戦争方法-軍事思想と軍事力、テロ方針」川上高司編『「新しい戦争」とは何か-方法と戦略-』2016年1月、ミネルヴァ書房。
「北朝鮮の軍事・国防政策」木宮正史編『朝鮮半島と東アジア』2015年6月、岩波書店。

『北朝鮮ではなぜ軍事クーデターが起きないのか？ 政軍関係論で読み解く軍隊統制と対外軍事支援』2013年10月、潮書房光人社。

【Outline and objectives】

The objectives of the class is to understand how foreign policy is decided, while leaning Japanese postwar diplomatic history, territorial issues and foreign policy theory. The important point is the applying foreign policy theory in considering real foreign policy, while deepening the knowledge of the territorial issues and diplomatic issues facing Japan and international society, understanding the foreign policy theory in international politics.

国際環境政策の社会学

島田 昭仁

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

主に、日本とドイツのエネルギーシフト政策の違いについて学ぶ。違いの要因を知るためにコミュニティや労働に対する考え方の違いを学ばなくてはならない。そしてドイツの政策、次に日本の政策、そしてEUとアジアの違いについて説明する。5Gを活用したスマートシティー等、今後のトピックについても扱う。

【到達目標】

エネルギーシフト政策を通して、ドイツと日本、及びEUとアジアのコミュニティの意識の違いについて理解できることを目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻公共マネジメントコースにおいては「DP1」「DP3」に関連している。ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻政策研究コースにおいては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、特に「DP3」は特に強く関連している。ディプロマポリシーのうち、サステイナビリティ学専攻においては「DP2」「DP4」に関連している。

【授業の進め方と方法】

対面式で行う。毎回、テキストと参考書に沿って進め、PPTで解説を行い、ディスカッションを行う。さらに授業でリアクションペーパーを配布し、その結果を授業にフィードバックする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	はじめに EUにおけるドイツとは	EUにおいて緑の党が果たした役割について…なぜ脱炭素なのか？
第2回	脱炭素と現代文明	労働とコミュニティと文明の関わり
第3回	独のE政策（福島の影響）	日独「エネルギー転換」比較分析 C1
第4回	独のE政策（草創期）	日独「エネルギー転換」比較分析 C2
第5回	独のE政策（討議主義）	日独「エネルギー転換」比較分析 C3
第6回	独のE政策（核エネルギー）	日独「エネルギー転換」比較分析 C4
第7回	独のE政策（政策の結末）	日独「エネルギー転換」比較分析 C5,6
第8回	日本のE政策（電力供給）	市民電力とは何か…各地取組の実態
第9回	日本のE政策（建築）	ZEB、ZEH…ゼロエネルギーとは
第10回	日本のE政策（運輸交通）	運輸・航空業界における実態
第11回	日本のE政策（都市計画）	スマートシティと5Gで、都市はどうなる？
第12回	EUとアジアの比較（資本主義経済とピグー税）	環境税とは何か 経済学におけるピグー税の適用限界
第13回	EUとアジアの比較（ハイシットンカムと森林税）	森林環境税はどこからきたのか
第14回	まとめ 独日、EUとアジアはなぜちがう	労働とコミュニティの考え方の違いについて ディスカッション

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

以下のテキストは授業内で配布します（購入する必要はありません。）。

・『日独「エネルギー転換」の比較分析』2019, 壽福

【参考書】

以下の参考書は授業内で配布します（購入する必要はありません。）。

・『資料で見るドイツ「エネルギー転換」の歩み』2019, 壽福

・『ゼックプロジェクト調査・研究報告書』2019, 谷口・島田

【成績評価の方法と基準】

- ①期末試験期間内に提出するレポート課題によって評価する。
- ②課題は第14回の授業内で示す。講義内容から自分の意見を記述する。
- ③評価基準は課題把握の的確さ(30%)、論理一貫性(30%)、論拠の正当性(30%)、誠実性(10%)とする。

【学生の意見等からの気づき】

大事なことは何度も繰り返して説明する。

【学生が準備すべき機器他】

状況によってはZoom環境（端末、Wifi）が必要となる。

【その他の重要事項】

国や自治体の政策に25年間関わった教員が、関連法規や施策の解説を行う。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>都市計画

<研究テーマ>住民の合意形成

<主要研究業績>『地域づくり計画学』コミュニティ科学出版,2021

【Outline and objectives】

Learn about the difference between Japan and German energy shift policy mainly. So you must learn the difference in way of thinking for community and the labor. Therefore I will mention a philosophical theme first. And then, I will explain the German policy, Japanese policy and EU and an Asian difference next. I'll treat the Smart-city which utilized 5G the future topic.

SES500P1 - 227

地球環境生態学

鞠子 茂

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

生態学の理論と方法論を概説したうえで、自然の成り立ちや環境問題における生態学の役割について学ぶ。一方、グローバルな環境問題を個別に取り上げ、生態学を中心に据えた分野横断的な議論を行うことにより環境問題を多面的に理解して行く。

【到達目標】

学生は環境問題に取り組む際に科学リテラシーを獲得することの重要性について認識し、生態学を中心とした科学リテラシーを習得することができる。環境問題を限定的に見ることの危険性についても学び、環境問題の本質を見極め、適切な解決に向けて行動できるだけの環境力を身につけることができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻公共マネジメントコースにおいては「DP3」に関連している。ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻政策研究コースにおいては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、特に「DP3」は特に強く関連している。ディプロマポリシーのうち、サステイナビリティ学専攻においては「DP2」「DP4」に関連している。

【授業の進め方と方法】

原則として対面授業であるが、コロナ禍の状況によってはオンライン授業を実施する。授業はパワーポイントによるスライド講義が中心となる。条件が揃えば、野外に出て自然環境や生物を五感で感じる授業も行う。事前に配布した資料をみて各自予習しておく。理解度確認のために課題を課し、解答を提出させる。次回の授業で提示された解答例をみて各自理解度をチェックする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

秋学期集中

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション	授業の進め方と成績評価について説明
第 2 回	生態学という学問	生態学の理論と方法論について概説
第 3 回	生態学的環境論考	環境とは何であるかを講述する
第 4 回	生物多様性は守るべきか	生物多様性保全の是非論を考える
第 5 回	生態系の基盤サービス	基盤サービスの具体例を紹介する
第 6 回	生態系の供給・調整・文化的サービス	供給・調整・文化的サービスの具体例を紹介する
第 7 回	生態系からのしっぺ返し	生態系サービスと環境破壊の関係を論じる
第 8 回	公害問題と科学リテラシー	水俣病を例に科学リテラシーの必要性を議論する
第 9 回	地球温暖化は本当？	地球温暖化問題の是非論を考える
第 10 回	地球温暖化と生態系	温暖化が生態系に与える影響を解説
第 11 回	感染症パンデミック	感染症パンデミックは新しい環境問題
第 12 回	外来種は悪か	外来種の是非論について考究する
第 13 回	目に見えない環境汚染	放射能汚染や環境ホルモンについて解説する
第 14 回	地球文明存続のために	地球文明の存続を考える

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は各 2 時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

教科書は使用しないが、説明を補助するための資料を授業で配布する。

【参考書】

「人類が永遠に続くのではないとしたら」加藤典洋、新潮社（2014）；「面白くてよくわかる！ エコロジー」満田久義、アスペクト（2013）；「気候変動を理學する」多田隆治、みすず書房（2013）；「森のバランス」森林立地学会編、東海大学出版（2012）；「生物の多様性って何だろう」京都大学総合博物館、京都大学学術出版会（2007）

【成績評価の方法と基準】

確認テスト 50 %、平常点 50 % の配分で成績評価する。

【学生の意見等からの気づき】

個々の学生の研究テーマを理解したうえで、それぞれの研究に役立つような知識や理論についても言及していく。

【その他の重要事項】

事前に参考図書を読んで、生態学や環境科学に関する基本的なことがらや専門用語について理解しておくこと。

【Outline and objectives】

The students will learn about definitions and need-to-know basics of “environment” and “ecology”, and acquire science literacy from an ecological viewpoint to solve environmental crisis on local to global scales.

租税政策

櫻井 良治

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

授業はすべて、大学の教室で対面を実施する予定である。

本授業では、日本の税金の中心となった消費税の役割と増税の影響を学ぶ。2018年からスタートした。初年度の授業は、私の書いた著書を使って、消費税の「逆進性」問題をめぐる公平性について、学んだ。2019年には、翌年の消費税複数税率化をにらんで、食料品課税軽減の準備について学んだ。

2020年には、食料品軽減制度に関する専門書を使って、その意義や政策的意図について、深く学んだ。

毎年の受講生が少ないので、受講希望者は大歓迎する。

学生の大半は仕事や家庭で多忙なので、学生の負担は最小限とする。

今年から新テキストとして、以下の二冊を使用する。

一冊は消費税の専門書で、二冊目は税金全般の入門書である。

テキストは、私が負担して書店で購入する。

その後、受講確定者に無料で差し上げる。

※ 私が過去に書いた著書『消費税は弱者にやさしい』も、無料で贈呈する。

・解説書『マンガでわかる税金のすべて』20～21年度、成美堂書店

・専門書『消費税の転嫁と帰着 2014年増税が物価に与えた影響』

白石浩介著、税務経理協会、令和元年（2019年）9月20日発行。

経済学や租税政策の専門でない広領域の他分野の学生にも分かる授業とする。出席率については、大学の方針に従うが、学生の就労状況などに配慮する。

【到達目標】

一日目の二コマの授業は、教員が、テキストとサブテキストを使って、租税政策全体と消費税制度の概要を説明する。

三日目以降は、新テキストの専門書に基づいて、学生が準備して報告する。

今回は、「消費税の転嫁と物価に与える影響」という課題を学ぶことで、消費税の増税に与える影響を学ぶ。そこから視野を広げて、消費税等の租税の公平性や経済的な中立性といった租税政策の基本認識を目指す。

最終的には、学生各自が専門の各分野で役立つ租税政策の一般的な知識を習得することを旨とする。

最終的に、消費税の公平性や経済的な中立性についての理解を目指す。

※ 税金入門書の「金融商品の税金編」では、高齢化社会の税制について、国民の資産形成の促進の視点から学ぶ。（ニーサ NISA や積立ニーサ制度、公的年金を補完する積み立て年金非課税イデコ iDeCo 制度などの活用方法を学ぶ。

退職前に老後資金をふやす資産形成方法について、具体的に学ぶ。その対象は、日本株、米国株、日本投資信託、米国投資信託など、多岐にわたる。）社会人としての納税に困らない知識の習得を目指す。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻公共マネジメントコースにおいては「DP1」「DP2」に関連している。ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻政策研究コースにおいては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、特に「DP2」は特に強く関連している。

【授業の進め方と方法】

授業はすべて、大学の教室で対面を実施する予定である。

初回と2回目の授業は、私が報告する。

3回目以降については、初回の授業で、学生を交えて相談して、学生の報告分担任を決める。教員が無償配布したテキストの輪読で進める。

消費税の転嫁と物価に与える影響に関する最新のテキストで学ぶ。

学生の負担は最小限とする。相談のうえ、多忙な学生の報告義務などの負担を緩和する。

学生へのフィードバックは、授業内で適宜行っていく。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

なし/No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

秋学期前半

回	テーマ	内容
第1回	教員が説明 『マンガでわかる！税金のすべて』に基づいて、教員が税金の概要を説明する。	「PART 1 税金の基本知識 これだけは知っておきたい」税金とは何か、その納め方を学ぶ。
第2回	教員が説明 専門書『消費税の転嫁と帰着 - 2014年増税が物価に与えた影響』の目次に沿って、教員が概要を説明。 第一部「消費税の現状と経済理論」	第1章の1「日本の消費税」「消費税の仕組み」について、教員が概説する。

第3回	学生が分担報告 『マンガでわかる！税金のすべて』「PART 1 税金の基本」	「税金知識」を学ぶ。 前半 所得税の種類や税金の申告等について学ぶ。
第4回	学生が分担報告 テキスト『消費税の転嫁と帰着』 第1部「消費税の現状と経済理論」	第1章の2「消費税の創設とその後の歩み-消費税の引き上げが難しいのはなぜか-」
第5回	学生が分担報告 『マンガでわかる！税金のすべて』「PART 1 税金の基本」	PART 1 「所得税とは」「税金知識」後半 所得税の所得控除や申告の方法等について学ぶ
第6回	学生が分担報告 『消費税の転嫁と帰着-』 第1部「消費税の現状と経済理論」	第2章 「消費税の経済理論」 1 「消費税の転嫁と帰着」
第7回	学生が分担報告 『マンガでわかる！税金のすべて』「PART 1 税金の基本」	PART 1 「所得控除」 その他の控除を学ぶ。
第8回	学生が分担報告『消費税の転嫁と帰着-』第1部「消費税の現状と経済理論」	第2章 「消費税の経済理論」 2 「最適課税の理論」
第9回	学生が分担報告 『マンガでわかる！税金のすべて』PART2「あなたに課税される あんな税金こんな税金」	「サラリーマンの税金編」を学ぶ。 就職後に課税される税金
第10回	学生が分担報告 『消費税の転嫁と帰着-』 第2部「消費増税が2014年の物価に与えた影響」	第3章「消費者物価指数に見る消費税の転嫁」
第11回	学生が分担報告 『マンガでわかる！税金のすべて』PART2「あなたに課税される あんな税金こんな税金」	「個人事業者、自営業者の税金編」 自分で事業を始めると課税される税金
第12回	学生が分担報告 『消費税の転嫁と帰着-』 第2部「2014年の消費増税が物価に与えた影響」	第4章「Point of Sale (POS) データに見る消費税の転嫁」
第13回	学生が分担報告 『マンガでわかる！税金のすべて』PART2「あなたに課税される あんな税金こんな税金」	「不動産にまつわる税金編」土地や建物、マンション等を買った時の税金
第14回	学生が分担報告 『消費税の転嫁と帰着-』 第2部 第1部「消費税の現状と経済理論」	第5章 「マイクロデータみ見る消費税の本質」

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

テキストで紹介する制度やデータがやや古い場合、必要に応じて新しい制度等と対照して理解を深める。

その場合、参考図書にあげた『図説日本の税制』（最新版）等に紹介された最新の制度等と比較して、分かりやすく説明する。

本授業の準備学習・復習時間は各授業あたり、2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

以下のテキストと補助テキストの各自二冊は、受講生に無償で差し上げます。

【新テキスト】

白石浩介『消費税の天下と帰着 - 2014年増税が物価に与えた影響』税務経理協会

第3回目の授業からは、このテキストに沿って、順番に学生が報告する予定。※ 新テキストは、教員が負担購入して大学に送付。受講確定者には、大学から配布する。

（昨年度からの受講者については、授業開始前に自動的に配布してもらう）

【旧テキスト：補助テキスト】

櫻井良治著『消費税は弱者にやさしい』言視舎 ⇒ 無償で差し上げる予定

消費税の逆進性について、純理論的に説明した書物。

【教員が執筆した参考書：【補助テキスト】

櫻井良治著『消費税ほど公平な税はない』文真堂

【参考書】

【選定図書】

国税庁代表者執筆『図説日本の税制』（最新版）財経詳報社、
財務省代表者執筆『図説日本の財政』（最新版）東洋経済新報社。
現代日本の租税制度、財政制度全般について、租税徴収、財政運営当局が編纂した権威ある書物。 ※ 図書館に旧版があれば、それで間に合わせて良い。

大学が市中図書館で、購入希望を出せば、新版を入手できるでしょう。
税理士 小池正明著『図解消費税の仕組みと実務が分かる本』日本実業出版社、2019年10月 最新第二版 発行

税理士の立場から事業者の納税実務に必要な消費税の仕組みを解説。

【選定資料】

税務大学校購本『消費税法』2020（令和2年） 最新版

- ※ 税務大学校講本は、間接税の本質論や歴史を含む詳細な基本資料である。ダウンロードして必要な箇所を読んでおくか、印刷して用意してください。
- ※ その他、授業の進展につれて、必要に応じて指示する。

【成績評価の方法と基準】

毎回の出席が基本的となる。ただし、学生の事情を最大限考慮する。必要な出席割合については、大学の規則や習慣に従うが、学生の事情を考慮。

[各学生の実施義務事項と評価割合の関係について]

1. 出席状況と良好な授業態度、発言内容に応じて、**60%**の評価とする。テキストに基づいて順番に行う報告内容に応じた学生の意見交換の適切さに応じた評価とする。つまり、出席と基本的な意見表明で単位は取得できるものとする。
2. 授業内の意見交換やに適切さに応じて残り **20%**の評価を加算して、合計 **80%**として評価する。各自の専門性や専門外の認識の高さを評価基準とする。
(基準通りに出席して報告、討論をすれば、優以上の成績となることを目安とする。)
3. 学生が報告を実施した場合、報告内容に専門性や独創性等の自分の意見を交える等、特に優秀な場合には、残り **20%**の評価を加算して、最高 **100%**として評価する。

※積極的な参加態度や意見表明等、数値化できない要素も評価に加える。それらの要素も極力客観視して、評価対象とする。

- ・ 試験やレポートは実施しない予定である。
- ただし、以上のレポート等について、学生の要望があれば、実施して評価する。
(詳細については、授業の展開状況を踏まえて、学生と相談して決める。)

【学生の意見等からの気づき】

- ・ 学生のプライバシーに関する個人情報は、授業中に話さないように努める。
- ・ 成績評価については、授業の平素の学習状況を平等かつ厳密に勘案する
- ・ すべての学生に平等に接するように心がける。

【学生が準備すべき機器他】

目下、特段の機材他を使用する予定はありません。
必要に応じて、大学のノートパソコンを利用してきました。(学生の所有するパソコンの方が便利な場合には、それを準備してもらいましても構いません。)使用方法は、講義資料として官公庁や研究所が作成した資料を利用することです。

【その他の重要事項】

以上の講義計画は、基本的に守るべき基準とする。
初回の授業で学生の意見を聞いたうえで、全体の計画を再検討する。
学生の専門性や興味関心を聞いた上で、臨機応変に対応する。
学生の専門的知識の高さに応じて、多少変更することがある。

【担当教員の専門分野等】

- <専門領域> 財政学・地方財政論・地域政策
- <研究テーマ> 租税政策
- <主要研究業績>
- ・ 著書『消費税は弱者にやさしい』言視舎
- ・ 著書『消費税ほど公平な税はない』文真堂

【Outline and objectives】

現在、少子高齢化時代の経済成長鈍化によって、所得課税中心の税制に限界が来ている。高齢化社会の社会保障財源充実のため、消費課税の役割が増している。

これまで、軽減税率制度の成熟を踏まえて、その制度の意義と影響を学んできた。今回は、消費税の価格転嫁問題の専門書を輪読して、消費増税が物価に与える影響について学ぶ。

税金や租税政策になじみのない学生も学べるように、副読本として、税金の入門書も学ぶ。

POL500P1 - 229

比較公共政策論

桐谷 仁

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本授業では、欧米を中心とする主要 OECD 諸国という一見類似した国々を対象にして、比較の観点から、広義の政治体制の相違が、政策結果や経済実績の各国間の差異にどのように影響を与えているのかという問題について、これまでの先行研究等の理解が深まり、公共政策への視野が広がります。

【到達目標】

前述の概要と目的に従って、本授業では、比較分析モデルの理論的な側面と経験的側面の両面での認識を深めることが目標です。ひとつは、政治体制 (political regime) の概念をめぐる種々の先行研究についての認識が深まります。もうひとつは、そうした政治体制と政策結果や経済実績との関係をめぐる先行研究について比較の観点からの理解が広がることです。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻公共マネジメントコースにおいては「DP1」「DP3」に関連している。ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻政策研究コースにおいては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、特に「DP2」は特に強く関連している。

【授業の進め方と方法】

・毎回、受講者による報告と、教員による説明・解説と、その後の質疑応答や討論という進め方をします。とくに授業内での報告に基づいた討論の方法として重視します。
・期末までに、1 回大きな課題でのレポートを作成してもらい、それについてコメントをするというフィードバックの方法を実施する予定です。
・原則対面で実施します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期後半

回	テーマ	内容
第 1 回	総論（導入）	政治体制と政策結果・経済実績との関係についての比較政治分析に向けての本授業の概要
第 2 回	比較政治体制論（1）	比較分析のための準拠枠組としての政治体制概念とその展開についての概要
第 3 回	比較政治体制論（2）	政治体制の諸類型：多元主義論/コーポラティズム論/「資本主義の多様性論」などについての解説
第 4 回	政策レジーム（1）	政策の立案と執行・実施をめぐる種々の議論の展開（政策フィードバック論等）についてについての概説
第 5 回	政策レジーム（2）	政府能力：政府の抽出能力・転換能力・執行能力についての考察
第 6 回	政治制度（1）	ウェストミンスターモデルとコンセンサスモデルの比較と考察
第 7 回	政治制度（2）	議会－執行府関係/政権形態/政権構成、および選挙制度についての概要
第 8 回	政策・経済実績（1）	所得政策とインフレ・賃金問題と政治経済レジームとの関連についての先行研究の整理と考察
第 9 回	政策・経済実績（2）	所得格差と所得再分配の問題と政治経済レジームとの関連についての先行研究の整理と考察
第 10 回	政策・経済実績（3）	雇用規制と失業・就労問題と政治経済レジームとの関連についての先行研究の整理と考察
第 11 回	政策・経済実績（4）	労働市場政策と技能形成の問題と政治経済レジームとの関連についての先行研究の整理と考察
第 12 回	政策・経済実績（5）	福祉国家ならびに比較福祉レジーム論についての先行研究の整理と課題についての考察
第 13 回	政策・経済実績（6）	財政・金融政策と経済成長（中央銀行の独立性の問題を含む）政治経済レジームとの関連についての先行研究の整理と考察
第 14 回	総括（まとめと解説）	主要 OECD 諸国の政治体制および政策結果・経済実績の多様性をめぐる議論の課題と展望を議論

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

準備学習として、①新川敏光・宮本太郎・真柄秀子『比較政治経済学』（有斐閣）、②田中拓道・近藤正基・矢内勇生・上川龍之進『政治経済学』（有斐閣）③建林正彦・曾我謙吾・待鳥聡史『比較政治制度論』（有斐閣）の三冊は事前に読了しておくことが望ましいと考えています。また、できれば④田中拓道『福祉政治史』（勁草書房）にも事前に目を通していただければ幸いです。本授業の準備学習・復習時間は各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

特定の教科書としては、前述の

・新川敏光・宮本太郎・真柄秀子『比較政治経済学』（有斐閣）
・田中拓道・近藤正基・矢内勇生・上川龍之進『政治経済学』（有斐閣）の二冊を挙げておきます。この二冊は、毎回の授業で該当箇所を提示します。また、随時、文献・資料等は提示します。

【参考書】

特定の参考書としては、前述の

・建林正彦・曾我謙吾・待鳥聡史『比較政治制度論』（有斐閣）
・田中拓道『福祉政治史』（勁草書房）の二冊を挙げておきます。
・また随時、文献・資料等は提示します。

【成績評価の方法と基準】

出席 30 %、授業中の討論等への参加 30 %、レポート 40 %

【学生の意見等からの気づき】

開講時に、受講生の要望等を考慮する予定です。

【学生が準備すべき機器他】

とくになし

【その他の重要事項】

とくになし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

政治学、比較政治学、比較政治経済学

<研究テーマ>

比較政治体制論/比較コーポラティズム体制論/国家論。

政治体制と政策・経済実績との関係についての比較政治学的研究

<主要研究業績>

<論文>桐谷仁「政策協調から社会協定へ：コーポラティズムの新たな展開？」(1)(2)(3)(4)(5)『法政研究』（静岡大学）第 22・23・24 巻 2018・19・20 年。

<論文>桐谷仁「社会コーポラティズムから政策協調へ」『法政研究』（静岡大学）第 19 巻 2014 年。

桐谷仁「コーポラティズム論から『資本主義の多様性論』へ？」『慶應義塾大学』

150 周年記念法学部論文集（慶應義塾大学出版会）2008 年。

桐谷仁「OECD 諸国の所得格差と政治－制度編成との関係についての比較分析」『法政研究』（静岡大学）第 10 巻、2005 年。

桐谷仁「先進諸国における制度の補完性と調整行為」『法政研究』（静岡大学）第 9 巻 2004 年。

【Outline and objectives】

The purpose of this class is to study the causal relationships between political institutional factors and public policy outcomes or economic performance from comparative political perspectives. The class will begin with reviewing the relevant literature and then argue about the theoretical accounts. First, we shed light on the elements of political institutional arrangements such as interest organizational configurations, electoral systems, party systems, and parliament government linkages. Second, we pick up some of public policy areas (ex., industrial policies, financial policies, welfare policies and so on) and compare the differences of economic performance among the main OECD countries, 1960-2015. Third, the impacts of the above political institutional variable on these policy outcomes and economic performance are examined and assessed by using various quantitative and qualitative methodologies. Finally, the class will discuss about the comparative methods for explaining political dimensions of the economic-policy results.

ECN500P1 - 230

費用便益分析

調整中

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

わが国は先進国に限っても最も巨額の長期債務残高を抱えている。そのため、他の諸国以上に限られた予算をより有効に使う必要がある。けれどもそうした側面はほとんど国民的議論にはならず、各人が自己主張をしている姿が目立つ。本研究では、限られた予算を必要とすることに有効に配分するための一手法である費用便益分析の基礎を習得し、今後の財政運営に必要とされる慎重な財政の舵取りのあり方を議論する。

【到達目標】

日本の予算・決算の現状の問題点やその課題への対応策について、費用便益分析によりながら自らの見解を熟成して討論できる水準に達することを目標としている。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻公共マネジメントコースにおいては「DP1」「DP4」に関連している。ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻政策研究コースにおいては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、特に「DP1」は特に強く関連している。

【授業の進め方と方法】

1. 費用便益分析の基本的な知識を習得し、費用便益分析の財政制度への適用の意義と問題点を明らかにする。
2. 新型コロナウイルス感染症対応が可能な場合は対面講義とする。また、講義冒頭で前時間の出席票相当提出物に受講者が記載した内容等に担当者が回答する。また個別に質問・照会したいことがある場合は講義中に担当者がそれを提起したとき、あるいは講義終了後に時間を設けるので、対面・遠隔ともに受講者はその場で解決するようにする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

なし/No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

秋学期前半

回	テーマ	内容
第1回	I. 日本の予算・決算の現状と問題点（財政学入門教科書：第6章）	1. 日本の予算・決算の現状
第2回	I. 日本の予算・決算の現状と問題点（財政学入門教科書：第22章）	2. 日本の予算・決算の問題点
第3回	II. 費用便益分析の基礎	1. 費用便益分析の基本用語〈教科書：第1章第1節〉
第4回	II. 費用便益分析の基礎	2. 「経済的」費用便益分析〈教科書：第1章第2節〉
第5回	II. 費用便益分析の基礎	3. 経済的機会費用〈教科書：第1章第3節〉
第6回	II. 費用便益分析の基礎	4. 資本の経済的機会費用〈教科書：第1章第4節〉
第7回	II. 費用便益分析の基礎	5. 国外からの資金調達〈教科書：第1章第5節〉
第8回	III. 労働市場問題〈教科書：第2章第1, 2節〉	1. 基礎知識 2. 労働の経済的機会費用の測定
第9回	III. 労働市場問題〈教科書：第2章第3, 4, 5節〉	3. 労働の供給源 4. 二重労働市場 5. 出稼ぎ労働者供給失業
第10回	III. 社会的関心事〈教科書：第3章第1, 2節〉	1. 基礎知識
第11回	III. 社会的関心事〈教科書：第3章第3, 4節〉	2. 分配ウエイト 3. 基本的要求の外部性 4. 基本的要求の外部性の費用便益分析
第12回	IV. 灌漑事業への適用〈教科書：第4章第1, 2節〉	1. 基礎知識 2. 価値の直接推計
第13回	V. 電力事業分析の基礎〈教科書：第5章第1, 2節〉	1. 基礎知識 2. 同種の火力発電の場合
第14回	V. 電力事業分析の基礎〈教科書：第5章第3, 4節〉	3. 自流水力発電事業 4. 貯水池式水力発電事業 5. 季節的水力発電堰

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

準備学習にあたり2時間以上かけて、各回のシラバスに掲載されている教科書の該当箇所を読み、学部あるいは高等学校までに学んだ内容を確認し、不明語句ないし不明内容を明らかにしておく必要がある。また外国文献にも目を通し、最新事情を把握しておく。各回の講義終了後には予習時の不明点を解明したことを確認すべく、教科書、配付資料、外国参考文献等を頼りに2時間以上かけて復習すること。

【テキスト（教科書）】

1. アーノルド・ハーバーガー著・関口浩訳『ハーバーガー費用便益分析入門』法政大学出版局、平成30年。
2. 佐藤進・関口浩著『財政学入門【新版】』同文館、令和元年。

【参考書】

1. Havey S. ROSEN & Ted GAYER, *Public Finance (10th ed)*, McGraw-Hill/Irwin, 2013.
2. Jonathan GRUBER, *Public Finance and Public Policy (6th ed)*, Worth Publisher, 2019.
3. その他の参考文献はその都度提示するが、社会学部「財政学Ⅰ」および「財政学Ⅱ」シラバス掲載の参考文献を取りあえずあげておく。

【成績評価の方法と基準】

報告内容（70%）を中心に、討論への参加（15%）、出席票のコメント（15%）、講義最終回指定提出物（必須）等を加味して評価する。

【学生の意見等からの気づき】

経済理論の側面を苦手とする学生が多いため、その点を丁寧に講義する。

【学生が準備すべき機器他】

遠隔講義・演習を受信したり、学習支援システムの掲示を閲覧・印刷等できる装置を、大学の貸与を含めて、受講者各自で準備されたい。

【その他の重要事項】

1. 本研究は「財政学」の知識が基礎となる。そのため、できる限り本年度水曜日・春学期後半（4学期制の第2学期）の「財政学基礎」、加えて「租税政策」（桜井良治教授・土曜日・第3学期）、「経済政策」（金子勝教授・月曜日・第4学期）を在学期間に履修する必要がある。
2. 各講義の順番をシラバスとは入れ替えることがある。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

財政学、地方財政論、租税論、教育財政論、財政学を基盤とした教育・福祉政策

【研究テーマ】

固定資産税をめぐる問題、教育財源としての財産税（固定資産税）、租税制度全般、地方税財政、日米教育財政

【研究業績（近年）】

「沖縄県財政の歳入構造」『公共政策志林』第4号、法政大学大学院公共政策研究科、平成28年。
 「沖縄県財政と県税収入」『公共政策志林』第5号、法政大学大学院公共政策研究科、平成29年。
 『財政学』（池宮城秀正編）ミネルヴァ書房、平成31年。
 『財政学入門【新版】』（佐藤進と共著）同文館、令和元年。
 「新型コロナウイルス感染症蔓延下の財政投融资」『生活経済政策』289号、生活経済政策研究所、令和3年。

【Outline and objectives】

We learn the basics of cost-benefit analysis and discuss the desirable fiscal way to be required for future financial administration.

経済政策

金子 勝

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

コロナ不況が深刻であるが、バブル崩壊以降、日本経済は長期衰退過程にある。金融、エネルギー、社会保障などの分野をあげて、今がどのような意味で歴史的な大転換期であるかを明らかにし、日本経済が直面する問題を克服する政策を考えたい。

【到達目標】

院生が経済政策に関して論文を書くための基本的能力を磨く。その際、研究分野のサーベイと論点の設定、論理の組み立て、論証の持続きといった点に重点を置く。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻公共マネジメントコースにおいては「DP1」「DP4」に関連している。ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻政策研究コースにおいては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、特に「DP1」は特に強く関連している。

【授業の進め方と方法】

いくつかの進め方をとる。(1) 私が数回、講義をして参加者と討論する。(2) 参加院生が研究の途中経過の報告を行い、議論する。(3) 重要な著作や論文があれば、共通テキストとして輪読して議論する。昨年は(2)、一昨年は(1)が中心だった。参加意欲を高めるために、院生と相談して決めたい。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

秋学期後半

回	テーマ	内容
第1回	日本経済の現状に関する講義 1 回目	日本経済の衰退過程をめぐって (1)
第2回	その内容をめぐるディスカッション 1 回目	講義 1 回目をめぐって
第3回	日本経済の現状に関する講義 2 回目	新しい経済政策のあり方をめぐって (2)
第4回	その内容をめぐるディスカッション 2 回目	講義 2 回目をめぐって
第5回	参加者の報告 1 回目	参加者の研究テーマ
第6回	ディスカッション 1 回目	参加者の報告をめぐって
第7回	参加者の報告 2 回目	参加者の研究テーマ
第8回	ディスカッション 2 回目	参加者の報告をめぐって
第9回	参加者の報告 3 回目	参加者の研究テーマ
第10回	ディスカッション 3 回目	参加者の報告をめぐって
第11回	参加者の報告 4 回目	参加者の研究テーマ
第12回	ディスカッション 4 回目	参加者の報告をめぐって
第13回	テキストの内容の把握 1 回目	話し合い 1 回目
第14回	テキストの内容の把握 2 回目	話し合い 2 回目

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は各 2 時間を標準とします。その際、大事なのは自分が報告するときは、しっかりしたレジュメを書き、早めに参加者に提供すること。またテキストの読み合わせがある場合はテキストないし関連文献をしっかり読み、自分なりの疑問や意見を形成しておくことです。

【テキスト（教科書）】

参加院生と相談して決める。

【参考書】

金子勝 『人を救えない国 安倍・菅で失われた経済を取り戻す』朝日新書、2021 年

金子勝・飯田哲也 『メガリスク時代の日本再生戦略』ちくま選書、2020 年

金子勝 『平成経済 衰退の本質』岩波新書、2019 年

金子勝・児玉龍彦 『日本病 長期衰退のダイナミズム』岩波新書、2016 年

【成績評価の方法と基準】

きちんと演習に参加し、議論に参加する。こうした点を基本にして平常点が 50 %とする。また自分の報告はしっかり行い、疑問や意見に対してきちんと答える。この報告が 50 %とする。

【学生の意見等からの気づき】

参加院生の問題意識が幅広く分布しているので、できるだけそれぞれの問題に対応しつつも、論文を書く能力を磨くという共通の課題で参加者の勉強になるように努めたい。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

<研究テーマ>

<主要研究業績>

【Outline and objectives】

The Japanese economy has been in a long-term declining process since the burst of the Bubble Economy. What meaning the historical turning points have today will be shown for such fields as finance, energy, and social security, and policies for overcoming the problems faced by the Japanese economy will be discussed.

SOS600P1 - 501

論文研究指導 1 A

杉崎 和久

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

公共政策研究科の論文指導科目として、修士課程 1 年目の院生を対象に修士論文やリサーチペーパーを各自の設定した研究テーマに即してどのように取りまとめていけばいいかを指導するものである。

【到達目標】

各自の論文を実際に書き切ることがもちろん大きな目標だが、そのまえに、修士課程 1 年目の課題として、(1) それぞれが関心を持ち熱意を持って取り組める研究テーマを発見すること、(2) その研究テーマを追求できる適切な理論枠組や方法を習得すること、(3) 論文というものの構成の仕方を理解すること、(4) 必要な資料を収集したり先行研究をフォローしたり時の技法や留意点を理解すること、を具体的な目標として取り組む。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連している。

【授業の進め方と方法】

各院生の学習・研究の進捗に応じて進めていく。下に示す「授業計画」はあくまで目安であるけれども、まさに目安として、1 年間にどんなことを身につけたいかをあらかじめ知っておくために活用してもらいたい。課題については、授業の中で発表、討論を行い、その中で講評を行う。授業は原則「対面」で行うが、一部「リアルタイムオンライン授業」を行うこともある。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1.2 回	オリエンテーション	最初に当たって、大学院でのコースワークを経ながら自分固有の研究を論文として著していくことのイメージをつかむ。
第 3.4 回	関心のある研究テーマ案の検討	関心のあるテーマを発表する。
第 5.6 回	図書館を利用した資料探索	図書館の利用の仕方、オンラインデータベースの利用の仕方の基礎を学ぶ。
第 7.8 回	論文構成の技法 その 1 基礎編	論文の構成の仕方の基礎を指導する。
第 9.10 回	論文構成の技法 その 2 発展編	し、かつ構成のすっきりした良質な学術論文を選定し、これを実際に講読することを通じて、論文の構成の仕方を学ぶ。
第 11.12 回	既往研究リストの作成	関心のあるテーマに関する既往研究リストを作成する。
第 13.14 回	研究計画の確認	研究の進捗状況を発表し、夏季休暇期間の研究計画を確認する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

この科目の性質からして、まさに各院生が自分の論文に取り組むことそのものであるのだが、具体的には、それぞれの回ごとに、「授業の到達目標」欄に示した 4 つの項目に沿って、具体的に行なっておくべき作業を指示する。例えば、論文の構成の仕方を指導した後は、実際に自分が当面関心と知識を持っているテーマに即して論文の構成案を作ってみるなどである。

【テキスト（教科書）】

テキストは使用しない。

【参考書】

各院生の関心や資質、到達度などに応じて、その都度指示する。

【成績評価の方法と基準】

研究報告（60%）、議論への貢献（40%）

【学生の意見等からの気づき】

該当なし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>都市計画、市民参加手法

<研究テーマ>公共的意思決定における市民参加のあり方、住民主体のまちづくりを支える支援システム、まちづくりの現代史

<主要研究業績>『住民主体の都市計画』（分担執筆）学芸出版社、2009 年「まちづくりセンターを取り巻く課題」『季刊まちづくり』2011 年 3 年「参加のプロセスマネジメント」『地方自治職員研修』2013 年 9 月号

【Outline and objectives】

The purpose of this lecture is to create research ideas and to write articles.

論文研究指導 1 B

杉崎 和久

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

公共政策研究科の論文指導科目として、修士課程 1 年目の院生を対象に修士論文やリサーチペーパーを各自の設定した研究テーマに即してどのように取りまとめればいいのかを指導するものである。

【到達目標】

各自の論文を実際に書き切ることがもちろん大きな目標だが、そのまゝに、修士課程 1 年目の課題として、(1) それぞれが関心を持ち熱意を持って取組める研究テーマを発見すること、(2) その研究テーマを追求できる適切な理論枠組や方法を習得すること、(3) 論文というものの構成の仕方を理解すること、(4) 必要な資料を収集したり先行研究をフォローしたり時の技法や留意点を理解すること、を具体的な目標として取組む。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連している。

【授業の進め方と方法】

各院生の学習・研究の進捗に応じて進めていく。下に示す「授業計画」はあくまで目安であるけれども、まさに目安として、1 年間にどんなことを身につけたいかをあらかじめ知っておくために活用してもらいたい。課題については、授業の中で発表、討論を行い、その中で講評を行う。授業は原則「対面」で行うが、一部「リアルタイムオンライン授業」を行うこともある。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1.2 回	研究進捗状況の報告	夏季休暇期間中の研究活動の進捗状況を発表する。
第 3.4 回	研究スケジュールの検討	1 年半後の論文提出に向けたスケジュールを確認する。
第 5.6 回	研究テーマの精査	研究テーマ・論点の絞込みを行う、
第 7.8 回	目次案の作成	論文全体の構成を検討する。
第 9.10 回	調査企画の検討	調査等の作業内容を検討する。
第 11.12 回	研究スケジュールの確認	論文執筆までのスケジュール（特に春季休暇期間の研究活動予定）を検討する
第 13.14 回	中間発表に向けた準備	中間発表の発表内容を確認する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

この科目の性質からして、まさに各院生が自分の論文に取り組むことそのものであるのだが、具体的には、それぞれの回ごとに、「授業の到達目標」欄に示した 4 つの項目に沿って、具体的にこなしておくべき作業を指示する。例えば、論文の構成の仕方を指導した後は、実際に自分が当面関心と知識を持っているテーマに即して論文の構成案を作ってみるなどである。

【テキスト（教科書）】

テキストは使用しない。

【参考書】

各院生の関心や資質、到達度などに応じて、その都度指示する。

【成績評価の方法と基準】

研究報告（60%）、議論への貢献（40%）

【学生の意見等からの気づき】

該当なし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>都市計画、市民参加手法
<研究テーマ>公共的意思決定における市民参加のあり方、住民主体のまちづくりを支える支援システム、まちづくりの現代史
<主要研究業績>『住民主体の都市計画』（分担執筆）学芸出版社、2009 年
「まちづくりセンターを取り巻く課題」『季刊まちづくり』2011 年 3 年
「参加のプロセスマネジメント」『地方自治職員研修』2013 年 9 月号

【Outline and objectives】

The purpose of this lecture is to create research ideas and to write articles.

SOS600P1 - 501

論文研究指導 1 A

土山 希美枝

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

修士過程1年生にむけた、論文作成のための起点となる科目。自身の研究テーマを明確にし、修士論文としての構想を練ることをめざす。また、修士論文作成のために必要な資料や文献をどのように収集し読解していくか、どのようにテーマを章立てしていくかというリテラシーも学ぶ。

【到達目標】

この講義の到達目標は以下である。

- ・修士論文のテーマを明確にする
- ・修士論文の作成に必要な、情報、資料また文献の検索、収集の技法を学ぶ
- ・修士論文の作成に必要な、情報、資料また文献の読解をすすめる
- ・修士論文の章節構成を検討する
- ・秋学期以降の研究計画をたてる

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連している。

【授業の進め方と方法】

受講生との面談を通じて、テーマの明確化、技法の習得、修論の章節構成の作成を指導していく。報告をベースに、論文作成のための意見交換やコメント、作業内容などがフィードバックされる。なお、原則として対面講義とする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

なし/No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】**春学期**

回	テーマ	内容
第1回	導入	講義の目標や進めかたについて確認する
第2回	テーマを検討する	修士論文のテーマと想定している内容について報告をうけ、議論する
第3回	情報検索を学ぶ	テーマをめぐる情報を検索する方法を学ぶ
第4回	文献検索を学ぶ	テーマをめぐる文献、資料を検索する方法を学ぶ
第5回	テーマを仮定する	修士論文のテーマを仮定したものを報告し、その内容について議論するテーマを仮定する
第6回	テーマを具体化する	修士論文のテーマをより具体化するために、報告を受け、議論する
第7回	テーマをめぐる情報を整理する	修士論文のテーマをめぐる収集した情報を整理し、報告する
第8回	テーマをめぐる事実を確認する	修士論文のテーマをめぐる、経緯や状況などを整理し、報告する
第9回	テーマを明確にする	それまでの蓄積をふまえて、修士論文のテーマを明確にする
第10回	テーマについて議論する	修士論文のテーマをめぐる、論の展開などの方向性を議論する
第11回	論文作成の技法の基礎を学ぶ	注のつけかた、参考文献の引用のしかたを学ぶ
第12回	論文作成の技法の基礎を習得する	注のつけかた、参考文献の引用の仕方を習得する
第13回	修士論文の構成を検討する	修士論文のテーマに即し、論文の章・節構成を仮定する
第14回	修士論文の作成に向けて	夏季休暇中の目標を設定する

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

院生が自らのテーマをめぐる、調べ、学び、考察し、その結果について報告を受けて指導することが本講義の基本スタイルなので、求められている報告をていねいに用意し、指導を受けて次回のための研究活動にとりくむことが講義時間外に必要である。

【テキスト（教科書）】

ありません。

【参考書】

院生が集めるべき資料、読むべき文献については、講義中に指示する。

【成績評価の方法と基準】

講義における報告（60%）、それをふまえた意見交換、指導にたいする理解（40%）

【学生の意見等からの気づき】

本年度から担当者が変わった新しい科目で、「気づき」を得るべき意見はまだもらっていません。

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉 公共政策、地方自治、政治学

〈研究テーマ〉 社会構造と政策・政治の変容、自治体政策、自治体議会論。

〈主要研究業績〉『高度成長期「都市政策」の政治過程』日本評論社、2007年。『質問力でつくる政策議会』公人の友社、2017年。

【Outline and objectives】

It will develop your literacy of information and literature research, clarifying your paper's theme and its writing plan.

論文研究指導 1 B

土山 希美枝

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

論文研究指導 1 A から続く、修士論文作成のための科目。明確になったテーマについて、先行研究の調査、論文で示す事実（fact）の収集、整理、分析をすすめ、論文作成をより具体的なものとする。

【到達目標】

この講義の獲得目標は以下である。

- ・ 明確になったテーマを章節構成に反映させていく
- ・ 論文で示すための情報、資料の収集、整理、分析
- ・ 先行研究の収集と整理
- ・ テーマについてのより深い考察
- ・ 春季休暇と次年度の研究計画の策定

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連している。

【授業の進め方と方法】

受講生との面談を通じて、テーマの明確化、技法の習得、修論の章節構成の作成を指導していく。報告をベースに、論文作成のための意見交換やコメント、作業内容などがフィードバックされる。なお、原則として対面講義とする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

なし/No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	報告	夏季休暇中の研究活動を報告する
第 2 回	論文構成の検討	章、節構成を検討する
第 3 回	研究テーマを深く考察する	研究テーマについての意見交換
第 4 回	研究テーマの論点を整理する	研究テーマについての意見交換をふまえて、今後検討すべき論点を整理する
第 5 回	研究計画の更新	これまでの検討をふまえ、研究計画を更新する
第 6 回	先行研究の報告	先行研究について報告する
第 7 回	先行研究の検討	先行研究の論旨について検討する
第 8 回	研究テーマをめぐる事実（fact）の整理	研究テーマの現状を示す事実（fact）を検討する
第 9 回	研究テーマをめぐる事実（fact）の分析	研究テーマの経緯を示す事実（fact）を検討する
第 10 回	研究テーマをめぐる国内事例を検討する	研究テーマにかんする事例を検討する
第 11 回	研究テーマの論点の一部を検討する	研究テーマの論点のいくつかを検討する
第 12 回	研究テーマの論点の一部を検討する	研究テーマの論点のいくつかを検討する
第 13 回	論文構成の確認	論文の章節構成を確認し、更新する
第 14 回	春季休暇、次年度にむけての研究計画の作成	春季休暇、次年度にむけて、研究計画を検討し作成する

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

院生が自らのテーマをめぐって、調べ、学び、考察し、その結果について報告を受けて指導することが本講義の基本スタイルなので、求められている報告をていねいに用意し、指導を受けて次回のための研究活動にとりくむことが講義時間外に必要である。

【テキスト（教科書）】

テキストは使用しない。

【参考書】

院生が集めるべき資料、読むべき文献については、講義中に指示する。

【成績評価の方法と基準】

講義における報告（60 %）、それをふまえた意見交換、指導にたいする理解（40 %）

【学生の意見等からの気づき】

本年度が科目の初年度であるため、反映するべき意見を受け取っていない。

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉公共政策、地方自治、政治学
〈研究テーマ〉社会構造と政策・政治の変容、自治体政策、自治体議会論。
『主要研究業績』『高度成長期「都市政策」の政治過程』日本評論社、2007 年。
『質問力でつくる政策議会』公人の友社、2017 年。

【Outline and objectives】

It will develop your study and research for your paper. You will understand the issues on your subject and make the writing plan for the next year.

SOS600P1 - 501

論文研究指導 1 A

名和田 是彦

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

公共政策研究科の論文指導科目として、修士課程 1 年目の院生を対象に修士論文やリサーチペーパーを各自の設定した研究テーマに即してどのように取りまとめればいいのかを指導するものである。

【到達目標】

各自の論文を実際に書き切ることがもちろん大きな目標だが、そのまゝに、修士課程 1 年目の課題として、(1) それぞれが関心を持ち熱意をもって取り組める研究テーマを発見すること、(2) その研究テーマを追究できる適切な理論枠組や方法を習得すること、(3) 論文というものの構成の仕方を理解すること、(4) 必要な資料を収集したり先行研究をフォローする時の技法や留意点を理解すること、を具体的な目標として取組む。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連している。

【授業の進め方と方法】

各院生の学習・研究の進捗に応じて進めていく。下に示す「授業計画」はあくまで目安であるけれども、まさに目安として、どんなことを身につけたらいいかをあらかじめ知っておくために活用してもらいたい。

原則として対面により行うことを考えている。また、授業で報告をしてもらった場合には、原則としてその場で、場合によっては次回に、コメントをする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	テーマ 一個の研究を作り上げていく心構え	最初に当たって、大学院でのコースワークを経ながら自分固有の研究を論文として著していくことのイメージをつかむ。
第 2 回	図書館を利用した資料探 索 その 1 基本編	図書館の利用の仕方、オンラインデータベースの利用の仕方の基礎を学ぶ。
第 3 回	図書館を利用した資料探 索 その 2 発展編	図書館の閉架部分を見ながらどんな資料があるかを実感すること、それから、オンラインデータベースの様々な使い方を知ること。
第 4 回	研究企画の立案	さしあたりこの時点で持っている研究テーマ、仮説、それを追究する具体的な方法、理論枠組、先行研究、などをフォーマットに記載してもらい、これに基づいて指導を行なう。
第 5 回	論文構成の技法 その 1 基礎編	論文の構成の仕方の基礎を指導する。
第 6 回	論文構成の技法 その 2 発展編	院生の研究関心にも合致し、かつ構成のすっきりした良質な学術論文を選定し、これを実際に講読することを通じて、論文の構成の仕方を学ぶ。
第 7 回	論文構成の技法 その 3 レジュメの作り方	大学院の授業では、レジュメを作成して発表するという機会が多くあるだろう。論文の構成を読み解き、簡略で分かりやすいレジュメを作成して通じて、論文の構成の仕方を学ぶと同時に、レジュメの上手な作り方も習得できるようにしたい。
第 8 回	フィールド調査の基礎	論文を作成していく上で、様々な形で外に出て人の話を聞いたり資料の提供をお願いしたりする場面があるだろう。このようなフィールド調査の基礎について指導する。
第 9 回	研究企画の推進	第 4 回の研究企画の立案でさしあたり取り組むこととした方向に従った結果を報告してもらい、研究の進め方について指導する。
第 10 回	先行研究のフォロー	論文では先行研究をきちんとフォローしてあることが大事である。先行研究の見つけ方、整理の仕方について、具体的に指導する。
第 11 回	先行研究の整理	それぞれの院生がさしあたり設定している研究企画に沿って、できる範囲で先行研究を整理したものを示してもらい、指導を行なう。

第 12 回 研究テーマ設定上の悩み
の解決

それぞれの院生が持っている研究テーマ設定・推進上の悩みを聞き、解決の方策を考える。

第 13 回 論文の理論枠組の設定

理論枠組とは、社会認識上の大理論だけではなく、それぞれの研究の基本的な枠組も含めて考えている。さしあたり設定している研究企画に沿って、どんな枠組によって説得的な論文を書こうとしているかを報告してもらい、指導を行なう。

第 14 回 論文の基本ルール

論文を書くことへの意欲が高まった時期を捉えて、論文の形式上のスタイル、例えば、註の付け方とか文献表の作り方、更には学会誌への投稿の際の様々なルールなどについて、一通りの指導を行なう。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

この科目の性質からして、まさに各院生が自分の論文に取り組むことそのものであるのだが、具体的には、それぞれの回ごとに、「授業の到達目標」欄に示した 4 つの項目に沿って、具体的にこなす必要がある。例えば、論文の構成の仕方を指導した後は、実際に自分が当面関心と知識を持っているテーマに即して論文の構成案を作ってみるなどである。

【テキスト（教科書）】

テキストは使用しない。

【参考書】

各院生の関心や資質、到達度などに応じて、その都度指示する。

【成績評価の方法と基準】

「授業の到達目標」欄に記した 4 つの項目を果たしてまたどの程度身につけたかを評価基準とする（各項目 25 % ずつ）。

【学生の意見等からの気づき】

該当せず。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞コミュニティ政策論

＜研究テーマ＞都市内分権（特に日本とドイツ）、自治会・町内会の研究

＜主要研究業績＞

編著『コミュニティの自治』（日本評論社、2009 年）

単著論文「ブレイメン市の地域評議会法の新展開に見る「参加」と「協働」

水林彪・吉田克己編『市民社会と市民法——civil の思想と制度』日本評論社、

2018 年、257～287 頁。

単著論文「日本型都市内分権の限界と可能性——宮崎市の地域自治区制度の

運用を素材として」『法学志林』第 118 巻第 3 号、2020 年、1～88 頁。

【Outline and objectives】

This is part of the research-training program for master course 1st semester students working in the area of public policy studies. The workshop's principal objective is to foster intellectual exchange by showcasing work from leading and emerging scholars. The workshop will provide a forum in which research students can present their work, discuss the theoretical and methodological problems involved, discuss common challenges in conducting research in this area and obtain feedback on their work.

論文研究指導 1 B

名和田 是彦

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

公共政策研究科の論文指導科目として、修士課程 1 年目の院生を対象に修士論文やリサーチペーパーを各自の設定した研究テーマに即してどのように取りまとめればいいのかを指導するものである。

【到達目標】

各自の論文を実際に書き切ることがもちろん大きな目標だが、そのまゝに、修士課程 1 年目の課題として、(1) それぞれが関心を持ち熱意をもって取組める研究テーマを発見すること、(2) その研究テーマを追究できる適切な理論枠組や方法を習得すること、(3) 論文というものの構成の仕方を理解すること、(4) 必要な資料を収集したり先行研究をフォローしたり時の技法や留意点を理解すること、を具体的な目標として取組む。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連している。

【授業の進め方と方法】

各院生の学習・研究の進捗に応じて進めていく。下に示す「授業計画」はあくまで目安であるけれども、まさに目安として、どんなことを身につけたらいいかをあらかじめ知っておくために活用してもらいたい。原則として対面により行うことを考えている。原則として対面により行うことを考えている。また、授業で報告をしてもらった場合には、原則としてその場で、場合によっては次回に、コメントをする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	研究テーマの本格的設定	修士課程でまとめようとしている論文の基本的なテーマを設定する。もちろんあとで変更可能であるし、研究の進展によって微修正していくものであることを前提とする。
第 2 回	研究テーマに即した具体的な研究スケジュールについての検討	前回を受けて、今後ほぼ 1 年半で論文を書き上げていくことを目標に、どんな内容の研究をどんなペースに進めていくかを確認する。
第 3 回	研究の現状の整理	設定した研究テーマについて、現在の学界や実務界での認識の現状がどのようになっているか、先行研究はどんな状態か、を整理してもらい、指導を行なう。
第 4 回	主要な先行研究の検討	研究テーマにとってベーシックな意義を有する著書や論文を取り上げ、その内容を報告してもらう。
第 5 回	主要な資料の検討	研究テーマにとってベーシックな意義を有する資料を取り上げ、その内容を報告してもらう。
第 6 回	研究推進上の悩みの解決	現時点で抱えている研究上の悩みを話してもらい、解決の方策を相談する。
第 7 回	論文の理論的筋道の整理	ベーシックな情報が得られた段階で、あくまで暫定的なものではあるが、論文の全体を貫く仮説となる理論枠組を考えてもらい、指導を行なう。
第 8 回	論文の目次	あくまで暫定的なものだが、論文の目次を作成してみることで、研究テーマに関する認識を整理し深める。
第 9 回	論文の一部を書いてみる	はしがきでもどれか一つの章でもかまわないが、論文の一部分を書いてみる。実際に一定の長さの文章を書くことは多くの人にとってハードルが高い。その経験をこの段階ですてもらうためのものである。
第 10 回	文章の推敲 その 1 基礎編	書いてみた論文の一部について、論理構成（起承転結）、論理的整合性、ていをは、表現、言葉遣いなどについて細かく指導する。まず、その 1 として、総括的な指摘を行ない、課題を明確にする。
第 11 回	文章の推敲 その 2 完成編	書いてもらっている論文の一部を素材に、学術的な文章として読みやすく、また論理構成が明晰な文章になるようにする。

第 12 回 英文サマリーの作り方
その 1 基礎編

学会誌への投稿などに際して、英文サマリーの作成を求められることが多い。年度の最後にこの練習をしておく。まず基礎的な事項を指導し、英文文をしてもらう。

第 13 回 英文サマリーの作り方
その 2 実践編

なれない外国語で自分の考えていることの細かいニュアンスを伝えるのは難しいことである。自らの語学力の範囲でそれをどう工夫したらいいかを考えていく。

第 14 回 英文サマリーの作り方
その 3 完成編

自らの研究テーマに即して一応の英文サマリーを完成させる。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

この科目の性質からして、まさに各院生が自分の論文に取組むことそのものであるのだが、具体的には、それぞれの回ごとに、「授業の到達目標」欄に示した 4 つの項目に沿って、具体的にこなす作業を指示する。例えば、論文の構成の仕方を指導した後は、実際に自分が当面関心と知識を持っているテーマに即して論文の構成案を作ってみるなどである。

【テキスト（教科書）】

テキストは使用しない。

【参考書】

各院生の関心や資質、到達度などに応じて、その都度指示する。

【成績評価の方法と基準】

「授業の到達目標」欄に記した 4 つの項目を果たしてまたどの程度身につけたかを評価基準とする（各項目 25 % ずつ）。

【学生の意見等からの気づき】

該当せず。

【担当教員の専門分野等】

< 専門領域 > コミュニティ政策論

< 研究テーマ > 都市内分権（特に日本とドイツ）、自治会・町内会の研究

< 主要研究業績 >

編著『コミュニティの自治』（日本評論社、2009 年）

単著論文「プレメーション市の地域評議会法の新展開に見る「参加」と「協働」」水林彪・吉田克己編『市民社会と市民法——civil の思想と制度』日本評論社、2018 年、257~287 頁。

単著論文「日本型都市内分権の限界と可能性——宮崎市の地域自治制度の運用を素材として」『法学志林』第 118 巻第 3 号、2020 年、1~88 頁。

【Outline and objectives】

This is part of the research-training program for master course 2nd semester students working in the area of public policy studies. The workshop's principal objective is to foster intellectual exchange by showcasing work from leading and emerging scholars. The workshop will provide a forum in which research students can present their work, discuss the theoretical and methodological problems involved, discuss common challenges in conducting research in this area and obtain feedback on their work.

SOS600P1 - 501

論文研究指導 1 A

廣瀬 克哉

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

公共政策研究科の論文指導科目として、修士課程1年目の院生を対象に、研究の開始に際する指導を行うものである。

【到達目標】

院生は、各自の研究関心に従って適切な研究テーマを確定させるための予備的作業を求められる。この予備的作業とは、(1) 先行研究の調査、(2) 基本的な分析枠組や方法の習得、(2) 社会科学一般における論文執筆上の作法の理解、である。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連している。

【授業の進め方と方法】

各自の研究の進展に応じて、研究報告を行い、相互に議論を深めることを基本とする。

基本的には対面で行うことを予定しているが、感染状況によって Zoom によるオンラインに切りかえて行う場合がある。指導学生を登録した Google Classroom を設定する予定であり、発表資料等はそれを使って共有する。なお、以下の各回の内容は、発表をディスカッション通じてこの授業で取りあげていく論点の構成を示したものであり、必ずしも下記の通りの順序で取りあげるとは限らない。

学生へのフィードバックは授業内で行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	各自の意識を共有しながら、修士論文とは何か、それに何が期待されているのかを確認する。
第2回	修士論文とは何か	修士論文のイメージを具体化するため、修了生による実際の修士論文を参照しながら学ぶ。
第3回	研究関心の報告	各自の研究関心についてその概要を報告し、議論する。
第4回	資料の探索と調査の基礎	図書館やオンラインデータベースの基本的な利用方法に加え、フィールド調査を行う場合の基礎について学ぶ。
第5回	研究倫理の理解	研究を遂行する上で留意すべき研究倫理について理解する。
第6回	先行研究の選定	先行研究の調査とその整理の仕方について学ぶ。
第7回	先行研究の報告	各自の調査に基づいた先行研究についてその概要を報告し、議論する。
第8回	研究テーマの設定	研究テーマを設定するにあたり、それをどのように具体化すべきか学ぶ。
第9回	分析枠組と方法の習得	適切な先行研究を選定し、その輪読により、基本的な分析枠組と方法について学ぶ。
第10回	分析枠組と方法の選定	各自の研究テーマに即して、分析枠組と方法を選定する。
第11回	論文の基本的構成の理解	学術論文の構成について、その基礎を学ぶ。
第12回	論文執筆上の基本的ルールの確認	論文の執筆に際して、引用註や脚注、参考文献リストの作成について理解する。
第13回	研究テーマの報告	各自の研究テーマを報告し、議論する。
第14回	研究課題の明確化	修士論文の執筆を進める上での課題を明確化する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

各自の研究関心に基づいて主体的に研究を進めること。

【テキスト（教科書）】

テキストは使用しない。

【参考書】

各院生の関心や資質、到達度などに応じて、その都度指示する。

【成績評価の方法と基準】

研究報告（60%）、議論への貢献（40%）とする。

【学生の意見等からの気づき】

該当なし。

【学生が準備すべき機器他】

資料共有のため、Google Classroom を利用できる環境。
オンラインでおこなう場合には Zoom に参加できる情報機器や通信手段。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 行政学、地方自治
<研究テーマ> 二元代表制の理念と実態
<主要研究業績>

編著『自治体議会改革の固有性と普遍性』（法政大学出版局、2018年）
編著『議会改革白書 各年度版』（生活社、2009年～2016年）

【Outline and objectives】

This is a supervised course in which you work autonomously and independently under the guidance of your supervisor. The course helps to situate one's own work within the broader debates in the social sciences through discussions on some key concepts, theories and methods used in the field of public policy.

論文研究指導 1 B

廣瀬 克哉

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

公共政策研究科の論文指導科目として、修士課程1年目の院生を対象に、修士論文のサーチ・デザインを適切に行うための指導を行うものである。

【到達目標】

院生は、論文研究指導 1A で体得した（1）先行研究の調査、（2）基本的な分析枠組や方法の習得、（3）社会科学一般における論文執筆上の作法の理解、に基づき、各自の研究関心に従った研究テーマを確定させるとともに、サーチ・クエスチョン（問い）を明確に設定することを目標にする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連している。

【授業の進め方と方法】

各自の研究の進展に応じて、研究報告を行い、相互に議論を深めることを基本とする。

基本的には対面で行うことを予定しているが、感染状況によって Zoom によるオンラインに切りかえて行う場合がある。指導学生を登録した Google Classroom を設定する予定であり、発表資料等はそれを使って共有する。なお、以下の各回の内容は、発表をディスカッション通じてこの授業で取りあげていく論点の構成を示したものであり、必ずしも下記の通りの順序で取りあげるとは限らない。

学生へのフィードバックは授業内で行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	これまでの進捗を報告するとともに、現時点での研究テーマを設定する。
第2回	研究スケジュールの確認	今後の研究に向けたスケジュールを設定し、共有する。
第3回	先行研究の報告	各自の調査に基づいた先行研究についてその内容を報告し、議論する。
第4回	先行研究の分析	各自の研究において主要な先行研究が、各研究領域でどのように位置付けられているのかを検討する。
第5回	リサーチ・クエスチョン（問い）の設定	よりリサーチ・クエスチョンとは何かを学ぶ。
第6回	仮説の検討	リサーチ・クエスチョンに対する暫定的な答えをいかに導くかを指導する。
第7回	リサーチ・クエスチョン（問い）と仮説の報告	各自の設定したリサーチ・クエスチョンと仮説について相互に批判的な検討を加える。
第8回	目次の作成	暫定的な論文の目次作成を試みる。
第9回	リサーチ・プロポーザルの作成	用意されたフォーマットに沿って、リサーチ・プロポーザルを作成する。
第10回	リサーチ・プロポーザルの報告	各自のリサーチ・プロポーザルについて議論する。
第11回	論文の部分的な試作	暫定的に作成した目次に従い、そのうちの1章について執筆を試みる。
第12回	文章の推敲	執筆した文章について、構成、論理的整合性、文章表現などについて詳細な指導を行う。
第13回	リサーチ・プロポーザルの再検討	前回の報告に基づき各自リライトしたリサーチ・プロポーザルについて、相互に批判的な検討を加える。
第14回	研究課題の明確化	修士論文の執筆を進める上での課題を明確化する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

各自の研究関心に基づいて主体的に研究を進めること。

【テキスト（教科書）】

テキストは使用しない。

【参考書】

各院生の関心や資質、到達度などに応じて、その都度指示する。

【成績評価の方法と基準】

研究報告（60%）、議論への貢献（40%）とする。

【学生の意見等からの気づき】

該当なし。

【学生が準備すべき機器他】

資料共有のため、Google Classroom を利用できる環境。

オンラインでおこなう場合には Zoom に参加できる情報機器や通信手段。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 行政学、地方自治

<研究テーマ> 二元代表制の理念と実態

<主要研究業績>

編著『自治体議会改革の固有性と普遍性』（法政大学出版社、2018年）

編著『議会改革白書 各年度版』（生活社、2009年～2016年）

【Outline and objectives】

This is a supervised course in which you work autonomously and independently under the guidance of your supervisor. The course helps to situate one's own work within the broader debates in the social sciences through discussions on some key concepts, theories and methods used in the field of public policy.

SOS600P1 - 501

論文研究指導 1 A

淵元 初姫

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

公共政策研究科の論文指導科目として、修士課程1年目の院生を対象に、研究の開始に際する指導を行うものである。

【到達目標】

院生は、各自の研究関心に従って適切な研究テーマを確定させるための予備的作業を求められる。この予備的作業とは、(1) 先行研究の調査、(2) 基本的な分析枠組や方法の習得、(2) 社会科学一般における論文執筆上の作法の理解、である。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連している。

【授業の進め方と方法】

各自の研究の進展に応じて、研究報告を行い、相互に議論を深めることを基本とする。報告に対しては、授業中に参加者全員による質疑・議論を行い、講評を行うことによってフィードバックする。授業方式は原則として対面授業とする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	各自の意識を共有しながら、修士論文とは何か、それに何が期待されているのかを確認する。
第2回	修士論文とは何か	修士論文のイメージを具体化するため、修士生による実際の修士論文を参照しながら学ぶ。
第3回	研究関心の報告	各自の研究関心についてその概要を報告し、議論する。
第4回	資料の探索と調査の基礎	図書館やオンラインデータベースの基本的な利用方法に加え、フィールド調査を行う場合の基礎について学ぶ。
第5回	研究倫理の理解	研究を遂行する上で留意すべき研究倫理について理解する。
第6回	先行研究の選定	先行研究の調査とその整理の仕方について学ぶ。
第7回	先行研究の報告	各自の調査に基づいた先行研究についてその概要を報告し、議論する。
第8回	研究テーマの設定	研究テーマを設定するにあたり、それをどのように具体化すべきか学ぶ。
第9回	分析枠組と方法の習得	適切な先行研究を選定し、その輪読により、基本的な分析枠組と方法について学ぶ。
第10回	分析枠組と方法の選定	各自の研究テーマに即して、分析枠組と方法を選定する。
第11回	論文の基本的構成の理解	学術論文の構成について、その基礎を学ぶ。
第12回	論文執筆上の基本的ルールの確認	論文の執筆に際して、引用註や脚注、参考文献リストの作成について理解する。
第13回	研究テーマの報告	各自の研究テーマを報告し、議論する。
第14回	研究課題の明確化	修士論文の執筆を進める上での課題を明確化する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

各自の研究関心に基づいて主体的に研究を進めること。

【テキスト（教科書）】

テキストは使用しない。

【参考書】

各院生の関心や資質、到達度などに応じて、その都度指示する。

【成績評価の方法と基準】

研究報告（60%）、議論への貢献（40%）とする。

【学生の意見等からの気づき】

該当なし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 比較政治学、コミュニティ政策、福祉政策
 <研究テーマ> ポスト福祉国家時代の市民社会論、地域社会における社会的包摂、英国・スコットランドの地方自治・自治体内分権
 <主要研究業績>

「スコットランドの地域評議会－制度の基本的構想とその機能の実際」名和田是彦編（2009）『コミュニティの自治－自治体内分権と協働の国際比較』pp.81-118、日本評論社
 「スコットランドにおける権限移譲とジェンダー・クォータ」三浦まり・衛藤幹子編著（2014）『ジェンダー・クォーター世界の女性議員はなぜ増えたのか』pp.203-26、明石書店
 「地域社会における社会的連帯の再編：居場所づくりにみる三人称的連帯の可能性」金安岩男・牧瀬稔編著（2019）『都市・地域政策研究の現在』pp.131-42、地域開発研究所

【Outline and objectives】

This is a supervised course in which you work autonomously and independently under the guidance of your supervisor. The course helps to situate one's own work within the broader debates in the social sciences through discussions on some key concepts, theories and methods used in the field of public policy.

SOS600P1 - 502

論文研究指導 1 B

淵元 初姫

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

公共政策研究科の論文指導科目として、修士課程1年目の院生を対象に、修士論文のサーチ・デザインを適切に行うための指導を行うものである。

【到達目標】

院生は、論文研究指導 1A で得た(1) 先行研究の調査、(2) 基本的な分析枠組や方法の習得、(2) 社会科学一般における論文執筆上の作法の理解に基づき、各自の研究関心に従った研究テーマを確定させるとともに、サーチ・クエスチョン（問い）を明確に設定することを目標にする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連している。

【授業の進め方と方法】

各自の研究の進展に応じて、研究報告を行い、相互に議論を深めることを基本とする。報告に対しては、授業中に参加者全員による質疑・議論を行い、講評を行うことによってフィードバックする。
授業方式は原則として対面授業とする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	これまでの進捗を報告するとともに、現時点での研究テーマを設定する。
第2回	研究スケジュールの確認	今後の研究に向けたスケジュールを設定し、共有する。
第3回	先行研究の報告	各自の調査に基づいた先行研究についてその内容を報告し、議論する。
第4回	先行研究の分析	各自の研究において主要な先行研究が、各研究領域でどのように位置付けられているのかを検討する。
第5回	リサーチ・クエスチョン（問い）の設定	よいリサーチ・クエスチョンとは何かを学ぶ。
第6回	仮説の検討	リサーチ・クエスチョンに対する暫定的な答えをいかに導くかを指導する。
第7回	リサーチ・クエスチョン（問い）と仮説の報告	各自の設定したリサーチ・クエスチョンと仮説について相互に批判的な検討を加える。
第8回	目次の作成	暫定的な論文の目次作成を試みる。
第9回	リサーチ・プロポーザルの作成	用意されたフォーマットに沿って、リサーチ・プロポーザルを作成する。
第10回	リサーチ・プロポーザルの報告	各自のリサーチ・プロポーザルについて議論する。
第11回	論文の部分的な試作	暫定的に作成した目次に従い、そのうちの1章について執筆を試みる。
第12回	文章の推敲	執筆した文章について、構成、論理的整合性、文章表現などについて詳細な指導を行う。
第13回	リサーチ・プロポーザルの再検討	前回の報告に基づき各自リライต์したリサーチ・プロポーザルについて、相互に批判的な検討を加える。
第14回	研究課題の明確化	修士論文の執筆を進める上での課題を明確化する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

各自の研究関心に基づいて主体的に研究を進めること。

【テキスト（教科書）】

テキストは使用しない。

【参考書】

各院生の関心や資質、到達度などに応じて、その都度指示する。

【成績評価の方法と基準】

研究報告（60%）、議論への貢献（40%）とする。

【学生の意見等からの気づき】

該当なし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 比較政治学、コミュニティ政策、福祉政策

<研究テーマ> ポスト福祉国家時代の市民社会論、地域社会における社会的包摂、英国・スコットランドの地方自治・自治体内分権

<主要研究業績>

「スコットランドの地域評議会－制度の基本的構想とその機能の実際」名和田是彦編（2009）『コミュニティの自治－自治体内分権と協働の国際比較』pp.81-118、日本評論社

「スコットランドにおける権限移譲とジェンダー・クオータ」三浦まり・衛藤幹子編著（2014）『ジェンダー・クオータ－世界の女性議員はなぜ増えたのか』pp.203-26、明石書店

「地域社会における社会的連帯の再編：居場所づくりにみる三人称的連帯の可能性」金安岩男・牧瀬稔編著（2019）『都市・地域政策研究の現在』pp.131-42、地域開発研究所

【Outline and objectives】

This is a supervised course in which you work autonomously and independently under the guidance of your supervisor. The course helps to situate one's own work within the broader debates in the social sciences through discussions on some key concepts, theories and methods used in the field of public policy.

SOS600P1 - 501

論文研究指導 1 A

池田 寛二

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

修士論文または政策研究論文を作成するための研究指導を行う。

【到達目標】

修士論文または政策研究論文を完成させ、修士の学位取得に結実させること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、特に「DP1」は特に強く関連している。

【授業の進め方と方法】

演習。各回の報告に応じて次回の課題を指示し、その都度フィードバックしながら修論のための調査・研究の方向性を明確化してゆく。原則として、授業は対面で実施する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

なし/No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	演習の進め方の確認
第2回	演習	院生の報告と討論
第3回	演習	院生の報告と討論
第4回	演習	院生の報告と討論
第5回	演習	院生の報告と討論
第6回	演習	院生の報告と討論
第7回	演習	院生の報告と討論
第8回	演習	院生の報告と討論
第9回	演習	院生の報告と討論
第10回	演習	院生の報告と討論
第11回	演習	院生の報告と討論
第12回	演習	院生の報告と討論
第13回	演習	院生の報告と討論
第14回	演習	院生の報告と討論

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

院生各自の研究の実施。

【テキスト（教科書）】

研究テーマに応じて指示する。

【参考書】

研究テーマに応じて指示する。

【成績評価の方法と基準】

研究の進捗状況によって 100 %評価する。

【学生の意見等からの気づき】

この演習を通じて教員の指示とアドバイスを真摯に受けとめ、スケジュールの自己管理を怠らなければ、修士論文を完成させることができます。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞環境社会学、社会学理論、東南アジア地域研究

＜研究テーマ＞環境・エネルギー政策、地域政策

＜主要研究業績＞池田ほか編著、2012『環境をめぐる公共圏のダイナミズム』（法政大学出版局）等。

【Outline and objectives】

Supervising master's theses.

論文研究指導 1 B

池田 寛二

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

修士課程 1 年次の院生を対象に、修士論文または政策研究論文のテーマと執筆方針を確定させるための指導を行う。

【到達目標】

修士課程 2 年次に進んだら直ちに修士論文または政策研究論文の執筆に取り組めるレベルまで到達すること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、特に「DP1」は特に強く関連している。

【授業の進め方と方法】

演習。各回の報告に応じて次回の課題を指示し、その都度フィードバックしながら修論のための調査・研究の方向性を明確化してゆく。原則として、授業は対面で実施する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	オリエンテーション	演習の進め方の確認
第 2 回	演習	院生の報告と討論
第 3 回	演習	院生の報告と討論
第 4 回	演習	院生の報告と討論
第 5 回	演習	院生の報告と討論
第 6 回	演習	院生の報告と討論
第 7 回	演習	院生の報告と討論
第 8 回	演習	院生の報告と討論
第 9 回	演習	院生の報告と討論
第 10 回	演習	院生の報告と討論
第 11 回	演習	院生の報告と討論
第 12 回	演習	院生の報告と討論
第 13 回	演習	院生の報告と討論
第 14 回	演習	院生の報告と討論

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

院生各自の研究の実施。

【テキスト（教科書）】

研究テーマに応じて指示する。

【参考書】

研究テーマに応じて指示する。

【成績評価の方法と基準】

研究の進捗状況によって 100 % 評価する。

【学生の意見等からの気づき】

この演習を通じて教員の指示とアドバイスを真摯に受けとめ、スケジュールの自己管理を怠らなければ、修士論文を完成させることができます。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 環境社会学、社会学理論、東南アジア地域研究
<研究テーマ> 環境・エネルギー政策、地域政策
<主要研究業績> 池田ほか編著、2012『環境をめぐる公共圏のダイナミズム』（法政大学出版局）等。

【Outline and objectives】

For first year students of Master's course, instruction is held to fix the theme and the writing guideline for master theses or policy research papers.

SOS600P1 - 501

論文研究指導 1 A

糸久 正人

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

修士論文または政策研究論文を作成するための研究指導を行います。
主な対象は「イノベーション政策」になります。

【到達目標】

修士論文または政策研究論文を完成させ、修士の学位取得に結実させること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示された
どの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針
に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、
特に「DP1」は特に強く関連している。

【授業の進め方と方法】

演習形式で行います。受講生は与えられた課題を準備して臨み、積極的
にディスカッションに参加してください。また、他の受講生の発表に
対するコメントも求められます。講義の最後にフィードバック
を行います。なお、講義は原則対面で実施する予定です。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	演習の進め方の確認
第2回	演習	院生の報告と討論
第3回	演習	院生の報告と討論
第4回	演習	院生の報告と討論
第5回	演習	院生の報告と討論
第6回	演習	院生の報告と討論
第7回	演習	院生の報告と討論
第8回	演習	院生の報告と討論
第9回	演習	院生の報告と討論
第10回	演習	院生の報告と討論
第11回	演習	院生の報告と討論
第12回	演習	院生の報告と討論
第13回	演習	院生の報告と討論
第14回	演習	院生の報告と討論

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

院生各自の研究の実施。

【テキスト（教科書）】

研究テーマに応じて指示する。

【参考書】

研究テーマに応じて指示する。

【成績評価の方法と基準】

平常点 50 %、研究報告 50 %

【学生の意見等からの気づき】

特になし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

Technology & Innovation Management

Operation Management

<研究テーマ>

集合行為としてのコンソーシアムベースの標準化に関する研究

自動車産業を対象とした IoT 化に伴う技術ベースの変遷に関する
研究

日本的生産システムの海外移転と進化に関する研究

<主要研究業績>

糸久正人（2020）「次世代モビリティに向けたエコシステム間競争
：IoT 化に伴う価値創造と配分のジレンマ」『世界経済評論』
糸久正人（2020）「自動車産業に破壊的イノベーションは起きるの
か？」『赤門マネジメントレビュー』

Olejniczak, T., Miszczyński, M., and Itohisa, M. (2019)
“Between closure and Industry 4.0: strategies of Japanese
automotive manufacturers in Central and Eastern Europe in
reaction to labour market changes,” *International Journal of
Automotive Technology and Management*.

公文博・糸久正人（2019）『アフリカの日本企業—日本的経営生産
システムの移転可能性』時潮社。

糸久正人・安本雅典（2018）「コンセンサス標準をめぐる企業行動
：知識量が標準アーキテクチャの導入に及ぼす影響」『組織科学』

糸久正人（2018）「自動運転をめぐる技術知識とエコシステムの拡
大」『日本機械学会誌』

Olejniczak, T. and Itohisa, M. (2017) “Hybridization revisited:
New insights from the Evolutionary Approach,” *Journal of
Management and Business Administration*, vol.25, No.2.

糸久正人（2016）「複雑性の増大とコンセンサス標準：標準化活動
がもたらす競争優位」『研究技術計画』

富田純一・糸久正人（2015）『コア・テキスト生産管理』新世社

糸久正人（2012）「標準化に対するユーザーとサプライヤーのコン
センサス：コンフリクトを克服した互恵性の達成」『研究技術計画』

【Outline and objectives】

this lecture aims to provide you how to write a master thesis
and research policy paper according to your concern. We
mainly focus on Innovation policy.

SOS600P1 - 502

論文研究指導 1 B

糸久 正人

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

修士論文または政策研究論文を作成するための研究指導を行う。主な対象はイノベーション政策になります。

【到達目標】

修士論文または政策研究論文を完成させ、修士の学位取得に結実させること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、特に「DP1」は特に強く関連している。

【授業の進め方と方法】

演習形式で行います。受講生は与えられた課題を準備して臨み、積極的にディスカッションに参加してください。また、他の受講生の発表に対するコメントも求められます。講義の最後にフィードバックを行います。なお、講義は原則対面で実施する予定です。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	演習の進め方の確認
第2回	演習	院生の報告と討論
第3回	演習	院生の報告と討論
第4回	演習	院生の報告と討論
第5回	演習	院生の報告と討論
第6回	演習	院生の報告と討論
第7回	演習	院生の報告と討論
第8回	演習	院生の報告と討論
第9回	演習	院生の報告と討論
第10回	演習	院生の報告と討論
第11回	演習	院生の報告と討論
第12回	演習	院生の報告と討論
第13回	演習	院生の報告と討論
第14回	演習	院生の報告と討論

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

院生各自の研究の実施。

【テキスト（教科書）】

研究テーマに応じて指示する。

【参考書】

研究テーマに応じて指示する。

【成績評価の方法と基準】

平常点 50 %、研究報告 50 %

【学生の意見等からの気づき】

特になし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

Technology & Innovation Management

Operation Management

<研究テーマ>

集合行為としてのコンソーシアムベースの標準化に関する研究

自動車産業を対象とした IoT 化に伴う技術ベースの変遷に関する研究

日本の生産システムの海外移転と進化に関する研究

<主要研究業績>

糸久正人（2020）「次世代モビリティに向けたエコシステム間競争：IoT 化に伴う価値創造と配分のジレンマ」『世界経済評論』

糸久正人（2020）「自動車産業に破壊的イノベーションは起きるのか？」『赤門マネジメントレビュー』

Olejniczak, T., Miszczyński, M., and Itohisa, M. (2019) “Between closure and Industry 4.0: strategies of Japanese automotive manufacturers in Central and Eastern Europe in reaction to labour market changes,” *International Journal of Automotive Technology and Management*.

公文博・糸久正人（2019）『アフリカの日本企業—日本的経営生産システムの移転可能性』時潮社。

糸久正人・安本雅典（2018）「コンセンサス標準をめぐる企業行動：知識量が標準アーキテクチャの導入に及ぼす影響」『組織科学』

糸久正人（2018）「自動運転をめぐる技術知識とエコシステムの拡大」『日本機械学会誌』

Olejniczak, T. and Itohisa, M. (2017) “Hybridization revisited: New insights from the Evolutionary Approach,” *Journal of Management and Business Administration*, vol.25, No.2.

糸久正人（2016）「複雑性の増大とコンセンサス標準：標準化活動がもたらす競争優位」『研究技術計画』

富田純一・糸久正人（2015）『コア・テキスト生産管理』新世社

糸久正人（2012）「標準化に対するユーザーとサプライヤーのコンセンサス：コンフリクトを克服した互恵性の達成」『研究技術計画』

【Outline and objectives】

This lecture aims to provide you how to write a master thesis and research policy paper according to your concern. We mainly focus on Innovation policy.

SOS600P1 - 501

論文研究指導 1 A

加藤 寛之

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

修士課程の学生に対して学術的な論文を、どう書いていくかを目的とする科目として「論文研究指導 1A・1B」と「論文研究指導 2A・2B」は存在する。これらは、企業論領域の修士論文執筆に役立つ、データ収集とその分析を行い、政策的課題をめぐる問題についてのロジックを形成する。（いずれも、1は1年次、2は2年次に対応する。）

各人の問題関心を大切に、それぞれのテーマに最も適した教員が指導を担当するとともに、調査やデータ分析の手法についても、研究テーマとの適合性を重視しながら助言する。問題関心との関連で必要な資料の検索、調査テーマのしぼり込み、調査対象の選定、調査計画の作成、質問票・質問項目の作成、データ収集と整理、データ解析といった一連の作業を行う。原則として2年次においては、修士論文もしくは政策研究論文の完成を到達目標とする。

【到達目標】

アカデミックな修士論文の作成

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、特に「DP1」は特に強く関連している。

【授業の進め方と方法】

各院生の修士論文研究テーマを考慮して、以下に挙げるようなトピックを念頭に置いて、それぞれの進度に応じた指導、に最もふさわしい研究方法を選択し、組み合わせることを促進する。原則対面を実施し、フィードバックは毎回課題をだし、その都度コメントします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】**春学期**

回	テーマ	内容
1回	研究テーマ設定	同左・ディスカッション
2回	テーマを中心とした基礎的理解	同左・ディスカッション
3回	テーマを中心とした標準的理解	同左・ディスカッション
4回	論文構成の基礎的技法	同左・ディスカッション
5回	論文構成の応用的技法	同左・ディスカッション
6回	研究報告のレジュメの作成法	同左・ディスカッション
7回	研究テーマ企画の立案	同左・ディスカッション
8回	研究テーマ企画の修正	同左・ディスカッション
9回	先行研究の検討	同左・ディスカッション
10回	先行研究の整理	同左・ディスカッション
11回	リサーチ・クエスションの確定	同左・ディスカッション
12回	論文の理論的フレームワークの提示	同左・ディスカッション
13回	論文の研究対象の確認	同左・ディスカッション
14回	論文の構成の確認	同左・ディスカッション

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

論文作成上有益な情報、準備に関しては、担当教員が進度を確認しながら指示する。

【テキスト（教科書）】

各人のテーマに応じて、担当教員が提示する。

【参考書】

各人のテーマに応じて、担当教員が提示する。

【成績評価の方法と基準】

出席 20 %、調査研究活動および報告 80 %

【学生の意見等からの気づき】

社会人学生が多く、自社の状況を反映した意見交換が活発です。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 地域産業論・戦略論・企業論
<研究テーマ> 造船産業各社の戦略・国際分業・産業集積の研究
<主要研究業績>

「船舶開発と造船産業——ビジネス・システムの不確実性がもたらす複雑性へのマネジメント」藤本隆宏編『人工物複雑化の時代』（有斐閣）

「日本の造船産業における企業競争力の変動とその要因分析—国際競争力構図の変化と新たな取り組み—」柳町功他編著『韓日産業競争力比較研究』（三星経済研究所）

「造船産業の競争構図の変容と雁行形態論・塩路モデルの再検討」（『アジア経営研究』）

「日韓競争力転換のメカニズム—造船産業の事例—」（『組織科学』）

「資源蓄積の機能不全—成熟・衰退期への適応が再成長期の制約に化けるメカニズム」（『経営学論集』）

【Outline and objectives】

The courses [Thesis Research Guidance 1A and 1B] and [Thesis Research Guidance 2A and 2B] are designed to teach master's students how to write academic papers. In these courses, students collect and analyze data to help them write their master's theses in the area of corporate theory, and formulate a logic for the issues surrounding policy problems. (In both cases, 1 corresponds to the first year and 2 to the second year.)

Students will be guided by a faculty member who is most appropriate for each theme, and will be advised on the methods of research and data analysis, emphasizing their compatibility with the research theme. Students will be advised on how to search for necessary materials in relation to their problem interest, narrow down their research theme, and conduct research.

Translated with www.DeepL.com/Translator (free version)

論文研究指導 1 B

加藤 寛之

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

修士課程の学生に対して学術的な論文を、どう書いていくかを目的とする科目として「論文研究指導 1A・1B」と「論文研究指導 2A・2B」は存在する。これらは、企業論領域の修士論文執筆に役立つ、データ収集とその分析を行い、政策的課題をめぐる問題についてのロジックを形成する。（いずれも、1は1年次、2は2年次に対応する。）

各人の問題関心を大切に、それぞれのテーマに最も適した教員が指導を担当するとともに、調査やデータ分析の手法についても、研究テーマとの適合性を重視しながら助言する。問題関心との関連で必要な資料の検索、調査テーマのしぼり込み、調査対象の選定、調査計画の作成、質問票・質問項目の作成、データ収集と整理、データ解析といった一連の作業を行う。原則として2年次においては、修士論文もしくは政策研究論文の完成を到達目標とする。

【到達目標】

アカデミックな修士論文の作成

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、特に「DP1」は特に強く関連している。

【授業の進め方と方法】

各院生の修士論文研究テーマを考慮して、以下に挙げるようなトピックを念頭に置いて、それぞれの進度に応じた指導、に最もふさわしい研究方法を選択し、組み合わせることを促進する。

原則対面を実施し、フィードバックは毎回課題をだし、その都度コメントします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
1回	研究テーマ設定	同左・ディスカッション
2回	テーマを中心とした基礎的理解	同左・ディスカッション
3回	テーマを中心とした標準的理解	同左・ディスカッション
4回	論文構成の基礎的技法	同左・ディスカッション
5回	論文構成の応用的技法	同左・ディスカッション
6回	研究報告のレジュメの作成法	同左・ディスカッション
7回	研究テーマ企画の立案	同左・ディスカッション
8回	研究テーマ企画の修正	同左・ディスカッション
9回	先行研究の検討	同左・ディスカッション
10回	先行研究の整理	同左・ディスカッション
11回	リサーチ・クエスションの確定	同左・ディスカッション
12回	論文の理論的フレームワークの提示	同左・ディスカッション
13回	論文の研究対象の確認	同左・ディスカッション
14回	論文の構成の確認	同左・ディスカッション

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

論文作成上有益な情報、準備に関しては、担当教員が進度を確認しながら指示する。

【テキスト（教科書）】

各人のテーマに応じて、担当教員が提示する。

【参考書】

各人のテーマに応じて、担当教員が提示する。

【成績評価の方法と基準】

出席 20 %、調査研究活動および報告 80 %

【学生の意見等からの気づき】

該当なし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 地域産業論・戦略論・企業論

<研究テーマ> 造船産業各社の戦略・国際分業・産業集積の研究

<主要研究業績>

「船舶開発と造船産業——ビジネス・システムの不確実性がもたらす複雑性へのマネジメント」藤本隆宏編『人工物複雑化の時代』（有斐閣）

「日本の造船産業における企業競争力の変動とその要因分析—国際競争力構図の変化と新たな取り組み—」柳町功他編著『韓日産業競争力比較研究』（三星経済研究所）

「造船産業の競争構図の変容と雁行形態論・塩路モデルの再検討」（『アジア経営研究』）

「日韓競争力転換のメカニズム—造船産業の事例—」（『組織科学』）

「資源蓄積の機能不全—成熟・衰退期への適応が再成長期の制約に化けるメカニズム」（『経営学論集』）

【Outline and objectives】

This course is designed to teach master's students how to write an academic paper. In these courses, students collect and analyze data to help them write their master's theses in the area of corporate theory, and formulate a logic for the issues surrounding policy problems. (In both cases, 1 corresponds to the first year and 2 to the second year.)

Students will be guided by a faculty member who is most appropriate for each theme, and will be advised on the methods of research and data analysis, emphasizing their compatibility with the research theme. In addition, students are advised on the methods of survey and data analysis, emphasizing their compatibility with the research theme. The series of work includes searching for necessary materials in relation to the problem interest, narrowing down the research theme, selecting the research target, creating the research plan, creating the questionnaire and questionnaire items, collecting and organizing the data, and analyzing the data. In principle, the goal of the second year is to complete a master's thesis or policy research paper.

Translated with www.DeepL.com/Translator (free version)

SOS600P1 - 501

論文研究指導 1 A

白鳥 浩

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

修士課程の学生に対して学術的な論文を、どう書いていくかを目的とする科目として〔論文研究指導 1A・1B〕と〔論文研究指導 2A・2B〕は存在する。これらは、公共政策における政治学領域の修士論文執筆に役立つ、データ収集とその分析を行い、政策的課題をめぐる問題についてのロジックを形成する。（いずれも、1は1年次、2は2年次に対応する。）

各人の問題関心を大切に、それぞれのテーマに最も適した教員が指導を担当するとともに、調査やデータ分析の手法についても、研究テーマとの適合性を重視しながら助言する。問題関心との関連で必要な資料の検索、調査テーマのしぼり込み、調査対象の選定、調査計画の作成、質問票・質問項目の作成、データ収集と整理、データ解析といった一連の作業を行う。原則として2年次においては、修士論文もしくは政策研究論文の完成を到達目標とする。

【到達目標】

アカデミックな修士論文の作成

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、特に「DP1」は特に強く関連している。

【授業の進め方と方法】

各院生の修士論文研究テーマを考慮して、以下に挙げるようなトピックを念頭に置いて、それぞれの進度に応じた指導、に最もふさわしい研究方法を選択し、組み合わせさせて実施することを促進する。講義は対面を中心とする。講義計画は講義の展開により、若干の変更もありうる。変更の可能性もあるが対面講義を基本とする。また、学生へのフィードバックにおいては、適宜、講義、報告のたびに行うものとする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】**春学期**

回	テーマ	内容
1回	研究テーマ設定	同左
2回	テーマを中心とした基礎的理解	同左
3回	テーマを中心とした標準的理解	同左
4回	論文構成の基礎的技法	同左
5回	論文構成の応用的技法	同左
6回	研究報告のレジュメの作成法	同左
7回	研究テーマ企画の立案	同左
8回	研究テーマ企画の修正	同左
9回	先行研究の検討	同左
10回	先行研究の整理	同左
11回	リサーチ・クエスションの確定	同左
12回	論文の理論的フレームワークの提示	同左
13回	論文の研究対象の確認	同左
14回	論文の構成の確認	同左

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

論文作成上有益な情報、準備に関しては、担当教員が進度を確認しながら指示する。

【テキスト（教科書）】

各人のテーマに応じて、担当教員が提示する。

【参考書】

各人のテーマに応じて、担当教員が提示する。

【成績評価の方法と基準】

出席 20 %、調査研究活動および報告 80 %

【学生の意見等からの気づき】

該当なし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

現代政治分析（国際・国内比較）・政治理論

<研究テーマ>

1. 日本の現代政治
2. グローバリズムと国民国家の変容
3. 地方政治研究
4. 政党に関する理論
5. 現代政治のデモクラシー

<主要研究業績>白鳥浩『都市対地方の政治学』芦書房、2004年
白鳥浩『市民・選挙・国家—シュタイン・ロツカンの政治理論—』東海大学出版会、2002年

Hirosi Shiratori, "Le mouvement référendaire au Japon après la Guerre froide. Une analyse comparative inspirée de Rokkan," Revue française de science politique, vol.51, Numero.4, 2001.

【Outline and objectives】

This course aims to help student's thesis writing from the point of view of an academic standard. It offers many suggestions and insights on thesis writings of each student.

論文研究指導 1 B

白鳥 浩

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

修士課程の学生に対して学術的な論文を、どう書いていくかを目的とする科目として〔論文研究指導 1A・1B〕と〔論文研究指導 2A・2B〕は存在する。これらは、公共政策における政治学領域の修士論文執筆に役立つ、データ収集とその分析を行い、政策的課題をめぐる問題についてのロジックを形成する。（いずれも、1は1年次、2は2年次に対応する。）

各人の問題関心を大切に、それぞれのテーマに最も適した教員が指導を担当するとともに、調査やデータ分析の手法についても、研究テーマとの適合性を重視しながら助言する。問題関心との関連で必要な資料の検索、調査テーマのしぼり込み、調査対象の選定、調査計画の作成、質問票・質問項目の作成、データ収集と整理、データ解析といった一連の作業を行う。原則として2年次においては、修士論文もしくは政策研究論文の完成を到達目標とする。

【到達目標】

アカデミックな修士論文の作成

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、特に「DP1」は特に強く関連している。

【授業の進め方と方法】

各院生の修士論文研究テーマを考慮して、以下に挙げるようなトピックを念頭に置いて、それぞれの進度に応じた指導、に最もふさわしい研究方法を選択し、組み合わせさせて実施することを促進する。講義は対面を中心とする。講義計画は講義の展開により、若干の変更もありうる。変更の可能性もあるが対面講義を基本とする。また、学生へのフィードバックにおいては、適宜、報告、講義のたびに行うものとする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり/Yes

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
1回	研究テーマ設定	同左
2回	テーマを中心とした基礎的理解	同左
3回	テーマを中心とした標準的理解	同左
4回	論文構成の基礎的技法	同左
5回	論文構成の応用的技法	同左
6回	研究報告のレジュメの作成法	同左
7回	研究テーマ企画の立案	同左
8回	研究テーマ企画の修正	同左
9回	先行研究の検討	同左
10回	先行研究の整理	同左
11回	リサーチ・クエスションの確定	同左
12回	論文の理論的フレームワークの提示	同左
13回	論文の研究対象の確認	同左
14回	論文の構成の確認	同左

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

論文作成上有益な情報、準備に関しては、担当教員が進度を確認しながら指示する。

【テキスト（教科書）】

各人のテーマに応じて、担当教員が提示する。

【参考書】

各人のテーマに応じて、担当教員が提示する。

【成績評価の方法と基準】

出席 20%、調査研究活動および報告 80%

【学生の意見等からの気づき】

該当なし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

現代政治分析（国際・国内比較）・政治理論

<研究テーマ>

1. 日本の現代政治
2. グローバリズムと国民国家の変容
3. 地方政治研究
4. 政党に関する理論
5. 現代政治のデモクラシー

<主要研究業績>白鳥浩『都市対地方の政治学』芦書房、2004年
白鳥浩『市民・選挙・国家—シュタイン・ロツカンの政治理論—』東海大学出版会、2002年

Hirosi Shiratori, "Le mouvement référendaire au Japon après la Guerre froide. Une analyse comparative inspirée de Rokkan," Revue française de science politique, vol.51, Numero.4, 2001.

【Outline and objectives】

This course aims to help student's thesis writing from the point of view of an academic standard. It offers many suggestions and insights on thesis writings of each student.

SOS600P1 - 501

論文研究指導 1 A

関口 浩

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

財政学研究指導 1(学部で学んだ財政学の知識を出発点として、租税制度、予算制度等を詳細に調べながら、財政の理論、歴史、実際に関する知識を深め、修士論文執筆のための基盤を築く。)

【到達目標】

「財政学研究指導 1」では、学位論文執筆のテーマを決定し、実質的な執筆のための基礎文献を精読し、適切な財政分析をする力を養うことを目標としている。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、特に「DP1」は特に強く関連している。

【授業の進め方と方法】

1. 「財政学研究指導」は、学年別のほか、大学院財政学研究指導受講院生（博士課程・修士課程）および有志により、財政学をめぐる諸問題を中心に文献を輪読し、研究報告・討論等を行っている。「財政学研究指導 1」では学位論文執筆に役立つ文献を用いて、財政学の知識の深化を図っている。また、2年次等の学位論文執筆経過報告等に参加し、自らの学位論文執筆の方向性を模索する。
2. 新型コロナウイルス感染症対応が可能な場合は対面研究指導とする。また、研究指導冒頭で前時間の出席票相当提出物に受講者が記載した内容等に担当者が回答する。また個別に質問・照会したいことがある場合は指導中に担当者がそれを提起したとき、あるいは指導終了後に時間を設けるので、対面・遠隔ともに受講者はその場で解決するようにする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

なし/No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	財政学の文献輪読	財政学をなぜ学ぶのか
第 2 回	財政学の文献輪読	日本の財政事情
第 3 回	財政学の文献輪読	米国の財政事情
第 4 回	修士論文論題決定	学位論文論題の決定
第 5 回	財政学の文献輪読	社会保障、医療、教育の財政問題
第 6 回	修士論文構成検討	論題に基づいた論文構成の検討
第 7 回	財政学の文献輪読	財政学の分析方法（規範的分析）
第 8 回	財政学の文献輪読	財政学の分析方法（実証的分析）
第 9 回	財政学の文献輪読	所得税（所得概念）
第 10 回	財政学の文献輪読	所得税（課税単位）
第 11 回	財政学の文献輪読	所得税（累進性）
第 12 回	財政学の文献輪読	所得税（制度的問題点）
第 13 回	修士論文構成検討	受講生論評に基づく論文構成の修正
第 14 回	修士 2 年次修士論文中間報告予行練習聴講	各自の学位論文の財政学的側面の報告

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

特に学部で十分な「財政学」の基礎知識を習得していない者は毎回、前時間に指示した教科書該当箇所を 2 時間以上かけて丹念に通読し、分からない点を明らかにしておく。基礎知識のある者も同様に予習する。各回の研究指導終了後には予習時の不明点を解明したことを確認すべく、教科書、配付資料、外国文献を頼りに 2 時間以上かけて復習すること。

【テキスト（教科書）】

佐藤進・関口浩『財政学入門【新版】』同文館、令和元年。

【参考書】

1. Havey S. ROSEN & Ted GAYER, *Public Finance (10th ed)*, McGraw-Hill/Irwin, 2013.
2. Jonathan GRUBER, *Public Finance and Public Policy(6th ed)*, Worth Publisher, 2019.
3. その他の参考文献はその都度提示する。

【成績評価の方法と基準】

目安として、研究指導への取り組み状況 (50%)、論文報告 (50%) から総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

財政学関連の文献を意欲的に講読する

【学生が準備すべき機器他】

遠隔研究指導を受信したり、学習支援システムの掲示を閲覧・印刷等できる装置を、大学の貸与を含めて、受講者各自で準備されたい。

【その他の重要事項】

1. 本研究指導は、平成 14 年度に法政大学史上最高齢の持木邦子さん（税理士と主婦の二足のわらじに加えて財政学研究に挑まれた）が所属された、誇れる研究指導である。今は亡き皆さんの先輩である持木さんの意欲が息づく「財政学研究指導」でぜひとも質の良い学位論文執筆に挑んでほしい。
2. 社会学部シラバス「演習 1」、「演習 2」、「演習 3」（いずれも関口担当）も研究指導選定の際の参考にされるとよい。
3. なお、「論文研究指導 1 B」も併せて読んでいただきたい。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

財政学、地方財政論、租税論、教育財政論、財政学を基盤とした教育・福祉政策

【研究テーマ】

固定資産税をめぐる問題、教育財源としての財産税（固定資産税）、租税制度全般、地方税財政、日米教育財政

【研究業績（近年）】

「沖縄県財政の歳入構造」『公共政策志林』第 4 号、法政大学大学院公共政策研究科、平成 28 年。

「沖縄県財政と県税収入」『公共政策志林』第 5 号、法政大学大学院公共政策研究科、平成 29 年。

『財政学』（池宮城秀正編）ミネルヴァ書房、平成 31 年。

『財政学入門【新版】』（佐藤進と共著）同文館、令和元年。

「新型コロナウイルス感染症蔓延下の財政投融资」『生活経済政策』289 号、生活経済政策研究所、令和 3 年。

【Outline and objectives】

We acquire the theory and the history of public finance to build the base for master's thesis writing.

論文研究指導 1 B

関口 浩

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

財政学研究指導 1（学部で学んだ財政学の知識を出発点として、租税制度、予算制度等を詳細に調べながら、財政の理論、歴史、実際に関する知識を深め、修士論文執筆のための基礎を築く。）

【到達目標】

「財政学研究指導 1」では、学位論文執筆のテーマを決定し、実質的な執筆のための基礎文献を精読し、適切な財政分析をする力を養うことを目標としている。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、特に「DP1」は特に強く関連している。

【授業の進め方と方法】

1. 「財政学研究指導」は、学年別のほか、大学院財政学研究指導受講院生（博士課程・修士課程）および有志により、財政学をめぐる諸問題を中心に文献を輪読し、研究報告・討論等を行っている。「財政学研究指導 1」では学位論文執筆に役立つ文献を用いて、財政学の知識の深化を図っている。また、2年次等の学位論文執筆経過報告等に参加し、自らの学位論文執筆の方向性を模索する。

2. 新型コロナウイルス感染症対応が可能な場合は対面研究指導とする。また、研究指導冒頭で前時間の出席票相当提出物に受講者が記載した内容等に担当者が回答する。また個別に質問・照会したいことがある場合は指導中に担当者がそれを提起したとき、あるいは指導終了後に時間を設けるので、対面・遠隔ともに受講者はその場で解決するようにする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	修士論文構成検討	夏期休業中の成果の報告
第 2 回	財政学の文献輪読	法人税（法人の考え方と二重課税問題）
第 3 回	財政学の文献輪読	法人税（法人所得の算定）
第 4 回	修士論文構成検討	推敲中の論文構想の報告
第 5 回	修士論文構成検討	受講生の論評を踏まえた論文構想の報告
第 6 回	修士 2 年次修士論文経過報告聴講	2 年次の学位論文（甲）の財政学的側面の報告
第 7 回	財政学の文献輪読	法人税（法人税率）
第 8 回	財政学の文献輪読	法人税（ハーバーガーの法人税転嫁論）
第 9 回	財政学の文献輪読	事業税
第 10 回	修士論文構成検討	目次の再検討
第 11 回	修士論文構成検討	内容の再検討
第 12 回	修士 2 年次修士論文最終報告案聴講	2 年次の学位論文（乙）の財政学的側面の報告
第 13 回	修士論文中間報告予行	受講生の論題に基づく報告
第 14 回	修士論文中間報告予行	受講生の論題に基づく再報告

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

特に学部で十分な「財政学」の基礎知識を習得していない者は毎回、前時間に指示した教科書該当箇所を 2 時間以上かけて丹念に通読し、分からない点を明らかにしておく。基礎知識のある者も同様に予習する。各回の研究指導終了後には予習時の不明点を解明したことを確認すべく、教科書、配付資料、外国文献を頼りに 2 時間以上かけて復習すること。

【テキスト（教科書）】

佐藤進・関口浩『財政学入門【新版】』同文館、令和元年。

【参考書】

1. Havey S. ROSEN & Ted GAYER, *Public Finance (10th ed)*, McGraw-Hill/Irwin, 2013.
2. Jonathan GRUBER, *Public Finance and Public Policy (6th ed)*, Worth Publisher, 2019.
3. その他の参考文献はその都度提示する。

【成績評価の方法と基準】

目安として、研究指導への取り組み状況（50 %）、論文報告（50 %）から総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

財政学関連の文献を意欲的に講読する。

【学生が準備すべき機器他】

遠隔研究指導を受信したり、学習支援システムの掲示を閲覧・印刷等できる装置を、大学の貸与を含めて、受講者各自で準備されたい。

【その他の重要事項】

1. 本研究指導は、平成 14 年度に法政大学史上最高齢の持木邦子さん（税理士と主婦の二足のわらじに加えて財政学研究に挑まれた）が所属された、誇れる研究指導である。今は亡き皆さんの先輩である持木さんの意欲が息づく「財政学研究指導」でぜひとも質の良い学位論文執筆に挑んでほしい。
2. 社会学部シラバス「演習 1」、「演習 2」、「演習 3」（いずれも関口担当）も研究指導選定の際の参考にされるとよい。
3. なお、「論文研究指導 1 A」も併せて読んでいただきたい。
4. 財政学の文献講読の教材は受講生の希望により変更もあり得る。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

財政学、地方財政論、租税論、教育財政論、財政学を基盤とした教育・福祉政策

【研究テーマ】

固定資産税をめぐる問題、教育財源としての財産税（固定資産税）、租税制度全般、地方税財政、日米教育財政

【研究業績（近年）】

「沖縄県財政の歳入構造」『公共政策志林』第 4 号、法政大学大学院公共政策研究科、平成 28 年。

「沖縄県財政と県税収入」『公共政策志林』第 5 号、法政大学大学院公共政策研究科、平成 29 年。

『財政学』（池宮城秀正編）ミネルヴァ書房、平成 31 年。

『財政学入門【新版】』（佐藤進と共著）同文館、令和元年。

「新型コロナウイルス感染症蔓延下の財政投融资」『生活経済政策』289 号、生活経済政策研究所、令和 3 年。

【Outline and objectives】

We acquire the theory and the history of public finance to build the base for master's thesis writing.

SOS600P1 - 501

論文研究指導 1 A

多田 和美

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

修士課程 1 年次の院生を対象に、修士論文または政策研究論文を作成するための研究指導を行います。

【到達目標】

本授業では、次の 3 点に到達することを目標とします。

- 1) 2 年次修了までに修士論文を完成できる。
- 2) 厳密な研究の方法論にもとづき学术论文を執筆できる。
- 3) 設定された課題について実証的に分析できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、特に「DP1」は特に強く関連している。

【授業の進め方と方法】

対面による演習形式を中心に実施し、各院生の研究テーマと研究の進捗状況に応じて指導します。院生による研究報告とそれにもとづく院生間および教員とのディスカッションにより、研究を深化させていきます。なお、授業中に提示した課題や論点は、随時、解説（フィードバック）します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション	オリエンテーション
第 2 回	学术论文の作法①	教員による解説とディスカッション
第 3 回	学术论文の作法②	教員による解説とディスカッション
第 4 回	研究の方法論①	院生による発表とディスカッション
第 5 回	研究の方法論②	院生による発表とディスカッション
第 6 回	研究課題の発見①	院生による発表とディスカッション
第 7 回	研究課題の発見②	院生による発表とディスカッション
第 8 回	研究課題の発見③	院生による発表とディスカッション
第 9 回	研究課題の発見④	院生による発表とディスカッション
第 10 回	研究計画①	院生による発表とディスカッション
第 11 回	研究計画②	院生による発表とディスカッション
第 12 回	先行研究の検討①	院生による発表とディスカッション
第 13 回	先行研究の検討②	院生による発表とディスカッション
第 14 回	先行研究の検討③	院生による発表とディスカッション

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

修士論文の完成に向けて、入念な準備学習と復習といった日常的な学習の積み重ねが重要です。

【テキスト（教科書）】

教科書は指定しません。

【参考書】

田村正紀（2006）『リサーチ・デザイン』白桃書房。

【成績評価の方法と基準】

研究の進捗状況：80%、ディスカッションへの貢献度：20%で評価します。

【学生の意見等からの気づき】

随時、院生と意見交換し、授業の改善に努めます。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

国際経営論

<研究テーマ>

国際研究開発、新興国市場戦略

<主要研究業績>

法政大学学術研究データベースの担当教員のサイトを参照してください。

<http://kenkyu-web.i.hosei.ac.jp/Profiles/107/0010650/profile.html>

【Outline and objectives】

The aim of this course is to provide research guidance for writing a master's thesis.

論文研究指導 1 B

多田 和美

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

修士課程 1 年次の院生を対象に、修士論文または政策研究論文を作成するための研究指導を行います。

【到達目標】

本授業では、次の 3 点に到達することを目標とします。

- 1) 2 年次修了までに修士論文を完成できる。
- 2) 厳密な研究の方法論にもとづき学术论文を執筆できる。
- 3) 設定された課題について実証的に分析できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、特に「DP1」は特に強く関連している。

【授業の進め方と方法】

対面による演習形式を中心に実施し、各院生の研究テーマと研究の進捗状況に応じて指導します。院生による研究報告とそれにもとづく院生間および教員とのディスカッションにより、研究を深化させていきます。なお、授業中に提示した課題や論点は、随時、解説（フィードバック）します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	先行研究の課題①	院生による発表とディスカッション
第 2 回	先行研究の課題②	院生による発表とディスカッション
第 3 回	理論的枠組①	院生による発表とディスカッション
第 4 回	理論的枠組②	院生による発表とディスカッション
第 5 回	実証研究①	院生による発表とディスカッション
第 6 回	実証研究②	院生による発表とディスカッション
第 7 回	実証研究③	院生による発表とディスカッション
第 8 回	実証研究④	院生による発表とディスカッション
第 9 回	実証研究⑤	院生による発表とディスカッション
第 10 回	実証研究⑥	院生による発表とディスカッション
第 11 回	実証研究⑦	院生による発表とディスカッション
第 12 回	実証研究⑧	院生による発表とディスカッション
第 13 回	実証研究⑨	院生による発表とディスカッション
第 14 回	中間報告	院生による発表とディスカッション

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

修士論文の完成に向けて、入念な準備学習と復習といった日常的な学習の積み重ねが重要です。

【テキスト（教科書）】

特に指定しません。

【参考書】

田村正紀（2006）『リサーチ・デザイン』白桃書房。

この他、適宜提示します。

【成績評価の方法と基準】

研究の進捗状況：80%、ディスカッションへの貢献度：20%で評価します。

【学生の意見等からの気づき】

随時、院生と意見交換し、授業の改善に努めます。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

国際経営論

<研究テーマ>

国際研究開発、新興国市場戦略

<主要研究業績>

法政大学学術研究データベースの担当教員のサイトを参照してください。

<http://kenkyu-web.i.hosei.ac.jp/Profiles/107/0010650/profile.html>

【Outline and objectives】

The aim of this course is to provide research guidance for writing a master's thesis.

SOS600P1 - 501

論文研究指導 1 A

谷本 有美子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

修士1年の院生を対象とする。院生は、修士論文作成のために必要な資料収集方法や準備作業等について基礎的な知識を身につけ、調査研究計画を作成する。

【到達目標】

- ・ 学術論文の技法や資料収集の方法についての知識を習得する
- ・ 先行研究を踏まえて、研究テーマの論点提起ができる
- ・ 論文構成に即した調査研究計画を組み立てる

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、特に「DP1」は特に強く関連している。

【授業の進め方と方法】

この授業は原則対面で行う。

論文作成のための基礎的な情報提供を行いながら、各院生の研究テーマの決定と研究計画作成までの過程を指導する。院生が相互に学び合う機会として適宜、演習を取り入れていく。

発表やレポート等に対する講評は適宜行い、授業内で全体にフィードバックする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】**春学期**

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	学術論文の目的や特質を理解した上で、院生の論文作成目的を確認する
第2回	研究関心の表明	院生各自が現時点で論文テーマと考えている問題について、レジュメを作成して報告する
第3回	研究テーマの仮決定	研究関心事項を整理し研究テーマを仮決定する
第4回	資料探索の基礎	図書館やデータベース等を活用した基本的な資料の探索方法について学ぶ
第5回	資料探索の実践	仮決定した研究テーマに関連する資料を探索し、リストアップする
第6回	主要な先行研究の調査	院生の研究テーマと関連する先行研究を抽出する
第7回	主要な先行研究の報告	主要な先行研究の概要を報告する
第8回	論文構成の基礎	論文の構成や体裁、文章等の基本を学ぶ
第9回	問題認識の文章化	仮決定した研究テーマについて、先行研究を踏まえた問題認識を文章化する
第10回	調査研究事項の整理	調査研究の対象事項を整理する
第11回	研究テーマの決定	各自の研究テーマを決定する
第12回	関連文献リストの作成	論文テーマに関連した文献のリストを作成する
第13回	論文作成の作業整理	論文作成に必要な作業を抽出、整理する
第14回	調査研究計画の確定	調査研究計画を確定する

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

修士論文の作成に必要な調査、資料や文献の収集等の準備作業を行う。授業内報告のレジュメを作成する。

【テキスト（教科書）】

テキストは使用しない。

【参考書】

先行研究調査の必要に応じて、適宜指示する。

【成績評価の方法と基準】

授業内報告 40%、討議への参加姿勢 30%、課題の提出 30%の総合評価とする。

【学生の意見等からの気づき】

研究の進捗状況に応じて、適宜、文献等の情報提供を行う。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 行政学、地方自治、市民自治

<研究テーマ>

中央政府における地方自治、国による自治体統制、人口減少時代の自治体政策と市民自治、大都市行政区の民主的統制

<主要研究業績> 「地方自治の責任部局」の研究－その存続メカニズムと軌跡 [1947-2000] (2019) 公人の友社

「『透明性』・『誠実性』・『戦術性』－“転職”を迫られる地方公務員」(2001)『分権社会と協働』（共著）ぎょうせい

「国による『上から』の自治体統制の持続と変容」(2008)『分権改革の動態』（共著）東京大学出版会

「大都市行政区の『区民会議』と市民参加のアジェンダ－神奈川県内の指定都市を題材に」(2016)『横浜国立大学論叢 人文科学系列』第67巻第1号

【Outline and objectives】

This seminar is intended for the graduate students in the first year of master course. Graduate students acquire basic knowledge on collecting data and on preparation for the master's thesis, then make a research plan.

SOS600P1 - 502

論文研究指導 1 B

谷本 有美子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

修士1年の院生を対象とする。院生は、修士論文作成のために必要な技法を習得し、先行研究や資料を収集しながら論文の枠組みを構築する。

【到達目標】

- ・ 学術論文作成の技法を習得すること
- ・ 修士論文作成に必要な先行研究や資料を収集整理すること
- ・ 調査研究をもとに修士論文の枠組みをつくること

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、特に「DP1」は特に強く関連している。

【授業の進め方と方法】

授業は原則対面で行う。

春学期に確定した研究計画に沿って、院生が進めている研究内容について報告を受けながら、修士論文の枠組みづくりを指導する。小論文による報告を通じて、文章の指導を行う。院生相互が学び合う機会として適宜、演習を取り入れる。発表やレポート等に対する講評は適宜行い、授業内で全体にフィードバックする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	調査研究の報告①	研究テーマに即した調査研究内容について、院生が報告し、全体で討議する
第2回	論文の枠組みと目次の作成	現時点で予定した素材をもとに修士論文の枠組みと目次を作成する
第3回	先行研究に基づく報告	先行研究や資料から得た知見とともに研究課題を報告する
第4回	小論文の報告①	論文の一部を構成する内容について小論文を作成し、報告する
第5回	小論文の推敲	実際に書いた小論文を基に論述のスタイルや体裁等を確認する
第6回	調査研究の報告②	研究テーマに即した調査研究内容について、院生が報告し、全体で討議する
第7回	小論文の報告②	論文の一部を構成する内容について小論文を作成し、報告する
第8回	調査研究の報告③	研究テーマに即した調査研究内容について、院生が報告し、全体で討議する
第9回	小論文の報告③	論文の一部を構成する内容について小論文を作成し、報告する
第10回	調査研究の報告④	研究テーマに即した調査研究内容について、院生が報告し、全体で討議する
第11回	小論文の報告④	論文の一部を構成する内容について小論文を作成し、報告する
第12回	理論枠組みの検討	ここまでに得られた素材をもとに、論文の理論枠組みについて検討する
第13回	研究課題の整理	この時点で不足している調査研究や文献資料収集の状況を整理する
第14回	論文構成の修正	1年次終了時までの進捗を踏まえて、論文の構成を修正する

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

修士論文の作成に必要な調査、資料や文献の収集等の準備作業を進める。調査研究の報告準備や小論文を作成する。

【テキスト（教科書）】

テキストは使用しない。

【参考書】

論文作成の必要に応じて、適宜指示する。

【成績評価の方法と基準】

授業内報告 40%、討議への参加姿勢 30%、課題の提出 30%の総合評価とする。

【学生の意見等からの気づき】

研究の進捗状況に応じて、適宜、文献等の情報提供を行う。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 行政学、地方自治、市民自治

<研究テーマ>

中央政府における地方自治、国による自治体統制、人口減少時代の自治体政策と市民自治、大都市行政区の民主的統制

<主要研究業績>

『「地方自治の責任部局」の研究－その存続メカニズムと軌跡 [1947-2000]』(2019) 公人の友社
『「透明性」・「誠実性」・「戦術性」－“転職”を迫られる地方公務員』(2001) 『分権社会と協働』（共著）ぎょうせい
『国による「上から」の自治体統制の持続と変容』（2008）『分権改革の動態』（共著）東京大学出版会
『大都市行政区の「区民会議」と市民参加のアジェンダ－神奈川県内の指定都市を題材に』（2016）『横浜市立大学論叢 人文科学系列』第67巻第1号

【Outline and objectives】

This seminar is intended for the graduate students in the first year of master course. Graduate students acquire the techniques necessary for the master's thesis and construct a framework for the thesis while collecting preceding studies and materials.

SOS600P1 - 501

論文研究指導 1 A

中筋 直哉

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

修士論文執筆の個別指導

【到達目標】

修士論文の2年間の執筆過程の1年次として、十分な知識と研究能力を習得する

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、特に「DP1」は特に強く関連している。

【授業の進め方と方法】

教室で対面で実施（予定）。個別面談と履修者全員による演習形式の授業の組み合わせによって、地域社会学、都市社会学、農村社会学の立場からみた、公共政策と市民活動、コミュニティ形成の連携に関する研究と論文制作の方法を指導する。提出物については個別にフィードバックする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】**春学期**

回	テーマ	内容
1	顔合わせ	各自の関心の提示と相互評価
2	1人目の個別指導 1	テーマ設定に関する指導
3	1人目の個別指導 2	文献調査に関する指導
4	1人目の個別指導 3	データ収集に関する指導
5	2人目の個別指導 1	テーマ設定に関する指導
6	2人目の個別指導 2	文献調査に関する指導
7	2人目の個別指導 3	データ収集に関する指導
8	3人目の個別指導 1	テーマ設定に関する指導
9	3人目の個別指導 2	文献調査に関する指導
10	3人目の個別指導 3	データ収集に関する指導
11	4人目の個別指導 1	テーマ設定に関する指導
12	4人目の個別指導 2	文献調査に関する指導
13	4人目の個別指導 3	データ収集に関する指導
14	全員演習	各自の論文テーマに関する討論

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

各回指導の材料となるレジュメを事前に準備し、教員にメール等で提出する。事後、指導に基づく研究の修正状況を教員にメール等で報告する。本授業の準備・復習時間は各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

各回指導中に適宜指示

【参考書】

各回指導中に適宜指示

【成績評価の方法と基準】

個別指導や演習での研究の進展度とその表現 100 %。

【学生の意見等からの気づき】

各自の問題関心により共感的に接するよう努める

【学生が準備すべき機器他】

学習支援システムへのアクセスが必須。

【担当教員の専門分野等】

< 専門領域 > 地域社会学

< 研究テーマ > 地域社会の構造分析

< 主要研究業績 > 『よくわかる都市社会学』（2013, ミネルヴァ書房）、『群衆の居場所』（2005, 新曜社）

【Outline and objectives】

This seminar aims to prepare student's master thesis by face to face direction and group discussion.

論文研究指導 1 B

中筋 直哉

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

修士論文執筆の個別指導

【到達目標】

修士論文の2年間の執筆過程の1年次として、十分な知識と研究能力を習得する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、特に「DP1」は特に強く関連している。

【授業の進め方と方法】

教室で対面で実施（予定）。個別面談と履修者全員による演習形式の授業の組み合わせによって、地域社会学、都市社会学、農村社会学の立場からみた、公共政策と市民活動、コミュニティ形成の連携に関する研究と論文制作の方法を指導する。提出物については個別にフィードバックする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
1	1 人目の個別指導 1	理論に関する指導
2	1 人目の個別指導 2	研究方法に関する指導
3	1 人目の個別指導 3	政策提言に関する指導
4	2 人目の個別指導 1	理論に関する指導
5	2 人目の個別指導 2	研究方法に関する指導
6	2 人目の個別指導 3	政策提言に関する指導
7	3 人目の個別指導 1	理論に関する指導
8	3 人目の個別指導 2	研究方法に関する指導
9	3 人目の個別指導 3	政策提言に関する指導
10	4 人目の個別指導 1	理論に関する指導
11	4 人目の個別指導 2	研究方法に関する指導
12	4 人目の個別指導 3	政策提言に関する指導
13	全員演習	各自の論文構想をめぐる討論
14	中間報告会での報告	中間報告会での報告に関する討論

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

各回指導の材料となるレジュメを事前に準備し、教員にメール等で提出する。事後、指導に基づく研究の修正状況を教員にメール等で報告する。さらに年度末に研究計画リポートを提出する。本授業の準備・復習時間は各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

各回指導中に適宜指示

【参考書】

各回指導中に適宜指示

【成績評価の方法と基準】

個別指導や演習での研究の進展度とその表現 30 %、中間報告会での報告の完成度 30 %、年度末リポート 40 %。

【学生の意見等からの気づき】

各自の問題関心により共感的に接するよう努める

【学生が準備すべき機器他】

学習支援システムへのアクセスが必須。

【担当教員の専門分野等】

< 専門領域 > 地域社会学

< 研究テーマ > 地域社会の構造分析

< 主要研究業績 > 『よくわかる都市社会学』（2013, ミネルヴァ書房）、『群衆の居場所』（2005, 新曜社）

【Outline and objectives】

This seminar aims to prepare student's master thesis by face to face direction and group discussion.

SOS600P1 - 503

論文研究指導 2 A

杉崎 和久

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

公共政策研究科の論文指導科目として、修士課程 2 年目の院生を対象に修士論文やリサーチペーパーを各自の設定した研究テーマに即してどのように取りまとめればいいのかを指導するものである。

【到達目標】

各自の論文を実際に書き切ることがもちろん大きな目標だが、そのまゝに、修士課程 1 年目の論文研究指導 1 の成果を踏まえて、引き続きの課題として、(1) それぞれが関心を持ち熱意を持って取組める研究テーマを確定すること、(2) その研究テーマを追求できる適切な理論枠組や方法を確定し習熟すること、(3) 論文というものの構成の仕方を理解しそれを実際に適用できること、(4) 必要な資料を収集したり先行研究をフォローしたり時の技法や留意点を理解しそれを実際に適用すること、を具体的な目標として取組む。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連している。

【授業の進め方と方法】

各院生の学習・研究の進捗に応じて進めていく。下に示す「授業計画」はあくまで目安であるけれども、まさに目安として、1 年間にどんなことを身につけたらいいかをあらかじめ知っておくために活用してもらいたい。

課題については、授業の中で発表、討論を行い、その中で講評を行う。

授業は原則「対面」で行うが、一部「リアルタイムオンライン授業」を行うこともある。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1.2 回	オリエンテーション	1 年目での成果を確認し、今年度の論文完成までのスケジュールの確認する
第 3.4 回	研究テーマと論文の方向性の確認	論文の方向性の検討する
第 5.6 回	論文の仮説と理論枠組の検討	論文の仮説と理論枠組を検討する
第 7.8 回	論文構成の検討	論文構成の検討する
第 9.10 回	論文の基本ルール	論文の形式上のルール、スタイルを把握する
第 11.12 回	研究進捗状況の報告	研究テーマ設定や作業をするための課題を報告する
第 13.14 回	研究計画の再考	研究進捗状況を踏まえて、夏季休暇期間の研究計画を再検討する

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

この科目の性質からして、まさに各院生が自分の論文に取組むことそのものであるのだが、具体的には、それぞれの回ごとに、「授業の到達目標」欄に示した 4 つの項目に沿って、具体的にこなしておくべき作業を指示する。特に、締切り間際に慌てるのではなく、11 月あたりで第 1 稿が完成しているように進めてもらいたい。

【テキスト（教科書）】

テキストは使用しない。

【参考書】

各院生の関心や資質、到達度などに応じて、その都度指示する。

【成績評価の方法と基準】

研究報告（60 %）、議論への貢献（40 %）

【学生の意見等からの気づき】

該当なし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>都市計画、市民参加手法

<研究テーマ>公共的意思決定における市民参加のあり方、住民主体のまちづくりを支える支援システム、まちづくりの現代史

<主要研究業績>『住民主体の都市計画』（分担執筆）学芸出版社、2009 年

「まちづくりセンターを取り巻く課題」『季刊まちづくり』2011 年 3 年

「参加のプロセスマネジメント」『地方自治職員研修』2013 年 9 月号

【Outline and objectives】

The purpose of this lecture is to create research ideas and to write articles.

論文研究指導 2 B

杉崎 和久

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

公共政策研究科の論文指導科目として、修士課程 2 年目の院生を対象に修士論文やリサーチペーパーを各自の設定した研究テーマに即してどのように取りまとめればいいのかを指導するものである。

【到達目標】

各自の論文を実際に書き切ることがもちろん大きな目標だが、そのまゝに、修士課程 1 年目の論文研究指導 1 の成果を踏まえて、引き続きの課題として、(1) それぞれが関心を持ち熱意を持って取組める研究テーマを確定すること、(2) その研究テーマを追求できる適切な理論枠組や方法を確定し習熟すること、(3) 論文というものの構成の仕方を理解しそれを実際に適用できること、(4) 必要な資料を収集したり先行研究をフォローしたり時の技法や留意点を理解しそれを実際に適用すること、を具体的な目標として取組む。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連している。

【授業の進め方と方法】

各院生の学習・研究の進捗に応じて進めていく。下に示す「授業計画」はあくまで目安であるけれども、まさに目安として、1 年間にどんなことを身につけたらいいかをあらかじめ知っておくために活用してもらいたい。

課題については、授業の中で発表、討論を行い、その中で講評を行う。

授業は原則「対面」で行うが、一部「リアルタイムオンライン授業」を行うこともある。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1.2 回	本格執筆に向けて	夏休みでの進展を踏まえて、提出までのスケジュールを確認し、論文の中身に関する現時点での考えを確認する。
第 3.4 回	研究推進上の悩みの解決	現時点で抱えている研究上の悩みを話してもらい、解決の方策を相談する。
第 5.6 回	研究進捗状況の報告と指導	研究の進捗状況を発表し、作業の方向性を確認する。
第 7.8 回	研究進捗状況の報告と指導	研究の進捗状況を発表し、作業の方向性を確認する。
第 9.10 回	研究進捗状況の報告と指導	研究の進捗状況を発表し、作業の方向性を確認する。
第 11.12 回	初稿の確認	論文の完成度を高めるための改善報告を確認する。
第 13.14 回	発表の準備	口述試験に向けた発表練習をする。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

この科目の性質からして、まさに各院生が自分の論文に取組むことそのものであるのだが、具体的には、それぞれの回ごとに、「授業の到達目標」欄に示した 4 つの項目に沿って、具体的に行なっておくべき作業を指示する。特に、締切り間際に慌てるのではなく、11 月あたりで第 1 稿が完成しているように進めてもらいたい。

【テキスト（教科書）】

テキストは使用しない。

【参考書】

各院生の関心や資質、到達度などに応じて、その都度指示する。

【成績評価の方法と基準】

研究報告（60%）、議論への貢献（40%）

【学生の意見等からの気づき】

該当なし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>都市計画、市民参加手法
<研究テーマ>公共的意思決定における市民参加のあり方、住民主体のまちづくりを支える支援システム、まちづくりの現代史
<主要研究業績>『住民主体の都市計画』（分担執筆）学芸出版社、2009 年「まちづくりセンターを取り巻く課題」『季刊まちづくり』2011 年 3 年「参加のプロセスマネジメント」『地方自治職員研修』2013 年 9 月号

【Outline and objectives】

The purpose of this lecture is to create research ideas and to write articles.

SOS600P1 - 503

論文研究指導 2 A

廣瀬 克哉

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

公共政策研究科の論文指導科目として、修士課程 2 年目の学生を対象に修士論文やリサーチペーパーを各自の設定した研究テーマに即してどのように取りまとめればいいのかを指導するものである。

【到達目標】

各自の論文を実際に書き上げることが最終的な目標だが、そのまえに、修士課程 1 年目の論文研究指導 1 の成果を踏まえて、引き続きの課題として、(1) それぞれが関心を持ち熱意を持って取り組める研究テーマを確定すること、(2) その研究テーマを追求できる適切な理論枠組や方法を確定し習熟すること、(3) 論文というものの構成の仕方を理解しそれを実際に適用できること、(4) 必要な資料を収集したり先行研究をフォローした時の技法や留意点を理解しそれを実際に適用すること、を具体的な目標として取り組む。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連している。

【授業の進め方と方法】

各履修者の学習・研究の進捗に応じて進めていく。下に示す「授業計画」はあくまで目安であるが、まさに目安として、1 年間にどんなことを身につけたらいいかをあらかじめ知っておくために活用してもらいたい。

各自の研究の進展に応じて、研究報告を行い、相互に議論を深めることを基本とする。

基本的には対面で行うことを予定しているが、感染状況によって Zoom によるオンラインに切りかえて行う場合がある。指導学生を登録した Google Classroom を設定する予定であり、発表資料等はそれを使って共有する。

学生へのフィードバックは授業内で行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	論文を完成させる心構え	1 年目での成果を確認し、今年度の論文完成までのスケジュールをイメージできるようにする。
第 2 回	研究テーマと論文の方向性の確認	論文の方向性とそれに利用する基本資料を示してもらい、指導を行なう。
第 3 回	論文の仮説と理論枠組	執筆を予定している論文の基本的な仮説と理論枠組を報告してもらい、指導を行なう。
第 4 回	資料探索	図書館、フィールド調査などを通じて、それぞれの論文構想に必要な資料の所在を確認し、論文執筆までの作業を計画する。
第 5 回	論文の構成	この時点での目次を作成してもらい、それを題材に、論文の構成の仕方、論述の順序などを考える。
第 6 回	文献リストの作成	論文執筆に必要な参考文献、先行研究のリスト化を行なう。
第 7 回	主要参考文献と理論枠組の彫琢	論文作成に当たってベーシックなものとして依拠している（あるいは批判の対象としている）文献を報告してもらい、論文の基本的な理論枠組について議論する。
第 8 回	主要資料の読み込み	論文作成上のもっとも重要な資料を題材に、それをどのように読み解いて論文に生かそうとしているかを報告してもらおう。
第 9 回	論文の基本ルール	論文を書くことへの意欲が高まった時期を捉えて、論文の形式上のスタイル、例えば、註の付け方とか文献表の作り方、更には学会誌への投稿の際の様々なルールなどについて、一通りの指導を行なう。
第 10 回	研究テーマ設定上の悩みの解決	それぞれの院生が持っている研究テーマ設定・推進上の悩みを聞き、解決の方策を考える。
第 11 回	論文の一部の試作	作業がもっとも進んでいる部分、あるいはもっとも書きやすい部分を、実際に書き下ろししてみる。構想することと実際に文章を書くことの間にはかなり大きな飛躍が必要である。これをこの時期に実感してもらおう。

第 12 回 論文の構想、仮説、理論枠組の確認

一部試作してもらった経験を踏まえて、あらためて構想、構想、理論枠組や報告してもらい、指導を行なう。

第 13 回 全体の構想と章立て

あらためて現段階の目次を作成してもらい、論文の構想を確認し、まだ準備が十分でない箇所を確認する。

第 14 回 論文執筆の展望

春学期の最後に当たり、これまでの指導を踏まえたスケジュールと夏休み中の予定について確認する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

この科目の性質からして、まさに各院生が自分の論文に取り組むことそのものであるのだが、具体的には、それぞれの回ごとに、「授業の到達目標」欄に示した 4 つの項目に沿って、具体的に行なっておくべき作業を指示する。特に、締切り間際に慌てるのではなく、11 月中には第 1 稿が完成しているように進めてもらいたい。

【テキスト（教科書）】

テキストは使用しない。

【参考書】

各履修者の関心や資質、到達度などに応じて、その都度指示する。

【成績評価の方法と基準】

「授業の到達目標」欄に記した 4 つの項目を果たしてまどの程度身につけたか、論文の執筆に向けた各回の指導内容をどのくらい実践できたか、を評価基準とする。

【学生の意見等からの気づき】

該当なし。

【Outline and objectives】

This is part of the research-training program for master course 3rd semester students working in the area of public policy studies. The workshop's principal objective is to foster intellectual exchange by showcasing work from leading and emerging scholars. The workshop will provide a forum in which research students can present their work, discuss the theoretical and methodological problems involved, discuss common challenges in conducting research in this area and obtain feedback on their work.

論文研究指導 2 B

廣瀬 克哉

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

公共政策研究科の論文指導科目として、修士課程 2 年目の学生を対象に修士論文やリサーチペーパーを各自の設定した研究テーマに即してどのように取りまとめていけばいいかを指導するものである。

【到達目標】

各自の論文を実際に書きあげることが最終的な目標だが、そのまえに、修士課程 1 年目の論文研究指導 1 の成果を踏まえて、引き続きの課題として、(1) それぞれが関心を持ち熱意を持って取組める研究テーマを確定すること、(2) その研究テーマを追求できる適切な理論枠組や方法を確定し習熟すること、(3) 論文というものの構成の仕方を理解しそれを実際に適用できること、(4) 必要な資料を収集したり先行研究をフォローした時の技法や留意点を理解しそれを実際に適用すること、を具体的な目標として取組む。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連している。

【授業の進め方と方法】

各履修者の学習・研究の進捗に応じて進めていく。下に示す「授業計画」はあくまで目安であるが、まさに目安として、1 年間にどんなことを身につけていくことが求められているのかをあらかじめ知っておくために活用してもらいたい。

学生へのフィードバックは授業内で行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	本格的な執筆に向けて	夏休みでの進展を踏まえて、提出までのスケジュールを確認し、論文の中身に関する現時点での考えを確認する。
第 2 回	英文サマリーの練習 その 1 試作	執筆が忙しくならないうちに、1 年目での練習を踏まえて英文サマリーの練習をしておく。
第 3 回	英文サマリーの練習 その 2 推敲	作ったサマリーを推敲し、サマリー程度の長さの英文なら自信を持ってかけるようにする。
第 4 回	主要な先行研究の検討	論文の完成に向けて、論文テーマとの関係で先行研究をどのように整理するかを報告してもらい、指導を行なう。
第 5 回	主要な資料の検討	論文にとってベーシックな意義を有する資料を取り上げ、その内容を報告してもらい、指導を行なう。
第 6 回	研究推進上の悩みの解決	現時点で抱えている研究上の悩みを話してもらい、解決の方策を相談する。
第 7 回	論文の理論的筋道の整理	ベーシックな情報が得られた段階で、あくまで暫定的なものではあるが、論文の全体を貫く仮説となる理論枠組を考えてもらい、指導を行なう。
第 8 回	論文の目次	あくまで暫定的なものだが、論文の目次を作成してみることで、研究テーマに関する認識を整理し深める。
第 9 回	論文の一部を書いてみる	論文の実体的な部分の一部を実際に執筆し、これを論理構成、文章表現等様々な観点から吟味し指導する。
第 10 回	文章の推敲	書いてみた論文の一部について、指導に基づいて一応完成させる。
第 11 回	第 1 稿の吟味	論文全体を一応書き通し、第 1 稿とする。これを題材に総括的に指導する。
第 12 回	第 1 稿の改善 その 1 解釈を深める	第 11 回の指導をもとに改稿したものにつき、特に文献資料の読み込みや調査データの解釈などを更に深める方向で考えていく。
第 13 回	第 1 稿の改善 その 2 全体を整理する	第 11 回で指導したものにつき、全体の構成や基本的な理論枠組の一貫性などに留意して指導を行なう。
第 14 回	進捗状況の確認	最終回に当たって、提出までの作業の確認と事務的な諸注意。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

この科目の性質からして、まさに各履修者が自分の論文に取組むことそのものであるのだが、具体的には、それぞれの回ごとに、「授業の到達目標」欄に示した 4 つの項目に沿って、具体的に行なっておくべき作業を指示する。特に、締切り間際に慌てるのではなく、11 月中には第 1 稿が完成しているように進めてもらいたい。

【テキスト（教科書）】

テキストは使用しない。

【参考書】

各院生の関心や資質、到達度などに応じて、その都度指示する。

【成績評価の方法と基準】

「授業の到達目標」欄に記した 4 つの項目を果たしてまたどの程度身につけたか、論文の執筆に向けた各回の指導内容をどのくらい実践できたか、を評価基準とする。

【学生の意見等からの気づき】

該当なし。

【Outline and objectives】

This is part of the research-training program for master course 4th semester students working in the area of public policy studies. The workshop's principal objective is to foster intellectual exchange by showcasing work from leading and emerging scholars. The workshop will provide a forum in which research students can present their work, discuss the theoretical and methodological problems involved, discuss common challenges in conducting research in this area and obtain feedback on their work.

SOS600P1 - 503

論文研究指導 2 A

淵元 初姫

備考（履修条件等）：

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

公共政策研究科の論文指導科目として、修士課程 2 年目の院生を対象に、修士論文の執筆を確実に進めるための指導を行うものである。

【到達目標】

院生は、1 年目に設定した各自の研究テーマに基づき、リサーチ・クエストション（問い）を明確にしなが、引き続き（1）先行研究の調査、（2）基本的な分析枠組や方法の習得、（2）社会科学一般における論文執筆上の作法の理解、のそれぞれを深めることを目標にする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連している。

【授業の進め方と方法】

各自の研究の進展に応じて、研究報告を行い、相互に議論を深めることを基本とする。報告に対しては、授業中に参加者全員による質疑・議論を行い、講評を行うことによってフィードバックする。

授業方式は原則として対面授業とする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	オリエンテーション	これまでの進捗を報告するとともに、リライトされたりリサーチ・プロポーザルを共有する。
第 2 回	研究スケジュールの確認	今後の研究に向けたスケジュールを設定し、共有する。
第 3 回	資料の所在の確認	文献リストを整理し、執筆に際して必要な資料の所在を明らかにする。
第 4 回	主要な先行研究の報告	論文を作成する上で最も重要な先行研究について、修士論文においてどのような位置付けで用いるのかを報告する。
第 5 回	研究倫理の理解	研究を遂行する上で留意すべき研究倫理について演習形式で学ぶ。
第 6 回	論文の部分的な試作	暫定的に設定された目次に従い、そのうちの 1 章について執筆を試みる。
第 7 回	文章の推敲	執筆した文章について、構成、論理的整合性、文章表現などについて詳細な指導を行う。
第 8 回	概要（要旨）の作成	草稿の執筆に先立ち、現時点における構想を元に、1,000 文字程度で修士論文の概要を表すことを試みる。
第 9 回	概要（要旨）の推敲	各自が執筆した概要を報告し、相互に検討しながら推敲する。
第 10 回	英文サマリー作成の基礎	英文サマリーの作成に関する基本的事項を学ぶ。
第 11 回	英文サマリーの執筆	各自の修士論文の概要を英文で執筆する。英文サマリーの推敲
第 12 回	英文サマリーの推敲	各自が執筆した英文サマリーを報告し、相互に検討しながら推敲する。
第 13 回	リサーチ・プロポーザルの報告	各自の研究の進捗に基づき、リライトしたりリサーチ・プロポーザルについて、相互に批判的な検討を加える。
第 14 回	研究課題の明確化	修士論文の執筆を進める上での課題を明確化する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

各自の研究関心に基づいて主体的に研究を進めること。

【テキスト（教科書）】

テキストは使用しない。

【参考書】

各院生の関心や資質、到達度などに応じて、その都度指示する。

【成績評価の方法と基準】

研究報告（60%）、議論への貢献（40%）とする。

【学生の意見等からの気づき】

該当なし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 比較政治学、コミュニティ政策、福祉政策

<研究テーマ> ポスト福祉国家時代の市民社会論、地域社会における社会的包摂、英国・スコットランドの地方自治・自治体内分権

<主要研究業績>

「スコットランドの地域評議会－制度の基本的構想とその機能の実際」名和田是彦編（2009）『コミュニティの自治－自治体内分権と協働の国際比較』pp.81-118、日本評論社

「スコットランドにおける権限移譲とジェンダー・クォータ」三浦まり・衛藤幹子編著（2014）『ジェンダー・クォータ－世界の女性議員はなぜ増えたのか』pp.203-26、明石書店

「地域社会における社会的連帯の再編：居場所づくりにみる三人称的連帯の可能性」金安岩男・牧瀬稔編著（2019）『都市・地域政策研究の現在』pp.131-42、地域開発研究所

【Outline and objectives】

This is a supervised course in which you work autonomously and independently under the guidance of your supervisor. The course helps to situate one's own work within the broader debates in the social sciences through discussions on some key concepts, theories and methods used in the field of public policy.

論文研究指導 2 B

淵元 初姫

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

公共政策研究科の論文指導科目として、修士課程 2 年目の院生を対象に、修士論文の執筆を完成させるための指導を行うものである。

【到達目標】

院生は、1 年目に設定した各自の研究テーマに基づき、リサーチ・クエスチョン（問い）を明確にしながら、引き続き（1）先行研究の調査、（2）基本的な分析枠組や方法の習得、（2）社会科学一般における論文執筆上の作法の理解、のそれぞれを深め、修士論文を完成させることを目標にする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連している。

【授業の進め方と方法】

各自の研究の進展に応じて、研究報告を行い、相互に議論を深めることを基本とする。報告に対しては、授業中に参加者全員による質疑・議論を行い、講評を行うことによってフィードバックする。
授業方式は原則として対面授業とする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	オリエンテーション	これまでの進捗を報告するとともに、提出までのスケジュールを確認する。
第 2 回	資料の所在の確認	文献リストを整理し、執筆に際して必要な資料の所在を明らかにする。
第 3 回	主要な資料の報告	論文を作成する上で最も重要な資料について、修士論文においてどのような位置付けで用いるのかを報告する。
第 4 回	主要な先行研究の報告	論文を作成する上で最も重要な先行研究について、修士論文においてどのような位置付けで用いるのかを報告する。
第 5 回	論文の目次の確認	現時点における論文の構成について報告する。
第 6 回	研究遂行上の問題点の解決	各自の研究遂行上の悩みを共有し、解決をはかる。
第 7 回	第 1 稿の執筆	修士論文全体を通して執筆を行う。
第 8 回	第 1 稿の推敲	執筆した文章について、構成、論理的整合性、文章表現などについて詳細な指導を行う。
第 9 回	第 2 稿の執筆	修士論文全体を通して執筆を行う。
第 10 回	第 2 稿の推敲	執筆した文章について、構成、論理的整合性、文章表現などについて詳細な指導を行う。
第 11 回	要旨の推敲	修士論文の要旨を推敲する。
第 12 回	進捗の確認	修士論文の提出に向けた事務的な諸注意を行う。
第 13 回	論点の整理	口述試験に向けた論点の整理を試みる。
第 14 回	論点に関する質疑	口述試験のための準備として、重要な論点について質疑を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

各自の研究関心に基づいて主体的に研究を進めること。

【テキスト（教科書）】

テキストは使用しない。

【参考書】

各院生の関心や資質、到達度などに応じて、その都度指示する。

【成績評価の方法と基準】

研究報告（60%）、議論への貢献（40%）とする。

【学生の意見等からの気づき】

該当なし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 比較政治学、コミュニティ政策、福祉政策

<研究テーマ> ポスト福祉国家時代の市民社会論、地域社会における社会的包摂、英国・スコットランドの地方自治・自治体内分権

<主要研究業績>

「スコットランドの地域評議会－制度の基本的構想とその機能の実際」名和田是彦編（2009）『コミュニティの自治－自治体内分権と協働の国際比較』pp.81-118、日本評論社

「スコットランドにおける権限移譲とジェンダー・クォータ」三浦まり・衛藤幹子編著（2014）『ジェンダー・クォータ－世界の女性議員はなぜ増えたのか』pp.203-26、明石書店

「地域社会における社会的連帯の再編：居場所づくりにみる三人称的連帯の可能性」金安岩男・牧瀬稔編著（2019）『都市・地域政策研究の現在』pp.131-42、地域開発研究所

【Outline and objectives】

This is a supervised course in which you work autonomously and independently under the guidance of your supervisor. The course helps to situate one's own work within the broader debates in the social sciences through discussions on some key concepts, theories and methods used in the field of public policy.

SOS600P1 - 503

論文研究指導 2 A

池田 寛二

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

修士課程 2 年次以上の院生を対象に、修士論文または政策研究論文を執筆するための研究指導を行う。

【到達目標】

修士論文または政策研究論文を完成させ、9 月か 3 月の修了時までには修士の学位取得に結実させること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、特に「DP2」は特に強く関連している。

【授業の進め方と方法】

演習。各回の報告に応じて次回の課題を指示し、その都度フィードバックしながら修論の執筆を指導する。原則として、授業は対面で実施する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	オリエンテーション	演習の進め方と各自の 1 年目の研究の進捗状況の確認
第 2 回	演習	院生の報告と討論
第 3 回	演習	院生の報告と討論
第 4 回	演習	院生の報告と討論
第 5 回	演習	院生の報告と討論
第 6 回	演習	院生の報告と討論
第 7 回	演習	院生の報告と討論
第 8 回	演習	院生の報告と討論
第 9 回	演習	院生の報告と討論
第 10 回	演習	院生の報告と討論
第 11 回	演習	院生の報告と討論
第 12 回	演習	院生の報告と討論
第 13 回	演習	院生の報告と討論
第 14 回	演習	9 月に提出する修士論文または政策研究論文の最終点検、後期の課題の確認

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

院生各自の研究の実施。

【テキスト（教科書）】

研究テーマに応じて指示する。

【参考書】

研究テーマに応じて指示する。

【成績評価の方法と基準】

研究の進捗状況によって 100 % 評価する。

【学生の意見等からの気づき】

この演習を通じて教員の指示とアドバイスを真摯に受けとめ、スケジュールの自己管理を怠らなければ、修士論文を完成させることができます。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>環境社会学、社会学理論、東南アジア地域研究
 <研究テーマ>環境・エネルギー政策、地域政策
 <主要研究業績>池田ほか編著、2012『環境をめぐる公共圏のダイナミズム』（法政大学出版局）等。

【Outline and objectives】

Supervising to write master's thesis or a policy research paper for students over second year of Master's course.

論文研究指導 2 B

池田 寛二

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

修士課程 2 年次以上の院生を対象に修士論文または政策研究論文を完成させるための研究指導を行う。

【到達目標】

修士論文または政策研究論文を完成させ、年度末の 3 月もしくは遅くとも次年度 9 月には修士の学位取得に結実させること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、特に「DP2」は特に強く関連している。

【授業の進め方と方法】

演習。各回の報告に応じて次回の課題を指示し、課題への対応の報告を受けてその都度フィードバックしながら修論の執筆を指導し完成させる。原則として、授業は対面で実施する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	オリエンテーション	演習の進め方と前期の到達点の確認
第 2 回	演習	院生の報告と討論
第 3 回	演習	院生の報告と討論
第 4 回	演習	院生の報告と討論
第 5 回	演習	院生の報告と討論
第 6 回	演習	院生の報告と討論
第 7 回	演習	院生の報告と討論
第 8 回	演習	院生の報告と討論
第 9 回	演習	院生の報告と討論
第 10 回	演習	院生の報告と討論
第 11 回	演習	院生の報告と討論
第 12 回	演習	院生の報告と討論
第 13 回	演習	院生の報告と討論
第 14 回	演習	修士論文または政策研究論文の最終点検

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

院生各自の研究の実施。

【テキスト（教科書）】

研究テーマに応じて指示する。

【参考書】

研究テーマに応じて指示する。

【成績評価の方法と基準】

研究の進捗状況によって 100 % 評価する。

【学生の意見等からの気づき】

この演習を通じて教員の指示とアドバイスを真摯に受けとめ、スケジュールの自己管理を怠らなければ、修士論文を完成させることができます。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>環境社会学、社会学理論、東南アジア地域研究
<研究テーマ>環境・エネルギー政策、地域政策
<主要研究業績>池田ほか編著、2012『環境をめぐる公共圏のダイナミズム』（法政大学出版局）等。

【Outline and objectives】

Supervising to complete master's thesis or a policy research paper for students over second year of Master's course.

SOS600P1 - 503

論文研究指導 2 A

白鳥 浩

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

修士課程の学生に対して学術的な論文を、どう書いていくかを目的とする科目として〔論文研究指導 1A・1B〕と〔論文研究指導 2A・2B〕は存在する。これらは、公共政策における政治学領域の修士論文執筆に役立つ、データ収集とその分析を行い、政策的課題をめぐる問題についてのロジックを形成する。（いずれも、1は1年次、2は2年次に対応する。）

各人の問題関心を大切に、それぞれのテーマに最も適した教員が指導を担当するとともに、調査やデータ分析の手法についても、研究テーマとの適合性を重視しながら助言する。問題関心との関連で必要な資料の検索、調査テーマのしぼり込み、調査対象の選定、調査計画の作成、質問票・質問項目の作成、データ収集と整理、データ解析といった一連の作業を行う。原則として2年次においては、修士論文もしくは政策研究論文の完成を到達目標とする。

【到達目標】

アカデミックな修士論文の作成

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、特に「DP2」は特に強く関連している。

【授業の進め方と方法】

各院生の修士論文研究テーマを考慮して、以下に挙げるようなトピックを念頭に置いて、それぞれの進度に応じた指導、に最もふさわしい研究方法を選択し、組み合わせさせて実施することを促進する。講義は対面を中心とする。講義計画は講義の展開により、若干の変更もありうる。変更の可能性もあるが対面講義を基本とする。また、学生へのフィードバックにおいては、適宜、報告、講義のたびに行うものとする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】**春学期**

回	テーマ	内容
1回	研究テーマ設定	同左
2回	テーマを中心とした基礎的理解	同左
3回	テーマを中心とした標準的理解	同左
4回	論文構成の基礎的技法	同左
5回	論文構成の応用的技法	同左
6回	研究報告のレジュメの作成法	同左
7回	研究テーマ企画の立案	同左
8回	研究テーマ企画の修正	同左
9回	先行研究の検討	同左
10回	先行研究の整理	同左
11回	リサーチ・クエスションの確定	同左
12回	論文の理論的フレームワークの提示	同左
13回	論文の研究対象の確認	同左
14回	論文の構成の確認	同左

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

論文作成上有益な情報、準備に関しては、担当教員が進度を確認しながら指示する。

【テキスト（教科書）】

各人のテーマに応じて、担当教員が提示する。

【参考書】

各人のテーマに応じて、担当教員が提示する。

【成績評価の方法と基準】

出席 20 %、調査研究活動および報告 80 %

【学生の意見等からの気づき】

該当なし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

現代政治分析（国際・国内比較）・政治理論

<研究テーマ>

1. 日本の現代政治
2. グローバリズムと国民国家の変容
3. 地方政治研究
4. 政党に関する理論
5. 現代政治のデモクラシー

<主要研究業績>白鳥浩『都市対地方の政治学』芦書房、2004年
白鳥浩『市民・選挙・国家—シュタイン・ロツカンの政治理論—』東海大学出版会、2002年

Hirosi Shiratori, "Le mouvement référendaire au Japon après la Guerre froide. Une analyse comparative inspirée de Rokkan," Revue française de science politique, vol.51, Numero.4, 2001.

【Outline and objectives】

This course aims to help student's thesis writing from the point of view of an academic standard. It offers many suggestions and insights on thesis writings of each student.

論文研究指導 2 B

白鳥 浩

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

修士課程の学生に対して学術的な論文を、どう書いていくかを目的とする科目として〔論文研究指導 1A・1B〕と〔論文研究指導 2A・2B〕は存在する。これらは、公共政策における政治学領域の修士論文執筆に役立つ、データ収集とその分析を行い、政策的課題をめぐる問題についてのロジックを形成する。（いずれも、1は1年次、2は2年次に対応する。）

各人の問題関心を大切に、それぞれのテーマに最も適した教員が指導を担当するとともに、調査やデータ分析の手法についても、研究テーマとの適合性を重視しながら助言する。問題関心との関連で必要な資料の検索、調査テーマのしぼり込み、調査対象の選定、調査計画の作成、質問票・質問項目の作成、データ収集と整理、データ解析といった一連の作業を行う。原則として2年次においては、修士論文もしくは政策研究論文の完成を到達目標とする。

【到達目標】

アカデミックな修士論文の作成

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、特に「DP2」は特に強く関連している。

【授業の進め方と方法】

各院生の修士論文研究テーマを考慮して、以下に挙げるようなトピックを念頭に置いて、それぞれの進度に応じた指導、に最もふさわしい研究方法を選択し、組み合わせさせて実施することを促進する。講義は対面を中心とする。講義計画は講義の展開により、若干の変更もありうる。変更の可能性もあるが対面講義を基本とする。また、学生へのフィードバックにおいては、適宜、講義、報告のたびに行うものとする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり/Yes

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
1回	研究テーマ設定	同左
2回	テーマを中心とした基礎的理解	同左
3回	テーマを中心とした標準的理解	同左
4回	論文構成の基礎的技法	同左
5回	論文構成の応用的技法	同左
6回	研究報告のレジュメの作成法	同左
7回	研究テーマ企画の立案	同左
8回	研究テーマ企画の修正	同左
9回	先行研究の検討	同左
10回	先行研究の整理	同左
11回	リサーチ・クエスションの確定	同左
12回	論文の理論的フレームワークの提示	同左
13回	論文の研究対象の確認	同左
14回	論文の構成の確認	同左

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

論文作成上有益な情報、準備に関しては、担当教員が進度を確認しながら指示する。

【テキスト（教科書）】

各人のテーマに応じて、担当教員が提示する。

【参考書】

各人のテーマに応じて、担当教員が提示する。

【成績評価の方法と基準】

出席 20%、調査研究活動および報告 80%

【学生の意見等からの気づき】

該当なし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

現代政治分析（国際・国内比較）・政治理論

<研究テーマ>

1. 日本の現代政治
2. グローバリズムと国民国家の変容
3. 地方政治研究
4. 政党に関する理論
5. 現代政治のデモクラシー

<主要研究業績>白鳥浩『都市対地方の政治学』芦書房、2004年
白鳥浩『市民・選挙・国家—シュタイン・ロッカンの政治理論—』東海大学出版会、2002年

Hirosi Shiratori, "Le mouvement référendaire au Japon après la Guerre froide. Une analyse comparative inspirée de Rokkan," Revue française de science politique, vol.51, Numero.4, 2001.

【Outline and objectives】

This course aims to help student's thesis writing from the point of view of an academic standard. It offers many suggestions and insights on thesis writings of each student.

SOS600P1 - 503

論文研究指導 2 A

関口 浩

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

財政学研究指導 2（「財政学研究指導 1」で習得した財政学の知識を基盤にして、租税制度と租税法、予算制度、公債制度等、あるいは教育制度と財政、社会保障制度と財政といった受講生の修士論文の論題に即した論文執筆指導を行う。）

【到達目標】

「財政学研究指導 2」では、学位論文執筆過程で適宜、報告をしてもらい、期限までに財政学的分析を駆使した良質の学位論文を執筆し終えることを目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、特に「DP2」は特に強く関連している。

【授業の進め方と方法】

1. 「財政学研究指導 2」ではこまめに学位論文執筆過程で報告をしてもらい、担当教員や参加受講生の声を参考にして、財政学的分析に基づいた学位論文の執筆を進めてもらう。また、違った観点からの示唆を得るために、学部「財政学演習」との交流も深めている。
2. 新型コロナウイルス感染症対応が可能な場合は対面研究指導とする。また、研究指導冒頭で前時間の出席票相当提出物に受講者が記載した内容等に担当者が回答する。また個別に質問・照会したいことがある場合は指導中に担当者がそれを提起したとき、あるいは指導終了後に時間を設けるので、対面・遠隔ともに受講者はその場で解決するようにする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	修士論文構成再検討	春期休業中の成果の報告
第 2 回	修士論文関連文献輪読	学位論文(甲)の財政学的側面の報告
第 3 回	修士論文関連文献輪読	学位論文(乙)の財政学的側面の報告
第 4 回	修士論文関連文献輪読	学位論文(甲)の骨格報告
第 5 回	修士論文関連文献輪読	学位論文(乙)の骨格報告
第 6 回	地方税理論の文献輪読	地方税原則
第 7 回	修士論文経過報告	学位論文(甲)の第 1 章報告
第 8 回	修士論文経過報告	学位論文(乙)の第 1 章報告
第 9 回	地方税理論の文献輪読	租税転嫁論
第 10 回	地方税制度の文献輪読	固定資産税
第 11 回	地方税制度の文献輪読	住民税
第 12 回	修士論文経過報告	学位論文(甲)の第 2 章報告
第 13 回	修士論文経過報告	学位論文(乙)の第 2 章報告
第 14 回	研究科中間報告前報告	学位論文(甲)・(乙)の中間報告前報告

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

「財政学基礎」で身につけた基礎知識に基づき、毎回、前回の修論評価で指摘された修正点の修正と新たな論点の探究のために 2 時間以上の予習をすること。研究指導の後、今回修正を指示された箇所についての文献収集と修正による論文の構成の均衡のために 2 時間以上の復習を求める。

【テキスト（教科書）】

佐藤進・関口浩「財政学入門 [新版]」同文館、令和元年。

【参考書】

1. Richard F. CALLAHAN, Bankruptcy: The Divergent Cases of the City and the County of San Bernardino, "Public Finance and Management," Volume 14, 2013.
2. Werner Z. HIRSCH, Urban Economic Analysis, McGraw-Hill, 1973.
3. Arthur O'SULLIVAN, Urban Economics (7th ed), McGrawHill/Irwin, 2008.
4. その他の参考文献はその都度提示する。

【成績評価の方法と基準】

目安として、研究指導への取り組み状況 (50%)、論文報告 (50%) から総合的に評価する

【学生の意見等からの気づき】

財政学関連の文献を意欲的に講読する。

【学生が準備すべき機器他】

遠隔研究指導を受信したり、学習支援システムの掲示を閲覧・印刷等できる装置を、大学の貸与を含めて、受講者各自で準備されたい。

【その他の重要事項】

1. 令和 3 年度の「財政学研究指導 2」に応募したい院生は、「財政学研究指導 1」も参照されたい。

2. 研究指導の実施時間については、受講院生との話し合いと全体とのバランスから、適宜変更でき得る場合が多い。

3. なお、「論文研究指導 2 B」も併せて読んでいただきたい。

【担当教員の専門分野等】

「財政学基礎」を参照。

【Outline and objectives】

We acquire the theory and the history of public finance to build the base for master's thesis writing.

論文研究指導 2 B

関口 浩

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

財政学研究指導 2（「財政学研究指導 1」で習得した財政学の知識を基盤にして、租税制度と租税法、予算制度、公債制度等、あるいは教育制度と財政、社会保障制度と財政といった受講生の修士論文の論題に即した論文執筆指導を行う。）

【到達目標】

「財政学研究指導 2」では、学位論文執筆過程で適宜、報告をしてもらい、期限までに財政学的分析を駆使した良質の学位論文を執筆し終えることを目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、特に「DP2」は特に強く関連している。

【授業の進め方と方法】

1. 「財政学研究指導 2」ではこまめに学位論文執筆過程で報告をしてもらい、担当教員や参加受講生の声を参考に、財政学的分析に基づいた学位論文の執筆を進めてもらう。また、違った視点からの示唆を得るために、学部「財政学演習」との交流も深めている。
2. 新型コロナウイルス感染症対応が可能な場合は対面研究指導とする。また、研究指導冒頭で前時間の出席票相当提出物に受講者が記載した内容等に担当者が回答する。また個別に質問・照会したいことがある場合は指導中に担当者がそれを提起したとき、あるいは指導終了後に時間を設けるので、対面・遠隔ともに受講者はその場で解決するようにする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	修士論文経過報告	夏期休業中の成果を報告 (学位論文 [甲])
第 2 回	修士論文経過報告	夏期休業中の成果を報告 (学位論文 [乙])
第 3 回	修士論文経過報告	受講生の論評に基づく修正報告
第 4 回	修論・卒論経過報告	学部ゼミ生を交えての報告
第 5 回	修論・卒論経過報告	学部ゼミ生を交えての論評
第 6 回	修士論文秋学期中間報告	学位論文 [甲]・[乙]
第 7 回	財政学の文献輪読	相続税 (遺産税的要素を加味した遺産取得税方式)
第 8 回	財政学の文献輪読	相続税 (相続時精算課税制度)
第 9 回	修士論文経過報告	学位論文 [甲] 論評
第 10 回	修士論文経過報告	学位論文 [乙] 論評
第 11 回	財政学の文献輪読	相続税 (評価の仕組み)
第 12 回	財政学の文献輪読	相続税 (制度的問題点)
第 13 回	修士論文最終報告	学位論文 [甲]
第 14 回	修士論文最終報告	学位論文 [乙]

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

「財政学基礎」で身につけた基礎知識に基づき、毎回、前回の修論評価で指摘された修正点の修正と新たな論点の探究のために 2 時間以上の予習をすること。研究指導の後、今回修正を指示された箇所についての文献収集と修正による論文体の構成の均衡のために 2 時間以上の復習を求める。

【テキスト（教科書）】

佐藤進・関口浩『財政学入門【新版】』同文館、令和元年。

【参考書】

1. Richard F. CALLAHAN, Bankruptcy: The Divergent Cases of the City and the County of San Bernardino, "Public Finance and Management," Volume 14, 2013.
2. Werner Z. HIRSCH, Urban Economic Analysis, McGraw-Hill, 1973.
3. Arthur O'SULLIVAN, Urban Economics (7th ed), McGrawHill/Irwin, 2008.
4. その他の参考文献はその都度提示する。

【成績評価の方法と基準】

目安として、研究指導への取り組み状況 (50 %)、論文報告 (50 %) から総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

財政学関連の文献を意欲的に講読する。

【学生が準備すべき機器他】

遠隔研究指導を受信したり、学習支援システムの掲示を閲覧・印刷等できる装置を、大学の貸与を含めて、受講者各自で準備されたい。

【その他の重要事項】

「論文研究指導 2 A」も併せて読んでいただきたい。

【担当教員の専門分野等】

「財政学基礎」を参照。

【Outline and objectives】

We acquire the theory and the history of public finance to build the base for master's thesis writing.

SOS600P1 - 503

論文研究指導 2 A

中筋 直哉

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

修士論文執筆の個別指導

【到達目標】

修士論文の2年間の執筆過程の2年次として、十分な知識と研究能力を習得する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、特に「DP2」は特に強く関連している。

【授業の進め方と方法】

教室で対面で実施（予定）。個別面談と履修者全員による演習形式の授業の組み合わせによって、地域社会学、都市社会学、農村社会学の立場からみた、公共政策と市民活動、コミュニティ形成の連携に関する研究と論文制作の方法を指導する。提出物については個別にフィードバックする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
1	顔合わせ	各自の関心の提示と相互評価
2	1人目の個別指導 1	論文の構成に関する指導
3	1人目の個別指導 2	論文の展開に関する指導
4	1人目の個別指導 3	論文の結論に関する指導
5	2人目の個別指導 1	論文の構成に関する指導
6	2人目の個別指導 2	論文の展開に関する指導
7	2人目の個別指導 3	論文の結論に関する指導
8	3人目の個別指導 1	論文の構成に関する指導
9	3人目の個別指導 2	論文の展開に関する指導
10	3人目の個別指導 3	論文の結論に関する指導
11	4人目の個別指導 1	論文の構成に関する指導
12	4人目の個別指導 2	論文の展開に関する指導
13	4人目の個別指導 3	論文の結論に関する指導
14	中間報告会	各自の中間報告会原稿の検討

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

各回指導の材料となるレジュメを事前に準備し、教員にメール等で提出する。事後、指導に基づく研究の修正状況を教員にメール等で報告する。本授業の準備・復習時間は各2時間を標準とします。オンラインを活用し、授業時間変更で2回減った分のし同時間を確保するよう努める。

【テキスト（教科書）】

各回指導中に適宜指示

【参考書】

各回指導中に適宜指示

【成績評価の方法と基準】

個別指導や演習での研究の進展度とその表現 60%、中間報告会での報告の完成度 40%。

【学生の意見等からの気づき】

各自の問題関心により共感的に接するよう努める

【学生が準備すべき機器他】

学習支援システムへのアクセスが必須。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 地域社会学

<研究テーマ> 地域社会の構造分析

<主要研究業績> 『よくわかる都市社会学』（2013, ミネルヴァ書房）、『群衆の居場所』（2005, 新曜社）

【Outline and objectives】

This seminar aims to prepare student's master thesis by face to face direction and group discussion.

論文研究指導 2 B

中筋 直哉

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

修士論文執筆の個別指導

【到達目標】

修士論文の2年間の執筆過程の2年次として、十分な知識と研究能力を習得し、修士論文を完成させる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、特に「DP2」は特に強く関連している。

【授業の進め方と方法】

教室で対面で実施（予定）。個別面談と履修者全員による演習形式の授業の組み合わせによって、地域社会学、都市社会学、農村社会学の立場からみた、公共政策と市民活動、コミュニティ形成の連携に関する研究と論文制作の方法を指導する。提出物については個別にフィードバックする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
1	1人目の個別指導 1	文献調査に関する確認
2	1人目の個別指導 2	データ分析に関する確認
3	1人目の個別指導 3	政策提言に関する確認
4	2人目の個別指導 1	文献調査に関する確認
5	2人目の個別指導 2	データ分析に関する確認
6	2人目の個別指導 3	政策提言に関する確認
7	3人目の個別指導 1	文献調査に関する確認
8	3人目の個別指導 2	データ分析に関する確認
9	3人目の個別指導 3	政策提言に関する確認
10	4人目の個別指導 1	文献調査に関する確認
11	4人目の個別指導 2	データ分析に関する確認
12	4人目の個別指導 3	政策提言に関する確認
13	全員演習 1	修士論文の最終調整
14	全員演習 2	修士論文の最終調整

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

各回指導の材料となるレジュメを事前に準備し、教員にメール等で提出する。事後、指導に基づく研究の修正状況を教員にメール等で報告する。本授業の準備・復習時間は各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

各回指導中に適宜指示

【参考書】

各回指導中に適宜指示

【成績評価の方法と基準】

修士論文の出来 100 %

【学生の意見等からの気づき】

各自の問題関心により共感的に接するよう努める

【学生が準備すべき機器他】

学習支援システムへのアクセスが必須。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 地域社会学

<研究テーマ> 地域社会の構造分析

<主要研究業績> 『よくわかる都市社会学』（2013、ミネルヴァ書房）、『群衆の居場所』（2005、新曜社）

【Outline and objectives】

This seminar aims to prepare student's master thesis by face to face direction and group discussion.

SOS700P1 - 001

公共政策学特殊研究 1 A

杉崎 和久

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

公共政策研究科の博士論文指導科目として、博士号取得に向けた研究構想の練り方や論文のまとめ方等について、個別の状況に応じて指導していく。

【到達目標】

都市政策に関する専門知識や高度な研究方法、論文執筆の力を体得し、最終的に博士論文を作成することを目標とする。特に1年春学期は、研究テーマの絞込みとそれに関連する既往研究の把握をすることを主眼とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連している。

【授業の進め方と方法】

基本的には個別の研究進捗状況に合わせて、報告、ディスカッション、指導を行う。これらの過程は、個別ではなく、受講生全体で行う。課題については、授業の中で発表、討論を行い、その中で講評を行う。授業は原則「対面」で行うが、一部「リアルタイムオンライン授業」を行うこともある。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1.2 回	オリエンテーション	博士研究の進めるためのスケジュール・手法等を確認する。
第 3.4 回	研究関心の発表	研究活動に着手する前の問題関心等を発表する。
第 5.6 回	研究計画の立案	当面の研究の進め方・手法等を検討する。
第 7.8 回	既往研究の把握	関心のあるテーマに関する既往研究のリストを作成する
第 9.10 回	既往研究の整理	関心のあるテーマに関する既往研究論文等を読み込む
第 11.12 回	研究テーマ案の検討	研究テーマに関する論点整理を踏まえた研究テーマ案の発表
第 13.14 回	ふりかえり	研究進捗状況の発表と夏季休暇期間の研究活動予定の検討

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

博士論文執筆のための調査、分析作業は各自行う。

【テキスト（教科書）】

適宜、推薦する。

【参考書】

適宜、推薦する。

【成績評価の方法と基準】

研究報告（60％）、議論への貢献（40％）

【学生の意見等からの気づき】

論文研究指導科目については、授業改善アンケートを実施していない。

【学生が準備すべき機器他】

特になし

【その他の重要事項】

特になし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>都市計画、市民参加手法
 <研究テーマ>公共的意思決定における市民参加のあり方、住民主体のまちづくりを支える支援システム、まちづくりの現代史
 <主要研究業績>『住民主体の都市計画』（分担執筆）学芸出版社、2009年
 『まちづくりセンターを取り巻く課題』『季刊まちづくり』2011年3月
 『参加のプロセスマネジメント』『地方自治職員研修』2013年9月号

【Outline and objectives】

The purpose of this lecture is to create research ideas and to write articles.

公共政策学特殊研究 1 B

杉崎 和久

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

共政策研究科の博士論文指導科目として、博士号取得に向けた研究構想の練り方や論文のまとめ方等について、個別の状況に応じて指導していく。

【到達目標】

都市政策に関する専門知識や高度な研究方法、論文執筆の力を体得し、最終的に博士論文を作成することを到達目標とする。特に博士課程1年次の秋学期は、引き続き既往研究の把握を踏まえた研究テーマの絞り込みと2年次の学会論文投稿に向けた作業を行う。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連している。

【授業の進め方と方法】

基本的には個別の研究進捗状況に合わせて、報告、ディスカッション、指導を行う。これらの過程は、個別ではなく、受講生全体で行う。課題については、授業の中で発表、討論を行い、その中で講評を行う。授業は原則「対面」で行うが、一部「リアルタイムオンライン授業」を行うこともある。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1.2 回	オリエンテーション	夏季休暇期間の進捗状況の報告と研究計画の検討を行う。
第 3.4 回	既往研究の把握	関心のあるテーマに関する既往研究論文等を読み込む
第 5.6 回	理論枠組みの設定	既往研究を踏まえたテーマに関する理論枠組みを検討する。
第 7.8 回	研究テーマ案の検討	研究テーマ案の絞り込みを行う。
第 9.10 回	研究進捗状況の報告	研究進捗状況の報告を行う。
第 11.12 回	投稿論文構成の検討	学会論文投稿に向けた目次構成、調査計画を検討する。
第 13.14 回	ふりかえり	研究進捗状況の発表と春季休暇期間の研究活動予定を検討する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

博士論文執筆のための調査、分析作業は各自行う。

【テキスト（教科書）】

適宜、推薦する。

【参考書】

適宜、推薦する。

【成績評価の方法と基準】

研究報告（60%）、議論への貢献（40%）

【学生の意見等からの気づき】

論文研究指導科目については、授業改善アンケートを実施していない。

【学生が準備すべき機器他】

特になし

【その他の重要事項】

特になし

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞都市計画、市民参加手法

＜研究テーマ＞公共的意思決定における市民参加のあり方、住民主体のまちづくりを支える支援システム、まちづくりの現代史

＜主要研究業績＞『住民主体の都市計画』（分担執筆）学芸出版社、2009年「まちづくりセンターを取り巻く課題」『季刊まちづくり』2011年3月「参加のプロセスマネジメント」『地方自治職員研修』2013年9月号

【Outline and objectives】

The purpose of this lecture is to create research ideas and to write articles.

SOS700P1 - 001

公共政策学特殊研究 1 A

土山 希美枝

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

博士課程の1年めにあたり、博士論文作成のためのテーマを念頭において、おおまかな研究計画をたて、そのテーマをめぐる情報、資料、文献の収集と調査をすすめ、テーマについての知見を醸成し、自らの独創性を模索していく。

【到達目標】

この講義は以下を到達目標とする。

- ・博士論文のテーマを念頭に置いて、おおまかな3年間の研究計画を立てる
- ・テーマをめぐる情報、資料、文献の収集と調査を進める
- ・テーマについて議論し、知見を醸成し、独創性を模索する

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連している。

【授業の進め方と方法】

受講生の報告をベースに、論文作成のための意見交換やコメント、作業内容などがフィードバックされる。なお、原則として対面講義とする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

なし/No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】**春学期**

回	テーマ	内容
第1回	導入	講義の進めかた、博士論文の指導の方法の確認
第2回	博士論文のテーマの検討	博士論文テーマとして検討しているものについて報告する
第3回	博士論文のテーマの構想	博士論文テーマについて、検討をふまえた構想を報告する
第4回	意見交換	意見交換と今後の作業の確認
第5回	博士論文のテーマをめぐる事実 (fact)、先行研究の収集	博士論文のテーマをめぐる事実 (fact)、先行研究について収集し、状況を報告する
第6回	博士論文のテーマをめぐる事実 (fact)、先行研究の収集	博士論文のテーマをめぐる事実 (fact)、先行研究について収集し、状況を報告する
第7回	博士論文のテーマについて考察を深める	博士論文のテーマについて、事実 (fact)、先行研究をふまえて議論し、考察を深める
第8回	博士論文のテーマについて考察を深める	博士論文のテーマについて、事実 (fact)、先行研究をふまえての議論、考察をさらに深める
第9回	博士論文のテーマについて考察を深める	博士論文のテーマについて、事実 (fact)、先行研究をふまえての議論、考察をさらに深める
第10回	研究計画を更新する	これまでの講義をふまえて、博士論文の研究計画を更新する
第11回	博士論文のテーマをめぐる事実 (fact)、先行研究の収集	博士論文のテーマをめぐる事実 (fact)、先行研究について収集し、状況を報告する
第12回	博士論文のテーマをめぐる事実 (fact)、先行研究の収集	博士論文のテーマをめぐる事実 (fact)、先行研究について収集し、状況を報告する
第13回	博士論文のテーマについて考察を深める	博士論文のテーマについて、事実 (fact)、先行研究をふまえての議論、考察をさらに深める
第14回	研究計画を更新する	夏季休暇中の研究計画を検討し、研究計画を更新する

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

院生が自らのテーマをめぐって、調べ、学び、考察し、その結果について報告を受けて指導することが本講義の基本スタイルなので、求められている報告をていねいに用意し、指導を受けて次回のための研究活動にとりくむことが講義時間外に必要である。

【テキスト（教科書）】

教科書は使わない。

【参考書】

院生が集めるべき資料、読むべき文献については、講義中に指示する。

【成績評価の方法と基準】

講義における報告（60%）、それをふまえた意見交換、指導にたいする理解（40%）

【学生の意見等からの気づき】

本年度が科目の初年度であるため、反映するべき意見を受け取っていない。

【担当教員の専門分野等】

専門領域）公共政策、地方自治、政治学

〈研究テーマ〉社会構造と政策・政治の変容、自治体政策、自治体議会論。
〈主要研究業績〉『高度成長期「都市政策」の政治過程』日本評論社、2007年。
『質問力でつくる政策議会』公人の友社、2017年。

【Outline and objectives】

It will help you consider your theme for your paper, plan your general study process for 3 years, and research the facts and literatures.

公共政策学特殊研究 1 B

土山 希美枝

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

博士課程の1年めの後期に必要な、博士論文作成のためのテーマをめぐるとの知見の涵養、研究計画にそった研究活動の展開をすすめる、ひきつづき情報、資料、文献の収集と調査し、自らの独創性を模索していく。

【到達目標】

この講義の到達目標は以下である。

- ・博士論文作成のため、テーマをめぐるとの知見を涵養する
- ・研究計画を進捗させ、更新する
- ・さらに情報、資料、文献の収集と調査をすすめる
- ・テーマについての自らの独創性を意識し、伸ばしていく

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連している。

【授業の進め方と方法】

受講生の報告をベースに、論文作成のための意見交換やコメント、作業内容などがフィードバックされる。なお、原則として対面講義とする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

なし/No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	報告	夏季休暇までの研究活動の到達点を報告する
第2回	後期の研究計画を立てる	これまでの研究の進捗をふまえ、研究計画を更新する
第3回	テーマについて報告	テーマについて報告する
第4回	テーマについて議論	テーマについての報告を踏まえ、議論し、次回の目標を設定する
第5回	テーマをめぐるとの論点の検討	テーマをめぐるとの論点を検討する
第6回	テーマをめぐるとの論点の整理	テーマをめぐるとの論点を整理し、それら論点の検討スケジュールをたてる
第7回	論点（の一部）について検討	テーマをめぐるとの論点について報告する
第8回	論点（の一部）について検討	テーマをめぐるとの論点について議論する
第9回	研究計画の更新	これまでの講義をふまえ、研究計画を見直す
第10回	論文テーマとその独創性	論文のテーマを前提に、研究の独創性について議論する
第11回	論点（の一部）について検討	テーマをめぐるとの論点について報告する
第12回	論点（の一部）について検討	テーマをめぐるとの論点について報告する
第13回	論点（の一部）について検討	テーマをめぐるとの論点について報告する
第14回	春季休暇中、来年度の研究計画を更新する	研究計画を見直し、更新する

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

院生が自らのテーマをめぐって、調べ、学び、考察し、その結果について報告を受けて指導することが本講義の基本スタイルなので、求められている報告をていねいに用意し、指導を受けて次回のための研究活動にとりくむことが講義時間外に必要である。

【テキスト（教科書）】

テキストは使用しない。

【参考書】

院生が集めるべき資料、読むべき文献については、講義中に指示する。

【成績評価の方法と基準】

講義における報告（60%）、それをふまえた意見交換、指導にたいする理解（40%）

【学生の意見等からの気づき】

本年度が科目の初年度であるため、反映するべき意見を受け取っていない。

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉 公共政策、地方自治、政治学

〈研究テーマ〉 社会構造と政策・政治の変容、自治体政策、自治体議会論。

〈主要研究業績〉 『高度成長期「都市政策」の政治過程』 日本評論社、2007年。

『質問力でつくる政策議会』 公人の友社、2017年。

【Outline and objectives】

It will help you consider your theme for your paper, develop your research plan, and research the facts and literatures.

SOS700P1 - 001

公共政策学特殊研究 1 A

名和田 是彦

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

博士後期課程一年目の院生を対象に、学界に新しい知見をもたらすオリジナルな研究を行なって博士論文にまとめていくために、一年目になすべきことを自ら考え、実行することを目的とする。

【到達目標】

博士論文の完成と博士号の取得という究極の目的を見据え、まずは一年目に幅広い文献研究とフィールド調査を行ない、博士論文に向けた研究テーマを設定すること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連している。

【授業の進め方と方法】

博士後期課程の研究は、博士論文の執筆をはじめとして、学界に新たな知見をもたらすオリジナルな研究であるから、各院生の個性を十分に発揮してもらう必要がある。定まった進め方や方法はないと言ってもよく、院生相互の及び教員との議論から学ぶことが、授業としては本来のあり方である。原則として対面により行うことを考えている。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	研究関心とさし当りの作業の確認	最初の時点での研究関心を言葉に出してみて、さし当り 2、3 ヶ月程度の間の研究作業を試行的に設定してみる。
第 2 回～ 第 5 回	試行的研究作業の報告と 討論	さし当り試行的に行なう研究作業を逐次報告し、討論の中で必要な軌道修正をしていく。
第 6 回	中間総括	試行的な研究作業を総括し、秋までに追究していくテーマを確認する。
第 7 回～ 第 13 回	研究の推進	各自テーマに沿った研究を推進していく。
第 14 回	春学期の総括と今後の研究計画の確認	夏休み中の研究計画を確認する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

博士後期課程の院生としての自覚を持って、それぞれの研究テーマを追究していくこと。

【テキスト（教科書）】

決まった教科書は特にない。

【参考書】

各自の研究テーマが設定された時点で、さらに研究が深化した時点で、それぞれに対して指示する。

【成績評価の方法と基準】

研究テーマの設定や研究状況の報告などによって評価する。

【学生の意見等からの気づき】

該当せず。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> コミュニティ政策論

<研究テーマ> 都市内分権（特に日本とドイツ）、自治会・町内会の研究

<主要研究業績>

編著『コミュニティの自治』（日本評論社、2009年）

単著論文「プレーメン市の地域評議会法の新展開に見る「参加」と「協働」

水林彪・吉田克己編『市民社会と市民法——civilの思想と制度』日本評論社、2018年、257～287頁。

単著論文「日本型都市内分権の限界と可能性——宮崎市の地域自治区制度の運用を素材として」『法学志林』第118巻第3号、2020年、1～88頁。

【Outline and objectives】

This is part of the research-training program for Ph.D research students working in the area of public policy studies. The workshop's principal objective is to foster intellectual exchange by showcasing work from leading and emerging scholars. The workshop will provide a forum in which research students can present their work, discuss the theoretical and methodological problems involved, discuss common challenges in conducting research in this area and obtain feedback on their work.

公共政策学特殊研究 1 B

名和田 是彦

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

博士後期課程一年目の院生を対象に、学界に新しい知見をもたらすオリジナルな研究を行なって博士論文にまとめていくために、一年目になすべきことを自ら考え、実行することを目的とする。

【到達目標】

博士論文の完成と博士号の取得という究極の目的を見据え、まずは一年目に幅広い文献研究とフィールド調査を行ない、博士論文に向けた研究テーマを設定すること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連している。

【授業の進め方と方法】

博士後期課程の研究は、博士論文の執筆をはじめとして、学界に新たな知見をもたらすオリジナルな研究であるから、各院生の個性を十分に発揮してもらう必要がある。定まった進め方や方法はないと言ってもよく、院生相互の及び教員との議論から学ぶことが、授業としては本来的なあり方である。原則として対面により行うことを考えている。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	春学期までの研究の到達点の確認	研究テーマと研究仮説をどのくらい深めることができたかを確認する。
第 2 回～ 第 5 回	研究テーマに関する先行研究の到達点に学ぶ	これまでに参照した先行研究の中で特に重要なものを紹介・報告し、討論する。
第 6 回～ 第 10 回	一年目の研究の中間総括	研究のプロセスにおいて行なったフィールド調査や思索を取りまとめて報告し、討論する。今後の研究作業の計画を設定する。
第 11 回 ～第 13 回	研究の推進	各自テーマに沿った研究を推進していく。
第 14 回	秋学期の総括と今後の研究計画の確認	一年目の研究の成果を振り返り、二年目に向けての展望を確認する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

博士後期課程の院生としての自覚を持って、それぞれの研究テーマを追究していくこと。

【テキスト（教科書）】

決まった教科書は特にない。

【参考書】

各自の研究テーマが設定された時点で、さらに研究が深化した時点で、それぞれに対して指示する。

【成績評価の方法と基準】

研究テーマの設定や研究状況の報告などによって評価する。

【学生の意見等からの気づき】

該当せず。

【担当教員の専門分野等】

< 専門領域 > コミュニティ政策論

< 研究テーマ > 都市内分権（特に日本とドイツ）、自治会・町内会の研究

< 主要研究業績 >

編著『コミュニティの自治』（日本評論社、2009年）

単著論文「プレーメン市の地域評議会法の新展開に見る「参加」と「協働」」水林彪・吉田克己編『市民社会と市民法——civilの思想と制度』日本評論社、2018年、257～287頁。

単著論文「日本型都市内分権の限界と可能性—宮崎市の地域自治区制度の運用を素材として」『法学志林』第118巻第3号、2020年、1～88頁。

【Outline and objectives】

This is part of the research-training program for Ph.D research students working in the area of public policy studies. The workshop's principal objective is to foster intellectual exchange by showcasing work from leading and emerging scholars. The workshop will provide a forum in which research students can present their work, discuss the theoretical and methodological problems involved, discuss common challenges in conducting research in this area and obtain feedback on their work.

SOS700P1 - 001

公共政策学特殊研究 1 A

廣瀬 克哉

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

博士課程 1 年次の院生を対象に、博士論文の準備のための研究計画の立案を学生の個別の研究テーマに応じて指導する。

【到達目標】

受講生に自らの研究テーマに関連する先行研究の徹底的な読解を通して専門知識や高度な研究方法、論文執筆の力を体得させ、専門的な学会や学術雑誌での発表や投稿を経験させたい。原則として最短 3 年間で博士論文を完成させることを到達目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連している。

【授業の進め方と方法】

各自の博士論文の研究テーマに応じて学際性と専門性のバランスに配慮しながら指導する。原則として、1 回に 1 人その都度の研究の進展に応じた報告をさせ、それにもとづいて講義と討論を織り交ぜながら指導する。

各履修者の学習・研究の進捗に応じて進めていく。下に示す「授業計画」はあくまで目安であるが、まさに目安として、1 年間にどんなことを身につけたらいいかをあらかじめ知っておくために活用してもらいたい。

各自の研究の進展に応じて、研究報告を行い、相互に議論を深めることを基本とする。

基本的には対面で行うことを予定しているが、感染状況によって Zoom によるオンラインに切りかえて行う場合がある。指導学生を登録した Google Classroom を設定する予定であり、発表資料等はそれを使って共有する。

学生へのフィードバックは授業内で行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション	各自の研究テーマと博士論文完成に向けたスケジュールの確認
第 2 回	演習	院生の報告と討論
第 3 回	演習	院生の報告と討論
第 4 回	演習	院生の報告と討論
第 5 回	演習	院生の報告と討論
第 6 回	演習	院生の報告と討論
第 7 回	演習	院生の報告と討論
第 8 回	演習	院生の報告と討論
第 9 回	演習	院生の報告と討論
第 10 回	演習	院生の報告と討論
第 11 回	演習	院生の報告と討論
第 12 回	演習	院生の報告と討論
第 13 回	演習	院生の報告と討論
第 14 回	演習	院生の報告と討論

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

各自の研究の進捗状況に応じて適宜指示する。

【テキスト（教科書）】

適宜、推薦する。

【参考書】

適宜、推薦する。

【成績評価の方法と基準】

博士論文の満たすべき条件を具体的に示し、各自の研究がそれらの条件に 1 年次としてどれほど近付いたかによって評価する。

【学生の意見等からの気づき】

アンケートの結果は随時参考しながら指導に活かす。

【学生が準備すべき機器他】

特になし

【その他の重要事項】

特になし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 行政学、地方自治

<研究テーマ> 二元代表制の理念と実態

<主要研究業績>

編著『自治体議会改革の固有性と普遍性』（法政大学出版局、2018 年）

編著『議会改革白書 各年度版』（生活社、2009 年～ 2016 年）

【Outline and objectives】

Instructing how to formulate research plan for preparing doctoral dissertation according to individual research theme for the first year students of doctoral program.

公共政策学特殊研究 1 B

廣瀬 克哉

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

博士課程 1 年次の院生を対象に、博士論文の準備のための研究計画の立案を学生の個別の研究テーマに応じて指導する。

【到達目標】

受講生に国際環境政策等自らの研究テーマに関する専門知識や高度な研究方法、論文執筆の力を体得させ、専門的な学会や学術雑誌での発表や投稿を経験させたいと、最終的に博士論文を完成させることを到達目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連している。

【授業の進め方と方法】

博士論文の研究テーマに共通する気候変動政策、生物多様性政策、エネルギー政策など様々な国際環境政策を主な内容とする。環境社会学等社会諸科学を基礎としつつ、政策課題をめぐる国際社会の複雑な動向を極力最新のデータに依拠しながら的確にフォローアップしたうえで、有効な政策分析と政策提言を展開できるように、学際性と専門性のバランスに配慮しながら指導する。原則として、1 回に 1 人その都度の研究の進展に応じた報告をさせ、それにもとづいて講義と討論を織り交ぜながら指導する。

各履修者の学習・研究の進捗に応じて進めていく。下に示す「授業計画」はあくまで目安であるが、まさに目安として、1 年間にどんなことを身につけたらいいかをあらかじめ知っておくために活用してもらいたい。

各自の研究の進展に応じて、研究報告を行い、相互に議論を深めることを基本とする。

基本的には対面で行うことを予定しているが、感染状況によって Zoom によるオンラインに切りかえて行う場合がある。指導学生を登録した Google Classroom を設定する予定であり、発表資料等はそれを使って共有する。

学生へのフィードバックは授業内で行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション	各自の研究の進捗状況とスケジュールの確認
第 2 回	演習	院生の報告と討論
第 3 回	演習	院生の報告と討論
第 4 回	演習	院生の報告と討論
第 5 回	演習	院生の報告と討論
第 6 回	演習	院生の報告と討論
第 7 回	演習	院生の報告と討論
第 8 回	演習	院生の報告と討論
第 9 回	演習	院生の報告と討論
第 10 回	演習	院生の報告と討論
第 11 回	演習	院生の報告と討論
第 12 回	演習	院生の報告と討論
第 13 回	演習	院生の報告と討論
第 14 回	演習	院生の報告と討論

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

各自の研究の進捗状況に応じて指示する。

【テキスト（教科書）】

適宜、推薦する。

【参考書】

適宜、推薦する。

【成績評価の方法と基準】

博士論文の基本的な構想がどこまで確定され、今後の研究と執筆開始までの計画がどれほど具体化したかを評価する。

【学生の意見等からの気づき】

アンケートの結果は随時参考にしながら指導に活かしている。しかし、博士課程における研究指導の場合、アンケート以上に日頃の肌理の細かい直接的なコミュニケーションが重要であるため、アンケートは副次的な参考情報にとどまる。要するに、アンケート以上に学生と face to face で指導することを最重要と心がけている。

【学生が準備すべき機器他】

特になし

【その他の重要事項】

特になし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 行政学、地方自治

<研究テーマ> 二代表制の理念と実態

<主要研究業績>

編著『自治体議会改革の固有性と普遍性』（法政大学出版局、2018 年）

編著『議会改革白書 各年度版』（生活社、2009 年～ 2016 年）

【Outline and objectives】

Instructing how to formulate research plan for preparing doctoral dissertation according to individual research theme for the first year students of doctoral program.

SOS700P1 - 001

公共政策学特殊研究 1 A

糸久 正人

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

博士論文は概ね3本の学術論文から構成されます。本講義では、学術論文を書くためのアカデミックな作法を学び、ディスカッションを通じて研究のブラッシュアップを行います。最終的なゴールは、博士論文を完成させることです。

【到達目標】

- ・学術論文を書けるようになること
- ・学会発表を行えるようになること
- ・博士論文を完成させること
- ・研究者として自立すること

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連、特に「DP1」に特に強く関連している。

【授業の進め方と方法】

毎回、論文の進捗状況について報告し、必要な論点について議論します。議論の内容をもとに、調査分析を進めてください。講義の最後にフィードバックを行います。なお、講義は原則対面で実施する予定です。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	博士論文とは何か	学問研究の観点から博士論文の意味を考えます。
第2回	先輩の意見を聞く	すでに博士号を取得した先輩に意見を聞きます。
第3回	これまでの研究の蓄積状況を報告する。	報告を元に議論をし、論点をつめる。
第4回	これまでの研究の蓄積状況を報告する。	報告を元に議論をし、論点をつめる。
第5回	これまでの研究の蓄積状況を報告する。	報告を元に議論をし、論点をつめる。
第6回	これまでの研究の蓄積状況を報告する。	報告を元に議論をし、論点をつめる。
第7回	これまでの研究の蓄積状況を報告する。	報告を元に議論をし、論点をつめる。
第8回	論文の全体像と細部を検討する。	細部について全体の観点から検討する。
第9回	論文の全体像と細部を検討する。	細部について全体の観点から検討する。
第10回	論文の全体像と細部を検討する。	細部について全体の観点から検討する。
第11回	論文を検討し細部をつめる。	全体と細部を検討する。
第12回	論文を検討し細部をつめる。	全体と細部を検討する。
第13回	論文を検討し細部をつめる。	全体と細部を検討する。
第14回	論文を検討し細部をつめる。	全体と細部を検討する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

調査研究を事前にしっかり行うことが論文作成の前提条件です。

【テキスト（教科書）】

とくになし。

【参考書】

必要に応じて指定します。

【成績評価の方法と基準】

平常点 50 %、研究報告 50 %

【学生の意見等からの気づき】

特になし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

Technology & Innovation Management

Operation Management

<研究テーマ>

集合行為としてのコンソーシアムベースの標準化に関する研究
自動車産業を対象とした IoT 化に伴う技術ベースの変遷に関する研究

日本の生産システムの海外移転と進化に関する研究

<主要研究業績>

糸久正人（2020）「次世代モビリティに向けたエコシステム間競争：IoT 化に伴う価値創造と配分のジレンマ」『世界経済評論』

糸久正人（2020）「自動車産業に破壊的イノベーションは起きるのか？」『赤門マネジメントレビュー』

Olejniczak, T., Miszczynski, M., and Itohisa, M. (2019) "Between closure and Industry 4.0: strategies of Japanese automotive manufacturers in Central and Eastern Europe in reaction to labour market changes," *International Journal of Automotive Technology and Management*.

公文博・糸久正人（2019）『アフリカの日本企業—日本的経営生産システムの移転可能性』時潮社。

糸久正人・安本雅典（2018）「コンセンサス標準をめぐる企業行動：知識量が標準アーキテクチャの導入に及ぼす影響」『組織科学』

糸久正人（2018）「自動運転をめぐる技術知識とエコシステムの拡大」『日本機械学会誌』

Olejniczak, T. and Itohisa, M. (2017) "Hybridization revisited: New insights from the Evolutionary Approach," *Journal of Management and Business Administration*, vol.25, No.2.

糸久正人（2016）「複雑性の増大とコンセンサス標準：標準化活動がもたらす競争優位」『研究技術計画』

富田純一・糸久正人（2015）『コア・テキスト生産管理』新世社

糸久正人（2012）「標準化に対するユーザーとサプライヤーのコンセンサス：コンフリクトを克服した互恵性の達成」『研究技術計画』

【Outline and objectives】

The dissertation usually consists of 3 academic papers. This seminar provides you how to write an academic paper, then brush-up on your research through continuous discussions. The final goal is to complete your dissertation.

SOS700P1 - 002

公共政策学特殊研究 1 B

糸久 正人

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

博士論文は概ね3本の学術論文から構成されます。本講義では、学術論文を書くためのアカデミックな作法を学び、ディスカッションを通じて研究のブラッシュアップを行います。最終的なゴールは、博士論文を完成させることです。

【到達目標】

- ・学術論文を書けるようになること
- ・学会発表を行えるようになること
- ・博士論文を完成させること
- ・研究者として自立すること

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連、特に「DP1」に特に強く関連している。

【授業の進め方と方法】

論文の進捗状況を報告すること、必要な論点について議論すること、議論の結果を元に再度調べて報告すること、この繰り返しです。講義の最後にフィードバックを行います。なお、講義は原則対面で実施する予定です。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	論文の現在の進捗状況について報告する。	報告と討論。
第2回	調査研究の課題について。	議論を補足する調査研究の課題をみる。
第3回	調査研究の課題について。	議論を補足する調査研究の課題をみる。
第4回	調査研究の課題について。	議論を補足する調査研究の課題をみる。
第5回	論文の中間報告と討論	調査研究の成果について報告する。
第6回	論文の中間報告と討論	調査研究の成果について報告する。
第7回	論文の中間報告と討論	調査研究の成果について報告する。
第8回	論文の中間報告と討論	調査研究の成果について報告する。
第9回	論文の中間報告と討論	調査研究の成果について報告する。
第10回	博士論文の全体像を報告する	報告と討論
第11回	博士論文の全体像を報告する	報告と討論
第12回	博士論文の全体像を報告する	報告と討論
第13回	博士論文の全体像を報告する	報告と討論
第14回	博士論文の全体像を報告する	報告と討論

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

調査研究を着実にを行うこと。

【テキスト（教科書）】

テキストはなし。

【参考書】

討論の中で必要な文献を指定します。

【成績評価の方法と基準】

平常点 50 %、研究報告 50 %

【学生の意見等からの気づき】

特になし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

Technology & Innovation Management

Operation Management

<研究テーマ>

集合行為としてのコンソーシアムベースの標準化に関する研究
自動車産業を対象とした IoT 化に伴う技術ベースの変遷に関する研究

日本の生産システムの海外移転と進化に関する研究

<主要研究業績>

糸久正人（2020）「次世代モビリティに向けたエコシステム間競争：IoT 化に伴う価値創造と配分のジレンマ」『世界経済評論』

糸久正人（2020）「自動車産業に破壊的イノベーションは起きるのか？」『赤門マネジメントレビュー』

Olejniczak, T., Miszczynski, M., and Itohisa, M. (2019) "Between closure and Industry 4.0: strategies of Japanese automotive manufacturers in Central and Eastern Europe in reaction to labour market changes," *International Journal of Automotive Technology and Management*.

公文博・糸久正人（2019）『アフリカの日本企業—日本的経営生産システムの移転可能性』時潮社。

糸久正人・安本雅典（2018）「コンセンサス標準をめぐる企業行動：知識量が標準アーキテクチャの導入に及ぼす影響」『組織科学』

糸久正人（2018）「自動運転をめぐる技術知識とエコシステムの拡大」『日本機械学会誌』

Olejniczak, T. and Itohisa, M. (2017) "Hybridization revisited: New insights from the Evolutionary Approach," *Journal of Management and Business Administration*, vol.25, No.2.

糸久正人（2016）「複雑性の増大とコンセンサス標準：標準化活動がもたらす競争優位」『研究技術計画』

富田純一・糸久正人（2015）『コア・テキスト生産管理』新世社

糸久正人（2012）「標準化に対するユーザーとサプライヤーのコンセンサス：コンフリクトを克服した互恵性の達成」『研究技術計画』

【Outline and objectives】

The dissertation usually consists of 3 academic papers. This seminar provides you how to write an academic paper, then brush-up on your research through continuous discussions. The final goal is to complete your dissertation.

SOS700P1 - 001

公共政策学特殊研究 1 A

加藤 寛之

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

公共政策研究科の企業論領域における博士論文指導科目として、博士号取得に向けた研究論文の作成について、受講者の問題関心に応じて指導していく。

【到達目標】

公共政策研究の一部としての、企業論領域におけるそれぞれの研究対象となる政策領域について、必要となる専門的な知見や研究方法、さらには理論的なフレームワークや、論文執筆の技術を学び、最終的に、要求されるスタンダードをクリアした博士論文を、作成することを到達目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連、特に「DP1」に特に強く関連している。

【授業の進め方と方法】

公共政策研究の領域における企業論の博士論文の作成を、最終的に目指す研究指導を行う。基本的には、教員と学生全員による演習方式で、研究課題の設定、方法論の選定、資料の収集・検討・分析について、参加者各自が自分の研究テーマについて報告し、研究を進める。そして、その報告をもとに博士論文に求められるアカデミック・スタンダードに到達することを目指す。原則対面で実施し、フィードバックは毎回課題をだし、その都度コメントします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】**春学期**

回	テーマ	内容
1 回	研究テーマの設定	同左・ディスカッション
2 回	研究テーマの基礎的理解	同左・ディスカッション
3 回	研究テーマの標準的理解	同左・ディスカッション
4 回	研究テーマの高度な理解	同左・ディスカッション
5 回	研究テーマに基づく研究企画の立案	同左・ディスカッション
6 回	論文作成の基礎的技法	同左・ディスカッション
7 回	論文作成の標準的技法	同左・ディスカッション
8 回	論文報告のレジュメの作成	同左・ディスカッション
9 回	先行研究の基礎的検討	同左・ディスカッション
10 回	先行研究の標準的理解の確認	同左・ディスカッション
11 回	先行研究の整理	同左・ディスカッション
12 回	研究テーマの意義の確認	同左・ディスカッション
13 回	論文の理論的なフレームワークの設定	同左・ディスカッション
14 回	論文の研究企画構成の確認	同左・ディスカッション

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

各受講生の研究対象についての先行研究のリサーチ、入手可能な研究資料の探索、テーマとの整合性がある理論的フレームワークの検討など。

【テキスト（教科書）】

適宜指示する。

【参考書】

適宜指示する。

【成績評価の方法と基準】

以下のものは目安であるが、とりえず博士課程1年目においては、研究テーマの設定とその領域の先行研究の検討を中心として、その研究の進展を勘案して評価する。つづく2年目においては、1年目の研究を基礎としながら研究対象についてのリサーチ・クエスションの再設定とその研究の進展、そのロジックの卓越性を中心として評価する。最終学年となる3年目においては、博士学位論文の完成を到達目標とし、その準備の達成度を総合的に評価する。望むらくは、学生におかれましては、その執筆の過程での成果を世に問うことを目的として、一年に1本ほど短い論文を発表することを目指してもらいたい。

【学生の意見等からの気づき】

双方向のコミュニケーションを大切にしたい。

【学生が準備すべき機器他】

特になし

【その他の重要事項】

特になし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>地域産業論・戦略論・企業論

<研究テーマ>造船産業各社の戦略・国際分業・産業集積の研究

<主要研究業績>

「船舶開発と造船産業——ビジネス・システムの不確実性がもたらす複雑性へのマネジメント」藤本隆宏編『人工物複雑化の時代』（有斐閣）

「日本の造船産業における企業競争力の変動とその要因分析—国際競争力構図の変化と新たな取り組み—」柳町功他編著『韓日産業競争力比較研究』（三星経済研究所）

「造船産業の競争構図の変容と雁行形態論・塩路モデルの再検討」（『アジア経営研究』）

「日韓競争力転換のメカニズム—造船産業の事例—」（『組織科学』）

「資源蓄積の機能不全—成熟・衰退期への適応が再成長期の制約に化けるメカニズム」（『経営学論集』）

【Outline and objectives】

As a doctoral dissertation advisory course in the area of corporate theory in the Graduate School of Public Policy, we will provide guidance on the preparation of research papers for doctoral degrees according to the problematic interests of the students.

SOS700P1 - 002

公共政策学特殊研究 1 B

加藤 寛之

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

公共政策研究科の論文指導科目として、博士後期課程 1 年目の院生を対象に、リサーチ・デザインを指導するものである。

【到達目標】

院生は、各自の研究関心に従って先行研究の調査・整理を行い、そのうちの基本的な文献を十分に検討しながらリサーチ・クエスチョンと研究仮説を設定することが求められる。研究テーマによっては、各自この作業に平行しながら現地調査を行う。

原則対面で実施し、フィードバックは毎回課題をだし、その都度コメントします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連、特に「DP1」に特に強く関連している。

【授業の進め方と方法】

各自の研究の進展に応じて、研究報告を行い、相互に議論を深めることを基本とする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	オリエンテーション	秋学期の到達目標を提示し、各自の現状を認識する。
第 2 回	資料の収集	研究対象とする資料にアクセスする。
第 3 回	基本的な文献の検討	ディスカッション 基本的な文献を批判的に検討する。
第 4 回	文献報告 1	ディスカッション 3 年目の院生による文献報告を受け、その内容について相互に論評する。
第 5 回	文献報告 2	ディスカッション 2 年目の院生による文献報告を受け、その内容について相互に論評する。
第 6 回	文献報告 3	ディスカッション 1 年目の院生として文献報告を行い、その内容について相互に論評する。
第 7 回	研究遂行上の問題点の解決	ディスカッション 各自の研究遂行上の悩みを共有し、解決をはかる。
第 8 回	リサーチ・クエスチョンと研究仮説の明確化	ディスカッション 各自の研究テーマに基づいたリサーチ・クエスチョンと研究仮説を報告し、その妥当性を検討する。
第 9 回	論文の構成	ディスカッション 論文の章立てを試みる。
第 10 回	リサーチ・プロポーザルの作成	ディスカッション あらかじめ配布するフォーマットに基づいてプロポーザルを作成する。
第 11 回	英文によるサマリーの執筆	ディスカッション 思考の明確化・訓練のために英文による文章作成を試みる。
第 12 回	研究報告 1	ディスカッション 3 年目の院生による研究報告を受け、その内容について相互に論評する。
第 13 回	研究報告 2	ディスカッション 2 年目の院生による研究報告を受け、その内容について相互に論評する。
第 14 回	研究報告 3	ディスカッション 1 年目の院生として研究報告を行い、その内容について相互に論評する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

各自の関心に基づいて主体的に研究を進めること。

【テキスト（教科書）】

教科書は使用しない。

【参考書】

なし。

【成績評価の方法と基準】

研究報告（60%）、議論への貢献（40%）とする。

【学生の意見等からの気づき】

該当なし。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞ 比較政治学、コミュニティ政策、福祉政策

＜研究テーマ＞ ポスト福祉国家時代の市民社会論、地域社会における社会的包摂、英国・スコットランドの地方自治・自治体内分権

＜主要研究業績＞

「スコットランドの地域評議会－制度の基本的構想とその機能の実際」名和田是彦編（2009）『コミュニティの自治－自治体内分権と協働の国際比較』

pp.81-118、日本評論社

「スコットランドにおける権限移譲とジェンダー・クォータ」三浦まり・衛藤幹子編著（2014）『ジェンダー・クォータ－世界の女性議員はなぜ増えたのか』

pp.203-26、明石書店

【Outline and objectives】

To write Ph.D paper, you must study research design.

SOS700P1 - 001

公共政策学特殊研究 1 A

白鳥 浩

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

公共政策研究科の政治学、国際政治学領域における博士論文指導科目として、博士号取得に向けた研究論文の作成について、受講者の問題関心に応じて指導していく。

【到達目標】

公共政策研究の一部としての、政治学、国政政治学領域におけるそれぞれの研究対象となる政策領域について、必要となる専門的な知見や研究方法、さらには理論的なフレームワークや、論文執筆の技術を学び、最終的に、要求されるスタンダードをクリアした博士論文を、作成することを到達目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連、特に「DP1」に特に強く関連している。

【授業の進め方と方法】

公共政策研究の領域における政治学、国際政治学の博士論文の作成を、最終的に目指す研究指導を行う。基本的には、教員と学生全員による演習方式で、研究課題の設定、方法論の選定、資料の収集・検討・分析について、参加者各自が自分の研究テーマについて報告し、研究を進める。そして、その報告をもとに博士論文に求められるアカデミック・スタンダードに到達することを旨とする。講義は対面を中心とする。講義計画は講義の展開により、若干の変更もありうる。

変更の可能性もあるが対面講義を基本とする。また、学生へのフィードバックにおいては、適宜、講義、報告のたびに行うものとする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】**春学期**

回	テーマ	内容
1 回	研究テーマの設定	同左
2 回	研究テーマの基礎的理解	同左
3 回	研究テーマの標準的理解	同左
4 回	研究テーマの高度な理解	同左
5 回	研究テーマに基づく研究企画の立案	同左
6 回	論文作成の基礎的技法	同左
7 回	論文作成の標準的技法	同左
8 回	論文報告のレジメの作成	同左
9 回	先行研究の基礎的検討	同左
10 回	先行研究の標準的理解の確認	同左
11 回	先行研究の整理	同左
12 回	研究テーマの意義の確認	同左
13 回	論文の理論的なフレームワークの設定	同左
14 回	論文の研究企画構成の確認	同左

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

各受講生の研究対象についての先行研究のリサーチ、入手可能な研究資料の探索、テーマとの整合性がある理論的フレームワークの検討など。

【テキスト（教科書）】

適宜指示する。

【参考書】

適宜指示する。

【成績評価の方法と基準】

以下のものは目安であるが、とりあえず博士課程1年目においては、研究テーマの設定とその領域の先行研究の検討を中心として、その研究の進展を勘案して評価する。つづく2年目においては、1年目の研究を基礎としながら研究対象についてのリサーチ・クエスチョンの再設定とその研究の進展、そのロジックの卓越性を中心として評価する。最終学年となる3年目においては、博士學位論文の完成を到達目標とし、その準備の達成度を総合的に評価する。望むらくは、学生におかれましては、その執筆の過程での成果を世に問うことを目的として、一年に1本ほど短い論文を発表することを目指してもらいたい。学会への参加、研究の進捗の報告などの平常点100%。

【学生の意見等からの気づき】

双方向のコミュニケーションを大切にしたい。

【学生が準備すべき機器他】

特になし

【その他の重要事項】

特になし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

現代政治分析（国際・国内比較）・政治理論

<研究テーマ>

1. 日本の現代政治
2. グローバリズムと国民国家の変容
3. 地方政治研究
4. 政党に関する理論
5. 現代政治のデモクラシー

<主要研究業績>白鳥浩『都市対地方の政治学』芦書房、2004年

白鳥浩『市民・選挙・国家—シュタイン・ロッカンの政治理論—』東海大学出版会、2002年

Hiroshi Shiratori, "Le mouvement référendaire au Japon après la Guerre froide. Une analyse comparative inspirée de Rokkan," Revue française de science politique, vol.51, Numero.4, 2001.

【Outline and objectives】

This course aims to help student's thesis writing from the point of view of an academic standard. It offers many suggestions and insights on thesis writings of each student.

SOS700P1 - 002

公共政策学特殊研究 1 B

白鳥 浩

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

公共政策研究科の政治学、国際政治学領域における博士論文指導科目として、博士号取得に向けた研究論文の作成について、受講者の問題関心に応じて指導していく。

【到達目標】

公共政策研究の一部としての、政治学、国政政治学領域におけるそれぞれの研究対象となる政策領域について、必要となる専門的な知見や研究方法、さらには理論的なフレームワークや、論文執筆の技術を学び、最終的に、要求されるスタンダードをクリアした博士論文を、作成することを到達目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連、特に「DP1」に特に強く関連している。

【授業の進め方と方法】

公共政策研究の領域における政治学、国際政治学の博士論文の作成を、最終的に目指す研究指導を行う。基本的には、教員と学生全員による演習方式で、研究課題の設定、方法論の選定、資料の収集・検討・分析について、参加者各自が自分の研究テーマについて報告し、研究を進める。そして、その報告をもとに博士論文に求められるアカデミック・スタンダードに到達することを旨とする。講義は対面を中心とする。講義計画は講義の展開により、若干の変更もありうる。

変更の可能性もあるが対面講義を基本とする。また、学生へのフィードバックにおいては、適宜、講義、報告のたびに行うものとする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
1 回	研究テーマの設定	同左
2 回	研究テーマの基礎的理解	同左
3 回	研究テーマの標準的理解	同左
4 回	研究テーマの高度な理解	同左
5 回	研究テーマに基づく研究企画の立案	同左
6 回	論文作成の基礎的技法	同左
7 回	論文作成の標準的技法	同左
8 回	論文報告のレジメの作成	同左
9 回	先行研究の基礎的検討	同左
10 回	先行研究の標準的理解の確認	同左
11 回	先行研究の整理	同左
12 回	研究テーマの意義の確認	同左
13 回	論文の理論的なフレームワークの設定	同左
14 回	論文の研究企画構成の確認	同左

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

各受講生の研究対象についての先行研究のリサーチ、入手可能な研究資料の探索、テーマとの整合性がある理論的フレームワークの検討など。

【テキスト（教科書）】

適宜指示する。

【参考書】

適宜指示する。

【成績評価の方法と基準】

以下のものは目安であるが、とりあえず博士課程1年目においては、研究テーマの設定とその領域の先行研究の検討を中心として、その研究の進展を勘案して評価する。つづく2年目においては、1年目の研究を基礎としながら研究対象についてのリサーチ・クエスチョンの再設定とその研究の進展、そのロジックの卓越性を中心として評価する。最終学年となる3年目においては、博士学位論文の完成を到達目標とし、その準備の達成度を総合的に評価する。望むらくは、学生におかれましては、その執筆の過程での成果を世に問うことを目的として、一年に1本ほど短い論文を発表することを目指してもらいたい。学会への参加、研究の進捗の報告などの平常点100%。

【学生の意見等からの気づき】

双方向のコミュニケーションを大切にしたい。

【学生が準備すべき機器他】

特になし

【その他の重要事項】

特になし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

現代政治分析（国際・国内比較）・政治理論

<研究テーマ>

1. 日本の現代政治
2. グローバリズムと国民国家の変容
3. 地方政治研究
4. 政党に関する理論
5. 現代政治のデモクラシー

<主要研究業績>白鳥浩『都市対地方の政治学』芦書房、2004年

白鳥浩『市民・選挙・国家—シュタイン・ロッカンの政治理論—』東海大学出版会、2002年

Hiroshi Shiratori, "Le mouvement référendaire au Japon après la Guerre froide. Une analyse comparative inspirée de Rokkan," *Revue française de science politique*, vol.51, Numero.4, 2001.

【Outline and objectives】

This course aims to help student's thesis writing from the point of view of an academic standard. It offers many suggestions and insights on thesis writings of each student.

SOS700P1 - 001

公共政策学特殊研究 1 A

関口 浩

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

公共政策研究科の博士論文指導科目として、博士号取得に向けた研究構想の練り方や論文のまとめ方等について、財政学の観点から、個別の状況に応じて指導していく。

【到達目標】

財政に関わる専門知識や高度な研究方法、論文執筆の力を体得し、本年度は論点を決定することと論文の大枠を構築することを目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連、特に「DP1」に特に強く関連している。

【授業の進め方と方法】

1. 本研究指導では、修士課程で習得した財政学全般の理論的・制度的側面に重点を置きながら、財政の理論的発展と制度的改革の方向性を考究していく。また、財政制度および政策の経済的意義と問題点を明らかにしながら博士論文執筆にむけた論点整理をしていく。
2. 新型コロナウイルス感染症対応が可能な場合は対面研究指導とする。また、研究指導冒頭で前時間の出席票相当提出物に受講者が記載した内容等に担当者が回答する。また個別に質問・照会したいことがある場合は指導中に担当者がそれを提起したとき、あるいは指導終了後に時間を設けるので、対面・遠隔ともに受講者はその場で解決するようにする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

なし/No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	博士論文構成再検討	春期休業中の研究成果の報告
第2回	文献講読	日本の財政事情
第3回	文献講読	米国の財政事情
第4回	論文報告	博士論文進捗報告
第5回	論文報告	博士論文進捗再報告
第6回	文献講読	地方税理論
第7回	論文報告	博士論文進捗報告と修士院生による論評
第8回	論文報告	博士論文進捗再報告
第9回	文献講読	租税転嫁論
第10回	文献講読	固定資産税制度
第11回	文献講読	住民税制度
第12回	論文報告	参考文献概要の報告
第13回	論文報告	博士論文進捗再報告
第14回	修士論文研究科中間報告 前報告論評	修士2年次報告の論評

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

財政学の基礎知識に基づき、毎回、前回の博論評価で指摘された修正点の修正と新たな論点の探究のために2時間以上の予習をすること。研究指導の後、今回修正を指示された箇所についての文献収集と修正による論文構成を調整するために2時間以上の復習を求める。

【テキスト（教科書）】

佐藤進・関口浩「財政学入門【新版】」同文館、令和元年。

【参考書】

1. Arnold C. HARBERGER, *Introduction to Cost-Benefit Analysis*, University of California, Los Angeles, 2010.
2. Jonathan GRUBER, *Public Finance and Public Policy (6th ed)*, Worth Publishers, 2019.

【成績評価の方法と基準】

目安として、研究指導への取り組み状況(50%)、論文報告(50%)から総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

少人数のためアンケートはしていない。

【学生が準備すべき機器他】

遠隔研究指導を受信したり、学習支援システムの掲示を閲覧・印刷等できる装置を、大学の貸与を含めて、受講者各自で準備されたい。

【その他の重要事項】

1. 学部卒業程度の「財政学」の知識を最低限習得していることが必須であり、外国文献も博士後期課程相応の読解ができることも必須である。

2. 博士論文の審査は公共政策研究科学位授与基準をもとに行われる。審査にあたるのは、3名以上から成る審査小委員会であり、学生一人一人に設置される。主査は専門領域が同じでかつ第三者となる教員とし、指導教授は副査として審査に当たる。審査小委員会は、口述試験を実施し、論文および学識が博士の学位授与に適切かどうかを判断する。審査小委員会は、その結果を教授会に所属する専任教員で構成する審査委員会に報告し、審査委員会で最終的な判断を行う。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

財政学、地方財政論、租税論、教育財政論、財政学を基盤とした教育・福祉政策

【研究テーマ】

固定資産税をめぐる問題、教育財源としての財産税(固定資産税)、租税制度全般、地方税財政、日米教育財政

【研究業績(近年)】

「沖縄県財政の歳入構造」『公共政策志林』第4号、法政大学大学院公共政策研究科、平成28年。

「沖縄県財政と県税収入」『公共政策志林』第5号、法政大学大学院公共政策研究科、平成29年。

『財政学』(池宮城秀正編)ミネルヴァ書房、平成31年。

『財政学入門【新版】』(佐藤進と共著)同文館、令和元年。

「新型コロナウイルス感染症蔓延下の財政投融资」『生活経済政策』289号、生活経済政策研究所、令和3年。

【Outline and objectives】

We acquire the theory and the history of public finance to build the base for doctor's thesis writing.

SOS700P1 - 002

公共政策学特殊研究 1 B

関口 浩

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

公共政策研究科の博士論文指導科目として、博士号取得に向けた研究構想の練り方や論文のまとめ方等について、財政学の観点から、個別の状況に応じて指導していく。

【到達目標】

財政に関わる専門知識や高度な研究方法、論文執筆の力を体得し、本年度は論点を決定することと論文の大枠を構築することを目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連、特に「DP1」に特に強く関連している。

【授業の進め方と方法】

1. 本研究指導では、修士課程で習得した財政学全般の理論的・制度的側面に重点を置きながら、財政の理論的発展と制度的改革の方向性を考究していく。また、財政制度および政策の経済的意義と問題点を明らかにしながら博士論文執筆にむけた論点整理をしていく。
2. 新型コロナウイルス感染症対応が可能な場合は対面研究指導とする。また、研究指導冒頭で前時間の出席票相当提出物に受講者が記載した内容等に担当者が回答する。また個別に質問・照会したいことがある場合は指導中に担当者がそれを提起したとき、あるいは指導終了後に時間を設けるので、対面・遠隔ともに受講者はその場で解決するようにする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

なし/No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	論文経過報告	夏期休業中の研究成果の報告
第2回	修士論文経過報告	修士2年次報告の論評
第3回	論文経過報告	受講生の論評に基づく修正報告
第4回	修論・卒論経過報告	下級生執筆論文の講評
第5回	修論・卒論経過報告	下級生執筆論文の講評
第6回	秋学期中間報告	博士論文執筆の進捗報告
第7回	文献講読	相続税（遺産的要素を加味した遺産取得税方式）
第8回	文献講読	相続税（相続時精算課税制度）
第9回	論文経過報告	これまでの指導を踏まえた修正報告
第10回	論文経過報告	新規参考文献紹介
第11回	文献講読	相続税（評価の仕組み）
第12回	文献講読	相続税（制度的問題点）
第13回	論文経過報告	論文全体像の再修正
第14回	博士論文・修士論文最終報告	博士3年次報告の講評、自らの博士論文を踏まえた修士2年次報告の論評

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

財政学の基礎知識に基づき、毎回、前回の博論評価で指摘された修正点の修正と新たな論点の探究のために2時間以上の予習をすること。研究指導の後は、今回修正を指示された箇所についての文献収集と修正による論文構成を調整するために2時間以上の復習を求める。

【テキスト（教科書）】

佐藤進・関口浩「財政学入門【新版】」同文館、令和元年。

【参考書】

1. Arnold C. HARBERGER, *Introduction to Cost-Benefit Analysis*, University of California, Los Angeles, 2010.
2. Jonathan GRUBER, *Public Finance and Public Policy (6th ed)*, Worth Publishers, 2019.

【成績評価の方法と基準】

目安として、研究指導への取り組み状況(50%)、論文報告(50%)から総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

少人数のためアンケートはしていない。

【学生が準備すべき機器他】

遠隔研究指導を受信したり、学習支援システムの掲示を閲覧・印刷等できる装置を、大学の貸与を含めて、受講者各自で準備されたい。

【その他の重要事項】

1. 学部卒業程度の「財政学」の知識を最低限習得していることが必須であり、外国文献も博士後期課程相応の読解ができることも必須である。

2. 博士論文の審査は公共政策研究科学学位授与基準をもとに行われる。審査にあたるのは、3名以上から成る審査小委員会であり、学生一人一人に設置される。主査は専門領域が同じでかつ第三者となる教員とし、指導教授は副査として審査に当たる。審査小委員会は、口述試験を実施し、論文および学識が博士の学位授与に適切かどうかを判断する。審査小委員会は、その結果を教授会に所属する専任教員で構成する審査委員会に報告し、審査委員会で最終的な判断を行う。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

財政学、地方財政論、租税論、教育財政論、財政学を基盤とした教育・福祉政策

【研究テーマ】

固定資産税をめぐる問題、教育財源としての財産税（固定資産税）、租税制度全般、地方税財政、日米教育財政

【研究業績（近年）】

「沖縄県財政の歳入構造」『公共政策志林』第4号、法政大学大学院公共政策研究科、平成28年。

「沖縄県財政と県税収入」『公共政策志林』第5号、法政大学大学院公共政策研究科、平成29年。

『財政学』（池宮城秀正編）ミネルヴァ書房、平成31年。

『財政学入門【新版】』（佐藤進と共著）同文館、令和元年。

「新型コロナウイルス感染症蔓延下の財政投融资」『生活経済政策』289号、生活経済政策研究所、令和3年。

【Outline and objectives】

We acquire the theory and the history of public finance to build the base for doctor's thesis writing.

SOS700P1 - 001

公共政策学特殊研究 1 A

多田 和美

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

博士課程 1 年次の院生を対象に、博士論文を作成するための研究指導を行います。個々の院生の研究テーマおよび研究の進捗状況に応じて指導しますが、1 年次は主に研究計画の立案と理論研究を実施します。また、必要に応じて研究調査にも着手します。

【到達目標】

本授業では、次の 3 点に到達することを目標とします。

- 1) 博士課程修了までに博士論文を完成できる。
- 2) 博士論文の完成に向けて、適切な研究計画を立案できる。
- 3) 研究計画にもとづいて調査を実施し、研究データを収集できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連、特に「DP1」に特に強く関連している。

【授業の進め方と方法】

対面による演習形式を中心に実施し、各院生の研究テーマと研究の進捗状況に応じて指導します。院生による研究報告とそれにもとづく院生間および教員とのディスカッションにより、研究を深化させていきます。なお、授業中に提示した課題や論点は、随時、解説（フィードバック）します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション	院生による報告とディスカッション
第 2 回	演習	院生による報告とディスカッション
第 3 回	演習	院生による報告とディスカッション
第 4 回	演習	院生による報告とディスカッション
第 5 回	演習	院生による報告とディスカッション
第 6 回	演習	院生による報告とディスカッション
第 7 回	演習	院生による報告とディスカッション
第 8 回	演習	院生による報告とディスカッション
第 9 回	演習	院生による報告とディスカッション
第 10 回	演習	院生による報告とディスカッション
第 11 回	演習	院生による報告とディスカッション
第 12 回	演習	院生による報告とディスカッション
第 13 回	演習	院生による報告とディスカッション
第 14 回	演習	院生による報告とディスカッション

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

博士論文の完成に向けて、入念な準備学習と復習といった日常的な学習の積み重ねが重要です。

【テキスト（教科書）】

特に指定しません。

【参考書】

多田和美（2014）『グローバル製品開発戦略』有斐閣。

その他、適宜提示します。

【成績評価の方法と基準】

研究の進捗状況：80%、ディスカッションへの貢献度：20%で評価します。

【学生の意見等からの気づき】

随時、院生と意見交換し、授業の改善に努めます。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

国際経営論

<研究テーマ>

国際研究開発、新興国市場戦略

<主要研究業績>

法政大学学術研究データベースの担当教員のサイトを参照してください。

<http://kenkyu-web.i.hosei.ac.jp/Profiles/107/0010650/profile.html>

【Outline and objectives】

The aim of this course is to provide research guidance for writing a doctoral dissertation.

公共政策学特殊研究 1 B

多田 和美

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

博士課程 1 年次の院生を対象に、博士論文を作成するための研究指導を行います。個々の院生の研究テーマおよび研究の進捗状況に応じて指導しますが、1 年次は主に研究計画の立案と理論研究を実施します。また、必要に応じて研究調査にも着手します。

【到達目標】

本授業では、次の 3 点に到達することを目標とします。

- 1) 博士課程修了までに博士論文を完成できる。
- 2) 博士論文の完成に向けて、適切な研究計画を立案できる。
- 3) 研究計画にもとづいて調査を実施し、研究データを収集できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連、特に「DP1」に特に強く関連している。

【授業の進め方と方法】

対面による演習形式を中心に実施し、各院生の研究テーマと研究の進捗状況に応じて指導します。院生による研究報告とそれにもとづく院生間および教員とのディスカッションにより、研究を深化させていきます。なお、授業中に提示した課題や論点は、随時、解説（フィードバック）します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション	院生による報告とディスカッション
第 2 回	演習	院生による報告とディスカッション
第 3 回	演習	院生による報告とディスカッション
第 4 回	演習	院生による報告とディスカッション
第 5 回	演習	院生による報告とディスカッション
第 6 回	演習	院生による報告とディスカッション
第 7 回	演習	院生による報告とディスカッション
第 8 回	演習	院生による報告とディスカッション
第 9 回	演習	院生による報告とディスカッション
第 10 回	演習	院生による報告とディスカッション
第 11 回	演習	院生による報告とディスカッション
第 12 回	演習	院生による報告とディスカッション
第 13 回	演習	院生による報告とディスカッション
第 14 回	演習	院生による報告とディスカッション

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

博士論文の完成に向けて、入念な準備学習と復習といった日常的な学習の積み重ねが重要です。

【テキスト（教科書）】

特に指定しません。

【参考書】

多田和美（2014）『グローバル製品開発戦略』有斐閣。

その他、適宜提示します。

【成績評価の方法と基準】

研究の進捗状況：80%、ディスカッションへの貢献度：20%で評価します。

【学生の意見等からの気づき】

随時、院生と意見交換し、授業の改善に努めます。

【学生が準備すべき機器他】

博士論文の完成に向けて、入念な準備学習と復習といった日常的な学習の積み重ねが重要です。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

国際経営論

<研究テーマ>

国際研究開発、新興国市場戦略

<主要研究業績>

法政大学術研究データベースの担当教員のサイトを参照してください。

<http://kenkyu-web.i.hosei.ac.jp/Profiles/107/0010650/profile.html>

【Outline and objectives】

The aim of this course is to provide research guidance for writing a doctoral dissertation.

SOS700P1 - 001

公共政策学特殊研究 1 A

谷本 有美子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

博士後期課程1年目の院生を対象とする。院生は、自ら研究材料を獲得し、教員の指導と演習を通して研究の知見を積み重ねながら、博士論文のテーマ設定とフレーム構築をすすめる。

【到達目標】

- ・博士論文の研究テーマを確定する
- ・先行文献研究に着手する
- ・研究構想案を作成する

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連、特に「DP1」に特に強く関連している。

【授業の進め方と方法】

授業は原則対面で行う。

院生の研究関心や調査研究の成果等についての報告を受けながら、研究の進捗に応じて博士論文執筆に必要な指導を行う。院生間の討議を行い、相互に学び合う場も設定する。院生の自発性を重視する授業である。発表やレポート等に対する講評は適宜行い、授業内で全体にフィードバックする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり/Yes

【授業計画】**春学期**

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	当初の研究関心を表明し、その問題認識や研究のフレームについての討議を行う
第2回	研究ストックの報告	修士論文または現時点での研究関心に即した自身の研究成果を報告し、研究課題を整理する
第3回	研究構想の検討(1)	当初の問題関心に沿って、主要な先行研究のリサーチを進め、研究構想(案)を練る
第4回	研究構想の検討(2)	当初の問題関心に沿って、主要な先行研究のリサーチを進め、研究構想(案)を練る
第5回	研究構想の検討(3)	当初の問題関心に沿って、主要な先行研究のリサーチを進め、研究構想(案)を練る
第6回	研究構想の検討(4)	当初の問題関心に沿って、主要な先行研究のリサーチを進め、研究構想(案)を練る
第7回	研究構想(案)の報告	構想案の報告を受け、研究の意義や実現可能性を検討する
第8回	研究テーマの検討	研究テーマの変更も視野に入れながら、テーマ設定の方向性を確認する
第9回	研究の推進(1)	構想案に沿って、各自の研究作業を進める
第10回	研究の推進(2)	構想案に沿って、各自の研究作業を進める
第11回	研究の推進(3)	構想案に沿って、各自の研究作業を進める
第12回	研究成果の中間報告	研究作業で獲得した内容を報告し、討議を行う
第13回	研究成果の整理	春学期に獲得した研究成果について、リサーチペーパーをまとめる
第14回	研究作業計画の作成	春学期の研究作業状況を踏まえて、今年度後半の研究行程について計画を作成する

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

院生自身が設定したテーマに即し、自主的に研究課題に取り組む。

【テキスト（教科書）】

特に使用しない。

【参考書】

院生の研究テーマと段階に応じ、適宜指示する。

【成績評価の方法と基準】

研究状況の報告 70%、討議への参加姿勢 30%の総合評価とする。

【学生の意見等からの気づき】

研究の進捗状況に応じて、適宜、文献等の情報提供を行う。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>行政学、地方自治、市民自治

<研究テーマ>中央政府における地方自治、国による自治体統制、人口減少時代の自治体政策と市民自治、大都市行政区の民主的統制

<主要研究業績>

『「地方自治の責任部局」の研究－その存続メカニズムと軌跡 [1947-2000]』(2019) 公人の友社

『「透明性」・「誠実性」・「戦術性」－“転職”を迫られる地方公務員』(2001)『分権社会と協働』(共著)ぎょうせい

『国による「上から」の自治体統制の持続と変容』(2008)『分権改革の動態』(共著)東京大学出版会

『大都市行政区の「区民会議」と市民参加のアジェンダ－神奈川県内の指定都市を題材に』(2016)『横浜市立大学論叢 人文科学系列』第67巻第1号

【Outline and objectives】

For graduate students in the first year of doctoral course. The graduate students acquire the research materials themselves, accumulate their research knowledge through the guidance and exercises of faculty members, and advance the theme setting and frame construction of doctoral dissertations.

SOS700P1 - 002

公共政策学特殊研究 1 B

谷本 有美子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

博士後期課程 1 年目の院生を対象とする。院生は、自ら研究材料を獲得し、教員の指導と演習を通して研究の知見を積み重ねながら、博士論文の素材を蓄積し、フレームを構築する。

【到達目標】

- ・先行文献研究のリサーチペーパーを作成する
- ・予備的現地調査等を行う
- ・1 年次に探索した文献や資料の検討を通じ論点を提起する

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連、特に「DP1」に特に強く関連している。

【授業の進め方と方法】

授業は原則対面で行う。

院生が獲得した研究成果についての報告を受けながら、研究の進捗に応じて、博士論文執筆に必要な指導を行う。院生間の討議を行い、相互に学び合う場も設定する。院生の自発性を重視する授業である。発表やレポート等に対する講評は適宜行い、授業内で全体にフィードバックする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	これまでの成果の確認	夏休みまでに獲得した研究成果を確認する
第 2 回	主要な先行研究の検証 (1)	研究テーマに不可欠な重要な先行研究を題材に議論する
第 3 回	主要な先行研究の検証 (2)	研究テーマに不可欠な重要な先行研究を題材に議論する
第 4 回	文献と資料の探索と要点整理 (1)	研究テーマに関連する文献や資料を探索し、それぞれの要点を整理する
第 5 回	文献と資料の探索と要点整理 (2)	研究テーマに関連する文献や資料を探索し、それぞれの要点を整理する
第 6 回	文献と資料の探索と要点整理 (3)	研究テーマに関連する文献や資料を探索し、それぞれの要点を整理する
第 7 回	探索からの論点提起	既存の文献や資料の整理により導き出された論点を報告する
第 8 回	研究の推進 (1)	構想案に沿った研究作業や現地予備調査等を進める
第 9 回	研究の推進 (2)	構想案に沿った研究作業や現地予備調査等を進める
第 10 回	研究の推進 (3)	構想案に沿った研究作業や現地予備調査等を進める
第 11 回	研究の推進 (4)	構想案に沿った研究作業や現地予備調査等を進める
第 12 回	研究の推進 (5)	構想案に沿った研究作業や現地予備調査等を進める
第 13 回	研究成果の報告	秋学期に獲得した研究成果について、リサーチペーパーにまとめて報告する
第 14 回	1 年次の総括と次年度研究作業計画の作成	初年度に獲得した研究成果を踏まえ、次年度の研究計画を作成する

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

院生自身が設定したテーマに即して、自主的に研究課題に取り組む。

【テキスト（教科書）】

特に使用しない。

【参考書】

院生の研究テーマと段階に応じ、適宜指示する。

【成績評価の方法と基準】

研究状況の報告 70 %、討議への参加姿勢 30 % の総合評価とする。

【学生の意見等からの気づき】

研究の進捗状況に応じて、適宜、文献等の情報提供を行う。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 行政学、地方自治、市民自治

<研究テーマ> 中央政府における地方自治、国による自治体統制、人口減少時代の自治体政策と市民自治、大都市行政区の民主的統制

<主要研究業績>

「地方自治の責任部局」の研究 - その存続メカニズムと軌跡 [1947-2000] (2019) 公人の友社

「『透明性』・『誠実性』・『戦術性』 - 『転職』を迫られる地方公務員」(2001) 『分権社会と協働』(共著) ぎょうせい

「国による『上から』の自治体統制の持続と変容」(2008) 『分権改革の動態』(共著) 東京大学出版会

「大都市行政区の『区民会議』と市民参加のアジェンダー - 神奈川県内の指定都市を題材に」(2016) 『横浜市立大学論叢 人文科学系列』第 67 巻第 1 号

【Outline and objectives】

For graduate students in the first year of doctoral course. Graduate students acquire research materials themselves, accumulate research knowledge through the guidance and exercises of faculty members, and build frames while examining information and data for doctoral dissertations.

SOS700P1 - 001

公共政策学特殊研究 1 A

中筋 直哉

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

地域社会学を知的基盤とする公共政策研究の博士論文の完成。

【到達目標】

博士論文の研究計画を立案する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連、特に「DP1」に特に強く関連している。

【授業の進め方と方法】

教室で対面で実施（予定）。履修生ごとに個別指導する他、全履修生による文献講読演習を月1回程度行う。提出物には個別にフィードバックする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
1	履修者の顔合わせ	各自の研究計画発表と自己紹介
2	1人目の個別指導 1	研究計画の検討 1
3	2人目の個別指導 1	研究計画の検討 1
4	3人目の個別指導 1	研究計画の検討 1
5	文献講読演習 1	専門文献の講読と討論
6	1人目の個別指導 2	文献調査の検討 1
7	2人目の個別指導 2	文献調査の検討 1
8	3人目の個別指導 2	文献調査の検討 1
9	文献講読演習 2	専門文献の講読と討論
10	1人目の個別指導 3	データ収集の検討 1
11	2人目の個別指導 3	データ収集の検討 1
12	3人目の個別指導 3	データ収集の検討 1
13	文献講読演習 3	専門文献の講読と討論
14	全員演習	履修者の到達度の確認と合評

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

各自の研究計画に沿った調査研究活動。本授業の準備・復習時間は各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

中筋直哉・五十嵐泰正編著,2013,『よくわかる都市社会学』ミネルヴァ書房。

【参考書】

文献講読演習にて指示する

【成績評価の方法と基準】

指定された日程で個別指導を受け、文献講読演習に参加することが成績評価の条件。研究計画通り研究を進められれば C、文献講読演習等において貢献すれば B、学会査読論文など成果を挙げれば A、その内容が学術的に顕著なものであれば A+、とする。

【学生の意見等からの気づき】

より専門性の高い指導を心がける。

【学生が準備すべき機器他】

学習支援システムへのアクセスが必須。

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉 地域社会学
 〈研究テーマ〉 地域社会の構造分析
 〈主要研究業績〉 上記教科書、『群衆の居場所』（2005, 新曜社）

【Outline and objectives】

This seminar aims to prepare student's doctoral thesis by face to face direction and group discussion.

公共政策学特殊研究 1 B

中筋 直哉

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

地域社会学を知的基盤とする公共政策研究の博士論文の完成。

【到達目標】

博士論文の研究計画を立案する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連、特に「DP1」に特に強く関連している。

【授業の進め方と方法】

教室で対面で実施（予定）。履修生ごとに個別指導する他、全履修生による文献講読演習を月1回程度行う。提出物については個別にフィードバックする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
1	文献講読演習 4	専門文献の講読と討論
2	1人目の個別指導 4	研究計画の検討 2
3	2人目の個別指導 4	研究計画の検討 2
4	3人目の個別指導 4	研究計画の検討 2
5	文献講読演習 5	専門文献の講読と討論
6	1人目の個別指導 5	文献調査の検討 2
7	2人目の個別指導 5	文献調査の検討 2
8	3人目の個別指導 5	文献調査の検討 2
9	文献講読演習 6	専門文献の講読と討論
10	1人目の個別指導 6	データ収集の検討 2
11	2人目の個別指導 6	データ収集の検討 2
12	3人目の個別指導 6	データ収集の検討 2
13	文献講読演習 7	専門文献の講読と討論
14	全員演習	履修者の到達度の確認と合評

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

各自の研究計画に沿った調査研究活動。本授業の準備・復習時間は各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

中筋直哉・五十嵐泰正編著,2013,『よくわかる都市社会学』ミネルヴァ書房。

【参考書】

文献講読演習にて指示する

【成績評価の方法と基準】

指定された日程で個別指導を受け、文献講読演習に参加することが成績評価の条件。研究計画通り研究を進められれば C、文献講読演習等において貢献すれば B、学会査読論文など成果を挙げれば A、その内容が学術的に顕著なものであれば A+、とする。

【学生の意見等からの気づき】

より専門性の高い指導を心がける。

【学生が準備すべき機器他】

学習支援システムへのアクセスが必須。

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉 地域社会学
〈研究テーマ〉 地域社会の構造分析
〈主要研究業績〉 上記教科書、『群衆の居場所』（2005, 新曜社）

【Outline and objectives】

This seminar aims to prepare student's doctoral thesis by face to face direction and group discussion.

SOS700P1 - 003

公共政策学特殊研究 2 A

名和田 是彦

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

博士後期課程二年目の院生を対象に、学界に新しい知見をもたらすオリジナルな研究を行なって博士論文にまとめていくために、二年目になすべきことを自ら考え、実行することを目的とする。

【到達目標】

博士論文の完成と博士号の取得という究極の目的を見据え、自らが確立した研究テーマを自らが決めた研究手法によって追究していくこと。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連している。

【授業の進め方と方法】

博士後期課程の研究は、博士論文の執筆をはじめとして、学界に新たな知見をもたらすオリジナルな研究であるから、各院生の個性を十分に発揮してもらう必要がある。定まった進め方や方法はないと言ってもよく、院生相互の及び教員との議論から学ぶことが、授業としては本来のあり方である。原則として対面により行うことを考えている。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	研究テーマ、研究手法の確認	一年目の模索を通じて、博士論文のテーマと研究手法を確立していることを確認する。
第 2 回～ 第 5 回	具体的研究の進捗の確認と春学期の研究作業の確認	実際の研究の進捗状況を具体的に確認し、春学期に取り組むべき作業を確認する。
第 6 回～ 第 13 回	研究の推進	確認した方向性に基づいて各自研究を推進し、随時報告する。
第 14 回	春学期の到達点の確認	春学期の研究の到達点を確認し、今後の進め方を確認する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

博士後期課程の院生としての自覚を持って、それぞれの研究テーマを追究していくこと。

【テキスト（教科書）】

決まった教科書は特にない。

【参考書】

研究の進展に応じて適宜指示する。

【成績評価の方法と基準】

随時の研究報告の内容などによって評価する。

【学生の意見等からの気づき】

該当せず。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> コミュニティ政策論

<研究テーマ> 都市内分権（特に日本とドイツ）、自治会・町内会の研究

<主要研究業績>

編著『コミュニティの自治』（日本評論社、2009年）

単著論文「ブレイメン市の地域評議会法の新展開に見る「参加」と「協働」

水林彪・吉田克己編『市民社会と市民法——civilの思想と制度』日本評論社、2018年、257～287頁。

単著論文「日本型都市内分権の限界と可能性——宮崎市の地域自治区制度の運用を素材として」『法学志林』第118巻第3号、2020年、1～88頁。

【Outline and objectives】

This is part of the research-training program for Ph.D research students working in the area of public policy studies. The workshop's principal objective is to foster intellectual exchange by showcasing work from leading and emerging scholars. The workshop will provide a forum in which research students can present their work, discuss the theoretical and methodological problems involved, discuss common challenges in conducting research in this area and obtain feedback on their work.

公共政策学特殊研究 2 B

名和田 是彦

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

博士後期課程二年目の院生を対象に、学界に新しい知見をもたらすオリジナルな研究を行なって博士論文にまとめていくために、二年目になすべきことを自ら考え、実行することを目的とする。

【到達目標】

博士論文の完成と博士号の取得という究極の目的を見据え、自らが確立した研究テーマを自らが決めた研究手法によって追究していくこと。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連している。

【授業の進め方と方法】

博士後期課程の研究は、博士論文の執筆をはじめとして、学界に新たな知見をもたらすオリジナルな研究であるから、各院生の個性を十分に発揮してもらう必要がある。定まった進め方や方法はないと言ってもよく、院生相互の及び教員との議論から学ぶことが、授業としては本来のあり方である。原則として対面により行うことを考えている。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	具体的研究の進捗の確認と秋学期の研究作業の確認	二年目の春学期までの研究を振り返り、その成果を確認し、秋学期の研究作業を確認する。
第 2 回～ 第 13 回	研究の推進	確認した方向性に基づいて各自研究を推進し、随時報告する。
第 14 回	秋学期の到達点の確認	秋学期の研究の到達点を確認し、今後の進め方を確認する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

博士後期課程の院生としての自覚を持って、それぞれの研究テーマを追究していくこと。

【テキスト（教科書）】

決まった教科書は特にない。

【参考書】

研究の進展に応じて適宜指示する。

【成績評価の方法と基準】

随時の研究報告の内容などによって評価する。

【学生の意見等からの気づき】

該当せず。

【担当教員の専門分野等】

< 専門領域 > コミュニティ政策論

< 研究テーマ > 都市内分権（特に日本とドイツ）、自治会・町内会の研究

< 主要研究業績 >

編著『コミュニティの自治』（日本評論社、2009年）

単著論文「プレーメン市の地域評議会法の新展開に見る「参加」と「協働」

水林彪・吉田克己編『市民社会と市民法——civilの思想と制度』日本評論社、2018年、257-287頁。

単著論文「日本型都市内分権の限界と可能性—宮崎市の地域自治区制度の運用を素材として」『法学志林』第118巻第3号、2020年、1-88頁。

【Outline and objectives】

This is part of the research-training program for Ph.D research students working in the area of public policy studies. The workshop's principal objective is to foster intellectual exchange by showcasing work from leading and emerging scholars. The workshop will provide a forum in which research students can present their work, discuss the theoretical and methodological problems involved, discuss common challenges in conducting research in this area and obtain feedback on their work.

SOS700P1 - 003

公共政策学特殊研究2 A

廣瀬 克哉

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

公共政策研究科の論文指導科目として、博士後期課程2年目の院生を対象に、公共政策学に新たな知見を与え得る博士論文を執筆すべく指導を行うものである。

【到達目標】

受講生に自らの研究テーマに関する専門知識や高度な研究方法、論文執筆の力を体得させ、専門的な学会や学術雑誌での発表や投稿を経験させ、最終的に博士論文を完成させることを到達目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連している。

【授業の進め方と方法】

各自の研究の進展に応じて、研究報告を行い、相互に議論を深めることを基本とする。

各履修者の学習・研究の進捗に応じて進めていく。下に示す「授業計画」はあくまで目安であるが、まさに目安として、1年間にどんなことを身につけたらいいかをあらかじめ知っておくために活用してもらいたい。

各自の研究の進展に応じて、研究報告を行い、相互に議論を深めることを基本とする。

基本的には対面で行うことを予定しているが、感染状況によって Zoom によるオンラインに切りかえて行う場合がある。指導学生を登録した Google Classroom を設定する予定であり、発表資料等はそれを使って共有する。

学生へのフィードバックは授業内で行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	春学期の到達目標を提示し、各自の現状を認識する。
第2回	研究関心の報告	各自の研究関心についてその概要を報告し、議論する。
第3回	課題の明確化	博士論文の執筆を進める上での課題を明確化する。
第4回	研究報告1	3年目の院生による研究報告を受け、その内容について相互に論評する。
第5回	研究報告2	2年目の院生として研究報告を行い、その内容について相互に論評する。
第6回	研究報告3	1年目の院生による研究報告を受け、その内容について相互に論評する。
第7回	研究計画の作成	1年目の研究計画を振り返り、2～3年目の研究計画を定める。
第8回	先行研究の整理	先行研究のレビューに関する章の執筆を試みる。
第9回	現地調査の整理1	フィールド・ワークの資料をまとめる。
第10回	現地調査の整理2	フィールド・ワークの成果を分析する。
第11回	専門分野の研究動向の理解	各自の専門分野の研究動向について報告する。
第12回	研究報告4	3年目の院生による研究報告を受け、その内容について相互に論評する。
第13回	研究報告5	2年目の院生として研究報告を行い、その内容について相互に論評する。
第14回	研究報告6	1年目の院生による研究報告を受け、その内容について相互に論評する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

各自の関心に基づいて主体的に研究を進めること。

【テキスト（教科書）】

教科書は使用しない。

【参考書】

なし。

【成績評価の方法と基準】

研究報告（60%）、議論への貢献（40%）とする。

【学生の意見等からの気づき】

該当なし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 行政学、地方自治

<研究テーマ> 二元代表制の理念と実態

<主要研究業績>

編著『自治体議会改革の固有性と普遍性』（法政大学出版局、2018年）

編著『議会改革白書 各年度版』（生活社、2009年～2016年）

【Outline and objectives】

This is a supervised course in which you work autonomously and independently under the guidance of your supervisor. The course helps to situate one's own work within the broader debates in the social sciences through discussions on some key concepts, theories and methods used in the field of public policy.

公共政策学特殊研究 2 B

廣瀬 克哉

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

公共政策研究科の論文指導科目として、博士後期課程 2 年目の院生を対象に、公共政策学に新たな知見を与え得る博士論文を執筆すべく指導を行うものである。

【到達目標】

受講生に自らの研究テーマに関する専門知識や高度な研究方法、論文執筆の力を体得させ、専門的な学会や学術雑誌での発表や投稿を経験させたくうえで、最終的に博士論文を完成させることを到達目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連している。

【授業の進め方と方法】

各自の研究の進展に応じて、研究報告を行い、相互に議論を深めることを基本とする。

各履修者の学習・研究の進捗に応じて進めていく。下に示す「授業計画」はあくまで目安であるが、まさに目安として、1 年間にどんなことを身につけたらいいかをあらかじめ知っておくために活用してもらいたい。

基本的には対面で行うことを予定しているが、感染状況によって Zoom によるオンラインに切りかえて行う場合がある。指導学生を登録した Google Classroom を設定する予定であり、発表資料等はそれを使って共有する。

学生へのフィードバックは授業内で行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	オリエンテーション	秋学期の到達目標を提示し、各自の現状を認識する。
第 2 回	資料の収集	研究対象とする資料にアクセスする。
第 3 回	基本的な文献の検討	基本的な文献を批判的に検討する。
第 4 回	文献報告 1	3 年目の院生による文献報告を受け、その内容について相互に論評する。
第 5 回	文献報告 2	2 年目の院生として文献報告を行い、その内容について相互に論評する。
第 6 回	文献報告 3	1 年目の院生による文献報告を受け、その内容について相互に論評する。
第 7 回	研究遂行上の問題点の解決	各自の研究遂行上の悩みを共有し、解決をはかる。
第 8 回	理論枠組みの明確化	論文の基本的な理論枠組みを検討する。
第 9 回	論文のオリジナリティの明確化	各自の研究における独自性について議論する。
第 10 回	リサーチ・プロポーザルの作成	プロポーザルを更新する。
第 11 回	英文によるサマリーの執筆	思考の明確化・訓練のために英文による文章作成を試みる。
第 12 回	研究報告 1	3 年目の院生による研究報告を受け、その内容について相互に論評する。
第 13 回	研究報告 2	2 年目の院生として研究報告を行い、その内容について相互に論評する。
第 14 回	研究報告 3	1 年目の院生による研究報告を受け、その内容について相互に論評する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

各自の関心に基づいて主体的に研究を進めること。

【テキスト（教科書）】

教科書は使用しない。

【参考書】

なし。

【成績評価の方法と基準】

研究報告（60 %）、議論への貢献（40 %）とする。

【学生の意見等からの気づき】

該当なし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 行政学、地方自治

<研究テーマ> 二元代表制の理念と実態

<主要研究業績>

編著『自治体議会改革の固有性と普遍性』（法政大学出版局、2018 年）

編著『議会改革白書 各年度版』（生活社、2009 年～2016 年）

【Outline and objectives】

This is a supervised course in which you work autonomously and independently under the guidance of your supervisor. The course helps to situate one's own work within the broader debates in the social sciences through discussions on some key concepts, theories and methods used in the field of public policy.

SOS700P1 - 003

公共政策学特殊研究 2 A

淵元 初姫

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

公共政策研究科の論文指導科目として、博士後期課程 2 年目の院生を対象に、公共政策学に新たな知見を与え得る博士論文を執筆すべく指導を行うものである。

【到達目標】

院生は、各自が設定したりサーチ・クエスチョンと研究仮説に従い、主要な文献・資料を批判的に検討しながら論文の方向性を定めることが求められる。また、研究テーマによっては、現地調査を深めていく。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連している。

【授業の進め方と方法】

各自の研究の進展に応じて、研究報告を行い、相互に議論を深めることを基本とする。報告に対しては、授業中に参加者全員による質疑・議論を行い、講評を行うことによってフィードバックする。授業方式は原則として対面授業とする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】**春学期**

回	テーマ	内容
第 1 回	オリエンテーション	春学期の到達目標を提示し、各自の現状を認識する。
第 2 回	研究関心の報告	各自の研究関心についてその概要を報告し、議論する。
第 3 回	課題の明確化	博士論文の執筆を進める上での課題を明確化する。
第 4 回	研究報告 1	3 年目の院生による研究報告を受け、その内容について相互に論評する。
第 5 回	研究報告 2	2 年目の院生として研究報告を行い、その内容について相互に論評する。
第 6 回	研究報告 3	1 年目の院生による研究報告を受け、その内容について相互に論評する。
第 7 回	研究計画の作成	1 年目の研究計画を振り返り、2~3 年目の研究計画を定める。
第 8 回	先行研究の整理	先行研究のレビューに関する章の執筆を試みる。
第 9 回	現地調査の整理 1	フィールド・ワークの資料をまとめる。
第 10 回	現地調査の整理 2	フィールド・ワークの成果を分析する。
第 11 回	専門分野の研究動向の理解	各自の専門分野の研究動向について報告する。
第 12 回	研究報告 4	3 年目の院生による研究報告を受け、その内容について相互に論評する。
第 13 回	研究報告 5	2 年目の院生として研究報告を行い、その内容について相互に論評する。
第 14 回	研究報告 6	1 年目の院生による研究報告を受け、その内容について相互に論評する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

各自の関心に基づいて主体的に研究を進めること。

【テキスト（教科書）】

教科書は使用しない。

【参考書】

なし。

【成績評価の方法と基準】

研究報告（60 %）、議論への貢献（40 %）とする。

【学生の意見等からの気づき】

該当なし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 比較政治学、コミュニティ政策、福祉政策

<研究テーマ> ポスト福祉国家時代の市民社会論、地域社会における社会的包摂、英国・スコットランドの地方自治・自治体内分権

<主要研究業績>

「スコットランドの地域評議会－制度の基本的構想とその機能の実際」名和田是彦編（2009）『コミュニティの自治－自治体内分権と協働の国際比較』pp.81-118、日本評論社

「スコットランドにおける権限移譲とジェンダー・クォータ」三浦まり・衛藤幹子編著（2014）『ジェンダー・クォータ－世界の女性議員はなぜ増えたのか』pp.203-26、明石書店

「地域社会における社会的連帯の再編：居場所づくりにみる三人称的連帯の可能性」金安岩男・牧瀬稔編著（2019）『都市・地域政策研究の現在』pp.131-42、地域開発研究所

【Outline and objectives】

This is a supervised course in which you work autonomously and independently under the guidance of your supervisor. The course helps to situate one's own work within the broader debates in the social sciences through discussions on some key concepts, theories and methods used in the field of public policy.

公共政策学特殊研究2 B

淵元 初姫

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

公共政策研究科の論文指導科目として、博士後期課程 2 年目の院生を対象に、公共政策学に新たな知見を与え得る博士論文を執筆すべく指導を行うものである。

【到達目標】

院生は、各自が設定したリサーチ・クエスチョンと研究仮説に従い、主要な文献・資料を批判的に検討しながら論文の方向性を定めることが求められる。また、研究テーマによっては、現地調査を深めていく。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連している。

【授業の進め方と方法】

各自の研究の進展に応じて、研究報告を行い、相互に議論を深めることを基本とする。報告に対しては、授業中に参加者全員による質疑・議論を行い、講評を行うことによってフィードバックする。授業方式は原則として対面授業とする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	オリエンテーション	秋学期の到達目標を提示し、各自の現状を認識する。
第 2 回	資料の収集	研究対象とする資料にアクセスする。
第 3 回	基本的な文献の検討	基本的な文献を批判的に検討する。
第 4 回	文献報告 1	3 年目の院生による文献報告を受け、その内容について相互に論評する。
第 5 回	文献報告 2	2 年目の院生として文献報告を行い、その内容について相互に論評する。
第 6 回	文献報告 3	1 年目の院生による文献報告を受け、その内容について相互に論評する。
第 7 回	研究遂行上の問題点の解決	各自の研究遂行上の悩みを共有し、解決をはかる。
第 8 回	理論枠組みの明確化	論文の基本的な理論枠組みを検討する。
第 9 回	論文のオリジナリティの明確化	各自の研究における独自性について議論する。
第 10 回	リサーチ・プロポーザルの作成	プロポーザルを更新する。
第 11 回	英文によるサマリーの執筆	思考の明確化・訓練のために英文による文章作成を試みる。
第 12 回	研究報告 1	3 年目の院生による研究報告を受け、その内容について相互に論評する。
第 13 回	研究報告 2	2 年目の院生として研究報告を行い、その内容について相互に論評する。
第 14 回	研究報告 3	1 年目の院生による研究報告を受け、その内容について相互に論評する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

各自の関心に基づいて主体的に研究を進めること。

【テキスト（教科書）】

教科書は使用しない。

【参考書】

なし。

【成績評価の方法と基準】

研究報告（60%）、議論への貢献（40%）とする。

【学生の意見等からの気づき】

該当なし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 比較政治学、コミュニティ政策、福祉政策
<研究テーマ> ポスト福祉国家時代の市民社会論、地域社会における社会的包摂、英国・スコットランドの地方自治・自治体内分権
<主要研究業績>
「スコットランドの地域評議会－制度の基本的構想とその機能の実際」名和田是彦編（2009）『コミュニティの自治－自治体内分権と協働の国際比較』pp.81-118、日本評論社
「スコットランドにおける権限移譲とジェンダー・クォータ」三浦まり・衛藤幹子編著（2014）『ジェンダー・クォータ－世界の女性議員はなぜ増えたのか』pp.203-26、明石書店

「地域社会における社会的連帯の再編：居場所づくりにみる三人称的連帯の可能性」金安岩男・牧瀬稔編著（2019）『都市・地域政策研究の現在』pp.131-42、地域開発研究所

【Outline and objectives】

This is a supervised course in which you work autonomously and independently under the guidance of your supervisor. The course helps to situate one's own work within the broader debates in the social sciences through discussions on some key concepts, theories and methods used in the field of public policy.

SOS700P1 - 003

公共政策学特殊研究 2 A

加藤 寛之

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

博士論文を作成することが受講生の課題である。博士論文の中間報告について討論しながら作成する。

【到達目標】

到達目標は大学院生が論文を作成することです。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連、特に「DP2」に特に強く関連している。

【授業の進め方と方法】

論文の進捗状況を報告すること、必要な論点について議論すること、議論の結果を元に再度調べて報告すること、この繰り返しです。

原則対面で行い、フィードバックは毎回課題をだし、その都度コメントします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】**春学期**

回	テーマ	内容
第1回	論文の現在の進捗状況について報告する。	報告と討論。
第2回	調査研究の課題について。	議論を補足する調査研究の課題をみる。討論。
第3回	調査研究の課題について。	議論を補足する調査研究の課題をみる。討論。
第4回	調査研究の課題について。	議論を補足する調査研究の課題をみる。討論。
第5回	論文の中間報告と討論	調査研究の成果について報告する。討論。
第6回	論文の中間報告と討論	調査研究の成果について報告する。討論。
第7回	論文の中間報告と討論	調査研究の成果について報告する。討論。
第8回	論文の中間報告と討論	調査研究の成果について報告する。討論。
第9回	論文の中間報告と討論	調査研究の成果について報告する。討論。
第10回	博士論文の全体像を報告する	報告と討論。
第11回	博士論文の全体像を報告する	報告と討論
第12回	博士論文の全体像を報告する	報告と討論
第13回	博士論文の全体像を報告する	報告と討論
第14回	博士論文の全体像を報告する	報告と討論

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

調査研究を着実にやること。

【テキスト（教科書）】

テキストはなし。

【参考書】

討論の中で必要な文献を指定します。

【成績評価の方法と基準】

論文の進捗状況と討論への参加をもとに行います。

成績評価は出席 40 % と議論への参加 40 %、論文進捗状況 20 % で 100 % とする。

【学生の意見等からの気づき】

学生の研究テーマや論文の進展具合によってカスタマイズしていきます。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 地域産業論・戦略論・企業論

<研究テーマ> 造船産業各社の戦略・国際分業・産業集積の研究

<主要研究業績>

「船舶開発と造船産業——ビジネス・システムの不確実性がもたらす複雑性へのマネジメント」藤本隆宏編『人工物複雑化の時代』（有斐閣）

「日本の造船産業における企業競争力の変動とその要因分析—国際競争力構図の変化と新たな取り組み—」柳町功他編著『韓日産業競争力比較研究』（三星経済研究所）

「造船産業の競争構図の変容と雁行形態論・塩路モデルの再検討」（『アジア経営研究』）

「日韓競争力転換のメカニズム—造船産業の事例—」（『組織科学』）

「資源蓄積の機能不全—成熟・衰退期への適応が再成長期の制約に化けるメカニズム」（『経営学論集』）

【Outline and objectives】

To muster the ability of writing a lot of papers.

公共政策学特殊研究2 B

加藤 寛之

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

博士論文の作成を指導するのがこの講義の目的です。

【到達目標】

到達目標は大学院生が論文を作成することです。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連、特に「DP2」に特に強く関連している。

【授業の進め方と方法】

論文の進捗状況を報告すること、必要な論点について議論すること、議論の結果を元に再度調べて報告すること、この繰り返しです。原則対面で実施し、フィードバックは毎回課題をだし、その都度コメントします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	論文の現在の進捗状況について報告する。	報告と討論。
第2回	調査研究の課題について。	議論を補足する調査研究の課題をみる。
第3回	調査研究の課題について。	議論を補足する調査研究の課題をみる。
第4回	調査研究の課題について。	議論を補足する調査研究の課題をみる。
第5回	論文の中間報告と討論	調査研究の成果について報告する。
第6回	論文の中間報告と討論	調査研究の成果について報告する。
第7回	論文の中間報告と討論	調査研究の成果について報告する。
第8回	論文の中間報告と討論	調査研究の成果について報告する。
第9回	論文の中間報告と討論	調査研究の成果について報告する。
第10回	博士論文の全体像を報告する	報告と討論
第11回	博士論文の全体像を報告する	報告と討論
第12回	博士論文の全体像を報告する	報告と討論
第13回	博士論文の全体像を報告する	報告と討論
第14回	博士論文の全体像を報告する	報告と討論

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

調査研究を着実に行うこと。

【テキスト（教科書）】

テキストはなし。

【参考書】

討論の中で必要な文献を指定します。

【成績評価の方法と基準】

成績評価は、論文の進捗状況と討論への参加をもとに行います。成績評価は出席 40 % と議論への参加 40 %、論文進捗状況 20 % で 100 % とする。

【学生の意見等からの気づき】

各学生の論文の進展具合やテーマに応じて指導をカスタマイズしていきます。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 地域産業論・戦略論・企業論
<研究テーマ> 造船産業各社の戦略・国際分業・産業集積の研究
<主要研究業績>
「船舶開発と造船産業——ビジネス・システムの不確実性がもたらす複雑性へのマネジメント」藤本隆宏編『人工物複雑化の時代』（有斐閣）
「日本の造船産業における企業競争力の変動とその要因分析—国際競争力構図の変化と新たな取り組み—」柳町功他編著『韓日産業競争力比較研究』（三星経済研究所）
「造船産業の競争構図の変容と雁行形態論・塩路モデルの再検討」（『アジア経営研究』）
「日韓競争力転換のメカニズム—造船産業の事例—」（『組織科学』）
「資源蓄積の機能不全—成熟・衰退期への適応が再成長期の制約に化けるメカニズム」（『経営学論集』）

【Outline and objectives】

To publish your papers, you must digest a lot of previous studies.

SOS700P1 - 003

公共政策学特殊研究2 A

白鳥 浩

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

公共政策研究科の政治学、国際政治学領域における博士論文指導科目として、博士号取得に向けた研究論文の作成について、受講者の問題関心に応じて指導していく。

【到達目標】

公共政策研究の一部としての、政治学、国政政治学領域におけるそれぞれの研究対象となる政策領域について、必要となる専門的な知見や研究方法、さらには理論的なフレームワークや、論文執筆の技術を学び、最終的に、要求されるスタンダードをクリアした博士論文を、作成することを到達目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連、特に「DP2」に特に強く関連している。

【授業の進め方と方法】

公共政策研究の領域における政治学、国際政治学の博士論文の作成を、最終的に目指す研究指導を行う。基本的には、教員と学生全員による演習方式で、研究課題の設定、方法論の選定、資料の収集・検討・分析について、参加者各自が自分の研究テーマについて報告し、研究を進める。そして、その報告をもとに博士論文に求められるアカデミック・スタンダードに到達することを旨とする。講義は対面を中心とする。講義計画は講義の展開により、若干の変更もありうる。

変更の可能性もあるが対面講義を基本とする。また、学生へのフィードバックにおいては、適宜、講義、報告のたびに行うものとする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】**春学期**

回	テーマ	内容
1 回	研究テーマの設定	同左
2 回	研究テーマの基礎的理解	同左
3 回	研究テーマの標準的理解	同左
4 回	研究テーマの高度な理解	同左
5 回	研究テーマに基づく研究企画の立案	同左
6 回	論文作成の基礎的技法	同左
7 回	論文作成の標準的技法	同左
8 回	論文報告のレジユメの作成	同左
9 回	先行研究の基礎的検討	同左
10 回	先行研究の標準的理解の確認	同左
11 回	先行研究の整理	同左
12 回	研究テーマの意義の確認	同左
13 回	論文の理論的なフレームワークの設定	同左
14 回	論文の研究企画構成の確認	同左

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

各受講生の研究対象についての先行研究のリサーチ、入手可能な研究資料の探索、テーマとの整合性がある理論的フレームワークの検討など。

【テキスト（教科書）】

適宜指示する。

【参考書】

適宜指示する。

【成績評価の方法と基準】

以下のものは目安であるが、とりあえず博士課程1年目においては、研究テーマの設定とその領域の先行研究の検討を中心として、その研究の進展を勘案して評価する。つづく2年目においては、1年目の研究を基礎としながら研究対象についてのリサーチ・クエスチョンの再設定とその研究の進展、そのロジックの卓越性を中心として評価する。最終学年となる3年目においては、博士學位論文の完成を到達目標とし、その準備の達成度を総合的に評価する。望むらくは、学生におかれましては、その執筆の過程での成果を世に問うことを目的として、一年に1本ほど短い論文を発表することを目指してもらいたい。学会への参加、研究の進捗の報告などの平常点100%。

【学生の意見等からの気づき】

双方向のコミュニケーションを大切にしたい。

【学生が準備すべき機器他】

特になし

【その他の重要事項】

特になし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

現代政治分析（国際・国内比較）・政治理論

<研究テーマ>

1. 日本の現代政治
2. グローバリズムと国民国家の変容
3. 地方政治研究
4. 政党に関する理論
5. 現代政治のデモクラシー

<主要研究業績>白鳥浩『都市対地方の政治学』芦書房、2004年

白鳥浩『市民・選挙・国家—シュタイン・ロッカンの政治理論—』東海大学出版会、2002年

Hirosi Shiratori, "Le mouvement référendaire au Japon après la Guerre froide. Une analyse comparative inspirée de Rokkan," Revue française de science politique, vol.51, Numero.4, 2001.

【Outline and objectives】

This course aims to help student's thesis writing from the point of view of an academic standard. It offers many suggestions and insights on thesis writings of each student.

SOS700P1 - 004

公共政策学特殊研究2 B

白鳥 浩

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

公共政策研究科の政治学、国際政治学領域における博士論文指導科目として、博士号取得に向けた研究論文の作成について、受講者の問題関心に応じて指導していく。

【到達目標】

公共政策研究の一部としての、政治学、国政政治学領域におけるそれぞれの研究対象となる政策領域について、必要となる専門的な知見や研究方法、さらには理論的なフレームワークや、論文執筆の技術を学び、最終的に、要求されるスタンダードをクリアした博士論文を、作成することを到達目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連、特に「DP2」に特に強く関連している。

【授業の進め方と方法】

公共政策研究の領域における政治学、国際政治学の博士論文の作成を、最終的に目指す研究指導を行う。基本的には、教員と学生全員による演習方式で、研究課題の設定、方法論の選定、資料の収集・検討・分析について、参加者各自が自分の研究テーマについて報告し、研究を進める。そして、その報告をもとに博士論文に求められるアカデミック・スタンダードに到達することを旨とする。講義は対面を中心とする。講義計画は講義の展開により、若干の変更もありうる。

変更の可能性もあるが対面講義を基本とする。また、学生へのフィードバックにおいては、適宜、講義、報告のたびに行うものとする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
1 回	研究テーマの設定	同左
2 回	研究テーマの基礎的理解	同左
3 回	研究テーマの標準的理解	同左
4 回	研究テーマの高度な理解	同左
5 回	研究テーマに基づく研究企画の立案	同左
6 回	論文作成の基礎的技法	同左
7 回	論文作成の標準的技法	同左
8 回	論文報告のレジメの作成	同左
9 回	先行研究の基礎的検討	同左
10 回	先行研究の標準的理解の確認	同左
11 回	先行研究の整理	同左
12 回	研究テーマの意義の確認	同左
13 回	論文の理論的なフレームワークの設定	同左
14 回	論文の研究企画構成の確認	同左

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

各受講生の研究対象についての先行研究のリサーチ、入手可能な研究資料の探索、テーマとの整合性がある理論的フレームワークの検討など。

【テキスト（教科書）】

適宜指示する。

【参考書】

適宜指示する。

【成績評価の方法と基準】

以下のものは目安であるが、とりあえず博士課程1年目においては、研究テーマの設定とその領域の先行研究の検討を中心として、その研究の進展を勘案して評価する。つづく2年目においては、1年目の研究を基礎としながら研究対象についてのリサーチ・クエスチョンの再設定とその研究の進展、そのロジックの卓越性を中心として評価する。最終学年となる3年目においては、博士学位論文の完成を到達目標とし、その準備の達成度を総合的に評価する。望むらくは、学生におかれましては、その執筆の過程での成果を世に問うことを目的として、一年に1本ほど短い論文を発表することを目指してもらいたい。学会への参加、研究の進捗の報告などの平常点100%。

【学生の意見等からの気づき】

双方向のコミュニケーションを大切にしたい。

【学生が準備すべき機器他】

特になし

【その他の重要事項】

特になし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

現代政治分析（国際・国内比較）・政治理論

<研究テーマ>

1. 日本の現代政治
2. グローバリズムと国民国家の変容
3. 地方政治研究
4. 政党に関する理論
5. 現代政治のデモクラシー

<主要研究業績>白鳥浩『都市対地方の政治学』芦書房、2004年

白鳥浩『市民・選挙・国家—シュタイン・ロッカンの政治理論—』東海大学出版会、2002年

Hiroshi Shiratori, "Le mouvement référendaire au Japon après la Guerre froide. Une analyse comparative inspirée de Rokkan," *Revue française de science politique*, vol.51, Numéro.4, 2001.

【Outline and objectives】

This course aims to help student's thesis writing from the point of view of an academic standard. It offers many suggestions and insights on thesis writings of each student.

SOS700P1 - 003

公共政策学特殊研究 2 A

中筋 直哉

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

地域社会学を知的基盤とする公共政策研究の博士論文の完成。

【到達目標】

博士論文につながる学会投稿論文を執筆する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連、特に「DP2」に特に強く関連している。

【授業の進め方と方法】

教室で対面で実施（予定）。履修生ごとに個別指導する他、全履修生による文献講読演習を月1回程度行う。提出物については個別にフィードバックする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
1	履修者の顔合わせ	各自の論文テーマの発表
2	1人目の個別指導 1	論文構想の検討
3	2人目の個別指導 1	論文構想の検討
4	3人目の個別指導 1	論文構想の検討
5	文献講読演習 1	専門文献の講読と討論
6	1人目の個別指導 2	先行研究の検討
7	2人目の個別指導 2	先行研究の検討
8	3人目の個別指導 2	先行研究の検討
9	文献講読演習 2	専門文献の講読と討論
10	1人目の個別指導 3	データ分析の検討
11	2人目の個別指導 3	データ分析の検討
12	3人目の個別指導 3	データ分析の検討
13	文献講読演習 3	専門文献の講読と討論
14	全員演習	履修者の到達度の確認と合評

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

各自の研究計画に沿った調査研究活動。本授業の準備・復習時間は各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

中筋直哉・五十嵐泰正編著,2013,『よくわかる都市社会学』ミネルヴァ書房。

【参考書】

文献講読演習にて指示する

【成績評価の方法と基準】

指定された日程で個別指導を受け、文献講読演習に参加することが成績評価の条件。研究計画通り研究を進められれば C、文献講読演習等において貢献すれば B、学会査読論文など成果を挙げれば A、その内容が学術的に顕著なものであれば A+、とする。

【学生の意見等からの気づき】

より専門性の高い指導を心がける。

【学生が準備すべき機器他】

学習支援システムへのアクセスが必須。

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉 地域社会学
 〈研究テーマ〉 地域社会の構造分析
 〈主要研究業績〉 上記教科書、『群衆の居場所』（2005, 新曜社）

【Outline and objectives】

This seminar aims to prepare student's doctoral thesis by face to face direction and group discussion.

公共政策学特殊研究2 B

中筋 直哉

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

地域社会学を知的基盤とする公共政策研究の博士論文の完成。

【到達目標】

博士論文につながる学会投稿論文を執筆する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連、特に「DP2」に特に強く関連している。

【授業の進め方と方法】

教室で対面で実施（予定）。履修生ごとに個別指導する他、全履修生による文献講読演習を月1回程度行う。提出物については個別にフィードバックする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
1	文献講読演習 4	専門文献の講読と討論
2	1人目の個別指導 4	論文構成の確認
3	2人目の個別指導 4	論文構成の確認
4	3人目の個別指導 4	論文構成の確認
5	文献講読演習 5	専門文献の講読と討論
6	1人目の個別指導 5	結論の確認
7	2人目の個別指導 5	結論の確認
8	3人目の個別指導 5	結論の確認
9	文献講読演習 6	専門文献の講読と討論
10	1人目の個別指導 6	政策提言の確認
11	2人目の個別指導 6	政策提言の確認
12	3人目の個別指導 6	政策提言の確認
13	文献講読演習 7	専門文献の講読と討論
14	全員演習	履修者の到達度の確認と合評

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

各自の研究計画に沿った調査研究活動。本授業の準備・復習時間は各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

中筋直哉・五十嵐泰正編著,2013,『よくわかる都市社会学』ミネルヴァ書房。

【参考書】

文献講読演習にて指示する

【成績評価の方法と基準】

指定された日程で個別指導を受け、文献講読演習に参加することが成績評価の条件。研究計画通り研究を進められれば C、文献講読演習等において貢献すれば B、学会査読論文など成果を挙げれば A、その内容が学術的に顕著なものであれば A+、とする。

【学生の意見等からの気づき】

より専門性の高い指導を心がける。

【学生が準備すべき機器他】

学習支援システムへのアクセスが必須。

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉 地域社会学
〈研究テーマ〉 地域社会の構造分析
〈主要研究業績〉 上記教科書、『群衆の居場所』（2005, 新曜社）

【Outline and objectives】

This seminar aims to prepare student's doctoral thesis by face to face direction and group discussion.

SOS700P1 - 005

公共政策学特殊研究3 A

杉崎 和久

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

公共政策研究科の博士論文指導科目として、博士号取得に向けた研究構想の練り方や論文のまとめ方等について、個別の状況に応じて指導していく。

【到達目標】

都市政策に関する専門知識や高度な研究方法、論文執筆の力を体得し、最終的に博士論文を作成することを目標とする。特に3年春学期は、博士論文本論執筆に向けて、学会論文等の投稿を行うこととする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連している。

【授業の進め方と方法】

基本的には個別の研究進捗状況に合わせて、報告、ディスカッション、指導を行う。これらの過程は、個別ではなく、受講生全体で行う。課題については、授業の中で発表、討論を行い、その中で講評を行う。授業は原則「対面」で行うが、一部「リアルタイムオンライン授業」を行うこともある。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1.2 回	オリエンテーション	春季休暇期間の進捗状況の報告をし、研究計画を検討する。
第 3.4 回	論文投稿の準備	学会等への論文投稿のための報告を行う、指導をする。
第 5.6 回	研究進捗状況の報告	研究進捗状況の報告を行う。
第 7.8 回	研究進捗状況の報告	研究進捗状況の報告を行う。
第 9.10 回	研究進捗状況の報告	研究進捗状況の報告を行う。
第 11.12 回	研究進捗状況の報告	研究進捗状況の報告を行う。
第 13.14 回	ふりかえり	夏季休暇期間中の研究計画の検討を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

博士論文執筆のための調査、分析作業は各自行う。

【テキスト（教科書）】

適宜、推薦する。

【参考書】

適宜、推薦する。

【成績評価の方法と基準】

研究報告（60%）、議論への貢献（40%）

【学生の意見等からの気づき】

論文研究指導科目については、授業改善アンケートを実施していない。

【学生が準備すべき機器他】

特になし

【その他の重要事項】

特になし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>都市計画、市民参加手法

<研究テーマ>公共的意思決定における市民参加のあり方、住民主体のまちづくりを支える支援システム、まちづくりの現代史

<主要研究業績>『住民主体の都市計画』（分担執筆）学芸出版社、2009年
「まちづくりセンターを取り巻く課題」『季刊まちづくり』2011年3月
「参加のプロセスマネジメント」『地方自治職員研修』2013年9月号

【Outline and objectives】

The purpose of this lecture is to create research ideas and to write articles.

公共政策学特殊研究3B

杉崎 和久

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

公共政策研究科の博士論文指導科目として、博士号取得に向けた研究構想の練り方や論文のまとめ方等について、個別の状況に応じて指導していく。

【到達目標】

都市政策に関する専門知識や高度な研究方法、論文執筆の力を体得し、最終的に博士論文を作成する能力を獲得すること

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連している。

【授業の進め方と方法】

基本的には個別の研究進捗状況に合わせて、報告、ディスカッション、指導を行う。これらの過程は、個別ではなく、受講生全体で行う。

課題については、授業の中で発表、討論を行い、その中で講評を行う。

授業は原則「対面」で行うが、一部「リアルタイムオンライン授業」を行うこともある。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1.2 回	オリエンテーション	夏季休暇期間中の進捗状況の報告、今後の研究計画を検討する。
第 3.4 回	都市政策セミナー大学院生セッションの投稿	都市政策セミナー大学院生セッションに投稿する論文の確認をする。
第 5.6 回	博士論文執筆状況の報告	都市政策セミナー大学院生セッションにおける発表の練習をする。
第 7.8 回	博士論文執筆状況の報告	博士論文の執筆状況について、報告をし、指導をうける。
第 9.10 回	博士論文執筆状況の報告	博士論文の執筆状況について、報告をし、指導をうける。
第 11.12 回	博士論文の提出確認	博士論文の提出に向けた、作業報告を行い、指導をうける。
第 13.14 回	博士論文口述試験の準備	口述試験に向けた発表準備を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

博士論文執筆のための調査、分析作業は各自行う。

【テキスト（教科書）】

適宜、推薦する。

【参考書】

適宜、推薦する。

【成績評価の方法と基準】

研究報告（60%）、議論への貢献（40%）

【学生の意見等からの気づき】

論文研究指導科目については、授業改善アンケートを実施していない。

【学生が準備すべき機器他】

特になし

【その他の重要事項】

特になし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 都市計画、市民参加手法

<研究テーマ> 公共的意思決定における市民参加のあり方、住民主体のまちづくりを支える支援システム、まちづくりの現代史

<主要研究業績> 『住民主体の都市計画』（分担執筆）学芸出版社、2009年

『まちづくりセンターを取り巻く課題』『季刊まちづくり』2011年3年

『参加のプロセスマネジメント』『地方自治職員研修』2013年9月号

【Outline and objectives】

The purpose of this lecture is to create research ideas and to write articles.

SOS700P1 - 005

公共政策学特殊研究3 A

名和田 是彦

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

自らが確立した研究テーマを自らが決めた研究方法によって追究していくことを通じて、博士論文を完成させること。

【到達目標】

博士論文を完成させ、できれば9月、次善としては2月に、博士学位請求論文を提出すること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連している。

【授業の進め方と方法】

博士後期課程の研究は、博士論文の執筆をはじめとして、学界に新たな知見をもたらすオリジナルな研究であるから、各院生の個性を十分に発揮してもらう必要がある。定まった進め方や方法はないと言ってもよく、院生相互の及び教員との議論から学ぶことが、授業としては本来的なあり方である。原則として対面により行うことを考えている。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】**春学期**

回	テーマ	内容
第1回	二年目までの研究の到達点の確認と博士論文完成に至るプロセスの確認	二年目までの研究を振り返ってその成果を確認し、博士論文完成に向けた研究作業や執筆手順を確認する。
第2回～	研究の推進	確認したところに基づいて、研究を進め、博士論文を執筆していく。
第13回		
第14回	論文執筆中間総括	博士論文の執筆状況を確認し、今後の展望を確認する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

博士後期課程の院生としての自覚を持って、それぞれの研究テーマを追究していくこと。

【テキスト（教科書）】

決まった教科書は特にない。

【参考書】

研究の進展に応じて適宜指示する。

【成績評価の方法と基準】

随時の研究報告の内容などによって評価する。

【学生の意見等からの気づき】

該当せず。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> コミュニティ政策論

<研究テーマ> 都市内分権（特に日本とドイツ）、自治会・町内会の研究

<主要研究業績>

編著『コミュニティの自治』（日本評論社、2009年）

単著論文「プレーメン市の地域評議会法の新展開に見る「参加」と「協働」

水林彪・吉田克己編『市民社会と市民法——civilの思想と制度』日本評論社、

2018年、257～287頁。

単著論文「日本型都市内分権の限界と可能性—宮崎市の地域自治区制度の運用を素材として」『法学志林』第118巻第3号、2020年、1～88頁。

【Outline and objectives】

Students of the fifth semester should subscribe to this subject.

Each student should pursue her/his own research project according to her/his own method to complete the dissertation.

公共政策学特殊研究 3 B

名和田 是彦

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

自らが確立した研究テーマを自らが決めた研究方法によって追究していくことを通じて、博士論文を完成させること。

【到達目標】

9月に博士論文の提出を終えている場合は、審査小委員会の指示に従って修正作業を進めることによって、博士論文を最終的に完成させること。2月提出を目指している場合には、提出に向けて執筆を進めること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連している。

【授業の進め方と方法】

博士後期課程の研究は、博士論文の執筆をはじめとして、学界に新たな知見をもたらすオリジナルな研究であるから、各院生の個性を十分に発揮してもらう必要がある。定まった進め方や方法はないと言ってもよく、院生相互の及び教員との議論から学ぶことが、授業としては本来のあり方である。原則として対面により行うことを考えている。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	論文執筆状況の確認	博士論文の執筆状況ないし修正状況を確認し、今後の展望を確認する。
第2回～ 第13回	博士論文執筆	必要に応じて補足的に研究を進めながら、博士論文の執筆ないし修正を進めていく。
第14回	研究の振り返り	博士後期課程の研究を振り返り、今後研究者あるいは実務者としてどのように研究を生かしていくかを考える。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

博士後期課程の院生としての自覚を持って、それぞれの研究テーマを追究していくこと。

【テキスト（教科書）】

決まった教科書は特にない。

【参考書】

研究の進展に応じて適宜指示する。

【成績評価の方法と基準】

随時の研究報告の内容などによって評価する。

【学生の意見等からの気づき】

該当せず。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> コミュニティ政策論

<研究テーマ> 都市内分権（特に日本とドイツ）、自治会・町内会の研究

<主要研究業績>

編著『コミュニティの自治』（日本評論社、2009年）

単著論文「プレーメン市の地域評議会法の新展開に見る「参加」と「協働」
水林彪・吉田克己編『市民社会と市民法——civilの思想と制度』日本評論社、
2018年、257～287頁。

単著論文「日本型都市内分権の限界と可能性 —宮崎市の地域自治区制度の運用を素材として」『法志林』第118巻第3号、2020年、1～88頁。

【Outline and objectives】

Students of the sixth semester should subscribe to this subject.

Each student should pursue her/his own research project according to her/his own method to complete the dissertation.

SOS700P1 - 005

公共政策学特殊研究 3 A

廣瀬 克哉

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

公共政策研究科の博士後期課程3年次向けの論文指導科目として、博士論文の完成に向けて研究のとりまとめを図る。

【到達目標】

春学期終了時に博士論文のおおよその完成を図り、夏期休暇中に完成稿のとりまとめと9月の論文提出を展望できるようにする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連している。

【授業の進め方と方法】

公共政策研究の領域における博士論文の完成を目指す研究指導を行う。学生全員による演習方式で、研究課題の設定、方法論の選定、資料の収集・検討・分析について、参加者各自が自分の研究テーマについて予備作業をおこなったうえで授業において報告し、その報告を相互に検討することによって、博士論文に求められる研究能力の水準に到達することを目指す。あわせて、論文作成に関する個別指導も行う。

なお、下記の授業計画はこの授業を通して指導していく論点を示すものであり、各回の授業がそれぞれの論点に1対1対応するとは限らない。課題リストとして参照されたい。

対面授業を基本とする。指導学生を登録した Google Classroom を設定する予定であり、報告資料等の共有に活用していく。

学生へのフィードバックは授業内で行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
1	先行研究の整理の完了	確定した博士論文のテーマ設定と構成に照らして、必要な補完を施したうえで先行研究の整理を完了する。
2	研究の背景の整理	ここまでの調査、検討によって得られた知見も加味して、あらためて博士論文にとっての研究の背景を整理し文章化する。
3	実体的な章の組み込み構成を確定する	独立した章として前年度までに執筆してきた研究成果をとりまとめ、博士論文全体のなかに収めるにあたっての構成を確定する。
4	実体的な章の確定	実体的な章を博士論文のなかに収録して確定する。
5	総合的な検討	実体的な分析について、全体を通して振り返り、総合的な検討を行う。
6	意義と限界の確認	総合的な分析の結果の意義と限界を確認し、研究成果の積極的な意義を明示するとともに、限界を明確に検証したうえで、論文全体の防御線を確定する。
7	補論の検討と執筆	分析結果の意義の積極的な説明や、限界についての検討を明示するために効果的と想定される補論を検討、執筆し、博士論文の適切な箇所に組み込む。
8	方法や枠組の確認	博士論文の分析方法や枠組についてメタレベルで検討して位置づけを確認する章を執筆する。
9	全体構成と論文各部の確認	全体構成と論文の各部分が完成形となり得る水準に到達していることを改めて確認し、足りない要素を補う。
10	得られた成果と残された課題の考察	ここまでの研究結果を振り返り、得られた成果と残された課題について考察し、整理する。
11	結論の章の完成	実体的な部分の第一稿をふまえて、博士論文全体を通しての結論を確定する。
12	序章の完成	実体的な部分の第一稿をふまえて、問題関心の説明と研究全体の意義を整理しながら序章を完成する。
13	得られた成果と残された課題の確認	博士論文の完成に向けて、得られた成果をとりまとめるとともに、残された課題を明示的に確認する。
14	博士論文第一稿の完成と発表	博士論文の第一稿をおおよそ完成させ、発表する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

各受講生の研究対象についての先行研究のリサーチ、入手可能な研究資料の探索、テーマとの整合性がある分析枠組の渉猟と選定など。

【テキスト（教科書）】

適宜、推薦する。

【参考書】

適宜、推薦する。

【成績評価の方法と基準】

春学期終了時に博士論文のおおよその完成形ができあがっていることを目標とし、その達成度に応じて評価する。

【学生の意見等からの気づき】

該当しない。

【学生が準備すべき機器他】

特になし

【その他の重要事項】

特になし

【担当教員の専門分野】

<専門領域> 行政学、地方自治

<研究テーマ> 二元代表制の理念と実態

<主要研究業績>

編著『自治体議会改革の固有性と普遍性』（法政大学出版局、2018年）

編著『議会改革白書 各年度版』（生活社、2009年～2016年）

【Outline and objectives】

This is part of the research-training program for Ph.D research students working in the area of public policy studies. The workshop's principal objective is to foster intellectual exchange by showcasing work from leading and emerging scholars. The workshop will provide a forum in which research students can present their work, discuss the theoretical and methodological problems involved, discuss common challenges in conducting research in this area and obtain feedback on their work.

SOS700P1 - 006

公共政策学特殊研究 3 B

廣瀬 克哉

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

公共政策研究科の博士後期課程3年次向けの論文指導科目として、博士論文の完成を図る。

【到達目標】

秋学期冒頭に博士論文を提出し、修正指示への対応を行いながら博士論文を最終的に完成し、確定する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連している。

【授業の進め方と方法】

公共政策研究の領域における博士論文の完成を目指す研究指導を行う。学生全員による演習方式で、研究課題の設定、方法論の選定、資料の収集・検討・分析について、参加者各自が自分の研究テーマについて予備作業をおこなったうえで授業において報告し、その報告を相互に検討することによって、博士論文に求められる研究能力の水準に到達することを目指す。あわせて、論文作成に関する個別指導も行う。

なお、下記の授業計画はこの授業を通して指導していく論点を示すものであり、各回の授業がそれぞれの論点に1対1対応するとは限らない。課題リストとして参照されたい。

対面授業を基本とする。指導学生を登録した Google Classroom を設定する予定であり、報告資料等の共有に活用していく。

学生へのフィードバックは授業内で行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
1	論文各部の確認	梗概、文献リストや注、付属資料など本文以外の部分も含めた論文各部の完成を確認する。
2	提出稿の完成	博士論文の提出稿を完成させる。
3	提出版の報告	博士論文提出版について口頭で報告を行い、講評を受ける。
4	修正指示の整理	審査委員会からの修正指示を整理、検討する。
5	修正指示への対応方法の検討	修正指示への対応方法について具体的に検討し、作業計画をたてる。
6	修正指示への対応	修正指示への対応作業をおこなう。
7	第一修正稿の検討	修正指示に対応した第一修正稿の仕上げ方を検討する。
8	第一修正稿の完成	第一修正稿を完成させる。
9	第二次修正指示の整理	審査委員会からの二次的な修正指示を整理する。
10	第二次修正指示への対応	第二次の修正指示への対応作業をおこなう。
11	第二修正稿の検討	修正指示に対応した第二修正稿の仕上げ方を検討する。
12	第二修正稿の完成	第二修正稿を完成させる。
13	公表手段の構想	完成した博士論文の、審査修了後の公表手段を構想し、必要に応じて論文投稿の予定の確認や、出版助成申請の準備を進める。
14	博士論文の最終的な完成	審査過程全体への対応を終えて最終的に博士論文を確定する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

提出メ切に合わせた博士論文の完成と、審査過程での修正指示への対応など。

【テキスト（教科書）】

適宜、推薦する。

【参考書】

適宜、推薦する。

【成績評価の方法と基準】

博士論文を完成させ、審査への対応を完成させることを目的とし、博士論文の完成度に応じて評価する。

【学生の意見等からの気づき】

該当しない。

【学生が準備すべき機器他】

特になし

【その他の重要事項】

特になし

【担当教員の専門分野】

<専門領域> 行政学、地方自治

<研究テーマ> 二元代表制の理念と実態

<主要研究業績>

編著『自治体議会改革の固有性と普遍性』（法政大学出版社、2018年）

編著『議会改革白書 各年度版』（生活社、2009年～2016年）

【Outline and objectives】

This is part of the research-training program for Ph.D research students working in the area of public policy studies. The workshop's principal objective is to foster intellectual exchange by showcasing work from leading and emerging scholars. The workshop will provide a forum in which research students can present their work, discuss the theoretical and methodological problems involved, discuss common challenges in conducting research in this area and obtain feedback on their work.

SOS700P1 - 005

公共政策学特殊研究 3 A

淵元 初姫

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

公共政策研究科の論文指導科目として、博士後期課程 3 年目以降の院生を対象に、独立した研究者としての能力を得ることを目的に、博士論文の執筆に関する総合的な指導を行う。

【到達目標】

院生は、博士論文の初稿を仕上げるのが求められる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連している。

【授業の進め方と方法】

各自の研究の進展に応じて、研究報告を行い、相互に議論を深めることを基本とする。報告に対しては、授業中に参加者全員による質疑・議論を行い、講評を行うことによってフィードバックする。

授業方式は原則として対面授業とする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】**春学期**

回	テーマ	内容
第 1 回	オリエンテーション	春学期の到達目標を提示し、各自の現状を認識する。
第 2 回	研究関心の報告	各自の研究関心についてその概要を報告し、議論する。
第 3 回	課題の明確化	博士論文の執筆を進める上での課題を明確化する。
第 4 回	研究報告 1	3 年目の院生として研究報告を行い、その内容について相互に論評する。
第 5 回	研究報告 2	2 年目の院生による研究報告を受け、その内容について相互に論評する。
第 6 回	研究報告 3	1 年目の院生による研究報告を受け、その内容について相互に論評する。
第 7 回	研究計画の作成	これまでの研究を振り返り、3 年目の研究計画を定める。
第 8 回	先行研究の整理	先行研究のレビューを完成させる。
第 9 回	現地調査の整理 1	フィールド・ワークの資料をまとめる。
第 10 回	現地調査の整理 2	フィールド・ワークの成果を分析する。
第 11 回	専門分野の研究動向の理解	各自の専門分野の研究動向について報告する。
第 12 回	研究報告 4	3 年目の院生として研究報告を行い、その内容について相互に論評する。
第 13 回	研究報告 5	2 年目の院生による研究報告を受け、その内容について相互に論評する。
第 14 回	研究報告 6	1 年目の院生による研究報告を受け、その内容について相互に論評する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

各自の関心に基づいて主体的に研究を進めること。

【テキスト（教科書）】

教科書は使用しない。

【参考書】

なし。

【成績評価の方法と基準】

研究報告（60%）、議論への貢献（40%）とする。

【学生の意見等からの気づき】

該当なし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 比較政治学、コミュニティ政策、福祉政策

<研究テーマ> ポスト福祉国家時代の市民社会論、地域社会における社会的包摂、英国・スコットランドの地方自治・自治体内分権

<主要研究業績>

「スコットランドの地域評議会－制度の基本的構想とその機能の実際」名和田是彦編（2009）『コミュニティの自治－自治体内分権と協働の国際比較』pp.81-118、日本評論社

「スコットランドにおける権限移譲とジェンダー・クォータ」三浦まり・衛藤幹子編著（2014）『ジェンダー・クォータ－世界の女性議員はなぜ増えたのか』pp.203-26、明石書店

「地域社会における社会的連帯の再編：居場所づくりにみる三人称的連帯の可能性」金安岩男・牧瀬稔編著（2019）『都市・地域政策研究の現在』pp.131-42、地域開発研究所

【Outline and objectives】

This is a supervised course in which you work autonomously and independently under the guidance of your supervisor. The course helps to situate one's own work within the broader debates in the social sciences through discussions on some key concepts, theories and methods used in the field of public policy.

SOS700P1 - 006

公共政策学特殊研究 3 B

淵元 初姫

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

公共政策研究科の論文指導科目として、博士後期課程 3 年日以降の院生を対象に、独立した研究者としての能力を得ることを目的に、博士論文の執筆に関する総合的な指導を行う。

【到達目標】

院生は、博士論文の初稿を仕上げるのが求められる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連している。

【授業の進め方と方法】

各自の研究の進展に応じて、研究報告を行い、相互に議論を深めることを基本とする。報告に対しては、授業中に参加者全員による質疑・議論を行い、講評を行うことによってフィードバックする。

授業方式は原則として対面授業とする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	オリエンテーション	秋学期の到達目標を提示し、各自の現状を認識する。
第 2 回	章立てに沿った執筆 1	執筆を進める。
第 3 回	章立てに沿った執筆 2	執筆した原稿の推敲を進める。
第 4 回	文献報告 1	3 年目の院生として文献報告を行い、その内容について相互に論評する。
第 5 回	文献報告 2	2 年目の院生による文献報告を受け、その内容について相互に論評する。
第 6 回	文献報告 3	1 年目の院生による文献報告を受け、その内容について相互に論評する。
第 7 回	研究遂行上の問題点の解決	各自の研究遂行上の悩みを共有し、解決をはかる。
第 8 回	理論枠組みの明確化	論文の理論枠組みを深める。
第 9 回	論文のオリジナリティの明確化	各自の研究における独自性について議論する。
第 10 回	論点の整理	口述試験に向けた論点の整理を試みる。
第 11 回	英文によるサマリーの執筆	思考の明確化・訓練のために英文による文章作成を試みる。
第 12 回	研究報告 1	3 年目の院生として研究報告を行い、その内容について相互に論評する。
第 13 回	研究報告 2	2 年目の院生による研究報告を受け、その内容について相互に論評する。
第 14 回	研究報告 3	1 年目の院生による研究報告を受け、その内容について相互に論評する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

各自の関心に基づいて主体的に研究を進めること。

【テキスト（教科書）】

教科書は使用しない。

【参考書】

なし。

【成績評価の方法と基準】

研究報告（60%）、議論への貢献（40%）とする。

【学生の意見等からの気づき】

該当なし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 比較政治学、コミュニティ政策、福祉政策

<研究テーマ> ポスト福祉国家時代の市民社会論、地域社会における社会的包摂、英国・スコットランドの地方自治・自治体内分権

<主要研究業績>

「スコットランドの地域評議会－制度の基本的構想とその機能の実際」名和田是彦編（2009）『コミュニティの自治－自治体内分権と協働の国際比較』pp.81-118、日本評論社

「スコットランドにおける権限移譲とジェンダー・クォータ」三浦まり・衛藤幹子編著（2014）『ジェンダー・クォータ世界的女性議員はなぜ増えたのか』pp.203-26、明石書店

「地域社会における社会的連帯の再編：居場所づくりにみる三人称的連帯の可能性」金安岩男・牧瀬稔編著（2019）『都市・地域政策研究の現在』pp.131-42、地域開発研究所

【Outline and objectives】

This is a supervised course in which you work autonomously and independently under the guidance of your supervisor. The course helps to situate one's own work within the broader debates in the social sciences through discussions on some key concepts, theories and methods used in the field of public policy.

SOS700P1 - 005

公共政策学特殊研究3A

池田 寛二

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

博士課程3年次以上を対象に博士論文完成に向けた最終的な指導を行う。

【到達目標】

受講生に博士論文を完成させることを到達目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連、特に「DP3」に特に強く関連している。

【授業の進め方と方法】

博士論文の執筆に即して学際性と専門性のバランスに配慮しながら指導する。原則として、1回に1人その都度の執筆の進展に応じた報告をさせ、それにもとづいて討論を織り交ぜながら指導する。各回の報告に応じて次回の課題を指示し、その都度フィードバックしながら博論の完成に近づける。原則、対面で授業を実施する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

なし/No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	各自の研究の進捗状況とスケジュールの確認
第2回	演習	院生の報告と討論
第3回	演習	院生の報告と討論
第4回	演習	院生の報告と討論
第5回	演習	院生の報告と討論
第6回	演習	院生の報告と討論
第7回	演習	院生の報告と討論
第8回	演習	院生の報告と討論
第9回	演習	院生の報告と討論
第10回	演習	院生の報告と討論
第11回	演習	院生の報告と討論
第12回	演習	院生の報告と討論
第13回	演習	院生の報告と討論
第14回	演習	院生の報告と討論

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

各自の研究の進捗状況に応じて適宜指示する。

【テキスト（教科書）】

適宜、推薦する。

【参考書】

適宜、推薦する。

【成績評価の方法と基準】

これまでの研究の到達度とそれが博士論文の完成にどれほど近付いているかを100%総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

アンケートの結果は随時参考にしながら指導に活かす。

【学生が準備すべき機器他】

特になし

【その他の重要事項】

特になし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>環境社会学、社会学理論、東南アジア地域研究
 <研究テーマ>環境・エネルギー政策、地域政策
 <主要研究業績>池田ほか編著、2012『環境をめぐる公共圏のダイナミズム』（法政大学出版局）等。

【Outline and objectives】

Supervising doctoral dissertation for over third year students of the doctoral program.

公共政策学特殊研究 3 B

池田 寛二

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

博士課程 3 年次以上の院生を対象に博士論文完成に向けた最終的な指導を実施する。

【到達目標】

博士論文を完成させ博士の学位授与を到達目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連、特に「DP3」に特に強く関連している。

【授業の進め方と方法】

原則として、1 回に 1 人その都度の論文執筆の進展に応じた報告をさせ、それにもとづいて討論を織り交ぜながら指導する。各回の報告に応じて次回の課題を指示し、その都度フィードバックしながら博論を完成をさせる。原則、対面で授業を実施する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション	各自の研究の進捗状況とスケジュールの確認
第 2 回	演習	院生の報告と討論
第 3 回	演習	院生の報告と討論
第 4 回	演習	院生の報告と討論
第 5 回	演習	院生の報告と討論
第 6 回	演習	院生の報告と討論
第 7 回	演習	院生の報告と討論
第 8 回	演習	院生の報告と討論
第 9 回	演習	院生の報告と討論
第 10 回	演習	院生の報告と討論
第 11 回	演習	院生の報告と討論
第 12 回	演習	院生の報告と討論
第 13 回	演習	院生の報告と討論
第 14 回	演習	院生の報告と討論

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

各自の研究の進捗状況に応じて適宜指示する。

【テキスト（教科書）】

適宜、推薦する。

【参考書】

適宜、推薦する。

【成績評価の方法と基準】

これまでの研究の到達度とそれが博士論文の完成にどれほど近付いているかを総合的に 100% 評価する。

【学生の意見等からの気づき】

アンケートの結果は随時参考にしながら指導に活かす。

【学生が準備すべき機器他】

特になし

【その他の重要事項】

特になし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 環境社会学、社会学理論、東南アジア地域研究
<研究テーマ> 環境・エネルギー政策、地域政策
<主要研究業績> 池田ほか編著、2012『環境をめぐる公共圏のダイナミズム』（法政大学出版局）等。

【Outline and objectives】

Supervising doctoral dissertation for over third year students of the doctoral program.

SOS700P1 - 005

公共政策学特殊研究 3 A

白鳥 浩

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

公共政策研究科の政治学、国際政治学領域における博士論文指導科目として、博士号取得に向けた研究論文の作成について、受講者の問題関心に応じて指導していく。

【到達目標】

公共政策研究の一部としての、政治学、国政政治学領域におけるそれぞれの研究対象となる政策領域について、必要となる専門的な知見や研究方法、さらには理論的なフレームワークや、論文執筆の技術を学び、最終的に、要求されるスタンダードをクリアした博士論文を、作成することを到達目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連、特に「DP3」に特に強く関連している。

【授業の進め方と方法】

公共政策研究の領域における政治学、国際政治学の博士論文の作成を、最終的に目指す研究指導を行う。基本的には、教員と学生全員による演習方式で、研究課題の設定、方法論の選定、資料の収集・検討・分析について、参加者各自が自分の研究テーマについて報告し、研究を進める。そして、その報告をもとに博士論文に求められるアカデミック・スタンダードに到達することを旨とする。講義は対面を中心とする。講義計画は講義の展開により、若干の変更もありうる。

変更の可能性もあるが対面講義を基本とする。また、学生へのフィードバックにおいては、適宜、講義、報告のたびに行うものとする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】**春学期**

回	テーマ	内容
1 回	研究テーマの設定	同左
2 回	研究テーマの基礎的理解	同左
3 回	研究テーマの標準的理解	同左
4 回	研究テーマの高度な理解	同左
5 回	研究テーマに基づく研究企画の立案	同左
6 回	論文作成の基礎的技法	同左
7 回	論文作成の標準的技法	同左
8 回	論文報告のレジユメの作成	同左
9 回	先行研究の基礎的検討	同左
10 回	先行研究の標準的理解の確認	同左
11 回	先行研究の整理	同左
12 回	研究テーマの意義の確認	同左
13 回	論文の理論的なフレームワークの設定	同左
14 回	論文の研究企画構成の確認	同左

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

各受講生の研究対象についての先行研究のリサーチ、入手可能な研究資料の探索、テーマとの整合性がある理論的フレームワークの検討など。

【テキスト（教科書）】

適宜指示する。

【参考書】

適宜指示する。

【成績評価の方法と基準】

以下のものは目安であるが、とりあえず博士課程1年目においては、研究テーマの設定とその領域の先行研究の検討を中心として、その研究の進展を勘案して評価する。つづく2年目においては、1年目の研究を基礎としながら研究対象についてのリサーチ・クエスチョンの再設定とその研究の進展、そのロジックの卓越性を中心として評価する。最終学年となる3年目においては、博士學位論文の完成を到達目標とし、その準備の達成度を総合的に評価する。望むらくは、学生におかれましては、その執筆の過程での成果を世に問うことを目的として、一年に1本ほど短い論文を発表することを目指してもらいたい。学会への参加、研究の進捗の報告などの平常点100%。

【学生の意見等からの気づき】

双方向のコミュニケーションを大切にしたい。

【学生が準備すべき機器他】

特になし

【その他の重要事項】

特になし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

現代政治分析（国際・国内比較）・政治理論

<研究テーマ>

1. 日本の現代政治
2. グローバリズムと国民国家の変容
3. 地方政治研究
4. 政党に関する理論
5. 現代政治のデモクラシー

<主要研究業績>白鳥浩『都市対地方の政治学』芦書房、2004年

白鳥浩『市民・選挙・国家—シュタイン・ロッカンの政治理論—』東海大学出版会、2002年

Hiroshi Shiratori, "Le mouvement référendaire au Japon après la Guerre froide. Une analyse comparative inspirée de Rokkan," Revue française de science politique, vol.51, Numero.4, 2001.

【Outline and objectives】

This course aims to help student's thesis writing from the point of view of an academic standard. It offers many suggestions and insights on thesis writings of each student.

SOS700P1 - 006

公共政策学特殊研究 3 B

白鳥 浩

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

公共政策研究科の政治学、国際政治学領域における博士論文指導科目として、博士号取得に向けた研究論文の作成について、受講者の問題関心に応じて指導していく。

【到達目標】

公共政策研究の一部としての、政治学、国政政治学領域におけるそれぞれの研究対象となる政策領域について、必要となる専門的な知見や研究方法、さらには理論的なフレームワークや、論文執筆の技術を学び、最終的に、要求されるスタンダードをクリアした博士論文を、作成することを到達目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連、特に「DP3」に特に強く関連している。

【授業の進め方と方法】

公共政策研究の領域における政治学、国際政治学の博士論文の作成を、最終的に目指す研究指導を行う。基本的には、教員と学生全員による演習方式で、研究課題の設定、方法論の選定、資料の収集・検討・分析について、参加者各自が自分の研究テーマについて報告し、研究を進める。そして、その報告をもとに博士論文に求められるアカデミック・スタンダードに到達することを旨とする。講義は対面を中心とする。講義計画は講義の展開により、若干の変更もありうる。

変更の可能性もあるが対面講義を基本とする。また、学生へのフィードバックにおいては、適宜、講義、報告のたびに行うものとする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】**秋学期**

回	テーマ	内容
1 回	研究テーマの設定	同左
2 回	研究テーマの基礎的理解	同左
3 回	研究テーマの標準的理解	同左
4 回	研究テーマの高度な理解	同左
5 回	研究テーマに基づく研究企画の立案	同左
6 回	論文作成の基礎的技法	同左
7 回	論文作成の標準的技法	同左
8 回	論文報告のレジメの作成	同左
9 回	先行研究の基礎的検討	同左
10 回	先行研究の標準的理解の確認	同左
11 回	先行研究の整理	同左
12 回	研究テーマの意義の確認	同左
13 回	論文の理論的なフレームワークの設定	同左
14 回	論文の研究企画構成の確認	同左

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

各受講生の研究対象についての先行研究のリサーチ、入手可能な研究資料の探索、テーマとの整合性がある理論的フレームワークの検討など。

【テキスト（教科書）】

適宜指示する。

【参考書】

適宜指示する。

【成績評価の方法と基準】

以下のものは目安であるが、とりあえず博士課程1年目においては、研究テーマの設定とその領域の先行研究の検討を中心として、その研究の進展を勘案して評価する。つづく2年目においては、1年目の研究を基礎としながら研究対象についてのリサーチ・クエスチョンの再設定とその研究の進展、そのロジックの卓越性を中心として評価する。最終学年となる3年目においては、博士學位論文の完成を到達目標とし、その準備の達成度を総合的に評価する。望むらくは、学生におかれましては、その執筆の過程での成果を世に問うことを目的として、一年に1本ほど短い論文を発表することを目指してもらいたい。学会への参加、研究の進捗の報告などの平常点100%。

【学生の意見等からの気づき】

双方向のコミュニケーションを大切にしたい。

【学生が準備すべき機器他】

特になし

【その他の重要事項】

特になし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

現代政治分析（国際・国内比較）・政治理論

<研究テーマ>

1. 日本の現代政治
2. グローバリズムと国民国家の変容
3. 地方政治研究
4. 政党に関する理論
5. 現代政治のデモクラシー

<主要研究業績>白鳥浩『都市対地方の政治学』芦書房、2004年

白鳥浩『市民・選挙・国家—シュタイン・ロッカンの政治理論—』東海大学出版会、2002年

Hiroshi Shiratori, "Le mouvement référendaire au Japon après la Guerre froide. Une analyse comparative inspirée de Rokkan," Revue française de science politique, vol.51, Numero.4, 2001.

【Outline and objectives】

This course aims to help student's thesis writing from the point of view of an academic standard. It offers many suggestions and insights on thesis writings of each student.

SOS700P1 - 005

公共政策学特殊研究 3 A

関口 浩

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

公共政策研究科の博士論文指導科目として、博士号取得に向けた研究構想の練り方や論文のまとめ方等について、財政学の観点から、個別の状況に応じて指導していく。

【到達目標】

財政に関わる専門知識や高度な研究方法、論文執筆の力を体得し、本年度は最終的に博士論文を完成することを目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連、特に「DP3」に特に強く関連している。

【授業の進め方と方法】

1. 本研究指導では、修士課程で習得した財政学全般の理論的・制度的側面に重点を置きながら、財政の理論的發展と制度的改革の方向性を考究していく。また、財政制度および政策の経済的意義と問題点を明らかにしながら博士論文執筆にむけた論点整理をしていく。

2. 新型コロナウイルス感染症対応が可能な場合は対面研究指導とする。また、研究指導冒頭で前時間の出席票相当提出物に受講者が記載した内容等に担当者が回答する。また個別に質問・照会したいことがある場合は指導中に担当者がそれを提起したとき、あるいは指導終了後に時間を設けるので、対面・遠隔ともに受講者はその場で解決するようにする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

なし/No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	博士論文構成再検討	春期休業中の成果の報告
第2回	文献講読	日本の財政事情
第3回	文献講読	米国の財政事情
第4回	論文報告	博士論文進捗報告
第5回	論文報告	博士論文進捗再報告
第6回	文献講読	地方税理論
第7回	論文報告	博士論文進捗報告と修士院生による論評
第8回	論文報告	博士論文進捗再報告
第9回	文献講読	租税転嫁論
第10回	文献講読	固定資産税制度
第11回	文献講読	住民税制度
第12回	論文報告	参考文献概要の報告
第13回	論文報告	博士論文進捗再報告
第14回	修士論文研究科中間報告 前報告論評	修士2年次報告の論評

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

財政学の基礎知識に基づき、毎回、前回の博論評価で指摘された修正点の修正と新たな論点の探究のために2時間以上の予習をすること。研究指導の後、今回修正を指示された箇所についての文献収集と修正による論文構成を調整するために2時間以上の復習を求める。

【テキスト（教科書）】

佐藤進・関口浩『財政学入門【新版】』同文館、令和元年。

【参考書】

1. Arnold C. HARBERGER, *Introduction to Cost-Benefit Analysis*, University of California, Los Angeles, 2010.
2. Jonathan GRUBER, *Public Finance and Public Policy (6th ed)*, Worth Publishers, 2019.

【成績評価の方法と基準】

目安として、研究指導への取り組み状況(50%)、論文報告(50%)から総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

少人数のためアンケートはしていない。

【学生が準備すべき機器他】

遠隔研究指導を受信したり、学習支援システムの閲覧・印刷等できる装置を、大学の貸与を含めて、受講者各自で準備されたい。

【その他の重要事項】

1. 学部卒業程度の「財政学」の知識を最低限習得していることが必須であり、外国文献も博士後期課程相応の読解ができることも必須である。

2. 博士論文の審査は公共政策研究科学位授与基準をもとに行われる。審査にあたるのは、3名以上から成る審査小委員会であり、学生一人一人に設置される。主査は専門領域が同じでかつ第三者となる教員とし、指導教授は副査として審査に当たる。審査小委員会は、口述試験を実施し、論文および学識が博士の学位授与に適切かどうかを判断する。審査小委員会は、その結果を教授会に所属する専任教員で構成する審査委員会に報告し、審査委員会での最終的な判断を行う。

【担当教員の専門分野等】

「財政学基礎」を参照。

【Outline and objectives】

We acquire the theory and the history of public finance to build the base for doctor's thesis writing.

SOS700P1 - 006

公共政策学特殊研究 3 B

関口 浩

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

公共政策研究科の博士論文指導科目として、博士号取得に向けた研究構想の練り方や論文のまとめ方等について、財政学の観点から、個別の状況に応じて指導していく。

【到達目標】

財政に関わる専門知識や高度な研究方法、論文執筆の力を体得し、本年度は最終的に博士論文を完成することを目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連、特に「DP3」に特に強く関連している。

【授業の進め方と方法】

1. 本研究指導では、修士課程で習得した財政学全般の理論的・制度的側面に重点を置きながら、財政の理論的發展と制度的改革の方向性を考究していく。また、財政制度および政策の経済的意義と問題点を明らかにしながら博士論文執筆にむけた論点整理をしていく。

2. 新型コロナウイルス感染症対応が可能な場合は対面研究指導とする。また、研究指導冒頭で前時間の出席票相当提出物に受講者が記載した内容等に担当者が回答する。また個別に質問・照会したいことがある場合は指導中に担当者がそれを提起したとき、あるいは指導終了後に時間を設けるので、対面・遠隔ともに受講者はその場で解決するようにする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

なし/No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	論文経過報告	夏期休業中の研究成果の報告
第2回	修士論文経過報告	修士2年次の報告の論評
第3回	論文経過報告	受講生の論評に基づく修正報告
第4回	卒論・修論経過報告	学部ゼミ生を交えての報告
第5回	卒論・修論経過報告	学部ゼミ生を交えての論評
第6回	卒論・修論秋学期中間報告	修士2年次と学部4年次の論文中間報告と論評
第7回	文献講読	相続税（遺産税的要素を加味した遺産取得税方式）
第8回	文献講読	相続税（相続時精算課税制度）
第9回	論文経過報告	これまでの指導を踏まえた修正報告
第10回	論文経過報告	新規参考文献紹介
第11回	文献講読	相続税（評価の仕組み）
第12回	文献講読	相続税（制度的問題点）
第13回	論文経過報告	論文全体像の再修正
第14回	博士論文・修士論文最終報告	博士論文自己評価、修士2年次報告の講評

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

財政学の基礎知識に基づき、毎回、前回の博論評価で指摘された修正点の修正と新たな論点の探究のために2時間以上の予習をすること。研究指導の後、今回修正を指示された箇所についての文献収集と修正による論文構成を調整するために2時間以上の復習を求める。

【テキスト（教科書）】

佐藤進・関口浩『財政学入門【新版】』同文館、令和元年。

【参考書】

1. Arnold C. HARBERGER, *Introduction to Cost-Benefit Analysis*, University of California, Los Angeles, 2010.
2. Jonathan GRUBER, *Public Finance and Public Policy (6th ed)*, Worth Publishers, 2019.

【成績評価の方法と基準】

目安として、研究指導への取り組み状況(50%)、論文報告(50%)から総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

少人数のためアンケートはしていない。

【学生が準備すべき機器他】

遠隔研究指導を受信したり、学習支援システムの掲示を閲覧・印刷等できる装置を、大学の貸与を含めて、受講者各自で準備されたい。

【その他の重要事項】

1. 学部卒業程度の「財政学」の知識を最低限習得していることが必須であり、外国文献も博士後期課程相応の読解ができることも必須である。

2. 博士論文の審査は公共政策研究科学学位授与基準をもとに行われる。審査にあたるのは、3名以上から成る審査小委員会であり、学生一人一人に設置される。主査は専門領域が同じでかつ第三者となる教員とし、指導教授は副査として審査に当たる。審査小委員会は、口述試験を実施し、論文および学識が博士の学位授与に適切かどうかを判断する。審査小委員会は、その結果を教授会に所属する専任教員で構成する審査委員会に報告し、審査委員会で最終的な判断を行う。

【担当教員の専門分野等】

「財政学基礎」を参照。

【Outline and objectives】

We acquire the theory and the history of public finance to build the base for doctor's thesis writing.

SOS700P1 - 005

公共政策学特殊研究 3 A

中筋 直哉

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

地域社会学を知的基盤とする公共政策研究の博士論文の完成。

【到達目標】

博士論文を執筆する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連、特に「DP3」に特に強く関連している。

【授業の進め方と方法】

教室で対面で実施（予定）。履修生ごとに個別指導する他、全履修生による文献講読演習を月1回程度行う。提出物には個別にフィードバックする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
1	履修者の顔合わせ	各自の博士論文構想の発表
2	1人目の個別指導 1	論文テーマの検討
3	2人目の個別指導 1	論文テーマの検討
4	3人目の個別指導 1	論文テーマの検討
5	文献講読演習 1	専門文献の講読と討論
6	1人目の個別指導 2	論文構成の検討
7	2人目の個別指導 2	論文構成の検討
8	3人目の個別指導 2	論文構成の検討
9	文献講読演習 2	専門文献の講読と討論
10	1人目の個別指導 3	文献調査の検討
11	2人目の個別指導 3	文献調査の検討
12	3人目の個別指導 3	文献調査の検討
13	文献講読演習 3	専門文献の講読と討論
14	全員演習	博論中間報告会原稿の検討

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

各自の研究計画に沿った調査研究活動。本授業の準備・復習時間は各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

中筋直哉・五十嵐泰正編著,2013,『よくわかる都市社会学』ミネルヴァ書房。

【参考書】

文献講読演習にて指示する

【成績評価の方法と基準】

指定された日程で個別指導を受け、文献講読演習に参加することが成績評価の条件。研究計画通り研究を進められれば C、文献講読演習等において貢献すれば B、学会査読論文など成果を挙げれば A、その内容が学術的に顕著なものであれば A+、とする。

【学生の意見等からの気づき】

より専門性の高い指導を心がける。

【学生が準備すべき機器他】

学習支援システムへのアクセスが必須。

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉 地域社会学
 〈研究テーマ〉 地域社会の構造分析
 〈主要研究業績〉 上記教科書、『群衆の居場所』（2005, 新曜社）

【Outline and objectives】

This seminar aims to prepare student's doctoral thesis by face to face direction and group discussion.

公共政策学特殊研究 3 B

中筋 直哉

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

地域社会学を知的基盤とする公共政策研究の博士論文の完成。

【到達目標】

博士論文を執筆する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連、特に「DP3」に特に強く関連している。

【授業の進め方と方法】

教室で対面で実施（予定）。履修生ごとに個別指導する他、全履修生による文献講読演習を月 1 回程度行う。提出物には個別にフィードバックする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
1	文献講読演習 4	専門文献の講読と討論
2	1 人目の個別指導 4	データ分析の検討
3	2 人目の個別指導 4	データ分析の検討
4	3 人目の個別指導 4	データ分析の検討
5	文献講読演習 5	専門文献の講読と討論
6	1 人目の個別指導 5	結論の検討
7	2 人目の個別指導 5	結論の検討
8	3 人目の個別指導 5	結論の検討
9	文献講読演習 6	専門文献の講読と討論
10	1 人目の個別指導 6	政策提言の検討
11	2 人目の個別指導 6	政策提言の検討
12	3 人目の個別指導 6	政策提言の検討
13	文献講読演習 7	専門文献の講読と討論
14	全員演習	履修者の博士論文の合評

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

各自の研究計画に沿った調査研究活動。本授業の準備・復習時間は各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

中筋直哉・五十嵐泰正編著,2013,『よくわかる都市社会学』ミネルヴァ書房。

【参考書】

文献講読演習にて指示する

【成績評価の方法と基準】

指定された日程で個別指導を受け、文献講読演習に参加することが成績評価の条件。研究計画通り研究を進めて博士論文完成までの目処がつけば C、博士論文を完成できれば B、論文の内容が学術的に優れていれば A、とくに優れていれば A+、とする。

【学生の意見等からの気づき】

より専門性の高い指導を心がける。

【学生が準備すべき機器他】

学習支援システムへのアクセスが必須。

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉 地域社会学
〈研究テーマ〉 地域社会の構造分析
〈主要研究業績〉 上記教科書、『群衆の居場所』（2005, 新曜社）

【Outline and objectives】

This seminar aims to prepare student's doctoral thesis by face to face direction and group discussion.

SOS700P1 - 005

公共政策学特殊研究 3 A

武貞 稔彦

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

博士論文執筆のための演習指導

【到達目標】

博士課程 3 年生を対象とする本演習では、各演習参加者が必要なリサーチを行ない、実際に博士論文を執筆、完成させると同時に的確な報告ができるようになることを目標とします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連している。

【授業の進め方と方法】

各回の演習は、受講者からの進捗報告、教員および演習参加者からのコメントを中心にすすめます。その過程で報告や発表（プレゼンテーション）の技術についても学ぶ機会が得られます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	博士論文執筆と進捗報告 (第 1 回)	演習参加者による博士論文執筆状況の報告と内容の検討を行う。(第 1 回)
第 2 回	博士論文執筆と進捗報告 (第 2 回)	演習参加者による博士論文執筆状況の報告と内容の検討を行う。(第 2 回)
第 3 回	博士論文執筆と進捗報告 (第 3 回)	演習参加者による博士論文執筆状況の報告と内容の検討を行う。(第 3 回)
第 4 回	博士論文執筆と進捗報告 (第 4 回)	演習参加者による博士論文執筆状況の報告と内容の検討を行う。(第 4 回)
第 5 回	博士論文執筆と進捗報告 (第 5 回)	演習参加者による博士論文執筆状況の報告と内容の検討を行う。(第 5 回)
第 6 回	博士論文執筆と進捗報告 (第 6 回)	演習参加者による博士論文執筆状況の報告と内容の検討を行う。(第 6 回)
第 7 回	博士論文執筆と進捗報告 (第 7 回)	演習参加者による博士論文執筆状況の報告と内容の検討を行う。(第 7 回)
第 8 回	博士論文執筆と進捗報告 (第 8 回)	演習参加者による博士論文執筆状況の報告と内容の検討を行う。(第 8 回)
第 9 回	博士論文執筆と進捗報告 (第 9 回)	演習参加者による博士論文執筆状況の報告と内容の検討を行う。(第 9 回)
第 10 回	博士論文執筆と進捗報告 (第 10 回)	演習参加者による博士論文執筆状況の報告と内容の検討を行う。(第 10 回)
第 11 回	博士論文執筆と進捗報告 (第 11 回)	演習参加者による博士論文執筆状況の報告と内容の検討を行う。(第 11 回)
第 12 回	博士論文執筆と進捗報告 (第 12 回)	演習参加者による博士論文執筆状況の報告と内容の検討を行う。(第 12 回)
第 13 回	博士論文執筆と進捗報告 (第 13 回)	演習参加者による博士論文執筆状況の報告と内容の検討を行う。(第 13 回)
第 14 回	博士論文執筆と進捗報告 (第 14 回)	演習参加者による博士論文執筆状況の報告と内容の検討を行う。(特に中間報告に向けた発表準備) (第 14 回)

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

演習参加者との協議を通じて、博士論文執筆の進捗管理を行います。参加者は自ら執筆計画を立て、それに従って論文執筆をすすめて下さい。必要な先行研究事例のレビューや、フィールド調査も並行して実施することとなります。また、外部学会での発表も実施を目指します。

【テキスト（教科書）】

特に指定しません。必要に応じて資料を配布します。

【参考書】

随時紹介します。

【成績評価の方法と基準】

おおむね以下のバランスで総合的な成績評価を行います。博士論文（内容およびプレゼンテーション）70%、演習における積極性と貢献度 30%

【学生の意見等からの気づき】

少人数演習のため該当せず。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 開発の自然環境・社会環境への影響、開発援助、開発と倫理
<研究テーマ> 「望ましい（望ましくない）「開発」とは何か」「ダム建設に伴う立ち退きと補償、生活再建」
<主要研究業績>

"Japanese Experience of Involuntary Resettlement: Long-Term Consequences of Resettlement for the Construction of the Ikawa Dam," *International Journal of Water Resources Development*, Routledge, Vol. 25, Issue 3, September 2009, pp. 419- 430.

『開発介入と補償：ダム立ち退きをめぐる開発と正義論』勁草書房 2012 年, "Participation and diluted stakes in river management in Japan: the challenge of alternative constructions of resource governance" in Sato, J. ed., *Governance of Natural Resources: Uncovering the social purpose of materials in nature*. United Nations University Press, pp.141-161, July 2013

【Outline and objectives】

This is the third year seminar for authoring doctoral thesis. Students will be able to 1) write his/her doctor thesis and to 2) make appropriate presentation for an academic audiences.

公共政策学特殊研究 3 B

武貞 稔彦

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

博士論文執筆のための演習指導

【到達目標】

博士課程 3 年生を対象とする本演習では、各演習参加者が必要なリサーチを行ない、実際に博士論文を執筆、完成させると同時に的確な報告ができるようになることを目標とします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連している。

【授業の進め方と方法】

各回の演習は、受講者からの進捗報告、教員および演習参加者からのコメントを中心にすすめます。その過程で報告や発表（プレゼンテーション）の技術についても学ぶ機会が得られます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	博士論文執筆と進捗報告（第 1 回）	演習参加者による博士論文執筆状況の報告と内容の検討を行う。（第 1 回）
第 2 回	博士論文執筆と進捗報告（第 2 回）	演習参加者による博士論文執筆状況の報告と内容の検討を行う。（第 2 回）
第 3 回	博士論文執筆と進捗報告（第 3 回）	演習参加者による博士論文執筆状況の報告と内容の検討を行う。（第 3 回）
第 4 回	博士論文執筆と進捗報告（第 4 回）	演習参加者による博士論文執筆状況の報告と内容の検討を行う。（第 4 回）
第 5 回	博士論文執筆と進捗報告（第 5 回）	演習参加者による博士論文執筆状況の報告と内容の検討を行う。（第 5 回）
第 6 回	博士論文執筆と進捗報告（第 6 回）	演習参加者による博士論文執筆状況の報告と内容の検討を行う。（第 6 回）
第 7 回	博士論文執筆と進捗報告（第 7 回）	演習参加者による博士論文執筆状況の報告と内容の検討を行う。（第 7 回）
第 8 回	博士論文執筆と進捗報告（第 8 回）	演習参加者による博士論文執筆状況の報告と内容の検討を行う。（第 8 回）
第 9 回	博士論文執筆と進捗報告（第 9 回）	演習参加者による博士論文執筆状況の報告と内容の検討を行う。（第 9 回）
第 10 回	博士論文執筆と進捗報告（第 10 回）	演習参加者による博士論文執筆状況の報告と内容の検討を行う。（第 10 回）
第 11 回	博士論文執筆と進捗報告（第 11 回）	演習参加者による博士論文執筆状況の報告と内容の検討を行う。（第 11 回）
第 12 回	博士論文執筆と進捗報告（第 12 回）	演習参加者による博士論文執筆状況の報告と内容の検討を行う。（第 12 回）
第 13 回	博士論文執筆と進捗報告（第 13 回）	演習参加者による博士論文執筆状況の報告と内容の検討を行う。（第 13 回）
第 14 回	博士論文執筆と進捗報告（第 14 回）	演習参加者による博士論文執筆状況の報告と内容の検討を行う。（特に最終発表に向けた発表準備）（第 14 回）

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

演習参加者との協議を通じて、博士論文執筆の進捗管理を行います。参加者は自ら執筆計画を立て、それに従って論文執筆をすすめて下さい。必要な先行研究事例のレビューや、フィールド調査も並行して実施することとなります。また、外部学会での発表も実施を目指します。

【テキスト（教科書）】

特に指定しません。必要に応じて資料を配布します。

【参考書】

随時紹介します。

【成績評価の方法と基準】

おおむね以下のバランスで総合的な成績評価を行います。博士論文（内容およびプレゼンテーション）70%、演習における積極性と貢献度 30%

【学生の意見等からの気づき】

少人数演習のため該当せず。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 開発の自然環境・社会環境への影響、開発援助、開発と倫理
<研究テーマ> 「望ましい（望ましくない）「開発」とは何か」「ダム建設に伴う立ち退きと補償、生活再建」
<主要研究業績>

"Japanese Experience of Involuntary Resettlement: Long-Term Consequences of Resettlement for the Construction of the Ikawa Dam," *International Journal of Water Resources Development*, Routledge, Vol. 25, Issue 3, September 2009, pp. 419- 430.

『開発介入と補償：ダム立ち退きをめぐる開発と正義論』勁草書房 2012 年, "Participation and diluted stakes in river management in Japan: the challenge of alternative constructions of resource governance" in Sato, J. ed., *Governance of Natural Resources: Uncovering the social purpose of materials in nature*. United Nations University Press, pp.141-161, July 2013

【Outline and objectives】

This is a third year seminar for authoring doctoral thesis. Students will be able to 1) write his/her doctor thesis and to 2) make appropriate presentation for an academic audiences.

SOS700P1 - 005

公共政策学特殊研究 3 A

永野 秀雄

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

公共政策研究科の博士論文指導科目として、博士号取得に向けた論文の最終的な完成を目指す。また、ワークショップや口述試験でのプレゼンテーション力を身につけるための実習を個別の状況に応じて指導していく。

【到達目標】

最終的に博士論文を完成させることを到達目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連している。

【授業の進め方と方法】

まず、博士論文の学位申請に必要となる学会誌への論文掲載等の要件が満たされているかを確認する。次に、発表済みの主要章に関する情報の追加と、未執筆の章の完成を目指す。さらに、指導教員やワークショップにおける外部研究者による助言と批判を受けて、論文を完成させる。

また、授業は、対面授業を予定していますが、コロナウイルスの感染が拡大した場合には、リアルタイムのライブ型配信授業とします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

なし/No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】**春学期**

回	テーマ	内容
第1回	学位申請要件の確認	学会誌等での論文掲載等の学位申請要件が満たされているかを確認する。
第2回	博士論文の全体構想の確認	複数の主要章を構成する既発表の論文の相互関係を確認するとともに、論文の全体構想における位置付けと、今後書き加えるべき章の内容等を確認する。
第3回	第1の主要章の発表	第1の主要章を発表し、指導教員からの助言を受けて訂正を図る。
第4回	第1の主要章の加筆・訂正	第1の主要章への加筆・訂正等を完成させる。
第5回	第2の主要章の発表	第2の主要章を発表し、指導教員からの助言を受けて訂正を図る。
第6回	第2の主要章の加筆・訂正	第2の主要章への加筆・訂正等を完成させる。
第7回	第3の主要章の発表	第3の主要章を発表し、指導教員からの助言を受けて訂正を図る。
第8回	第3の主要章の加筆・訂正	第3の主要章への加筆・訂正等を完成させる。
第9回	未執筆の章の書き上げ（1）	全体構想から、「はじめに」や「結論」等の全体構想から調整が必要となる章の内容を確認する。
第10回	未執筆の章の書き上げ（2）	未執筆の章を書き上げ、指導教員から確認を受ける。
第11回	博士論文全体の校正	統合された博士論文の本文、脚注、参考文献等を、複数回校正する。
第12回	ワークショップの準備（1）	ワークショップのために、提出論文と発表のためのパワーポイントを準備する。また、ワークショップに参加する外部研究者等への連絡を行う。
第13回	ワークショップの準備（2）	ワークショップの実施のために、事前に具体的なプレゼンテーションを実施し、指導教員から助言等を受ける。
第14回	ワークショップの実施	ワークショップを実施し、そこで受けた指摘事項等を整理した上で、提出論文に反映すべきところを把握する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

学生と相談し、進め方を決定していく。

【テキスト（教科書）】

適宜、推薦する。

【参考書】

適宜、推薦する。

【成績評価の方法と基準】

成績は、参加につき 30 %、進捗状況につき 70 %とする。

【学生の意見等からの気づき】

今後も、博士号論文の執筆に関する進捗状況を確認し、学会発表等への推薦等を継続して行っていく。

【学生が準備すべき機器他】

インターネット検索、法令・判例検索、学会等での発表練習のためのコンピュータ。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

日米比較法（環境法、防衛法、サイバー法制など）。

<研究テーマ>

現在の研究テーマは、「環境監査と法」、「サイバーセキュリティと法」など。

<主要研究業績>

最近の論文は、以下のとおり。

「米国防総省によるサイバーセキュリティ成熟度モデル認証（CMMC）の導入：現行の NIST SP 800-171 の遵守制度を超えて」CISTEC journal186 号 200 頁以下（2020 年 3 月）。

「米国におけるセキュリティクリアランス制度の大改革」CISTEC journal185 号 223 頁以下（2020 年 1 月）。

「米国の重要インフラに関するサイバーセキュリティとセキュリティ・クリアランス法制（上）」人間環境論集 19 巻 1 号 13 頁以下（2018 年 12 月）。

【Outline and objectives】

As a research and writing instruction course of the Graduate School of Public Policy and Social Governance, students aim to finalize their theses for doctor's decree acquisition. In addition, students receive practical training to acquire the presentation skills in workshops and their thesis presentation sessions.

SOS700P1 - 006

公共政策学特殊研究 3 B

永野 秀雄

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

公共政策研究科の博士論文指導科目として、博士号取得に向けた学位申請、審査小委員会での審査への準備等について、個別の状況に応じて指導していく。また、審査小委員会において修正すべき点が指摘された場合には、修正方針に基づき、修正とその確認を行い、修正博士論文を提出する。また、授業は、対面授業を予定しているが、コロナウイルスの感染が拡大した場合には、リアルタイムのライブ型配信授業とする。

【到達目標】

博士論文を提出し、必要な場合には修正博士論文を提出し、審査小委員会と審査委員会の審議を経て、博士号を取得すること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連している。

【授業の進め方と方法】

博士論文の提出にともない、口述試験の準備を行い、修正が指摘された場合には、その方針に従い、修正博士論文を執筆するための指導を行う。また、授業は、リアルタイムのライブ型配信授業を主とします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

なし/No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	学位申請	博士論文をもとに、期限までに学位申請を行う。
第 2 回	審査小委員会の審査及び口述試験の準備（1）	試験のための準備を行う。
第 3 回	審査小委員会の審査及び口述試験の準備（2）	試験のための準備を行う。
第 4 回	審査小委員会の審査及び口述試験の準備（3）	試験のための準備を行う。
第 5 回	審査小委員会の審査及び口述試験の準備（4）	試験のための準備を行う。
第 6 回	博士論文の修正（1）	審査小委員会から博士論文の修正方針が出た場合には、同方針に基づき博士論文の修正を行う。
第 7 回	博士論文の修正（2）	審査小委員会から博士論文の修正方針が出た場合には、同方針に基づき博士論文の修正を行う。
第 8 回	博士論文の修正（3）	審査小委員会から博士論文の修正方針が出た場合には、同方針に基づき博士論文の修正を行う。
第 9 回	博士論文の修正（4）	審査小委員会から博士論文の修正方針が出た場合には、同方針に基づき博士論文の修正を行う。
第 10 回	博士論文の修正（5）	審査小委員会から博士論文の修正方針が出た場合には、同方針に基づき博士論文の修正を行う。
第 11 回	修正博士論文の確認（1）	修正博士論文につき、提出前の詳細な確認を行う。
第 12 回	修正博士論文の確認（2）	修正博士論文につき、提出前の詳細な確認を行う。
第 13 回	修正博士論文の最終確認（1）	修正博士論文につき、提出前の詳細な最終確認を行う。
第 14 回	修正博士論文の最終確認（2）	修正博士論文につき、提出前の詳細な最終確認を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

学生と相談し、進め方を決定していく。

【テキスト（教科書）】

適宜、推薦する。

【参考書】

適宜、推薦する。

【成績評価の方法と基準】

参加 30 %、進捗状況 70 %で評価する。

【学生の意見等からの気づき】

今後も、博士号論文の執筆に関する進捗状況を確認し、学会発表等への推薦等を継続して行っていく。

【学生が準備すべき機器他】

インターネット検索、法令・判例検索、学会発表練習のためのコンピュータ。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

専門領域は、日米比較法（環境法、防衛法、サイバー法制など）。

<研究テーマ>

現在の研究テーマは、「環境監査と法」、「サイバーセキュリティと法」など。

<主要研究業績>

最近の研究業績は、以下のとおり。

「米国防総省によるサイバーセキュリティ成熟度モデル認証（CMMC）の導入：現行の NIST SP 800-171 の遵守制度を超えて」CISTEC journal186 号 200 頁以下（2020 年 3 月）

「米国におけるセキュリティクリアランス制度の大改革」CISTEC journal185 号 223 頁以下（2020 年 1 月）

「米国の重要インフラに関するサイバーセキュリティとセキュリティ・クリアランス法制（上）」人間環境論集 19 巻 1 号 13 頁以下（2018 年 12 月）。

【Outline and objectives】

As a research and writing instruction course of the Graduate School of Public Policy and Social Governance, students are given guidance for the Application for Doctor's Degree and preparation for the Review Subcommittee of Doctor's Degree. In addition, when the Review Subcommittee points some descriptions of the thesis should be modified, based on the amendment policy, the thesis would be modified and the revised doctoral thesis is resubmitted.

SOS700P1 - 005

公共政策学特殊研究 3 A

渡邊 誠

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

研究を遂行し博士論文を執筆するために必要な事項について学ぶ。受講者は研究テーマの妥当性、関連資料の収集、先行研究の調査と分析、論点の整理と検証、論文技法と表現法などについて再点検し、これらの応用法を身につけることを目的とする。

【到達目標】

博士論文を執筆するために必要な事項について再確認する。受講者は研究活動を遂行し論文を完成させるための高度な応用力を総合的に身につけることができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連している。

【授業の進め方と方法】

本科目では対面形式で授業を進める。受講者はあらかじめ準備してきた内容について報告する。それをもとに参加者全員で検討を行っていく。また受講者は各々の進捗状況に応じて個別指導も受けることになる。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業の方針、進め方について
第2回	テーマの確認（妥当性などの再確認）	課題の洗い出しとテーマ選定に関する再検討
第3回	テーマの確認（社会的インパクトの検討・確認）	課題の洗い出しとテーマ選定に関する再検討
第4回	先行研究の調査・分析とその確認（論点の再確認）	文献の詳細把握、分析手法・技法の評価、論点整理
第5回	先行研究の調査・分析とその確認（課題の再確認）	文献の詳細把握、分析手法・技法の評価、論点整理
第6回	分析手法・評価手法などの確認（再確認）	研究計画と分析手法・技法、評価方法などの吟味・再点検
第7回	分析手法・評価手法などの確認（再検討）	研究計画と分析手法・技法、評価方法などの吟味・再点検
第8回	研究の詳細設計と調査（再確認）	研究の企画・計画の再検討、調査対象・調査方法の再確認
第9回	研究の詳細設計と調査（再検討）	研究の企画・計画の再検討、調査対象・調査方法の再確認
第10回	研究の詳細設計と調査（進捗確認）	研究の企画・計画の再検討、調査対象・調査方法の再確認
第11回	研究と表現（文章表現技法の再検討）	文章表現と論文記述法、プレゼンテーション法の研究
第12回	研究と表現（文章表現技法の再確認）	文章表現と論文記述法、プレゼンテーション法の研究
第13回	研究報告（進捗状況報告）	研究テーマに関する進捗状況の報告と討論
第14回	研究報告（再検討）	研究テーマに関する進捗状況の報告と討論

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とする。各々のテーマについて研究を進め報告の準備を行う。また論文執筆とそのための準備を行う。

【テキスト（教科書）】

使用しない。

【参考書】

開講時に指示する。

【成績評価の方法と基準】

報告内容および討論参加の積極性など 100%。

【学生の意見等からの気づき】

各々の研究の進捗状況を勘案しながら、柔軟に対応していく。

【学生が準備すべき機器他】

特になし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>非線形力学、物性理論、計算科学

<研究テーマ>カオスとフラクタル、交通流のダイナミックス

<主要研究業績> Dynamics of group motions controlled by signal processing: A cellular-automaton model and its applications, Communications in Nonlinear Science and Numerical Simulation 11(2006)pp.624-634. An extension of optimal-velocity model and dynamical transition in congested phase (I & II), Far East Journal of Dynamical Systems 16(2011)pp.71-86 & 17(2011)pp.1-15.

【Outline and objectives】

This is a seminar to accomplish research themes and to complete the thesis for each member of this class in the doctor's course. We will mainly discuss the following processes: validity of research theme and scheme, analysis of previous works, the presentation technics, and other points required.

SOS700P1 - 006

公共政策学特殊研究 3 B

渡邊 誠

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

「公共政策学特殊研究 3 A」に引き続き、研究を遂行し博士論文を執筆するために必要な事項について学ぶ。受講者は研究テーマの妥当性、関連資料の収集、先行研究の調査と分析、論点の整理と検証、論文技法と表現法、などについて再点検しさらなる発展につなげる力を身につけることを目的とする。

【到達目標】

博士論文を執筆するために必要な事項について再点検する。受講者は研究活動を遂行し論文を完成させるための高度な応用力をさらに総合的に修得することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連している。

【授業の進め方と方法】

本科目では対面形式で授業を行う。受講者はあらかじめ準備してきた内容について報告する。それをもとに参加者全員で検討を行っていく。また受講者は各々の進捗状況に応じて個別指導も受けることになる。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	授業の方針、進め方について
第 2 回	研究テーマの再確認（調査内容の再確認）	テーマの再確認と論点確認、研究方針の再検討
第 3 回	研究テーマの再確認（研究意義の再確認）	テーマの再確認と論点確認、研究方針の再検討
第 4 回	研究報告と討論（調査内容の報告）	調査内容と分析・評価、主張内容の確認など
第 5 回	研究報告と討論（報告内容の検討）	調査内容と分析・評価、主張内容の確認など
第 6 回	研究報告と討論（主張内容の再確認）	調査内容と分析・評価、主張内容の確認など
第 7 回	研究報告と討論（主張内容の再検討）	調査内容と分析・評価、主張内容の確認など
第 8 回	研究報告と討論（論点の再整理）	調査内容と分析・評価、主張内容の確認など
第 9 回	研究報告と討論（課題の再整理）	調査内容と分析・評価、主張内容の確認など
第 10 回	研究報告と討論（研究の総合的検討）	調査内容と分析・評価、主張内容の確認など
第 11 回	研究の意義・役割の検証と総合的評価（新規性の再確認）	論文のオリジナリティ、有効性の確認と社会的意義の再検討
第 12 回	研究の意義・役割の検証と総合的評価（有効性の再確認）	論文のオリジナリティ、有効性の確認と社会的意義の再検討
第 13 回	博士論文の執筆法（論文構成法の再検討）	博士論文の執筆と表現の検討、先行研究との関連性の確認など
第 14 回	博士論文の執筆法（論文表現の再検討）	博士論文の執筆と表現の検討、先行研究との関連性の確認など

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は各 2 時間を標準とする。各々のテーマについて研究を進め報告の準備を行う。また論文執筆とそのための準備を行う。

【テキスト（教科書）】

使用しない。

【参考書】

開講時に指示する。

【成績評価の方法と基準】

報告内容および討論参加の積極性など 100%。

【学生の意見等からの気づき】

各々の研究の進捗状況を勘案しながら、柔軟に対応していく。

【学生が準備すべき機器他】

特になし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>非線形力学、物性理論、計算科学
<研究テーマ>カオスとフラクタル、交通流のダイナミクス

<主要研究業績> Dynamics of group motions controlled by signal processing: A cellular-automaton model and its applications, Communications in Nonlinear Science and Numerical Simulation 11(2006)pp.624-634. An extension of optimal-velocity model and dynamical transition in congested phase (I & II), Far East Journal of Dynamical Systems 16(2011)pp.71-86 & 17(2011)pp.1-15.

【Outline and objectives】

This is a seminar to accomplish research themes and to complete the thesis for each member of this class in the doctor's course. We will mainly discuss the following processes: confirmation of research theme and scheme, the relation to previous works, the writing technics of thesis, and other points required. This seminar is a developed subject from 3A.

POL700P1 - 101

公共政策ワークショップ（公共） 1 A

淵元 初姫

備考（履修条件等）：隔週授業

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

公共マネジメントコースの全教員による集团的論文研究指導の科目であることから、いつも指導を受けている指導教員以外の教員やそのほかの院生などからのコメントをもらい、博士論文の完成に向けて、作業を進める。

【到達目標】

1年目については、テーマの決定と論文構想の大枠にたどり着くことが目標となる。少なくとも1章分については、執筆をはじめることが望ましい。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連している。

【授業の進め方と方法】

院生の報告に対して、参加院生との質疑、指導教員以外の教員からのコメント、指導教員からの総評、という方法で進めることによってフィードバックを行う。

授業方式は原則として対面授業とする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	院生1の報告	院生1の報告、参加院生との質疑応答、指導教員以外の教員からのコメント、指導教員からの総評
第2回	院生2の報告	院生2の報告、参加院生との質疑応答、指導教員以外の教員からのコメント、指導教員からの総評
第3回	院生3の報告	院生3の報告、参加院生との質疑応答、指導教員以外の教員からのコメント、指導教員からの総評
第4回	院生4の報告	院生4の報告、参加院生との質疑応答、指導教員以外の教員からのコメント、指導教員からの総評
第5回	院生5の報告	院生5の報告、参加院生との質疑応答、指導教員以外の教員からのコメント、指導教員からの総評
第6回	院生6の報告	院生6の報告、参加院生との質疑応答、指導教員以外の教員からのコメント、指導教員からの総評
第7回	院生7の報告	院生7の報告、参加院生との質疑応答、指導教員以外の教員からのコメント、指導教員からの総評
第8回	院生8の報告	院生8の報告、参加院生との質疑応答、指導教員以外の教員からのコメント、指導教員からの総評
第9回	院生9の報告	院生9の報告、参加院生との質疑応答、指導教員以外の教員からのコメント、指導教員からの総評
第10回	院生10の報告	院生10の報告、参加院生との質疑応答、指導教員以外の教員からのコメント、指導教員からの総評
第11回	院生11の報告	院生11の報告、参加院生との質疑応答、指導教員以外の教員からのコメント、指導教員からの総評
第12回	院生12の報告	院生12の報告、参加院生との質疑応答、指導教員以外の教員からのコメント、指導教員からの総評
第13回	院生13の報告	院生13の報告、参加院生との質疑応答、指導教員以外の教員からのコメント、指導教員からの総評
第14回	院生14の報告	院生14の報告、参加院生との質疑応答、指導教員以外の教員からのコメント、指導教員からの総評

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は各1時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

特になし。

【参考書】

テーマに応じて、その都度必読文献を指摘する。

【成績評価の方法と基準】

博士論文の完成にむけての作業を真剣に取り組んでいるかどうかを判断して、評価する（100%）。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【担当教員の専門分野等】

【淵元初姫】

<専門領域> 比較政治学、コミュニティ政策、福祉政策

<研究テーマ> ポスト福祉国家時代の市民社会論、地域社会における社会的包摂、英国・スコットランドの地方自治・自治体内分権

<主要研究業績>

「スコットランドの地域評議会－制度の基本的構想とその機能の実際」名和田彦彦編（2009）『コミュニティの自治－自治体内分権と協働の国際比較』pp.81-118、日本評論社

「スコットランドにおける権限移譲とジェンダー・クォータ」三浦まり・衛藤幹子編著（2014）『ジェンダー・クォータ－世界の女性議員はなぜ増えたのか』pp.203-26、明石書店

「地域社会における社会的連帯の再編：居場所づくりにみる三人称的連帯の可能性」金安岩男・牧瀬稔編著（2019）『都市・地域政策研究の現在』pp.131-42、地域開発研究所

【Outline and objectives】

All PhD students in Public Management are required to attend this compulsory course.

A series of workshops encourage doctoral students to reflect on the wider context of their research, publishing their research and preparing for the viva voce exam. Discussion with tutors and fellow students will stimulate you to think critically about societal issues.

POL700P1 - 102

公共政策ワークショップ（公共） 1 B

淵元 初姫

備考（履修条件等）：隔週授業

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

公共マネジメントコースの全教員による集团的論文研究指導の科目であることから、いつも指導を受けている指導教員以外の教員やそのほかの院生などからのコメントをもらい、博士論文の完成に向けて、作業を進める。

【到達目標】

1年目の秋学期については、テーマの決定と論文構想の大枠にたどり着き、洗練させることが目標となろう。少なくとも1章分については、執筆をはじめることが望ましい。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連している。

【授業の進め方と方法】

院生の報告に対して、参加院生との質疑、指導教員以外の教員からのコメント、指導教員からの総評、という方法で進めることによってフィードバックを行う。

授業方式は原則として対面授業とする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	院生1の報告	院生1の報告、参加院生との質疑応答、指導教員以外の教員からのコメント、指導教員からの総評
第2回	院生2の報告	院生2の報告、参加院生との質疑応答、指導教員以外の教員からのコメント、指導教員からの総評
第3回	院生3の報告	院生3の報告、参加院生との質疑応答、指導教員以外の教員からのコメント、指導教員からの総評
第4回	院生4の報告	院生4の報告、参加院生との質疑応答、指導教員以外の教員からのコメント、指導教員からの総評
第5回	院生5の報告	院生5の報告、参加院生との質疑応答、指導教員以外の教員からのコメント、指導教員からの総評
第6回	院生6の報告	院生6の報告、参加院生との質疑応答、指導教員以外の教員からのコメント、指導教員からの総評
第7回	院生7の報告	院生7の報告、参加院生との質疑応答、指導教員以外の教員からのコメント、指導教員からの総評
第8回	院生8の報告	院生8の報告、参加院生との質疑応答、指導教員以外の教員からのコメント、指導教員からの総評
第9回	院生9の報告	院生9の報告、参加院生との質疑応答、指導教員以外の教員からのコメント、指導教員からの総評
第10回	院生10の報告	院生10の報告、参加院生との質疑応答、指導教員以外の教員からのコメント、指導教員からの総評
第11回	院生11の報告	院生11の報告、参加院生との質疑応答、指導教員以外の教員からのコメント、指導教員からの総評
第12回	院生12の報告	院生12の報告、参加院生との質疑応答、指導教員以外の教員からのコメント、指導教員からの総評
第13回	院生13の報告	院生13の報告、参加院生との質疑応答、指導教員以外の教員からのコメント、指導教員からの総評
第14回	院生14の報告	院生14の報告、参加院生との質疑応答、指導教員以外の教員からのコメント、指導教員からの総評

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は各1時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

特になし。

【参考書】

テーマに応じて、その都度必読文献を指摘する。

【成績評価の方法と基準】

博士論文の完成にむけての作業を真剣に取り組んでいるかどうかを判断して、評価する（100%）。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【担当教員の専門分野等】

【淵元初姫】

<専門領域> 比較政治学、コミュニティ政策、福祉政策

<研究テーマ> ポスト福祉国家時代の市民社会論、地域社会における社会的包摂、英国・スコットランドの地方自治・自治体内分権

<主要研究業績>

「スコットランドの地域評議会－制度の基本的構想とその機能の実際」名和田是彦編（2009）『コミュニティの自治－自治体内分権と協働の国際比較』pp.81-118、日本評論社

「地域社会における権限移譲とジェンダー・クオータ」三浦まり・衛藤幹子編著（2014）『ジェンダー・クオータ－世界の女性議員はなぜ増えたのか』pp.203-26、明石書店

「スコットランドにおける社会的連帯の再編：居場所づくりにみる三人称的連帯の可能性」金安岩男・牧瀬稔編著（2019）『都市・地域政策研究の現在』pp.131-42、地域開発研究所

【Outline and objectives】

All PhD students in Public Management are required to attend this compulsory course.

A series of workshops encourage doctoral students to reflect on the wider context of their research, publishing their research and preparing for the viva voce exam. Discussion with tutors and fellow students will stimulate you to think critically about societal issues.

POL700P1 - 103

公共政策ワークショップ（公共）2 A

淵元 初姫

備考（履修条件等）：隔週授業

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

公共マネジメントコースの全教員による集团的論文研究指導の科目であることから、いつも指導を受けている指導教員以外の教員やそのほかの院生などからのコメントをもらい、博士論文の完成に向けて、作業を進める。

【到達目標】

2年目については、テーマの決定と論文構想の大枠にたどり着くことが目標となろう。少なくとも複数章分について、執筆をいっていることが望ましい。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連している。

【授業の進め方と方法】

院生の報告に対して、参加院生との質疑、指導教員以外の教員からのコメント、指導教員からの総評、という方法で進めることによってフィードバックを行う。

授業方式は原則として対面授業とする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	院生1の報告	院生1の報告、参加院生との質疑応答、指導教員以外の教員からのコメント、指導教員からの総評
第2回	院生2の報告	院生2の報告、参加院生との質疑応答、指導教員以外の教員からのコメント、指導教員からの総評
第3回	院生3の報告	院生3の報告、参加院生との質疑応答、指導教員以外の教員からのコメント、指導教員からの総評
第4回	院生4の報告	院生4の報告、参加院生との質疑応答、指導教員以外の教員からのコメント、指導教員からの総評
第5回	院生5の報告	院生5の報告、参加院生との質疑応答、指導教員以外の教員からのコメント、指導教員からの総評
第6回	院生6の報告	院生6の報告、参加院生との質疑応答、指導教員以外の教員からのコメント、指導教員からの総評
第7回	院生7の報告	院生7の報告、参加院生との質疑応答、指導教員以外の教員からのコメント、指導教員からの総評
第8回	院生8の報告	院生8の報告、参加院生との質疑応答、指導教員以外の教員からのコメント、指導教員からの総評
第9回	院生9の報告	院生9の報告、参加院生との質疑応答、指導教員以外の教員からのコメント、指導教員からの総評
第10回	院生10の報告	院生10の報告、参加院生との質疑応答、指導教員以外の教員からのコメント、指導教員からの総評
第11回	院生11の報告	院生11の報告、参加院生との質疑応答、指導教員以外の教員からのコメント、指導教員からの総評
第12回	院生12の報告	院生12の報告、参加院生との質疑応答、指導教員以外の教員からのコメント、指導教員からの総評
第13回	院生13の報告	院生13の報告、参加院生との質疑応答、指導教員以外の教員からのコメント、指導教員からの総評
第14回	院生14の報告	院生14の報告、参加院生との質疑応答、指導教員以外の教員からのコメント、指導教員からの総評

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は各1時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

特になし。

【参考書】

テーマに応じて、その都度必読文献を指摘する。

【成績評価の方法と基準】

博士論文の完成にむけての作業を真剣に取り組んでいるかどうかを判断して、評価する（100%）

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【担当教員の専門分野等】

【淵元初姫】

<専門領域> 比較政治学、コミュニティ政策、福祉政策

<研究テーマ> ポスト福祉国家時代の市民社会論、地域社会における社会的包摂、英国・スコットランドの地方自治・自治体内分権

<主要研究業績>

「スコットランドの地域評議会－制度の基本的構想とその機能の実際」名和田彦彦編（2009）『コミュニティの自治－自治体内分権と協働の国際比較』pp.81-118、日本評論社

「スコットランドにおける権限移譲とジェンダー・クォータ」三浦まり・衛藤幹子編著（2014）『ジェンダー・クォータ－世界の女性議員はなぜ増えたのか』pp.203-26、明石書店

「地域社会における社会的連帯の再編：居場所づくりにみる三人称的連帯の可能性」金安岩男・牧瀬稔編著（2019）『都市・地域政策研究の現在』pp.131-42、地域開発研究所

【Outline and objectives】

All PhD students in Public Management are required to attend this compulsory course.

A series of workshops encourage doctoral students to reflect on the wider context of their research, publishing their research and preparing for the viva voce exam. Discussion with tutors and fellow students will stimulate you to think critically about societal issues.

公共政策ワークショップ（公共）2 B

淵元 初姫

備考（履修条件等）：隔週授業

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

公共マネジメントコースの全教員による集团的論文研究指導の科目であることから、いつも指導を受けている指導教員以外の教員やそのほかの院生などからのコメントをもらい、博士論文の完成に向けて、作業を進める。

【到達目標】

2年目については、テーマの決定と論文構想の大枠にたどり着き、それをさらに洗練させながら、少なくとも複数章分について、執筆していることが目標となる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連している。

【授業の進め方と方法】

院生の報告に対して、参加院生との質疑、指導教員以外の教員からのコメント、指導教員からの総評、という方法で進めることによってフィードバックを行う。

授業方式は原則として対面授業とする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	院生1の報告	院生1の報告、参加院生との質疑応答、指導教員以外の教員からのコメント、指導教員からの総評
第2回	院生2の報告	院生2の報告、参加院生との質疑応答、指導教員以外の教員からのコメント、指導教員からの総評
第3回	院生3の報告	院生3の報告、参加院生との質疑応答、指導教員以外の教員からのコメント、指導教員からの総評
第4回	院生4の報告	院生4の報告、参加院生との質疑応答、指導教員以外の教員からのコメント、指導教員からの総評
第5回	院生5の報告	院生5の報告、参加院生との質疑応答、指導教員以外の教員からのコメント、指導教員からの総評
第6回	院生6の報告	院生6の報告、参加院生との質疑応答、指導教員以外の教員からのコメント、指導教員からの総評
第7回	院生7の報告	院生7の報告、参加院生との質疑応答、指導教員以外の教員からのコメント、指導教員からの総評
第8回	院生8の報告	院生8の報告、参加院生との質疑応答、指導教員以外の教員からのコメント、指導教員からの総評
第9回	院生9の報告	院生9の報告、参加院生との質疑応答、指導教員以外の教員からのコメント、指導教員からの総評
第10回	院生10の報告	院生10の報告、参加院生との質疑応答、指導教員以外の教員からのコメント、指導教員からの総評
第11回	院生11の報告	院生11の報告、参加院生との質疑応答、指導教員以外の教員からのコメント、指導教員からの総評
第12回	院生12の報告	院生12の報告、参加院生との質疑応答、指導教員以外の教員からのコメント、指導教員からの総評
第13回	院生13の報告	院生13の報告、参加院生との質疑応答、指導教員以外の教員からのコメント、指導教員からの総評
第14回	院生14の報告	院生14の報告、参加院生との質疑応答、指導教員以外の教員からのコメント、指導教員からの総評

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は各1時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

特になし。

【参考書】

テーマに応じて、その都度必読文献を指摘する。

【成績評価の方法と基準】

博士論文の完成にむけての作業を真剣に取り組んでいるかどうかを判断して、評価する（100%）

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【担当教員の専門分野等】

【淵元初姫】

<専門領域> 比較政治学、コミュニティ政策、福祉政策

<研究テーマ> ポスト福祉国家時代の市民社会論、地域社会における社会的包摂、英国・スコットランドの地方自治・自治体内分権

<主要研究業績>

「スコットランドの地域評議会－制度の基本的構想とその機能の実際」名和田是彦編（2009）『コミュニティの自治－自治体内分権と協働の国際比較』pp.81-118、日本評論社

「地域社会における社会的連帯の再編：居場所づくりにみる三人称的連帯の可能性」金安岩男・牧瀬稔編著（2019）『都市・地域政策研究の現在』pp.131-42、地域開発研究所

pp.203-26、明石書店

「スコットランドにおける権限移譲とジェンダー・クォータ」三浦まり・衛藤幹子編著（2014）『ジェンダー・クォータ－世界の女性議員はなぜ増えたのか』pp.203-26、明石書店

「スコットランドにおける社会的連帯の再編：居場所づくりにみる三人称的連帯の可能性」金安岩男・牧瀬稔編著（2019）『都市・地域政策研究の現在』pp.131-42、地域開発研究所

pp.131-42、地域開発研究所

「スコットランドにおける社会的連帯の再編：居場所づくりにみる三人称的連帯の可能性」金安岩男・牧瀬稔編著（2019）『都市・地域政策研究の現在』pp.131-42、地域開発研究所

地域開発研究所

【Outline and objectives】

All PhD students in Public Management are required to attend this compulsory course.

A series of workshops encourage doctoral students to reflect on the wider context of their research, publishing their research and preparing for the viva voce exam. Discussion with tutors and fellow students will stimulate you to think critically about societal issues.

POL700P1 - 105

公共政策ワークショップ（公共）3A

淵元 初姫

備考（履修条件等）：隔週授業

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

公共マネジメントコースの全教員による集团的論文研究指導の科目であることから、いつも指導を受けている指導教員以外の教員やそのほかの院生などからのコメントをもらい、博士論文の完成に向けて、作業を進める。

【到達目標】

3年目については、博士論文全体の完成を目指す。翌年の3月修了のためには、9月末までが提出期限となる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連している。

【授業の進め方と方法】

院生の報告に対して、参加院生との質疑、指導教員以外の教員からのコメント、指導教員からの総評、という方法で進めることによってフィードバックを行う。

授業方式は原則として対面授業とする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	院生1の報告	院生1の報告、参加院生との質疑応答、指導教員以外の教員からのコメント、指導教員からの総評
第2回	院生2の報告	院生2の報告、参加院生との質疑応答、指導教員以外の教員からのコメント、指導教員からの総評
第3回	院生3の報告	院生3の報告、参加院生との質疑応答、指導教員以外の教員からのコメント、指導教員からの総評
第4回	院生4の報告	院生4の報告、参加院生との質疑応答、指導教員以外の教員からのコメント、指導教員からの総評
第5回	院生5の報告	院生5の報告、参加院生との質疑応答、指導教員以外の教員からのコメント、指導教員からの総評
第6回	院生6の報告	院生6の報告、参加院生との質疑応答、指導教員以外の教員からのコメント、指導教員からの総評
第7回	院生7の報告	院生7の報告、参加院生との質疑応答、指導教員以外の教員からのコメント、指導教員からの総評
第8回	院生8の報告	院生8の報告、参加院生との質疑応答、指導教員以外の教員からのコメント、指導教員からの総評
第9回	院生9の報告	院生9の報告、参加院生との質疑応答、指導教員以外の教員からのコメント、指導教員からの総評
第10回	院生10の報告	院生10の報告、参加院生との質疑応答、指導教員以外の教員からのコメント、指導教員からの総評
第11回	院生11の報告	院生11の報告、参加院生との質疑応答、指導教員以外の教員からのコメント、指導教員からの総評
第12回	院生12の報告	院生12の報告、参加院生との質疑応答、指導教員以外の教員からのコメント、指導教員からの総評
第13回	院生13の報告	院生13の報告、参加院生との質疑応答、指導教員以外の教員からのコメント、指導教員からの総評
第14回	院生14の報告	院生14の報告、参加院生との質疑応答、指導教員以外の教員からのコメント、指導教員からの総評

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は各1時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

特になし。

【参考書】

テーマに応じて、その都度必読文献を指摘する。

【成績評価の方法と基準】

博士論文の完成にむけての作業を真剣に取り組んでいるかどうかを判断して、評価する（100%）。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【担当教員の専門分野等】

【淵元初姫】

<専門領域> 比較政治学、コミュニティ政策、福祉政策

<研究テーマ> ポスト福祉国家時代の市民社会論、地域社会における社会的包摂、英国・スコットランドの地方自治・自治体内分権

<主要研究業績>

「スコットランドの地域評議会－制度の基本的構想とその機能の実際」名和田は彦編（2009）『コミュニティの自治－自治体内分権と協働の国際比較』pp.81-118、日本評論社

「スコットランドにおける権限移譲とジェンダー・クォータ」三浦まり・衛藤幹子編著（2014）『ジェンダー・クォータ－世界の女性議員はなぜ増えたのか』pp.203-26、明石書店

「地域社会における社会的連帯の再編：居場所づくりにみる三人称的連帯の可能性」金安岩男・牧瀬稔編著（2019）『都市・地域政策研究の現在』pp.131-42、地域開発研究所

【Outline and objectives】

All PhD students in Public Management are required to attend this compulsory course.

A series of workshops encourage doctoral students to reflect on the wider context of their research, publishing their research and preparing for the viva voce exam. Discussion with tutors and fellow students will stimulate you to think critically about societal issues.

POL700P1 - 106

公共政策ワークショップ（公共）3B

淵元 初姫

備考（履修条件等）：隔週授業

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

公共マネジメントコースの全教員による集团的論文研究指導の科目であることから、いつも指導を受けている指導教員以外の教員やそのほかの院生などからのコメントをもらい、博士論文の完成に向けて、作業を進める。

【到達目標】

3年目の秋学期は、順調にいけば、論文を提出しているため、公開審査会と口述試験のための準備となる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連している。

【授業の進め方と方法】

院生の報告に対して、参加院生との質疑、指導教員以外の教員からのコメント、指導教員からの総評、という方法で進めることによってフィードバックを行う。

授業方式は原則として対面授業とする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	院生1の報告	院生1の報告、参加院生との質疑応答、指導教員以外の教員からのコメント、指導教員からの総評
第2回	院生2の報告	院生2の報告、参加院生との質疑応答、指導教員以外の教員からのコメント、指導教員からの総評
第3回	院生3の報告	院生3の報告、参加院生との質疑応答、指導教員以外の教員からのコメント、指導教員からの総評
第4回	院生4の報告	院生4の報告、参加院生との質疑応答、指導教員以外の教員からのコメント、指導教員からの総評
第5回	院生5の報告	院生5の報告、参加院生との質疑応答、指導教員以外の教員からのコメント、指導教員からの総評
第6回	院生6の報告	院生6の報告、参加院生との質疑応答、指導教員以外の教員からのコメント、指導教員からの総評
第7回	院生7の報告	院生7の報告、参加院生との質疑応答、指導教員以外の教員からのコメント、指導教員からの総評
第8回	院生8の報告	院生8の報告、参加院生との質疑応答、指導教員以外の教員からのコメント、指導教員からの総評
第9回	院生9の報告	院生9の報告、参加院生との質疑応答、指導教員以外の教員からのコメント、指導教員からの総評
第10回	院生10の報告	院生10の報告、参加院生との質疑応答、指導教員以外の教員からのコメント、指導教員からの総評
第11回	院生11の報告	院生11の報告、参加院生との質疑応答、指導教員以外の教員からのコメント、指導教員からの総評
第12回	院生12の報告	院生12の報告、参加院生との質疑応答、指導教員以外の教員からのコメント、指導教員からの総評
第13回	院生13の報告	院生13の報告、参加院生との質疑応答、指導教員以外の教員からのコメント、指導教員からの総評
第14回	院生14の報告	院生14の報告、参加院生との質疑応答、指導教員以外の教員からのコメント、指導教員からの総評

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は各1時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

特になし。

【参考書】

テーマに応じて、その都度必読文献を指摘する。

【成績評価の方法と基準】

博士論文の完成にむけての作業を真剣に取り組んでいるかどうかを判断して、評価する（100%）。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【担当教員の専門分野等】

【淵元初姫】

<専門領域> 比較政治学、コミュニティ政策、福祉政策

<研究テーマ> ポスト福祉国家時代の市民社会論、地域社会における社会的包摂、英国・スコットランドの地方自治・自治体内分権

<主要研究業績>

「スコットランドの地域評議会－制度の基本的構想とその機能の実際」名和田は彦編（2009）『コミュニティの自治－自治体内分権と協働の国際比較』pp.81-118、日本評論社

「スコットランドにおける権限移譲とジェンダー・クォータ」三浦まり・衛藤幹子編著（2014）『ジェンダー・クォータ－世界の女性議員はなぜ増えたのか』pp.203-26、明石書店

「地域社会における社会的連帯の再編：居場所づくりにみる三人称的連帯の可能性」金安岩男・牧瀬稔編著（2019）『都市・地域政策研究の現在』pp.131-42、地域開発研究所

【Outline and objectives】

All PhD students in Public Management are required to attend this compulsory course.

A series of workshops encourage doctoral students to reflect on the wider context of their research, publishing their research and preparing for the viva voce exam. Discussion with tutors and fellow students will stimulate you to think critically about societal issues.

SOC700P1 - 201

公共政策ワークショップ（政策研究） 1 A

中筋 直哉、加藤 寛之

備考（履修条件等）：隔週授業

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

政策研究コースに所属する全教員が参加し集団的研究指導を行う。受講者は研究発表を行い、指導教授以外の教員および参加者からのコメントをもらうことで、博士論文執筆に向けて研究内容の向上を目指す。

【到達目標】

1. 博士後期課程第1年度は、博士論文で取り組むべきテーマの決定と論文構想の大枠を決定する。
2. 学会発表および論文投稿を積極的に行う。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連、特に「DP1」は特に強く関連している。

【授業の進め方と方法】

教室で対面で実施（予定）。授業は院生の報告に対して、教員および参加院生等による質疑、報告者による応答、指導教授以外の教員からのコメント、指導教授による総評という形で進めていく。受講者は原則として半期1回程度の報告を行う。報告は内容を(1)学会発表プロポーザル (proposal)、(2)博士論文プロポーザル (proposal) に区分して実施する。報告については授業中に参加教員からフィードバックする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業の目的と到達目標の確認
第2回	研究報告	院生の報告と参加者との質疑応答、教員からのコメント・総評
第3回	研究報告	院生の報告と参加者との質疑応答、教員からのコメント・総評
第4回	研究報告	院生の報告と参加者との質疑応答、教員からのコメント・総評
第5回	研究報告	院生の報告と参加者との質疑応答、教員からのコメント・総評
第6回	研究報告	院生の報告と参加者との質疑応答、教員からのコメント・総評
第7回	研究報告	院生の報告と参加者との質疑応答、教員からのコメント・総評
第8回	研究報告	院生の報告と参加者との質疑応答、教員からのコメント・総評
第9回	博士論文中間報告会	過年度博士課程院生も含めた報告、質疑応答、教員からのコメント・総評
第10回	研究報告	院生の報告と参加者との質疑応答、教員からのコメント・総評
第11回	研究報告	院生の報告と参加者との質疑応答、教員からのコメント・総評
第12回	研究報告	院生の報告と参加者との質疑応答、教員からのコメント・総評
第13回	研究報告	院生の報告と参加者との質疑応答、教員からのコメント・総評
第14回	研究報告	院生の報告と参加者との質疑応答、教員からのコメント・総評

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は各1時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

特に用いない。

【参考書】

適宜紹介する。

【成績評価の方法と基準】

報告内容(70%)を中心に、討論への参加(30%)を目途に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【担当教員の専門分野等】

政策研究コース各教員の記載頁を参照のこと。

【Outline and objectives】

This seminar discuss students' doctoral theses each other to promote their qualities.

公共政策ワークショップ（政策研究） 1 B

中筋 直哉、加藤 寛之

備考（履修条件等）：隔週授業

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

政策研究コースに所属する全教員が参加し集団的研究指導を行う。受講者は研究発表を行い、指導教授以外の教員および参加者からのコメントをもらうことで、博士論文執筆に向けて研究内容の向上を目指す。

【到達目標】

1. 博士後期課程第1年度は博士論文で取り組むべきテーマの決定と論文構想の大枠を決定する。
2. 学会発表および論文投稿を積極的に行う。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連、特に「DP1」は特に強く関連している。

【授業の進め方と方法】

教室で対面で実施（予定）。授業は院生の報告に対して、教員および参加院生等による質疑、報告者の応答、指導教授以外の教員からのコメント、指導教授による総評という形で進めていく。受講者は原則として半期1回程度の報告を行う。報告は内容を(1)学会発表プロポーザル (proposal)、(2)博士論文プロポーザル (proposal) に区分して実施する。報告については授業中に参加教員からフィードバックする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業の目的と到達目標の確認
第2回	研究報告	院生の報告と参加者との質疑応答、教員からのコメント・総評
第3回	研究報告	院生の報告と参加者との質疑応答、教員からのコメント・総評
第4回	研究報告	院生の報告と参加者との質疑応答、教員からのコメント・総評
第5回	研究報告	院生の報告と参加者との質疑応答、教員からのコメント・総評
第6回	研究報告	院生の報告と参加者との質疑応答、教員からのコメント・総評
第7回	研究報告	院生の報告と参加者との質疑応答、教員からのコメント・総評
第8回	研究報告	院生の報告と参加者との質疑応答、教員からのコメント・総評
第9回	研究報告	院生の報告と参加者との質疑応答、教員からのコメント・総評
第10回	研究報告	院生の報告と参加者との質疑応答、教員からのコメント・総評
第11回	博士論文中間報告会	過年度博士課程院生も含めた報告、質疑応答、教員からのコメント・総評
第12回	研究報告	院生の報告と参加者との質疑応答、教員からのコメント・総評
第13回	研究報告	院生の報告と参加者との質疑応答、教員からのコメント・総評
第14回	研究報告	院生の報告と参加者との質疑応答、教員からのコメント・総評

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は各1時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

特に用いない。

【参考書】

適宜紹介する。

【成績評価の方法と基準】

報告内容(70%)を中心に、討論への参加(30%)を目途に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【担当教員の専門分野等】

政策研究コース各教員の記載頁を参照のこと。

【Outline and objectives】

This seminar discuss students' doctoral theses each other to promote their qualities.

SOC700P1 - 203

公共政策ワークショップ（政策研究） 2 A

中筋 直哉、加藤 寛之

備考（履修条件等）：隔週授業

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

政策研究コースに所属する全教員が参加し集団的研究指導を行う。受講者は研究発表を行い、指導教授以外の教員および参加者からのコメントをもらうことで、博士論文執筆に向けて研究内容の向上を目指す。

【到達目標】

1. 博士後期課程第2年度は博士論文で扱うテーマに関する体系的な文献の再検討を行い、またデータの収集および分析をする。
2. 引き続き、学会発表および論文投稿を積極的に行う。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連、特に「DP2」は特に強く関連している。

【授業の進め方と方法】

教室で対面で実施（予定）。授業は院生の報告に対して、教員および参加院生等による質疑、報告者の応答、指導教授以外の教員からのコメント、指導教授による総評という形で進めていく。受講者は原則として半期1回程度の報告を行う。報告は内容を(1)学会発表プロポーザル (proposal)、(2)博士論文プロポーザル (proposal) に区分して実施する。報告については授業中に参加教員からフィードバックする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業の目的と到達目標の確認
第2回	研究報告	院生の報告と参加者との質疑応答、教員からのコメント・総評
第3回	研究報告	院生の報告と参加者との質疑応答、教員からのコメント・総評
第4回	研究報告	院生の報告と参加者との質疑応答、教員からのコメント・総評
第5回	研究報告	院生の報告と参加者との質疑応答、教員からのコメント・総評
第6回	研究報告	院生の報告と参加者との質疑応答、教員からのコメント・総評
第7回	研究報告	院生の報告と参加者との質疑応答、教員からのコメント・総評
第8回	研究報告	院生の報告と参加者との質疑応答、教員からのコメント・総評
第9回	博士論文中間報告会	過年度博士課程院生も含めた報告、質疑応答、教員からのコメント・総評
第10回	研究報告	院生の報告と参加者との質疑応答、教員からのコメント・総評
第11回	研究報告	院生の報告と参加者との質疑応答、教員からのコメント・総評
第12回	研究報告	院生の報告と参加者との質疑応答、教員からのコメント・総評
第13回	研究報告	院生の報告と参加者との質疑応答、教員からのコメント・総評
第14回	研究報告	院生の報告と参加者との質疑応答、教員からのコメント・総評

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は各1時間を標準とします。オンラインを活用し、授業回数2回減分の学習時間の挽回に努める。

【テキスト（教科書）】

特に用いない。

【参考書】

適宜紹介する。

【成績評価の方法と基準】

報告内容(70%)を中心に、討論への参加(30%)を目的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【担当教員の専門分野等】

政策研究コース各教員の記載頁を参照のこと。

【Outline and objectives】

This seminar discuss students' doctoral theses each other to promote their qualities.

公共政策ワークショップ（政策研究）2B

中筋 直哉、加藤 寛之

備考（履修条件等）：隔週授業

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

政策研究コースに所属する全教員が参加し集団的研究指導を行う。受講者は研究発表を行い、指導教授以外の教員および参加者からのコメントをもらうことで、博士論文執筆に向けて研究内容の向上を目指す。

【到達目標】

1. 博士後期課程第2年度は博士論文で扱うテーマに関する体系的な文献の再検討を行い、またデータの収集および分析をする。
2. 引き続き、学会発表および論文投稿を積極的に行う。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連、特に「DP2」は特に強く関連している。

【授業の進め方と方法】

教室で対面で実施（予定）。授業は院生の報告に対して、教員および参加院生等による質疑、報告者の応答、指導教授以外の教員からのコメント、指導教授による総評という形で進めていく。受講者は原則として半期1回程度の報告を行う。報告は内容を(1)学会発表プロポーザル (proposal)、(2)博士論文プロポーザル (proposal) に区分して実施する。報告については授業中に参加教員からフィードバックする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業の目的と到達目標の確認
第2回	研究報告	院生の報告と参加者との質疑応答、教員からのコメント・総評
第3回	研究報告	院生の報告と参加者との質疑応答、教員からのコメント・総評
第4回	研究報告	院生の報告と参加者との質疑応答、教員からのコメント・総評
第5回	研究報告	院生の報告と参加者との質疑応答、教員からのコメント・総評
第6回	研究報告	院生の報告と参加者との質疑応答、教員からのコメント・総評
第7回	研究報告	院生の報告と参加者との質疑応答、教員からのコメント・総評
第8回	研究報告	院生の報告と参加者との質疑応答、教員からのコメント・総評
第9回	研究報告	院生の報告と参加者との質疑応答、教員からのコメント・総評
第10回	研究報告	院生の報告と参加者との質疑応答、教員からのコメント・総評
第11回	博士論文中間報告会	過年度博士課程院生も含めた報告、質疑応答、教員からのコメント・総評
第12回	研究報告	院生の報告と参加者との質疑応答、教員からのコメント・総評
第13回	研究報告	院生の報告と参加者との質疑応答、教員からのコメント・総評
第14回	研究報告	院生の報告と参加者との質疑応答、教員からのコメント・総評

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は各1時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

特に用いない。

【参考書】

適宜紹介する。

【成績評価の方法と基準】

報告内容（70%）を中心に、討論への参加（30%）を目途に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【担当教員の専門分野等】

政策研究コース各教員の記載頁を参照のこと。

【Outline and objectives】

This seminar discuss students' doctoral theses each other to promote their qualities.

SOC700P1 - 205

公共政策ワークショップ（政策研究）3A

中筋 直哉、加藤 寛之

備考（履修条件等）：隔週授業

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

政策研究コースに所属する全教員が参加し集団的研究指導を行う。受講者は研究発表を行い、指導教授以外の教員および参加者からのコメントをもらうことで、博士論文執筆に向けて研究内容の向上を目指す。

【到達目標】

1. 博士後期課程第3年度は博士論文を完成させる。
2. 学会発表および論文投稿を行う。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連、特に「DP3」は特に強く関連している。

【授業の進め方と方法】

教室で対面で実施（予定）。授業は院生の報告に対して、教員および参加院生等による質疑、報告者の応答、指導教授以外の教員からのコメント、指導教授による総評という形で進めていく。受講者は原則として半期1回程度の報告を行う。報告は内容を(1)学会発表プロポーザル (proposal)、(2)博士論文プロポーザル (proposal) に区分して実施する。報告については授業中に参加教員からフィードバックする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業の目的と到達目標の確認
第2回	研究報告	院生の報告と参加者との質疑応答、教員からのコメント・総評
第3回	研究報告	院生の報告と参加者との質疑応答、教員からのコメント・総評
第4回	研究報告	院生の報告と参加者との質疑応答、教員からのコメント・総評
第5回	研究報告	院生の報告と参加者との質疑応答、教員からのコメント・総評
第6回	研究報告	院生の報告と参加者との質疑応答、教員からのコメント・総評
第7回	研究報告	院生の報告と参加者との質疑応答、教員からのコメント・総評
第8回	研究報告	院生の報告と参加者との質疑応答、教員からのコメント・総評
第9回	博士論文中間報告会	過年度博士課程院生も含めた報告、質疑応答、教員からのコメント・総評
第10回	研究報告	院生の報告と参加者との質疑応答、教員からのコメント・総評
第11回	研究報告	院生の報告と参加者との質疑応答、教員からのコメント・総評
第12回	研究報告	院生の報告と参加者との質疑応答、教員からのコメント・総評
第13回	研究報告	院生の報告と参加者との質疑応答、教員からのコメント・総評
第14回	研究報告	院生の報告と参加者との質疑応答、教員からのコメント・総評

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は各1時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

特に用いない。

【参考書】

適宜紹介する。

【成績評価の方法と基準】

報告内容(70%)を中心に、討論への参加(30%)を目的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【担当教員の専門分野等】

政策研究コース各教員の記載頁を参照のこと。

【Outline and objectives】

This seminar discuss students' doctoral theses each other to promote their qualities.

公共政策ワークショップ（政策研究）3B

中筋 直哉、加藤 寛之

備考（履修条件等）：隔週授業

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

政策研究コースに所属する全教員が参加し集団的研究指導を行う。受講者は研究発表を行い、指導教授以外の教員および参加者からのコメントをもらうことで、博士論文執筆に向けて研究内容の向上を目指す。

【到達目標】

1. 博士後期課程第3年度は博士論文を完成させる。
2. 学会発表および論文投稿を行う。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連、特に「DP3」は特に強く関連している。

【授業の進め方と方法】

教室で対面で実施（予定）。授業は院生の報告に対して、教員および参加院生等による質疑、報告者の応答、指導教授以外の教員からのコメント、指導教員による総評という形で進めていく。受講者は原則として半期1回程度の報告を行う。報告は内容を(1)学会発表プロポーザル (proposal)、(2)博士論文プロポーザル (proposal) に区分して実施する。報告については授業中に参加教員からフィードバックする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業の目的と到達目標の確認
第2回	研究報告	院生の報告と参加者との質疑応答、教員からのコメント・総評
第3回	研究報告	院生の報告と参加者との質疑応答、教員からのコメント・総評
第4回	研究報告	院生の報告と参加者との質疑応答、教員からのコメント・総評
第5回	研究報告	院生の報告と参加者との質疑応答、教員からのコメント・総評
第6回	研究報告	院生の報告と参加者との質疑応答、教員からのコメント・総評
第7回	研究報告	院生の報告と参加者との質疑応答、教員からのコメント・総評
第8回	研究報告	院生の報告と参加者との質疑応答、教員からのコメント・総評
第9回	研究報告	院生の報告と参加者との質疑応答、教員からのコメント・総評
第10回	研究報告	院生の報告と参加者との質疑応答、教員からのコメント・総評
第11回	博士論文中間報告会	過年度博士課程院生も含めた報告、質疑応答、教員からのコメント・総評
第12回	研究報告	院生の報告と参加者との質疑応答、教員からのコメント・総評
第13回	研究報告	院生の報告と参加者との質疑応答、教員からのコメント・総評
第14回	研究報告	院生の報告と参加者との質疑応答、教員からのコメント・総評

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は各1時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

特に用いない。

【参考書】

適宜紹介する。

【成績評価の方法と基準】

報告内容(70%)を中心に、討論への参加(30%)を目途に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【担当教員の専門分野等】

政策研究コース各教員の記載頁を参照のこと。

【Outline and objectives】

This seminar discuss students' doctoral theses each other to promote their qualities.

POL500P2 - 001

行政学基礎

土山 希美枝

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

行政学の基礎を学ぶ。都市型社会という社会構造と、そこでの（国・自治体）政府の役割、そこからみえる行政機構の役割を理解する。そのために、行政機構の成立を歴史的にふまえ、国・自治体の行政機構とその基礎理論を知り、行政と市民との関係性の展開を整理し、今日の課題を考察する。

【到達目標】

この講義の到達目標は以下のとおり。
 ・都市型社会における（国・自治体）政府と、その機構としての行政の構造について理解できること。
 ・行政機構とそれによって生み出される〈政策・制度〉を、歴史的、政策的、市民的な視角によってとらえることができること。
 ・今日的課題についての考察をすすめるための行政学の基礎的理解ができること、

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻公共マネジメントコースにおいては「DP1」「DP4」に関連している。公共政策学専攻政策研究コースにおいては、ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、特に「DP1」は特に関連している。サステイナビリティ学専攻においては、ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP4」に関連している。

【授業の進め方と方法】

基本的に、テキスト及び配布資料の読解と議論、考察により進行する。受講生は分担してテキストの指定された章または配布資料について要点と論点をまとめて講義で報告し、教員が解説しながら議論と考察をすすめる。導入や総括などでは教員による講義中心の回もある。報告、議論とそれらへのコメントによりフィードバックする。なお、原則として対面講義とする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期前半

回	テーマ	内容
第1回	導入	講義の基本方針と進め方、テキスト読解の役割分担。
第2回	近代化と行政の歴史	政府（国・自治体）と行政機構の歴史を学ぶ（第1部）
第3回	行政組織の理論	行政の組織と管理の理論を学ぶ（第2部 I）
第4回	国政府の組織	国政府の行政機構と組織の編成を学ぶ（第2部 II、III）
第5回	公務員制度と人事	公務員制度と公務員人事の動向を学ぶ（第2部 IV）
第6回	官僚制の理論	官僚制の基礎理論を学ぶ（第3部 II）
第7回	自治体行政の歴史	自治体行政の位置付けとその変遷を歴史的に学ぶ（配布資料）
第8回	自治体行政と計画	自治体行政における計画を学ぶ（配布資料）
第9回	自治体行政と分権改革	分権改革と政府間関係を学ぶ（配布資料）
第10回	行政改革の潮流	行政改革のあゆみと現状、課題を学ぶ（第6部 I、II）
第11回	行政と市民の関係	行政と市民の関係を学ぶ（第3部 V、配布資料）
第12回	行政と市民をめぐる制度	行政と市民の関係を制度から学ぶ（第3部 V、配布資料）
第13回	行政と評価	行政と評価（配布資料）
第14回	総括	行政の今日的課題

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とする。テキスト、配布資料、参考資料の精読を期待する。また、日頃から時事問題にたいする関心と良質な情報の収集に勤しむことを期待する。

【テキスト（教科書）】

村上弘・佐藤満編著『よくわかる行政学 第2版』ミネルヴァ書房、2016年。
ほか、適宜指示する。

【参考書】

石橋章市朗・佐野亘・土山希美枝・南島和久『公共政策学』ミネルヴァ書房、2018年。
今村都南雄・武藤博己・沼田良・佐藤克廣・南島和久『ホーンブック基礎行政学 第3版』北樹出版、2015年。
松下圭一『政策型思考と政治』東京大学出版会、1991年。

【成績評価の方法と基準】

授業への参加：議論への参加（25%）、コメント（25%）の様子、授業の成果：授業内での報告（25%）、期末レポート（25%）の各評価により判断する。

【学生の意見等からの気づき】

本年度が科目の初年度であるため、反映するべき意見を受け取っていない。

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉公共政策、地方自治、政治学
 〈研究テーマ〉社会構造と政策・政治の変容、自治体政策、自治体議会論。
 〈主要研究業績〉『高度成長期「都市政策」の政治過程』日本評論社、2007年。
 『質問力でつくる政策議会』公人の友社、2017年。

【Outline and objectives】

We'll learn the basics of administrative science.
 It consists of such elements;
 the administrative structure of the national and local governments and their basic theory,
 development of the relationship between the administration and the citizens,
 today's issue of local and national administration.

POL500P2 - 002

比較行政研究

申 龍徹

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

比較行政研究の学際的理解及び比較研究手法の習得

【到達目標】

- ①比較行政研究の理論展開を分析することにより、比較行政研究の理論的背景を理解できる（比較行政運動の展開）。
- ② OECD 加盟国における多様な行政現象の中から事例分析を行い、国際比較の方法論を体系的に習得できる（主要国の行政システムの展開と特徴）。
- ③実際の行政活動の改善に役立つ政策案が提案できる専門能力の習得ができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻公共マネジメントコースにおいては「DP2」「DP3」に関連している。公共政策学専攻政策研究コースにおいては、ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、特に「DP2」は特に関連している。サステイナビリティ学専攻においては、ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP4」に関連している。

【授業の進め方と方法】

国際化の深化という現代社会の行政現象を分析する上で欠かせない比較行政研究を研究対象とするこの授業は、講義と発表で進める。講義では、比較行政研究の学際的な発展過程について理解を深めるとともに、OECD 加盟国の行政制度及び行政過程、個別行政の特徴に関する国際比較を通じて、現在の行政課題に対する政策対案の作成を可能とする政策形成能力の向上を目指す。前半は講義を中心に、後半は受講者の発表と討論で構成する。発表では、受講者が設定したテーマ（行政課題）に対し、国内や OECD 諸国との事例の比較・分析を通じて、もっとも有効と思われる対案の作成を目指す。原則として対面で授業を実施すること、新型コロナウイルス感染状況を踏まえ、十分な安全性が確保されないと判断された場合には、オンラインに切り替える。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期後半

回	テーマ	内容
1.2 回目	授業の概要説明	個人課題の設定、発表スケジュールの調整
3.4 回目	比較行政の概念と歴史的展開及び比較行政と発展行政の理論統合	形成期、沈滞期、転換期、跳躍期の比較行政研究 比較行政研究と発展行政論の関係、理論的統合
5.6 回目	行政システムの国際比較 A	英米独仏の行政システムの比較分析
7.8 回目	行政システムの国際比較 B	北欧諸国の行政システムの比較分析
9.10 回目	行政システムの国際比較 C	NICs の行政システム及び日韓の行政システムの比較分析
11.12 回目	比較行政研究事例分析	受講者の事例発表・討論
13.14 回目	比較行政研究の課題と展望	比較行政研究の課題と展望について理解を深める。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

事前に講義レジュメ及び参考資料などをアップする。

【参考書】

特に限定しないが、主に参考している資料は、以下の通り。

Eric E. Otenyo & Nancy S. Lind (2006). Comparative Public Administration: The Essential Readings (Research in Public Policy Analysis and Management Vol.15), New York, Elsevier.
Heady Ferrel (2001). Public Administration: A Comparative Perspective, New York, Marcel Dekker.

【成績評価の方法と基準】

質問力 (25%)、調査力 (25%)、構成力 (25%)、プレゼンテーション (25%) の 4 つによる絶対評価 (100%)

【学生の意見等からの気づき】

関心のあるテーマの発表が課題として課されるので、事前準備が必要です。

【担当教員の専門分野】

<専門領域> 行政学、比較行政
<研究テーマ> 比較自治行政、行政文化
<主要研究業績>

『現代日本の公務員人事—政治・行政改革は人事システムをどう変えたか』（執筆分担、第一法規、2019）

『公務員制度改革という時代』（執筆分担、敬文堂、2017）

『東アジアの公務員制度』（共編著、法政大学出版局、2013）

『アジアの中の日本官僚：歴史と現在』（執筆分担、勉誠出版、2010）

『韓国行政・自治入門』（単著、公人社、2006）

『自治体経営改革』（執筆分担、公人社、2006）

【Outline and objectives】

Interdisciplinary understanding of comparative administrative research and acquisition of comparative research method

PHL500P2 - 003

公共哲学基礎

西村 清貴

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

「公共性」、「市民社会」といった公共哲学における基本的概念の歴史的由来と、現代公共哲学における意義を学ぶことを目的とする。

【到達目標】

「公共性」、「市民社会」といった公共哲学における基本的概念、そして「国家」、「共同体」、「個人」、「市場」といった公共哲学において重要な諸概念の思想史的意義について理解したうえで、現代の代表的公共哲学において、これらの諸概念にどのような意義が与えられているかを理解できることを目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻公共マネジメントコースにおいては「DP2」「DP3」に関連している。公共政策学専攻政策研究コースにおいては、ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、特に「DP4」は特に関連している。サステイナビリティ学専攻においては、ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP4」に関連している。

【授業の進め方と方法】

公共政策研究科の「公共哲学基礎」と政治学研究科の「公共哲学研究Ⅰ」とを合併開講する。講義を行うほか、文献を講読する。

講義については、「国家」、「共同体」、「個人」、「市場」といった公共哲学にとって重要と思われる諸概念が生成されるにあたり大きく貢献した思想家を取り扱う。

文献購読については、トマス・ホブズ『リヴァイアサン』について各参加者に割り振られた箇所について報告してもらう。本書は、公共哲学や政治哲学の古典中の古典である。古典として今日においても読まれていることの意義をしっかりと味わってもらいたい。なお、分量の関係で全体を通読するのは難しいため、最もよく知られた箇所（13-30章）をゼミでの購読の対象とするが、可能であれば、その前後についても通読してもらいたい。

本講義は、2コマ続きを8回行う4期制の科目であるが、以下の「授業計画」では、1コマずつ記載している。初日と最終日を除いて、1コマ目が講義、2コマ目が文献講読、というように進める予定である。

なお、今後のコロナ感染状況に関する大学の方針等により変更はあり得るが、原則として、対面で授業を行う。

なお、学期末にレポートを提出してもらう。レポートについては講評を付けて返却する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

秋学期前半

回	テーマ	内容
第1回 (1日目 前半)	イントロダクション	講義の目的や内容について説明する
第2回 (1日目 後半)	政治社会の成立	古代や中世において政治がいかなる営みであったかを見る
第3回 (2日目 前半)	カントにおける啓蒙と公共性	公共哲学において頻繁に取り上げられる「理性の公共的使用」という用語法を中心にカントの思想を見る
第4回 (2日目 後半)	文献購読	テキスト 13、14 章

第5回 アダム・スミスと市場
(3日目
前半)

しばしば公共性と対立する概念として取り上げられる市場という概念についてアダム・スミスを中心として見る

第6回 文献購読
(3日目
後半)

テキスト 15、16 章

第7回 ヘーゲルと市民社会／
(4日目
前半)

近代的な意味での市民社会と国家との峻別を確立したヘーゲルの思想を見る

第8回 文献購読
(4日目
後半)

テキスト 17、18 章

第9回 ハンナ・アレントと公
(5日目
前半)

今日の公共哲学において最も著名な論者の一人であるハンナ・アレントの公共性論を『人間の条件』を中心にみる

第10回 文献購読
(5日目
後半)

テキスト 19、20、21 章

第11回 ハーバマスと公共性
(6日目
前半)

「公共性の構造転換」を中心にユルゲン・ハーバマスの議論を見る

第12回 文献購読
(6日目
後半)

テキスト 22、23、24 章

第13回 文献購読
(7日目
前半)

テキスト 25、26、27 章

第14回 文献購読
(7日目
後半)

テキスト 28、29、30 章

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

毎回、報告者であるにもかかわらず、テキストの該当箇所を事前に読んでおき、授業における発言についてあらかじめ考えておくこと。

【テキスト（教科書）】

ホブズ、水田洋訳『リヴァイアサン』（岩波文庫）。全4巻本であるが、直接教科書とするのは第1巻および第2巻（1992年改訂）

【参考書】

西村清貴『法思想史入門』（成文堂、2020年）

【成績評価の方法と基準】

報告 40 パーセント、学期末レポート 40 パーセント、その他授業への貢献度（討論等）20 パーセント。

【学生の意見等からの気づき】

該当なし

【学生が準備すべき機器他】

特になし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 法思想史・法哲学

<研究テーマ> 19世紀ドイツ法思想

<主要研究業績> 西村清貴『近代ドイツの法と国制』（成文堂、2017年）

西村清貴『法思想史入門』（成文堂、2020年）

【Outline and objectives】

This lecture aims to learn the historical origins of basic concepts in public philosophy such as "publicness" and "civil society" and their significance in contemporary public philosophy.

POL500P2 - 004

政策学基礎

渊元 初姫

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

政治学からの政策研究へのアプローチについて、基礎的な知識と分析手法の習得を目指す、入門的な位置づけの科目である。学部までの段階で政治学を専攻していない受講生も想定し、政治学の基礎概念の習得ができるように配慮する。取りあげる主要な論点は、政策と政治過程の関係、政治的正統性と政策的合理性の関係、制度研究と政策研究の関係などである。

【到達目標】

政策研究一般の中で、政治学からのアプローチの特性を把握し、対象とする政策領域に対する適切な研究設問を立てることができるようになる。その上、学術論文の作成の際に、適切な文脈の中で活用することができることを到達目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻公共マネジメントコースにおいては「DP1」「DP4」に関連している。公共政策学専攻政策研究コースにおいては、ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、特に「DP4」は特に関連している。サステイナビリティ学専攻においては、ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP4」に関連している。

【授業の進め方と方法】

教員による講義と受講者による課題報告とで構成します。講義では、政策研究の基本的知識について整理します。受講者は、個人の研究関心に沿って課題を設定して報告します。課題に対しては、授業中に参加者全員による質疑・議論を行い、講評を行うことによってフィードバックします。授業方式は原則として対面授業とします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】**春学期前半**

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	政策に関する諸学問分野の中で政治学からのアプローチの特徴とは何か。あわせて政策に関する諸学問分野の中で、政治学の隣接諸学の基本的な特徴を整理する。
第2回	公共政策学の誕生前史	公共政策学の誕生についてそのルーツを探る。
第3回	公共政策学の成立	公共政策がアメリカで成立したことの背景を整理する。
第4回	公共政策学の発展	公共政策学の発展とその挫折について検討する。
第5回	公共政策学の変容	公共政策学の変容と、多様な政策科学のアプローチについて学ぶ。
第6回	公共政策の構成と特徴	公共政策の構成要素及び公共政策がもつ特徴について整理する。
第7回	受講者による課題報告	受講者が設定したテーマ（例えば、公共政策学の歴史に関する論点など）について報告・質疑を行う。
第8回	政策のライフ・ステージと政策過程	政策過程を段階に分けて整理する概念を検討する。
第9回	受講者による課題報告	受講者が設定したテーマ（例えば、政策段階論に関する論点など）について報告・質疑を行う。
第10回	政策過程における参加者	政策過程におけるアクターの役割について考える。
第11回	受講者による課題報告	受講者が設定したテーマ（例えば、政策過程におけるアクターに関する論点など）について報告・質疑を行う。
第12回	政策をめぐる価値の対立	政策がめぐるべき諸価値について検討し、それらの対立関係について考える。
第13回	受講者による課題報告	受講者が設定したテーマ（例えば、政策をめぐる価値の対立に関する論点など）について報告・質疑を行う。
第14回	まとめ	講義のまとめを行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

特に使用しません。

【参考書】

必要に応じて授業中に紹介します。

【成績評価の方法と基準】

課題報告（30%）及び期末レポート（50%）に加え、授業中の質疑や討論における発言（20%）により評価します。

【学生の意見等からの気づき】

公共政策学を理解するために、その歴史的な成り立ちを丁寧に説明することが重要であると思いました。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞ 比較政治学、コミュニティ政策、福祉政策
 ＜研究テーマ＞ ポスト福祉国家時代の市民社会論、地域社会における社会的包摂、英国・スコットランドの地方自治・自治体内分権
 ＜主要研究業績＞

「スコットランドの地域評議会－制度の基本的構想とその機能の実際」名和田是彦編（2009）『コミュニティの自治－自治体内分権と協働の国際比較』pp.81-118、日本評論社

「スコットランドにおける権限移譲とジェンダー・クォータ」三浦まり・衛藤幹子編著（2014）『ジェンダー・クォータ－世界の女性議員はなぜ増えたのか』pp.203-26、明石書店

「地域社会における社会的連帯の再編：居場所づくりにみる三人称的連帯の可能性」金安岩男・牧瀬稔編著（2019）『都市・地域政策研究の現在』pp.131-42、地域開発研究所

【Outline and objectives】

The overall aim of this course is to introduce students to a range of political theories and concepts used in the academic study of public policy, such as rationalism, incrementalism and institutionalism. The course aims to be accessible for those who have not studied politics before, and is suitable for students looking for a multi-disciplinary experience.

POL500P2 - 005

現代政治分析研究

白鳥 浩

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

現代政治の総合的理解を目指す。

【到達目標】

同上。詳細は【授業の進め方と方法】に記載。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻公共マネジメントコースにおいては「DP2」「DP4」に関連している。ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻政策研究コースにおいては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、特に「DP1」は特に強く関連している。ディプロマポリシーのうち、サステイナビリティ学専攻においては「DP2」「DP3」に関連している。

【授業の進め方と方法】

- ①現代政治の今日的展開の姿を主に研究者を志望とする学生を対象とし、デモクラシーの視点及び脱冷戦時代の視点から分析し、現代政治分析の理念と手法を明らかにする
 - ②具体的には、国際・国内・地域社会における公的課題の解決に向けて、自治体と住民・市民組織との新たな関係の再構築
 - ③国際・国内のガバナンスの理念に立脚した政治システムと機構の改革方向
 - ④冷戦後の構造変化と政府の新たなあり方などの課題を具体的に考え、そのための仕組みや政策のあり方を設計することを目的とする
 - ⑤さらに、将来のデモクラシーについて履修した学生諸君と共に考える
 - ⑥対面により講義を行う。最後の講義で講義内容のまとめや、課題に対する講評や解説によるフィードバックを試みる。また講義計画は講義の展開により、若干の変更もありうる。
- 変更の可能性もあるが対面講義を基本とする。また、学生へのフィードバックにおいては、適宜、講義、報告のたびに行うものとする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり/Yes

【授業計画】

春学期前半

回	テーマ	内容
第1回	現代政治分析とは	同左
第2回	現代政治学の基礎	同左
第3回	政治学の基礎概念	同左
第4回	政治学の理論	同左
第5回	現代日本政治の基礎	同左
第6回	現代日本政治の変動	同左
第7回	日本政治の現在	同左
第8回	日本政治の構造	同左
第9回	構造的視座による理解	同左
第10回	国際的視座の中の日本	同左
第11回	国民国家の国際化	同左
第12回	比較の中の日本政治	同左
第13回	多様なデモクラシー	同左
第14回	日本政治の理論的解明	同左

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

講義時に適宜指示。

【参考書】

- ①白鳥浩『都市対地方の日本政治』芦書房、2009年

【成績評価の方法と基準】

試験、レポートと講義への積極性による総合評価（100％）。

【学生の意見等からの気づき】

学生との双方向のコミュニケーションを大切にしたい。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

現代政治分析（国際・国内比較）・政治理論

<研究テーマ>

1. 日本の現代政治
2. グローバリズムと国民国家の変容
3. 地方政治研究
4. 政党に関する理論
5. 現代政治のデモクラシー

<主要研究業績>白鳥浩『都市対地方の政治学』芦書房、2004年

白鳥浩『市民・選挙・国家—シュタイン・ロッカンの政治理論—』東海大学出版会、2002年

Hiroshi Shiratori, "Le mouvement référendaire au Japon après la Guerre froide. Une analyse comparative inspirée de Rokkan," *Revue française de science politique*, vol.51, Numero.4, 2001.

【Outline and objectives】

This course aims to attain student's understanding of modern politics. In order to reach that goal, it is needed to study modern politics in a systematical way. It starts out from clarification of the definitions of important notions which appears on literatures of political science.

公共政策とジャーナリズム

白鳥 浩、読売新聞社講師

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

現代社会における政策とジャーナリズムの総合的理解。

【到達目標】

本講座の目的は、「新聞が行っている報道、論説、提言などの実際を現役記者等が紹介し、新聞メディアの機能、影響力、課題について解説・分析することで、大学院生の視野を広げ、新聞など活字文化への関心を高める」こととする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻公共マネジメントコースにおいては「DP3」「DP4」に関連している。ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻政策研究コースにおいては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、特に「DP3」は特に強く関連している。ディプロマポリシーのうち、サステイナビリティ学専攻においては「DP2」「DP3」に関連している。

【授業の進め方と方法】

本講義は読売新聞特別講座である。第一線のジャーナリストをお招きし、新聞社の調査、分析と報道の実際と、論説提言のあり方を学ぶ。講義は、毎回異なるジャーナリストのオムニバス講義によって行う。以下は予想される講義のトピックであるが、変更もありうる。また講義計画は対面を中心とするが、講義の展開により、若干の変更もありうる。

変更の可能性もあるが対面講義を基本とする。また、学生へのフィードバックにおいては、適宜、講義のたびに行うものとする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

春学期後半

回	テーマ	内容
(1)	新聞とジャーナリズム	同左
(2)	政治とジャーナリズム	同左
(3)	安全保障政策とジャーナリズム	同左
(4)	外交政策とジャーナリズム	同左
(5)	社会保障政策とジャーナリズム	同左
(6)	医療政策とジャーナリズム	同左
(7)	経済政策とジャーナリズム	同左

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

講義当日の読売新聞朝刊を必ず持参して、講義に臨む事。

【参考書】

講義時に適時指示。

【成績評価の方法と基準】

出席、毎回の講義で課される課題への取り組み、毎回の感想文、さらにレポートなどを総合的に考慮して評価（100%）。

【学生の意見等からの気づき】

学生との双方向のコミュニケーションを大切にしたい。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

現代政治分析（国際・国内比較）・政治理論

<研究テーマ>

1. 日本の現代政治
2. グローバリズムと国民国家の変容
3. 地方政治研究
4. 政党に関する理論
5. 現代政治のデモクラシー

<主要研究業績>白鳥浩『都市対地方の政治学』若書房、2004年

白鳥浩『市民・選挙・国家—シュタイン・ロッカンの政治理論—』東海大学出版会、2002年

Hiroshi Shiratori, "Le mouvement référendaire au Japon après la Guerre froide. Une analyse comparative inspirée de Rokkan," *Revue française de science politique*, vol.51, Numero.4, 2001.

【Outline and objectives】

This course offers advanced understanding of the public policy on each policy fields, international politics, domestic politics, public administration, local government, International economy and so on. Lecturers are all distinguished journalists from the Yomiuri Shinbun, Yomiuri News Paper Company.

SOC500P2 - 007

公共政策の社会理論

池田 寛二

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

主として社会学に立脚した公共政策の基礎理論の修得を目的とする。

【到達目標】

公共政策の理論を受講生が各自の研究テーマに活用できるようになることが到達目標である。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻公共マネジメントコースにおいては「DP1」「DP2」に関連している。ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻政策研究コースにおいては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、特に「DP1」は特に強く関連している。ディプロマポリシーのうち、サステイナビリティ学専攻においては「DP2」「DP4」に関連している。

【授業の進め方と方法】

主に社会学の視点から公共政策の実態と問題点を経験科学的に解明するとともに、それを政策的に解決するための理論的な視座について講義する。少人数の場合は、討論も取り入れる。各回の講義後にリアクションペーパーを書かせ、次回の冒頭で口頭でフィードバックする。原則として、授業は対面で実施する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

なし/No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

春学期後半

回	テーマ	内容
第1回	序論：公共政策の理論的課題	経験科学と規範理論
第2回	社会理論と公共政策の関係	「中範囲の理論」（マートン）の重要性を中心に検討する。
第3回	格差と資本主義（1）	社会学における資本主義と格差の理論を検討する。
第4回	格差と資本主義（2）	資本主義と公共政策の関係を理論的に考察する。
第5回	格差と資本主義（3）	『大転換』（ボランニー）と『21世紀の資本』（ピケティ）の間の社会変動を考察する。
第6回	持続可能な社会の公共政策（1）	リスク社会論（ベック）からの考察。
第7回	持続可能な社会の公共政策（2）	エコロジーの近代化論からの考察。
第8回	持続可能な社会の公共政策（3）	自然資本論と社会関係資本論の統合可能性をめぐる考察。
第9回	市場経済社会と公共政策（1）	経済社会学の理論的視座の検討。
第10回	市場経済社会と公共政策（2）	グローバル化とローカルな社会の持続可能性をめぐる理論的検討。
第11回	市場経済社会と公共政策（3）	サブシディアリティの原理と「ポリアーキー」（ダール）の理論的意義の考察。
第12回	政策事例分析への社会理論の応用可能性（1）	気候変動政策とエネルギー政策（再エネ、原発…）を事例とする考察。
第13回	政策事例分析への社会理論の応用可能性（2）	地域再生政策（都市政策、農村政策、農林漁業政策…）を事例とする考察。
第14回	総括	中心的論点の整理と補足。公共政策研究への社会理論の活用法の確認。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

ウルリヒ・ベック、1998『危険社会—新しい近代への道』（法政大学出版局）、カール・ボランニー、2009『大転換—市場社会の形成と崩壊』（東洋経済新報社）、トマ・ピケティ、2014『21世紀の資本』（みすず書房）、ロバート・ダール、2014『ポリアーキー』（岩波文庫）、『ハーバート・スペンサー コレクション』所収の「政府の適正領域」（2017、ちくま学芸文庫）など

【参考書】

池田寛二、2013「3.11 以後の気候変動政策と原発政策のゆくえ」『公共政策志林』第1号、など逐次指示する

【成績評価の方法と基準】

出席（20%）、とりあげた文献についての「中間レポート」（40%）、および、期末レポート（40%）

【学生の意見等からの気づき】

この講義は、受講生各自の研究テーマに応用可能な社会理論の理解を目指している。したがって、受講生各自の問題関心に引き寄せて講義内容を受けとめ、積極的に質問して欲しい。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>環境社会学、社会学理論、東南アジア地域研究
<研究テーマ>環境・エネルギー政策、地域政策
<主要研究業績>池田ほか編著、2012『環境をめぐる公共圏のダイナミズム』（法政大学出版局）等。

【Outline and objectives】

The purpose of this lecture is to make students learn basic theories of public policy based on sociology.

ECN500P2 - 008

財政学基礎

調整中

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本研究では、財政学全般の理論的・制度的側面に重点を置きながら、政策分析をするために不可欠な「財政学」の基礎を復習し、理論的發展と制度的改革の方向性を考究していく。また、本講義では財政学の特定分野に特化しないで、財政学主要項目を全般的に対象とするので、現実問題について幅広く受講生自ら考える力を養うことができる。

【到達目標】

財政の抱える問題点や課題への対応策について自らの見解を熟成して討論できる水準に達することを目標としている。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻公共マネジメントコースにおいては「DP1」「DP4」に関連している。ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻政策研究コースにおいては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、特に「DP1」は特に強く関連している。ディプロマポリシーのうち、サステイナビリティ学専攻においては「DP2」「DP4」に関連している。

【授業の進め方と方法】

1. 財政の理論と実際そして財政制度の基本的な知識を復習し、財政制度および政策の経済的意義と問題点を明らかにする。併せて、実際に起こりつつある財政問題を題材に輪読をし、報告・討論等を行う。
2. 新型コロナウイルス感染症対応が可能な場合は対面講義とする。また、講義冒頭で前時間の出席票相当提出物に受講者が記載した内容等に担当者が回答する。また個別に質問・照会したいことがある場合は講義中に担当者がそれを提起したとき、あるいは講義終了後に時間を設けるので、対面・遠隔ともに受講者はその場で解決するようにする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

なし/No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

春学期後半

回	テーマ	内容
第1回	I. 緒論（財政と財政学）	1. 財政学研究の意義（教科書：はじめに、第1章）
第2回	I. 緒論（財政と財政学）	2. 財政と財政民主主義（教科書：第1～4章）
第3回	II. 予算論（教科書：第5～7章）	1. 予算原則 2. 予算・決算過程の制度的枠組み
第4回	II. 予算論	3. 財政計画と予算（教科書：第8章）
第5回	III. 公共経済学の基礎理論（教科書：第9章）	1. 市場の失敗 2. 公共財の理論（続・市場の失敗） 3. 政府の失敗
第6回	VI. 経費論（教科書：第10、11、14章）	1. 財政制度と国民経済計算 2. 費用便益分析
第7回	VI. 経費論（社会保障制度と教育財政）	1. 社会保障の財政問題（教科書：第12章） 2. 教育財政の問題（教科書：第13章）
第8回	VIII. 「財政学」と学位論文	各自の学位論文の財政学的側面の報告(1)
第9回	IV. 租税論	1. 租税の理論（教科書：第15章）
第10回	IV. 租税論（教科書：第16～19章）	2. 国税（所得税・法人税・相続税・消費税等） 3. 地方税（住民税・固定資産税・事業税等）
第11回	V. 公債論（教科書：第20～22章）	1. 公債原則と負担論 2. 公債管理政策
第12回	V. 公債論（教科書：第22章）	3. 財政赤字と日本の公債問題
第13回	VII. 財政政策論（財政政策のマクロ経済学）（教科書：第23、24章）	1. フィスカル・ポリシー 2. IS-LM分析
第14回	VIII. 「財政学」と学位論文	各自の学位論文の財政学的側面の報告(2)

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

準備学習にあたり2時間以上かけて、各回のシラバスに掲載されている教科書の該当箇所を読み、学部あるいは高等学校校までに学んだ内容を確認し、不明語句ないし不明内容を明らかにしておく必要がある。また外国文献にも目を通し、最新事情を把握しておく。各回の講義終了後には予習時の不明点を解明したことを確認すべく、教科書、配付資料、外国参考文献等を頼りに2時間以上かけて復習すること。

【テキスト（教科書）】

佐藤進・関口浩著『財政学入門 [新版]』同文館、令和元年。

【参考書】

1. Hovey S. ROSEN & Ted GAYER, *Public Finance (10th ed)*, McGraw-Hill/Irwin, 2013.
2. Jonathan GRUBER, *Public Finance and Public Policy (5th ed)*, Worth Publisher, 2016.
3. その他の参考文献はその都度提示するが、社会学部「財政学Ⅰ」および「財政学Ⅱ」シラバス掲載の参考文献を取りあえずあげておく。

【成績評価の方法と基準】

報告内容（70%）を中心に、討論への参加（15%）、出席票のコメント（15%）、講義最終回指定提出物（必須）等を加味して評価する。

【学生の意見等からの気づき】

本講義を通じて財政分析の力をつけるためには、まず各種統計の所在を突き止めて受講生自ら最新の統計を駆使した報告をする必要がある。

【学生が準備すべき機器他】

遠隔講義・演習を受信したり、学習支援システムの掲示を閲覧・印刷等できる装置を、大学の貸与を含めて、受講者各自で準備されたい。

【その他の重要事項】

1. 学部時代に必ずしも経済・政策系の学部で「財政学」を学んでいない学生の受講も多いので、財政学の基礎に基盤を置きながら、修士論文執筆に不可欠な、やや高度な内容にも踏み込むことができることを期待したい。
2. 春学期後半（4学期制の第2学期）の時間帯の講義となるため、新年度当初の意気込みが薄れる時期に開講となる。新年度当初の新鮮な気持ちを忘れないで、講義に挑んでほしい。
3. 各講義の順番をシラバスとは入れ替えることがある。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

財政学、地方財政論、租税論、教育財政論、財政学を基盤とした教育・福祉政策

【研究テーマ】

固定資産税をめぐる問題、教育財源としての財産税（固定資産税）、租税制度全般、地方税財政、日米教育財政

【研究業績（近年）】

「沖縄県財政の歳入構造」『公共政策志林』第4号、法政大学大学院公共政策研究科、平成28年。
「沖縄県財政と県税収入」『公共政策志林』第5号、法政大学大学院公共政策研究科、平成29年。
『財政学入門 [新版]』（佐藤進と共著）同文館、令和元年。
「新型コロナウイルス感染症蔓延下の財政投融资」『生活経済政策』289号、生活経済政策研究所、令和3年。

【Outline and objectives】

We review the basics of "public finance" to do a policy analysis, and study the theory and the practice of it.

ECN500P2 - 009

経済学基礎

芦谷 典子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この授業では、ミクロ・マクロの分野をまたぐ経済学の基礎を学びます。経済学の原理と方法から入り、ミクロ経済学基礎、マクロ経済学の基礎の順に、必須のトピックを網羅していきます。加えて、学んだ基礎理論をどのように応用し、論文執筆に繋げるかを念頭に置いた形でのディスカッションを取り入れていく予定です。講義の進行は、受講者主体のアクティブ・ラーニングを基本とします。

【到達目標】

①経済学の入門的教科書を1冊読み終える、②読みこなし知識をディスカッションが可能なレベルに引き上げる、③さらに論文執筆に生かす

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻公共マネジメントコースにおいては「DP1」「DP4」に関連している。ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻政策研究コースにおいては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、特に「DP1」は特に強く関連している。ディプロマポリシーのうち、サステイナビリティ学専攻においては「DP2」「DP4」に関連している。

【授業の進め方と方法】

担当者による講義と受講者によるプレゼン、ディスカッションを取り入れたアクティブ・ラーニング方式。復習・自習による知識定着を目指すため、e-ラーニングを取り入れる。初回講義時にスケジュールを確認のうえ、受講者毎の担当箇所を決定。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】**春学期前半**

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	授業の進め方/自己紹介/研究テーマ・関心領域の紹介
第2回	経済学への誘い	経済学の原理と実践：経済学の方法と問い；最適化：最善をつくす；需要、供給と均衡
第3回	ミクロ経済学1	消費者とインセンティブ
第4回	ミクロ経済学2	生産者とインセンティブ
第5回	ミクロ経済学3	完全競争と見えざる手
第6回	ミクロ経済学4	貿易
第7回	マクロ経済学1	国の富：マクロ経済全体を定義して測定する
第8回	マクロ経済学2	経済成長
第9回	マクロ経済学3	雇用と失業
第10回	マクロ経済学4	クレジット市場
第11回	マクロ経済学5	金融システム
第12回	マクロ経済学6	景気変動
第13回	経済理論の研究テーマへの応用①	（テーマ1・2）
第14回	経済理論の研究テーマへの応用②	（テーマ3・4）

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とします。

また、プレゼン担当回は、3時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

『アセモグル/レイブソン/リスト 入門経済学』 東洋経済新報社、2020年

※購入が必要。教科書と共にe-ラーニングを活用します。

【参考書】

適宜紹介します。

【成績評価の方法と基準】

①平常点：80%

②プレゼンテーション（口頭試験）：20%

【学生の意見等からの気づき】

受講生の多くが経済学の初学者であり、また社会人であることを考慮のうえ、教科書を選定しました。効率的な予習復習の実行と知識の定着を目指すため、e-ラーニングを取り入れます。教科書を1冊読みこなすことは決して容易なことではありませんが、これまでの受講生の意見や活動状況からみて、より高い達成感および満足感につながるものと確信しています。

【学生が準備すべき機器他】

特にありません。

【その他の重要事項】

非対面時はzoom活用の予定です。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>経済理論および経済統計

<研究テーマ>不動産と国際経済（金融、貿易、開発、環境、補償）

<主要研究業績>"The Modified Phillips Curve as a Possible Answer to Japanese Deflation," *Advances in Economics and Business*, 5 (10), 2017; "Determinants of Potential Seller/Lessee Benefits in Sale-Leaseback Transactions," *International Real Estate Review*, 18 (1), 2015; "Perfect" Real Estate Liquidity and Adjustment Paths to Long-run Equilibrium," *Journal of International Economic Studies*, 27 (5), 2013; "The Robustness of Cartels Facilitated by Anti-dumping Regulations," *Australian Economic Papers*, 43 (3), 2004 ほか。

【Outline and objectives】

Economics can be divided into "micro" and "macro". The "micro" part views individual actors of the economy, such as consumers, households and firms and the market economics of larger scale producers. We examine demand and supply and other market mechanisms. The "macro" part takes an overall look at the economy starting with measuring economic performance, followed by learning the model of circular flow. This makes it possible to grasp how households, firms and governments interact with each other, and also understand the role of the financial sector in countries as well as in the world economy. Some topics might include rather unfamiliar notion, but all will enrich your ability to think as an economist and to analyze those decision-making processes of all individuals, consumers, firms, and governments.

環境哲学・倫理学

吉永 明弘

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

環境哲学・環境倫理学の基本的文献の内容を紹介する。あわせて参加者に自由発表を課すことで、主体的に環境問題に取り組んでもらう。

【到達目標】

環境哲学・環境倫理学の基本的文献の内容を把握し、それをもとに現実の環境問題に対する自分なりの構えをもつことができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻公共マネジメントコースにおいては「DP1」「DP3」に関連している。ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻政策研究コースにおいては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、特に「DP2」は特に強く関連している。ディプロマポリシーのうち、サステイナビリティ学専攻においては「DP1」「DP2」に関連している。

【授業の進め方と方法】

対面で行う。環境哲学・倫理学の文献の解説と、参加者による発表を中心に進める。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

秋学期後半

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	この授業の進め方を説明する
第2回	現代倫理学の射程	現代倫理学の基本文献を紹介する
第3回	欧米の環境倫理	欧米の環境倫理の基本文献を紹介する
第4回	グローバルな環境倫理	グローバルな環境倫理に関する文献を紹介する
第5回	ローカルな環境倫理	ローカルな環境倫理に関する文献を紹介する
第6回	科学技術の倫理	科学技術の倫理を論じた文献を紹介する
第7回	公害と環境正義	公害と環境正義に関する文献を紹介する
第8回	自然保護から生物多様性保全へ	自然保護・生物多様性保全に関する文献を紹介する
第9回	意見交換会（1）	授業内容に関する意見交換を行う
第10回	環境問題と社会科学	社会科学の視点から環境問題を論じた文献を紹介する
第11回	地域環境保全と市民の力	地域環境や市民運動に関する文献を紹介する
第12回	場所論と風土論	場所論と風土論の基本文献を紹介する
第13回	景観保全と都市環境	景観保全と都市環境に関する文献を紹介する
第14回	意見交換会（2）	授業内容に関する意見交換を行う

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

教科書をよく読んでおくこと。本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

吉永明弘『ブックガイド 環境倫理』勁草書房、2017年

【参考書】

吉永明弘『都市の環境倫理』勁草書房、2014年

吉永明弘・福永真弓編『未来の環境倫理学』勁草書房、2018年

吉永明弘・寺本剛編『環境倫理学』昭和堂、2020年

【成績評価の方法と基準】

意見交換会での発言（20%）と期末レポート（80%）。

【学生の意見等からの気づき】

ディスカッションの時間を増やすことにしました。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>環境倫理学

<研究テーマ>都市の環境倫理、災後と人新世代の環境倫理

<主要研究業績>

『都市の環境倫理』

『ブックガイド 環境倫理』

『未来の環境倫理学』

いずれも勁草書房より刊行

【Outline and objectives】

Environmental Reading and Presentation

LAW500P2 - 012

環境法基礎

永野 秀雄、横内 恵、岡松 暁子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この授業では、これまで環境法を学んだことのない大学院生のために、環境法の全体像と概略を示すことを目的としている。このため、環境問題を、民事法、行政法、国際法の3分野から概略的な説明を行う。また、受講生が法律の素人であることを前提に、授業を行う。

【到達目標】

環境法の知識のない学生が、その全体像を把握することが、到達目標である。環境分野で仕事をする上で不可欠な知識を身につけて欲しい。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻公共マネジメントコースにおいては「DP1」「DP4」に関連している。ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻政策研究コースにおいては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、特に「DP1」は特に強く関連している。ディプロマポリシーのうち、サステイナビリティ学専攻においては「DP1」「DP2」に関連している。

【授業の進め方と方法】

まず、環境法がどのような法律分野から構成されており、環境問題に対して、どのような機能を果たしているのかについて概観する。また、基本的な文獻リサーチ方法についても説明する。次に、環境私法について、私人間の環境紛争で、民法に規定された不法行為という考え方がどのように機能するのかを学ぶ。そして、最後に、実際に起こった公害事案をもとにしながら、判例法の妥当性を検証する。

次に、環境行政法について、日本における環境行政法の展開を学んだ後、個別規制法と環境アセスメント、自然保護法及び環境行政訴訟を概観する。

最後に、国際的な環境問題を検討するにあたり必要となる国際法の基本理論を学ぶ。国際社会の基本単位である国家の役割、国際法の特徴を概観した後、受講者の関心がある国際環境問題を取り上げながら、国際社会における紛争解決の仕組み、国家責任等について適宜判例を紹介しつつ検討し、国際環境問題への国際法からのアプローチの仕方を習得する。

また、授業は、対面授業を予定しているが、コロナウイルスの感染が拡大した場合には、リアルタイムのライブ型配信授業とする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

春学期前半

回	テーマ	内容
1	環境法の概観（1）（永野秀雄）	環境問題と環境法
2	環境法の概観（2）（永野秀雄）	①環境法とは何か、②環境法の構成
3	環境私法（1）（永野秀雄）	①環境私法とは何か、②不法行為の基礎理論
4	環境私法（2）（永野秀雄）	損害賠償請求と差止請求
5	環境私法（3）（永野秀雄）	①環境訴訟における因果関係の立証、②複合汚染と共同不法行為
6	環境私法（4）（永野秀雄）	公害事案に基づく議論
7	環境行政法（1）（横内恵）	日本における環境行政法の展開
8	環境行政法（2）（横内恵）	個別規制法と環境アセスメント
9	環境行政法（3）（横内恵）	自然保護法
10	環境行政法（4）（横内恵）	環境行政訴訟
11	国際環境法（1）（岡松暁子）	国際法の基本原則と国際環境問題
12	国際環境法（2）（岡松暁子）	国際環境問題における国家責任法とその限界
13	国際環境法（3）（岡松暁子）	持続可能な開発と国際環境法の発展
14	国際環境法（4）（岡松暁子）	判例研究

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

教科書は使用しない。プリントを適宜配布する。

【参考書】

北村喜宣『環境法（第5版）』（有斐閣ストゥディア、2020年）。

黒川哲志・奥田進一編『環境法へのフロンティア』（成文堂、平成27年）。
 繁田泰宏・佐古田彰・岡松暁子・小林友彦他編著『ケースブック国際環境法』（東信堂、2020年）。

【成績評価の方法と基準】

配分：授業内での発表、議論への参加・貢献度30%、期末レポート70%。
 評価基準：3人の講師が、授業中に、それぞれ2つのテーマを提示する。この合計6つのテーマの中からレポートを1つ作成し、担当講師に提出する。選択したテーマにつき、判例や法律論文等を最低5つ以上参照して、レポートを書くこと。論点、構成、内容の理解度から評価する。

【学生の意見等からの気づき】

環境法の知識のない学生にも、そのレベルに幅があるので、学生の理解を確認しながら進めていきたい。

【学生が準備すべき機器他】

パソコンとパワーポイント、プロジェクター、ビデオ

【担当教員の専門分野等】

永野 秀雄

<専門領域>日米比較法（特に、環境法、労働法、先端技術法）

<研究テーマ>「環境監査と法」、「サイバーセキュリティと法」

<主要研究業績>（環境関連のもの）

①単著『電磁波訴訟の判例と理論—米国の現状と日本の展望』（三和書籍、2008年）。

②「気候変動と企業統治」鈴木幸毅・所伸之編著『環境経営学の扉—社会科学からのアプローチ』（文真堂、2008年）171-184頁。

③「米国における高レベル放射性廃棄物の処分と問題点」人間環境論集6巻2号（2006年）11-21頁。

横内 恵

<専門領域>環境法、公法（憲法・行政法）

<研究テーマ>環境リスクの法的制御、廃棄物処理法制

<主要研究業績>

①「順応型リスク制御と比例性：ドイツ遺伝子技術法の閉鎖系規律手続を題材として」大塚直編『環境法研究』7号（信山社、2017年）13-45頁。

②「廃棄物処理法に基づく生活環境影響調査の対象地域に関する一考察—高城町事件と東海村事件を事例として」大阪経大論集67巻3号（2016年）113-134頁。

③「科学的不確実性を伴う環境リスクに対する法的制御の可能性と限界」OUCFブックレット8号「中国の食・健康・環境の現状から導く東アジアの未来」（2016年）62-74頁。

岡松 暁子

<専門領域>国際法（国際原子力法、国際海洋法、国際環境法）

<研究テーマ>条約の履行確保、核不拡散、原子力の平和利用

<主要研究業績>

1. 繁田泰宏・佐古田彰・岡松暁子・小林友彦他編著『ケースブック国際環境法』（東信堂、2020年）。

2. 「国境を越える核関連物質・機器の国際管理」中野勝郎編著『境界線の法と政治』（法政大学出版局、2016年）105-131頁。

3. 「国際原子力機関の保障措置」山本武彦・庄司真理子編『軍縮・軍備管理』（現代国際関係学叢書第2巻）（志学社、2017年）127-142頁。

【Outline and objectives】

This course provides a basic introduction of environmental law for graduate students. Students will gain a brief explanation of environmental problems from three legal fields of civil law, administrative law and international law. This course presumes that students are not legal majors.

地球環境学基礎

藤倉 良

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

環境問題とは人間活動が自然生態系に及ぼす物理的、化学的、生物的作用とその反作用である。「何がおきているのか」を理解し、「どうすればよいのか」を考えるためには、科学知識が欠かせない。本講義では気候変動を中心しつつ、オゾン層保護、酸性雨など環境問題や、エネルギーや淡水などの資源問題について、発生メカニズムと対処に関する科学の基礎を修得し、地球規模や国境を超える環境問題に対処する基礎力を養うことを目指す。

【到達目標】

以下を説明できるだけの科学的基礎力を養う。
 人口増加と減少パターンの発生理由。
 オゾンホールが南極上空にできる理由。
 温室効果のメカニズムと気候変動の科学の不確実性。
 日本では酸性雨の生態影響が顕在化していない理由。
 生物多様性を保全しなければならない理由。
 資源のもつ意味。
 淡水、土壌、金属などの資源のもつ役割。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻公共マネジメントコースにおいては「DP1」「DP4」に関連している。ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻政策研究コースにおいては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、特に「DP2」は特に強く関連している。ディプロマポリシーのうち、サステナビリティ学専攻においては「DP1」「DP2」に関連している。

【授業の進め方と方法】

中学卒業レベルの理科の知識を習得していることを前提にして、パワーポイントを用いて講義を進める。パワーポイントはハードコピーを毎回配布し、授業支援システムにもアップする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

なし/No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

春学期後半

回	テーマ	内容
第1回	序論	地球環境問題をとりにくく諸状況
第2回	人口	人口が増加する要因、都市の人口問題
第3回	オゾン層	オゾン層が破壊されるメカニズム、オゾン層破壊物質、ウィーン条約、モントリオール議定書、国内対策
第4回	気候変動①	地球温暖化のメカニズム、将来予測
第5回	気候変動②	I P C C、国際社会、国際交渉、パリ協定
第6回	気候変動③	緩和策と適応策
第7回	越境する大気汚染	酸性雨、光化学オキシダント、PM2.5
第8回	生物多様性	生物多様性保全の意義、生態系サービス、遺伝資源
第9回	資源とは何か	「資源」の持つ意味、「資源の呪い」、資源に関する楽観論と悲観論
第10回	水資源	世界の水資源、国際流域の課題
第11回	土壌資源、窒素とリン	土壌の成り立ち、機能、窒素とリンの循環、リン資源
第12回	エネルギー資源①	化石燃料

第13回 エネルギー資源②

原子力、新エネルギー

第14回 金属資源

ベースメタル、レアメタル、リサイクル

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

藤倉良・藤倉まなみ 『文科系のための環境科学入門』 有斐閣

【参考書】

講義中に指示する。

【成績評価の方法と基準】

最終回に行う試験(100%)またはレポート(100%)で評価する。

【学生の意見等からの気づき】

中学校卒業程度の理科の知識があれば理解できるように心がけるが、高校卒業程度の知識が必要な場合もある。

【学生が準備すべき機器他】

とくにない。

【担当教員の専門分野等】

環境システム科学、国際環境協力

【担当教員の関連する業績】

- Ryo Fujikura, Mikiyasu Nakayama, Shanna N. McClain, and Scott Drinkall (2019) Addressing the Health Problems After Immigration Faced by the Marshallese in Springdale, Arkansas: Lessons Learned from the City of Vienna, Journal of Disaster Research, Vol.14, No.9, pp.1309-1316, doi: 10.20965/jdr.2019.p1309
- Ryo Fujikura, Shams Asadi, Laura Kraus and Mikiyasu Nakayama (2019) Toward Successful Integration of Climate Immigrants: Lessons Learned from the Good Practice of the City of Vienna, International Journal of Environmental Science and Development, Vol.10(6): 171-177, doi: 10.18178/ijesd.2019.10.6.1167
- Naoya Tsukamoto and Ryo Fujikura (2018) Evaluation of Japan's Policy for CO2 Reduction at the First Commitment Period of the Kyoto Protocol, International Journal of Environmental Science and Development, Vol.9, No.12 pp.368-374, doi: 10.18178/ijesd.2018.9.12.1131
- Michael Lerner, Ryo Fujikura, Mikiyasu Nakayama & Manami Fujikura (2016) The Influence of Limits to Growth and Global 2000 on U.S. Environmental Governance, International Journal of Social Science Studies, Vol. 4, No. 8, 52-63, doi:10.11114/ijsss.v4i8.
- Tetsuo Kida and Ryo Fujikura (2015) Pollution Risks Accompanied with Economic Integration of ASEAN Countries and the Fragmentation of Production Processes, International Journal of Social Science Studies, Vol.3, No.5, DOI: 10.11114/ijsss.v3i5.915
- Tetsuo Kida and Ryo Fujikura (2014) A chance in Myanmar induced by the minimum wage policy in Thailand: A case study of Myawaddy industrial area, International Journal of Social Science Studies, Vol.3, No.1, pp.38-46
- Ryo Fujikura and Tomoyo Toyota (Editor) (2012) Climate Change Mitigation and International Development Cooperation, (p.264) Earthscan, London
- Ryo Fujikura and Masato Kawanishi (Editor) (2010) Climate Change Adaptation and International Development - Making Development Cooperation More Effective, Earthscan, London

【Outline and objectives】

Environmental problems are physical, chemical and biological consequences and reactions on natural ecosystems caused by human activities. In order to understand "what is happening" and "what should be done", scientific knowledge is indispensable. In this lecture, students will learn the basics of science regarding mechanisms and countermeasures of environmental problems such as climate change, ozone layer protection, acid rain and resource problems such as energy and freshwater.

POL500P2 - 014

国際政治学基礎

森 聡

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本講義の目的は、国際政治学に関する基礎知識を修得するとともに、専門知識を体系的に学習するための準備を行うことにある。

複雑さを増してやまない国際社会の諸問題を、広い視野から理解したり説明したりするのに必要な国際政治学や国際関係論と呼ばれる学問分野の基本概念や理解・認識の枠組み（パラダイムないしリサーチ・プログラム）を解説する。現在進行中の国際政治経済、国際安全保障の話題を随時取り上げる。

【到達目標】

次の三つの到達目標を目指して、＜国際政治学ないし国際関係論の主要パラダイム＞について学ぶ。

第一に、国際政治学における基本的な用語・概念や主要なテーマについての知識を身につける。

第二に、国際政治学ないし国際関係論を捉えるための分析枠組みにまつわる諸々のポイントを正確に理解する。

第三に、現実の国際社会の諸事象を、基本的な概念や分析枠組みを使って理解し、諸資料を活用しながら実証的に説明できる初歩的な能力を修得する。

また、2 年次以降に、国際政治の専門的なテーマに関する理論を扱う学術論文を正確に理解するための基礎理解力を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻公共マネジメントコースにおいては「DP1」「DP3」に関連している。ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻政策研究コースにおいては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、特に「DP1」は特に強く関連している。サステナビリティ学専攻においては、ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」に関連している。

【授業の進め方と方法】

春学期は、Zoom によるライブ形式での開講とする。

授業計画を変更する場合には、学習支援システムでその都度告知する。学習支援システムからの授業に関する通知メールを確認されたい。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
1	国際政治学のあゆみ	主要パラダイムの概観。学問としての国際政治学の発展の歴史。
2	国際政治学における分析の枠組み	理論とは何か。分析レベルの問題。リサーチ・プログラムとは何か。
3	競争の国際政治—理論編	リアリズムの中核概念。古典的リアリズムとは何か。構造的リアリズムとは何か。攻撃的・防衛的リアリズム。
4	競争の国際政治—事例編	米中対立、米露対立の原因と展開。
5	協調の国際政治—理論編	リベラリズムの中核概念。観念的・商業的・共和的リベラリズムとは何か。ネオリベラル制度論とは何か。ネオ・ネオ論争。リベラリズムへの批判。
6	協調の国際政治—事例編	国際貿易・金融システムの仕組み。気候変動をめぐる国際政治。

7	観念の国際政治—理論編	コンストラクティビズムの中核概念。適切性の論理と結果の論理とは何か。規範と文化に関する諸理論。コンストラクティビズムへの批判。
8	観念の国際政治—事例編	人権と制裁・介入の国際政治。
9	中間レビュー	前半の諸理論の振り返り
10	対外政策の理論—「点」からみる国際政治	対外政策を動かす国内要因を理解する。指導者、政党、利益集団、世論など。
11	対外政策の事例	第三次世界大戦を回避した米ソの危機外交
12	国際秩序の理論—「面」からみる国際政治	国家が共通の規則や制度に拘束されていると考えている時に生まれる国際関係を理解する。
13	国際秩序の事例	冷戦終結後の大國間秩序の変容
14	総括	学期中の主要課題に関する解説・講評を行う。学期末レポート課題の説明など。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は 2 時間程度を目安とします。

【テキスト（教科書）】

テキストは特に指定しない。学習支援システムで講義用資料を配信する。

【参考書】

必要に応じて授業中に示す。以下を購入する義務はないが、要すれば適宜参照されたい。

- ・田中明彦・中西寛編『新・国際政治経済の基礎知識（新版）』、有斐閣ブックス、2004 年、2400 円。
- ・小笠原高雪・栗栖薫子・広瀬佳一・宮坂直史・森川幸一編『国際関係・安全保障用語辞典』、ミネルヴァ書房、2013 年、3000 円。
- ・世界地図。

【成績評価の方法と基準】

成績は、レポート課題により評価する予定。

【学生の意見等からの気づき】

- ・毎回、授業の冒頭で、前回後半の講義内容を振り返って、記憶を喚起する。
- ・複雑な概念を扱う際には、二回の講義を利用して説明を行う。

【学生が準備すべき機器他】

講義用アウトライン（見出し入りレジюме）を学習支援システムにアップロードするので、履修者は各自でそれをダウンロードして、授業に持参するとよい。アウトラインに、授業で使用するパワーポイントや講義の内容を書き込んでいくとよい。

【国際政治学、現代アメリカの対外政策】

<専門領域> 国際政治学、戦後アメリカの外交と安全保障

<研究テーマ> 先端技術と国際政治、パワーシフトと国際秩序、現代アメリカのインド太平洋戦略など

<主要研究業績>

- ・川島真・森聡編著『アフターコロナ時代の米中関係と世界秩序』、東京大学出版会、2020 年。
- ・"US Technological Competition with China: The Military, Industrial and Digital Network Dimensions," *Asia Pacific Review*, Vol.26, No.1 (2019), pp.77-120.
- ・"U.S. Defense Innovation and Artificial Intelligence," *Asia Pacific Review*, Vol.25, No.2 (Fall 2018), pp.16-44.
- ・「統合作戦構想と太平洋軍—マルチ・ドメイン・バトル構想の開発と導入」、土屋大洋編著、『アメリカ太平洋軍の研究—インド・太平洋の安全保障』、千倉書房、2018 年 7 月。
- ・「リベラル国際主義への挑戦—アメリカの二つの国際秩序観の起源と融合」、『レヴァイアサン』第 58 号（2016 年 4 月）、23-48 頁。
- ・「アメリカのアジア戦略と中国」、北岡伸一・久保文明監修『希望の日米同盟—アジア太平洋の海洋安全保障』、中央公論社、2016 年、39-91 頁。
- ・『ヴェトナム戦争と同盟外交—英仏の外交とアメリカの選択 1964-1968 年』、東京大学出版会、2009 年（日本アメリカ学会清水博賞受賞）。
- など

【Outline and objectives】

This is an introductory course on international politics. The objective of this course is to gain knowledge of basic concepts of international relations in order to lay the foundation for systematically learning advanced theories of international relations. Students would be exposed to the main paradigms or research programs relating to international politics.

ARSL500P2 - 015

国際協力論

武貞 稔彦

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本講義のテーマは貧困削減のための国際協力、開発援助のありようである。SDGs（持続可能な開発目標）に示されているように、戦後国際社会の大きな課題の一つ-貧困-に立ち向かうために行われている営みである開発援助や国際協力は、どのような動機や意図をもって行われ、どのような効果をこれまでもたらしてきたかを検討し、将来の国際協力のあり方、さらには国際社会のあり方についても議論する。

【到達目標】

授業の到達目標は、(1) 現代の国際社会の中で行なわれる様々な国際協力や援助、特に、貧困、開発、環境をめぐる国際協力や援助の歴史と制度について基礎的な知識を獲得すること、(2) 国際協力や援助をめぐる現代の主要なトピックに関する基礎的な知識を獲得すること、および、(3) 誰が何のためにどのような国際協力や援助を行なっているのか、について批判的に見る目を養うことである。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻公共マネジメントコースにおいては「DP3」に関連している。ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻政策研究コースにおいては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、特に「DP2」は特に強く関連している。サステイナビリティ学専攻においては、ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP4」に関連している。

【授業の進め方と方法】

各回の講義は、①教員による講義、②基本的な文献に関する学生の報告、③ディスカッションで構成する。事前に指定された文献を読んで各回の授業に参加することが必須であり、予習に十分な時間を割くことが必要となる。ただし、講義の方法や内容については、受講者の数や関心などに応じて変更する可能性がある。

報告対象とする文献については、2021 年度秋学期開始前に学習支援システム（Hoppii）を通じて通知/配布予定。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

秋学期前半

回	テーマ	内容
第 1 回	オリエンテーション 国際協力はなぜ行なわれるのか	国際協力という取り組みが必要とされる理由や背景-途上国の貧困と先進国との格差-について概観する
第 2 回	国際協力をめぐる歴史と制度 (1) 経済成長と国際協力	第二次世界大戦後の国際社会秩序形成と、その後 1970 年代までの国際協力の取り組みを、国際社会の政治/歴史の文脈に位置づけて概観する。
第 3 回	国際協力をめぐる歴史と制度 (2) 経済成長路線から人間開発路線へ	1980 年代、90 年代の国際協力の変遷をたどり、基本的な考え方/取り組みの重点の変化を概観する。
第 4 回	国際協力をめぐる歴史と制度 (3) 環境と持続可能な開発	2000 年代以降の国際協力の変遷を国際社会における課題設定や変動の中に位置づける
第 5 回	日本による国際協力	日本による国際協力の歴史と制度について概観する。そのうえで、その成果および評価を検討する。
第 6 回	「開発」とは何か: 開発と文化、社会科学	現在すすめられている開発の到達目標（行き着く先）について文化や社会科学の方法論の観点も含め批判的に検討する。
第 7 回	アフリカ	国際協力における近年の「大きな課題（問題）」であるアフリカについて、何が「問題」となっているのか、その由来や対応を含めて概観する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

特に指定しません。

【参考書】

斎藤文彦『国際開発論』（日本評論社）、下村恭民他『国際協力』（有斐閣）、外務省『日本の経済協力』（ODA 白書）を基本書とします。他は適宜紹介します。

【成績評価の方法と基準】

成績評価は、期末レポート (50%)、各回の担当報告の内容 (30%)、授業やディスカッションへの貢献 (20%) を総合的に判断して行う。

【学生の意見等からの気づき】

過去には議論の時間の充実（拡大）を求める声があったことから、授業運営には留意することとする。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 開発の自然環境・社会環境への影響、開発援助、開発と倫理
<研究テーマ> 「望ましい（望ましくない）「開発」とは何か」「ダム建設に伴う立ち退きと補償、生活再建」

<主要研究業績>

"Japanese Experience of Involuntary Resettlement: Long-Term Consequences of Resettlement for the Construction of the Ikawa Dam," *International Journal of Water Resources Development*, Routledge, Vol. 25, Issue 3, September 2009, pp. 419- 430,

『開発介入と補償：ダム立ち退きをめぐる開発と正義論』勁草書房 2012 年、
"Participation and diluted stakes in river management in Japan: the challenge of alternative constructions of resource governance" in Sato, J. ed., *Governance of Natural Resources: Uncovering the social purpose of materials in nature*. United Nations University Press, pp.141-161, July 2013

【実務経験のある教員による授業】

担当者は、途上国への経済協力に携わっていた経験がある。本講義においては、途上国駐在も含めた経済協力実務で得られた知見が活用されている。

【Outline and objectives】

This course is an advanced course for International Development and Development Assistance. Development is one of the global issues in the current world as shown in the Sustainable Development Goals (SDGs). International Development Assistance has been perceived not only as a strong tool for development of many societies and/or economies but also as a way to strengthen world peace. The class consists of lectures and readings focusing on the history and the objectives of international development efforts and relationship between rich countries and poor countries putting a special emphasis on Japan's role in the international society.

Completing the course, students are expected;

- 1) to acquire basic knowledge on history and institutions in international development efforts,
- 2) to acquire basic knowledge on current/important issues in international development, and
- 3) to critically analyze who engages in international development efforts and why.

SES500P2 - 016

サステナビリティ研究入門A

藤倉 良、杉戸 信彦

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

サステナビリティ学の基礎を知る。

【到達目標】

これからサステナビリティ学を研究していく上での出発点として、サステナビリティ学専攻を構成するさまざまな研究領域において、その基礎概念や方法論について概観を得るとともに、それらの領域においてサステナビリティ概念はどのように扱われているのかについて理解する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻公共マネジメントコースにおいては「DP2」「DP3」に関連している。ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻政策研究コースにおいては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、特に「DP2」は特に強く関連している。ディプロマポリシーのうち、サステナビリティ学専攻においては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連している。

【授業の進め方と方法】

サステナビリティ学専攻の教員が各 1 回を担当するオムニバス形式でおこなう。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション：サステナビリティ研究の目指すもの。（藤倉）	修士課程研究の進め方。学術論文とは何か。
第 2 回	地域のサステナビリティ問題とは？（小島）	最近の時事問題から、地域のサステナビリティを読み解く。
第 3 回	日常を見つめる暮らしの経済学（湯澤）	衣食住を中心とした身近な事象から現在と過去の社会のありようを考察し、サステナビリティとは何かを考える。
第 4 回	地球惑星科学から考えるサステナビリティ（松本）	地球の歴史における地球環境の不可逆な進化を考え、サステナビリティについて考察する。
第 5 回	環境倫理学とサステナビリティ（吉永）	環境倫理学の基本主張の根幹にサステナビリティの考え方があることを説明する。
第 6 回	環境法とサステナビリティ（永野）	環境法は、サステナビリティを維持するための執行力をもった規範
第 7 回	途上国支援の場におけるサステナビリティ（武貞）	途上国支援や国際協力の場における、SDGs を始めとするサステナビリティにかかわる課題を概観する。
第 8 回	生物多様性と持続可能な資源管理（高田）	持続可能な自然資源利用について、生物多様性との関わりからの観点から現状の課題と取り組みなどを紹介する。
第 9 回	21 世紀を健康に生きていくために（宮川）	健康を守っていくことはまさにヒトがサステナブルであることに他ならない。日本は世界一の長寿を誇っているが、その背景に潜む様々な問題について紹介する。
第 10 回	国際法からのアプローチ（岡松）	国際法はサステナブルな国際社会の構築に貢献できるのか。
第 11 回	企業・地域と環境・サステナビリティ経営（金藤）	日本企業で現在実践されている環境経営やサステナビリティ経営の基礎構造（戦略、組織、管理の流れ）を、実践例を利用しながら習得することを目的とする。
第 12 回	歴史学と「サステナビリティ」（辻）	歴史（学）を学ぶことはサステナビリティ研究にどのように役立つのか、参加者の関心のもとついでアクティブラーニングをおこなう。
第 13 回	サステナブル経営の国際的潮流（長谷川）	COP21（気候変動枠組条約締結国会議）で合意されたパリ協定が提起した「脱炭素革命」と企業経営のこれからの考え。
第 14 回	ハザードとレジリエンス／総括（杉戸）	自然災害リスクを考慮したサステナビリティとは何かを考える。／授業内容についてのディスカッション、レポート課題の発表

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

とくになし。

【参考書】

その都度教員が指示する。

【成績評価の方法と基準】

授業最終回に提示するテーマからひとつを選択し、それにもとづくレポートを作成する（100 %）。

【学生の意見等からの気づき】

とくになし。

【Outline and objectives】

"Introduction to Sustainability Studies (A)" is an introductory course to learn interdisciplinary approaches to study sustainability and related issues.

SES500P2 - 017

サステナビリティ研究入門B

藤倉 良、杉戸 信彦

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

サステナビリティ学の最前線を知る。

【到達目標】

サステナビリティ学専攻を構成するさまざまな研究領域において、その最新の研究状況や問題点について概観を得るとともに、専攻所属の教員の研究内容について理解を深め、各自の今後の研究の方向性を考える。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻公共マネジメントコースにおいては「DP2」「DP3」に関連している。ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻政策研究コースにおいては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、特に「DP2」は特に強く関連している。ディプロマポリシーのうち、サステナビリティ学専攻においては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連している。

【授業の進め方と方法】

サステナビリティ学専攻の教員が各1回を担当するオムニバス形式でおこなう。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

なし/No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	リスク認知論：リスクの定義（藤倉）	一般人と専門家のリスク認知の違い。マスメディアとリスク報道。
第2回	サステナビリティに向きあう自治体（小島）	最近の事例から、サステナビリティ問題に関する自治体政策の現在を俯瞰する。
第3回	暮らしの比較史研究（湯澤）	時代、地域による違いに着目した暮らしの比較研究から、サステナビリティをめぐる課題と可能性について議論する。
第4回	太陽活動と気候変動（松本）	太陽活動と気候変動に関する科学の最前線に関するレビューを行う。
第5回	都市とサステナビリティ（吉永）	都市に住むことが地球環境のサステナビリティに与える影響について解説する。
第6回	米国の公開企業と気候変動リスク（永野）	米国連邦証券取引委員会「気候変動に関する情報開示指針」の検討
第7回	貧困／格差とサステナビリティ（武貞）	先進国と途上国の関係から、一国の社会や国際社会におけるサステナビリティを考える。
第8回	持続可能な人と自然との共生（高田）	サステナブルな社会構築のための国際法益となる価値の創設について。
第9回	現代社会の健康課題（宮川）	人間がよく生きるために必要な条件にはいろいろあるが、その中で一つテーマを選び、現状を紹介、問題提起を行い、全員でディスカッションする。
第10回	近年の国際環境問題の特質（岡松）	サステナブルな社会構築のための国際法益となる価値の創設について。
第11回	環境・サステナビリティ経営と会計（金藤）	「サステナビリティ研究入門A」で学習した内容に基づいて、地域の環境経営やサステナビリティ経営の取組事例の特徴を明らかにするとともに、グループワークを通して新たな地域ビジネスを検討し、提案することを目的とする。
第12回	ドイツの参加政策と市民社（辻）	1970年代から2010年代までのドイツの市民的参加の発展をたどり、日本との比較について考える。
第13回	企業価値とサステナビリティ（長谷川）	社会的責任投資、国連責任投資原則（ESG投資）、スチュワードシップ・コードを中心に企業価値のあり方を巡る政策動向について紹介する。
第14回	災害事象の発生予測と土地条件の評価／総括（杉戸）	災害の自然地理学的研究の現状と課題を考える。／授業内容についてのディスカッション、レポート課題の発表

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

とくになし。

【参考書】

その都度教員が指示する。

【成績評価の方法と基準】

授業最終回に提示するテーマからひとつを選択し、それにもとづいて作成したレポートで評価する（100%）。

【学生の意見等からの気づき】

とくになし。

【Outline and objectives】

"Introduction to Sustainability Studies (B)" is an introductory course to learn the latest studies and research in sustainability studies.

SDGs への招待

武貞 稔彦

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

2030年までの国際目標である「持続可能な開発目標（SDGs: Sustainable Development Goals）」（以下 SDGs）について、多様な分野で実現に向け取り組んでいる専門家の講義を受ける。それらを通じ、SDGs についての理解を深めると同時に、各人が自身の関心分野を切り口に、将来の持続可能な社会の構想実現に寄与するための足がかりを得る。SDGs Plus 履修証明プログラムの入り口として設置されているものである。

【到達目標】

グローバルな射程を持ち、多様かつ一部は実現に困難が予想される目標も含んだ SDGs については、主に国際機関、政府や NGO / NPO が主体的に活動するものと思われがちである。しかし SDGs では、民間企業や市民がその担い手として重要であると認識されている。持続可能な社会について学ぶ受講生として、① SDGs に関する基礎的な知識を持ち、人に説明することができるようになること、② SDGs にあげられた各種課題を「自分ごと」として捉えることができる当事者としての意識を涵養すること、が本講義の目標である。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻公共マネジメントコースにおいては「DP1」「DP3」に関連している。ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻政策研究コースにおいては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、特に「DP1」「DP3」は特に強く関連している。ディプロマポリシーのうち、サステイナビリティ学専攻においては「DP1」「DP2」に関連している。

【授業の進め方と方法】

本セミナーでは、SDGs に関わって実際の現場で活躍されている講師を招き、具体的な活動や努力、体験などの話を聴講する。各講師の知見やさまざまな経験に触れることによって、受講者の SDGs や現代社会における課題に対する意識や理解が深まることが期待される。

受講者は各回にコメントペーパー（講師からの質問への回答や、講師や講義内容への質問を記すもの）の記入と提出が求められる。

同時に可能な範囲で参加者によるアクティブラーニングの要素を取り入れ、受講者の思い、考え、意見などを発信する機会も設ける予定である。

最終回には各受講者にショートプレゼンテーションを実施してもらう予定である。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期前半

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	講義の目的、進め方等の説明。講義の全体像の解説。
第2回	セミナー	外部講師による講義
第3回	セミナー	外部講師による講義
第4回	セミナー	外部講師による講義
第5回	セミナー	外部講師による講義
第6回	セミナー	外部講師による講義
第7回	プレゼンテーションと総括	受講者によるショートプレゼンテーションと総括

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

テキストは使用しない。必要に応じ外部講師によるプリント（資料）が配布される。

【参考書】

外部講師や教員が必要に応じて紹介する。

【成績評価の方法と基準】

平常点（参加姿勢、コメントペーパーの内容、授業中の発言など）40%、プレゼンテーション30%、レポート30%の総合評価による。

【学生の意見等からの気づき】

オンライン実施の経験も踏まえ、参加者のコミュニケーションのバリエーションや方法の工夫に努める。

【その他の重要事項】

講演後に質問時間が設けられるので、積極的に質問を行うこと。

本セミナーの詳しいテーマおよび外部講師については、掲示板および研究科ウェブサイトで発表する。

【実務経験のある教員による授業】

担当者（コーディネーター）は、途上国への経済協力に携わっていた経験がある。本講義においては、途上国駐在も含めた経済協力実務で得られた知見が活用されている部分がある。

【Outline and objectives】

This course is to introduce and give basic understandings of the Sustainable Development Goals, which is internationally agreed goals and strategies toward sustainable societies. Each class will consist of lecture, discussion among participants and guest speaker's lectures.

LAW500P2 - 051

政策法務論

神崎 一郎

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

【授業概要】

第一次分権改革以降、自治体の法務担当者を中心に、「政策法務」ということが唱えられている。しかしながら、国の中央官庁の法務担当者の中で「政策法務」という言葉は一般的ではない。この差に着目し、自治体政策法務について解き明かしつつ、自治体法務が直面する問題点等を検討する。

【授業目的】

現在の自治体法務が直面している問題点を検討するとともに、条例論を学ぶ。

【到達目標】

- ・自治体政策法務のイメージをつかむ。
- ・条例案立案のポイントをつかむ。
- ・条例に関する基礎的な知識を得、簡単な制度設計・条文作成を行うことができるようになる。
- ・なお、立法学や政策法務論の現状として、政治的分析や組織論的なものにとどまるものが多く見られる。本講義では、法律による行政の原則にのっとり、すべての立法面、行政面における事象には条文の根拠があるという発想に立ち、逐一、条文の根拠に立ち戻って考察していきたいと考えている。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻公共マネジメントコースにおいては「DP2」「DP3」に関連している。公共政策学専攻政策研究コースにおいては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、特に「DP3」は特に強く関連している。サステイナビリティ学専攻においては、ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP4」に関連している。

【授業の進め方と方法】

- ①本講義においては、自治体法務を全般的に取り扱うが、中心は条例論となる。
 - ②授業は、講義を中心とするが、立法演習の回については、参加者をいくつかのグループに分け、グループ内で議論しつつ、与えられた条件において、与えられた政策目的を達成するための行政規制システムを設計し、発表・議論を行う。
 - ③本講義の最後の2回を立法演習（条例演習）に当てる。立法演習が、講義内容の総まとめとなる。立法演習において、提示した事例を解決するための制度設計をしてもらい、各学生が報告する。報告に対する講評が学生へのフィードバックとなる。
- ※講義は、原則として対面で実施する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期後半

回	テーマ	内容
1-2	政策法務論総論	1. はじめに～「政策法務」とは？ 2. 自治体法務の歴史～戦前から戦後の連続性、第一次分権改革前の自治体法務の実情、自治体の立法技術の課題など
3-4	憲法第八章（地方自治）をめぐる日本政府とGHQの攻防	1. GHQ 民政局内における条文の変遷とその意味するところ～ホームルール制とチャーター 2. 日本側草案の起草～民政局案との対比 3. チャーター制定権の変貌
5-6	基本法・基本条例について～特に、自治基本条例を中心に	1. 基本法・基本条例の法規的性格の稀薄性 2. 法体系上の位置づけ 3. 自治基本条例の意義 4. 民主的契機としての住民投票 5. 議会基本条例の意義
7-8	条例論	1. 条例の定義 2. 条例の類型 3. 法律と条例の関係～徳島市公安条例事件最高裁判法の基準とそのあてはめ
9-10	立法事実と比例原則	1. 分権改革前の判例 2. 比例原則 3. 分権改革後の判例 4. 違憲審査基準論と合理性の基準 5. 合理性を基礎づけるものとしての立法事実
11-12	政策目的の設定と目的達成手段の選択	政策法務にとって重要な「政策目的の設定」と「目的達成手段の選択」について検討する。
13-14	条例案立法演習	提示した事例について制度設計・条文作成まで行う（演習形式）。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

事前配付資料又は文献を読むこと。

【テキスト（教科書）】

講義録を配付する予定である。

【参考書】

大森政輔・鎌田薫編『立法学講義（補遺）』商事法務（2011年）
神崎一郎『「政策法務」試論～自治体と国のパララックス（1）（2）』（自治研究 2009年2月・3月・第一法規）
「地方議会の立法機関性—議会による立法事実の構築・審査の視点から」北村喜宣ほか編集『鈴木庸夫先生古稀記念・自治体政策法務の理論と課題別実践』第一法規（2017年）

【成績評価の方法と基準】

平常点 30 % ・ 立法演習 40 % ・ 報告 30 %。

立法演習は、演習に参加した上で、自分の成果物の発表・他の学生との議論を評価する。自らの設計した法制度の合理性をいかに説得力をもって発表できるか、自らの成果物を踏まえて他の学生の成果物に対する批判や評価を合理的に行うことができるかが評価のポイントである（「授業の到達目標」の2点目）。本講義の成績評価に当たり、立法演習への参加は必須である。

なお、随時、指定した課題について事前に検討し、講義において報告する機会を設ける（「授業の到達目標」の3点目）。

【学生の意見等からの気づき】

該当なし

【その他の重要事項】

コンパクトなものでよいので六法を持参することが望ましい。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>立法学

<研究テーマ>立法過程論・自治体政策法務論・条例論

<主要研究業績>

- ①「法律と条例の関係における『比例原則』『合理性の基準』『立法事実』（自治研究 2009年8月・第一法規）
- ②「『政策法務』試論～自治体と国のパララックス（1）（2）」（自治研究 2009年2月・3月・第一法規）
- ③「地方議会の立法機関性—議会による立法事実の構築・審査の視点から」北村喜宣ほか編集『鈴木庸夫先生古稀記念・自治体政策法務の理論と課題別実践』第一法規（2017年）
- ④「基本法と基本条例」自治実務セミナー 2018年3月号

【Outline and objectives】

As the transfer of central government authorities to local governments progresses, local governments will wield more administrative power. To decentralize administrative powers, it is vital that municipal governments merge to improve their legal capabilities. In this class, we will study how to develop legal ability of local authorities.

立法学研究

神崎 一郎

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

【授業概要】

我が国の法学は、もっぱら法解釈を中心に発展してきた。昭和 21 年に、既に末弘巖太郎博士は、法令立案の作業がもっぱら関係官僚の職業的な熟練によって行われているのみであって、立法者としての優れた能力とはいかなるものであり、その能力をどのようにして養成すればよいかといった問題についての科学的な考究が全くなされていないことを指摘している。以降、様々な研究成果が蓄積されてきているが、本講義は、それらを踏まえ、「立法学」を体系化する作業を試みるものである。「立法」を政治評論的に見るにとどまるのではなく、法的視点も含めて検討していきたい。

【授業目的】

我が国の国家作用を基礎付ける法律について、企画・制定から運用にいたるまでについて、立体的な知識を得るとともに思考の訓練をする。

【到達目標】

・我が国の立法について、企画立案段階から制定施行段階までの正確な知識を得る。
 ・法令の構造や政策目的達成手段に関する知識を得、簡単な制度設計・条文化作成を行うことができるようになる。
 ・なお、立法学や政策法務論の現状として、政治的分析や組織論的なものとどまるものが多く見られる。本講義では、法律による行政の原則にのっとり、すべての立法面、行政面における事象には条文の根拠があるという発想に立ち、逐一、条文の根拠に立ち戻って考察していきたいと考えている。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻公共マネジメントコースにおいては「DP2」「DP4」に関連している。ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻政策研究コースにおいては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、特に「DP3」は特に強く関連している。サステイナビリティ学専攻においては、ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP4」に関連している。

【授業の進め方と方法】

①本講義においては、立法過程の諸段階の分析にとどまらず、立法作業の際に依拠すべき「立法事実」、規制立法を設計する上での行政手法の選択、実際の立法作業の現場における思考などにも立ち入りたい。
 ②授業は、講義を中心とするが、必要に応じて、参加者の調査と発表、ディスカッションを組み合わせる。
 ③本講義の最大の特徴は、最後の 2 回を行う立法演習である。講義において会得した発想法、ツールを用いて、与えられた課題に対し、合理的な法制度設計を行い、自分が設計した法制度について報告し、討議を行う。これに対する講評が学生へのフィードバックの位置付けになる。
 ※本講義は、原則として対面を実施する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期前半

回	テーマ	内容
1-2	立法学総論～立法学とは	1. 序論～立法学とは 2. 現代立法の状況と特質～我が国の法体系、法令の数、戦後日本の立法動向など
3-4	立法過程論①～国会提出前の企画立案段階	1. 内閣による法案提出プロセス 2. 政党内の意思決定システム 3. 議員立法のプロセスの特徴 4. 民主党政権下における立法過程の変容～ウエストミンスター・モデルとの比較
5-6	立法過程論②～国会審議段階	1. 国会審議過程の現状と課題 2. 内閣提出法案・議員提出法案それぞれの役割と課題 3. ねじれ国会下における立法傾向 4. ねじれ国会を経験して、ねじれ解消後に何が起きたか
7-10	法律とは何か～法律の一般性と抽象性	1. 「法律」とは何か 2. 現実の法律の傾向～個別特例法の増加など 3. 「法律事項」とは何か
11-12	政策目的の設定と目的達成手段の選択	立法を行う上で重要となる政策目的の設定と目的達成手段の選択について検討する。
13-14	立法演習	提示した事例について制度設計を行う（演習形式）。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

事前配付資料又は文献を読むこと。

【テキスト（教科書）】

講義録を配付する予定である。

【参考書】

大森政輔・鎌田薫編『立法学講義（補遺）』商事法務（2011 年）

【成績評価の方法と基準】

平常点 30 %・立法演習 40 %・報告 30 %。

立法演習は、演習に参加した上で、自分の成果物の発表・他の学生との議論を評価する。自らの設計した法制度の合理性をいかに説得力をもって発表できるか、自らの成果物を踏まえて他の学生の成果物に対する批判や評価を合理的に行うことができるかが評価のポイントである（「授業の到達目標」の 2 点目）。本講義の成績評価に当たり、立法演習への参加は必須である。
 なお、随時、指定した課題について事前に検討し、講義において報告する機会を設ける（「授業の到達目標」の 3 点目）。

【学生の意見等からの気づき】

該当なし

【その他の重要事項】

コンパクトなものでよいので六法を持参することが望ましい。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>立法学

<研究テーマ>立法過程論・自治体政策法務論・条例論

<主要研究業績>

- ①「法律と条例の関係における『比例原則』『合理性の基準』『立法事実』（自治研究 2009 年 8 月・第一法規）
- ②「『政策法務』試論～自治体と国のパララックス (1)(2)」（自治研究 2009 年 2 月・3 月・第一法規）
- ③「地方議会の立法機関性―議会による立法事実の構築・審査の視点から」北村喜宣ほか編集『鈴木庸夫先生古稀記念・自治体政策法務の理論と課題別実践』第一法規（2017 年）
- ④「基本法と基本条例」自治実務セミナー 2018 年 3 月号

【Outline and objectives】

In this class, we will study lawmaking process. In last 2 lectures, sutudents will draft articles as the climax of the class.

POL500P2 - 053

政策評価論

南島 和久

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

1990年代以降、日本の公的部門において評価がブームとなった。自治体では行政評価と呼ばれる手法が定着し、国では中央省庁等改革に伴い政策評価制度が導入された。しかし、そもそも政策評価が何であるのか、どのようにすればこれを活用できるのかといった点については、十分な議論が交わされてこなかった。この科目では、これら公的部門の評価について議論する。その際、歴史を踏まえつつ理論的な検討を行うとともに海外の取組との比較も視野に入れる。

【到達目標】

本科目では、政策評価論を構成する基礎概念を順次紹介する。これら基礎概念の理解を本科目の基礎的な到達目標とする。ポイントは以下の3点である。

- ①政策評価の類型に関する理解
政策分析、業績測定、プログラム評価の概念の理解
- ②政策評価の歴史に関する理解
PPBS、GAOのプログラム評価、GPRA/GPRAMAの史的展開
日本の政策評価の史的展開に関する理解
- ③政策評価の理論に関する理解
ロジックモデル、評価階層、アカウントビリティの理解
政策分析とプログラム評価、業績測定とプログラム評価の論争
政策評価にかかる実用主義と科学主義に関する論争など

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻公共マネジメントコースにおいては「DP1」「DP4」に関連している。ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻政策研究コースにおいては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、特に「DP3」は特に強く関連している。サステイナビリティ学専攻においては、ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP4」に関連している。

【授業の進め方と方法】

授業は、1回2時間続きで実施する。スケジュールは授業計画の内容をイメージしているが、これは計画段階のものであり、各回のテーマは受講生の関心を考慮して変更することがある。テーマに沿った形での討論を交える。学生へのフィードバック方法については講義内もしくはメールにて行う。原則として講義は対面で行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

春学期後半

回	テーマ	内容
第1回	導入	この科目について、成績評価の方法についてなど
第2回	政策の概念	政策の合理性、体系性、循環性、ロジックモデル
第3回	評価の概念	政策分析、プログラム評価、業績測定の違い
第4回	政策分析	費用便益分析、公共事業評価、規制評価
第5回	業績測定と自治体①	事務事業評価、総合計画の評価
第6回	業績測定と自治体②	計画と評価、マニフェストと評価
第7回	業績測定と独立行政法人①	NPMと評価、独法の歴史、3つの独法形態と評価
第8回	業績測定と独立行政法人②	地方独立行政法人、公立大学の評価、公立病院の評価
第9回	国の府省の評価①	中央省庁等改革と評価、総務省の行政評価局調査、政策評価法
第10回	国の府省の評価②	府省の自己評価、3つの評価方式、行政事業レビューと政策評価、EBPM
第11回	アメリカの評価①	PPBS、プログラム評価、GPRA
第12回	アメリカの評価②	GPRAMA、データドリブン、エビデンスベースド、APGs、CAPGs、評価の日米比較
第13回	評価理論①	評価の類型論、評価階層の理論（システマティックアプローチ）
第14回	評価理論②	評価をめぐる学説、科学主義と実用主義の対立

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

南島和久『政策評価の行政学：制度運用の理論と分析』見洋書房、2020年。
南島和久編『JAXAの研究開発と評価』見洋書房、2020年。

山谷清志監修、大島巖、源由理子編著『プログラム評価ハンドブック』見洋書房、2020年。

【参考書】

今村・武藤・佐藤・沼田・南島『ホーンブック基礎行政学（第3版）』北樹出版、2015年。
石橋・佐野・土山・南島『公共政策学』ミネルヴァ書房、2018年。
行政管理研究センター編『詳解・政策評価ガイドブック』ぎょうせい、2008年。
佐藤竺監修、今川晃・馬場健編著『市民のための地方自治入門（新訂版）』実務教育出版、2009年。
益田直子『アメリカ行政活動検査院』木鐸社、2010年。
松田憲忠・岡田浩編著『よくわかる政治過程』ミネルヴァ書房、2018年。
武藤博己編著『公共サービス改革の本質』、2014年。
広田照幸『組織としての大学』岩波書店、2013年。
山谷清志『政策評価の理論とその展開』見洋書房、1997年。
山谷清志『政策評価の実践とその課題』萌書房、2006年。
山谷清志編著『公共部門の評価と管理』見洋書房、2010年。
山谷清志『政策評価』ミネルヴァ書房、2012年。
山谷清志編『政策と行政』見洋書房、2021年（5月刊行予定）。

【成績評価の方法と基準】

平常点及び報告（40%）、期末レポート（60%）

【学生の意見等からの気づき】

とくになし。

【学生が準備すべき機器他】

とくになし。

【その他の重要事項】

初回の講義にて案内します。万が一初回講義に欠席する場合には連絡してください。メールアドレスは、najima@jura.niigata-u.ac.jp（「@」と「.」は全角となっています。）

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>行政学、公共政策学
<研究テーマ>政策評価の制度運用
<主要研究業績>『政策評価の行政学』（見洋書房）、『それでも大学が必要』と言われるために』（創成社）、『ホーンブック基礎行政学（第3版）』（北樹出版）、『公共サービス改革の本質』（敬文堂）、『東アジアの公務員制度』（法大出版）、『組織としての大学』（岩波書店）、『公共部門の評価と管理』（見洋書房）、『市民のための地方自治入門』（実務教育出版）など

【Outline and objectives】

Since 1990's, policy evaluation system become a boom in the Japanese public sector. In the municipality, performance measurement has become established. In central government, a policy evaluation system was introduced to the ministries and agencies. However, sufficient debate has not been exchanged. We will conduct a theoretical study while considering the history, and also consider comparison with overseas initiatives.

社会調査法 1

小磯 明

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

1. 社会調査の全体像、社会調査の歴史的経緯について概説する。
2. 社会調査の様々な手法について検討する。
3. 質的調査と量的調査双方の基本事項を理解する。
4. 調査倫理など調査に伴う問題を学ぶ。

【到達目標】

1. 社会調査の基本事項、歴史を簡潔に説明できる。
2. 量的調査と質的調査の相違を識別できる。
3. 社会調査のプロセスを具体的に述べることができ、実際に調査を始めることができる。
4. 倫理違反といった概念について具体的に説明できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻公共マネジメントコースにおいては「DP2」「DP4」に関連している。ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻政策研究コースにおいては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、特に「DP1」は特に強く関連している。ディプロマポリシーのうち、サステイナビリティ学専攻においては「DP2」「DP4」に関連している。

【授業の進め方と方法】

社会調査の基本事項を理解し、全体像を把握するために、次のように授業を進めていく。

1. 社会調査の歴史的経緯を学びつつ、様々な社会調査の手法を説明する。
2. 質・量双方の調査研究の特性について、調査の企画・実施、成果の発表に至るまでの流れを具体的に解説する。
3. 調査倫理の問題を踏まえつつ、社会調査の意義についての理解を促す。授業は原則対面で実施する講義形式によって進められるが、必要に応じて、グループ討議などの形式をとることがある。授業への学生の積極的参加を促すためアクションペーパーを提出してもらおう。授業計画は概ね以下を予定しているが、授業の展開によっては若干変更する可能性がある。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期後半

回	テーマ	内容
第1回	社会調査の基本的な考え方1	・社会調査の諸定義と目的 ・社会調査の諸類型
第2回	社会調査の基本的な考え方2	・量的調査と質的調査 ・成果の公表
第3回	社会調査の歴史1	・社会調査の源流：人口調査、貧困調査 ・民族誌の系譜：文化人類学、シカゴ学派社会学
第4回	社会調査の歴史2	・日本の社会調査：国勢調査、都市及び農村調査、SSM調査等
第5回	社会調査の設計1	・社会調査の全過程：着想から成果の公表まで
第6回	社会調査の設計2	・問いと対象の設定 ・調査・分析手法の選択 ・手法による手順の違い：研究における「仮説」の位置
第7回	量的調査の方法と実例1	量的調査のステップ：仮説の操作化、調査票の作成、サンプリング、実施、データの入力と分析
第8回	量的調査の方法と実例2	・実例に基づく量的調査実施過程の追体験
第9回	質的調査の方法と実例1	・質的調査のステップ：関連資料の収集、参与観察、聞き取り調査の実施、データの整理と分析
第10回	質的調査の方法と実例2	・実例に基づく質的調査実施過程の追体験
第11回	理論と調査との関係1	・理論命題と理論枠組 ・先行理論の位置づけ
第12回	理論と調査との関係2	・認識の深まりと問いの洗練
第13回	調査倫理	・調査者と被調査者との関係 ・学問としての倫理、調査における倫理
第14回	調査の社会的意義	・社会調査と価値判断の問題

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

講義の内容が多岐にわたるため、特に指定しない。

【参考書】

都度、講義の引用・参考文献を紹介する。

【成績評価の方法と基準】

平常点（出席・討議）50%、課題レポートを50%。

【学生の意見等からの気づき】

受講生の研究テーマを踏まえた講義にしたい。

【学生が準備すべき機器他】

特になし。

【その他の重要事項】

特になし。

【専門領域】

<専門領域>社会調査法、福祉社会学、社会政策学

【研究テーマ】

コミュニティにおける医療と福祉形成の現代的解明、地域の産業政策の形成

【主要研究業績】

単著『地域と高齢者の医療福祉』2009年、御茶の水書房。
論文「小規模・高齢化集落の高齢者と地域福祉－長野県泰阜村の高齢者生活調査から」『福祉社会学研究』第8号、2011年。
論文「地域福祉は住民のもの－協同組合・非営利組織の視点から」『日本の地域福祉』第31巻、2018年。

【Outline and objectives】

Consider various methods of social survey

SOC500P2 - 055

社会調査法2**中筋 直哉**

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

社会学の社会調査法のうち、統計学の応用による、大人数の社会意識や集合行動の構造の解明を目的とするサーベイ型の調査法について概説する。まずこの調査法の成立の歴史的経緯と基本的な論点を踏まえた上で、調査計画から結果の統計解析までのプロセスを概観するとともに、その時々を生じる実践的課題について詳論する。さらに、社会意識調査を政策形成に活用する方途についても考察したい。

【到達目標】

サーベイ型の社会調査に関する基本的知識、特に調査の計画から報告書の作成までの一連の流れを理解し、知識として習得すること

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻公共マネジメントコースにおいては「DP2」「DP4」に関連している。ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻政策研究コースにおいては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、特に「DP1」は特に強く関連している。ディプロマポリシーのうち、サステイナビリティ学専攻においては「DP2」「DP4」に関連している。

【授業の進め方と方法】

教室で対面で実施（予定）。実習的な作業をとまなう、各回2時限の連続講義。課題やレポートについては事後に全員に対してフィードバックする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】**春学期後半**

回	テーマ	内容
1	概論 1	社会科学的認識と計量的社会調査の関係について
2	概論 2	近代日本における計量的社会調査の展開と課題
3	調査の設計 1	調査票調査の企画・設計（質問文案をレポートとして提出）
4	調査の設計 2	質問文と選択肢の構成（調査票作成作業を実習形式で行う）
5	サンプリング 1	サンプリングの統計学的基礎
6	サンプリング 2	サンプリングの種類と実施上の問題
7	調査の実際 1	計量的社会調査における調査者と被調査者の関係
8	調査の実際 2	調査票の配布・回収をめぐる諸問題
9	データの集計と整理 1	コーディングとデータクリーニングの方法
10	データの集計と整理 2	コーディングから度数分布表作成までの過程（仮想的な調査データを用いて実習形式で行う）
11	調査データの読み方	基本統計量とデータ分布の概説
12	展開的講義	政策形成と社会意識調査
13	まとめ 1	社会調査を政策形成に活用する方途について（講義）
14	まとめ 2	社会調査を政策形成に活用する方途について（討論）別途レポート提出および筆記試験を実施

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業中に指示した課題を指示された期日までに自宅で用意し、提出すること。授業終了後参考書を手・熟読して、重要箇所を復習すること。本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

特に指定しない

【参考書】

授業中に適宜指示する

【成績評価の方法と基準】

授業への積極的参加 30 %、課題提出 15 % ×2 回、筆記試験 40 %。

【学生の意見等からの気づき】

最近の現場での社会調査の応用についての批評的講義を増やす

【学生が準備すべき機器他】

各自自宅でパソコンを使用した作業が必要。学習支援システムへのアクセスが必須。

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉地域社会学
〈研究テーマ〉地域社会の構造分析

〈主要研究業績〉『よくわかる都市社会学』（2013, ミネルヴァ書房）、『群衆の居場所』（2005, 新曜社）

【Outline and objectives】

This lecture aims to study basic methods of social research for sampling data by questionnaire.

社会調査法3

見田 朱子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

社会科学における統計データの利用法。
「統計データ」を読み、書（描）き、利用するための基本概念や方法を理解する。具体的には、統計資料の整理の仕方、基本的な統計量の読み方、図表の読み方、作成方法について。また、変数間の関係を記述する方法やその読み取り方についても解説するので身に付けてほしい。

さらに「非統計（質的）データ」を読むときの基本事項の学習を踏まえ、社会調査におけるデータ活用方法についての理解を促す。なお、Excel および無料の統計ソフト R 等を用いた実習を通じてデータ分析の実践的理解を深める。

【到達目標】

統計データの形式を整えたり、変数を操作化することができる。
統計データの情報を要約することができる。
統計ソフトを用いて変数間の相関や連関を調べることができる。
統計ソフトを用いて推定や仮説検定を行うことができる。
統計データをグラフや表によって可視化することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻公共マネジメントコースにおいては「DP2」「DP4」に関連している。ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻政策研究コースにおいては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、特に「DP1」は特に強く関連している。ディプロマポリシーのうち、サステイナビリティ学専攻においては「DP2」「DP4」に関連している。

【授業の進め方と方法】

授業は、対面での講義と演習をとりまぜて進める。PC 操作の可能な学習室を利用予定。

「社会統計」と「社会調査」の仕組みを根本的に理解するための講義を行う。また Excel や統計ソフト R の技術的な習得が一つの重要な目標であるため、PC 操作の実習は必須である。発表や課題提出は社会調査の結果報告に欠かせないため、Word や PowerPoint 等の扱い方を含めた、基本的なレポート（論文）の書き方についても指導する。

クラスの親睦を深め、具体的なテーマに接するため、授業内発表の機会も設ける予定である。また、リアクションペーパーではなく、都度の質問や対話やメールでの補足を受け付ける予定。

成績は、受講人数にもよるが、授業内での小課題と発表、レポートによる予定である。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期後半

回	テーマ	内容
第 1 回	1 統計データの基本事項 2 統計データの基本概念	・統計データの目的と種類 ・社会（学）理論とデータとの関係 ・測定と変数の種類 ・記述統計と推測統計 ・データの解釈
第 2 回	3 統計資料の整理 4 度数分布	・統計資料の整理 ・データファイルの作成 ・2 次資料と公開データ・単純集計と度数分布表 ・図の種類 ・相対度数による表示の機能と問題
第 3 回	5 分布と統計量 1 6 分布と統計量 2	・平均 ・分散 ・標準偏差 ・中央値 ・分位数 ・標準化 ・（標準）正規分布
第 4 回	7 検定の基礎知識 8 クロス表 1	・母集団と標本データ ・仮説 ・独立変数と従属変数 ・因果関係 ・クロス表の作成と読み取りの一般原則 ・DK と NA ・情報の圧縮
第 5 回	9 クロス表 2 10 相関 1	・関連性の読み取り：オッズ比とリスク比 ・第 3 変数とエラーレーション ・散布図 ・相関係数

第 6 回	11 相関 2 12 復習と補足	・相関関係と因果関係 ・擬似相関 ・結果の解釈と提示の方法 ・作図のオプション
第 7 回	13 非統計データについて 14 総括	・「量的データ」：変換方法と利用方法 ・テキストデータの扱い方 ・社会調査の基本事項に関するまとめと成績評価に関わる作業

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

杉野勇『入門・社会統計学: 2 ステップで基礎から [R で] 学ぶ』法律文化社、2017 年。（データ資料を利用します。web 上にも公開部分があり、授業プリント・資料も配布する予定。初回授業では未購入で構いません。）

【参考書】

G.W. ボーンシュテット / D. ノーキ著、海野道郎・中村隆監訳、1992、『社会統計学—社会調査のためのデータ分析入門』ハーベスト社。

盛山和夫、2004、『社会調査法入門』有斐閣。

『入門・社会統計学』サポートウェブ (<http://sgn.sakura.ne.jp/text/textbook.html>)

R Tips (<http://cse.naro.affrc.go.jp/takezawa/r-tips/r.html>)

他（授業中に適宜紹介）

【成績評価の方法と基準】

課題提出によって評価。
課題は、複数回ある小課題（合計 40%）、期末の発表（30%）および期末レポート課題（30%）を指す。

また、授業期間中の授業貢献度（クラス全体の理解を助ける質問や意欲的な取り組みなど）を 10-20% 程度取り入れる場合がある。

※出席が 2/3 に満たない場合は無条件に「不可」

【学生の意見等からの気づき】

学生の反応をみながら講義と実習のバランスを工夫する。双方の授業を心がけたい。

【学生が準備すべき機器他】

実習演習・資料配布・課題提出等のためにメールや授業システム等を利用予定。必ず準備すべきものは特にないが、自習のためにはパソコン等の演算機器が必要になる。自宅に用意できない場合は登校して学習する必要が出てくる。

【その他の重要事項】

社会調査士資格認定のためのカリキュラム「C」科目に相当する。

オフィスアワーについては、基本的に授業中に質問時間を設ける。

その他の機会については初回授業でお知らせする。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 社会意識、比較社会学

<研究テーマ> 「幸福」の社会学

<主要研究業績>

『「幸福の基準」及びその設定における『近代化』の影響』『SSJDA Research Paper Series — World Values Survey (世界価値観調査) を用いた実証研究：労働・幸福・リスク』SSJDA - 40, 東京大学社会科学研究所, pp.96-117, 2009 年。

【Outline and objectives】

Learning how to use statistical data in social science research: Beginner level.

Understand basic concepts and methods for reading, writing (drawing) statistical data. Specifically, how to organize statistical data, how to read basic statistics, and how to understand and create tables and graphs. Then, also we learn how to know and describe (and read) relationships between variables. Furthermore, based on the learning about basic non-statistical (qualitative) data, encourage understanding of "data" analysis in social survey research.

*We use PC; Excel and statistical package "R".

SOC500P2 - 057

社会調査法 4

見田 朱子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

既存の、あるいはオリジナルに収集されたデータセットについて、基礎的な統計処理を経てレポートを作成するまでのスキルを身につけることを目的とする。

主な内容は、既存の統計調査の検討、学術的調査と実務的調査の違い、統計の理論的背景、R の使用法などである。あわせて、数値データの解釈に必要なとなる現代社会の諸相についての知識も得る。

【到達目標】

本講義の到達目標は以下の4点である。

- ①定量的社会調査の基礎知識を得る
- ②定量的社会調査をともなう学術論文を理解できるようになる
- ③自身の論文作成において定量的社会調査を活用できるようになる
- ④行政、ビジネス等の実務において定量的社会調査を活用できるようになる

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻公共マネジメントコースにおいては「DP2」「DP4」に関連している。ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻政策研究コースにおいては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、特に「DP1」は特に強く関連している。ディプロマポリシーのうち、サステイナビリティ学専攻においては「DP2」「DP4」に関連している。

【授業の進め方と方法】

授業は、対面での講義と演習をとりまぜて進める。PC 操作の可能な学習室を利用予定。

2 コマ連続のクラスだが、1 コマずつ別の単元で区切る場合と、連続して1つの単元に取り組む場合、あるいは前半と後半を講義と実習に振り分けることなどがある。講義もだが、特に実習は遅刻や欠席によって進行についていけなくなるので留意されたい。

リアクションペーパーを兼ねた小課題、期末にはレポートと発表を兼ねた課題を出す予定である。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期前半

回	テーマ	内容
第1回	序論	社会調査、統計学の歴史
第2回	確率論の基礎	フィッシャー以後の統計学の基礎となる確率論
第3回	確率分布とは	前講を受けて、確率分布の考え方について学ぶ
第4回	正規分布の意味と性質	標本誤差の定理を素材に正規分布について学ぶ
第5回	統計的検定の基礎	帰無仮説の考え方
第6回	カイ二乗検定	独立性の検定の考え方
第7回	t 検定	二群間の平均値の差の検定方法について
第8回	相関関係の分析法1	回帰分析について
第9回	相関関係の分析法2	重回帰分析について
第10回	R の使用法 1 - 1	データセットの取扱法とデータクリーニング
第11回	R の使用法 1 - 2	単純集計表の作成とその解説
第12回	R の使用法 2 - 1	クロス集計表の作成とその解説
第13回	R の使用法 2 - 2	基礎的な因子分析とその解説
第14回	報告書の作成	社会調査データを文章化するテクニック（参加者への個別レポート作成指導）

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

実習は Windows パソコンで無料の統計ソフト R を使用して行う。このため、特別なスキルは必要ないが、エクセルやワードをごく一般的なレベルで使える程度のスキルが必要である。できれば R を予めダウンロードしておくこと。またパソコンスキルに自信のない受講者は事前に Windows パソコンに十分に慣れておく必要がある。本授業の準備学習・復習時間は各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

教科書は特に使用しないが、下記の書籍を適宜参照すると理解の助けとなる。この書籍の公開データなどを利用してもらう予定である。

また、R の操作方法については Web 上に公開されているページなどを紹介する。

杉野勇『入門・社会統計学: 2 ステップで基礎から [R] で学ぶ』法律文化社、2017 年。

【参考書】

石川淳志他編 1998, 『見えないものを見る力——社会調査という認識』八千代出版

G.W. ボーンシュエット / D. ノーキ著, 海野道郎・中村隆監訳, 1992, 『社会統計学—社会調査のためのデータ分析入門』ハーベスト社。

【成績評価の方法と基準】

実習的な小課題 30 %

授業中の理解・貢献状況 10 %

期末レポート・発表 60 %

で評価する。

【学生の意見等からの気づき】

・実習の進行について、パソコンに慣れていないと「早すぎる」と感じられるかもしれない。不安を感じる場合は、受講までにパソコンにできるだけ慣れておくことが望ましい。エクセルが一応使えるというレベルを念頭においている。

・本講義参加者は、学生である以外に仕事を持っていることが多い。授業の進行速度や課題提出、遅刻や早退などについては初回授業で相談のうえクラス運営をする予定である。

・社会調査法 1～3（特に 3）は、必須ではないが既習であることが望ましい。例年、「3」より先に本講「4」を履修したいという相談がある。履修予定等さまざまな事情はあるだろうから、できる限り対応したいと思うが、理解度としてはやはり難しいところがあると感じている。「3」からは積み重ねの関連性が非常に高い科目なので、非常な努力の覚悟が必要になる。履修相談に来るのは構わない。

【学生が準備すべき機器他】

パソコン (Windows) および周辺機器。Mac や Linux でも履修可能だが、授業は Windows を前提として行う。iPad 等のタブレット端末は使用できない。Excel もしくはこれと同等に使用できる表計算ソフト。ただし Excel 以外のソフトを使用する場合、それに合わせた特別な指導や補助はできない。できれば R をインストールしておくこと。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 社会意識、比較社会学

<研究テーマ> 「幸福」の社会学

<主要研究業績>

『「幸福の基準」及びその設定における「近代化」の影響』『SSJDA Research Paper Series — World Values Survey (世界価値観調査) を用いた実証研究 : 労働・幸福・リスク』SSJDA - 40, 東京大学社会科学研究所, pp.96-117, 2009 年。

【Outline and objectives】

This course introduces the skill of quantitative research data.

At the end of the course, participants are expected to analyze statistical data using R.

社会調査法5

小磯 明

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

質的データの収集と分析の具体的方法について学ぶ。とくにフィールドワークに必要な技法や倫理的な問題についての理解を深める。

【到達目標】

フィールドワークにおける質的調査の実施に向け、基本的な調査計画が設計できることを目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻公共マネジメントコースにおいては「DP2」「DP4」に関連している。ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻政策研究コースにおいては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、特に「DP1」は特に強く関連している。ディプロマポリシーのうち、サステイナビリティ学専攻においては「DP2」「DP4」に関連している。

【授業の進め方と方法】

まず、質的調査の考え方と設計の仕方について解説したうえで、フィールドワークにおける質的データの収集と分析に必要な技法について解説する。つぎに、フィールドワークの基本的な収集・分析手法である、聞き取り調査、参与観察、ドキュメント分析の各項目について、事例を使って具体的な解説を行い、質的データの収集・分析方法について理解を深める。さらに、分析結果の提示（論文・報告書の執筆）を念頭におき、被調査者との関係など倫理的な問題についての理解を促す。授業計画は概ね以下を予定しているが、受講生の人数や問題関心によって若干変更する可能性がある。授業は原則対面で実施する。授業への積極的参加を促すためリアクションペーパーを提出してもらおう。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期前半

回	テーマ	内容
1	質的調査の考え方	・質的調査とは何か ・収集／分析の目的と方法 ・量的調査との関係
2	質的調査の設計	・テーマ／題材／問いの設定 ・仮説の設定 ・先行研究との関係
3	フィールドワーク①	・フィールドワークとは何か ・データ収集方法の種類と組み合わせ
4	フィールドワーク②	・フィールドワークの実際
5	フィールドワーク③	・陥りやすい罠 ・脱却するための方法
6	聞き取り調査①	・聞き取り調査の手順 ・インタビューの種類と方法 ・テープ起こし
7	聞き取り調査②	・ライフヒストリー分析 ・構造分析
8	聞き取り調査③	・インタビューの実際
9	参与観察①	・観察の種類 ・参与観察の内容 ・フィールドノーツの作成
10	参与観察②	・参与観察の事例
11	ドキュメント分析①	・ドキュメント分析の内容 ・分析対象の種類
12	ドキュメント分析②	・ドキュメント分析の事例
13	調査結果のまとめ方	・論文／報告書の執筆
14	成果の公表とその問題	・調査倫理規定 ・プライバシー保護 ・被調査者保護をめぐる諸問題

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業はパワーポイントを使用して行う予定。教材は印刷して配布するので、復讐に役立てて欲しい。

【テキスト（教科書）】

講義の内容が多岐にわたるため、特に指定しない。

【参考書】

都度、講義の引用・参考文献を紹介する。

【成績評価の方法と基準】

平常点（出席・討議）50％、課題レポート50％。

【学生の意見等からの気づき】

受講生の研究テーマを踏まえた講義にしたい。

【学生が準備すべき機器他】

特になし。

【専門領域】

社会調査法、福祉社会学、社会政策学。

【研究テーマ】

コミュニティにおける医療と福祉形成の現代的解明、地域の産業政策の形成。

【主要研究業績】

単著『地域と高齢者の医療福祉』2009年、御茶の水書房。

単著『公害病高齢者とコンビニート：倉敷市水島の環境再生』2020年、御茶の水書房。

論文「小規模・高齢化集落の高齢者と地域福祉－長野県泰阜村の高齢者生活調査から」『福祉社会学研究』第8号、2011年。

【Outline and objectives】

Learn about specific methods of collecting and analyzing qualitative data

SOC500P2 - 059

社会調査法6

中筋 直哉

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

社会学および政策科学の研究の実際場面で社会調査を活用するには、研究の目的および研究に適用する社会理論と有機的に結びついたかたちで調査をデザインし、データを分析することが欠かせない。この科目では、社会学の調査研究の古典を複数講読することを通して、それら各々のユニークな問題関心とそこから導き出された独特の調査設計・データ分析法を学び、さらに履修者各自の問題関心に応じた調査デザイン・データ分析法を構想し、相互討論を通して洗練することを試みる。

【到達目標】

受講生各自の問題関心に基づく調査計画、およびその調査に基づく修士論文の執筆計画を立案できること

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻公共マネジメントコースにおいては「DP2」「DP4」に関連している。ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻政策研究コースにおいては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、特に「DP3」は特に強く関連している。ディプロマポリシーのうち、サステイナビリティ学専攻においては「DP2」「DP4」に関連している。

【授業の進め方と方法】

教室で対面で実施（予定）。講義と履修者による発表および討論。各回 2 時間の連続講義で、授業での発表についてはその都度授業内で、試験答案については事後に全員に対してフィードバックする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】**春学期前半**

回	テーマ	内容
1	総論 1	社会学・政策科学と社会調査
2	総論 2	社会調査の諸類型
3	総論 3	社会調査の倫理と真正性
4	フィールドワークの光と影 1	B. マリノフスキ『西太平洋の遠洋航海者』をめぐって 1
5	フィールドワークの光と影 2	同上 2
6	個人の歴史と社会の歴史を重ね合わせる 1	A. クラインマン『八つの人生の物語』をめぐって 1
7	個人の歴史と社会の歴史を重ね合わせる 2	同上 2
8	テキストデータの分解・再構築 1	小林直毅編『「水俣」の言説と表象』をめぐって 1
9	テキストデータの分解・再構築 2	同上 2
10	社会関係を計量する 1	C. フィッシャー『友人のあいだで暮らす』をめぐって 1
11	社会関係を計量する 2	同上 2
12	政策科学に貢献する社会調査 1	辻中豊ほか『現代日本の自治会・町内会』をめぐって 1
13	政策科学に貢献する社会調査 2	同上 2
14	総括的討論	各自の問題関心に基づく調査デザインの発表と相互討論

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

各自テキスト以外の関連文献を収集し、比較検討すること。本授業の準備学習・復習時間は各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

上記授業計画の「内容」に記載

【参考書】

毎回ごとに授業中に指示

【成績評価の方法と基準】

授業への積極的参加 30 %、報告の内容評価 30 %、筆記試験 40 %。よく考えられた報告を行うことと、筆記試験において修士論文に相応しい調査計画を立案できていることがAの条件。

【学生の意見等からの気づき】

最新の研究を紹介する。

【学生が準備すべき機器他】

学習支援システムへのアクセスが必須。

【担当教員の専門分野等】

（専門領域）地域社会学
（研究テーマ）地域社会の構造分析

〈主要研究業績〉『よくわかる都市社会学』（2013、ミネルヴァ書房）、『群衆の居場所』（2005、新曜社）

【Outline and objectives】

This lecture aims to study various relations sociological theory and method by reading and discussing classics of sociology.

社会調査法7

見田 朱子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

昨今、統計パッケージの普及によって、複雑な統計解析も容易に行えるようになってきた。しかしその反面、それぞれの統計手法の基礎や特徴を理解しないまま分析がされることも少なくない。

そこで本講義では、統計学の基礎を確認しつつ、まずは分散分析と線形回帰モデルの学習を通じて、交互作用項を中心とした多変量解析の基本的な考え方を学ぶ。さらに線形回帰モデルとの差異に注目しながら、ロジスティック回帰分析について学習する。また、探索的分析手法として主成分分析と因子分析についても習得する。これらの分析手法は、統計パッケージ R による実習を通じて、実践的に修得することが目指される。

その際には、統計パッケージの単なる使用方法の習得ではなく、各手法の考え方やその結果の意味を理解することに重点を置く。

【到達目標】

本講義の目標は、線形回帰モデルなどの学習を通じて、多変量解析の基本的な考え方を修得することである。

座学と実習を通じて各分析手法の考え方や仮定について理解し、自ら説明できるようになることが目標である。それと同時に、統計パッケージ R を用いた実習によって、実際に分析するための技術の修得も目指す。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻公共マネジメントコースにおいては「DP2」「DP4」に関連している。ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻政策研究コースにおいては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、特に「DP3」は特に強く関連している。ディプロマポリシーのうち、サステイナビリティ学専攻においては「DP2」「DP4」に関連している。

【授業の進め方と方法】

本講では、対面の講義と実習を通じて多変量解析の考え方や仮定について学習する。各回の授業は講義とともに適宜統計パッケージの操作実習をほさむことで理解を深める形でおこなう予定である。

表計算ソフト Excel のほか、統計ソフトとしては無料の R を用いる。R の基本的な操作方法は社会調査法3、4などで学んでいることが望ましいが、必須ではない。

履修人数にもよるが、リアクションペーパーはなく、都度の質問や対話やメールによって補足をしていきたい。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期前半

回	テーマ	内容
1	多変量解析に向けた準備1	社会学と多変量解析、基本統計量の算出、標準化、共分散と相関係数
2	多変量解析に向けた準備2	統計的推測と仮説検定、検定の全体図
3	分散分析	基本的な考え方、級内平均と級間平均、一元配置、多元配置、実習
4	線形回帰分析と最小二乗法（OLS）	線形回帰分析における仮定
5	基本統計量と OLS 推定量の関係	分散分析表の読み方や決定係数について学習
6	重回帰分析	統制・偏相関、多重共線性、修正済み決定係数、結果の t 検定・F 検定
7	実習と補足：分析の準備～結果の解釈	ダミー変数とその作り方、直接効果と間接効果、交互作用
8	ロジスティック回帰分析の基礎	オッズとロジット、回帰係数の解釈、回帰係数とモデルの検定
9	分析方法の整理	仮説検定のための分析と、探索的分析
10	主成分分析と因子分析	考え方の基礎、主成分、潜在因子と観測因子、因子負荷量、寄与率
11	主成分分析の実習	主成分分析表の図示と解釈
12	因子分析の実習	因子分析表の解釈
13	データの選び方、分析方法の選択方法、補足	「データ」について、判別分析とクラスタ分析の紹介
14	まとめ	まとめと成績評価にかかわる作業

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

杉野勇『入門・社会統計学：2 ステップで基礎から [R で] 学ぶ』法律文化社、2017 年。

（データ資料を利用します。web 上にも公開部分があり、授業プリント・資料も配布するので、初回授業では未購入で構いません。）

【参考書】

G.W. ボーンシュテット／D. ノーキ著、海野道郎・中村隆監訳、1992。『社会統計学—社会調査のためのデータ分析入門』ハーベスト社。

盛山和夫、2004。『社会調査法入門』有斐閣。

『入門・社会統計学』サポートウェブ（<http://sgn.sakura.ne.jp/text/textbook.html>）

R Tips（<http://cse.naro.affrc.go.jp/takezawa/r-tips/r.html>）

他、授業内で適宜紹介する。

【成績評価の方法と基準】

小課題提出（40%）と期末試験（60%）によって評価。期末試験はレポートとする。人数によっては、発表も取り入れる。

授業時間内外でのクラスへの貢献度（クラス全体の理解を促す質問、意欲的な取り組みなど）も考慮する。

※出席が 2/3 に満たない場合は自動的に「不可」となる。

【学生の意見等からの気づき】

・学生の反応をみながら講義と実習のバランスを工夫する。双方向の授業を心がけたい。

・本講義参加者は、学生である以外に仕事を持っていることが多い。授業の進行速度や課題提出、遅刻や早退などについては初回授業で相談のうえクラス運営をする予定である。

【学生が準備すべき機器他】

実習演習・資料配布・課題提出等のためにメールや授業システム等を利用予定。必ず準備すべきものは特にないが、自習のためにはパソコンおよび周辺機器、Excel と R のインストールが必須となる。自宅にこれらを準備できない場合は次週のために登校するなどの必要がある。

R のインストールは授業での案内後でもよい。

【その他の重要事項】

専門社会調査士資格認定のためのカリキュラム「I」科目に相当する。シラバス内容にある通り、多変量解析とその応用を扱う。推測統計の基礎については理解していること、少なくとも履修済みのものとして授業を進めるため、未履修あるいは同時並行して学習することは望ましくない。ただし、自信がない程度であれば本講を是非履修して、分析技術を実用的なものとしてほしい。

オフィスアワーについては、基本的に授業中に質問時間を設ける。

その他の機会については初回授業でお知らせします。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 社会意識、比較社会学

<研究テーマ> 「幸福」の社会学

<主要研究業績>

『「幸福の基準」及びその設定における「近代化」の影響』『SSJDA Research Paper Series — World Values Survey（世界価値観調査）を用いた実証研究：労働・幸福・リスク』SSJDA - 40, 東京大学社会科学研究所, pp.96-117, 2009 年。

【Outline and objectives】

Advanced class: Social statistical analysis (multivariate data analysis)

We learn:

Interaction term through variance analysis and linear regression model, then logistic regression analysis, at last, exploratory analysis method – principal component analysis and factor analysis.

It is a practical class using a statistical package soft "R".

SOC500P2 - 051

社会調査法 8

田嶋 淳子

実務教員：

【Outline and objectives】

The aim of this course is to help students acquire the necessary skills and knowledge needed to achieve a performance in their qualitative survey.

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

質的調査法の基本的理解と、その実践力を身につけることを目的とする。まず、インタビューや参与観察などのフィールドワークや、ドキュメント分析などの質的調査法について、その発展の歴史を踏まえながら、現在の到達点について理解する。その上で、具体的に質的調査を行う上で重要な論点となりうることについて、実践的な観点から考察し、議論する。さらに、受講者自身の持つデータや、教員が仮に提供するデータをもとにワークショップを行い、具体的な手法を選び身につけるための手がかりを得るよう試みる。

【到達目標】

さまざまな質的調査法に関する基本的理解を踏まえたうえで、新聞・雑誌記事、資料文書、映像、放送、音楽などの質的データの分析法（内容分析等）を理解するとともに、その一部についての実践的な能力を習得すること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻公共マネジメントコースにおいては「DP2」「DP4」に関連している。ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻政策研究コースにおいては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、特に「DP3」は特に強く関連している。ディプロマポリシーのうち、サステイナビリティ学専攻においては「DP2」「DP4」に関連している。

【授業の進め方と方法】

本講義は6月5日より講義を開始します。詳細は学習支援システムのお知らせを参照してください。基本的にオンラインでの授業を予定しています。質的調査法についての歴史と具体的な手法に関する現在の到達点について解説した上で、実際の質的調査において直面する課題や問題について解説します。その上で、受講生のデータあるいは各自の関心がある領域の質的資料を任を持ち寄り、具体的に分析するプロセスをワークショップ形式で経験します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

春学期後半

回	テーマ	内容
第1回	質的調査とは何か	量的調査との違い／調査倫理の問題
第2回	質的調査法の歴史と到達点1	インタビュー／参与観察／ドキュメント分析／観察
第3回	質的調査法の歴史と到達点2	エスノグラフィー／ライフヒストリー／GTA／会話分析
第4回	実践的課題1（資料を集める）	質問とは何か／ラポールをめぐる論争／調査者の立ち位置
第5回	実践的課題2（資料を分析する）	記録をつくる／テーマをたてる／データの特性を整理する
第6回	実践的課題3（資料を記述する）	書くとはどういうことか／調査倫理ふたたび
第7回	ワークショップ1	データ・質的資料の持ち寄り
第8回	ワークショップ2	最初の感想とそこから見えるもの
第9回	ワークショップ3	どう記録をつくるのか
第10回	ワークショップ4	テーマをたてる
第11回	ワークショップ5	データの特性を理解する
第12回	ワークショップ6	改めてテーマをたてる
第13回	ワークショップ7	ふたたびデータの特性を考える
第14回	総合討論	質的調査法の意義

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

必要に応じて、資料を授業支援システムにアップします。

【参考書】

- 岸政彦・石岡丈昇・丸山里美 2016『質的社会調査の方法』有斐閣
- 佐藤郁哉,2008『質的データ分析法—理論・方法・実践』新曜社。

【成績評価の方法と基準】

討議への参加（40%）、演習課題への取り組み（60%）

【学生の意見等からの気づき】

非該当

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>国際社会学

<研究テーマ>中国系移住者コミュニティの比較社会学的研究、移住第2世代問題

<主要研究業績> 2010『国際移住の社会学—東アジアのグローバル化を考える』明石書店、2019『イタリアにおける中国系ニューカマーズの定着とコミュニティ形成過程』『華僑華人研究』第16号、20-39ページ。2021『イタリアにおける中国系移住者家族の変遷』『移民政策研究』第13号掲載予定。

政策分析評価技法

阿部 一知

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

- ① 公的主体が実施する経済政策の効果について、経済学的な分析方法の枠組と手順を理解
- ② 日本あるいは海外の経済政策のいくつかの例を取り上げ、目的・効果の分析方法と結果を議論
- ③ 政策・プロジェクト評価手法の概略について理解

【到達目標】

公共経済学に基づいた政策評価の基本的枠組を入門的に理解する。代表的手法として費用便益分析の基本的考え方を学ぶ。政策評価の手順に慣れる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻公共マネジメントコースにおいては「DP1」「DP2」に関連している。ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻政策研究コースにおいては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、特に「DP1」は特に強く関連している。ディプロマポリシーのうち、サステイナビリティ学専攻においては「DP2」「DP4」に関連している。

【授業の進め方と方法】

全体7回程度の講義において、最初の4回程度は、公共的な政策の分析の枠組と手順について教科書にそって紹介する。基本となるのは、厚生経済学の応用としての公共経済学に基づいた理論である。また、その応用分野として、費用便益分析などのプロジェクト評価や、政策の評価手順などについても触れる。これらは講義と質疑を中心とする。

残り3回程度は、実際の政策を取り上げて、ディスカッションを行いながら事例研究する。具体事例は、学生の希望を取りながら選択する。原則として、1週間前に材料を示すので、それに基づいた準備があることを前提に講義する。講義は原則対面で行う。毎回の講義で、学生の理解の確認のため課題を提示し、ディスカッションすることで理解を深める。また、フォードバックとして、メールで直接学生と質問応答や追加説明を行う。

講義は原則対面で行う。毎回の講義で、学生の理解の確認のため課題を提示し、ディスカッションすることで理解を深める。また、フィードバックとして、メールで直接学生と質問応答や追加説明を行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

春学期後半

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション、政策分析の基本的な考え方	科目の全般的な内容、講義の進め方、教科書の説明。
第2回	分析の手順	ストーリー教科書第1章
第3回	政策分析の手法（外部性モデル、選好の定義など）	厚生経済学の基礎の説明。政策決定モデルの紹介。
第4回	政策分析の手法（外部性モデル、選好の定義など）	ストーリー教科書第2～3章、第6章。厚生経済学の基礎の説明（続き）政策決定モデルの紹介。
第5回	政策分析の手法（費用便益分析入門など）	ストーリー教科書第2～3章、第6章。費用便益分析一般の説明。
第6回	政策分析の手法（費用便益分析入門など）	ストーリー教科書8～10章。費用便益分析一般の説明（続き）
第7回	政策分析の手順、公共選択、公共主体が政策を実施する根拠	ストーリー教科書8～10章。公共選択理論の説明。ストーリー教科書11～13章。
第8回	事例研究の準備	事例研究のテーマ希望聴取など準備。
第9回	政策分析の手順など確認。	政策分析の手順（問題確定、選択肢提示、効果分析、評価）
第10回	事例研究(1)	事例研究：具体的な政策（教員が提示）を取り上げて研究
第11回	事例研究(2-1)	事例研究：具体的な政策を取り上げて研究
第12回	事例研究(2-2)	事例研究：具体的な政策を取り上げて研究
第13回	まとめ、補足的なディスカッション	全体のまとめ。
第14回	まとめ、補足的なディスカッション 筆記試験（あるいはレポート）	全体のまとめ。 筆記試験（レポートとする場合は、レポートの作成についての説明）

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

前の講義で、事前に読んでおく資料・教科書該当ページを指示する。また、参考資料をウェブで示す。本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

ストーリー、ゼックハウザー「政策分析入門」 勁草書房

【参考書】

指定教科書よりも網羅的・体系的でないが、より新しい教科書として、バーダック「政策立案の技法」東洋経済新報社、を勧める（講義でも一部使用する）。その他の資料は、授業中に適宜指示する。配布できる資料は、ウェブで公開する。

【成績評価の方法と基準】

授業中の参加（20%）と期末試験（80%、レポートにする場合もある）

【学生の意見等からの気づき】

事例研究をより幅広く行うため、課題の学生からの希望聴取を、第2回目から口頭でも行うこととした。

【担当教員の専門分野】

経済政策（貿易投資の経済効果、マクロ経済対策など）、応用経済学（応用計量経済モデルを含む）。研究者データベース参照

<https://ra-data.dendai.ac.jp/tduhp/KgApp?kyoinId=ymkkgkysggy>

【Outline and objectives】

1. To understand the framework and procedures to analyze the economic effects of public policies,
2. To discuss several examples of economic policies in Japan and other countries, on their objectives and scope,
3. To understand policy/project evaluation methods.

POL500P2 - 053

市民参加の理論と実践

小島 聡、杉崎 和久、谷本 有美子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

市民参加は、政治学や行政学、さらに公共政策学の永遠のテーマといえるが、現代では、他の学問分野や個別の政策領域においても重要なテーマになっている。この授業では、市民参加の理論と動向から現代の政策過程とガバナンスについて俯瞰した上で、都市計画分野における市民参加に焦点を合わせて実践的な検討を行う。この授業は、参加学生が、市民参加を通して、歴史・理論・実践動向を学びながら、制度・手続、社会技術の手法とその活用、参加のガバナンス・マネジメントなどについて、学際的かつ政策領域横断的な視野を身につけることが目的である。

【到達目標】

この授業に参加することによる学生の到達目標は、以下のとおりである。

- ・市民参加の歴史・理論・実践に関する基礎知識と教養を習得する
- ・自治体政策と市民参加に関する基礎知識と教養を習得する。
- ・都市計画分野における市民参加の動向について理解する。
- ・市民参加の手法選択、市民参加の制度・手続の設計と運用、参加のガバナンス・マネジメントに関する政策思考力を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻公共マネジメントコースにおいては「DP3」「DP4」に関連している。ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻政策研究コースにおいては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、特に「DP3」は特に強く関連している。ディプロマポリシーのうち、サステイナビリティ学専攻においては「DP1」「DP4」に関連している。

【授業の進め方と方法】

講義の前半は、市民参加総論として、デモクラシーと市民参加の歴史や、理論と実践の動向、自治体政策と市民参加に関する概説を扱う。講義の後半は市民参加各論として、都市計画分野における市民参加について、運動から参加への制度化、市民だけではなく企業なども含む民間主体による都市空間の管理・運営について扱う。また数名のゲストスピーカーを招き、実務上の経験知などについて講義と討論を行う。討論は質疑応答にとどまらず、市民参加に関する研究会のスタイルで行う。最終回は、総括的な講義を行い、今後を展望する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期後半

回	テーマ	内容
1	市民参加総論（1）	マスメディアの形成史と市民参加、政策過程と市民参加の関係、熟議デモクラシーと現代の参加手法について検討する。
2	市民参加総論（2）	日本の現代史における市民参加の軌跡、自治体政策をめぐる市民参加の動向と論点について検討する。
3	住民投票とローカルデモクラシー	近年の事例を題材にしながら、直接民主制と間接民主制との関係性や公共政策の争点化等の観点で住民投票を検討する。
4	都市計画分野における参加の展開	法定都市計画への対抗概念としてのまちづくり運動から都市計画における参加の制度化の過程を検討する。
5	都市計画分野における参加事例	都市計画分野における市民参加の事例についてゲストから話題提供を踏まえて検討する。
6	市民参加の実効性を高めるための試み	市民参加の課題の持つ課題とその解決することを目的とした取組についてゲスト講師からの話題提供を踏まえて検討する。
7	市民参加の課題と展望	補足的な講義とともに、市民参加の課題と展望について討論し、授業全体を統括する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

この授業に参加する学生は、以下の時間外学習を行う。

- ・事前に配布する資料を読む。
- ・事前に提示する事項について概略を調べる。
- ・授業内で提示するテーマについてレポートを執筆する。

【テキスト（教科書）】

特に用いない。

【参考書】

①篠原一編『討議デモクラシーの挑戦 ミニ・パブリックスが拓く新しい政治』（岩波書店、2012）

②米野史健ほか編『住民主体の都市計画 まちづくりへの役立て方』（学芸出版社、2009年）。

上記以外の参考文献については、授業内で紹介する。

【成績評価の方法と基準】

平常点（参加姿勢）（80%）、最終レポート（20%）の総合評価とする。参加姿勢については、講義に対する履修態度、毎回行う質疑応答、討論への積極性等を重視する。

【学生の意見等からの気づき】

・現代の市民参加はきわめて幅広い理論と実践領域にわたり、一人の教員がカバーしきれないのが実状です。こうしたことから、学際的なアプローチと専門家をゲストスピーカーとしてお招きすることで実践知を涵養する授業構成の有効性を実感しています。

【学生が準備すべき機器他】

必要に応じて、パソコンからプロジェクターに画像を投影する。

【担当教員の専門分野等】

小島 聡

〈専門領域〉行政学、地方自治論

〈研究テーマ〉地域の持続可能性と自治体政策

〈主要研究業績〉

『自治体経営改革』（共著）（ぎょうせい、2004年）

『分権時代の地方自治』（共著）、（三省堂、2007）

『フィールドから考える地域環境 持続可能な地域社会をめざして』（共編著）、（ミネルヴァ書房、2012）

杉崎和久

〈専門領域〉都市計画、市民参加手法

〈研究テーマ〉公共的意思決定における市民参加のあり方、まちづくりの現代史

〈主要研究業績〉

『市民参加と合意形成』（共著）（学芸出版社、2005年）

『住民主体の都市計画』（共著）（学芸出版社、2009年）

谷本有美子

〈専門領域〉行政学、地方自治、市民自治

〈研究テーマ〉中央政府における地方自治、国による自治体統制、人口減少時代の自治体政策と市民自治、大都市行政区の民主的統制

〈主要研究業績〉

『「地方自治の責任部局」の研究—その存続メカニズムと軌跡 [1947-2000]』（公人の友社、2019年）

『分権社会と協働』（共著）（ぎょうせい、2001年）

『分権改革の動態』（共著）（東京大学出版会、2008年）

『大都市行政区の「区民会議」と市民参加のアジェンダ—神奈川県内の指定都市を題材に』（2016）『横浜市立大学論叢 人文科学系列』第 67 巻第 1 号

【Outline and objectives】

The purpose of this lecture is to acquire interdisciplinary and interdisciplinary views on citizen participation by participating students.

数理モデル概論

松本 倫明

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本科目では、コンピュータシミュレーションを用いた現状分析と将来予測のためのモデル化の手法について研究することを目的とする。

【到達目標】

はじめに代表的なシミュレーション事例を概観し、シミュレーションがどのように自然科学あるいは社会科学に寄与しているかを理解する。前半は、限りある資源（有限な資源）のもとで人間社会や生態系の動向を、システムダイナミクスを用いて定量的にモデル化する。これを通して環境問題を考える上での基本的な概念を考察していく。後半は、地球温暖化の数理モデルの概要を学び、地球環境問題について総括的に考える。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻公共マネジメントコースにおいては「DP1」「DP2」に関連している。ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻政策研究コースにおいては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、特に「DP3」は特に強く関連している。ディプロマポリシーのうち、サステイナビリティ学専攻においては「DP1」「DP2」に関連している。

【授業の進め方と方法】

対面授業を行う。

本授業は、講義とコンピュータ実習を織り交ぜながら進める。コンピュータ実習によって、受講生は授業を深く理解することができる。また高度な数学的知識は必要とはしない。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

秋学期後半

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンスと環境モデル概論	本講義を受講するためのガイダンスを行う。環境モデルと環境シミュレーションを概観する。
第2回	システムダイナミクスによる環境モデル1	人口爆発と指数関数的成長の数理モデル。
第3回	システムダイナミクスによる環境モデル2	有限世界における成長の限界の数理モデルを用いた人口爆発モデル。
第4回	システムダイナミクスによる環境モデル3	有限世界における成長の限界とフィードバックによる系の応答を考慮した人口爆発モデル。生態系モデル・COVID-19への応用。
第5回	地球温暖化モデル1	地球温暖化の予測モデルとその結果の概要。
第6回	地球温暖化モデル2	地球温暖化の予測モデルと対策について考察。
第7回	総合討論	授業のまとめとして、総合討論を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

特に使用しない。資料を授業時に配布する。

【参考書】

開講時に紹介する。

【成績評価の方法と基準】

平常点ならびに討論への参加状況60%、実習課題40%とする。

【学生の意見等からの気づき】

なし。

【学生が準備すべき機器他】

授業では情報実習室を使用する。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 理論天文学

<研究テーマ> 星形成、太陽圏と宇宙天気

<主要研究業績>

① "An origin of arc structures deeply embedded in dense molecular cloud cores", Matsumoto, T., Onishi, T., Tokuda, K., & Inutsuka, S.-i. 2015, MNRAS, 449, L123

② "Star Formation in Turbulent Molecular Clouds with Colliding Flow", Matsumoto, T., Dobashi, K., & Shimoikura, T. 2015, ApJ, 801, 77

③ "Protostellar Collapse of Magneto-turbulent Cloud Cores: Shape During Collapse and Outflow Formation", Matsumoto, T., & Hanawa, T. 2011, ApJ, 728, 47

【Outline and objectives】

Students investigate several problems using computers via quantitative analyses.

SOS500P2 - 055

地域コンサルティング論

佐谷 和江

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

①本講義では地域コンサルティングの具体的なケースについて、発意・背景、コンサルティングの過程、成果・課題を分析・評価して提示する。

②また、コンサルティングに関する手法の演習を行う。

③さらに、地域自治やローカルガバナンスという枠組みの中で、実現のための体制やシステムのあり方、その中で地域コンサルティングの位置づけなどについて、方向性を示す。

【到達目標】

①地域コンサルティングの理論や方法論を実践的に学び、それを踏まえて、他事例について説明することができる。

②基礎的な地域コンサルティング能力を習得することができる。加えて、コンサルティングという職種研究を通じてキャリアデザインの一助とすることができる。

③地域コンサルティングの位置づけやシステムのあり方について、討論を重ねる。その結果、ローカルガバナンスについての自説を説明することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻公共マネジメントコースにおいては「DP3」「DP4」に関連している。ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻政策研究コースにおいては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、特に「DP3」は特に強く関連している。ディプロマポリシーのうち、サステイナビリティ学専攻においては「DP1」「DP4」に関連している。

【授業の進め方と方法】

コンサルティングとは、専門性を活かして、企業や行政などに対して外部から客観的に現状を把握し、問題点を指摘し、対策案を提示する業務を行うことである。地域コンサルティングは、自治体や住民に対して行うことが多い。ローカルガバナンスの主体である住民、NPO、行政、企業とは異なり、意志決定に参画するものではないが、それらに与える影響は小さくない。

本講義ではケーススタディや手法のスタディ・演習を行う中で、地域コンサルティングに関する理論や方法論を実践的に学ぶ。

授業形式（対面）

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

春学期前半

回	テーマ	内容
1	講義概論	授業の概要や地域コンサルティングにおいて重要なキーワードを紹介する。手法としては「話し方」を学ぶ。
2	全市レベルの計画作成を支援するコンサルティング	練馬区や港区をケースに全市レベルの計画作成を支援するコンサルティングを学ぶ。手法としては「ファシリテーション」を学ぶ。
3	地域施設の運営組織形成を支援するコンサルティング	新宿区落合三世モデル事業をケースに地域施設の運営組織形成を支援するコンサルティングを学ぶ。手法としては「ファシリテーション・グラフィックス」を学ぶ。

4	地縁型・テーマ型コミュニティ組織のコンサルティング	横浜市まち普請事業や川崎市の区民会議等をケースに地縁型・テーマ型コミュニティ組織のコンサルティングを学ぶ。手法としては「ロールプレイング」を学ぶ。
5	地域活性化（コミュニティビジネス）のコンサルティング	墨田区玉の井地区をケースに地域活性化のためのコミュニティビジネスへのコンサルティングを学ぶ。手法としては「プロセス・デザイン」を学ぶ。
6	社会貢献する人材育成のコンサルティング	江戸川総合人生大学をケースに社会貢献する人材育成のコンサルティングを学ぶ。手法としては「ワークショップのプログラム作成」を学ぶ。
7	講義の総括とレポート発表	これまでの講義の総括を行う。また、各自レポートを発表し、ディスカッションする。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

各ケースのURLを下記に示すので、事前に概要を把握する。

○第2回：練馬区都市計画マスタープラン改定支援/12～15年度

<http://www.city.nerima.tokyo.jp/kusei/machi/masterplan/>

港区まちづくりマスタープラン改定支援/15～16年度

<https://www.city.minato.tokyo.jp/sougoukeikaku/kankyo-machi/toshikekaku/kekaku/master-plan.html>

○第3回：新宿区落合三世モデル事業/06年度～08年度

<http://wp.3sedai.com/>

○第4回：横浜市まち普請事業 左近山地区/07年度

<https://www.city.yokohama.lg.jp/kurashi/machizukuri-kankyo/toshiseibi/suishin/machibushin/machibusin.html>

川崎市「区民会議運営」/10年度～現在

<http://www.city.kawasaki.jp/250/page/0000017573.html>

○第5回：墨田区玉の井地区/08～11年度

<https://teratama.tokyo/>

<http://ameblo.jp/tamanoicafe/>

○第6回：江戸川総合人生大学/04年度～現在

<http://www.sougou-jinsei-daigaku.net/>

本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

教科書は使用しない。講義時に資料を配付する。

【参考書】

①都市のイメージ/ケヴィン・リンチ/1960、翻訳1968、新版2007/岩波書店

②アメリカ大都市の死と生/ジェイン・ジェイコブス/1961、翻訳2010/鹿島出版会

③人間の街：公共空間のデザイン/ヤン・ゲール/2014/鹿島出版会

④まちづくりキーワード事典/三船康道+まちづくりコラボレーション/2009/学芸出版

⑤稼ぐまちが地方を変える 誰も言わなかった10の鉄則/木下 斉/2015/NHK出版新書

【成績評価の方法と基準】

平常点30%：地域コンサルティングに関する理論や方法論を積極的に学んでいるか。

討論への参加40%：基礎的なコンサルティング能力の習得のための演習等に積極的に取り組んでいるか。

レポート・発表30%：地域コンサルティングの位置づけなどについて、具体的なケースを踏まえて方向性を検討し、発表してもらうが、その際、適切なケースを把握し、十分に考察を行っているか。

【学生の意見等からの気づき】

紹介する事例を更新するとともに、それぞれのケースにおいて、各主体の関わり方をわかりやすく説明する。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

都市計画、地域計画、コミュニティマネジメント

<研究テーマ>

自治体の都市政策、コミュニティのエンパワーメント、地区計画制度

<主要研究業績>

○60プロジェクトによむ日本の都市づくり/2011/朝倉書店

- まちづくりキーワード事典「市民まちづくり」／2009／学芸出版
- 逗子市まちづくり条例にみる四つの条例の意義／2005／季刊まちづくりNo. 5／学芸出版
- 市民参加と非営利市民組織～NPOの発展は市民参加をどのように促進しているのか～／2003／地域開発 Vol.471／（財）日本地域開発センター
- コミュニティをエンパワーメントするための制度設計の研究－新潟県岩船地域ニューにいがた里創プラン事業をケースとして－／2001／日本都市計画学会学術研究論文集／日本都市計画学会

【Outline and objectives】

- ① In this lecture, you will learn specific examples of regional consulting.
- ② We will also practice consulting methods.
- ③ In addition, we will discuss the structure of the system and the role of regional consulting within the framework of local autonomy and local governance.

SOS500P2 - 056

ファシリテーション演習

徳田 太郎

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

複雑化・多様化する社会における政策プロセスに必要なスキルとマインドの一つとして「ファシリテーション」を挙げることができる。ファシリテーションとは、参加型の場をつくることで、多様な人々による共創や協働を支援・促進する働きかけである。本科目においては、政策過程における参加や熟議の位置づけ、その中でのファシリテーションの意義、効果的なファシリテーションを行うための基礎的な知識や技術、およびファシリテーターとして行動するための心構えを、講義と演習を通じて理解・習得する。

【到達目標】

・参加者主体の合意形成や課題解決の方法論と、そのような場におけるファシリテーションの意義や役割を説明することができるようになる。
 ・政策過程における参加や協働の鍵となる「当事者としての主体性」や「相互作用による創造性」を育むための働きかけができるようになる。
 ・演習での体験を通じ、多様な人々の個性を活かし、ともに協力しあうチームを育んでいくためのリーダーシップを発揮できるようにする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻公共マネジメントコースにおいては「DP2」「DP3」に関連している。ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻政策研究コースにおいては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、特に「DP3」は特に強く関連している。ディプロマポリシーのうち、サステイナビリティ学専攻においては「DP1」「DP3」に関連している。

【授業の進め方と方法】

対面授業にて実施する。各回とも、講義と演習を織り交ぜながら進める。
 ・第1回：オリエンテーションとして、授業の内容と進め方を確認する。
 ・第2回：講義と質疑応答を中心に、政策過程と参加・熟議の関連を学習する。
 ・第3～4回：講義と質疑応答を中心に、ファシリテーションに関する基本的な考え方を学習する。
 ・第5回～第10回：話しあいにおけるファシリテーションの技術を、各回それぞれ異なる技術に焦点を当てつつ、演習と解説を中心に習得する。
 ・第11回～第13回：それまでに学んだスキルとところを活かして、実際に参加型の場を企画・運営し、相互にフィードバックを行う。
 ・第14回：まとめの講義を行う。
 ＊各回とも、各授業時間の最後の10分程度を「振り返りシート」の作成に充てる。振り返りシートについては、次の回にコメントの上で返却する。また演習におけるファシリテーターとしての（また参加者としての）言動については、その都度フィードバックを行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

秋学期後半

回	テーマ	内容
第1回 (1-前)	オリエンテーション	授業の内容と進め方を確認する（講義）
第2回 (1-後)	政策過程と参加・熟議	政策過程におけるファシリテーションの位置づけを確認する（講義）
第3回 (2-前)	ファシリテーションとは何か	ファシリテーション・ワークショップの全体像を学ぶ（講義・演習）
第4回 (2-後)	話しあいとは何か	話しあいにはモードがあることを学ぶ（講義・演習）
第5回 (3-前)	話しあいの場をつくる技術①空間のデザイン	物理的な「場」の影響を学ぶ（講義・演習）
第6回 (3-後)	話しあいの場をつくる技術②オリエンテーション	「方向づけ」の方法を学ぶ（講義・演習）
第7回 (4-前)	話しあいの場をつくる技術③チェックイン	「雰囲気づくり」を学ぶ（講義・演習）
第8回 (4-後)	話しあいの場をホールドする技術①発問	話しあいの「活性化」を学ぶ（講義・演習）
第9回 (5-前)	話しあいの場をホールドする技術②可視化	話しあいの「構造化」を学ぶ（講義・演習）
第10回 (5-後)	話しあいの場をホールドする技術③意見の吟味	意見の集約方法を学ぶ（講義・演習）
第11回 (6-前)	プログラムを組み立てる技術	参加型の場を企画する方法を学ぶ（講義・演習）
第12回 (6-後)	①	参加型の場（ミーティング）の運営を体験する（演習）
第13回 (7-前)	②	参加型の場（ワークショップ）の運営を体験する（演習）
第14回 (7-後)	まとめ	全体のまとめを行う（講義）

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

・第2回～第4回：予習として、テキストをよく読み、疑問点・質問事項を明確にする。復習として、テキストやノートを読み返し、学んだことを整理する。（各120分程度）
 ・第5回～第10回：予習として、各回の授業で指示するテーマにつき、テキストをもとに、「どのようなときに」「どのような働きかけを」「どのような点に留意して」行うと効果的かを説明できるよう準備する。復習として、学んだことをどのように実践・活用・応用できるかを考え、ノートにまとめる。（各120分程度）
 ・第11回～第13回：予習として、講義内容全体を振り返り、しっかりと準備をして演習に臨む。復習として、演習を通して学んだことや不十分なところを整理し理解する。（各120分程度）

【テキスト（教科書）】

徳田太郎・鈴木まり子『ソーシャル・ファシリテーション：「ともに社会をつくる関係」を育む技法』（北樹出版、2021年、1,600円＋税、978-4-7793-0652-5）。授業は、テキストを予習していることを前提に進める。

【参考書】

・中野民夫・森雅浩・鈴木まり子・富岡武・大枝奈美『ファシリテーション：実践から学ぶスキルとところ』（岩波書店、2009年）
 ・堀公俊『ファシリテーション・ベーシック：組織のパワーを引き出す技法』（日本経済新聞出版社、2016年）

【成績評価の方法と基準】

到達目標に記した3点について、各回の振り返りシートの質と量（約50%）、発言や質問・演習など授業への参加度（約50%）から、総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

本年度授業担当者変更によりフィードバックできません。

【その他の重要事項】

演習を中心とした授業です。受講希望者は、必ず第1回授業に出席してください。やむを得ない事情で出席できない場合には、事前にメールにて担当教員に連絡の上、個別に対応策をご相談ください（宛先：thirdvalue@gmail.com 件名：法政大学大学院ファシリテーション演習）。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>
 政治理論（デモクラシー論）／ファシリテーション論
 <研究テーマ>
 熟議デモクラシーの理論と実践／その中でのファシリテーションの位置づけ
 <主要研究業績>
 ・「アイルランドの憲法改正における熟議と直接投票」『法學志林』118巻3-4号、2020-2021年
 ・「対話／熟議の場を生成するファシリテーション」『総合人間学』14号、2020年
 ・『はじめての地域づくり実践講座：全員集合！を生み出す6つのリテラシー』（分担執筆）北樹出版、2018年

【Outline and objectives】

Facilitation is one of the skills and mindsets necessary for the policy process in an increasingly complex and diverse society. It is an approach that supports and promotes co-creation and collaboration among diverse people by creating a participatory space. In this class, you will understand and acquire the position of participation and deliberation in the policy process, the significance of facilitation in this process, the basic knowledge and skills for effective facilitation, and the mindset for acting as a facilitator through lectures and exercises.

政策研究概論（外国語）※韓国語

申 龍徹

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本の公共政策の仕組みと運用に関する理解

【到達目標】

この授業は、主に韓国からの留学生を対象とし、母語語（韓国語）により、日韓比較の視点から、日本の政治行政システムの基礎的な知識を説明し、日本の公共政策の制度的基盤や基本的な仕組みなどに関する基礎的な知識の理解を目指す。この知識の活用により、より効果的な比較分析を行い、完成度の高い論文執筆ができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻公共マネジメントコースにおいては「DP2」「DP3」に関連している。ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻政策研究コースにおいては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、特に「DP3」は特に強く関連している。ディプロマポリシーのうち、サステイナビリティ学専攻においては「DP2」「DP3」に関連している。

【授業の進め方と方法】

授業は、日本の政治行政に関する基礎的な知識の習得を目指し、政治体制・行政システム・地方自治制度・公務員制度・公共事業などテーマごとに基本的な仕組みと現況を説明し、受講者の質疑に応答する形式で進める。受講者の登録状況を勘案し、日本語と韓国語を兼用する。

原則として対面で授業を実施すること、新型コロナウイルス感染状況を踏まえ、十分な安全性が確保されないと判断された場合には、オンラインに切り替える。

受講生には、期末に課題レポートの提出及びその発表を求め、質疑応答を行う。課題レポートについては、学際的なコメントを付けてフィードバックする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
(1)	歴史	明治維新、戦後改革
(2)	体制	憲法、議院内閣制
(3)	国会	国会の構成と政党制
(4)	選挙	選挙制度の仕組みと現況（国・地方）
(5)	55年体制	自民党の長期政権の形成と崩壊
(6)	行政	行政組織の構成と役割
(7)	行政改革 A	行政改革の歴史と内容
(8)	行政改革 B	省庁再編と行政改革
(9)	自治制度	地方自治法と自治体改革
(10)	地方分権	地方分権改革の内容
(11)	少子高齢化社会	少子高齢化の現況と対策
(12)	政策過程	政策決定と執行のプロセス（予算策定プロセス等）
(13)	公共事業	公共事業の仕組み
(14)	公務員制度	国家公務員・地方公務員の法制度

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

事前にレジュメや参考資料などをアップする。

【参考書】

レジュメ及び関連する参考資料をアップする。

【成績評価の方法と基準】

参加度（50%）と理解度（50%）による絶対評価

【学生の意見等からの気づき】

パワーポイントによる講義を基本に、受講者との質疑応答を交えながら進める。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>行政学、比較行政

<研究テーマ>比較自治行政、公共空間形成

<主要研究業績>

- ①『東アジアの公務員制度』（共編著、法政大学出版社、2013）
- ②『韓国行政自治入門』（単著、公人社、2006）
- ③「日韓の地方公務員制度比較に関する予備的考察—＜民主性＞と＜能率性＞の交差」『法學志林』（105 - 1、法政大学、2007）
- ④「住民参加制度の日韓比較」『自治総研』（33-6、通号 344、地方自治総合研究所、2007）
- ⑤「市民活動の法制度と支援に関する日韓比較」『自治総研』（33 - 4、通号 342、地方自治総合研究所、2007）

【Outline and objectives】

Understanding of Japanese public policy mechanism and operation

POL502P2 - 057

政策研究概論（外国語）※中国語

毛 桂榮

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

公共政策に関する基礎文献を中国語で講読することを中心に勉強し、学生が政策分析の基礎を固めることができるように教授します。

文献は、日本語、中国語、英語のものですが、履修者と相談しながら、適宜変更もします。また、学生の要望にできるだけ応えるように日程の調整もします。しかし、基礎文献を理解することが大事で、じっくり資料を理解することを薦めます。

ゼミの進行に関しては、基本的に中国語をもって行いますが、適宜、日本語も使用します。

なお、この科目は公共政策論を中国語を利用してしながら、公共政策論の専門科目を勉強するようにカリキュラムを設定しており、中国語を勉強することを目的にした授業ではありません。この点に関しては、十分理解してください。

【到達目標】

以下の内容、提示する基礎文献を基本にじっくり「解説」します。資料・論文を要約した上で議論をする形で進めます。半年、基本文献15本以上を熟読するようにします。

言葉・概念の問題だけではなく、社会科学における議論の仕方、論文の書き方も含めて、資料を利用してながら、解説し討論します。

ゼミの最終回（適宜調整）に関しては、学生が関心する政策課題を事例として、研究発表を行う予定にしています。政策研究の手法を修得することを目指します。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻公共マネジメントコースにおいては「DP2」「DP3」に関連している。ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻政策研究コースにおいては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、特に「DP3」は特に強く関連している。ディプロマポリシーのうち、サステナビリティ学専攻においては「DP2」「DP3」に関連している。

【授業の進め方と方法】

基本は、対面授業です。

(1) 新型コロナウイルスの流行により、一部オンライン授業はあるが、本ゼミは、法政大学の方針に則り、「対面」を基本とする予定です。

(2) もちろん、柔軟に「オンライン」も必要に応じて調整します。

(3) また、ゼミの進め方は：基本文献の要約からスタートし、議論を深めていきます。資料の事前予習、また関連文献の復習・勉強も必要です。基本文献を中心に、関連する分野の研究資料なども、ある程度把握できるようにしていきましょう。最後は、各自の発表をもって基礎修得の確認をおこないます。

(4) 勉強に関する質問は、(本システムか LINE を通じて) 常時受付ます。またゼミでは、質疑応答の時間も用意します。さらに、報告、提出するレポートに関しても、随時、コメントを返しますので、利用してください。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	予定の打ち合わせ。また先行研究を読むことについて。履修する場合、事前で担当者まで連絡を希望。連絡があった場合、第一回目の資料をメールで送信します。 maoguirong@gmail.com	文献「若い大学院生へ」を配布。日本語。
第2回	行政学の研究史、公共政策論の先行研究について	前回の配布資料を踏まえて議論。次回の資料「行政学の歴史」など資料を配布、中語語。
第3回	行政学の歴史における公共政策研究	西尾行政学第4章、日本語と中国語を講読。またフィールドワークに関して、指示と相談。
第4回	さらにもう一つ専門文献を読む	行政学の基礎概念所収「行政と組織」論文など行政、政策と管理などの論文を読む。参照：「組織と行政」1書も必要文献。
第5回	USA PA 歴史。英文資料を読む。	英文資料を持って勉強。公共政策研究の歴史も確認。
第6回	公共政策論研究の歴史、並びにガバナンス概念に関する英文資料一つも解説	資料「アメリカ公共政策論の台頭」を講読。また英文：Reflections on governance。状況に応じて、この勉強を2回に分けて進めることも可能
第7回	日本の行政学研究と教育	中国語資料「日本行政学史」（公開資料、毛桂榮執筆）
第8回	日本の公共政策研究の歴史	「日本の公共政策研究」論文を読む。日本公共政策学会の機関誌に掲載された論文に関する分析論文、中国語論文も参照。
第9回	「公共性」概念の研究	論文「公共性」に関する論文、または、「公共政策とは何か」を読む。
第10回	decision theory 「非決定」、「権力の3つの顔」のことも勉強。	英文資料、日本語資料を講読資料事前予習
第11回	政策形成における政治家と官僚	Bureaucrats and Politicians in Western...1981の終章を読む。毛「政府と行政」も参照。
第12回	官僚制の概念	資料「官僚制への視点」今村「行政学の基礎理論」所収を読む。西尾「新版・行政学」官僚制論2章も参照。
第13回	政策リサーチ手法	東大出版「政策リサーチ入門」の文章2つ：事例研究
第14回	学生の各自発表、フィールドワーク調査の結果を踏まえて	研究発表。学生が関心する課題について分析・発表。修士論文などの検討・相談も可能。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

西尾『行政学の基礎概念』（東大出版。中国語譯もあり、それは法政大学の図書館にも所蔵ある。一部資料は配布する予定）、今村『行政学の基礎理論』（三領書房）、秋吉ほか「公共政策学の基礎」（有斐閣）、伊藤修一郎「政策リサーチ入門」（東大出版）のほか、配布する資料を必ず読むこと

【参考書】

日本公共政策学会の機関誌を読むこと

【成績評価の方法と基準】

授業での報告40%、討論60%で総合評価する

【学生の意見等からの気づき】

1、大量に読書すること。

- 2、しっかり考え、よく質問すること。
 - 3、欠席することは、絶対しないように。
- 最後まで頑張りましょう。

【学生が準備すべき機器他】

配布資料は、デジタルの形式でも渡します。その最適の方法を確認するが、量的には、電子メールは、オススメ。その他：微信、LINEも可能。相談の上、決める。

【その他の重要事項】

事前の連絡がある場合、maoguirong @の G メールです。
少人数のクラスですので、読書の負担がかなりあります。
注意：新型肺炎の流行もあり、以上の予定は、適宜変更していく。履修者と相談しながら、やっていきます。
成績は、討論、報告などを踏まえて総合判断する。

【担当教員の専門分野等】

行政学、日本行政などを研究。著書「日本の行政改革」「比較の中の日中行政」があり、また「行政の概念」、「公務員の用語と概念」の論文（中国語、日本語）などがある。最近は、中国の公務員制度などを研究中、複数論文を公表。論文のほとんどは、ネットで検索・入手可能。

【Outline and objectives】

The aim is to study the basic literatures on public policy and policy analysis. The literatures are papers and books on Japanese, Chinese and English. It is important to read the basic literatures.

SOS500P2 - 058

公共政策論文技法 1

白鳥 浩、塚崎 裕子、小磯 明

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

政策科学の先端的研究の現場に触れる。

【到達目標】

政策科学分野における学術論文の作法を習得すること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻公共マネジメントコースにおいては「DP2」「DP3」に関連している。ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻政策研究コースにおいては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、特に「DP1」は特に強く関連している。ディプロマポリシーのうち、サステイナビリティ学専攻においては「DP2」「DP3」に関連している。

【授業の進め方と方法】

博士号を取得した政策研究を行っている研究者による、先端的研究の紹介を中心として、政策科学が抱えている現代の問題をアカデミックに理解することを目指す本講義は、複数教員による分担講義として展開される。そこでは、現代の政策科学が抱える、アクチュアルな問題が提示される。学術的な価値の高い修士論文の執筆を目指す大学院生に、専門研究者レベルのスタンダードを明示することとなる。講義は対面を中心とする。講義計画は講義の展開により、若干の変更もありうる。

変更の可能性もあるが対面講義を基本とする。また、学生へのフィードバックにおいては、適宜、講義のたびに行うものとする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期前半

回	テーマ	内容
1	政策科学の最先端と政策へのアカデミックなアプローチ（白鳥）	政策科学の定義と歴史、政策と学術研究の関係
2	ケーススタディの問題関心と先行研究の分析 1(小磯)	問題提起と分析
3	理論的フレームワークとデータの収集 1(小磯)	フレームワークの提示、データへのアクセス
4	分析結果と学会内での研究上の位置 1(小磯)	分析の位置、研究の意義
5	ケーススタディの問題関心と先行研究の分析 2(塚崎)	問題提起と分析
6	理論的フレームワークとデータの収集 2(塚崎)	フレームワークの提示、データへのアクセス
7	分析結果と学会内での研究上の位置 2(塚崎)	分析の位置、研究の意義

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

講義中適宜指示

【参考書】

講義中適宜指示

【成績評価の方法と基準】

出席および毎回の講義への取り組み 30 %、レポート 70 %。レポートについては、各自の研究テーマの学術的価値を的確に表現できているかどうかを評価する。

【学生の意見等からの気づき】

論文執筆過程での具体的なトラブル・課題をより具体的に解説する。

【担当教員の専門分野等】

白鳥 浩

<専門領域>

現代政治分析（国際・国内比較）・政治理論

<研究テーマ>

1. 日本の現代政治

2. グローバリズムと国民国家の変容

3. 地方政治研究

4. 政党に関する理論

5. 現代政治のデモクラシー

<主要研究業績>白鳥浩『都市対地方の政治学』芦書房、2004年

白鳥浩『市民・選挙・国家—シュタイン・ロッキンの政治理論—』東海大学出版会、2002年

Hiroshi Shiratori, "Le mouvement référendaire au Japon après la Guerre froide. Une analyse comparative inspirée de Rokkan," Revue française de science politique, vol.51, Numero.4, 2001.

塚崎 裕子

<専門領域>労働政策、ジェンダー政策

<研究テーマ>外国人雇用、ダイバーシティと雇用、地方移住と雇用

<主要業績>

塚崎裕子 (2008)「外国人専門職・技術職の雇用問題—職業キャリアの観点から」、明石書店

塚崎裕子 (2012)「日本の職場風土と外国人高度人材のキャリア」、こころと文化・第 11 巻・第 2 号、pp.163-168

塚崎裕子 (2013)「グローバル人材の多様性—国を問わず働く人材と二国間をつなぐ人材を中心に—」、日本労務学会誌・第 14 巻・第 2 号、pp.27-51

Yuko Tsukasaki, "Impact of Spousal Violence on Employment at the Post-Leaving Stage in Japan", Violence and Victims, forthcoming

小磯 明

<専門領域>福祉社会学、社会政策、地域政策

<研究テーマ>コミュニティにおける医療と福祉形成の現代的解明、地域の産業政策の形成

<主要研究業績>

小磯明『地域と高齢者の医療福祉』御茶の水書房、2009年。

小磯明『医療機能分化と連携』御茶の水書房、2013年。

共著『サステイナブルな地域と経済の構想』御茶の水書房、2016年。

小磯明『公害病高齢者とコンビナート：倉敷市水鳥の環境再生』御茶の水書房、2020年。

論文「小規模・高齢化集落の高齢者と地域福祉—長野県泰阜村の高齢者生活調査から」『福祉社会学研究』第 8 号、2011年。

論文「地域福祉は住民のもの—協同組合・非営利組織の視点から」『日本の地域福祉』第 31 巻、2018年。

【】

小磯 明

<専門領域>福祉社会学、社会政策、地域政策

<研究テーマ>コミュニティにおける医療と福祉形成の現代的解明、地域の産業政策の形成

<主要研究業績>

小磯明『地域と高齢者の医療福祉』御茶の水書房、2009年。

小磯明『医療機能分化と連携』御茶の水書房、2013年。

共著『サステイナブルな地域と経済の構想』御茶の水書房、2016年。

小磯明『公害病高齢者とコンビナート：倉敷市水鳥の環境再生』御茶の水書房、2020年。

論文「小規模・高齢化集落の高齢者と地域福祉—長野県泰阜村の高齢者生活調査から」『福祉社会学研究』第 8 号、2011年。

論文「地域福祉は住民のもの—協同組合・非営利組織の視点から」『日本の地域福祉』第 31 巻、2018年。

【】

塚崎 裕子

<専門領域>労働政策、ジェンダー政策

<研究テーマ>外国人雇用、ダイバーシティと雇用、移動とキャリア

<主要業績>

塚崎裕子 (2008)「外国人専門職・技術職の雇用問題—職業キャリアの観点から」、明石書店

塚崎裕子 (2013)「グローバル人材の多様性—国を問わず働く人材と二国間をつなぐ人材を中心に—」、『日本労務学会誌』第 14 巻・第 2 号、pp.27-51

塚崎裕子 (2020)「キャリアによる国内人口移動の違いと世代効果」『人口問題研究』第 76 巻第 3 号、pp.375-393

Yuko Tsukasaki, "Impact of Spousal Violence on Employment at the Post-Leaving Stage in Japan", Violence and Victims, forthcoming

【Outline and objectives】

This course offers our Ph.D. holder's knowledge on tips to write a thesis. The lecture is mainly on the framework of writing academic paper.

公共政策論文技法 2

淵元初姫・杉崎和久・中筋直哉・糸久正人・岡松暁子・長谷川直哉

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

主として修士課程1年生を対象として、修士論文を執筆する上でのポイントとなる事項について、各専攻及びコースの教員による講義と修士論文執筆者の報告という形で授業を展開する。1年生は是非とも受講してほしい。

【到達目標】

修士論文を執筆する上でのポイントを理解する。
換言すれば、修士論文を書くための学習方法、修士論文の構成の考え方、文献資料探索の進め方、調査の進め方、執筆の進め方、論文指導の受け方、発表会での報告、文章の訂正について、修士論文の完成に至るまでの過程を体得することを目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻公共マネジメントコースにおいては「DP2」「DP3」に関連している。ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻政策研究コースにおいては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、特に「DP1」は特に強く関連している。ディプロマポリシーのうち、サステイナビリティ学専攻においては「DP2」「DP3」に関連している。

【授業の進め方と方法】

修士論文を書くための初歩から実践までを理解するために、教員と院生（修士号取得者）による報告によって講義を進める。原則として、教員は各専攻及びコースからそれぞれ1～2名が講義を担当する。また、修士号取得者は原則として各コースからそれぞれ2名（博士課程の在籍院生や修士課程修了者など）が担当し、修士論文の執筆に関する経験を報告する。各回とも、前半に各報告を受け、後半はその質疑とする。

第7回目の授業では各受講者によるリサーチ・プロポーザルの報告を行う。報告に対しては、授業中に参加者全員による質疑・議論を行い、講評を行うことによってフィードバックする。

授業方式は原則として対面授業とする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

春学期後半

回	テーマ	内容
1	講義の全体概要とスケジュール	講義の全体概要とスケジュールを示し、修士論文の執筆に関する標準的スケジュールについて説明する。
2	修士論文の執筆に向けて	研究テーマの選定や、先行研究の調査等について説明する。
3	教員1による修士論文執筆の経験 報告に対する討論	本学専任教員による講義 報告に対する討論
4	学位取得者1による修士論文執筆の経験	本学院生による講義 報告に対する討論
5	教員2による修士論文執筆の経験	本学専任教員による講義 報告に対する討論
6	学位取得者2による修士論文執筆の経験	本学院生による講義 報告に対する討論
7	教員3による修士論文執筆の経験	本学専任教員による講義 報告に対する討論
8	学位取得者3による修士論文執筆の経験	本学院生による講義 報告に対する討論
9	教員4による修士論文執筆の経験	本学専任教員による講義 報告に対する討論
10	学位取得者4による修士論文執筆の経験	本学院生による講義 報告に対する討論
11	教員5による修士論文執筆の経験	本学専任教員による講義 報告に対する討論
12	学位取得者5による修士論文執筆の経験	本学院生による講義 報告に対する討論
13	修士論文のプロポーザル作成に向けた準備	これまでの講義と報告に基づき、各自の研究における「問い」を明らかにし、それについて検討を加える。
14	まとめ	総括討論を行い、各自の課題を明確にする。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

特になし。必要に応じて、各教員、各修了生よりレジュメを配布する。

【参考書】

特になし。必要に応じて、授業内で紹介する。

【成績評価の方法と基準】

質疑における発言とコメント票の記入内容（50%）、期末レポート（50%）を判断して、評価する。

【学生の意見等からの気づき】

修士論文執筆に当たっての心構えに始まり、学術研究の意義や方法、論文執筆上の作法などについて、専攻やコースを超えた複数の教員や修了生から学ぶ機会となっているようです。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 比較政治学、コミュニティ政策、福祉政策

<研究テーマ> ポスト福祉国家時代の市民社会論、地域社会における社会的包摂、英国・スコットランドの地方自治・自治体内分権

<主要研究業績>

「スコットランドの地域評議会－制度の基本的構想とその機能の実際」名和田是彦編（2009）『コミュニティの自治－自治体内分権と協働の国際比較』pp.81-118、日本評論社

「スコットランドにおける権限移譲とジェンダー・クォータ」三浦まり・衛藤幹子編著（2014）『ジェンダー・クォーター世界の女性議員はなぜ増えたのか』pp.203-26、明石書店

「地域社会における社会的連帯の再編：居場所づくりにみる三人称的連帯の可能性」金安岩男・牧瀬稔編著（2019）『都市・地域政策研究の現在』pp.131-42、地域開発研究所

【Outline and objectives】

MA or PhD students in their first year are welcome to sign up to this course. Each lecture will provide students with an understanding of writing a Masters dissertation or PhD thesis. Upon completion of this course, students should be able to develop good academic practice.

LAW500P2 - 104

環境私法

永野 秀雄

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この授業では、これまで環境法を学んだことのない大学院生のために、環境私法を概説することを目的としている。この環境私法では、環境被害を受けた人々が、国や企業などに損害賠償を求めたり、その環境被害のもととなる汚染原因等を排出しないように求めたりする訴訟を扱う。具体的には、民法に規定されている不法行為という考え方が、大気汚染訴訟、水質汚濁訴訟といった様々な形の訴訟の中で、どのように機能するかを学んでいく。

【到達目標】

この授業の到達目標は、受講生の所属する組織または生活する地域が、環境にかかわる紛争に直面したときに、どのような法的なルールが適用されるのかを理解することにある。言い換えれば、受講生が、法の専門家（弁護士や企業法務部等）と協同してこのような問題に対処しえる知的枠組みを獲得することを目指している。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP4」に関連している。

【授業の進め方と方法】

まず、環境私法で最も基本となる民法に規定された「不法行為」という考え方を学ぶ。そして、この不法行為に関する理論が、環境紛争にどのように適用されるのかを概説する。

これに続いて、具体的な環境汚染原因ごとに、不法行為を中心とする法理論が適用されるのかについて解説する。大気汚染、水質汚濁、騒音・振動、日照、景観といった問題ごとに個別のルールが形成されているので、これを学んでいくことにする。

最後に、総合的な問題を扱う環境監査において、どのような法的規制が必要であり、今後どのように運営されるべきかを検討する。

また、授業は、対面授業を予定しているが、コロナウイルスの感染が拡大した場合には、リアルタイムのライブ型配信授業とする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】**秋学期前半**

回	テーマ	内容
1	不法行為の基礎（1）	①環境法とは何か、②環境紛争と環境私法
2	不法行為の基礎（2）	不法行為法とは何か
3	不法行為の基礎（3）	共同不法行為とは何か
4	不法行為の基礎（4）	複合汚染と共同不法行為
5	公害紛争処理制度等	①公害紛争処理制度、②協定による紛争解決
6	大気汚染訴訟の基礎	①共同不法行為理論の適用、②大気汚染訴訟の難しさ
7	大気汚染訴訟の展開	大気汚染訴訟の展開と現状
8	水質汚濁訴訟	水質汚濁訴訟の分析
9	悪臭訴訟、騒音・振動訴訟	①悪臭訴訟、②騒音・振動訴訟
10	日照・通風・風害訴訟	日照・通風・風害訴訟の分析
11	眺望訴訟、景観訴訟	①眺望訴訟、②景観訴訟
12	風評被害訴訟	風評被害訴訟の分析
13	嫌悪施設訴訟（1）	原子力関連の民事訴訟
14	嫌悪施設訴訟（2）	廃棄物処理場関連の民事訴訟

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

担当教員が作成した印刷物を Hoppi から配布します。

【参考書】

淡路剛久・大塚直・北村喜宣『環境法判例百選（第2版）』（有斐閣、2011年）。

【成績評価の方法と基準】

授業内での発表、議論への参加・貢献度 30%、期末レポート 70%。期末レポートは、環境私法のテーマの中から 1 つを取り上げ、法律論文等を 3 つ以上参照して、その問題に関するレポート（A4 で 10 頁程度）を作成すること。

【学生の意見等からの気づき】

今後も、わかりやすい解説に努めたいと思います。

【学生が準備すべき機器他】

プロジェクター。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 日米比較法（特に、環境法、先端技術法）
<研究テーマ> 「環境監査と法」、「サイバーセキュリティと法」
<主要研究業績>（近年のもの）

「米国防総省によるサイバーセキュリティ成熟度モデル認証（CMMC）の導入：現行の NIST SP 800-171 の遵守制度を超えて」CISTEC journal186 号 200 頁以下（2020 年 3 月）。

「米国におけるセキュリティクリアランス制度の大改革」CISTEC journal185 号 223 頁以下（2020 年 1 月）。

「米国の重要インフラに関するサイバーセキュリティとセキュリティ・クリアランス法制（上）」人間環境論集 19 巻 1 号 13 頁以下（2018 年 12 月）。

【Outline and objectives】

This course provides a basic introduction of environmental civil litigation for graduate students. The course focuses on lawsuits in which people suffering from environmental damage sued the government of Japan and companies for damages and for the injunction of the pollutions and nuisances. Specifically, students will learn how the idea of torts in the Civil Code works in various forms of litigation, such as air pollution and water pollution cases.

環境政策法務と条例

朝賀 広伸

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

環境政策法務における条例の果たすべき役割は大きく、市民の身近な生活の実態に基づいた施策によって、環境行政はよりよく発展することができます。本講義では、環境政策法務における条例の果たすべき役割を現実の条例制度を通して、環境政策と条例に係る基本的知識を学びます。

受講される学生の皆様が、環境政策法務における条例の果たす役割を理解し、条例の現状を分析し、条例制度の課題を発見し、施策の検討を行い、改善のための新たな対策の提案などができるようになることとします。

【到達目標】

本講義では、条例と法律との関係、条例規制の実効性、条例における計画の役割などについて学習し、環境政策と条例に係る基本的知識を身につけていただきます。

上記の目標を達成するために、各学生の皆様が、関心のある環境政策に係るテーマについて研究し、①課題設定、②現状分析、③対策手法の提案を授業内で報告し、双方向の議論を通して、到達度を測ります。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP4」に関連している。

【授業の進め方と方法】

・環境政策と条例に関する基礎的知識を修得するために、テキストを中心に演習形式で進めます。テーマを割り振り、簡単なレジュメを作成し、授業内で報告をしていただきます。

・授業内での双方向の議論を通して、理解を深めていきます。

・授業形式：対面授業

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

秋学期後半

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス 都道府県と条例	都道府県の位置づけと権限 地方自治体が定める条例
第2回	地球温暖化対策条例の制度と運用	温暖化防止に関する法律と条例 温暖化対策条例の全国的な動向と特徴
第3回	廃棄物条例の制度と運用（1）	廃棄物処理法と条例との関係
第4回	廃棄物条例の制度と運用（2）	都道府県の廃棄物条例の動向と全体的な特徴
第5回	自然環境保全条例の制度と運用	自然環境保全等の法制度
第6回	環境影響評価条例の制度と運用（1）	環境影響評価法の手続および条例との関係
第7回	環境影響評価条例の制度と運用（2）	都道府県等における環境影響評価条例の概要
第8回	公害防止条例の制度と運用（1）	公害防止に関する条例制度 大気汚染防止に係る規制対策
第9回	公害防止条例の制度と運用（2）	水質汚濁防止に係る規制対策
第10回	公害防止条例の制度と運用（3）	条例による水質規制の事例
第11回	公害防止条例の制度と運用（4）	土壌汚染対策に係る規制・対策
第12回	公害防止条例の制度と運用（5）	騒音防止に係る規制対策

第13回 公害防止条例の制度と運用（6） 振動防止、地盤沈下防止、悪臭防止に係る規制対策

第14回 再生可能エネルギーの導入促進と規制対策 再生可能エネルギーの普及と法制度

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

『環境条例の制度と運用』, 田中充 (法政大学教授) 著, 信山社 2015年, 2600円

【参考書】

環境法政策を理解するための書として、『コンパクト環境法政策』, 柳憲一郎 (明治大学法科大学院教授) 著, 清文社 2015年

【成績評価の方法と基準】

授業貢献度（80%）：授業時のディスカッション及びレジュメの出来具合

レポート課題（20%）：関心のある環境政策に係るテーマを選び、①課題設定、②現状分析、③対策手法の提案について研究し、授業内で報告する。

【学生の意見等からの気づき】

受講生の関心テーマに近づけた授業運営に心掛けたと考えております。

【学生が準備すべき機器他】

特になし。

【その他の重要事項】

行政法および環境法に関連が深い授業となりますが、初学者にも理解できるように努めていきたいと考えております。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

環境法

<研究テーマ>

環境法政策に係る総合研究

<主要研究業績>

・『環境法判例百選 第3版』有斐閣 2018年

・『司法試験の問題と解説』「環境法」（日本評論社 2020年・2019年・2018年・2017年

・「最新の環境アセスメント法の動向と課題」人間環境問題研究会編、有斐閣 2015年

・『新司法試験論文式問題と解説』中央大学真法会編、法学書院 2018年・2012年

・『演習ノート環境法』浅野直人・柳憲一郎編、法学書院 2010年

・「英国における土壌汚染法の概要」商事法務研究会 2009年

・「Legislation related to groundwater in the EU:

background and current status

」UNESCO2009年

・「英国のリスク管理と予防原則」季刊環境研究 No.154, 2009年

・「EU及び英国の地下水管理制度」明治大学法科大学院論集 第3号, 2008年

・『多面的環境問題論』柳憲一郎編, ぎょうせい 2006年

・『オランダ環境法』国際比較環境法センター 2004年

・『環境法辞典』有斐閣 2002年

・『京都議定書』シュプリンガーフェアラーク 2001年

【Outline and objectives】

In this lecture, we will learn about environmental policy legislation and ordinance. For example, we will acquire basic knowledge on the role of ordinance in environmental policies, the actual ordinance system, environmental policies and ordinance.

LAW500P2 - 127

国際環境法

岡松 暁子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

国際環境法は、国際環境問題の特質ゆえに、形成・発展、形態、内容、履行確保において様々な特徴がある。本講義では、個別条約や判例を題材として、国際環境諸条約に見られるそのような特徴を抽出し、検討していく。

【到達目標】

国際環境問題に関する国際法の枠組みを理解する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」に関連している。

【授業の進め方と方法】

国際環境法の理論、判例についての講義を行う。各条約については、受講者による発表と全体討論を行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】**春学期前半**

回	テーマ	内容
1	国際環境法の対象と接近方法、国際環境法の形成と展開	国際環境法へのアプローチの仕方、国際環境問題の特徴の変遷とそれに対応した国際環境法の生成について概観する。
2	国際環境法の性質、国際環境法の制度化	国際環境法の性質とそれに対応した定立形式、制度化について検討する。
3	国際環境法の手続的義務、国際環境法上の義務の履行確保	国際環境法に特徴的に見られる手続的義務と、国際環境法上の義務の履行確保制度について考察する。
4	受講者による発表と討論①	受講者の関心のある国際環境条約についての報告と、それについての全体での討論を行う。
5	受講者による発表と討論②	受講者の関心のある国際環境条約についての報告と、それについての全体での討論を行う。
6	受講者による発表と討論③	受講者の関心のある国際環境条約についての報告と、それについての全体での討論を行う。
7	日本と国際環境問題	日本に大きな影響のある国際環境問題について検討する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

岩沢雄司編『国際条約集』有斐閣。
その他、適宜講読文献を指示する。

【参考書】

繁田泰宏・佐古田彰・岡松暁子・小林友彦編『ケースブック国際環境法』東信堂、2020年。
小寺彰・森川幸一・西村弓編『国際法判例百選 [新版]』有斐閣、2011年。
その他、適宜指示する。

【成績評価の方法と基準】

発表、討論への参加、レポートにより、総合的に評価する。(100%)

【学生の意見等からの気づき】

これまでと同様の方法で進める。

【その他の重要事項】

受講者の人数により、授業の方法を変更することがある。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>国際法
<研究テーマ>国際法の履行確保、国際環境法、国際原子力法
<主要研究業績>

- ①永野秀雄・岡松暁子編著『環境と法－国際法と諸外国法制の論点－』（三和書籍、2010年）
- ②「地球温暖化をめぐる法的紛争の現状と課題」『国際政治経済学研究』第17号、2006年、19-33頁。
- ③「貿易規制による森林管理－国際法上の可能性と限界－」『人間環境論集』第6巻第1号、2005年、53-62頁。

【Outline and objectives】

This course introduces students to the theory of international environmental law. Students may learn the specific legal framework of international environmental issues and gain better understanding by reading leading cases.

外交政策論

宮本 悟

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本の戦後外交史や領土問題、外交政策理論について学んだうえで、外交政策がどのようにして決定されるのかについて理解していく。重要なことは、国際社会や日本が直面している外交問題や領土問題について知識を深め、国際政治学における外交政策論を理解した上で、現実の外交政策を考察する際に応用できるようになることである。

【到達目標】

外交政策について、(1) 日本の外交政策の歴史的な経緯と現状の説明ができ、(2) 日本が置かれている領土や外交上の問題とその対処について理解を深め、(3) 実際の外交政策の決定過程について学んだうえで、その理論的な知識を実際の問題に応用できる能力を身につけることを目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻公共マネジメントコースにおいては「DP1」「DP3」に関連している。ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻政策研究コースにおいては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、特に「DP4」は特に強く関連している。ディプロマポリシーのうち、サステイナビリティ学専攻においては「DP2」「DP4」に関連している。

【授業の進め方と方法】

2021年度は対面で実施する予定である。戦後日本外交史と日本の領土については、全体的に理解していくことが目的であり、基本的には講義形式によって授業を進めていくが、教員側の一方的な講義ではなく、受講者と対話をしながら授業を進めることを重視する。質問があれば、講義の途中でも遠慮なく質問してかまわないし、教員側からも積極的に受講者に問いかける。

対外政策の選択については、受講者側の発表について教師も含めて討議しながら、理解を深めていく。従って、授業が充実したものになるかは、受講者側の積極的な参加にかかっている。受講者の発表に対するフィードバックは、その都度、授業内でコメントすることにする。重要なことは、領土や安全保障上の問題に対して、外交政策が必ずしも合理的に決定されるわけではないことを理解し、実際の外交政策を理解するための応用力をつけることである。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし/No

【授業計画】

春学期後半

回	テーマ	内容
第1回	戦後日本外交史(1)	戦後日本外交史のあらましと占領期における日本とGHQの交渉について学ぶ。テキスト:五百旗頭真編『戦後日本外交史』第三版補訂版。
第2回	戦後日本外交史(2)	戦後日本外交史について50年代を学ぶ。テキスト:五百旗頭真編『戦後日本外交史』第三版補訂版。
第3回	戦後日本外交史(3)	戦後日本外交史について60年代を学ぶ。テキスト:五百旗頭真編『戦後日本外交史』第三版補訂版。
第4回	戦後日本外交史(4)	戦後日本外交史について70年代を学ぶ。テキスト:五百旗頭真編『戦後日本外交史』第三版補訂版。
第5回	戦後日本外交史(5)	戦後日本外交史について80年代を学ぶ。テキスト:五百旗頭真編『戦後日本外交史』第三版補訂版。

第6回	戦後日本外交史(6)	戦後日本外交史について冷戦後を学ぶ。テキスト:五百旗頭真編『戦後日本外交史』第三版補訂版。
第7回	戦後日本外交史(7)	戦後日本外交史について全体像を議論する。テキスト:五百旗頭真編『戦後日本外交史』第三版補訂版。
第8回	日本の領土(1)	領土の概念や北方領土問題についての歴史的経緯やその問題点を探る。テキスト:芹田健太郎『日本の領土』。
第9回	日本の領土(2)	竹島問題と尖閣諸島問題についての歴史的経緯やその問題点を探る。テキスト:芹田健太郎『日本の領土』。
第10回	対外政策の選択(1)	外交とは何かを学ぶ。テキスト:中西寛、石田淳、田所昌幸『国際政治学』。
第11回	対外政策の選択(2)	国内政治と対外政策の連関について学ぶ。テキスト:中西寛、石田淳、田所昌幸『国際政治学』。
第12回	対外政策の選択(3)	ゲーム理論で国家間の戦略的依存関係について学ぶ。テキスト:中西寛、石田淳、田所昌幸『国際政治学』。
第13回	対外政策の選択(4)	国際情勢についての認識と行動から戦争が勃発する原因について学ぶ。テキスト:中西寛、石田淳、田所昌幸『国際政治学』。
第14回	対外政策の選択(5)	ゲーム理論で国家間の戦略的依存関係について学ぶ。テキスト:中西寛、石田淳、田所昌幸『国際政治学』。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

『戦後日本外交史』第三版補訂版、五百旗頭真編、有斐閣、2014年、2,200円

『日本の領土』芹田健太郎、中央公論新社、2010年、755円。ただし、授業で使用するのは一部分なので、その部分は最初の授業で配布する。

『国際政治学』中西寛、石田淳、田所昌幸、有斐閣、2013年、3,520円。ただし、授業で使用するのは一部分なので、その部分は最初の授業で配布する。

【参考書】

『新訂第5版 安全保障学入門』防衛大学校安全保障学研究会編、株式会社亜紀書房。

『決定の本質—キューバ・ミサイル危機の分析』グレアム T. アリソン(著)、宮里 政玄(訳)、中央公論新社、1977年。絶版。

【成績評価の方法と基準】

70%：平常点と、授業における発言内容の充実度

30%：発表：「対外政策の選択」に関して、自分の研究にどのように応用できるのか最後の授業で一人一人発表してもらう。

【学生の意見等からの気づき】

過度な学生の負担はない授業内容にしています。受講者の発表は短い時間でかまいません。

勤務後に授業に来られる方がおられたら、時間を考慮しますので、申し出てください。

【学生が準備すべき機器他】

対面授業では授業支援システムは使いません。オンライン授業ではZOOMを使います。

【その他の重要事項】

大学院の方針によって全てオンライン授業になる可能性があります。対面授業でも第8回の講義ではパワーポイントを使って説明します。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>国際政治学、比較政治学、政軍関係論、安全保障論
<研究テーマ>東アジアの安全保障、経済制裁、北朝鮮研究
<主要研究業績>

"North Korea's Foreign Policy: A Non-isolated Country with Expanding Relations" Takashi Inoguchi ed., The SAGE Handbook of Asian Foreign Policy, Dec. 2019, Sage Publishing.

「北朝鮮流の戦争方法-軍事思想と軍事力、テロ方針」川上高司編『「新しい戦争」とは何か-方法と戦略-』2016年1月、ミネルヴァ書房。
「北朝鮮の軍事・国防政策」木宮正史編『朝鮮半島と東アジア』2015年6月、岩波書店。

『北朝鮮ではなぜ軍事クーデターが起きないのか？ 政軍関係論で読み解く軍隊統制と対外軍事支援』2013年10月、潮書房光人社。

【Outline and objectives】

The objectives of the class is to understand how foreign policy is decided, while leaning Japanese postwar diplomatic history, territorial issues and foreign policy theory. The important point is the applying foreign policy theory in considering real foreign policy, while deepening the knowledge of the territorial issues and diplomatic issues facing Japan and international society, understanding the foreign policy theory in international politics.

環境ガバナンスⅡ

横内 恵

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

環境法制度の内容を学び、その形成過程や運用実態における課題について議論する。

【到達目標】

本講義は、いくつかの環境法制度の内容を理解し、それを踏まえて、それらの制度の形成過程や運用実態における課題について議論することを通して、環境ガバナンスについての理解を深めることを到達目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP4」に関連している。

【授業の進め方と方法】

対面授業を実施する予定である。担当教員からの解説も行うが、本格的には演習形式で、受講者による報告や出席者間の議論を求める。本講義でとり上げる環境法制度は、受講生の希望に応じて決定する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期後半

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	スライドやレジュメに沿って解説する。
第2回	イントロダクション	スライドやレジュメに沿って解説する。
第3回	環境ガバナンス概論(1)	スライドやレジュメに沿って解説する。
第4回	環境ガバナンス概論(2)	スライドやレジュメに沿って解説する。
第5回	報告とディスカッション	報告担当者による報告と、それに関するテーマでのディスカッションを行う。
第6回	報告とディスカッション	報告担当者による報告と、それに関するテーマでのディスカッションを行う。
第7回	報告とディスカッション	報告担当者による報告と、それに関するテーマでのディスカッションを行う。
第8回	報告とディスカッション	報告担当者による報告と、それに関するテーマでのディスカッションを行う。
第9回	報告とディスカッション	報告担当者による報告と、それに関するテーマでのディスカッションを行う。
第10回	報告とディスカッション	報告担当者による報告と、それに関するテーマでのディスカッションを行う。
第11回	報告とディスカッション	報告担当者による報告と、それに関するテーマでのディスカッションを行う。
第12回	報告とディスカッション	報告担当者による報告と、それに関するテーマでのディスカッションを行う。
第13回	まとめ	授業中に学期末レポート課題を実施する。
第14回	まとめ	小レポート課題の確認を含め、これまでの授業内容の総まとめをする。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

準備学習として、毎回の報告テーマに関して、教科書の該当ページを読む。復習として、報告レジュメやスライドを読み直す。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間が標準である。各受講者に計1回または2回の報告を求める予定である。

【テキスト（教科書）】

必要に応じて講義中に指示する。

【参考書】

必要に応じて講義中に指示する。

【成績評価の方法と基準】

授業中の報告 55%、平常点 30%、学期末レポート課題 15%

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【その他の重要事項】

履修に際しては、学習支援システムに掲載する「お知らせ」やオリエンテーション資料をよく読んでください。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

環境法、公法（憲法・行政法）

<研究テーマ>

環境リスクの法的制御、廃棄物処理法制

<主要研究業績>

①「順応型リスク制御と比例性：ドイツ遺伝子技術法の閉鎖系規律手続を題材として」大塚直編『環境法研究』7号（信山社、2017年）13-45頁。

②「廃棄物処理法に基づく生活環境影響調査の対象地域に関する一考察 — 高城町事件と東海村事件を事例として」大阪経大論集 67巻3号（2016年）113-134頁。

③「科学的不確実性を伴う環境リスクに対する法的制御の可能性と限界」OUFCブックレット8号「中国の食・健康・環境の現状から導く東アジアの未来」（2016年）62-74頁。

【Outline and objectives】

The programme gives special knowledge and skills within several environmental fields.

SOC500P2 - 101

環境社会論

船戸 修一

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

国内の様々な具体例を通じて過疎地域や農山村地域の構造を把握し、「環境」と「地域社会」の持続性（サステナビリティ）を担保するための社会的な仕組みや制度のあり方について学ぶ。

【到達目標】

公害と地域社会・地域資源の管理・公共事業と地域社会・有機農業の地域的展開・自然資源と観光・地域社会と野生動物などの具体例を学ぶことによって「環境」と「地域社会」の持続性（サステナビリティ）を担保にするための方策を構想する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP4」に関連している。

【授業の進め方と方法】

本講義では単元ごとに映像を事前に視聴し、その内容理解のためのリアクションペーパーを課す。また単元ごとに論文を事前に読了したうえで、それぞれの論点について討論する。最終的には「環境」と「地域社会」の持続性に関するレポートの提出を課す。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

なし/No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

春学期前半

回	テーマ	内容
第1回	「環境」と「地域社会」	「環境」と「地域社会」の持続性の持続性を考える視点を考えるための論点を提示する。
第2回	公害（水俣病）と地域社会	水俣病がもたらした地域社会の分断ならびにその対応について考える。
第3回	ヒ素公害と地域社会	ヒ素公害がもたらした地域社会の分断ならびにその対応について考える。
第4回	公共事業（ダム建設）と地域社会	ダム建設による地域社会の変容について考える。
第5回	公共事業（原子力発電所）と地域社会	原子力発電所がもたらした地域社会の分断ならびにその対応について考える。
第6回	公共事業（原子燃料サイクル施設）と地域社会	原子燃料サイクルがもたらした地域社会の分断ならびにその対応について考える。
第7回	農山村にみる地域資源の利用と管理	地域資源をコモンズとして持続的に利用してきた仕組みと今後の環境ガバナンスのあり方について考える。
第8回	有機農業と地域社会	無農薬による農業を推進するにあたって地域社会で生じる分断とその対応について考える。
第9回	グリーン・ツーリズムと地域社会	都市農村交流事業によって地域社会で生じる問題とその対応について考える。
第10回	観光（世界遺産）と地域社会	世界遺産によって生じる地域社会の問題とその対応について考える。
第11回	野生動物と地域社会	地域住民の野生動物への関係性から獣害とその対応について考える。
第12回	縮小社会と田園回帰	人口減少や高齢化を抱える地域社会の問題とその対応について考える。

第13回 限界集落と関係人口 限界集落についての誤解を理解したうえでその対応を考える。

第14回 まとめ これまでの内容を復習する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

それぞれの単元に関わる映像・文献（論文や書籍）の予習ならびに復習を授業時間外でしておいていただきたい。なお本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

授業時に随時指定する。

【参考書】

授業時に随時紹介する。

【成績評価の方法と基準】

授業後のリアクションペーパーを40%、期末レポートを60%として評価する。

【学生の意見等からの気づき】

2021年度より開講する講義のため、なし。

【学生が準備すべき機器他】

資料配付・課題提出等のため学習支援システムの利用環境を整えておいていただきたい。

【その他の重要事項】

授業で取りあげる文献や映像は事前に紹介する。それを読了あるいは視聴したうえで授業に参加していただきたい。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

地域（農村）社会学 環境社会学

<研究テーマ>

地域資源（農業用水路や棚田など）の持続性（サステナビリティ）に関する研究、人口減少・高齢化を抱える限界集落の実態とその持続性に関する社会学的研究、メディアにおける農業・農山村のイメージ生産と消費に関する研究

<主要研究業績>

『環境と社会』（編著、人文書院、2012年）

『環境社会学事典』（共著、丸善出版、2022年出版予定）

『農の6次産業化と地域振興』（共著、春風社、2015年）

『食と農のコミュニティ：地域活性化の戦略』（共著、創元社、2014年）

『キーワード地域社会学』（共著、ハーベスト社、2011年）

『用水のあるまち：東京都日野市・水の郷づくりのゆくえ』（共著、法政大学出版局、2010年）

【Outline and objectives】

Through various concrete examples in Japan, we will grasp the structure of depopulated areas and agricultural and mountain village areas, and learn about the ideal social mechanism and system to ensure the sustainability of the environment and local communities.

地域環境文化研究

竹本 研史

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日仏地域文化研究

フランス語圏と日本の地域文化について、具体的に、フランスでは、ブルターニュ、コルシカ、アンティル諸島などのマイノリティ文化と権利運動を、日本では、金沢・能登地方における文化の継承と未来のあり方と、長崎における記憶の継承のあり方を学ぶものである。

【到達目標】

海外と日本における「地域文化」について、その地域特有の歴史的、社会的文脈の負荷がいかに文化にかかっているか、そしてその地域住民がどのように自らの文化を評価しているか、その内実を把握できるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP3」に関連している。

【授業の進め方と方法】

毎回の前半は授業担当者による講義、後半はそれに基づきディスカッションを行う。

最終回は、各人の研究テーマと本講義のテーマを組み合わせで発表してもらう予定である。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

春学期後半

回	テーマ	内容
第1回	・イントロダクション	・授業の進め方
第2回	金沢	文化の継承と未来—「創造都市」金沢の文化行政と市民参加
第3回	能登地方	伝統と暮らし—自然を活かした産業と文化
第4回	長崎	記憶の継承とまちづくりのあり方
第5回	ブルターニュとコルシカ	マイノリティ言語・文化と権利運動
第6回	アンティル諸島	反植民地主義とクレオール文化
第7回	受講生の研究発表	本授業のテーマについて、受講者が各自具体的事例を採り、発表、議論

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

毎回の講義で紹介される資料等を使用して必ず予習・復習をすること。授業で扱う文献は熟読のうえ、疑問点を整理し、専門用語などは事前に調べておくこと。

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

必要に応じてプリントを配布。

【参考書】

まずは、下記の本を手にとっていただきたいが、個別テーマについては教場にて指示する。

小島聡・西城戸誠・辻英史編『フィールドから考える地域環境——持続可能な地域環境をめざして [第2版]』、ミネルヴァ書房、2021年。

【成績評価の方法と基準】

平常点 50%、研究発表 20%、レポート 30%

【学生の意見等からの気づき】

新規担当のためなし

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉：社会哲学・思想史、フランス語圏文学、フランス地域文化研究
〈研究テーマ〉：ジャン＝ポール・サルトル研究、個人の集団統合の問題と特異性概念の系譜について

〈主要研究業績〉

・竹本研史「個人の実践と全体化の論理——ジャン＝ポール・サルトルにおける特異性の位相」、東京大学大学院総合文化研究科博士号学位請求論文、2019年。

・澤田直編『サルトル読本』、法政大学出版局、2015年（共著）。

・小島聡・西城戸誠・辻英史編『フィールドから考える地域環境——持続可能な地域環境をめざして [第2版]』、ミネルヴァ書房、2021年（共著）。

【Outline and objectives】

Theme : Area Studies in France and Japan

We consider the following issues on the basis of the Minority Culture, of the Inheritance and future of the Regional Culture and of the Inheritance of the Memory.

MAN500P2 - 102

環境経営論

金藤 正直

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本講義では、経営学および会計学の視点から、企業や地域における環境経営やサステナビリティ経営の仕組みを明らかにしつつ、その仕組みと国内外における先進的な企業の取組事例も考慮に入れながら、将来企業や地域において、有効かつ効率的に実施すべき環境経営やサステナビリティ経営の方法を理論的に検討していくことを目的とする。

【到達目標】

本講義では、国内外で刊行されたマルチステークホルダーの視点からの環境経営またはサステナビリティ経営に関する文献（理論研究の論文）を多面的に分析・検討し、その結果を論理的に整理し、報告していくための能力を習得することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP4」に関連している。

【授業の進め方と方法】

本講義は対面で行われる。第1回は、環境経営やサステナビリティ経営に関する研究論文とそれに関する著書や報告書を紹介しつつ、講義内で履修者に分析し、検討してもらう内容やポイントについて講義を行う。第2回以降、履修者には、研究テーマに関係する、あるいは関心のある研究論文を1つ選択してもらい、その内容を企業や地域の取組事例や関連研究などを加味しながら多面的に分析・検討し、その結果を報告してもらう。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	講義全体の流れとその内容、講義で使用する文献の紹介、その文献を分析・検討していくための方法やポイントを説明する。
第2回	環境・社会問題に対応する組織①	環境・社会問題に対応する組織のあり方に触れた論文（例えば、ブラハワードの論文）の内容を考察し、報告する。
第3回	環境・社会問題に対応する組織②	第2回で出された質問などへの回答を、関連する論文や、企業または地域の取組事例などを参考にしながら検討し、報告する。
第4回	環境・社会問題解決のための経営戦略①	企業が環境重視から持続可能性に展開していくために検討し、策定すべき経営戦略に関する研究論文（例えば、ハートやアンルーの論文）の内容を考察し、報告する。
第5回	環境・社会問題解決のための経営戦略②	第4回で出された質問などへの回答を、関連する論文や、企業または地域の取組事例などを参考にしながら検討し、報告する。
第6回	環境・社会問題解決のための新たな経営戦略①	企業が経済的価値と環境・社会的価値を同時実現していくための新たな経営戦略に関する研究論文（例えば、クリステンセンやポーター＝クラマーの論文）の内容を考察し、報告する。
第7回	環境・社会問題解決のための新たな経営戦略②	第6回で出された質問などへの回答を、関連する論文や、企業または地域の取組事例などを参考にしながら検討し、報告する。
第8回	経営戦略を実現するための組織編成・マネジメント①	第2回から第7回で取り上げられた経営戦略を実現していくための組織編成・マネジメント（コレクティブ・インパクトやコラボレーション）に関する研究論文（例えば、カンア＝クラマー、アドラー、リーの論文）の内容を整理し、報告する。
第9回	経営戦略を実現するための組織編成・マネジメント②	第8回で出された質問などへの回答を、関連する論文や、企業または地域の取組事例などを参考にしながら検討し、報告する。
第10回	経営戦略を実現するための組織編成・マネジメントの先進事例①	第8回と第9回で取り上げられた組織編成・マネジメントに関するガイドや先進事例（例えば、国連グローバルコンパクトやバタゴニアの取組）の内容を整理し、その結果を報告する。

第11回 経営戦略を実現するための組織編成・マネジメントの先進事例②

第12回 戦略策定や組織編成・マネジメントを支援する会計システム①

第13回 戦略策定や組織編成・マネジメントを支援する会計システム②

第14回 講義のまとめ

第10回で出された質問などへの回答を、関連する論文や、企業または地域における取組事例を参考にしながら検討し、報告する。
組織（第2回、第3回）の戦略策定（第4回～第7回）と組織編成・マネジメント（第8回～第11回）を支援する会計システムに関する論文（例えば、キャプラン、エクセル、セラフェイムの論文）の内容を整理し、報告する。
第12回で出された質問などへの回答を、関連する論文や、企業または地域における取組事例を参考にしながら検討し、報告する。
第13回までの検討内容を整理しつつ、その内容をもとに新たな方法論も検討する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

講義内容の理解および文献の分析・検討にあたっては、少なくとも次の3点について行ってください。

- ・経営学および会計学の基礎的知識を事前に学習し、身につけること
 - ・毎回の講義内容を復習すること
 - ・本講義に関連する新聞・雑誌記事やホームページなどの内容をチェックすること
- 本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

- ・講義では、テキストは使用せず、テーマごとに配布した資料を使用します。
- ・報告では、各自に配布した資料を整理したレジュメの作成および配布をお願いします。

【参考書】

講義中に著書・論文・雑誌・URLなどをいくつか紹介しますが、講義外に自主学習を行う方のために次の著書をあげておきます。

【環境経営/サステナビリティ経営】

- ・足立英一郎（2009）『環境経営入門』日本経済新聞出版社。
- ・蟹江憲史（2020）『SDGs（持続可能な開発目標）』中央公論新社。
- ・谷本寛治（2020）『企業と社会 サステナビリティ時代の経営学』中央経済社。

【URL】

- ・「CSR 図書館.net」〈<http://csr-toshokan.net/>〉。

【成績評価の方法と基準】

本講義の成績は次の4点に基づいて評価します。

- ・報告用配布レジュメの内容（20%）
- ・報告内容（プレゼンテーション能力）（30%）
- ・討論への参加（発言内容）（30%）
- ・レポートの内容（報告内容に基づくレポート）（20%）

【学生の意見等からの気づき】

毎年、意見や要望を考慮に入れ、講義内容を改善しています。

【学生が準備すべき機器他】

必要に応じてパソコンとプロジェクターを使用します。

【その他の重要事項】

- ・講義はワードあるいはパワーポイントを用いて進めていきますので、報告およびそのレジュメもワードか、パワーポイントを使用してください。
- ・質問などについては電子メールで連絡ください。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

環境経営論、地域経営論

<研究テーマ>

企業や地域の持続的成長を実現するための経営・会計手法に関する研究

<主要研究業績>

- ・金藤正直（2014）「地域サプライチェーンとしての産業クラスターのマネジメントーサプライチェーン・マネジメントの適用ー」二神恭一・高山貢・高橋賢 編著『地域再生のための経営と会計』中央経済社、41-52頁。
- ・金藤正直（2015）「食料産業クラスターマネジメントを支援するバランス・スコアカードの構想」『産業経理』Vol.75 No.1、53-63頁。
- ・金藤正直（2016）「サステナビリティ・サプライチェーン・マネジメントの実践的展開モデル」『横浜経営研究』第37巻第2号、55-72頁。
- ・金藤正直（2018）「フードバレーの戦略的マネジメントを支援するバランス・スコアカードの適用可能性ーフードバレーとからの取組を中心としてー」『経済学論叢』第58巻第2号、65-84頁。
- ・金藤正直（2021）「健康経営の展望-どう評価・開示するか? -」『企業会計』Vol.73 No.2、87-90頁。

【Outline and objectives】

The purpose of this lecture is to learn the management method for solving environmental and social issues in companies and regions.

サステナビリティ・レポートニング

八木 裕之

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

企業のサステナビリティ情報は、さまざまな方法によって開示されています。サステナビリティ・レポートニングでは、企業によるサステナビリティ情報の開示方法、内示内容、実践について学び、開示されたサステナビリティ情報の利用方法について考えます。

【到達目標】

企業のサステナビリティ情報を開示する方法とサステナビリティ開示情報を経営的視点から分析する能力を獲得します。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP4」に関連している。

【授業の進め方と方法】

サステナビリティ社会における企業経営のためには、企業活動のサステナビリティに関わる戦略を経営戦略に組み込み、その状況をステークホルダーに情報開示し、ステークホルダーとのエンゲージメントを図っていくことが必要不可欠です。本講義では、世界的に大きな変動期にある企業のサステナビリティ・レポートニングについて解説すると同時に、今後のサステナビリティマネジメント、サステナビリティレポートニング、サステナビリティ情報を使った ESG 投資のあり方などについて議論します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
1	サステナビリティ・レポートニングの系譜	講義の進め方とサステナビリティ・レポートニングの歴史的発展の経緯を解説する。
2	サステナビリティ・レポートニングの発展	サステナビリティ社会におけるレポートニングの役割について考える。
3	環境マネジメントとレポートニング	環境マネジメントの仕組みとレポートニングについてガイドラインなどにしながら考える。
4	サステナビリティ・マネジメントとレポートニング	サステナビリティ・マネジメントの仕組みとレポートニングについてガイドラインなどにしながら考える。
5	サステナビリティ・レポートニングと ESG 投資	サステナビリティ情報の利用について ESG 投資を中心に考える。
6	SDGs と企業戦略	企業のサステナビリティ戦略と SDGs の関係について解説する。
7	環境戦略と環境会計	環境会計情報のレポートニングについてガイドラインを中心に考える。
8	サステナビリティ・レポートニングと財務報告	財務報告におけるサステナビリティ情報について国際的な動向を解説する。
9	サステナビリティ・レポートニングと土壌汚染	土壌汚染に関する法体系と情報開示の状況を解説する。
10	サステナビリティ・レポートニングと気候変動	気候変動に関する経営戦略と情報開示の状況を解説する。
11	サステナビリティ・レポートニングと統合報告	統合報告におけるサステナビリティ情報について考える。
12	サステナビリティ・レポートニングと自然資本	サステナビリティ・レポートニングにおける自然資本情報について考える。
13	自治体サステナビリティ・レポートニング	自治体のためのサステナビリティ・レポートニングの仕組みと機能について考える。
14	サステナビリティ・レポートニング分析プレゼン	履修者が行ったサステナビリティ・レポートニング分析の結果を発表し、ディスカッションする。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

サステナビリティ・レポート、環境レポート、統合報告などに基づく企業活動のサステナビリティに関する情報の分析を準備学習および宿題として行います。本授業の準備学習・復習時間は各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

テキストは特に使用しません。読む必要がある文献は講義時に適宜指示します。

【参考書】

八木他『サステナビリティ社会のための会計 生態会計入門』森山書店、2013 年
 環境省『環境報告ガイドライン 2018 年版』環境省、2018 年
 環境省『環境会計ガイドライン 2005 年版』環境省、2005 年
 TCFD, Recommendations of the Task Force on Climate-related Financial Disclosures, TCFD, 2017

IIRC, The International Integrated Reporting Framework, IIRC, 2013
 GRI, The G4 Sustainability Reporting Guidelines, GRI, 2013

【成績評価の方法と基準】

プレゼン（30%）・ディスカッション（40%）・レポート（30%）に基づいて評価します。講義回数の 3 分の 2 以上の出席が必要です。

【学生の意見等からの気づき】

講義の教材、ケーススタディの対象企業などについては、できるだけ履修者の要望に応えますので、積極的に発言してください。

【学生が準備すべき機器他】

特にありません。

【その他の重要事項】

特にありません。

【担当教員の専門分野等】

サステナビリティ会計、サステナビリティ情報開示、環境会計、カーボン会計、自然資本会計、バイオマス環境会計

【サステナビリティ会計】

八木裕之「非財務情報と統合報告」『会計』199 巻第 1 号、森山書店、2021 年
 八木裕之「環境戦略と自然資本会計」『会計』196 巻 4 号、森山書店、2019 年
 八木裕之「気候変動情報開示とカーボン会計」『会計』194 巻 4 号、森山書店、2018 年

【Outline and objectives】

Basic theory and practices of sustainability reporting and utilization of sustainability information.

環境経済論

杉野 誠

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

経済発展に伴い、環境問題が多様化・深刻化している。本授業では、経済学の枠組みを用いて環境問題を捉え、どのような政策が必要であるかを理論的に考える。本授業では、以下の2つを最終目的とする。
① 環境問題の「本質」を理解し、様々な環境問題に経済学を応用できるようにする。②日本の環境政策・制度およびそれらの問題点を理解し、必要とされる政策について理解を深める。なお、環境経済学を学ぶうえでミクロ経済学の基礎的な知識が必要となる。本授業では、関連するミクロ経済学を適宜説明しながら講義を行う。

【到達目標】

経済学の基礎知識と環境問題に対する理解を深めることができる。また、環境問題を解決するために必要な政策の思考力を得ることができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」に関連している。

【授業の進め方と方法】

対面での講義形式を基本とする授業を行います。毎回、講義と関連する課題（小テスト）を実施します。課題（小テスト）の解説を次の授業の冒頭に行います。また、コメントや質問に対する回答も授業の冒頭に行います。

なお、一部の授業ではゲームを行い、学んだ理論と現実の差を体感します。

また、グループディスカッションを通じて、政策の方向性などを議論します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

春学期前半

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス・環境経済学とは ミクロ経済学①（市場とは）	環境経済学を学ぶ際に必要最低限の経済学的知識を解説します。需要曲線と供給曲線の意味および、市場の機能を解説します。
第2回	ミクロ経済学②（余剰分析） ミクロ経済学③（市場の効率性）	消費者余剰、生産者余剰、社会的総余剰について解説します。市場の効率性・万能性について解説します。
第3回	公共財とは 外部性（様々な費用）	公共財の定義およびどのような問題があるのかを解説します。平均費用、平均可変費用、限界費用など費用の概念を解説します。
第4回	外部経済（余剰分析） 外部不経済（余剰分析）	正の外部性について解説し、市場にどのような影響をもたらすかを解説します。負の外部性について解説し、市場にどのような影響をもたらすかを解説します。
第5回	外部不経済の内外部化	外部不経済が存在する場合、社会的に望ましい状態は何かを解説します。
第6回	コースの定理	当事者間の交渉によって環境問題が解決することができることを解説します。

第7回	政策による環境問題の解決 効率的な削減（ビッグ税と排出量取引）	どのような環境政策が有効かを解説する。また、それぞれの政策の利点・欠点について議論する。
第8回	ゲーム①：排出量取引制度を理解する ゲーム②：排出量取引制度におけるプレーヤーを理解する	ゲームを通じて排出量取引制度の基本的な制度設計について学ぶ。
第9回	ゲーム③：排出量取引制度における費用軽減措置を理解する ゲーム④：排出量取引制度のまとめ	ゲームを通じて排出量取引制度の導入がもたらす様々な問題に対処する応用的な制度設計について学ぶ。
第10回	地球温暖化①：問題の所在 地球温暖化②：京都議定書	温暖化政策の基礎的な知識を解説する。また、京都議定書第1約束期間までの状況を解説する。
第11回	地球温暖化③：ポスト京都 地球温暖化④：各国の対策および事前評価	ポスト京都議定書（パリ協定まで）について解説し、各国の気候変動政策および事前評価について解説する。
第12回	廃棄物問題①：ごみ処理有料化政策 廃棄物問題②：自治体の取り組み	ごみ処理有料化政策が何故必要なのか、何を意図しているのかを解説する。また、自治体の取り組みと理論を比較する。
第13回	放射性廃棄物問題①：低レベル放射性廃棄物 放射性廃棄物問題②：高レベル放射性廃棄物	放射性廃棄物の最終処分問題について米国の取り組みを紹介しながら解説する。また、日本に必要な方策を考える。
第14回	大気汚染①：固定排出源の規制 大気汚染②：移動排出源の規制	日本における大気汚染対策を紹介し、今後の方策について考える。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とします。指定したテキストおよび参考書の該当する箇所を事前に読み、授業の準備を行ってください。また、課題を行い、内容の理解度を深めてください。

【テキスト（教科書）】

『入門 環境経済学－環境問題解決へのアプローチ』, 日引聡・有村俊秀, 中央公論新社 (2002)

【参考書】

Richard Porter The Economics of Waste, Routledge, 2002.

【成績評価の方法と基準】

小テストおよび最終課題を総合的に評価します。具体的には、小テスト 45%、最終課題 55%の合計 100%点満点とし、60点以上が合格となります。

【学生の意見等からの気づき】

本年度授業担当者変更によりフィードバックできません。

【学生が準備すべき機器他】

電子ファイル（講義資料や追加資料など）を配布いたします。パソコン（タブレット）などをインターネットに接続できるようにしてください。

【その他の重要事項】

非常勤のため、メールでの問い合わせ（makoto.sug@gmail.com）を行っている。質問などがあった場合、連絡ください。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>環境経済学、応用ミクロ経済学
<研究テーマ>環境経済学
<主要研究業績> Makoto Sugino, Toshi H. Arimura, Richard Morgenstern "The Effects of Alternative Carbon Mitigation Policies on Japanese Industries", Energy Policy, 62 1254-1267, 2013 年

【Outline and objectives】

Economic growth has increased the burden of environmental impacts in various dimensions. In this course, we will apply microeconomic theory to environmental issues and consider what kind of policy/regulations are needed to address these issues. This course has two objectives; 1) understand the “nature” of environmental issues and apply economics to counter these issues and 2) understand Japanese environmental policies/regulations and consider further, what kind of actions are needed. This course will also discuss microeconomic theory because it is essential in understanding environmental economics.

MAN500P2 - 122

サステナブル経営論

長谷川 直哉

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この授業は、「サステナビリティ経営と企業責任」と「企業家に学ぶ ESG 経営」の二つのテーマを隔年ごとに講義します。2021 年度は「企業家に学ぶ ESG 経営」を取り上げます。明治期～現代に至る日本企業の経営者が、企業と社会の関係をどのように捉えて経営を展開してきたのかを SDGs や ESG の視点から再評価し、現代企業に求められるサステナビリティ経営のあり方について検討します。

【到達目標】

SDG に関する基本的な知識を習得したうえで、現代企業のサステナビリティ経営や脱炭素経営の実態を正しく評価する能力を涵養します。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻「CSR 論」においては公共マネジメントコースの「DP3」に関連している。ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻政策研究コースにおいては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、特に「DP3」は特に強く関連している。ディプロマポリシーのうち、サステナビリティ学専攻「サステナブル経営論」においては「DP1」「DP4」に関連している。

【授業の進め方と方法】

以下のテーマを中心に、教員による講義と受講者による報告等とを交えながら行います。

- (1) 企業活動のケーススタディ
- (2) 経営思想・経営理念の背景と変遷
- (3) 企業観と企業統治のあり方
- (4) ステークホルダーコミュニケーション
- (5) 非財務的要素と企業価値

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期前半

回	テーマ	内容
第 1 回	伊庭貞剛 [住友財閥]	「自利利他公私一如」の事業精神
第 2 回	鈴木馬左也 [住友財閥]	「以德招利」の経営
第 3 回	岡田良一郎 [大日本報徳社]	「財本徳末主義」の経営
第 4 回	金原明善 [金原治山治水財団]	「ソーシャルビジネス」の先駆者
第 5 回	ウィリアム・メレル・ヴォーリズ [近江兄弟社]	「スチュワードシップ」に基づく経営
第 6 回	高峰謙吉 [三共]	「研究とビジネス」の両利き経営
第 7 回	豊田佐吉 [豊田式織機]	「ニンベンのついた自動化」の実現
第 8 回	鈴木道雄 [鈴木式織機]	社会の変化を掴む「経営構想力」
第 9 回	石橋正二郎 [ブリヂストン]	「理想」を目指して「独創」の道を進む経営
第 10 回	大原孫三郎 [倉敷紡績・クラレ]	「労働理想主義」の実践
第 11 回	波多野鶴吉 [グンゼ]	「人財マネジメント」を通じた価値創造
第 12 回	矢野恒太 [第一生命]	「相互主義」による生命保険事業の確立
第 13 回	各務鎌吉 [東京海上]	「リスクマネジメント」を通じた社会課題の解決
第 14 回	平生鈺三郎 [東京海上・甲南学園]	「共働互助の精神」による経営と教育の実践

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

指定した教科書・参考書や当該企業が発行する非財務報告書を参照しながら、この授業で取り上げた企業家の理念やビジョンが、現代の経営にどのように活かされているのかについて自己学習を深めて下さい。詳細については、初回授業において説明します。本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

レジュメを毎回配布します。

【参考書】

Naoya.HASEGAWA (2020) "Sustainable Management of Japanese Entrepreneurs in Pre-War Period from the Perspective of SDGs and ESG"(English Edition),Palgrave Macmillan

長谷川直哉著『SDGs で読み解く責任経営の系譜－時代を超えた企業家の使命』文真堂、2021 年

長谷川直哉編著『企業家活動に学ぶ ESG 経営』文真堂、2019 年

長谷川直哉編著『統合思考と ESG 投資－長期的な企業価値創出メカニズムを求めて』文真堂、2018 年

長谷川直哉編著『価値共創時代の戦略的パートナーシップ』文真堂、2017 年
長谷川直哉編著『企業家活動でたどるサステナブル経営史』文真堂、2016 年

【成績評価の方法と基準】

期末レポート：80 %

発表・討議：20 %

【学生の意見等からの気づき】

毎回、企業家活動のケースを取り上げ、多様なバックボーンを持つ参加者の自由な討議を中心に授業を進めます。

【学生が準備すべき機器他】

パソコン

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

サステナブル経営・企業倫理・責任投資・ビジネスヒストリー

<研究テーマ>

企業と社会のサステナビリティ

<主要研究業績>

「企業社会の変容と共通価値の創造」『損害保険研究第 76 巻第 3 号』2014 年
「利益の質保証－企業価値評価を巡る投資家の責任－」『日本経営倫理学会誌第 20 号』2013 年

【実務経験】

損害保険会社の資産運用部門において、約 15 年間投資業務を担当しました。1999 年、ESG 投資の先駆的な取り組みである SRI（社会的責任投資）ファンドを組成し、ファンドマネジャーとして企業の ESG（非財務）側面を評価する手法を開発しました。また、(公財)国際金融情報センターに出身し、カントリーリストや国際金融システムに関する調査・研究に従事しました。

【関連資格】

日本証券アナリスト協会認定アナリスト（CMA）

【Outline and objectives】

This class covers two themes, "Sustainability Management and Corporate Responsibility" and "ESG Management Learned from Entrepreneurs" every other year. In 2021, we will give a lecture on "ESG management learned from entrepreneurs". In the class, we will re-evaluate the activities of Japanese companies from the Meiji era to the present day from the perspective of SDGs and ESG. Based on the results of the analysis, we will consider the ideal form of sustainability management required of modern companies.

LAW500P2 - 124

環境と知的財産権

中里 紀沙子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

知的財産権の基礎を押さえた後、知的財産権の現代社会における重要性を学び、さらに工業的分野だけでなく、知的財産権が、自然及び環境問題とどのように関連しているか、知的財産権の種類にわけて、幅広く事例を挙げて講義する。

知的財産権の法的理解を深めるために、必要に応じて、民法などの法的問題についても、講義を行う。

特に、特許権、音楽著作権、商標権など、知的財産権の新しい動向についても解説するとともに、一般にはなじみがない種苗法も取り上げ、環太平洋パートナーシップ（TPP）の農業分野に対する影響、知的財産権に対する影響について解説する。

ほかに、生物多様性条約が知的財産権についても関連の深い条約であることを概説し、知的財産権の現代社会における広がりについて学ぶ。

【到達目標】

特に、特許権、音楽著作権、商標権など、知的財産権の新しい動向についても解説するとともに、一般にはなじみがない種苗法も取り上げ、環太平洋パートナーシップ（TPP）の農業分野に対する影響、知的財産権に対する影響について解説する。

ほかに、生物多様性条約が知的財産権についても関連の深い条約であることを概説し、知的財産権の現代社会における広がりについて学ぶ。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP4」に関連している。

【授業の進め方と方法】

対面で実施予定である。講師作成のパワーポイントレジュメを使用し、判例の紹介、その他新聞記事などを適宜配布しながら、知的財産権の内容及び知的財産権と自然との関係について概説する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

なし/No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

春学期後半

回	テーマ	内容
第1回	知的財産権が属地的権利であることを確認したのち、グローバル化した社会の中で、条約などを通じて、どのように保護されていくかを論じる。	・知的財産権とはどのような権利の呼称か ・知的財産権の法的性質（「独占」）について ・知的財産権の種類 ・知的財産権の国際性（条約を中心にして）
第2回	工業所有権の中心的権利である特許権を概説し、工業分野だけでなく、自然及び環境との関係でも、関連の深い権利であることに触れる。	・特許法1：特許法についての概説及び特許権の具体的事例の説明
第3回	特許法のつづき 実用新案権についての概説	・特許法2：特許権に対する制限について ・実用新案法の解説及び実用新案権の具体的事例の説明 ・意匠法の解説及び意匠権の具体的事例を説明
第4回	工業所有権のひとつである意匠権の概説 農業分野で重要な権利であり、自然と直接関わりのある育成者権保護する種苗法を中心に概説する。	・意匠権に対する制限について ・種苗法1：種苗法についての解説
第5回	種苗法についての概説の続き	・種苗法2：指定種苗制度についての解説
第6回	著作権について概説する。	・著作権法1：著作権法の概説
第7回	著作権についての概説の続き	・著作権法2：著作権に対する制限
第8回	商標法について概説し、特許権と同じく、工業分野だけではなく、農業分野など、自然とも深く関わってくる権利であることに触れる。	・商標法1：商標権について概説する
第9回	商標についての概説の続き	・商標法2：新しい商標について概説

第10回 不正競争防止法について

概説し、知的財産権分野だけでなく、農業分野など、自然とも深く関わってくる権利であることに触れる。

・不正競争防止法

第11回

自然及び環境と知的財産権の関わりについて、特許権を中心に論ずる。特に、遺伝子特許、生物特許など新しい問題についても扱う。

・自然と特許権
・特許権と育成者権との関係（二重保護）

また、特許権と育成者権の二重保護についても触れる。

第12回

農林水産分野における知的財産権の保護についてのこれまでの講義の総まとめを行う。

・農林水産分野における知的財産権
・地域団体商標
・TPP 交渉の農業及び知的財産権に対する影響

第13回

生物多様性条約が、知的財産権をも扱っている点について解説し、さらに今後の知的財産権の方向性についても概説する。

・生物多様性条約（知的財産権に関連して）

第14回

まとめ

学生による研究発表・レポート提出

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

講師作成のパワーポイントレジュメ

【参考書】

特にありません。

【成績評価の方法と基準】

平常点 50% レポート課題 50%

【学生の意見等からの気づき】

毎年、知的財産権について最新の話題を取り入れてお話ししようと考えていますが、今年は特に TPP に関連する事柄について、折に触れてお話しする予定です。

【学生が準備すべき機器他】

特にありません。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

離婚・相続などの家事分野

景表法、薬機法、特商法などを踏まえた広告規制全般

<研究テーマ>

特になし

<主要研究業績>

特になし

【Outline and objectives】

The purpose of this course is to help students master the basic concepts and principles of Japanese Intellectual Property Rights such as Patent Act, Utility model right Law, Design Act, Plant Variety Protection and Seed Act, Copy right Act, Trademark Act, and Unfair Competition Prevention Act. It also introduces the International Intellectual Property including several global conventions, such as Paris Convention, Berne Convention, Agreement on Trade-Related Aspects of Intellectual Property Rights and Convention, and Convention on Biological Diversity.

At the end of the course, participants are expected to understand the Japanese Law system and social phenomena from the view points of legal perspective because Japanese Civil Code, which is the most important and basic law in Japanese law system, is introduced as well.

サステナビリティ・コミュニケーション論

川村 雅彦

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

●サステナビリティ・コミュニケーションとは、持続可能な社会の実現に向けた企業の環境経営や CSR・ESG 経営あるいは SDGs を含む「サステナビリティ経営」において不可欠な企業の信頼性とブランド、そして企業価値を高めるためのステークホルダー（利害関係者）とのコミュニケーションである。

●現代企業の事業活動はグローバルに拡大し、地球環境や地球社会に様々な悪影響を及ぼす反面、それらを解決できるキープレイヤーでもある。それゆえ、サステナビリティ・コミュニケーションが最終的に目指すものは、社会的課題を中心に据えて、環境・社会の持続可能性と企業の持続可能性の同時達成である。

●日本企業が苦手とする企業ブランディングにもつながるサステナビリティ・コミュニケーションの必要性を理解する。

【到達目標】

●持続可能な環境・社会の実現に向けた企業経営におけるサステナビリティ・コミュニケーションの考え方や手法を理解し、実際の企業の CSR や ESG あるいは SDGs にかかわる判断や行動について自らの言葉で評価できる。

●グローバル・ローカルの環境的・社会的課題を理解し、CSR・ESG リスク回避と企業価値向上に向けた、企業のステークホルダーとのコミュニケーションによる解決策や改善策を提案できる。

●従来、経営論は「企業はいかに儲けるか」を論じてきたが、それは環境・社会が持続可能であるという暗黙の前提があった。しかし、気候変動や人権・労働をはじめ環境的・社会的課題により持続可能な発展が見通せなくなった現在、企業はビジネスを通じて自らその課題を解決し、価値創造につなげなければならない。このことを十分に納得し説明できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」に関連している。

【授業の進め方と方法】

●授業は 6 月 3 日（木）の 6～7 時限から開始いたしますが、「対面授業」を予定しています。ただし、コロナ禍の状況によっては、Zoom によるオンライン授業の可能性もあります。その場合には、受講者には個別に「招待」メールを講義資料とともに、登録された法政アドレスに事前に送ります。

●持続可能な環境や社会の実現に向けて、企業経営はいかにあるべきかが基本命題である。この授業では、その重要な側面として、多様なステークホルダーとのコミュニケーションに着目する。

●まず、サステナビリティ・コミュニケーションの目的・概念・手法を確認し、持続可能な環境や社会の実現を阻害するグローバル・ローカルの社会的課題を理解する。そのうえで、主要ステークホルダーごとの実践例を取り上げ、現状把握と課題抽出をおこなう。

●授業では指定する教科書と毎回配布するレジュメを使い、随時の質疑応答により理解を深める。また、受講者各位への「課題レポート」として各自への特定企業の CSR・統合報告書等を実際に評価し、全員で議論する（これを期末試験に代える）。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期後半

回	テーマ	内容
1	サステナビリティ・コミュニケーションの目的と 5W1H	・誰が、誰に、何のために、何を、どのように ・日本企業の弱点である誠実なコミュニケーション ・サステナビリティ・コミュニケーションはブランディング
2	企業のサステナビリティと社会のサステナビリティの不可分性	・グローバルとローカルの社会的課題（環境問題含む）から考える企業経営 ・CSR リスク回避とソーシャル・ブランディング（具体的なリスク事例）
3	ステークホルダー・エンゲージメントと CSR・ESG	・不確実な経営環境における中長期の企業価値向上のための経営戦略の策定と開示 ・ステークホルダーの特定とエンゲージメントの効果・メリット ・Sustainability Context 原則（GRI・G4）/「トヨタ環境ビジョン 2050」
4	CSV（共有価値の創造）と財務・非財務情報を融合する「統合報告」	・CSR と CSV、ESG や SDGs の位置関係（共通点と相違点）と先進事例 ・世界の潮流となりつつある「統合報告」の狙い、「統合思考」の重要性 ・日本企業の対応状況
5	主要ステークホルダー別のコミュニケーション（実践例と課題）1	・投資家・金融機関：IR から「統合報告」へ ・顧客・消費者：製品・サービスの情報開示と苦情解決、消費者の権利 ・従業員：サステナビリティ・マインドの醸成、人権・労働の課題
6	主要ステークホルダー別のコミュニケーション（実践例と課題）2	・地域（市民）：サステナビリティ教育、企業プロボノ、社会的弱者の支援 ・調達先・発注先：サプライチェーンの CSR 監査 ・NPO・NGO：社会的課題の認識と解決策
7	討論会（授業内期末試験）	・各自の特定企業の CSR・統合報告書の評価をまとめた「課題レポート」の発表と全員討論

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、合わせて 1 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

川村雅彦著「CSR 経営 パーフェクトガイド」 2015 年 ウィズワークス刊 定価 1,800 円（消費税別）
（事前に購入してください）

【参考書】

・吉澤正編「環境コミュニケーション入門」日本規格協会刊、2007 年
・ISO「国際規格 ISO26000（社会的責任の手引き）」2010 年発行（授業で一部配布）
・田中、水尾、蟻生著「渋沢栄一に学ぶ 論語と算盤」同文館刊 2016 年
・落合洋一著「2030 年の世界地図帳」SBCreative 刊 2019 年（購入する必要はありません）

【成績評価の方法と基準】

・授業参加・貢献（50%）+ 課題レポート提出（30%）+ 期末試験・討論（20%）
・以下を合格条件とする。
・5 回以上の出席（公欠届や諸事情は考慮する）
・特定テーマに関する「ミニレポート」の提出
・「課題レポート」の提出（各自に指定する企業の CSR・統合報告書等によるサステナビリティ・コミュニケーションの評価）

・期末試験時の討論参加（各自の課題レポートを基に全員による質疑応答と討論）

【学生の意見等からの気づき】

積極的に受講者の意見を引き出すこと。

【学生が準備すべき機器他】

対面の場合には、特に要求なし。オンラインではインターネット接続可能な PC の準備。

【その他の重要事項】

- 社会的課題に関心があり、未来志向の方。
- 環境経営・CSR・ESG や CSV あるいは SDGs さらに統合思考・統合報告や ESG 投資に関心のある方を特に歓迎する。
- 2015年に人類は文明史的な大転換点を迎えた。これからは、これまでの企業経営の常識は非常識となる。企業が創造すべき価値は、経済価値と社会価値である。
- 講師の海外を含む企業勤務の経験も交えて講義をするので、出席を重視する。そのため、規定回数以上の出席を原則とする（毎回、出席確認と小討論会を行うが、事情がある場合には事前相談に応ずる）。
- 担当講師は、土木エンジニア出身のシンクタンカーである。他学での講義経験豊富。

【担当教員の専門分野等】

< 専門領域 > 環境経営、CSR・CSV・ESG・SDGs 経営、環境ビジネス、統合報告（財務情報と非財務情報の統合）⇒自称【統合思考伝道師】

< 研究テーマ > SDGs 社内浸透、バリューチェーン・マネジメント、統合思考、ESG 投資、気候変動リスクと適応

< 主要研究業績 >

- 『統合思考と ESG 投資』法政大学・文真堂
- ①『カーボン・ディスクロージャー：企業の気候変動情報の開示動向』税務経理協会刊、2011年8月
- ②「日本の『CSR 経営元年』から 10 年」ニッセイ基礎研レポート 2012年12月
- ③「CSV は CSR の進化形だろうか？」ニッセイ基礎研レポート 2013年4月
- ④「『統合思考』による発想の転換を！」ニッセイ基礎研レポート 2013年7月
- ⑤「サプライチェーンの CSR リスクに疎い日本企業」ニッセイ基礎研レポート 2014年2月
- ⑥「グローバル時代のコンプライアンス」2014年10月
- ⑦「ESG 投資と統合思考のために」ニッセイ基礎研レポート 2016年12月
- ⑧「2017年の CSR トレンド」オルタナ総研 CSER today 2017年12月アップ
- ⑨「SDGs ウォッシュと言われないために」ニッセイ基礎研レポート 2018年3月

【Outline and objectives】

"Sustainability Communication" is communication with stakeholders for enhancing the reliability & branding and creating a corporate value by the sustainability management including environmental & CSR・ESG and SDGs activities, with the aim of construction of the sustainable global and local society.

ECN500P2 - 146

環境ガバナンスⅢ

湯澤 規子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

「食」と「農」と「地域」をキーワードとして、その関係性を歴史的に検討します。「自然環境」、「社会環境」の両側面から「環境」を捉え、様々な事例から持続可能な社会のしくみについて考えます。

【到達目標】

食と農と地域の歴史を理解し、地域環境を論じる基礎的知識と視角を身につけます。文献講読および具体的な事例を通して、現代社会の課題と今後の展望を考察することを目指します。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP4」に関連している。

【授業の進め方と方法】

講義を中心としつつ、ディスカッションペーパーにもとづく議論を適宜織り交ぜて、考察を深めていきます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】**秋学期前半**

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	食と農と地域を論じる視点
第2回	問題提起	近年の研究成果の検討
第3回	文献講読と討論（1）	食と農と地域に関わる文献講読（1）
第4回	文献講読と討論（2）	食と農と地域に関わる文献講読（2）
第5回	文献講読と討論（3）	食と農と地域に関わる文献講読（3）
第6回	文献講読と討論（4）	食と農と地域に関わる文献講読（4）
第7回	総括と展望	食と農と地域からみた環境ガバナンスについての全体討論

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

今のところ「食産業」を中心テーマとして下記の文献を候補としているが、参加者との相談で決定する。

・山本昌仁『近江商人の哲学－「たねや」に学ぶ商いの基本』講談社現代新書、2018

・金田章裕『和食の地理学－あの美味を生むのはどんな土地なのか』平凡社新書、2020

・川北稔『砂糖の世界史』岩波ジュニア新書、1996

・武田尚子『チョコレートの世界史－近代ヨーロッパが磨き上げた褐色の宝石』中公新書、2010

・白井隆一郎『コーヒーが廻り世界史が廻る－近代市民社会の黒い血液』中公新書、1992

ほか

【参考書】

・湯澤規子『胃袋の近代－食と人びとの日常史』名古屋大学出版会、2018

・湯澤規子『7袋のポテトチップス－食べるを語る、胃袋の戦後史』2019

その他、随時紹介します。

【成績評価の方法と基準】

報告（50%）と最終レポート（50%）で評価します。テーマについては、講義の初回で提示します。

【学生の意見等からの気づき】

参加者それぞれの問題意識を深められるように、ディスカッションの時間を活用したいと思います。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>地域経済学、日本近現代史、人文地理学

<研究テーマ>地域づくりの理論と実践、食と農と暮らしの地域経済学、女性と家族の近現代史

<主要研究業績>

・『7袋のポテトチップス－食べるを語る胃袋の戦後史』（単著、晶文社、2019年）

・『胃袋の近代－食と人びとの日常史』（単著、名古屋大学出版会、2018年）

・『在来産業と家族の地域史－ライフヒストリーからみた小規模家族経営と結城紬生産』（単著、古今書院、2009年）

・「ジェンダーから再考する地域と人間」『サステイナビリティ－地球と人類の課題』朝倉書店、2-18年、104-113頁

・「地域づくりの系譜－山梨県甲州市の甚六桜とかつぬま朝市」『歴史地理学』58(1)、2016年、57-72頁

【Outline and objectives】

We will examine this relationship from a historical point of view using "food", "agriculture" and "region" as keywords. We will consider the "environment" from both the "natural environment" and "social environment" and think about the structure of a sustainable society from various cases.

MAN500P2 - 133

グローバル環境経営論

白鳥 和彦

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

今日、企業経営においては、公害対策から廃棄物対策、温暖化防止や生物多様性保全など幅広く地球環境問題への対応が求められている。また、それが同時に企業の持続可能な発展につながるものが求められている。日本および海外企業の環境経営の現状と今後の課題について、その本質と企業の対応について検討する。

【到達目標】

先進的な環境経営を行っている企業等の事例をもとに、環境経営の基本的考え方、基礎的な目標や達成手法などに関する基本的な知識を習得し、持続可能な社会に向けた企業の環境経営の在り方等について自ら考察出来る能力を涵養する。

ディプロマポリシーの「DP1」と「DP2」に関連している。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP3」「DP4」に関連している。

【授業の進め方と方法】

この授業はオンライン授業で行います。

リアルタイム型（Zoom を利用した双方向型）を予定します。

授業開始前に受講者の意向を確認し、受講生の意向が合わない場合にはオンデマンドとします。

授業ごとに設定したテーマについて、社会や環境問題の現状、法規制、企業の取組みなど、基本的な事項を講義したのち、具体的な企業の事例を分析・検討し、受講者からの報告や教員と受講者との意見交換等を通じて理解を深めていく。

連続した2時限授業であることを活かし、講義と意見交換を交える。（オンデマンド型授業となった場合には、前回の授業で提出された課題・リアクションペーパーからいくつかを取り上げ、フィードバックを行う）

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

秋学期前半

回	テーマ	内容
第1回	環境経営の概念～環境経営とは何か	・環境経営の概観 ・企業理念、環境方針、トップコミットメント ・環境先進企業がどう取組んできたか 等
第2回	エネルギー政策とエネルギー関連ビジネス	・エネルギーと環境負荷、エネルギー政策、パリ協定 ・既存エネルギー企業、再生可能エネルギー企業、IT 関連企業の取組み 等
第3回	資源循環・サーキュラーエコノミー	・日本および欧州の関連政策 ・製造業の資源循環の取組み（ex 自動車業界） ・プラスチックリサイクル企業、リサイクルメジャー企業の取組み 等
第4回	環境経営の評価：社会やステークホルダーからどう評価されるか	・環境経営度ランキング、環境・CSR 関連のインデックス 等
第5回	環境経営の指標化：自社のなかでどう評価・指標化し進めるか	・エコラベル、カーボンフットプリント ・環境会計とその進化（社会価値の定量化） 等

第6回 地域循環共生圏：第5次環境基本計画とその対応

・地域エネルギー、街づくり
・コンパクトシティ
・地域企業の取組み例
等

第7回 シェアリング・エコノミー
講義のまとめ

・環境対応と社会課題解決に繋がる新しいビジネスモデル
・全授業を通してのまとめ、発表
等

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

・地球環境問題、企業の環境・社会的責任に関する活動に関心を持ち、自己学習に努めること。各回に次回の事前・事後学習の内容を指示します。本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

特に指定しない。必要に応じて資料配布する。

【参考書】

授業テーマに講じて資料・文献などを紹介する。

【成績評価の方法と基準】

期末レポート：80 %
討議への関与度、発表：20 %

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【学生が準備すべき機器他】

オンライン授業に必要なパソコンおよび通信環境を準備してください。（通信環境は通信量無制限の契約が望ましい）

【その他の重要事項】

受講者の関心事・理解度により講義内容や取り上げる事例を変更することがある。

【実務経験のある教員による授業】

製造業で、ゼロエネルギー住宅の開発、居住環境・生活エネルギーに関する研究開発など環境領域での研究開発に従事。その後、環境経営およびCSR経営の立ち上げから全社の施策立案・推進に従事。環境マネジメントシステムの全社展開、LCAや環境会計手法の活用と展開、環境レポート・CSRレポートをはじめとした環境コミュニケーション、環境教育、社会貢献活動（特に次世代向け）の企画・立案・推進等、環境経営・CSR経営に関するほぼ全ての事項や手法に携わってきた。理論だけでなく企業での施策や手法など実践的な内容を盛り込んだ講義を行う。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

環境経営・CSR経営、環境イノベーション、環境マーケティング

<研究テーマ>

・企業の環境・CSR経営の取り組みに関する研究
・環境・CSR対応と企業価値に関する研究
・持続可能な社会に向けた経営指標に関する研究

<主要研究業績>

①『環境企業家と環境経営の新展開』（単著、税務経理協会、2009年）

②『マーケティングにおける現場理論の展開』（共著、創成社、2018年）

【Outline and objectives】

Considers the current efforts and future issues of environmental management of Japanese and overseas companies, for the sustainable society.

開発経済論

山田 英嗣

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

開発経済学は、開発途上国での貧困や不平等に着目し、どうすればそれらの問題を解決できるかを考察する実践的な分野である。本講義の目的は、現代の開発途上国が直面する主要な課題を把握し、開発経済学がどのような課題解決策を提示してきたのかを理解することである。特に、理論的なアプローチだけでなく、データによる実証分析も活用して開発途上国の諸課題について議論する力を習得することを目指す。

【到達目標】

本講義の到達目標は以下の3点である。

- (1) 開発経済学がどのように貧困や不平等をとらえてきたのか、主要な指標の考え方や計測方法について、基本的な知識を習得し、アジア・アフリカなどの開発途上諸国の実態を把握すること。
- (2) 貧困や低開発の原因やその解決方法について、開発経済学が提示してきた理論の概要を理解すること。
- (3) 政策の効果を統計的に評価するために定量分析の手法（特にインパクト評価）の概念を理解し、現実の実証例を通じて、政策実務への活用方法を習得すること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」に関連している。

【授業の進め方と方法】

講義はすべてオンライン授業で行う。各回の講義は、①教員による講義、②参考文献に関する学生の報告、③基礎的なデータ分析課題、④ディスカッションで構成する。講義内容は、ミクロ経済学・マクロ経済学・計量経済学等、経済学の基礎的な知識は前提としない。理論的な説明では数式はなるべく使用せず、グラフなどを使った直観的な理解を優先する。実証分析を理解するための統計学の基礎知識については、講義内で補足説明を行う。ただし、講義の方法や内容については、受講者の数や関心などに応じて変更する可能性がある。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】

春学期前半

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション/ 開発経済学の変遷と経済成長論	第二次世界大戦以降、開発経済学がどのように変遷してきたのか、開発途上国の発展の歴史を踏まえつつ概観する。併せて、経済成長論の概要を理解する。
第2回	貧困と不平等	開発経済学が解決の対象とする中心的課題が貧困と不平等である。貧困と不平等に関する諸概念を整理し、主要な指標の計測方法を習得する。開発経済学および開発の実務でよく使われるデータ（オープンデータ）の使い方についても紹介する。
第3回	貧困層のミクロ経済学	途上国の貧困層は、労働者・起業家・消費者としての役割を持つ経済主体である。ミクロ経済学モデルにより、経済主体としての貧困層の行動を分析するアプローチを学ぶ。

第4回 開発政策を実証分析する手法（インパクト評価）

近年の開発経済学において、現実の政策の効果をデータを使って実証的に分析し知見を得る「インパクト評価」が大切なツールとなっている。効果の測定に必要なデータや主要な手法について、基礎的な知識を得る。

第5回 教育・保健医療と開発

開発途上国における教育や保健医療の実情を主要な統計から把握する。教育や医療へのアクセスを改善するための様々な施策に関して、インパクト評価による主要な研究を概説し、どのような施策が有効なのか議論する。

第6回 出稼ぎ移民/環境問題

前半では、現代の開発途上国に幅広くみられる出稼ぎ移民（国内・海外）について扱う。出稼ぎの動機や故郷への送金をもたらす影響などについて考察する。後半では、近年特に深刻となっている環境問題について、開発途上国の現状と各国政府、国際社会の取り組みを経済学的に解釈する。

第7回 現場での開発経済学

開発経済学は、開発途上国の政策や援助にどのように役立てられているのか。実際の開発協力事業を例に、政策策定やプロジェクトの実施における開発経済学の知見の活用例を紹介し、開発経済学の有用性・課題について理解を深める。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- (1) 各回で講読する参考文献について、発表担当の学生は発表準備を、その他の学生は予習をする。学期中、各学生が1-2回発表できるようにする。参考文献には英語のものも含まれる。
- (2) 全体で4回程度、講義内容に関連する簡単なデータ分析課題を課す。講義開始前までにメールで提出、講義時間中に学生からの発表とディスカッションを行う。課題は、オープンデータ（オンラインでアクセス可能な公開データ）を使い、エクセル等の表計算ソフトで実施可能な基礎的なもので、統計分析ソフトウェア等は必要としない。
- (3) 期末レポートの詳細については、初回講義時にガイダンスする。

【テキスト（教科書）】

特に指定しない。

【参考書】

「開発経済学—貧困削減へのアプローチ」黒崎卓・山形辰史、日本評論社、2017年
「テキストブック開発経済学（第3版）」ジェトロ・アジア経済研究所・黒岩郁雄・高橋和志・山形辰史、有斐閣、2016年
「貧困の経済学（上・下）」マーティン・ラヴァリオ（柳原透 監訳）、日本評論社、2018年

【成績評価の方法と基準】

成績評価は、期末レポート（40%）、参考文献の発表（20%）、データ分析課題（20%）、授業やディスカッションへの貢献（20%）を総合的に判断して行う。

【学生の意見等からの気づき】

本年度新規科目につきアンケートを実施していません。

【その他の重要事項】

講師は国際協力機構（JICA）職員であり、2021年4月以降JICAバングラデシュ事務所員として海外赴任中の予定のため、講義はすべてオンラインで行う。そのため対面でのオフィスアワーの設定は難しいが、メール等での質問やオンラインでの相談は随時受け付ける。途上国におけるODA（政府開発援助）による開発事業の企画・実施監視の実務経験があり、開発の現場において経済学の知見がどのように活かされているのか、経験に基づき講義の中で共有する。

【担当教員の専門分野等】

HPのURL：<https://www.jica.go.jp/jica-ri/ja/experts/yamada-eiji.html>

<専門領域>

空間経済学・都市経済学・ミクロ計量経済学

<研究テーマ>

①海外出稼ぎ移民の要因・海外送金の開発効果②インフラ事業のインパクト分析③空間経済学による環境問題の分析

<主要研究業績>

Enerelt Murakami, Eiji Yamada, Erica Paula Sioson, "The impact of migration and remittances on labor supply in Tajikistan," *Journal of Asian Economics*, Volume 73, 2021, 101268.

Satoshi Shimizutani and Eiji Yamada, "Resilience against the Pandemic: the Impact of COVID-19 on Migration and Household Welfare in Tajikistan," *JICA Ogata Research Institute Working Paper 218*, 2021.

Murakami, E., Shimizutani, S. & Yamada, E. "Projection of the Effects of the COVID-19 Pandemic on the Welfare of Remittance-Dependent Households in the Philippines". *Economics of Disasters and Climate Change* (2020).

Murakami, Enerelt, Satoshi Shimizutani, and Eiji Yamada. "The Potential Impact of the COVID-19 Pandemic on the Welfare of Remittance-Dependent Households in the Philippines". *COVID Economics* 24, 1 June 2020: 183-204. Centre for Economic Policy Research.

Eiji Yamada, "A Spatial Equilibrium Analysis of Air Pollution in China", *JICA Research Institute Working Paper 211*, 2020.

Mai Seki and Eiji Yamada, "Heterogeneous Effects of Urban Public Transportation on Employment by Gender: Evidence from the Delhi Metro", *JICA Research Institute Working paper 207*, 2020.

[Outline and objectives]

This course aims at providing basic knowledge on the Development Economics, in terms of its major topics and key methodological approaches. The lecture covers the concept and measurements of poverty/inequality, microeconomic models of poor households, the basics of quantitative impact evaluation, and economic interpretation of specific development issues such as education, healthcare, migration, and environment. Every week, after the lecture, one or two student(s) present a reference article followed by an open class discussion. In addition, students are required to submit short works of data analysis (graphing, tabulation, etc.) related to the contents of the lecture.

国際環境協力論

藤倉 良

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

開発途上国が持続可能な開発を達成するために、日本や国際機関はどのような支援を実施しているのか、また、今後、どのように支援を行うべきなのかを学ぶ。将来、国際協力の分野に進んだ学生には、援助のあり方を考える基礎を習得する。

【到達目標】

インフラ開発に伴う社会環境配慮と環境プロジェクトの相違を理解したうえで、世界銀行やアジア開発銀行、日本のODAがどのような仕組みで動いているかを理解する。その上で、以下の事例について学習する。

- ・過去に行われたダム建設に伴う住民移転から得られた教訓
- ・工業化に伴う公害対策の先例としての日本の公害経験
- ・開発途上国の資源環境問題の実例としての中国の諸問題
- ・気候変動対策における援助の方向性

これらをベースにして、持続可能な開発に向けた援助の方向性を見据える。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP4」に関連している。

【授業の進め方と方法】

パワーポイントを用いて講義を進める。パワーポイントはハードコピーを毎回配布し、授業支援システムにもアップする。

国際協力の現場で働く実務家にプレゼンテーションを行って頂く予定である。海外勤務の方にはオンラインで行って頂く。このため、日程はプレゼンターの都合によるので、授業の全体スケジュールはそれに応じて変更される。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

なし/No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

秋学期後半

回	テーマ	内容
第1回	序論	国際協力とODAの仕組み
第2回	日本の環境協力の歴史	1970年代以降の日本の環境協力
第3回	開発途上国の環境政策1	開発途上国で環境政策がどのように進展してきたか。
第4回	開発途上国の環境政策2	開発途上国の環境政策にどのような課題が残されているか。
第5回	日中環境技術協力	JICAを通じた協力事例
第6回	中国の資源と環境	水資源、エネルギー、公害などについて
第7回	東南アジアの事例	ベトナムなどの事例研究
第8回	気候変動対策1	緩和
第9回	気候変動に関連する技術協力	緩和策に関連する事例
第10回	気候変動対策2	適応
第11回	日本の公害経験1	国の政策
第12回	日本の公害経験2	地方公共団体の政策
第13回	環境配慮	セーフガードポリシー
第14回	住民移転	ダムによる住民移転と生活再建の評価

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

講義中に資料を指示する。

【参考書】

井村秀文・松岡俊二・下村恭民編著 『環境と開発』 日本評論社

【成績評価の方法と基準】

レポート（100%）もしくは最終回に行う試験（100%）で評価する。

【学生の意見等からの気づき】

なるべく多くの事例を紹介することとする。

【学生が準備すべき機器他】

特になし

【担当教員の専門分野等】

環境システム科学、国際環境協力

【担当教員の関連する業績】

1.Kawanishi, M. and Fujikura, R. (2020), Assessment for the implementation of a national greenhouse gas inventory: the case of Japan, Management of Environmental Quality, Vol. ahead-of-print No. ahead-of-print. <https://doi.org/10.1108/MEQ-06-2020-0116>

2.Masato Kawanishi, Junko Morizane, Nela Anjani Lubis, Ryo Fujikura (2020) Issue interpretations and implementation analysis for the national greenhouse gas inventory: the case of Indonesia, Journal of Environmental Studies and Sciences, 10(4), 411-425, <https://doi.org/10.1007/s13412-020-00628-3>

3. Masato Kawanishi, Makoto Kato, Emiko Matsuda, Manami Fujikura, and Ryo Fujikura (2019) Comparative study on institutional designs and performance of national greenhouse gas inventories: the cases of Vietnam and the Philippines, Environment, Development and Sustainability, Vol.21, <https://doi.org/10.1007/s10668-019-00460-y>

4.Ryo Fujikura and Mikiyasu Nakayama (2019) Overview: Livelihood Re-Establishment After Resettlement due to Dam Construction, Journal of Asian Development, 5(1), 1-11, doi:10.5296/jad.v5i1.14420

5.Sunardi, Ariyani, M., Febriani, R., Maharani, G.S., Fu, R. H. Y., & Fujikura, R. (2019) Rebuilding livelihood of the rural and peri-urban resettlers in post-involuntary displacement of Saguling Dam construction. Journal of Asian Development, 5(1), 12-30, doi:10.5296/jad.v5i1.14421

6.Suwartapradja, O. S., Fujikura, R., Sunardi, & Fu, R. H. Y. (2019). Resettlement caused by Jatigede Dam project: Consequence of long delayed implementation of a project. Journal of Asian Development, 5(1), 31-44, doi:10.5296/jad.v5i1.14422

7.Nakayama, M., & Fujikura, R. (2019). Addressing the Livelihood of Non-Resettlers in Dam-Induced "Detached" Areas: The Case of the Shichikashuku Dam. Journal of Asian Development, 5(1), 45-55, doi:10.5296/jad.v5i1.14423

8.Masato Kawanishi, Makoto Kato, Emiko Matsuda, and Ryo Fujikura (2019) Comparative Study of Reporting for Transparency under the International Agreements on Climate Change and Ozone Protection: A Case of the Philippines, International Journal of Environmental Science and Development, Vol.10, No.1, pp.1-8, doi: 10.18178/ijesd.2019.10.1.1137

9.Masato Kawanishi and Ryo Fujikura (2018) Evaluation of Enabling Factors for Sustainable National Greenhouse Gas Inventory in Developing Countries, International Journal of Environmental Science and Development, Vol. 9, No. 10, pp.290-297, doi: 10.18178/ijesd.2018.9.10.1116

【Outline and objectives】

Students will learn international cooperation is being implemented by Japan or international organizations in order for developing countries to achieve sustainable development and how to support them in the future.

社会開発論

吉田 秀美

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

2015年に設定された国際目標である持続的開発目標（SDGs）について、主に途上国開発の観点で学ぶ。

【到達目標】

- (1) SDGs 採択の背景になった「貧困削減」の取り組みについて理解を深める。
- (2) SDGs の各目標について、途上国と先進国の共通点と差異を理解する。
- (3) SDG で新たに加えられた人権、先進国とのつながりを理解する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP4」に関連している。

【授業の進め方と方法】

各回、テーマを設定し、授業の前半で各セクターの開発理論・課題を体系的に把握するため講義形式で行う。後半は、国際機関等の資料や、関連するテーマについて学生のプレゼンテーションとディスカッションを中心に進める。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

秋学期前半

回	テーマ	内容
第1回	SDGs と MDGs	SDGs の概要と策定の歴史的計を学ぶ
第2回	貧困とは何か	国際機関や研究者による貧困の定義を学ぶ
第3回	貧困に関連する経済的指標	絶対的貧困と格差
第4回	人間開発に関する諸指標	アマルティア・センのケイバビリティアプローチ
第5回	経済開発と人々の生計	途上国の人々の暮らしについて把握する枠組みを学ぶ
第6回	農村開発	生計向上の有用なアプローチについて討議する
第7回	保健分野の課題（1）	保健医療へのアクセスについて考える
第8回	保健分野の課題（2）	課題解決に向けたパートナーシップについて議論する
第9回	教育・ジェンダー	指標と事例から現状を学ぶ
第10回	教育の現状と課題	変化する教育の質について議論する
第11回	責任ある生産と消費（1）	ディーセントワークについて議論する
第12回	責任ある生産と消費（2）	環境への取り組み事例を学ぶ
第13回	ガバナンス	事例を討議する
第14回	パートナーシップ	全体のまとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

高柳彰夫編著『SDGs を学ぶ 国際開発・国際協力入門』法律文化社、2018年

【参考書】

『開発なき成長の限界——現代インドの貧困・格差・社会的分断』アマルティア・セン(著)、ジャン・ドレーズ(著)、湊一樹(翻訳)、明石書店、2015年

【成績評価の方法と基準】

授業内での発表・発言（50%） 期末レポート（50%）

【学生の意見等からの気づき】

授業で扱うテーマと、学生自身の仕事や経験、時事問題に対する見解などを関連させることで議論が深まります。

【学生が準備すべき機器他】

資料配布、課題の提出には授業支援システムを活用します。

【担当教員の専門分野等】

企業のCSRや持続可能な調達による貧困削減、インクルーシブビジネス

【Outline and objectives】

Learn about issues, indicators and problem solving in each field of the SDGs which is the international goal set in 2015.

ARSI500P2 - 130

国際協力フィールドスタディ

武貞 稔彦

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

国際開発のプロジェクトや課題を現地で学ぶ。事前学習で訪問先のプロジェクトや訪問地域について理解を深め、現場を視察したうえで、報告書をまとめる。

【到達目標】

本講義および現地調査を通じて、学生は、1) 開発プロジェクトの理論と現地調査の手法を学び、実践を通して習得することができる、2) 報告書の作成を通じて、論文執筆の基礎となる文書作成能力を高めることができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP3」に関連している。

【授業の進め方と方法】

文献講読と現地調査によって、開発援助プロジェクトのあり方を討議する。事前学習では、教員による調査手法などの講義、受講者による事前学習の発表、現地調査準備、報告書作成準備を行う。現地調査では、開発途上国で日本政府や民間企業、NGOなどが行っているプロジェクトの現場を訪問する。帰国後に受講者による報告書を作成する。

訪問先と時期については、参加者と協議のうえ決定する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

秋学期集中

回	テーマ	内容
第1回	序論	授業の趣旨、現地調査先、スケジュールの確認
第2回	事前学習作業分担	各自で現地に関する事前学習テーマを設定する
第3回	現地調査：事例1	現地調査の事例を紹介する
第4回	事例の討論1	調査内容についての討議
第5回	調査対象国についての事前学習1	調査対象国について専門家による講義
第6回	調査対象国についての事前学習2	調査対象国について専門家による講義
第7回	学生の事前学習発表1	受講生による事前学習成果報告
第8回	学生の事前学習発表2	受講生による事前学習成果報告
第9回	現地調査準備1	質問票の作成
第10回	現地調査準備2	スケジュール確認
第11回	事後報告書作成準備1	質問票の完成
第12回	事後報告書作成準備2	報告書の分担
第13回	現地調査	プロジェクト訪問
第14回	現地調査	プロジェクト訪問

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

講義中に指示する。

【参考書】

講義中に指示する。

【成績評価の方法と基準】

現地調査への参加状況（50%）と事前講義での報告や事後報告書の作成状況（50%）によって評価する。

【学生の意見等からの気づき】

現地調査は例年2月か3月に1週間程度で行う。訪問先及び日程は決定次第、公表する。

【その他の重要事項】

現地では英語でインタビューするので、それが実施可能なレベルの英語力を必要とする。

【費用負担】

現地調査に必要な旅費（往復航空運賃、宿泊費、食事代等）は自己負担となる。

ただし、大学院の海外における研究活動補助の制度を活用できる。

【担当教員の専門分野】

<専門領域> 開発の自然環境・社会環境への影響、開発援助、開発と倫理
 <研究テーマ> 「望ましい（望ましくない）「開発」とは何か」「ダム建設に伴う立ち退きと補償、生活再建」
 <主要研究業績>

"Japanese Experience of Involuntary Resettlement: Long-Term Consequences of Resettlement for the Construction of the Ikawa Dam," *International Journal of Water Resources Development*, Routledge, Vol. 25, Issue 3, September 2009, pp. 419-430.

『開発介入と補償：ダム立ち退きをめぐる開発と正義論』勁草書房 2012 年, "Participation and diluted stakes in river management in Japan: the challenge of alternative constructions of resource governance" in Sato, J. ed., *Governance of Natural Resources: Uncovering the social purpose of materials in nature*. United Nations University Press, pp.141-161, July 2013

【Outline and objectives】

This course is a combination of lectures and field trip in order to understand and critically analyze the development project or issue in development. After completing the course, students will be able to; 1) understand the project formation/implementation and the theory and practice of field work, 2) strengthen the writing ability for thesis by preparing field reports.

CUA500P2 - 132

ヒューマン・エコロジー

山内 愛子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

国際的な環境保全を目的とした際の実効性ある取り組みを行うことを前提とし、多様なステークホルダーとともに協働する手法について、主に海洋を現場とした活動を取り上げる。この授業を通じて、実社会で活用可能なステークホルダーエンゲージメントの方法論を深めるとともに、中長期的に環境保全やサステナビリティに取り組むためのツールを学ぶ。

【到達目標】

- 1) 国際的な環境保全のあり方について理解する
- 2) 国際的な潮流と日本独自の課題の調整を検討できる
- 3) サステナビリティの実現に向け、利用可能なツールとその使いかたを理解する
- 4) 国内外の多様なステークホルダーの重要性を理解し、ステークホルダーマッピングができるようになる

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」に関連している。

【授業の進め方と方法】

- 1) 前半は講義を通じて、国際環境 NGO の活動やステークホルダーとの連携について学び、実社会での活動のあり方への理解を深める
 - 2) 後半では、学んだ内容を活かし、実際に実施可能な計画が立てられるよう、グループディスカッションや演習を取り入れる
 - 3) 自分が選択した環境問題の解決に向けた活動計画を作成する
- 授業形態は対面での講義形式

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期後半

回	テーマ	内容
第 1 回	国際的環境保全の実態	国際的な環境問題について、海洋問題を中心に国際環境 NGO の取り組み事例を紹介
第 2 回	サステナビリティとステークホルダー	環境保全活動の根幹となるサステナビリティを実現する上で重要なステークホルダーの役割について学ぶ
第 3 回	マーケットの力を利用した環境保全の事例	近年重要な位置付けにあるマーケットと環境保全の関係性を学ぶ
第 4 回	サステナビリティと多様なツール	ステークホルダーとの連携を可能にする様々なツールについて学ぶ
第 5 回	国際的な視点と国内の課題	国際的な潮流と国内の事情・背景をすり合わせた上で、期待される結果を生むような実践例を学ぶ
第 6 回	国際的な環境問題への貢献	日本で活躍するリーダーをスピーカーとして迎え、国際的視点を持った国内での活動事例を学ぶ
第 7 回	サステナビリティ社会の構築に向けた先進的事例	米国を事例として、先進的な社会事例を学ぶ
第 8 回	環境問題とその原因	自分が解決したい環境問題を選択し、その課題や背景を考える
第 9 回	環境問題とその原因	グループディスカッションを通じて、自分では見えなかった課題や背景を探る
第 10 回	ステークホルダーマッピング	ステークホルダーマッピングの方法を学ぶ
第 11 回	ステークホルダーマッピング	自分が解決したい環境問題に関するステークホルダーマッピングをグループディスカッションを通じて行う
第 12 回	環境保全活動の計画	環境保全活動を行う際の計画立案方法を学ぶ
第 13 回	環境問題の解決に向けた計画発表	実際に取り組み可能な解決方法について発表を行い、パネルディスカッションを行う
第 14 回	環境問題の解決に向けた計画発表	実際に取り組み可能な解決方法について発表を行い、パネルディスカッションを行う

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

講義後半では、自分が解決したい環境問題を選択し、作業を行うため、事前に選択したい環境問題の知識等を深めること。また、ディスカッション等を通じて得られた他者の見解や意見について復習すること。本授業の準備学習・復習時間は各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

教科書は使用せず、毎回資料を配布します。

【参考書】

特になし。ただし、関心ある環境問題について参考文献が必要な場合には個別紹介します。

【成績評価の方法と基準】

独自の環境保全活動計画が完成することを目標とします（要提出）。

計画では、

- 1 国際的な視点で検討できているか？
- 2 解決すべき問題は理解できているか？
- 3 ステークホルダーとの連携が十分検討されているか？

を元に評価します。

評価基準：

提出された環境保全活動計画書から、

- 1 実践可能性 60%
- 2 解決手法 20%
- 3 ステークホルダーとの連携度 20%

【学生の意見等からの気づき】

講義の後にアンケートを行います。

【学生が準備すべき機器他】

特になし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

水産学、海洋環境保全

<研究テーマ>

サステナブルシーフードと環境保全型漁業

<主要研究業績>

- 1 海と水産業の多面的評価－水産研究の新たな役割と方向性－環境保全活動の目指す未来と水産研究・水産業に期待する役割、月刊海洋、2015年8,9月号
- 2 SDGs ビジネス戦略 企業と社会が共発展を遂げるための指南書（第3章 企業が取り組むべき SDGs 目標 14 海の豊かさを守ろう）、日刊工業新聞社
- 3 海洋の生物多様性保全と持続可能な利用、水産振興、2011

【Outline and objectives】

In order to practically contribute to the global conservation issues, the class will showcase the examples of the multi-stakeholders engagement methodology for the marine conservation area. Through this class, you will learn the on ground stakeholders engagement and the tools to deliver mid-long term environmental conservation outcomes.

SOC500P2 - 139

国際環境政策の社会学

島田 昭仁

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

主に、日本とドイツのエネルギーシフト政策の違いについて学ぶ。違いの要因を知るためにコミュニティや労働に対する考え方の違いを学ばなくてはならない。そしてドイツの政策、次に日本の政策、そしてEUとアジアの違いについて説明する。5Gを活用したスマートシティー等、今後のトピックについても扱う。

【到達目標】

エネルギーシフト政策を通して、ドイツと日本、及びEUとアジアのコミュニティの意識の違いについて理解できることを目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻公共マネジメントコースにおいては「DP1」「DP3」に関連している。ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻政策研究コースにおいては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、特に「DP3」は特に強く関連している。ディプロマポリシーのうち、サステイナビリティ学専攻においては「DP2」「DP4」に関連している。

【授業の進め方と方法】

対面式で行う。毎回、テキストと参考書に沿って進め、PPTで解説を行い、ディスカッションを行う。さらに授業でリアクションペーパーを配布し、その結果を授業にフィードバックする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	はじめに EUにおけるドイツとは	EUにおいて緑の党が果たした役割について…なぜ脱炭素なのか？
第2回	脱炭素と現代文明	労働とコミュニティと文明の関り
第3回	独のE政策（福島の影響）	日独「エネルギー転換」比較分析 C1
第4回	独のE政策（草創期）	日独「エネルギー転換」比較分析 C2
第5回	独のE政策（討議主義）	日独「エネルギー転換」比較分析 C3
第6回	独のE政策（核エネルギー）	日独「エネルギー転換」比較分析 C4
第7回	独のE政策（政策の結末）	日独「エネルギー転換」比較分析 C5,6
第8回	日本のE政策（電力供給）	市民電力とは何か…各地取組の実態
第9回	日本のE政策（建築）	ZEB、ZEH…ゼロエネルギーとは
第10回	日本のE政策（運輸交通）	運輸・航空業界における実態
第11回	日本のE政策（都市計画）	スマートシティと5Gで、都市はどうなる？
第12回	EUとアジアの比較（資本主義経済とピグー税）	環境税とは何か 経済学におけるピグー税の適用限界
第13回	EUとアジアの比較（ハイシットンカムと森林税）	森林環境税はどこからきたのか
第14回	まとめ 独日、EUとアジアはなぜちがう	労働とコミュニティの考え方の違いについて ディスカッション

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

以下のテキストは授業内で配布します（購入する必要はありません。）。

・『日独「エネルギー転換」の比較分析』2019, 壽福

【参考書】

以下の参考書は授業内で配布します（購入する必要はありません。）。

・『資料で見るドイツ「エネルギー転換」の歩み』2019, 壽福

・『ゼックプロジェクト調査・研究報告書』2019, 谷口・島田

【成績評価の方法と基準】

- ①期末試験期間内に提出するレポート課題によって評価する。
- ②課題は第14回の授業内で示す。講義内容から自分の意見を記述する。
- ③評価基準は課題把握の的確さ(30%)、論理一貫性(30%)、論拠の正当性(30%)、誠実性(10%)とする。

【学生の意見等からの気づき】

大事なことは何度も繰り返して説明する。

【学生が準備すべき機器他】

状況によってはZoom環境（端末、Wifi）が必要となる。

【その他の重要事項】

国や自治体の政策に25年間関わった教員が、関連法規や施策の解説を行う。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>都市計画

<研究テーマ>住民の合意形成

<主要研究業績>『地域づくり計画学』コミュニティ科学出版,2021

【Outline and objectives】

Learn about the difference between Japan and German energy shift policy mainly. So you must learn the difference in way of thinking for community and the labor. Therefore I will mention a philosophical theme first. And then, I will explain the German policy, Japanese policy and EU and an Asian difference next. I'll treat the Smart-city which utilized 5G the future topic.

環境工学の基礎

藤倉 良

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

環境問題とは人間活動が自然生態系に及ぼす物理的、化学的、生物的な作用とその反作用である。「何がおきているのか」を理解し、「どうすればよいのか」を考えるためには科学知識が欠かせない。本講義では大気汚染、水質汚濁、廃棄物、土壌汚染、騒音・悪臭、有害物質など、ローカルな環境問題の発生メカニズムと対処に関する工学的基礎を修得し、そのような問題への対処方を考える基礎力を養うことを目指す。

【到達目標】

以下を説明できるだけの科学的基礎力を養う。
 大気汚染発生のメカニズムと処理技術
 上下水道の構造
 水質汚濁発生のメカニズム
 土壌汚染の特徴と対策技術
 感覚公害の特徴と騒音・振動・悪臭の原因と対策技術
 廃棄物の定義と現状
 リサイクルの意味と関連する諸制度
 リスク論の考え方と環境に関する基準の設定方法

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」に関連している。

【授業の進め方と方法】

中学卒業レベルの理科の知識を習得していることを前提にして、パワーポイントを用いて講義を進める。パワーポイントはハードコピーを毎回配布し、授業支援システムにもアップする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

なし/No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

春学期前半

回	テーマ	内容
第1回	序論	環境問題とはどのようなものか、環境科学の役割
第2回	大気汚染1	大気汚染の歴史、ばいじん、硫黄酸化物
第3回	大気汚染2	窒素酸化物、自動車排ガス、アスベスト
第4回	上水道	浄水場のしくみ、水質の維持と費用
第5回	下水道と浄化槽	下水道の構造、下水処理場のしくみ、浄化槽
第6回	水質汚濁	水質の指標、有機汚濁、富栄養化
第7回	工場排水と土壌汚染	工場排水の処理、土壌汚染の特徴と対策、地下水汚染
第8回	悪臭	感覚公害、悪臭の測定法、悪臭対策技術
第9回	騒音	音とは、騒音の評価法、騒音対策
第10回	廃棄物1	廃棄物の定義、一般廃棄物
第11回	廃棄物2	産業廃棄物
第12回	リサイクル	リサイクルの種類、関連法規
第13回	有害物質とリスク	有害の意味、リスクとはなにか、リスク認知
第14回	基準の決め方	環境基準と排出基準

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

藤倉良・藤倉まなみ 『文科系のための環境科学入門』 有斐閣

【参考書】

別途、指示する。

【成績評価の方法と基準】

レポート（100%）もしくは最終回に行う試験（100%）で評価する。

【学生の意見等からの気づき】

中学校卒業程度の理科の知識があれば理解できるように心がけるが、高校卒業程度の知識が必要な場合もある。

【学生が準備すべき機器他】

特になし。

【担当教員の専門分野等】

環境システム科学、国際環境協力

【担当教員の関連する業績】

① Ryo Fujikura, Mikiyasu Nakayama, Manami Fujikura (2016) Formulation Process of Diet Law and Cabinet Law in Japan - A Comparative Study of Basic Environmental Law and Basic Law on Biodiversity - , International Journal of Social Science Research, Vol. 4, No. 2, DOI: <http://dx.doi.org/10.5296/ijssr.v4i2.9703>

② Tetsuo Kida and Ryo Fujikura (2015) Pollution Risks Accompanied with Economic Integration of ASEAN Countries and the Fragmentation of Production Processes, International Journal of Social Science Studies, Vol.3, No.5, DOI: 10.11114/ijss.v3i5.915

③ Ryo Fujikura (2011) Environmental Policy in Japan: Progress and Challenges after the Era of Industrial Pollution, Environmental Policy and Governance, Vol. 21, No.5, pp. 303-308

④ Ryo Fujikura (2011) The Influence of Local Governments on National Policy-Setting Processes to Regulate Japan's Vehicle Emissions, Environmental Policy and Governance, Vol. 21, No.5, pp. 309-324

【Outline and objectives】

Environmental problems are physical, chemical and biological consequences and reactions on natural ecosystems caused by human activities. In order to understand "what is happening" and "what should be done", scientific knowledge is indispensable. In this lecture, students will learn the basic engineering knowledge regarding mechanisms and countermeasures of local environmental problems such as air pollution, water pollution, waste, soil contamination, noise, odor, harmful substances.

環境資源・エネルギー政策論

菊地 昌廣

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

気候・気象の不安定化の要因となる地球温暖化対策が COP21 で協議され、新たな国際的枠組みが合意された。今後参加国はこの枠組みに沿って、それぞれの立場で温暖化対策を推進していくことになる。一方で、我が国のエネルギー政策は、再生可能エネルギー活用の進展と原発の安全対策強化を前提とした原発再稼働の流れが進みつつあり、環境維持と経済・文明を支えるエネルギーの持続可能な供給を図るための政府の政策に目が離せないところであり、環境保全に親和性の高いエネルギー選択供給政策の迅速な運用が望まれる。そこで、様々な要因を分析し、環境保全に有効な最適なエネルギーミックスと国民へのエネルギー安定供給を考える上で基礎となる諸課題を理解するとともに、環境に親和性の高い持続可能なエネルギー供給・利用政策提言能力を習得する。

【到達目標】

- ①地球ライフサイクルと社会科学の視点から大気汚染、地球温暖化等、環境問題の捉え方を理解する。
- ②内外のエネルギー統計に基づき、豊かな社会生活を維持するために必要なエネルギー使用現状を理解する。
- ③利用可能なエネルギー資源の特徴と持続可能な供給確保のための政策立案のための考慮要因を理解する。
- ④エネルギー概念、エネルギー利用形態と利用効率等エネルギー利用管理上の要素を理解する。
- ⑤省エネルギー方法と地球に親和性の高い持続可能なエネルギー（再生可能エネルギー）活用方法を理解する。
- ⑥国際対応を含む政府の環境・エネルギー政策を分析し、将来に向けた提言能力を習得する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」に関連している。

【授業の進め方と方法】

初期段階で環境問題を議論する時の視点を地球ライフサイクルと社会科学の2つの側面から整理し、地球規模のエネルギーバランス概念を持って示す。第2段階で議論の背景となる国際的エネルギー資源消費状況を理解するとともに、エネルギー供給の持続可能性確保のための要因を議論する。第3段階でエネルギーの利用形態や効率率等のエネルギー科学について理解するとともに、省エネルギーの概念、再生可能エネルギー導入検討について議論する。最終段階で、国際的な視点で配慮しなければならないエネルギー価格変動要件を踏まえた国内外のエネルギー政策について議論する。特にテキストは採用せず、授業で使用する資料を毎回事前に配信し、予習を求める。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	環境問題の捉え方	環境問題は、産業革命以来人類が構築してきた高度な文明社会の負の遺産であり、エネルギー起源の環境問題を近時間的な社会問題として捉えることを解説する。
第2回	世界のエネルギー資源とソースとシンクの関係	消費可能な化石資源の特徴を解説するとともに、自給率の視点から化石燃料別に海外依存度とエネルギー資源の需給バランスについて解説する。文明社会維持には、エネルギー供給が不可欠であるとの視点に立って、エネルギー資源利用の在り方を解説する。
第3回	エネルギー資源消費の内外の現状	環境資源・エネルギー政策を論ずる背景となるエネルギー資源消費と、地球規模でのエネルギー需要増加状況と資源価格の変動状況を踏まえて、地球規模の資源配分の公平化の視点から国際対策の在り方について解説する。
第4回	エネルギー利用に伴う環境リスク（地球温暖化と気候変動）	大量の化石資源消費に起因する温室効果ガスによる地球温暖化問題と地球規模の気候変動メカニズムについて解説するとともに、環境負荷問題の地域間、世代間への広がりについて解説する。

第5回	環境負荷への歴史的議論とエネルギー政策立案の視点	1970年代に行われたローマクラブの議論及び引き続き行われた環境負荷に対する議論を歴史的な変遷から整理すると共に、ここで提案された政策立案に至る手法について解説する。
第6回	エネルギーの科学技術	エネルギーとは何か、その種類、用途とその特徴等の概念を解説し、熱、動力、電気と形態を変えて利用されているエネルギーの特徴とエネルギー利用時の損失や回収方法について解説する。
第7回	安定したエネルギー資源確保のための要因とエネルギーセキュリティ	安定した資源供給のために不可欠な資源確保対策としてのエネルギーセキュリティ政策について解説する。
第8回	再生可能エネルギーと新エネルギー	再生可能エネルギーやその他の新エネルギー技術や導入実績について紹介すると共に、持続可能なエネルギー供給・利用形態について解説する。
第9回	省エネルギー	エネルギー利用の効率化の観点から、供給サイド及び需要サイドの視点で実施されている省エネルギーや節エネルギー等、経済基盤維持の視点からの将来的な限界や課題について解説する。
第10回	環境・エネルギー税制	エネルギー政策を実現する上で必要となる資金確保のための石油・石炭税、電源開発促進税等既存のエネルギーに係る税制を解説すると共に、環境税（炭素税）のあり方や用途について解説する。
第11回	エネルギー政策の歴史とエネルギー関連法	近代産業発展に伴って採用されてきた我が国のエネルギー政策を解説すると共に、現在のエネルギー関連法令について議論する。
第12回	政策立案のメカニズムと今後の方向性	エネルギー政策基本法に基づくエネルギー基本計画策定のメカニズムの説明と近い将来の我が国のエネルギー利用計画について解説する。
第13回	電力自由化政策とエネルギー供給システム	公共財としての電気エネルギー供給の立場と、私財としての電気エネルギー供給の立場の両面から国民に安定した電力を供給するための我が国の電力供給問題について議論する。
第14回	環境維持に関する国際協議	地球温暖化防止のための気候変動枠組条約の実施取り決めとしての京都議定書及びパリ協定の交渉の経緯を解説し、今後の方向性を示唆する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とします。事前に配布する授業レジュメを予習は必須。

【テキスト（教科書）】

特に特定のテキストは採用しない。講義レジュメは事前に学習支援システムで配信する。

【参考書】

- ①成長の限界、D.H. メドウズ他著、大来佐武郎監修、ダイヤモンド社、昭和47年9月20日
- ②成長を超えて、D.H. メドウズ他著、茅陽一監修、ダイヤモンド社、1992年12月3日
- ③成長の限界、人類の選択、D.H. メドウズ他著、枝廣淳子訳、ダイヤモンド社、2005年3月10日

【成績評価の方法と基準】

授業を通して理解した内容をレポートにまとめ提出を求める。授業内容の理解の到達度を確認する。提出レポートの内容を100点を満点として評価する。

【学生の意見等からの気づき】

半期の授業であり、講義を効果的かつ効率的に進める必要があることから事前配付資料の予習は必須。

【学生が準備すべき機器他】

特になし。

【エネルギー政策】

<専門領域>

エネルギー政策

内外のエネルギー安全保障政策、エネルギー利用環境保全政策、核不拡散政策、核物質管理政策技術

<研究テーマ>

地球環境に親和性の高いエネルギー利用とエネルギーセキュリティの追求
環境保全と安定したエネルギー利用に対する政策提言

<主要研究業績>

- 菊地昌廣「京都議定書目標は達成し得るか」法政大学人間環境論文集第8巻第1号
菊地昌廣「核拡散問題と検証措置」浅田正彦、戸崎洋史 編、核軍縮と不拡散の法と政治第14章（信山社、2008年）
菊地昌廣「大規模災害と科学技術」科学技術と国際関係、共著第9章（内外出版 2013年）

【Outline and objectives】

To learn the energy policy from environmental aspects and utility sides, including energy supply and demand.

公衆衛生研究

宮川 路子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

公衆衛生学は、疾病の治療を目的とする臨床医学とは異なり、疾病の予防を目的とし、さらに健康増進を図る科学技術である。人々を病気から守り、肉体的・精神的に健康な状態で社会生活を送れることを目的としている。これは人類が求める最も基本的かつ重要なサステナビリティである。現代社会には、ありとあらゆる健康問題が山積している。私たちが 21 世紀を健康に生き抜いていくためには、これらの健康問題について、適切な知識を持ち、情報の取捨選択を行っていく必要がある。

本講義では、学生が健康意識を高め、よい生活習慣、予防のためのノウハウを学び、健康寿命の延長を目的として公衆衛生の立場から幅広い知識を身に付けていく。

【到達目標】

本講義では、超高齢社会を生きる社会人にとって必要な健康知識と問題解決能力を習得する。すべての社会問題は人の健康と密接な関係がある。地球上における持続可能性は結局のところ人類が健康に生活していくことを目的としたものがある。

博士課程における研究において人との関わりを考慮する際、予防医学、疫学の知識を持つことは非常に重要である。たとえ、研究テーマが医学と直接かわりがないものであったとしても、視点を変えてみると新たな問題点、解決策の発見につながる可能性がある。

本講義では、幅広い知識を身につけるため、様々な領域の専門家を招いて最先端の知識を得るとともにディスカッションを行って理解を深める。疫学、統計学的、社会学的的手法を用いた実態調査についても実例から方法論を学び、研究に活用する手法、更に自分自身が健康に生きていくための知識、能力を身につけていく。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP4」に関連している。

【授業の進め方と方法】

少子高齢社会において多様化する健康問題、医療費高騰、各種保健行動などについて議論するとともに、疫学、統計学的、社会学的的手法を用いた実態調査の例を論文より学び、対策を講じていく過程を学習する。また、疫学調査、産業保健、などさまざまなテーマを取り上げて専門家を招き、最先端の知識を得ると同時にディスカッションを行って、現代社会における健康、生命についての問題点を浮き彫りにしていく。講義の方法は対面で行う予定である。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期前半

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス 予防医学について	講義を受講するための心構え。 現代社会において必要とされる予防医学の基礎的知識を学ぶ。
第 2 回	分子整合栄養療法とメンタルヘルスケア	健康の基本は栄養であり、細胞内の栄養バランスを適切に整えることにより、からだところの健康を保つことができることを学ぶ。
第 3 回	外部講師講義（曼茶羅ワークショップ）	人生の曼茶羅で自分の今までを振り返り、今後に生かすワークショップを行う
第 4 回	外部講師講義（日本の医療の問題点について）	個の医療から集団の医療へというテーマで学ぶ。
第 5 回	外部講師講義（疫学について）	疫学手法を用いた研究について実例紹介により理解を深める
第 6 回	外部講師講義（日本の精神科医療の問題点について）	精神科専門医から、我が国の精神科医療についての話を聴く
第 7 回	研究発表、まとめ	受講者による健康に関わるテーマの研究発表・ディスカッションを行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

資料は講義の際に配布する。

【参考書】

こころの超整理法

【成績評価の方法と基準】

出席、講義中のディスカッション、最終回の発表とレポートによる。

平常点：50%

発表：30%

レポート：20%

【学生の意見等からの気づき】

教科書に基づく基本的な知識の習得範囲を広げるとともに、専門家の講義とディスカッションをさらに充実させていく。

【学生が準備すべき機器他】

最終回の発表時にレジュメを準備する。発表にパワーポイントを利用する場合には、教室からパソコンを借りて準備をする。

【その他の重要事項】

外部講師の講義については、依頼する講師の都合により、変更することがある。

【担当教員の専門分野等】

公衆衛生学、産業保健、分子整合栄養医学、統合医療、統計学

<研究テーマ> 栄養と健康、就労者のストレスと健康

<主要研究業績> Subjective social status: its determinants and association with health in the Swedish working population (the SLOSH study)

The European Journal of Public Health 2012 年

ビタミン D の健康効果 人間環境論集 19 巻号 79-101

日本の医療を含むサービス産業における過重労働の軽減化における課題：国民はサービスの質・量の低下を甘受することができるか 人間環境論集 20 巻 1 号 1-17

<https://eiouryohou.com/>

【Outline and objectives】

Public health, unlike clinical medicine aimed at treating diseases, is science and technology aiming at the prevention of diseases and promoting health. It aims to protect people from diseases and to live social life in a physical and mental healthy state. This is the most fundamental and important sustainability that mankind desires. In modern society, all kinds of health problems are piled up. In order to live healthy, it is necessary for us to have appropriate knowledge about these health problems, and to select information.

In this lecture, students learn about healthy lifestyle and know-how for disease prevention, and wear broad knowledge from the viewpoint of public health for the purpose of prolonging healthy life span.

ENV500P2 - 112

自然環境共生研究

高田 雅之

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

持続可能な社会に向けて、自然環境と人間活動との調和・共生を実現するためには、自然環境を取り巻く問題の本質を探り、科学的・社会的な視点から、社会の各主体によって相乗的で多面的に取り組まれることが望まれます。本講義では、生態系とそれをめぐる諸課題を理解し、それらに対してこれまで取り組まれてきた様々な手立てと、今後の共生実現に向けた政策の可能性について考究することをテーマとします。

【到達目標】

学生が以下の3点について知識と理解を深め、その要点及び自らの考えを説明できることを目標とします。

- ①保全対象となる自然環境の特性と、人間活動によって引き起こされた問題の現状と課題
- ②人間による影響を減じ、機能と恩恵を維持するために取り組まれてきた政策とその意義
- ③国際的視点に立って自然環境との共生に向けて取り組まれている諸政策

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP3」に関連している。

【授業の進め方と方法】

「主な生態系の理解と保全上の難題」、「日本における自然環境保全のための基盤的な諸施策」、「生物多様性保全・自然再生・里山保全などの近年の重要課題」、「諸外国における多面的な取り組み事例」、「生物多様性と経済」などについて学びます。国内外の実例を交えたプレゼンテーションにより、知識と問題意識を積み重ね、持続可能な自然環境との共生に向けた自らの意見を養うことを通して到達目標に向かいます。

授業は対面を基本とし、必要に応じてオンラインを併用して行います。また、課題提出後の授業、または学習支援システムにおいて、提出された課題からいくつかポイントを取り上げ、全体に対してフィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

なし/No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

秋学期前半

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンスと序論	講義の進め方、自然環境保全を取り巻く動向、生物多様性に関わる概念の進化
第2回	生物多様性のホットスポットと生物の進化	生物多様性のホットスポット、生物の大絶滅・大進化の歴史、哺乳類と人間の登場
第3回	生態系の理解 1：森林・草原	森林生態系の構造と機能、半資源草原・高山草原の生態系
第4回	生態系の理解 2：湿原・干潟	湧水湿地と泥炭地湿原・干潟生態系の特徴
第5回	貴重種の保護	レッドリストによるリスク評価、希少動物・希少植物の取り組み事例
第6回	外来種問題	様々な導入経路と影響、外来生物対策、国内外の事例
第7回	日本の自然環境保全施策 1	自然公園と自然環境保全地域、鳥獣保護制度、野生動物の保護管理
第8回	日本の自然環境保全施策 2	環境アセスメントの特徴と手続き、制度構築経過、戦略的環境アセスメント
第9回	里山と生物多様性	里山の資源循環と共生、生物多様性とは、生態系サービス、バイオミミクリ
第10回	自然再生	自然再生とは、近自然河川工法、グリーンインフラ
第11回	海外の自然環境共生事例 1	フランスの地方自然公園とエコミューゼ、イギリスのトラスト活動
第12回	海外の自然環境共生事例 2	ドイツのピオトープ、欧州農業環境政策
第13回	生物多様性と経済	生態系サービスへの支払い、生物多様性オフセット、認証制度
第14回	景観生態学	景観生態学とは、地理空間情報を用いた分析と事例

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

人と自然との関わりや、自然環境政策、生物多様性などに関するメディア、文献、事例に触れることにより自主的な研究を進めます。本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

特定のものは使用しません。講義において適宜資料を配布します。

【参考書】

毎回の講義において紹介します。

【成績評価の方法と基準】

平常点（50%）：毎回提出するリアクションペーパーにより理解度を評価します。

期末レポート（50%）：最終回に示すレポート課題によって総合的な理解度と考察力を評価します。

【学生の意見等からの気づき】

知識の詰め込みとならないよう、具体的な事例や挿話を交えながら、できる限り丁寧に説明し理解を促していきます。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

自然環境政策、湿地生態学、景観生態学、自然環境地理学、保全生態学

<研究テーマ>

湿地における自然資源の持続的活用、生物多様性と生態系サービスの評価、湿原生態系の構造と人為的影響の評価、生物多様性オフセット

<主要研究業績>

Combined burning and mowing for restoration of abandoned semi-natural grasslands, Appl Veg Sci., 2017.

Drastic declines in Brown Shrike and Yellow-breasted Bunting at the Lake Utonai Bird Sanctuary, Ornithol Sci., 2017.

Tropical Peat Formation, Tropical Peatland Ecosystems, Springer, 2016.

「図説日本の湿地」(朝倉書店, 2017) 編著

「湿地の科学と暮らし」(北大出版会, 2017) 共著

【実務経験のある教員による授業】

公務員、独立行政法人、民間企業

【Outline and objectives】

To achieve harmony and coexistence between the natural environment and human activities for a sustainable society, it is hoped that we will explore the essence of the issues surrounding the natural environment and address the issues from the scientific and social perspectives. In this lecture, the theme is to understand the ecosystem and the issues surrounding it, to learn the various measures that have been taken to address them, and the potential of policies for harmonization between human and nature.

地球環境生態学

鞠子 茂

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

生態学の理論と方法論を概説したうえで、自然の成り立ちや環境問題における生態学の役割について学ぶ。一方、グローバルな環境問題を個別に取り上げ、生態学を中心に据えた分野横断的な議論を行うことにより環境問題を多面的に理解して行く。

【到達目標】

学生は環境問題に取り組む際に科学リテラシーを獲得することの重要性について認識し、生態学を中心とした科学リテラシーを習得することができる。環境問題を限定的に見ることの危険性についても学び、環境問題の本質を見極め、適切な解決に向けて行動できるだけの環境力を身につけることができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻公共マネジメントコースにおいては「DP3」に関連している。ディプロマポリシーのうち、公共政策学専攻政策研究コースにおいては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、特に「DP3」は特に強く関連している。ディプロマポリシーのうち、サステイナビリティ学専攻においては「DP2」「DP4」に関連している。

【授業の進め方と方法】

原則として対面授業であるが、コロナ禍の状況によってはオンライン授業を実施する。授業はパワーポイントによるスライド講義が中心となる。条件が揃えば、野外に出て自然環境や生物を五感で感じる授業も行う。事前に配布した資料をみて各自予習しておく。理解度確認のために課題を課し、解答を提出させる。次回の授業で提示された解答例をみて各自理解度をチェックする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

秋学期集中

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション	授業の進め方と成績評価について説明
第 2 回	生態学という学問	生態学の理論と方法論について概説
第 3 回	生態学的環境論考	環境とは何であるかを講述する
第 4 回	生物多様性は守るべきか	生物多様性保全の是非論を考える
第 5 回	生態系の基盤サービス	基盤サービスの具体例を紹介する
第 6 回	生態系の供給・調整・文化的サービス	供給・調整・文化的サービスの具体例を紹介する
第 7 回	生態系からのしっぺ返し	生態系サービスと環境破壊の関係を論じる
第 8 回	公害問題と科学リテラシー	水俣病を例に科学リテラシーの必要性を議論する
第 9 回	地球温暖化は本当？	地球温暖化問題の是非論を考える
第 10 回	地球温暖化と生態系	温暖化が生態系に与える影響を解説
第 11 回	感染症パンデミック	感染症パンデミックは新しい環境問題
第 12 回	外来種は悪か	外来種の是非論について考究する
第 13 回	目に見えない環境汚染	放射能汚染や環境ホルモンについて解説する
第 14 回	地球文明存続のために	地球文明の存続を考える

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は各 2 時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

教科書は使用しないが、説明を補助するための資料を授業で配布する。

【参考書】

「人類が永遠に続くのではないとしたら」加藤典洋、新潮社 (2014); 「面白くてよくわかる！ エコロジー」満田久義、アスペクト (2013); 「気候変動を理學する」多田隆治、みすず書房 (2013); 「森のバランス」森林立地学会編、東海大学出版 (2012); 「生物の多様性って何だろう」京都大学総合博物館、京都大学学術出版会 (2007)

【成績評価の方法と基準】

確認テスト 50 %、平常点 50 % の配分で成績評価する。

【学生の意見等からの気づき】

個々の学生の研究テーマを理解したうえで、それぞれの研究に役立つような知識や理論についても言及していく。

【その他の重要事項】

事前に参考図書を読んで、生態学や環境科学に関する基本的なことがらや専門用語について理解しておくこと。

【Outline and objectives】

The students will learn about definitions and need-to-know basics of “environment” and “ecology”, and acquire science literacy from an ecological viewpoint to solve environmental crisis on local to global scales.

GEO500P2 - 142

サステナビリティ学事例研究Ⅱ

杉戸 信彦

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

地震災害は、相対的に低頻度ではあるが発生した場合の影響が大きく、地域社会の持続可能性を考える重要な鍵のひとつとなる。本事例研究では、土地条件評価と地震発生予測の現状と課題を検討し、今後の土地利用や社会基盤のあり方を考える。

【到達目標】

日本列島における土地条件評価と地震発生予測を説明できる。
土地利用や社会基盤の課題を具体的に記述できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」に関連している。

【授業の進め方と方法】

対面授業を予定している。
主に講義形式。一部で図上作業も実施する。
リアクションペーパー等からポイントを選定し、全体に対してフィードバックを行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

秋学期前半

回	テーマ	内容
第1回	地形調査法と実習	変動地形と古地震の調査法を概観したのち、活断層の位置情報を知るための地形判読実習を実施する。
第2回	地震発生予測	地震発生繰り返しモデルや長期評価について検討を行う。
第3回	土地条件評価	日本列島の地形環境について自然地理学的な視点から概観したのち、地形と地質、災害脆弱性、地域危険度などについて検討を行う。
第4回	土地条件に関する実習	地形と地質、災害脆弱性、地域危険度などへの理解をさらに深めるため、地形や表層地質などの情報を用いた机上作業を行う。
第5回	地震と活断層	日本列島の活断層分布とその地域性、歴史地震、予測などについて検討を行う。
第6回	海溝型地震	日本列島における海溝型地震とその地域性、歴史地震、予測などについて検討を行う。
第7回	土地利用と社会基盤	災害危険区域や高台移転、防潮堤、建築基準など、土地利用および社会基盤に関わる話題について検討を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業内容に関わる文献等を参照して準備学習および復習を行う。
自然環境や自然災害、防災に関わる時の話題や映像等に積極的に触れる。
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

担当教員が作成した印刷物を授業にて配布

【参考書】

授業中に紹介

【成績評価の方法と基準】

平常点（50%）・期末レポート（50%）。平常点はリアクションペーパー等によって評価する。期末レポートは、(1) 日本列島における土地条件評価と地震発生予測を説明できるか、(2) 土地利用や社会基盤の課題を具体的に記述できるか、を問う内容とする。

【学生の意見等からの気づき】

知識と基礎力に加え、応用力や思考力をより涵養すべく、詳しく具体的な説明を心がける。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>自然地理学、自然災害

<研究テーマ>変動地形、活断層、地震、土地条件

<主要研究業績>

1) 杉戸信彦, 2014, 大地震の歴史とメカニズムを捉えるー活断層への地理学的アプローチ-, 木村周平・杉戸信彦・柄谷由香編, 「災害フィールドワーク論」, FENICS100 万人のフィールドワーカシリーズ 5, 古今書院, 212p, 132-149.

2) 杉戸信彦・松多信尚・石黒聡士・内田主税・千田良道・鈴木康弘, 2015, 津波浸水域データと数値標高モデルの GIS 解析に基づく 2011 年東北地方太平洋沖地震の津波遡上高の空間分布, 地学雑誌, 124, 157-176. doi: 10.5026/jgeography.124.157

3) Sugito, N., H. Sawa, K. Taniguchi, Y. Sato, M. Watanabe, and Y. Suzuki, 2019, Evolution of Riedel-shear pop-up structures during cumulative strike-slip faulting: A case study in the Misayama-Godo area, Fujimi Town, central Japan, Geomorphology, 327, 446-455. doi: 10.1016/j.geomorph.2018.11.026

【Outline and objectives】

Risk management for recurrent earthquake disasters is a key to improve social resilience, which supports future sustainable society, because earthquakes cause serious damages although their frequency is not high. We examine land-condition evaluation and long-term earthquake prediction, in order to propose future land use as well as to suggest how to use social infrastructures.

論文研究指導 1 A

金藤 正直

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本演習では、修士論文の作成を有効的に進めていくために必要とされる研究・調査の方法論を習得していくことを目的とする。

【到達目標】

本演習では、①研究の目的や視点の設定方法と、②先行研究の分析方法（文献調査の方法）、といった修士課程で行っていくための研究・調査の基礎的な方法を習得することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連している。

【授業の進め方と方法】

本演習は対面で実施する。履修者には、本演習で研究・調査の方法論を習得し、これに基づいて研究・調査報告を行ってもらうとともに、小論文（研究計画書）を作成してもらう。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション	修士論文のフレームワークを講義するとともに、その中でこの授業で取り扱う内容について確認する。また、履修者がこれまでに取り組んできた（学部時の）研究・調査（卒業論文）の内容を報告し、その内容をこの回で講義したフレームワークに当てはめながら再確認する。
第 2 回	研究の目的と視点の設定方法①	研究の目的と視点の設定方法を講義する。
第 3 回～ 第 6 回	研究の目的と視点の検討	関心のある研究テーマに関する「著書」、「研究論文」、「報告書」、「新聞・雑誌記事など」の中からいくつか紹介し、その内容を報告する。
第 7 回	研究の目的と視点の設定方法②	第 3 回から第 6 回までの報告内容の検討から、修士論文における研究の目的と視点を報告する。
第 8 回	先行研究の分析方法①	第 7 回で設定された研究の目的と視点に基づく先行研究の分析方法を講義する。
第 9 回～ 第 12 回	先行研究の分析	研究の目的と視点に関する「著書」、「研究論文」、「報告書」、「新聞・雑誌記事など」の中からいくつか紹介し、その内容を報告する。
第 13 回	先行研究の分析方法②	第 9 回から第 12 回までの報告内容に基づいて、先行研究の分析内容をリスト化し、それを報告する。
第 14 回	小論文の作成方法	第 13 回までの内容を加味した小論文（研究計画書）の作成方法を講義する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

著書、研究論文、報告書、新聞・雑誌記事などから、研究の目的と視点の検討やこれらに基づく先行研究の調査・分析を計画的に行うとともに、その結果を報告に反映させてください。

【テキスト（教科書）】

特に使用しませんが、毎回の報告ではワードあるいはパワーポイントを使用しますので、履修者はその報告レジュメの作成と配布をお願いします。

【参考書】

履修者の研究・調査の進捗状況に応じて、授業中に著書、論文、報告書、新聞・雑誌記事などを紹介します。

【成績評価の方法と基準】

本演習の成績は次の 4 点に基づいて評価します。

- ・報告用配布レジュメの内容（20 %）
- ・報告内容（プレゼンテーション能力）（20 %）
- ・討論への参加（発言内容）（20 %）
- ・小論文（研究計画書）の内容（40 %）

【学生の意見等からの気づき】

毎年、意見や要望を考慮に入れ、講義内容を改善しています。

【学生が準備すべき機器他】

必要に応じてパソコンとプロジェクターを使用します。

【その他の重要事項】

質問などについては電子メールで連絡ください。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

環境経営論、地域経営論

<研究テーマ>

企業や地域の持続的成長を実現するための経営・会計手法に関する研究

<主要研究業績>

- ・金藤正直（2014）「地域サプライチェーンとしての産業クラスターのマネジメント-サプライチェーン・マネジメントの適用-」二神恭一・高山貢・高橋賢編著『地域再生のための経営と会計』中央経済社、41-52 頁。
- ・金藤正直（2015）「食料産業クラスターマネジメントを支援するバランス・スコアカードの構想」『産業経理』Vol.75 No.1、53-63 頁。
- ・金藤正直（2016）「サステナビリティ・サプライチェーン・マネジメントの実践的展開モデル」『横浜経営研究』第 37 巻第 2 号、55-72 頁。
- ・金藤正直（2018）「フードバレーの戦略的マネジメントを支援するバランス・スコアカードの適用可能性-フードバレーとかちの取組みを中心として-」『経済学論纂』第 58 巻第 2 号、65-84 頁。
- ・金藤正直（2021）「健康経営の展望-どう評価・開示するか？-」『企業会計』Vol.73 No.2、87-90 頁。

【Outline and objectives】

The purpose of this seminar is to learn the methodology of research and survey for writing a master thesis.

SES600P2 - 202

論文研究指導 1 B

金藤 正直

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本演習では、修士論文の完成度を高めていくために必要とされる研究・調査の方法論について習得していくことを目的とする。

【到達目標】

本演習では、論文研究指導 1A での取組みを加味しながら、次の方法論を習得することを目指す。

- ① 修士論文の基盤となる理論モデルの検討方法
- ② アンケート調査およびヒアリング調査とこれらの調査結果の分析方法
- ③ 企業や地域の事例研究（ケーススタディ）の方法
- ④ 論文研究指導 1A と①～③の検討結果のまとめ方

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連している。

【授業の進め方と方法】

本演習は対面で行う。履修者には、本演習で研究・調査の方法論を習得し、これに基づいて研究・調査報告を行ってもらうとともに、その結果を参考にしながら小論文（研究計画書）を作成してもらう。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション	修士論文のフレームワークとその中で 1 年次春学期までの研究・調査の内容を再確認する。
第 2 回	理論モデルの検討方法①	論文研究指導 1 A の内容に基づいて、修士論文の基盤になる理論モデルの検討方法を講義する。
第 3 回～ 第 4 回	理論モデルの検討	論文の基盤になると考えられる理論モデルを「著書」、「研究論文」、「報告書」から検討し、その内容を報告する。
第 5 回	理論モデルの検討方法②	第 3 回から第 4 回までに検討した理論モデルを整理し、修士論文に適したモデルを決定する。
第 6 回	アンケート調査の方法	アンケート調査票の作成から調査結果の分析方法までの流れを講義する。
第 7 回～ 第 8 回	アンケート調査票の作成	アンケート調査票（案）を作成し、その内容について報告する。
第 9 回	ヒアリング調査の方法	ヒアリング調査票の作成から調査結果の分析方法までの流れを講義する。
第 10 回	ヒアリング調査票の作成	ヒアリング調査票（案）を作成し、その内容について報告する。
第 11 回	事例研究の方法	企業や地域の取組事例の研究・調査（ケーススタディ）の意義とその方法について講義する。
第 12 回 ～第 13 回	ケーススタディの報告	ケーススタディの結果を報告する。
第 14 回	修士論文の構想	第 13 回までの内容を加味して、修士論文の構想について報告する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

著書、研究論文、報告書から、修士論文の基盤になると考えられる理論モデルの検討や、アンケート調査やヒアリング調査のための調査票の作成・分析方法を計画的に学習するとともに、その結果を報告や小論文（研究計画書）に反映させてください。

【テキスト（教科書）】

特に使用しませんが、毎回の報告ではワードあるいはパワーポイントを使用しますので、履修者はその報告レジュメの作成と配布をお願いします。

【参考書】

履修者の研究・調査の進捗状況に応じて、授業中に著書、論文、報告書、新聞・雑誌記事などを紹介します。

【成績評価の方法と基準】

本演習の成績は次の 4 点に基づいて評価します。

- ・ 討論への参加（発言内容）（20 %）
- ・ 報告用配布レジュメの内容（20 %）
- ・ 報告内容（プレゼンテーション能力）（20 %）
- ・ 修士論文の構想（40 %）

【学生の意見等からの気づき】

毎年、意見や要望を考慮に入れ、講義内容を改善しています。

【学生が準備すべき機器他】

必要に応じてパソコンとプロジェクターを使用します。

【その他の重要事項】

質問などについては電子メールで連絡ください。

【担当教員の専門分野等】

< 専門領域 >

環境経営論、地域経営論

< 研究テーマ >

企業や地域の持続的成長を実現するための経営・会計手法に関する研究

< 主要研究業績 >

- ・ 金藤正直 (2014) 「地域サプライチェーンとしての産業クラスターのマネジメント- サプライチェーン・マネジメントの適用-」 二神恭一・高山貢・高橋賢編著『地域再生のための経営と会計』中央経済社、41-52 頁。
- ・ 金藤正直 (2015) 「食料産業クラスターマネジメントを支援するバランス・スコアカードの構想」『産業経理』Vol.75 No.1、53-63 頁。
- ・ 金藤正直 (2016) 「サステナビリティ・サプライチェーン・マネジメントの実践的展開モデル」『横浜経営研究』第 37 巻第 2 号、55-72 頁。
- ・ 金藤正直 (2018) 「フードバレーの戦略的マネジメントを支援するバランス・スコアカードの適用可能性- フードバレーとからの取組みを中心として-」『経済学論叢』第 58 巻第 2 号、65-84 頁。
- ・ 金藤正直 (2021) 「健康経営の展望- どう評価・開示するか? -」『企業会計』Vol.73 No.2、87-90 頁。

【Outline and objectives】

The purpose of this seminar is to learn the methodology of research and survey for writing a master thesis.

論文研究指導 1 A

北川 徹哉

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

修士論文のための研究方針の決定と知識の吸収

【到達目標】

1. 課題を設定する。
2. 既往の研究に関する文献調査を行う。
3. 課題解決への手段を構築する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連している。

【授業の進め方と方法】

調査とディスカッションを通じて、研究方針の策定と修士論文の執筆の準備を行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり/Yes

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
1	現状分析	文献調査, 整理, 理解
2	現状分析	文献調査, 整理, 理解
3	現状分析	文献調査, 整理, 理解
4	現状分析	文献調査, 整理, 理解
5	現状分析	文献調査, 整理, 理解
6	現状分析	文献調査, 整理, 理解
7	第1～6回のとりまとめ	文献調査, 整理, 理解
8	解決方法の探索	抽出された課題の解決方法の検討
9	解決方法の探索	抽出された課題の解決方法の検討
10	解決方法の探索	抽出された課題の解決方法の検討
11	解決方法の探索	抽出された課題の解決方法の検討
12	解決方法の探索	抽出された課題の解決方法の検討
13	解決方法の探索	抽出された課題の解決方法の検討
14	第8～13回のとりまとめ	抽出された課題の解決方法の検討

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

全回：資料およびスライドの作成

【テキスト（教科書）】

使用しない。

【参考書】

必要に応じて紹介する。

【成績評価の方法と基準】

資料およびスライド（70%：論述の適切さ、到達目標1～3への到達度）、議論（30%：説明の正確さ、質疑応答の適切さ）により評価する。

【学生の意見等からの気づき】

該当なし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>環境流体, 気象社会論, 流体関連振動
<研究テーマ>強風の社会への影響と対策, 気象リスクヘッジ, 数値流体解析
<主要研究業績>屋外イベント入場者数を対象とする気象と日程に関する複合要因分析, 第25回風工学シンポジウム論文集, 2018, pp.121-126. 平均回帰 Ornstein-Uhlenbeck 過程による日最大風速の模擬データの作成, 土木学会論文集 A1 (構造・地震工学), Vol.73, No.3, 2017, pp.579-592. 淡路花博 2000 に導入された天候デリバティブについての一考察, 第23回風工学シンポジウム論文集, 2014, pp.19-24. Numerical investigation on flow around circular cylinders in tandem arrangement at a subcritical Reynolds number, Journal of Fluids and Structures, Vol.24, No.5, 2008, pp.680-699. 自動車励起ガストエネルギーを利用した発電の試み, 日本風工会論文集, Vol.32, No.2, 2007, pp.87-92.

【Outline and objectives】

Studies, investigations and discussions on the research issue for the master thesis.

SES600P2 - 202

論文研究指導 1 B

北川 徹哉

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

修士論文のための研究方針の決定と知識の吸収

【到達目標】

1. 課題を設定する。
2. 既往の研究に関する文献調査を行う。
3. 課題解決への手段を構築する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連している。

【授業の進め方と方法】

調査とディスカッションを通じて、研究方針の策定と修士論文の執筆の準備を行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
1	解決方法の探索	抽出された課題の解決方法の検討
2	解決方法の探索	抽出された課題の解決方法の検討
3	解決方法の探索	抽出された課題の解決方法の検討
4	解決方法の探索	抽出された課題の解決方法の検討
5	解決方法の探索	抽出された課題の解決方法の検討
6	解決方法の探索	抽出された課題の解決方法の検討
7	第1～6回のとりまとめ	抽出された課題の解決方法の検討
8	解決方法の具体化	解決方法のインプリメンテーション
9	解決方法の具体化	解決方法のインプリメンテーション
10	解決方法の具体化	解決方法のインプリメンテーション
11	解決方法の具体化, 中間報告会の準備	解決方法のインプリメンテーション
12	解決方法の具体化, 中間報告会の準備	解決方法のインプリメンテーション
13	解決方法の具体化, 中間報告会の準備	解決方法のインプリメンテーション
14	第8～13回のとりまとめ	解決方法のインプリメンテーション

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

全回：資料およびスライドの作成

【テキスト（教科書）】

使用しない。

【参考書】

必要に応じて紹介する。

【成績評価の方法と基準】

資料ならびにスライド（50%：論述の適切さ、到達目標1～3への到達度）、議論（50%：説明の正確さ、質疑応答の適切さ）により評価する。

【学生の意見等からの気づき】

該当なし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>環境流体, 気象社会論, 流体関連振動
 <研究テーマ>強風の社会への影響と対策, 気象リスクヘッジ, 数値流体解析
 <主要研究業績>屋外イベント入場者数を対象とする気象と日程に関する複合要因分析, 第25回風工学シンポジウム論文集, 2018, pp.121-126. 平均回帰 Ornstein-Uhlenbeck 過程による日最大風速の模擬データの作成, 土木学会論文集 A1 (構造・地震工学), Vol.73, No.3, 2017, pp.579-592. 淡路花博 2000 に導入された天候デリバティブについての一考察, 第23回風工学シンポジウム論文集, 2014, pp.19-24. Numerical investigation on flow around circular cylinders in tandem arrangement at a subcritical Reynolds number, Journal of Fluids and Structures, Vol.24, No.5, 2008, pp.680-699. 自動車励起ガストエネルギーを利用した発電の試み, 日本風工学会論文集, Vol.32, No.2, 2007, pp.87-92.

【Outline and objectives】

Studies, investigations and discussions on the research issue for the master thesis.

SES600P2 - 201

論文研究指導 1 A

小島 聡

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この演習では、修士課程の1年生の学生に対して調査研究の指導を行う。学生は、演習を通して、以下の内容に取り組む。

- ① 研究テーマを決めるためのブレインストーミング
- ② 研究テーマの案についての検討
- ③ 調査研究の基礎的な方法の習得
- ④ 調査研究の作業スキルの習得

【到達目標】

この演習に参加する学生の到達目標は、以下のとおりである。

- ・ 修士論文のテーマに関する主題、分析対象、分析方法など調査研究の設計図を作成した上で、それについて明確に説明できる力を身につける。
- ・ テーマに関する調査遂行能力と論文作成の基本的な技法を習得する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連している。

【授業の進め方と方法】

修士論文の作成に向けて、参加学生の問題意識を明確化した上で、具体的なテーマ、調査研究対象の設定について指導し、さらに調査研究計画の作成と関連文献の収集・講読などに関する指導、調査研究の遂行に関する指導を行う。毎回、自ら作成したペーパーに基づいて発表することをもとめる。提出したペーパーにはその場でコメントするとともに、必要に応じて、後日、添削や追加コメントを行う。演習は、参加学生が、互いに他者の調査研究の進捗状況から学びあう場とする。なお、この授業は、対面授業を基本としつつも、COVID - 19 の状況による社会情勢や参加者の感染リスク等に応じて、Zoom による双方向型授業の実施についても柔軟に対応する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
1	ガイダンス	調査研究や論文作成に関する基礎的な理解と工程管理を促す。
2	問題意識の報告	研究テーマの選択に向けて問題意識を報告する。
3	問題意識の具体化	研究テーマの選択のために、報告した問題意識を具体化する。
4	研究テーマの候補づくり	研究テーマの候補を作成、提示し選定する。
5	研究テーマの検討	複数のテーマの中から研究対象について検討する。
6	研究テーマの再検討	複数のテーマの中から研究対象について再検討する。
7	研究テーマの確定	複数のテーマの中から研究対象を確定する。
8	研究テーマに関する構図の作成	研究テーマについて主題を設定し、分析の構図を作成する。
9	研究テーマに関する構図の修正	研究テーマについて分析の構図を修正する。
10	調査研究計画の作成	調査研究計画を作成し工程とポイントを確認する。
11	調査研究計画の修正	調査研究計画を修正し工程とポイントを確認する。
12	調査研究計画の再修正	調査研究計画を再修正し工程とポイントを確認する。
13	関連文献リストの作成	研究テーマに関する関連文献リストを作成し検討する。
14	関連文献リストの修正	研究テーマに関する関連文献リストを修正し検討する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

参加学生は、以下の時間外学習を行う（この授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とする）。

・ 修士論文の作成に向けて、自分のテーマを設定し調査研究を進めること。

【テキスト（教科書）】

特に用いない。

【参考書】

調査研究の進め方や論文作成の方法に関する文献、演習参加者の個別のテーマに関する文献は、演習実施期間中に適宜、提示する。

【成績評価の方法と基準】

平常点（参加姿勢）（70%）、課題提出（30%）の総合評価とする。修士論文作成に向けた演習のため、自発的な取り組みの途中経過を毎回報告し、調査研究を段階的に進展させていくことを重視する。

【学生の意見等からの気づき】

アンケート対象外につき該当なし

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞行政学、地方自治論

＜研究テーマ＞持続可能性と自治体政策、地域環境ガバナンス、市民社会と自治体行政システム

＜主要研究業績＞

「アカウンタビリティと自治体政策－説明責任の体系と再編－」『自治体経営改革』（共著）、（ぎょうせい、2004）

「参加手法のイノベーション－自治体政策への活用に向けて－」『新しい自治のしくみづくり』（共著）、（ぎょうせい、2006）

「自治体環境政策の軌跡と持続可能性」『分権時代の地方自治』（共著）、（三省堂、2007）

『フィールドから考える地域環境 持続可能な地域社会をめざして』（共編著）（ミネルヴァ書房、2012）

「自治体の参加型政策システムと市民協議会の可能性」『地域開発』（vol.574,2012）

「上下流連携とサステナビリティ」『自治体学』（vol.33-2,2020）

「人口減少社会における地域の持続可能性と政策論－（私）と（社会）の世代間継承可能性を手がかりとして－」『自治研かながわ月報』（NO.183,2020）

【Outline and objectives】

This seminar guides surveillance study to the student of the first grader of a master's course. Students tackle the following contents at a seminar.

- ① Brainstorming for deciding a subject of research
- ② Examination about the proposal of a subject of research
- ③ Acquisition of basic method of surveillance study
- ④ Acquisition of work skill of surveillance study

SES600P2 - 202

論文研究指導 1 B

小島 聡

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この演習では、修士課程の1年生の学生に対して調査研究の指導を行う。学生は、演習を通して、以下の内容に取り組む。

- ① 研究テーマの具体的な内容の決定
- ② 研究テーマに関する既存研究の動向の確認
- ③ 調査研究の遂行

【到達目標】

この演習に参加する学生の到達目標は、以下のとおりである。

- ・修士論文のテーマに関する主題、分析対象、分析方法など調査研究の設計図を精緻化する。
- ・テーマに関する文献の読解力を高める。
- ・テーマについて明確に説明できる力を身につける。
- ・調査研究・論文作成の基本的な技法を習得する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連している。

【授業の進め方と方法】

修士論文の作成に向けて、論文研究指導1Aに続いて、参加学生の研究テーマについて、調査研究計画の再調整と関連文献の収集・講読などに関する指導、調査研究の遂行に関する指導、修士論文の練習として小論文の作成に関する指導を行う。毎回、自ら作成したペーパーに基づいて発表することをもとめ、提出したペーパーや小論文はその場でコメントするとともに、必要に応じて、後日、添削や追加コメントを行う。演習は、参加学生が、互いに他者の調査研究の進捗状況から学びあう場とする。なお、この授業は、対面授業を基本としつつも、COVID-19の状況による社会情勢や参加者の感染リスク等に応じて、Zoomによる双方向型授業の実施についても柔軟に対応する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
1	関連文献の報告	関連文献の学習状況に関する報告を行う。
2	フィールド調査プランの検討	ヒアリング等のフィールド調査プランについて検討する。
3	フィールド調査プランの確定	ヒアリング等のフィールド調査プランについて確定する。
4	調査研究の報告	調査研究の進捗状況について報告する。
5	調査研究の報告	調査研究の進捗状況について報告する。
6	研究テーマに関する構図の修正	研究テーマに関する分析の構図の修正作業を行う。
7	調査研究の報告	調査研究の進捗状況について報告する。
8	小論文の課題設定と執筆方法の学習	研究テーマに関連する小論文の課題を設定し、また論文の執筆方法について学ぶ。
9	フィールド調査の結果の報告と検討	フィールド調査の結果について報告し、論文への反映について検討する。
10	調査研究の報告	調査研究の進捗状況について報告する。
11	調査研究の報告	調査研究の進捗状況について報告する。
12	小論文の報告	研究テーマに関する小論文を提出し、内容を報告する。
13	小論文からの発展方向性についての検討	小論文をふまえて、どのように発展させるか、次のステップについて検討する。
14	調査研究計画の再調整	次年度の調査研究計画について再調整する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

参加学生は、以下の時間外学習を行う（この授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とする）。

- ・修士論文の作成に向けて、自分のテーマを設定し調査研究を進めること。
- ・テーマに関連した小論文を作成すること。

【テキスト（教科書）】

特に用いない。

【参考書】

調査研究の進め方や論文作成の方法に関する文献、演習参加者の個別のテーマに関する文献は、演習実施期間中に適宜、提示する。

【成績評価の方法と基準】

平常点（参加姿勢）（70%）、課題提出（30%）の総合評価とする。修士論文作成に向けた演習のため、自発的な取り組みの途中経過を毎回報告し、調査研究を段階的に進展させていくことを重視する。

【学生の意見等からの気づき】

アンケート対象外につき該当なし

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞行政学、地方自治論

＜研究テーマ＞持続可能性と自治体政策、地域環境ガバナンス、市民社会と自治体行政システム

＜主要研究業績＞

「アカウントビリティと自治体政策－説明責任の体系と再編－」『自治体経営改革』（共著）、（ぎょうせい、2004）

「参加手法のイノベーション－自治体政策への活用に向けて－」『新しい自治のしくみづくり』（共著）、ぎょうせい、2006）

「自治体環境政策の軌跡と持続可能性」『分権時代の地方自治』（共著）、（三省堂、2007）

『フィールドから考える地域環境 持続可能な地域社会をめざして』（共編著）（ミネルヴァ書房、2012）

「自治体の参加型政策システムと市民協議会の可能性」『地域開発』（vol.574,2012）

「上下流連携とサステナビリティ」『自治体学』（vol.33-2,2020）

「人口減少社会における地域の持続可能性と政策論－（私）と（社会）の世代間継承可能性を手がかりとして－」『自治研かながわ月報』（NO.183,2020）

【Outline and objectives】

This seminar guides surveillance study to the student of the first grader of a master's course. Students tackle the following contents at a seminar.

- ① Determination of the concrete contents of the subject of research
- ② The check of the trend of the existing research on a subject of research
- ③ Execution of surveillance study

論文研究指導 1 A

杉戸 信彦

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

修士論文作成に向け、研究および議論を行う。

【到達目標】

修士論文の作成に向け、課題を発見し、解決に向けた調査を実施して、その成果を期末レポートとしてとりまとめる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連している。

【授業の進め方と方法】

対面授業を予定している。

研究の方向性を決め、文献レビュー等を行いながら研究テーマを具体的に定める。そのうえで、文献レビュー等をすすめながら調査計画を立案し、調査を実施してとりまとめを行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	研究の方向性の検討 (1)	研究の方向性について検討を行う。
第 2 回	研究の方向性の検討 (2)	研究の方向性について検討を行い決定する。
第 3 回	関連文献のレビュー (1)	研究予定内容に関する文献のレビューを行う。
第 4 回	関連文献のレビュー (2)	研究予定内容に関する文献のレビューを行う。
第 5 回	研究テーマの検討	研究の方向性についてあらためて検討を行い、研究テーマを具体的に定める。
第 6 回	関連文献のレビュー (3)	研究テーマに関する文献のレビューを行い、研究内容を検討する。
第 7 回	関連文献のレビュー (4)	研究テーマに関する文献のレビューを行い、研究内容を検討する。
第 8 回	調査計画の立案 (1)	研究内容に応じた独自の調査計画を検討する。
第 9 回	調査計画の立案 (2)	研究内容に応じた独自の調査計画を検討する。
第 10 回	調査結果のまとめ (1)	調査結果を報告し、まとめに向けた検討を行う。
第 11 回	調査結果のまとめ (2)	調査結果を報告し、まとめに向けた検討を行う。
第 12 回	調査計画の立案 (3)	研究内容に応じた独自の調査計画を検討する。
第 13 回	調査結果のまとめ (3)	調査結果を報告し、まとめに向けた検討を行う。
第 14 回	レポートの発表	発表および質疑応答・議論を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

調査や準備、とりまとめ作業等に取り組む（授業時間は発表や議論が中心となるため）。

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

授業中に紹介

【参考書】

授業中に紹介

【成績評価の方法と基準】

平常点 (50%)・期末レポート (50%)。平常点は研究への取り組みの状況等をもとに評価する。期末レポートは、調査の状況、また構成や論理の整ったレポートかどうか等をもとに評価する。

【学生の意見等からの気づき】

応用力や思考力、スキルなどの涵養を心がける。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>自然地理学、自然災害

<研究テーマ>変動地形、活断層、地震、土地条件

<主要研究業績>

1) 杉戸信彦, 2014. 大地震の歴史とメカニズムを捉えるー活断層への地理学的アプローチ-, 木村周平・杉戸信彦・柄谷由香編, 「災害フィールドワーク論」, FENICS100 万人のフィールドワーカーシリーズ 5, 古今書院, 212p, 132-149.

2) 杉戸信彦・松多信尚・石黒聡士・内田主税・千田良道・鈴木康弘, 2015. 津波浸水域データと数値標高モデルの GIS 解析に基づく 2011 年東北地方太平洋沖地震の津波遡上高の空間分布, 地学雑誌, 124, 157-176. doi: 10.5026/jgeography.124.157

3) Sugito, N., H. Sawa, K. Taniguchi, Y. Sato, M. Watanabe, and Y. Suzuki, 2019, Evolution of Riedel-shear pop-up structures during cumulative strike-slip faulting: A case study in the Misayama-Godo area, Fujimi Town, central Japan, Geomorphology, 327, 446-455. doi: 10.1016/j.geomorph.2018.11.026

【Outline and objectives】

We conduct research and discussion for master theses.

SES600P2 - 202

論文研究指導 1 B

杉戸 信彦

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

修士論文作成に向け、研究および議論を行う。

【到達目標】

修士論文の作成に向け、課題を発見し、解決に向けた調査を実施して、その成果を期末レポートとしてとりまとめる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連している。

【授業の進め方と方法】

対面授業を予定している。

研究テーマを具体的に定め、文献レビュー等を行いながら調査計画を立案し、調査を実施してとりまとめる。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	研究テーマの検討	研究テーマについて検討を行い、具体的に定める。
第 2 回	関連文献のレビュー (1)	研究テーマに関する文献のレビューを行い、研究内容を検討する。
第 3 回	関連文献のレビュー (2)	研究テーマに関する文献のレビューを行い、研究内容を検討する。
第 4 回	調査計画の立案 (1)	研究内容に応じた独自の調査計画を検討する。
第 5 回	調査計画の立案 (2)	研究内容に応じた独自の調査計画を検討する。
第 6 回	調査結果のまとめ (1)	調査結果を報告し、まとめに向けた検討を行う。
第 7 回	調査結果のまとめ (2)	調査結果を報告し、まとめに向けた検討を行う。
第 8 回	関連文献のレビュー (3)	研究テーマに関する文献のレビューを行い、研究内容を検討する。
第 9 回	関連文献のレビュー (4)	研究テーマに関する文献のレビューを行い、研究内容を検討する。
第 10 回	調査計画の立案 (3)	研究内容に応じた独自の調査計画を検討する。
第 11 回	調査結果のまとめ (3)	調査結果を報告し、まとめに向けた検討を行う。
第 12 回	調査計画の立案 (4)	研究内容に応じた独自の調査計画を検討する。
第 13 回	調査結果のまとめ (4)	調査結果を報告し、まとめに向けた検討を行う。
第 14 回	レポートの発表	発表および質疑応答・議論を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

調査や準備、とりまとめ作業等に取り組む（授業時間は発表や議論が中心となるため）。

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

授業中に紹介

【参考書】

授業中に紹介

【成績評価の方法と基準】

平常点 (50%)・期末レポート (50%)。平常点は研究への取り組みの状況等をもとに評価する。期末レポートは、調査の状況、また構成や論理の整ったレポートかどうか等をもとに評価する。

【学生の意見等からの気づき】

応用力や思考力、スキルなどの涵養を心がける。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>自然地理学、自然災害

<研究テーマ>変動地形、活断層、地震、土地条件

<主要研究業績>

1) 杉戸信彦, 2014, 大地震の歴史とメカニズムを捉えるー活断層への地理学的アプローチ-, 木村周平・杉戸信彦・柄谷由香編, 「災害フィールドワーク論」, FENICS100 万人のフィールドワーカーシリーズ 5, 古今書院, 212p, 132-149.

2) 杉戸信彦・松多信尚・石黒聡士・内田主税・千田良道・鈴木康弘, 2015, 津波浸水域データと数値標高モデルの GIS 解析に基づく 2011 年東北地方太平洋沖地震の津波遡上高の空間分布, 地学雑誌, 124, 157-176. doi: 10.5026/jgeography.124.157

3) Sugito, N., H. Sawa, K. Taniguchi, Y. Sato, M. Watanabe, and Y. Suzuki, 2019, Evolution of Riedel-shear pop-up structures during cumulative strike-slip faulting: A case study in the Misayama-Godo area, Fujimi Town, central Japan, Geomorphology, 327, 446-455. doi: 10.1016/j.geomorph.2018.11.026

【Outline and objectives】

We conduct research and discussion for master theses.

SES600P2 - 201

論文研究指導 1 A

高田 雅之

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

自然環境保全に関わる課題に関して、テーマ設定、研究手法の検討、分析評価などを含む修士論文の作成に向けた研究指導を受けます。

【到達目標】

修士課程 1 年生を対象として、研究設計と計画作成、並びに手法と必要なデータのリストアップ、これらに沿った研究の推進を行い、2 年目の修士論文執筆に至る中間成果をまとめることを目標とします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連している。

【授業の進め方と方法】

研究課題の進捗に関する資料をもとに意見交換を行うとともに、関連する文献資料や事例を題材とした学習をおして研究指導を行い、中間成果への到達を目指します。また、指導においては適宜フィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	課題設定	課題設定に関する論議と指導、関連テーマに関する学習
第 2 回	課題設定	課題設定に関する論議と指導、関連テーマに関する学習
第 3 回	課題設定	課題設定に関する論議と指導、関連テーマに関する学習
第 4 回	課題設定	課題設定に関する論議と指導、関連テーマに関する学習
第 5 回	課題設定	課題設定に関する論議と指導、関連テーマに関する学習
第 6 回	研究設計	研究設計に関する論議と指導、関連テーマに関する学習
第 7 回	研究設計	研究設計に関する論議と指導、関連テーマに関する学習
第 8 回	研究設計	研究設計に関する論議と指導、関連テーマに関する学習
第 9 回	研究設計	研究設計に関する論議と指導、関連テーマに関する学習
第 10 回	研究設計	研究設計に関する論議と指導、関連テーマに関する学習
第 11 回	研究計画作成	研究計画作成に関する論議と指導、関連テーマに関する学習
第 12 回	研究計画作成	研究計画作成に関する論議と指導、関連テーマに関する学習
第 13 回	研究計画作成	研究計画作成に関する論議と指導、関連テーマに関する学習
第 14 回	研究計画作成	研究計画作成に関する論議と指導、関連テーマに関する学習

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

修士論文への中間成果作成に向けて、情報や知識の収集、データ分析、解析評価などの研究作業に取り組みます。本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

特定のものはありません。適宜資料を配布します。

【参考書】

随時紹介します。

【成績評価の方法と基準】

平常点（100%）：研究の進捗状況、毎回の学習意欲、課題への対応などを総合的に評価します。

【学生の意見等からの気づき】

該当なし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

自然環境政策、湿地生態学、景観生態学、自然環境地理学、保全生態学

<研究テーマ>

湿地における自然資源の持続的活用、生物多様性と生態系サービスの評価、湿原生態系の構造と人為的影響の評価、生物多様性オフセット

<主要研究業績>

「図説日本の湿地」（朝倉書店、2017）編集・共著

「湿地の科学と暮らし」（北大出版会、2017）共著

「湿地の博物誌」（北大出版会、2014）編者

「サロベツ湿原と稚咲内砂丘林帯湖沼群」（北大出版会、2014）共著

Combined burning and mowing for restoration of abandoned semi-natural grasslands, Appl Veg Sci 20, 2017.

Tropical Peat Formation, Tropical Peatland Ecosystems, Springer, 2016.

Effects of the expansion of vascular plants in Sphagnum-dominated bog on evapotranspiration, Agricultural and Forest Meteorology 220, 2016.

【実務経験のある教員による授業】

公務員、独立行政法人、民間企業

【Outline and objectives】

Regarding issues related to nature conservation, the students receive research direction for master's thesis including theme setting and study methodology.

SES600P2 - 202

論文研究指導 1 B

高田 雅之

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

自然環境保全に関わる課題に関して、テーマ設定、研究手法の検討、分析評価などを含む修士論文の作成に向けた研究指導を受けます。

【到達目標】

修士課程 1 年生を対象として、研究設計と計画作成、並びに手法と必要なデータのリストアップ、これらに沿った研究の推進を行い、2 年目の修士論文執筆に至る中間成果をまとめることを目標とします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連している。

【授業の進め方と方法】

研究課題の進捗に関する資料をもとに意見交換を行うとともに、関連する文献資料や事例を題材とした学習をおして研究指導を行い、中間成果への到達を目指します。また、指導においては適宜フィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	情報・資料収集	収集した情報・資料に関する論議と指導、関連学習
第 2 回	情報・資料収集	収集した情報・資料に関する論議と指導、関連学習
第 3 回	情報・資料収集	収集した情報・資料に関する論議と指導、関連学習
第 4 回	情報・資料収集	収集した情報・資料に関する論議と指導、関連学習
第 5 回	情報・資料収集	収集した情報・資料に関する論議と指導、関連学習
第 6 回	情報・資料分析	情報・資料分析に関する論議と指導、関連学習
第 7 回	情報・資料分析	情報・資料分析に関する論議と指導、関連学習
第 8 回	情報・資料分析	情報・資料分析に関する論議と指導、関連学習
第 9 回	情報・資料分析	情報・資料分析に関する論議と指導、関連学習
第 10 回	情報・資料分析	情報・資料分析に関する論議と指導、関連学習
第 11 回	中間成果のまとめ	中間成果のまとめに関する論議と指導、関連学習
第 12 回	中間成果のまとめ	中間成果のまとめに関する論議と指導、関連学習
第 13 回	中間成果のまとめ	中間成果のまとめに関する論議と指導、関連学習
第 14 回	中間成果のまとめ	中間成果のまとめに関する論議と指導、関連学習

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

修士論文への中間成果作成に向けて、情報や知識の収集、データ分析、解析評価などの研究作業に取り組みます。本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

特定のものはありません。適宜資料を配布します。

【参考書】

随時紹介します。

【成績評価の方法と基準】

平常点（100%）：研究の進捗状況、毎回の学習意欲、課題への対応などを総合的に評価します。

【学生の意見等からの気づき】

該当なし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

自然環境政策、湿地生態学、景観生態学、自然環境地理学、保全生態学

<研究テーマ>

湿地における自然資源の持続的活用、生物多様性と生態系サービスの評価、湿原生態系の構造と人為的影響の評価、生物多様性オフセット

<主要研究業績>

「図説日本の湿地」(朝倉書店, 2017) 編集・共著

「湿地の科学と暮らし」(北大出版会, 2017) 共著

「湿地の博物誌」(北大出版会, 2014) 編者

「サロベツ湿原と稚咲内砂丘林帯湖沼群」(北大出版会, 2014) 共著

Combined burning and mowing for restoration of abandoned semi-natural grasslands, Appl Veg Sci 20, 2017.

Tropical Peat Formation, Tropical Peatland Ecosystems, Springer, 2016.

Effects of the expansion of vascular plants in Sphagnum-dominated bog on evapotranspiration, Agricultural and Forest Meteorology 220, 2016.

【実務経験のある教員による授業】

公務員、独立行政法人、民間企業

【Outline and objectives】

Regarding issues related to nature conservation, the students receive research direction for master's thesis including theme setting and study methodology.

SES600P2 - 201

論文研究指導 1 A

高橋 五月

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

環境人類学的調査を行い、修士論文を作成するための演習を実施する。

【到達目標】

文化人類学的研究を実践するために、エスノグラフィーの調査方法を学びながら、研究テーマを絞り、リサーチプロポーザルを作成し、修士論文を書き上げるための準備を行う。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連している。

【授業の進め方と方法】

受講者の研究テーマに合わせた事例研究を講読する。演習形式によって、リサーチプロポーザルを作成するための指導をする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	授業の説明
第2回	研究テーマを絞る（1）	研究テーマに関連する文献を講読し、文献レビューを作成しながら研究テーマを具体的に絞り込む
第3回	研究テーマを絞る（2）	研究テーマに関連する文献を講読し、文献レビューを作成しながら研究テーマを具体的に絞り込む
第4回	研究テーマを絞る（3）	研究テーマに関連する文献を講読し、文献レビューを作成しながら研究テーマを具体的に絞り込む
第5回	研究テーマを絞る（4）	研究テーマに関連する文献を講読し、文献レビューを作成しながら研究テーマを具体的に絞り込む
第6回	研究テーマを絞る（5）	研究テーマに関連する文献を講読し、文献レビューを作成しながら研究テーマを具体的に絞り込む
第7回	研究テーマを絞る（6）	研究テーマに関連する文献を講読し、文献レビューを作成しながら研究テーマを具体的に絞り込む
第8回	研究テーマを絞る（7）	研究テーマに関連する文献を講読し、文献レビューを作成しながら研究テーマを具体的に絞り込む
第9回	研究テーマを絞る（8）	研究テーマに関連する文献を講読し、文献レビューを作成しながら研究テーマを具体的に絞り込む
第10回	現地調査計画と準備（1）	研究テーマに沿って、現地調査の計画と準備を行う
第11回	現地調査計画と準備（2）	研究テーマに沿って、現地調査の計画と準備を行う
第12回	現地調査計画と準備（3）	研究テーマに沿って、現地調査の計画と準備を行う
第13回	現地調査計画と準備（4）	研究テーマに沿って、現地調査の計画と準備を行う
第14回	リサーチプロポーザル発表	リサーチプロポーザル発表

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

文献講読、プレリサーチの実施、リサーチプロポーザルの文献レビュー作成

【テキスト（教科書）】

特になし

【参考書】

受講者の研究テーマに沿った文献を選択する

【成績評価の方法と基準】

平常点（30%）、リサーチプロポーザル（70%）

【学生の意見等からの気づき】

特になし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 環境人類学、海洋人類学、震災人類学

<研究テーマ> 日本の沿岸漁業と近代化、震災と未来論、水族館の人類学

<主要研究業績> 『To See Once More the Stars: Living in a Post-Fukushima World (星の降るとき、3・11後の世界に生きる)』（共編 The New Pacific Press, 2014）、Hatchery Flounder Going Wild: Authenticity, Aesthetics, and Fetishism of Fish in Japan. Food and Foodways 22:5 - 23 (2014)、福島沖に浮かぶ「未来」とその未来『文化人類学』83(3):441-458、他

【Outline and objectives】

This course is designed to prepare students to accomplish master's degree thesis.

SES600P2 - 202

論文研究指導 1 B

高橋 五月

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

環境人類学的調査を行い、研究論文を作成するための演習を実施する。

【到達目標】

文化人類学的研究を実践するために、エスノグラフィーの調査方法を学びながら、自らのリサーチプロポーザルを作成し、修士論文を書き上げるための準備を行う。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連している。

【授業の進め方と方法】

エスノグラフィーの調査手法に関する文献を講読しながら、演習形式によって、リサーチプロポーザルを作成するための指導をする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション	授業の説明
第 2 回	研究テーマを絞る	研究テーマに関連する文献を講読し、文献レビューを作成しながら研究テーマを具体的に絞り込む
第 3 回	研究テーマを絞る	研究テーマに関連する文献を講読し、文献レビューを作成しながら研究テーマを具体的に絞り込む
第 4 回	研究テーマを絞る	研究テーマに関連する文献を講読し、文献レビューを作成しながら研究テーマを具体的に絞り込む
第 5 回	研究テーマを絞る	研究テーマに関連する文献を講読し、文献レビューを作成しながら研究テーマを具体的に絞り込む
第 6 回	研究テーマを絞る	研究テーマに関連する文献を講読し、文献レビューを作成しながら研究テーマを具体的に絞り込む
第 7 回	研究テーマを絞る	研究テーマに関連する文献を講読し、文献レビューを作成しながら研究テーマを具体的に絞り込む
第 8 回	研究テーマを絞る	研究テーマに関連する文献を講読し、文献レビューを作成しながら研究テーマを具体的に絞り込む
第 9 回	研究テーマを絞る	研究テーマに関連する文献を講読し、文献レビューを作成しながら研究テーマを具体的に絞り込む
第 10 回	現地調査計画と準備	研究テーマに沿って、現地調査の計画と準備を行う
第 11 回	現地調査計画と準備	研究テーマに沿って、現地調査の計画と準備を行う
第 12 回	現地調査計画と準備	研究テーマに沿って、現地調査の計画と準備を行う
第 13 回	現地調査計画と準備	研究テーマに沿って、現地調査の計画と準備を行う
第 14 回	まとめ	研究の進捗状況を報告し、論文完成までの計画を確認する

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

文献講読、リサーチの実施、リサーチプロポーザルの作成

【テキスト（教科書）】

特になし

【参考書】

菅原和孝『フィールドワークへの挑戦』世界思想社（2006）、小田博志『エスノグラフィー入門』春秋社（2010）

【成績評価の方法と基準】

平常点（30%）、リサーチプロポーザル（70%）

【学生の意見等からの気づき】

特になし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 環境人類学、海洋人類学、震災人類学

<研究テーマ> 日本の沿岸漁業と近代化、震災と未来論、水族館の人類学

<主要研究業績> 『To See Once More the Stars: Living in a Post-Fukushima World (星の降るとき、3・11後の世界に生きる)』(共編 The New Pacific Press, 2014)、Hatchery Flounder Going Wild: Authenticity, Aesthetics, and Fetishism of Fish in Japan. Food and Foodways 22:5 - 23 (2014)、福島沖に浮かぶ「未来」とその未来『文化人類学』83(3):441-458、他

【Outline and objectives】

This course is designed to prepare students to accomplish graduate thesis.

SES600P2 - 201

論文研究指導 1 A

武貞 稔彦

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

修士論文執筆のための演習指導

【到達目標】

修士課程 1 年生を対象とする本演習では、①修士論文執筆のための基礎的なスキルの獲得、および、②研究テーマ設定を目標とします。「研究論文」とはいかなるものかについてよく理解し、執筆に向けたリサーチを開始することが期待されます。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連している。

【授業の進め方と方法】

各回の演習は、受講者からの進捗報告、教員および演習参加者からのコメントを中心にすすめます。論文執筆やリサーチの基礎的なスキルに関しては、紹介する文献などを通じて学びます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	オリエンテーション	到達目標としての「修士論文」を概観する
第 2 回	研究の進め方	研究の進め方について基本的な知識を習得する
第 3 回	研究テーマ検討	演習参加者の問題関心を研究テーマに結びつける取り組みを開始する。
第 4 回	先行研究レビューと研究テーマ設定（第 1 回）	演習参加者による先行研究レビューと、研究テーマ設定に関する議論を行う（特に理論面）（第 1 回）
第 5 回	先行研究レビューと研究テーマ設定（第 2 回）	演習参加者による先行研究レビューと、研究テーマ設定に関する議論を行う（特に理論面）（第 2 回）
第 6 回	先行研究レビューと研究テーマ設定（第 3 回）	演習参加者による先行研究レビューと、研究テーマ設定に関する議論を行う（特に理論面）（第 3 回）
第 7 回	先行研究レビューと研究テーマ設定（第 4 回）	演習参加者による先行研究レビューと、研究テーマ設定に関する議論を行う（特に理論面）（第 4 回）
第 8 回	先行研究レビューと研究テーマ設定（第 5 回）	演習参加者による先行研究レビューと、研究テーマ設定に関する議論を行う（特に理論面）（第 5 回）
第 9 回	先行研究レビューと研究テーマ設定（第 6 回）	演習参加者による先行研究レビューと、研究テーマ設定に関する議論を行う（特に事例面）（第 1 回）
第 10 回	先行研究レビューと研究テーマ設定（第 7 回）	演習参加者による先行研究レビューと、研究テーマ設定に関する議論を行う（特に事例面）（第 2 回）
第 11 回	先行研究レビューと研究テーマ設定（第 8 回）	演習参加者による先行研究レビューと、研究テーマ設定に関する議論を行う（特に事例面）（第 3 回）
第 12 回	先行研究レビューと研究テーマ設定（第 9 回）	演習参加者による先行研究レビューと、研究テーマ設定に関する議論を行う（特に事例面）（第 4 回）
第 13 回	先行研究レビューと研究テーマ設定（第 10 回）	演習参加者による先行研究レビューと、研究テーマ設定に関する議論を行う（特に事例面）（第 5 回）
第 14 回	先行研究レビューと研究テーマ設定（第 11 回）	演習参加者による先行研究レビューと、研究テーマ設定に関する議論を行う（特に事例面）（第 6 回）

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

演習参加者と協議のうえ、各回の参考文献を選定します。それらの参考文献（主に先行研究）の内容について熟読のうえ、自らの研究テーマについてよく考慮し、準備することが望まれます。

【テキスト（教科書）】

特に指定しません。必要に応じて資料を配布します。

【参考書】

随時紹介します。

【成績評価の方法と基準】

おおむね以下のバランスで総合的な成績評価を行います。演習における積極性と貢献度 60%、修士論文執筆準備の進捗状況 40%

【学生の意見等からの気づき】

少人数演習のため該当せず。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 開発の自然環境・社会環境への影響、開発援助、開発と倫理
<研究テーマ> 「望ましい（望ましくない）「開発」とは何か」「ダム建設に伴う立ち退きと補償、生活再建」
<主要研究業績>

"Japanese Experience of Involuntary Resettlement: Long-Term Consequences of Resettlement for the Construction of the Ikawa Dam," *International Journal of Water Resources Development*, Routledge, Vol. 25, Issue 3, September 2009, pp. 419- 430,

『開発介入と補償：ダム立ち退きをめぐる開発と正義論』勁草書房 2012 年、
"Participation and diluted stakes in river management in Japan: the challenge of alternative constructions of resource governance" in Sato, J. ed., *Governance of Natural Resources: Uncovering the social purpose of materials in nature*. United Nations University Press, pp.141-161, July 2013

【Outline and objectives】

This is the first year seminar for authoring master thesis. Students will be able to 1) acquire basic knowledge and skills to write thesis and to 2) set appropriate research objectives and research questions in the thesis.

SES600P2 - 202

論文研究指導 1 B

武貞 稔彦

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

修士論文執筆のための演習指導

【到達目標】

修士課程 1 年生を対象とする本演習では、①修士論文執筆のための基礎的なスキルの獲得、および、②研究テーマ設定を目標とします。「研究論文」とはいかなるものかについてよく理解し、執筆に向けてリサーチを開始することが期待されます。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連している。

【授業の進め方と方法】

各回の演習は、受講者からの進捗報告、教員および演習参加者からのコメントを中心にすすめます。論文執筆やリサーチの基礎的なスキルに関しては、紹介する文献などを通じて学びます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	先行研究レビューと研究テーマ設定（第 1 回）	演習参加者による先行研究レビューと、研究テーマ設定に関する議論を行う（第 1 回）
第 2 回	先行研究レビューと研究テーマ設定（第 2 回）	演習参加者による先行研究レビューと、研究テーマ設定に関する議論を行う（第 2 回）
第 3 回	先行研究レビューと研究テーマ設定（第 3 回）	演習参加者による先行研究レビューと、研究テーマ設定に関する議論を行う（第 3 回）
第 4 回	先行研究レビューと研究テーマ設定（第 4 回）	演習参加者による先行研究レビューと、研究テーマ設定に関する議論を行う（第 4 回）
第 5 回	先行研究レビューと研究テーマ設定（第 5 回）	演習参加者による先行研究レビューと、研究テーマ設定に関する議論を行う（第 5 回）
第 6 回	研究手法の検討（第 1 回）	演習参加者による先行研究レビューと、研究テーマ設定に関する議論を行う（特に研究手法について）（第 1 回）
第 7 回	研究手法の検討（第 2 回）	演習参加者による先行研究レビューと、研究テーマ設定に関する議論を行う（特に研究手法について）（第 2 回）
第 8 回	研究手法の検討（第 3 回）	演習参加者による先行研究レビューと、研究テーマ設定に関する議論を行う（特に研究手法について）（第 3 回）
第 9 回	研究手法の検討（第 4 回）	演習参加者による先行研究レビューと、研究テーマ設定に関する議論を行う（特に研究手法について）（第 4 回）
第 10 回	研究手法の検討（第 5 回）	演習参加者による先行研究レビューと、研究テーマ設定に関する議論を行う（特に研究手法について）（第 5 回）
第 11 回	研究構想の検討（第 1 回）	これまでの先行研究レビュー等の結果に基づき、研究構想を検討する（第 1 回）
第 12 回	研究構想の検討（第 2 回）	これまでの先行研究レビュー等の結果に基づき、研究構想を検討する（第 2 回）
第 13 回	研究構想の検討（第 3 回）	これまでの先行研究レビュー等の結果に基づき、研究構想を検討する（第 3 回）
第 14 回	研究構想の検討（第 4 回）	これまでの先行研究レビュー等の結果に基づき、研究構想を検討する（第 4 回）

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

演習参加者と協議のうえ、各回の参考文献を選定します。それらの参考文献（主に先行研究）の内容について熟読のうえ、自らの研究テーマについてよく考慮し、準備することが望まれます。

【テキスト（教科書）】

特に指定しません。必要に応じて資料を配布します。

【参考書】

随時紹介します。

【成績評価の方法と基準】

おおむね以下のバランスで総合的な成績評価を行います。演習における積極性と貢献度 60 %、修士論文執筆準備の進捗状況 40 %

【学生の意見等からの気づき】

少人数演習のため該当せず。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞ 開発の自然環境・社会環境への影響、開発援助、開発と倫理
 ＜研究テーマ＞ 「望ましい（望ましくない）「開発」とは何か」「ダム建設に伴う立ち退きと補償、生活再建」
 ＜主要研究業績＞

"Japanese Experience of Involuntary Resettlement: Long-Term Consequences of Resettlement for the Construction of the Ikawa Dam," *International Journal of Water Resources Development*, Routledge, Vol. 25, Issue 3, September 2009, pp. 419- 430,

「開発介入と補償：ダム立ち退きをめぐる開発と正義論」勁草書房 2012 年, "Participation and diluted stakes in river management in Japan: the challenge of alternative constructions of resource governance" in Sato, J. ed., *Governance of Natural Resources: Uncovering the social purpose of materials in nature*. United Nations University Press, pp.141-161, July 2013

【Outline and objectives】

This is a first year seminar for authoring master thesis. Students will be able to 1) acquire basic knowledge and skills to write thesis and to 2) set appropriate research objectives and research questions in the thesis.

論文研究指導 1 A

辻 英史

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

修士課程 1 年の大学院生に対し、歴史学研究の基礎を身につけることを通じて、修士論文執筆の準備作業を支援する。

【到達目標】

修士論文執筆に必要な歴史学研究の理論的方法論的基礎を身につけること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連している。

【授業の進め方と方法】

各自の関心に応じて毎回課題を出すので、次回に各自が作業した結果を報告する。さらに参加者全員のディスカッションにより理解を深める。

2021 年度は対面を基本とし、場合によってはオンラインにより授業をおこなう。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	研究関心の確認	参加者各自が自分のテーマについて考えていることや現状を報告する。
第 2 回	先行研究の把握 ①和文文献	各種の先行研究について、参加者各自の関心にもとづいて作業をおこない、判明した研究状況を報告する。
第 3 回	先行研究の把握 ②欧文文献	各種の先行研究について、参加者各自の関心にもとづいて作業をおこない、判明した研究状況を報告する。
第 4 回	先行研究の把握 ③同時代文献	各種の先行研究について、参加者各自の関心にもとづいて作業をおこない、判明した研究状況を報告する。
第 5 回	研究動向の把握①	重要と考えられる先行研究を読み込み、研究動向を把握し、その問題点を指摘する。
第 6 回	研究動向の把握②	重要と考えられる先行研究を読み込み、研究動向を把握し、その問題点を指摘する。
第 7 回	問題提起の検証	研究動向を踏まえ、独自性のある論文のテーマを導き出す作業をおこなう。
第 8 回	史料の調査① 文献史料 (1)	新聞、雑誌、書籍、パンフレットなど、刊行された文献史料について、どのようなものがあるかを調査し、その概要を報告する。
第 9 回	史料の調査① 文献史料 (2)	上記の史料について、できる限り内容を精査し、解釈の可能性を検討する。
第 10 回	史料の調査② 統計史料 (1)	統計集など数量データについて、どのような史料があるのかを調査し、その概要を報告する。
第 11 回	史料の調査② 統計史料 (2)	上記の史料について、できる限り内容を精査し、解釈の可能性を検討する。
第 12 回	史料の調査③ 文書館史料 (1)	公文書、未刊行史料など文書館史料について、どのような史料があるのかを調査し、その概要を報告する。
第 13 回	史料の調査③ 文書館史料 (2)	上記の史料について、できる限り内容を精査し、解釈の可能性を検討する。
第 14 回	仮説の検証	問題提起をふまえ、論文執筆の前提となる仮説の構築と、それに基づいた行論を組み立てる作業を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

毎回の課題をしっかりとこなすだけでなく、各自がさらに工夫して修士論文の内容を向上させていく姿勢が必要である。

とくに、欧文の同時代文献を読解するために必須となる語学能力、史料分析能力については授業内では十分なトレーニングをおこなえないので、各自で必要な能力を身につけるよう努力すること。

【テキスト（教科書）】

授業内で必要に応じて指示する。

【参考書】

授業内でその都度指示する。

【成績評価の方法と基準】

議論への参加（40 %）とレポート（60 %）により評価する。

【学生の意見等からの気づき】

とくになし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 歴史学（ドイツ近現代史）

<研究テーマ> 市民社会の歴史、ドイツ社会国家の歴史

<主要研究業績> 『歴史のなかの社会国家』（川越修と共編著）山川出版社、2016 年；『社会国家を生きる』（川越修と共編著）法政大学出版局、2008 年。

【Outline and objectives】

Small group workshop for master student to improve methodological knowledge and to advance research plan.

SES600P2 - 202

論文研究指導 1 B

辻 英史

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

修士課程 1 年の大学院生に対し、歴史学研究の基礎を身につけることを通じて、修士論文執筆の準備作業を支援する。

【到達目標】

修士論文執筆に必要な歴史学研究の実践的実証的基礎を身につけること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連している。

【授業の進め方と方法】

各自の関心に応じて毎回課題を出すので、次回に各自が作業した結果を報告する。さらに参加者全員のディスカッションにより理解を深める。

2021 年度は対面を基本とし、場合によってはオンラインにより授業をおこなう。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	作業状況の確認	参加者各自が現在の問題関心と作業状況について報告する。
第 2 回	論文構成の検討①	春学期に調査した先行研究と史料にもとづき、修士論文の主たる論点と構成を決めていく。
第 3 回	論文構成の検討②	春学期に調査した先行研究と史料にもとづき、修士論文の主たる論点と構成を決めていく。
第 4 回	論文構成の検討③	春学期に調査した先行研究と史料にもとづき、修士論文の主たる論点と構成を決めていく。
第 5 回	研究史の分析①	修士論文の対象とする地域や時代について、重要と考えられる先行研究を読み込み、その問題点を指摘する。
第 6 回	研究史の分析②	修士論文の対象とする地域や時代について、重要と考えられる先行研究を読み込み、その問題点を指摘する。
第 7 回	研究史の分析③	修士論文の対象とする地域や時代について、重要と考えられる先行研究を読み込み、その問題点を指摘する。
第 8 回	他事例研究の分析① 同様のテーマを扱った他地域や他時代の研究を収集し、分析する。	構想中の修士論文と同様のテーマを扱った他地域や他時代の研究を収集し、分析する。
第 9 回	他事例研究の分析② 同様のテーマを扱った他地域や他時代の研究を収集し、分析する。	構想中の修士論文と同様のテーマを扱った他地域や他時代の研究を収集し、分析する。
第 10 回	他事例研究の分析③ 同様のテーマを扱った他地域や他時代の研究を収集し、分析する。	構想中の修士論文と同様のテーマを扱った他地域や他時代の研究を収集し、分析する。
第 11 回	史料分析の準備①	修士論文で使用する史料を決定し、その形態や所蔵を調査し、収集の準備作業をおこなう。
第 12 回	史料分析の準備②	修士論文で使用する史料を決定し、その形態や所蔵を調査し、収集の準備作業をおこなう。
第 13 回	史料分析の準備③	修士論文で使用する史料を決定し、その形態や所蔵を調査し、収集の準備作業をおこなう。
第 14 回	論文中間報告	修士論文のテーマ、章立て、中心となる仮説を提示し、全員で検討する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

毎回の課題をしっかりとこなすだけでなく、各自がさらに工夫して修士論文の内容を向上させていく姿勢が必要である。

とくに、欧文の同時代文献を読解するために必須となる語学能力、史料分析能力については授業内では十分なトレーニングをおこないえないので、各自で必要な能力を身につけるよう努力すること。

【テキスト（教科書）】

授業内で必要に応じて指示する。

【参考書】

授業内でその都度指示する。

【成績評価の方法と基準】

議論への参加（40%）とレポート（60%）により評価する。

【学生の意見等からの気づき】

とくになし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 歴史学（ドイツ近現代史）

<研究テーマ> 市民社会の歴史、ドイツ社会国家の歴史

<主要研究業績> 『歴史のなかの社会国家』（川越修と共編著）山川出版社、2016 年；『社会国家を生きた』（川越修と共編著）法政大学出版局、2008 年。

【Outline and objectives】

Small group workshop for master students to expand their abilities to research and analyze historical documents and to write their master's thesis.

論文研究指導 1 A

永野 秀雄

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

修士論文の研究テーマを設定するための基礎となるリサーチ方法や、分析手法についても、一緒に検討いたします。

【到達目標】

修士論文の研究テーマを設定し、できるだけ早い時期に研究に着手することが目標です。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連している。

【授業の進め方と方法】

社会科学系の環境問題等について議論し、方法を指導し、個々の研究を進めます。

また、授業は、対面授業を予定しておりますが、コロナウイルスの感染が拡大した場合には、リアルタイムのライブ型配信授業といたします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

なし/No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
1	修士論文テーマ	学生の方の修士論文構想について、意見を聞きます。
2	修士論文レベルのリサーチ方法（1）	修士論文レベルの先行論文等の検索方法の指導。
3	修士論文レベルのリサーチ方法（2）	仮の修士論文テーマに関して、WEB上またはデータベース上の先行論文等の検索と確認。
4	修士論文レベルのリサーチ方法（3）	仮の修士論文テーマに関して、データベースでの先行論文等の検索と確認。
5	修士論文の書き方（1）	修士レベルの論文の執筆方法の基礎について学ぶ。
6	修士論文の書き方（2）	修士レベルの論文に関する論理展開、立証、脚注における引用方式等を学ぶ。
7	修士論文執筆計画の策定	具体的な修士論文のテーマを話し合い、執筆計画を策定する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

講師により前回指導された点について、必要なリサーチ、検討、起案を行うこと。

【テキスト（教科書）】

特にありません。

【参考書】

必要に応じて指示します。

【成績評価の方法と基準】

リサーチの状況（50%）、リサーチの結果（50%）で評価します。

【学生の意見等からの気づき】

該当科目ではありません。

【学生が準備すべき機器他】

特にありません。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>日米比較法（特に、環境法、先端技術法）

<研究テーマ>「環境監査と法」、「軍事基地騒音問題」、「サイバーセキュリティと法」

<主要研究業績>（近年のもの）

「米国防総省によるサイバーセキュリティ成熟度モデル認証（CMMC）の導入：現行の NIST SP 800-171 の遵守制度を超えて」CISTEC journal186 号 200 頁以下（2020 年 3 月）。

「米国におけるセキュリティクリアランス制度の大改革」CISTEC journal185 号 223 頁以下（2020 年 1 月）。

「米国の重要インフラに関するサイバーセキュリティとセキュリティ・クリアランス法制（上）」人間環境論集 19 巻 1 号 13 頁以下（2018 年 12 月）。

【Outline and objectives】

This course provides a basic introduction of the research method and analytical method as the basis for setting the research theme of the master thesis.

SES600P2 - 202

論文研究指導 1 B

永野 秀雄

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

修士論文の研究テーマを設定するための基礎となるリサーチ方法や、分析手法についても、一緒に検討いたします。

【到達目標】

修士論文の研究テーマを設定し、できるだけ早い時期に研究に着手することが目標です。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連している。

【授業の進め方と方法】

社会科学系の環境問題について議論し、方法を指導し、個々の研究を進めます。また、授業は、対面授業を予定していますが、コロナウイルスの感染が拡大した場合には、リアルタイムのライブ型配信授業とします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
1	先行文献の調査（1）（春学期の続き）	先行文献の調査を行い、その報告を受け、検証する（法令、判例、その他データ等）。
2	先行文献の調査（2）	その他、先行文献や英語文献等の調査が必要であれば、その報告を受け、検証する。
3	中間報告骨子案のテーマ、論旨の検証	先行文献調査から、受講者が選んだテーマが、これまで検証されたものではなく、かつ、立証可能なものか否かを検討する。
4	中間報告骨子案の理論展開の検証	中間報告骨子案における、本文の理論展開の整合性について検証する。
5	中間報告骨子案の立証責任の検証	中間報告骨子案における、本文の立証可能性について検証する。
6	中間報告骨子案に関する話し合い	受講者から、中間報告骨子案に関する報告を受け、話し合い、最終案を検討する。
7	中間報告骨子案の画定	中間報告骨子案を検討し、内容を画定する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

講師により前回指導された点について、必要なリサーチ、検討、起案を行うこと。

【テキスト（教科書）】

特にありません。

【参考書】

必要に応じて指示します。

【成績評価の方法と基準】

先行論文の調査（20%）、中間報告骨子案（80%）で評価します。

【学生の意見等からの気づき】

該当科目ではありません。

【学生が準備すべき機器他】

特にありません。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>日米比較法（特に、環境法、先端技術法）
 <研究テーマ>「環境監査と法」、「サイバーセキュリティと法」
 <主要研究業績>（近年のもの）

「米国防総省によるサイバーセキュリティ成熟度モデル認証（CMMC）の導入：現行の NIST SP 800-171 の遵守制度を超えて」CISTEC journal186 号 200 頁以下（2020 年 3 月）。

「米国におけるセキュリティクリアランス制度の大改革」CISTEC journal185 号 223 頁以下（2020 年 1 月）。

「米国の重要インフラに関するサイバーセキュリティとセキュリティ・クリアランス法制（上）」人間環境論集 19 巻 1 号 13 頁以下（2018 年 12 月）。

【Outline and objectives】

This course provides a basic introduction of the research method and analytical method as the basis for setting the research theme of the master thesis.

論文研究指導 1 A

長谷川 直哉

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この演習では、修士論文の執筆に向けて、テーマ設定から先行研究のサーベイ、調査方法（フィールド調査を含む）の遂行についての指導を行います。

【到達目標】

修士論文の執筆を通じて、高度職業人として多面的かつ科学的な問題解決能力を習得することが到達目標です。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連している。

【授業の進め方と方法】

参加学生のテーマや調査対象を踏まえ、学生とのディスカッションを通じて、研究計画の作成と先行研究の収集・購読に関する指導を行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	研究テーマの検討①	参加学生による研究テーマの発表と討議
第2回	研究テーマの検討②	参加学生による研究テーマの発表と討議
第3回	研究計画の作成①	参加学生による研究計画の発表と討議
第4回	研究計画の作成②	参加学生による研究計画の発表と討議
第5回	先行研究リストの作成①	参加学生による先行研究リストの発表と討議
第6回	先行研究リストの作成②	参加学生による先行研究リストの発表と討議
第7回	先行研究リストの作成③	参加学生による先行研究リストの発表と討議
第8回	フィールド調査計画の立案①	参加学生によるフィールド調査計画の発表と討議
第9回	フィールド調査計画の立案②	参加学生によるフィールド調査計画の発表と討議
第10回	先行研究の購読①	基本文献の購読と討議
第11回	先行研究の購読②	基本文献の購読と討議
第12回	先行研究の購読③	基本文献の購読と討議
第13回	先行研究の購読④	基本文献の購読と討議
第14回	論文構想についてのディスカッション	参加学生による論文フレームワークの発表と討議

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

論文のテーマに沿ってフィールド調査を行い、オリジナルデータの収集と分析を行います。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

特定のテキストは使用しません。

【参考書】

受講者のテーマに応じて授業内で適宜紹介します。

【成績評価の方法と基準】

研究報告：80%

討議への貢献度：20%

【学生の意見等からの気づき】

毎回の講義で学生からの意見を聴取し、授業や論文指導に随時反映させています。

【学生が準備すべき機器他】

必要に応じてパソコンを使用します。

【実務経験】

損害保険会社の資産運用部門において、約15年間投資業務を担当しました。1999年、ESG投資の先駆的な取り組みであるSRI（社会的責任投資）ファンドを組成し、ファンドマネジャーとして企業のESG（非財務）側面を評価する手法を開発しました。また、（公財）国際金融情報センターに出向し、カントリーリストや国際金融システムに関する調査・研究に従事しました。

【関連資格】

日本証券アナリスト協会認定アナリスト（CMA）

【Outline and objectives】

In this seminar, we will provide guidance on setting themes, surveying prior research, and implementing survey methods (including field surveys) for the purpose of writing a master's thesis.

SES600P2 - 202

論文研究指導 1 B

長谷川 直哉

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この演習では、修士論文の執筆に向けて、テーマ設定から先行研究のサーベイ、調査方法（フィールド調査を含む）の遂行についての指導を行います。

【到達目標】

修士論文の執筆を通じて、高度職業人として多面的かつ科学的な問題解決能力を習得することが到達目標です。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連している。

【授業の進め方と方法】

参加学生のテーマや調査対象を踏まえ、学生とのディスカッションを通じて、研究計画の作成と先行研究の収集・購読に関する指導を行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	フィールド調査の報告と討議①	アンケートやヒアリング調査等の分析結果の報告
第 2 回	フィールド調査の報告と討議②	アンケートやヒアリング調査等の分析結果の報告
第 3 回	フィールド調査の報告と討議③	アンケートやヒアリング調査等の分析結果の報告
第 4 回	修士論文執筆構想の検討①	参加学生による執筆構想の発表と討議
第 5 回	修士論文執筆構想の検討②	参加学生による執筆構想の発表と討議
第 6 回	修士論文執筆構想の検討③	参加学生による執筆構想の発表と討議
第 7 回	先行研究の再検討①	修士論文に関係する先行研究の再検討
第 8 回	先行研究の再検討②	修士論文に関係する先行研究の再検討
第 9 回	先行研究の再検討③	修士論文に関係する先行研究の再検討
第 10 回	学術論文の執筆技法①	過去の修士論文を教材にして学術論文の書き方を学ぶ
第 11 回	学術論文の執筆技法②	過去の修士論文を教材にして学術論文の書き方を学ぶ
第 12 回	学術論文の執筆技法③	過去の修士論文を教材にして学術論文の書き方を学ぶ
第 13 回	修士論文中間構想の発表①	参加学生による具体的な修士論文フレームワーク（章立てと方向性）の発表と討議
第 14 回	修士論文中間構想の発表②	参加学生による具体的な修士論文フレームワーク（章立てと方向性）の発表と討議

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

論文のテーマに沿ってフィールド調査を行い、オリジナルデータの収集と分析を行います。本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

特定のテキストは使用しません。

【参考書】

受講者のテーマに応じて授業内で適宜紹介します。

【成績評価の方法と基準】

研究報告：80%

討議への貢献度：20%

【学生の意見等からの気づき】

毎回の講義で学生からの意見を聴取し、授業や論文指導に随時反映させています。

【学生が準備すべき機器他】

必要に応じてパソコンを使用します。

【実務経験】

損害保険会社の資産運用部門において、約 15 年間投資業務を担当しました。1999 年、ESG 投資の先駆的な取り組みである SRI（社会的責任投資）ファンドを組成し、ファンドマネジャーとして企業の ESG（非財務）側面を評価する手法を開発しました。また、（公財）国際金融情報センターに出向し、カントリーリストや国際金融システムに関する調査・研究に従事しました。

【関連資格】

日本証券アナリスト協会認定アナリスト（CMA）

【Outline and objectives】

In this seminar, we will provide guidance on setting themes, surveying prior research, and implementing survey methods (including field surveys) for the purpose of writing a master's thesis.

論文研究指導 1 A

藤倉 良

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

修士論文執筆のための研究指導を行う。

【到達目標】

修士論文執筆のためにテーマを設定し、研究するノウハウを習得する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連している。

【授業の進め方と方法】

院生は文献調査や研究の進捗状況について報告し、報告内容を議論する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	受講生の関心の方向性を発表する。
第2回	関心テーマの絞り込み	関心テーマの概要をとりまとめ、修士論文の落としどころを考える。
第3回	関心テーマの実現可能性	関心テーマを主題とした場合に、それを修士論文に至らしめることができるかを検討する。
第4回	修士論文の主題案	修士論文の主題案を決める。
第5回	関連情報の収集	修士論文に関連する情報を収集する。
第6回	関連情報の分析	収集した関連情報を分析する。
第7回	修士論文の実現可能性	関連情報の分析結果から、設定した修士論文テーマで研究遂行が可能か否かを再検討する。
第8回	修士論文のテーマ再確認	前回の検討に基づき、修士論文のテーマが妥当であることを再確認する。
第9回	研究テーマの検討	研究テーマについて発表し議論する。
第10回	研究枠組みの検討	研究を実施するための枠組みを検討する。
第11回	作業仮説の設定	作業仮説を設定し、妥当性や実施可能性について議論する。
第12回	方法論の設定	方法論を設定して発表し、議論する。
第13回	周辺情報の再収集	作業仮説や方法論に基づいて、関連する周辺情報を再収集する。
第14回	先行研究の収集	先行研究を収集する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

受講生は発表のためのレジュメやパワーポイントのスライドを作成し、発表の準備を行う。

【テキスト（教科書）】

指導中に適宜指示する。

【参考書】

指導中に適宜指示する。

【成績評価の方法と基準】

研究の進捗状況を基準にする（100%）。

【学生の意見等からの気づき】

なし。

【担当教員が執筆した参考文献】

1. 藤倉良 (2007) 研究報告ということ, 人間環境論集, 第7巻, 第2号, pp.95-102
2. 藤倉良 (2006) 研究をするということ, 人間環境論集, 第6巻, 第2号, pp.37-48
3. 藤倉良 (2005) 論文を書くということ, 人間環境論集, 第6巻, 第1号, pp.81-87

法政大学リポジトリからダウンロード可能

【Outline and objectives】

Research guidance for writing master thesis.

SES600P2 - 202

論文研究指導 1 B

藤倉 良

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

修士論文のドラフト作成。

【到達目標】

設定されたテーマと骨子案に基づいて修士論文のデータ収集とドラフト作成を行う。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連している。

【授業の進め方と方法】

毎週土曜日のゼミに出席し、他の院生の報告を聞くと共に、過去 1 週間の進捗状況を報告し、議論を行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	研究方針の確認	論文研究指導 1 A で設定した研究テーマの確認をする。
第 2 回	先行研究のレビュー	収集した先行研究をとりまとめる。
第 3 回	データ収集 1	データの情報源の確認
第 4 回	データ収集 2	データを収集する。
第 5 回	データ収集 3	データを収集する。
第 6 回	ヒアリング調査	ヒアリング調査の実現可能性を検討する。
第 7 回	ヒアリング対象選定	ヒアリングする調査対象を選定する。
第 8 回	ヒアリング調査準備	ヒアリング項目を決定する。
第 9 回	ヒアリング調査	ヒアリング調査を実施する。
第 10 回	ヒアリング調査解析	ヒアリング調査結果をとりまとめて解析する。
第 11 回	追加調査の確認	追加調査すべき事項を確認する。
第 12 回	追加調査の実施	追加調査を行う。
第 13 回	論文目次案作成	論文の目次案を作成する。
第 14 回	論文骨子案作成	論文の骨子案を作成する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

次のゼミまでに指示された作業を行うこと。

【テキスト（教科書）】

特に使用しない

【参考書】

別途、支持する。

【成績評価の方法と基準】

修士論文の作業進捗状況と中間報告の準備状況（100 %）

【学生の意見等からの気づき】

毎回、議論を行う。

【学生が準備すべき機器他】

特になし。

【Outline and objectives】

Drafting master thesis.

論文研究指導 1 A

松本 倫明

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

修士論文のための研究指導を目的とする。

【到達目標】

修士論文執筆のためにテーマを設定し、研究するノウハウを習得する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連している。

【授業の進め方と方法】

対面授業を行う。院生は文献調査や研究の進捗状況について報告し、報告内容を議論する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	受講生の関心の方向性を発表する。
第2回	文献調査	文献調査の結果を発表し議論する。
第3回	文献調査	文献調査の結果を発表し議論する。
第4回	文献調査	文献調査の結果を発表し議論する。
第5回	文献調査	文献調査の結果を発表し議論する。
第6回	文献調査	文献調査の結果を発表し議論する。
第7回	文献調査	文献調査の結果を発表し議論する。
第8回	文献調査	文献調査の結果を発表し議論する。
第9回	研究テーマの設定	研究テーマについて発表し議論する。
第10回	研究テーマの設定	研究テーマについて発表し議論する。
第11回	研究テーマの設定	研究テーマについて発表し議論する。
第12回	研究テーマの設定	研究テーマについて発表し議論する。
第13回	研究テーマの設定	研究テーマについて発表し議論する。
第14回	研究テーマの設定	研究テーマについて発表し議論する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

受講生は発表のためのレジュメやパワーポイントのスライドを作成し、発表の準備を行う。本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

指導中に適宜指示する。

【参考書】

指導中に適宜指示する。

【成績評価の方法と基準】

研究の進捗状況を基準にする（100%）。

【学生の意見等からの気づき】

なし。

【その他の重要事項】

受講生は、数学、物理学、コンピュータ（Linux など）、プログラミング（Python など）、英語の読み書きに関するある程度の能力は必要である。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>理論天文学

<研究テーマ>星形成、宇宙天気

<主要研究業績>

① "An origin of arc structures deeply embedded in dense molecular cloud cores", Matsumoto, T., Onishi, T., Tokuda, K., & Inutsuka, S.-i. 2015, MNRAS, 449, L123

② "Star Formation in Turbulent Molecular Clouds with Colliding Flow", Matsumoto, T., Dobashi, K., & Shimoikura, T. 2015, ApJ, 801, 77

③ "Protostellar Collapse of Magneto-turbulent Cloud Cores: Shape During Collapse and Outflow Formation", Matsumoto, T., & Hanawa, T. 2011, ApJ, 728, 47

【Outline and objectives】

This class is designed for obtaining knowledge and skills to write a master thesis. Students will survey the previous works and make their themes for research. They will give talks about progress in their researches. The students need to have experience in programming, e.g., Python, and computer skills in Linux OS in advance. The students are also encouraged to have basic knowledge of physics, mathematics, and writing and reading skills of English.

SES600P2 - 202

論文研究指導 1 B

松本 倫明

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

修士論文のための研究指導を目的とする。

【到達目標】

修士論文執筆のためにテーマを設定し、研究するノウハウを習得する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連している。

【授業の進め方と方法】

対面授業を行う。院生は文献調査や研究の進捗状況について報告し、報告内容を議論する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	今後のロードマップを確認する。
第2回	研究の方法	研究方法について指導する。
第3回	研究の方法	研究方法について指導する。
第4回	研究の方法	研究方法について指導する。
第5回	研究の方法	研究方法について指導する。
第6回	研究の方法	研究方法について指導する。
第7回	研究の方法	研究方法について指導する。
第8回	研究の方法	研究方法について指導する。
第9回	研究進捗の発表	研究進捗について発表し議論する。
第10回	研究進捗の発表	研究進捗について発表し議論する。
第11回	研究進捗の発表	研究進捗について発表し議論する。
第12回	研究進捗の発表	研究進捗について発表し議論する。
第13回	研究進捗の発表	研究進捗について発表し議論する。
第14回	研究進捗の発表	研究進捗について発表し議論する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

受講生は発表のためのレジュメやパワーポイントのスライドを作成し、発表の準備を行う。本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

指導中に適宜指示する。

【参考書】

指導中に適宜指示する。

【成績評価の方法と基準】

研究の進捗状況を基準にする（100%）。

【学生の意見等からの気づき】

なし。

【その他の重要事項】

受講生は、数学、物理学、コンピュータ（Linuxなど）、英語の読み書きに関するある程度の能力は必要である。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>理論天文学

<研究テーマ>星形成、宇宙天気

<主要研究業績>

① "An origin of arc structures deeply embedded in dense molecular cloud cores", Matsumoto, T., Onishi, T., Tokuda, K., & Inutsuka, S.-i. 2015, MNRAS, 449, L123

② "Star Formation in Turbulent Molecular Clouds with Colliding Flow", Matsumoto, T., Dobashi, K., & Shimoikura, T. 2015, ApJ, 801, 77

③ "Protostellar Collapse of Magneto-turbulent Cloud Cores: Shape During Collapse and Outflow Formation", Matsumoto, T., & Hanawa, T. 2011, ApJ, 728, 47

【Outline and objectives】

This class is designed for obtaining knowledge and skills to write a master thesis. Students will survey the previous works and make their themes for research. They will give talks about progress in their researches. The students need to have experience in programming, e.g., Python, and computer skills in Linux OS in advance. The students are also encouraged to have basic knowledge of physics, mathematics, and writing and reading skills of English.

論文研究指導 1 A

宮川 路子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

修士論文の執筆に向けた問題意識の醸成、文献検索の方法、調査、解析方法などを身につけ、論文作成に必要な能力を身につける。先行研究を調査し、自分の研究テーマを決定する。

【到達目標】

学生が適切なテーマを選択し、文献検索を行って自身の研究テーマの先行研究における位置づけを明確にする。
必要な調査を明らかにすることにより、調査方法を決定する。得られたデータを適切に分析するための解析方法を学ぶ。
論文作成を開始する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連している。

【授業の進め方と方法】

個別と受講者全体が集まる二つの形態による指導を行う。受講者が進めている研究内容について報告し、参加者全員で質疑・討論を行う。受講者全員が検討に参加することにより、研究がブラッシュアップされ、理解度が深まることを狙っている。個別指導においては、研究の進捗状況に応じて報告し、研究深化のための議論を行う。論を展開するうえで必要となる参考文献を選び、論理を構築する。

執筆に際しては、表現技法、論文形式についての指導も行う。

講義の方法は対面で行う予定である。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	修士論文作成の準備	研究報告と修士論文作成のための検討
第2回	修士論文作成の準備	研究報告と修士論文作成のための検討
第3回	修士論文作成の準備	研究報告と修士論文作成のための検討
第4回	修士論文作成の準備	研究報告と修士論文作成のための検討
第5回	修士論文作成の準備	研究報告と修士論文作成のための検討
第6回	修士論文作成の準備	研究報告と修士論文作成のための検討
第7回	修士論文作成の準備	研究報告と修士論文作成のための検討
第8回	修士論文作成の準備	研究報告と修士論文作成のための検討
第9回	修士論文作成の準備	研究報告と修士論文作成のための検討
第10回	修士論文作成の準備	研究報告と修士論文作成のための検討
第11回	修士論文作成の準備	研究報告と修士論文作成のための検討
第12回	修士論文作成の準備	研究報告と修士論文作成のための検討
第13回	修士論文作成の準備	研究報告と修士論文作成のための検討
第14回	修士論文作成の準備	研究報告と修士論文作成のための検討

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

自分のテーマについて調査、研究を継続して行う。

【テキスト（教科書）】

特になし。

【参考書】

研究の進捗状況に応じて適宜指示する。

【成績評価の方法と基準】

平常点 30 %、発表 10 %、研究内容 60 %で評価を行う

【学生の意見等からの気づき】

該当無し。

【担当教員の専門分野等】

公衆衛生学、産業保健、分子整合栄養医学、統合医療、統計学

<研究テーマ> 栄養と健康、就労者のストレスと健康

<主要研究業績> Subjective social status: its determinants and association with health in the Swedish working population (the SLOSH study)

The European Journal of Public Health 2012年

ビタミン D の健康効果 人間環境論集 19 巻号 79-101

日本の医療を含むサービス産業における過重労働の軽減化における課題：国民はサービスの質・量の低下を甘受することができるか 人間環境論集 20 巻 1 号 1-17

<https://eiyouyohou.com/>

【Outline and objectives】

For the purpose to write master's thesis, students learn how to search papers, do research, and collect data, and analyze data. Students investigate previous research and determine their own research theme.

SES600P2 - 202

論文研究指導 1 B

宮川 路子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

修士論文の執筆に向けた問題意識の醸成、文献検索の方法、調査、解析方法などを身につけ、論文作成に必要な能力を身につける。先行研究を調査し、自分の研究テーマを決定する。

【到達目標】

学生が適切なテーマを選択し、文献検索を行って自身の研究テーマの先行研究における位置づけを明確にする。
必要な調査を明らかにすることにより、調査方法を決定する。得られたデータを適切に分析するための解析方法を学ぶ。
論文作成を開始する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連している。

【授業の進め方と方法】

個別と受講者全体が集まる二つの形態による指導を行う。受講者が進めている研究内容について報告し、参加者全員で質疑・討論を行う。受講者全員が検討に参加することにより、研究がブラッシュアップされ、理解度が深まることを狙っている。個別指導においては、研究の進捗状況に応じて報告し、研究深化のための議論を行う。論を展開するうえで必要となる参考文献を選び、論理を構築する。

執筆に際しては、表現技法、論文形式についての指導も行う。

講義の方法は対面で行う予定である。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	修士論文作成の準備	研究報告と修士論文作成のための検討
第2回	修士論文作成の準備	研究報告と修士論文作成のための検討
第3回	修士論文作成の準備	研究報告と修士論文作成のための検討
第4回	修士論文作成の準備	研究報告と修士論文作成のための検討
第5回	修士論文作成の準備	研究報告と修士論文作成のための検討
第6回	修士論文作成の準備	研究報告と修士論文作成のための検討
第7回	修士論文作成の準備	研究報告と修士論文作成のための検討
第8回	修士論文作成の準備	研究報告と修士論文作成のための検討
第9回	修士論文作成の準備	研究報告と修士論文作成のための検討
第10回	修士論文作成の準備	研究報告と修士論文作成のための検討
第11回	修士論文作成の準備	研究報告と修士論文作成のための検討
第12回	修士論文作成の準備	研究報告と修士論文作成のための検討
第13回	修士論文作成の準備	研究報告と修士論文作成のための検討
第14回	修士論文作成の準備	研究報告と修士論文作成のための検討

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

自分のテーマについて調査、研究を継続して行う。

【テキスト（教科書）】

特になし。

【参考書】

研究の進捗状況に応じて適宜指示する。

【成績評価の方法と基準】

平常点 30 %、発表 10 %、研究内容 60 %で評価を行う

【学生の意見等からの気づき】

該当無し。

【学生が準備すべき機器他】

特になし

【その他の重要事項】

特になし

【担当教員の専門分野等】

公衆衛生学、産業保健、分子整合栄養医学、統合医療、統計学

<研究テーマ>栄養と健康、就労者のストレスと健康

<主要研究業績> Subjective social status: its determinants and association with health in the Swedish working population (the SLOSH study)

The European Journal of Public Health 2012年

ビタミンDの健康効果 人間環境論集 19巻号 79-101

日本の医療を含むサービス産業における過重労働の軽減化における課題：国民はサービスの質・量の低下を甘受することができるか 人間環境論集 20巻1号 1-17

<https://eiyouryohou.com/>

【Outline and objectives】

For the purpose to write master's thesis, students learn how to search papers, do research, and collect data, and analyze data. Students investigate previous research and determine their own research theme.

SES600P2 - 201

論文研究指導 1 A

湯澤 規子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

修士論文および研究論文作成のための演習指導

【到達目標】

本演習では修士論文を作成するために、次の3つを目標にします。

- ①研究の核心となる「問い」を明確にする。
- ②それと関連する学術的背景を文献講読などにより把握する。
- ③実証研究の実施と報告。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連している。

【授業の進め方と方法】

演習参加者の報告とそれに対する議論、コメントを中心に進めます。実証研究については各進捗状況に対応して指導します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	参加者の「問い」を共有、テーマと文献の選定
第2回	研究とは何か	研究を進めていくための基礎的な知識とスキルを習得する
第3回	「問い」の設定と先行研究レビュー（1）	演習参加者の「問い」を提示し、関連する先行研究のレビューを行い議論する（第1回）
第4回	「問い」の設定と先行研究レビュー（2）	演習参加者の「問い」を提示し、関連する先行研究のレビューを行い議論する（第2回）
第5回	「問い」の設定と先行研究レビュー（3）	演習参加者の「問い」を提示し、関連する先行研究のレビューを行い議論する（第3回）
第6回	「問い」の設定と先行研究レビュー（4）	演習参加者の「問い」を提示し、関連する先行研究のレビューを行い議論する（第4回）
第7回	「問い」の設定と先行研究レビュー（5）	演習参加者の「問い」を提示し、関連する先行研究のレビューを行い議論する（第5回）
第8回	「問い」の再設定とプレフィールドワークの報告（1）	前回の議論を踏まえて「問い」を再設定し、予備調査を実施した結果を報告し、議論する（第1回）
第9回	「問い」の再設定とプレフィールドワークの報告（2）	前回の議論を踏まえて「問い」を再設定し、予備調査を実施した結果を報告し、議論する（第2回）
第10回	「問い」の再設定とプレフィールドワークの報告（3）	前回の議論を踏まえて「問い」を再設定し、予備調査を実施した結果を報告し、議論する（第3回）
第11回	「問い」の再設定とプレフィールドワークの報告（4）	前回の議論を踏まえて「問い」を再設定し、予備調査を実施した結果を報告し、議論する（第4回）
第12回	「問い」の再設定とプレフィールドワークの報告（5）	前回の議論を踏まえて「問い」を再設定し、予備調査を実施した結果を報告し、議論する（第5回）
第13回	修士論文のテーマ設定（1）	2回の報告を総括し、修士論文のテーマについて報告し、議論する（第1回）
第14回	修士論文のテーマ設定（2）	2回の報告を総括し、修士論文のテーマについて報告し、議論する（第2回）

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

演習参加者それぞれが自分の問題関心に合わせて参考文献を選定したうえで熟読し、報告してください。かならず1度はフィールドワークに取り組み、その報告をして下さい。

【テキスト（教科書）】

特に指定しません。

【参考書】

随時紹介します。

【成績評価の方法と基準】

演習における報告内容（60%）、研究の準備状況（40%）を総合的に評価します。

【学生の意見等からの気づき】

特にありません。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>地域経済学、日本近現代史、人文地理学
 <研究テーマ>地域づくりの理論と実践、食と農と暮らしの地域経済学、女性と家族の近現代史

<主要研究業績>

- ・『7袋のポテトチップス—食べるを語る胃袋の戦後史』（単著、晶文社、2019年）
- ・『胃袋の近代—食と人びとの日常史』（単著、名古屋大学出版会、2018年）
- ・『在来産業と家族の地域史—ライフヒストリーからみた小規模家族経営と結城紬生産』（単著、古今書院、2009年）
- ・『ジェンダーから再考する地域と人間』『サステナビリティ—地球と人類の課題』朝倉書店、2-18年、104-113頁
- ・『地域づくりの系譜—山梨県甲州市の甚六桜とかつぬま朝市』『歴史地理学』58(1)、2016年、57-72頁

【Outline and objectives】

Practice for preparing master's thesis and research paper

SES600P2 - 202

論文研究指導 1 B

湯澤 規子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

修士論文および研究論文作成のための演習指導

【到達目標】

本演習では修士論文を作成するために、次の3つを目標にします。

- ①研究の核心となる「問い」を洗練する。
- ②それと関連する学術的背景を文献講読などにより把握する。
- ③研究計画を立て、調査を実施し、報告する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連している。

【授業の進め方と方法】

演習参加者の報告とそれに対する議論、コメントを中心に進めます。実証研究については各進捗状況に対応して指導します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	研究計画の報告と検討(1)	①研究テーマ、②研究方法、③先行研究をふまえたオリジナリティの提示を「研究計画」として報告し、検討する(第1回)
第2回	研究計画の報告と検討(2)	①研究テーマ、②研究方法、③先行研究をふまえたオリジナリティの提示を「研究計画」として報告し、検討する(第2回)
第3回	研究計画の報告と検討(3)	①研究テーマ、②研究方法、③先行研究をふまえたオリジナリティの提示を「研究計画」として報告し、検討する(第3回)
第4回	研究計画の報告と検討(4)	①研究テーマ、②研究方法、③先行研究をふまえたオリジナリティの提示を「研究計画」として報告し、検討する(第4回)
第5回	研究計画の報告と検討(5)	①研究テーマ、②研究方法、③先行研究をふまえたオリジナリティの提示を「研究計画」として報告し、検討する(第5回)
第6回	フィールドワークの報告と検討(1)	研究計画にもとづいて実施したフィールドワークの結果を報告し、議論する(第1回)
第7回	フィールドワークの報告と検討(2)	研究計画にもとづいて実施したフィールドワークの結果を報告し、議論する(第2回)
第8回	フィールドワークの報告と検討(3)	研究計画にもとづいて実施したフィールドワークの結果を報告し、議論する(第3回)
第9回	フィールドワークの報告と検討(4)	研究計画にもとづいて実施したフィールドワークの結果を報告し、議論する(第4回)
第10回	フィールドワークの報告と検討(5)	研究計画にもとづいて実施したフィールドワークの結果を報告し、議論する(第5回)
第11回	研究計画のブラッシュアップ(1)	2回の報告をふまえて、修士論文の研究計画を確定し、報告する(第1回)
第12回	研究計画のブラッシュアップ(2)	2回の報告をふまえて、修士論文の研究計画を確定し、報告する(第2回)
第13回	研究計画のブラッシュアップ(3)	2回の報告をふまえて、修士論文の研究計画を確定し、報告する(第3回)
第14回	研究計画のブラッシュアップ(4)	2回の報告をふまえて、修士論文の研究計画を確定し、報告する(第4回)

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

自らの問題意識に関わる論文、文献、資料などに積極的にアクセスし、自主的にそれを収集整理、熟読することをすすめます。

【テキスト（教科書）】

特に指定しません。

【参考書】

随時紹介します。

【成績評価の方法と基準】

演習における報告内容（60%）、研究の準備状況（40%）を総合的に評価します。

【学生の意見等からの気づき】

特にありません。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>地域経済学、日本近現代史、人文地理学
 <研究テーマ>地域づくりの理論と実践、食と農と暮らしの地域経済学、女性と家族の近現代史
 <主要研究業績>
 ・『7袋のポテトチップス—食べるを語る胃袋の戦後史』（単著、晶文社、2019年）
 ・『胃袋の近代—食と人びとの日常史』（単著、名古屋大学出版会、2018年）
 ・『在来産業と家族の地域史—ライフヒストリーからみた小規模家族経営と結城紬生産』（単著、古今書院、2009年）
 ・「ジェンダーから再考する地域と人間」『サステナビリティ—地球と人類の課題』朝倉書店、2-18年、104-113頁
 ・「地域づくりの系譜—山梨県甲州市の基六桜とかつぬま朝市」『歴史地理学』58(1)、2016年、57-72頁

【Outline and objectives】

Practice for preparing master's thesis and research paper

論文研究指導 1 A

吉永 明弘

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

環境倫理学に関するレポート・論文の書き方を学ぶ

【到達目標】

環境倫理学の考え方を理解し、自分なりの問題意識をもって、それを文章化できるようにすること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連している。

【授業の進め方と方法】

対面で行う。環境倫理学のレポートや論文を書くためには文献を読む必要がある。この授業では、参加者の問題関心に応じた文献購読をまず行い、そこから受講者が各自のテーマを決定し、レポートを作成し、それを添削指導する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	倫理学の方法論	倫理学の論文に固有の方法論について解説する。
第2回	環境倫理学の概要	環境倫理学の問題意識とこれまでの議論を紹介する。
第3回	環境問題に関するディスカッション	関心のある環境問題について話し合い、購読する本を決める。
第4回	レポート・論文の書き方	レポート・論文の書き方を紹介する。
第5回	文献購読（1）	話し合いの上、決定した文献を購読する。
第6回	文献購読（2）	話し合いの上、決定した文献を購読する。
第7回	文献購読（3）	話し合いの上、決定した文献を購読する。
第8回	文献購読（4）	話し合いの上、決定した文献を購読する。
第9回	文献購読（5）	話し合いの上、決定した文献を購読する。
第10回	文献購読（6）	話し合いの上、決定した文献を購読する。
第11回	文献購読（7）	話し合いの上、決定した文献を購読する。
第12回	文献購読（8）	話し合いの上、決定した文献を購読する。
第13回	レポートの添削指導（1）	提出されたレポートを添削し、問題点を共有する。
第14回	レポートの添削指導（2）	再提出されたレポートを添削し、改善点を共有する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

教科書をよく読んでおくこと。

【テキスト（教科書）】

吉永明弘『ブックガイド環境倫理』勁草書房、2017年

吉永明弘、寺本剛編『環境倫理学』昭和堂、2020年

そのほか、授業内で購読する文献を決定する。

【参考書】

吉永明弘『都市の環境倫理』勁草書房、2014年

吉永明弘・福永真弓編『未来の環境倫理学』勁草書房、2018年

【成績評価の方法と基準】

作成したレポートについて評価する（100%）。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【学生が準備すべき機器他】

特になし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>環境倫理学

<研究テーマ>都市の環境倫理、災後と人新世代の環境倫理

<主要研究業績>

『都市の環境倫理』

『ブックガイド 環境倫理』

『未来の環境倫理学』

いずれも勁草書房より刊行

SES600P2 - 202

論文研究指導 1 B

吉永 明弘

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

環境倫理学に関する研究発表の仕方を学ぶ

【到達目標】

環境倫理学の考え方を理解し、自分なりの問題意識をもって、それを研究発表できるようにすること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連している。

【授業の進め方と方法】

対面で行う。環境倫理学の研究発表を行うためには文献を読む必要がある。この授業では、参加者の問題関心に応じた文献購読をまず行い、そこから受講者が各自のテーマを決定し、発表資料を作成し、パワーポイント等を用いて発表する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	倫理学の方法論	倫理学の論文に固有の方法論について解説する。
第 2 回	環境倫理学の概要	環境倫理学の問題意識とこれまでの議論を紹介する。
第 3 回	環境問題に関するディスカッション	関心のある環境問題について話し合い、購読する本を決める。
第 4 回	研究発表のしかた	研究発表のしかたを説明する。
第 5 回	文献購読（1）	話し合いの上、決定した文献を購読する。
第 6 回	文献購読（2）	話し合いの上、決定した文献を購読する。
第 7 回	文献購読（3）	話し合いの上、決定した文献を購読する。
第 8 回	文献購読（4）	話し合いの上、決定した文献を購読する。
第 9 回	文献購読（5）	話し合いの上、決定した文献を購読する。
第 10 回	文献購読（6）	話し合いの上、決定した文献を購読する。
第 11 回	文献購読（7）	話し合いの上、決定した文献を購読する。
第 12 回	文献購読（8）	話し合いの上、決定した文献を購読する。
第 13 回	研究発表（1）	各自のテーマについて発表し、コメントしあう。
第 14 回	研究発表（2）	コメントをふまえて修正したものを発表する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

発表の準備を各自ですること。

【テキスト（教科書）】

吉永明弘『ブックガイド環境倫理』勁草書房、2017年

吉永明弘・寺本剛編『環境倫理学』昭和堂、2020年

【参考書】

吉永明弘『都市の環境倫理』勁草書房、2014年

吉永明弘・福永真弓編『未来の環境倫理学』勁草書房、2018年

【成績評価の方法と基準】

発表（40%）と発表のために作成した資料（60%）をあわせて評価する。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【学生が準備すべき機器他】

特になし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

<研究テーマ>環境倫理学

<主要研究業績>都市の環境倫理、災後と人新世時代の環境倫理

<主要研究業績>

『都市の環境倫理』

『ブックガイド 環境倫理』

『未来の環境倫理学』

いずれも勁草書房より刊行

【Outline and objectives】

Learning how to make research presentations on environmental ethics

論文研究指導 1 A

横内 恵

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

修士論文執筆のための基礎的な研究能力を獲得することを目的として、修士課程1年次を対象として、演習形式で研究指導を行う。

【到達目標】

修士論文を執筆するために必要となる基礎的なスキルを身につけ、修士課程1年次の終わりまでに修士論文のテーマを設定し、研究の構想を立てることを目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連している。

【授業の進め方と方法】

対面授業の予定である。受講者による報告、教員と他の受講者からのコメント、ディスカッションを中心として演習を進める。教員から、基礎的な研究スキルを習得するための課題を出したり、そのための文献を紹介したりすることもある。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	修士論文執筆という目標について理解を深める
第2回	研究の進め方	修士論文執筆に向けた研究の進め方について解説する
第3回	研究テーマ検討	春学期の報告準備を開始するにあたり、研究テーマを検討し始める
第4回	研究報告と研究テーマ検討	受講者による報告とディスカッションを通して、研究テーマを検討する
第5回	研究報告と研究テーマ検討	受講者による報告とディスカッションを通して、研究テーマを検討する
第6回	研究報告と研究テーマ検討	受講者による報告とディスカッションを通して、研究テーマを検討する
第7回	研究報告と研究テーマ検討	受講者による報告とディスカッションを通して、研究テーマを検討する
第8回	研究報告と研究テーマ検討	受講者による報告とディスカッションを通して、研究テーマを検討する
第9回	研究報告と研究テーマ検討	受講者による報告とディスカッションを通して、研究テーマを検討する
第10回	研究報告と研究テーマ検討	受講者による報告とディスカッションを通して、研究テーマを検討する
第11回	研究報告と研究テーマ検討	受講者による報告とディスカッションを通して、研究テーマを検討する
第12回	研究報告と研究テーマ検討	受講者による報告とディスカッションを通して、研究テーマを検討する
第13回	研究報告と研究テーマ検討	受講者による報告とディスカッションを通して、研究テーマを検討する
第14回	まとめ	春学期のまとめとして、各受講者の進捗状況を確認し、秋学期の具体的な目標設定をともに挙げる

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

報告者は研究報告準備を事前にしっかりと行ってください。そのために必要となる文献等は、受講者の相談を受けながら選定します。準備学習時間・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

特に指定しない。

【参考書】

必要に応じて紹介する。

【成績評価の方法と基準】

総合評価による（目安としては、平常点70%、論文準備状況30%）。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>環境法、公法（憲法・行政法）

<研究テーマ>環境リスクの法的制御、廃棄物処理法制

<主要研究業績>①「順応型リスク制御と比例性：ドイツ遺伝子技術法の閉鎖系規律手続を題材として」大塚直編『環境法研究』7号（信山社、2017年）13-45頁。

②「廃棄物処理法に基づく生活環境影響調査の対象地域に関する一考察—高城町事件と東海村事件を事例として」大阪経大論集 67巻3号（2016年）113-134頁。

③「科学的不確実性を伴う環境リスクに対する法的制御の可能性と限界」OUCFブックレット 8号「中国の食・健康・環境の現状から導く東アジアの未来」（2016年）62-74頁。

【Outline and objectives】

The course is designed as a seminar course for students in the 1st year of a Master's degree. Students in this course will especially acquire basic knowledge on designing their research.

SES600P2 - 202

論文研究指導 1 B

横内 恵

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

論文研究指導 1 A に引き続き、修士論文執筆のために、演習形式で研究指導を行う。

【到達目標】

各受講者が持っている問題意識と関心を確認し、分析手法を検討し、情報収集を行うなど研究遂行のための基礎力をさらに身につけることを目標とする。論文を作成するための事項についてのさらなる修得を目指す。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連している。

【授業の進め方と方法】

対面授業の予定である。教員を含めた参加者による討論を繰り返していく。これにより、各々のテーマに関して柔軟かつ複眼的な見方ができるようにする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	テーマの確認と研究計画 (1)	研究内容についての確認と計画のさらなる検討
第 2 回	テーマの確認と研究計画 (2)	研究内容についての確認と計画のさらなる検討
第 3 回	テーマの確認と研究計画 (3)	先行研究についての確認と計画のさらなる検討
第 4 回	テーマの確認と研究計画 (4)	先行研究についての確認と計画のさらなる検討
第 5 回	分析手法・技法の検討 (1)	分析手法・技法、評価・検証とその検討
第 6 回	分析手法・技法の検討 (2)	分析手法・技法、評価・検証とその検討
第 7 回	分析手法・技法の検討 (3)	分析手法・技法、評価・検証とその検討
第 8 回	分析手法・技法の検討 (4)	分析手法・技法、評価・検証とその検討
第 9 回	研究遂行状況の報告と検討 (1)	研究遂行状況の報告と検討、新たな課題の洗い出し
第 10 回	研究遂行状況の報告と検討 (2)	研究遂行状況の報告と検討、新たな課題の洗い出し
第 11 回	研究遂行状況の報告と検討 (3)	研究遂行状況の報告と検討、新たな課題の洗い出し
第 12 回	研究遂行状況の報告と検討 (4)	研究遂行状況の報告と検討、新たな課題の洗い出し
第 13 回	プレゼンテーション法 (1)	進捗度の確認、プレゼンテーション資料の作成法
第 14 回	プレゼンテーション法 (2)	進捗度の確認、プレゼンテーション資料の作成法

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

研究内容の考察、先行研究（文献等）に関する情報収集、プレリサーチ、報告の準備などの作業をすすめる。準備学習時間・復習時間は、各 2 時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

特に指定しない。

【参考書】

必要に応じて紹介する。

【成績評価の方法と基準】

総合評価による（目安としては、平常点 70%、論文準備状況 30%）。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

環境法、公法（憲法・行政法）

<研究テーマ>

環境リスクの法的制御、廃棄物処理法制

<主要研究業績>

①「順応型リスク制御と比例性：ドイツ遺伝子技術法の閉鎖系規律手続を題材として」大塚直編『環境法研究』7号（信山社、2017年）13-45頁。

②「廃棄物処理法に基づく生活環境影響調査の対象地域に関する一考察 — 高城町事件と東海村事件を事例として」大阪経大論集 67巻 3号（2016年）113-134頁。

③「科学的不確実性を伴う環境リスクに対する法的制御の可能性と限界」OUGCブックレット 8号「中国の食・健康・環境の現状から導く東アジアの未来」（2016年）62-74頁。

【Outline and objectives】

The course is designed as a course for students in the 1st year of a Master's degree.

論文研究指導 1 A

渡邊 誠

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この論文研究指導では修士論文の作成に向けて、テーマ選定、先行研究の調査、分析手法・技法を含めた研究方法、結果の吟味と評価・検証などの考え方について検討する。これにより受講者は研究活動を進めるための基礎力を修得する。ここでは概ねテーマの選定から先行研究の調査に関わる内容を中心に研究する。

【到達目標】

受講者は各々の問題意識と関心事を確認し、論点整理、分析手法の検討、さらには情報収集などを行う。同時に論文を作成するための基礎的事項を修得する。これにより受講者は研究遂行のための基礎力を身につけることができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連している。

【授業の進め方と方法】

本科目では対面形式で授業を進める。教員を含めた参加者による討論を繰り返していく。これにより受講者は各々のテーマに関して柔軟かつ複眼的な見方ができるようになる。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	授業の方針、進め方などについての説明
第 2 回	テーマの検討（問題意識の報告と検討）	問題意識の確認と研究テーマに関する概要の検討
第 3 回	テーマの検討（リサーチクエッションへの発展）	問題意識の確認と研究テーマに関する概要の検討
第 4 回	テーマの検討（研究テーマの検討）	論点整理と研究の進め方に関する予備的検討
第 5 回	テーマの検討（研究テーマの選定）	論点整理と研究の進め方に関する予備的検討
第 6 回	研究活動の設計（概要設計の検討）	研究活動の概要の設計・計画、フィールド調査の方針などの検討
第 7 回	研究活動の設計（概要設計の確認）	研究活動の概要の設計・計画、フィールド調査の方針などの検討
第 8 回	先行研究の調査（情報収集方法の検討）	文献の収集と調査（図書館における文献検索と資料収集）
第 9 回	先行研究の調査（情報収集）	文献の収集と調査（図書館における文献検索と資料収集）
第 10 回	先行研究の調査（論点整理）	関連文献の講読と精査、論点整理と課題の確認
第 11 回	先行研究の調査（課題整理）	関連文献の講読と精査、論点整理と課題の確認
第 12 回	先行研究の調査（研究計画の再検討）	関連文献の講読と精査、論点整理と課題の確認
第 13 回	研究活動の設計（詳細設計の検討）	研究テーマの確認と研究活動の詳細設計
第 14 回	研究活動の設計（詳細設計の確認）	研究テーマの確認と研究活動の詳細設計

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は各 2 時間を標準とする。テーマの考察、先行研究（文献等）に関する情報収集、プレリサーチ、報告の準備などの作業をすすめることにする。

【テキスト（教科書）】

特に用いない。

【参考書】

開講時に適宜紹介する。

【成績評価の方法と基準】

報告内容および討論参加の積極性など 100%。

【学生の意見等からの気づき】

参加者間のコミュニケーションがさらに深まるよう考えていく。

【学生が準備すべき機器他】

特になし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>非線形力学、物性理論、計算科学

<研究テーマ>カオスとフラクタル、交通流のダイナミクス

<主要研究業績> Dynamics of group motions controlled by signal processing: A cellular-automaton model and its applications, Communications in Nonlinear Science and Numerical Simulation 11(2006)pp.624-634. An extension of optimal-velocity model and dynamical transition in congested phase (I & II), Far East Journal of Dynamical Systems 16(2011)pp.71-86 & 17(2011)pp.1-15.

【Outline and objectives】

This is a guidance seminar to accomplish research projects for each member of this class in the master's course. Here we will mainly learn the process for planning of themes and examination of previously reported works.

SES600P2 - 202

論文研究指導 1 B

渡邊 誠

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

「論文研究指導 1 A」に引き続き、ここでは修士論文の作成に向けて、テーマ選定、先行研究の調査、分析手法・技法を含めた研究方法、結果の吟味と評価・検証などの考え方について検討する。これにより受講者は研究活動を遂行するための基礎力を修得する。ここでは概ね分析手法・技法の検討、結果の評価・検証等に注目して検討し、論文作成へ発展させるために必要な事項について研究する。

【到達目標】

受講者は各々の問題意識と関心事を確認し、論点整理、分析手法の検討、さらには情報収集などを行う。同時に論文を作成するための基礎的事項を再確認する。これにより研究遂行のための基礎力をさらに身につけることができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連している。

【授業の進め方と方法】

本科目では対面形式で授業を進める。教員を含めた参加者による討論を繰り返していく。これにより、受講者は各々のテーマに関して柔軟かつ複眼的な見方ができるようになる。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	テーマの確認と研究計画 (研究計画の概要確認)	研究内容についての確認と計画のさらなる検討
第 2 回	テーマの確認と研究計画 (研究計画の詳細確認)	研究内容についての確認と計画のさらなる検討
第 3 回	テーマの確認と研究計画 (先行研究の確認)	先行研究の確認と計画のさらなる検討
第 4 回	テーマの確認と研究計画 (研究計画の再検討)	先行研究についての確認と計画のさらなる検討
第 5 回	分析手法・技法の検討 (情報収集)	分析手法・技法、評価・検証とその検討
第 6 回	分析手法・技法の検討 (検討)	分析手法・技法、評価・検証とその検討
第 7 回	分析手法・技法の検討 (選定)	分析手法・技法、評価・検証とその検討
第 8 回	分析手法・技法の検討 (確認)	分析手法・技法、評価・検証とその検討
第 9 回	研究遂行状況の報告と検討 (報告)	研究遂行状況の報告と検討、新たな課題の洗い出し
第 10 回	研究遂行状況の報告と検討 (検討)	研究遂行状況の報告と検討、新たな課題の洗い出し
第 11 回	研究遂行状況の報告と検討 (論点整理)	研究遂行状況の報告と検討、新たな課題の洗い出し
第 12 回	研究遂行状況の報告と検討 (課題整理)	研究遂行状況の報告と検討、新たな課題の洗い出し
第 13 回	プレゼンテーション法 (資料作成方法の検討)	進捗の確認、プレゼンテーション資料の作成法
第 14 回	プレゼンテーション法 (報告)	進捗の確認、プレゼンテーション資料の作成法

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は各 2 時間を標準とする。研究内容の考察、先行研究（文献等）に関する情報収集、プレリサーチ、報告の準備などの作業をすすめる。

【テキスト（教科書）】

特に用いない。

【参考書】

開講時に適宜紹介する。

【成績評価の方法と基準】

報告内容および討論参加の積極性など 100%。

【学生の意見等からの気づき】

参加者間のコミュニケーションがさらに深まるよう考えていく。

【学生が準備すべき機器他】

特になし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>非線形力学、物性理論、計算科学
<研究テーマ>カオスとフラクタル、交通流のダイナミクス、

<主要研究業績> Dynamics of group motions controlled by signal processing: A cellular-automaton model and its applications, Communications in Nonlinear Science and Numerical Simulation 11(2006)pp.624-634. An extension of optimal-velocity model and dynamical transition in congested phase (I & II), Far East Journal of Dynamical Systems 16(2011)pp.71-86 & 17(2011)pp.1-15.

【Outline and objectives】

This is a guidance seminar to accomplish research projects for each member of this class in the master's course. Here we will mainly learn the methodology of analysis, evaluation techniques, and presentation methods of works. This seminar is a developed subject from 1A.

SES600P2 - 203

論文研究指導 2 A

金藤 正直

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本演習では、論文研究指導 1A・B で習得した研究・調査の方法論、小論文（研究計画書）の内容、そして、修士論文の構想に基づいて、研究・調査内容を報告するとともに、その報告結果を参考にしながら完成度の高い修士論文を作成していくことを目的とする。

【到達目標】

本演習では、修士論文の中間報告書（粗原稿）を作成していくために、論文研究指導 1A・B よりも論理力、分析・調査力、執筆力、説明力、質問力を習得することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連している。

【授業の進め方と方法】

本演習は対面で実施する。履修者には、論文研究指導 1A・B で習得した研究・調査の方法論、小論文（研究計画書）、修士論文の構想に基づいて、特定主体（家計、企業、自治体、地域、国など）における経営あるいは会計のモデルを検討してもらうとともに、このモデルの特長や問題点をアンケート調査、ヒアリング調査、ケーススタディから明らかにすることにより、同モデルの実践適用可能性や新たな見解を提案してもらう。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション	1 年次までに行った研究・調査とそれに基づく今後の取組みについて確認する。
第 2 回	修士論文の構成（案）の検討	修士論文を構成する章や節の設定方法を講義するとともに、その案について報告する。
第 3 回～ 第 11 回	研究・調査の成果報告	第 2 回の構成（案）に基づいて、研究・調査を進めていくとともに、その成果を報告する。
第 12 回	修士論文の体裁	修士論文の体裁を整えていくための方法を講義する。
第 13 回	修士論文の構成（案）の再検討	これまでの講義に基づいて、章や節の構成（案）を再検討する。
第 14 回	修士論文の中間報告書（粗原稿）の作成	第 13 回の構成に基づいて作成される修士論文の全体内容を報告するとともに、その内容の粗原稿を作成する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

研究内容に関する著書・論文・報告書・新聞・雑誌記事などを読み、その分析・検討を計画的に行うとともに、その結果を修士論文の中間報告書（粗原稿）に反映させてください。

【テキスト（教科書）】

特に使用しませんが、毎回の報告ではワードあるいはパワーポイントを使用しますので、履修者はその報告レジュメの作成と配布をお願いします。

【参考書】

履修者の研究・調査の進捗状況に応じて、授業中に著書、研究論文、報告書、新聞・雑誌記事などを紹介します。

【成績評価の方法と基準】

本演習の成績は次の 4 点に基づいて評価します。

- ・ 討論への参加（発言内容）（10 %）
- ・ 報告用配布レジュメの内容（10 %）
- ・ 報告内容（プレゼンテーション能力）（30 %）
- ・ 修士論文（粗原稿）の内容（50 %）

【学生の意見等からの気づき】

毎年、意見や要望を考慮に入れ、講義内容を改善しています。

【学生が準備すべき機器他】

必要に応じてパソコンとプロジェクターを使用します。

【その他の重要事項】

質問などについては電子メールで連絡ください。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

環境経営論、地域経営論

<研究テーマ>

企業や地域の持続的成長を実現するための経営・会計手法に関する研究

<主要研究業績>

・金藤正直（2014）「地域サプライチェーンとしての産業クラスターのマネジメント-サプライチェーン・マネジメントの適用-」二神恭一・高山貢・高橋賢編著『地域再生のための経営と会計』中央経済社、41-52 頁。

・金藤正直（2015）「食料産業クラスターマネジメントを支援するバランス・スコアカードの構想」『産業経理』Vol.75 No.1、53-63 頁。

・金藤正直（2016）「サステナビリティ・サプライチェーン・マネジメントの実践的展開モデル」『横浜経営研究』第 37 巻第 2 号、55-72 頁。

・金藤正直（2018）「フードバレーの戦略的マネジメントを支援するバランス・スコアカードの適用可能性-フードバレーとからの取組みを中心として-」『経済学論纂』第 58 巻第 2 号、65-84 頁。

・金藤正直（2021）「健康経営の展望-どう評価・開示するか？-」『企業会計』Vol.73 No.2、87-90 頁。

【Outline and objectives】

The purpose of this seminar is to study the details of a master thesis.

SES600P2 - 204

論文研究指導 2 B

金藤 正直

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本演習では、論文研究指導 1A・B で習得した研究・調査の方法論、小論文（研究計画書）の内容、修士論文の構想、そして、論文研究指導 2A で作成した修士論文の中間報告書（粗原稿）の内容に基づいて、研究・調査を進め、その結果を報告するとともに、その報告内容を参考にしながら完成度の高い修士論文を作成していくことを目的とする。

【到達目標】

本演習では、論文研究指導 1A・B や論文研究指導 2A での学習内容を参考にしながら、修士論文を作成していくための論理力、分析・調査力、執筆力、説明力、質問力を習得することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連している。

【授業の進め方と方法】

本演習は対面で実施する。履修者には、論文研究指導 1A・B で習得した研究・調査の方法論、作成した小論文（研究計画書）の内容、修士論文の構想、論文研究指導 2A で作成した修士論文の中間報告書（粗原稿）の内容に基づいて、特定主体（家計、企業、自治体、地域、国など）における経営あるいは会計のモデルを検討してもらうとともに、このモデルの特長や問題点をアンケート調査、ケーススタディ、ヒアリング調査から明らかにすることにより、同モデルの実践適用可能性や新たな見解を提案してもらう。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション	これまでに行ってきた研究・調査の進展について報告するとともに、完成から提出までのスケジュールを確認する。
第 2 回～ 第 5 回	追加的作業の確認	修士論文の完成のために必要不可欠となる作業（アンケート調査、ケーススタディ、ヒアリング調査の実施など）を確認する。
第 6 回～ 第 13 回	修士論文の作成	論文研究指導 2A で作成した修士論文の中間報告書（粗原稿）に、これまでに行ってきた研究・調査内容を反映させた（加筆修正した）部分、また、内容調整した部分について報告する。
第 14 回	修士論文の最終版の調整	修士論文の形式と内容の最終調整を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

研究内容に関する著書・論文・報告書・新聞・雑誌記事などを読み、その分析・検討を計画的に行うとともに、その内容を修士論文に反映させ、完成度の高い論文にしてください。

【テキスト（教科書）】

特に使用しませんが、毎回の報告ではワードあるいはパワーポイントを使用しますので、履修者はその報告レジュメの作成と配布をお願いします。

【参考書】

履修者の研究・調査の進捗状況に応じて、授業中に著書、研究論文、報告書、新聞・雑誌記事などを紹介します。

【成績評価の方法と基準】

本演習の成績は次の 4 点に基づいて評価します。

- ・ 討論への参加（発言内容）（10 %）
- ・ 報告用配布レジュメの内容（10 %）
- ・ 報告内容（プレゼンテーション能力）（30 %）
- ・ 修士論文（提出前原稿）の内容（50 %）

【学生の意見等からの気づき】

毎年、意見や要望を考慮に入れ、講義内容を改善しています。

【学生が準備すべき機器他】

必要に応じてパソコンとプロジェクターを使用します。

【その他の重要事項】

質問などについては電子メールで連絡ください。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

環境経営論、地域経営論

<研究テーマ>

企業や地域の持続的成長を実現するための経営・会計手法に関する研究

<主要研究業績>

- ・ 金藤正直（2014）「地域サプライチェーンとしての産業クラスターのマネジメント-サプライチェーン・マネジメントの適用-」二神恭一・高山貢・高橋賢編著『地域再生のための経営と会計』中央経済社、41-52 頁。
- ・ 金藤正直（2015）「食料産業クラスターマネジメントを支援するバランス・スコアカードの構想」『産業経理』Vol.75 No.1、53-63 頁。
- ・ 金藤正直（2016）「サステナビリティ・サプライチェーン・マネジメントの実践的展開モデル」『横浜経営研究』第 37 巻第 2 号、55-72 頁。
- ・ 金藤正直（2018）「フードバレーの戦略的マネジメントを支援するバランス・スコアカードの適用可能性-フードバレーとかちの取組みを中心として-」『経済学論纂』第 58 巻第 2 号、65-84 頁。
- ・ 金藤正直（2021）「健康経営の展望-どう評価・開示するか？ -」『企業会計』Vol.73 No.2、87-90 頁。

【Outline and objectives】

The purpose of this seminar is to complete a master thesis.

論文研究指導 2 A

小島 聡

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この演習では、修士課程の2年生の学生に対して調査研究の指導を行う。学生は、演習を通して、以下の内容に取り組む。

- ①調査研究の進捗状況の確認
- ②研究テーマの細部の再調整
- ③修士論文の草稿の執筆
- ④追加的な調査研究

【到達目標】

この演習に参加する学生の到達目標は、以下のとおりである。

- ・草稿の執筆を通して、修士論文の構成について論理的な一貫性を構築できるようになる。
- ・主題に即して説得力のある修士論文を完成させる執筆能力を身につける。
- ・論文の内容について明確に説明する能力を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連している。

【授業の進め方と方法】

修士論文の草稿執筆に向けて、章構成に関する指導、調査研究の遂行に関する指導、調査研究から得た知見の評価と修士論文への反映に関する指導、修士論文の論理展開や技術・作法に関する指導を行う。毎回、自ら作成したペーパーに基づいて発表することをもとめる。提出したペーパーはその場でコメントするとともに、必要に応じて、後日、添削や追加コメントを行う。演習は、参加学生が、互いに他者の調査研究および論文執筆の進捗状況から学び合う場とする。なお、この授業は、対面授業を基本としつつも、COVID-19の状況による社会情勢や参加者の感染リスク等に応じて、Zoomによる双方向型授業の実施についても柔軟に対応する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
1	1年間の調査研究成果の報告	M1の調査研究成果について報告し、今後の方向性について確認する。
2	修士論文作成までの工程確認	修士論文作成までの工程と具体的な調査研究課題を確認する。
3	修士論文の構造と技法の学習	修士論文の論理展開の重要性、章構成、技法について学ぶ。
4	章節構成案の報告	章節構成案を報告し、論文の構造について検討する。
5	調査研究の報告	調査研究の進捗状況について報告する。
6	調査研究の報告	調査研究の進捗状況について報告する。
7	調査研究の報告	調査研究の進捗状況について報告する。
8	章節構成案の再検討	調査研究の進展をふまえて、章節構成案を再検討する。
9	草稿執筆の準備作業の報告	草稿執筆に向けた準備作業について報告し、工程を確認する。
10	調査研究の報告	調査研究の進捗状況について報告する。
11	調査研究の報告	調査研究の進捗状況について報告する。
12	草稿執筆に関する報告と検討	執筆中の草稿の進捗状況について報告し、今後の作業課題について検討する。
13	草稿執筆に関する報告と検討	執筆中の草稿の進捗状況について報告し、今後の作業課題について検討する。
14	草稿執筆に関する報告と検討	執筆中の草稿の進捗状況について報告し、今後の作業課題について検討する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

参加学生は、以下の時間外学習を行う（この授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とする）。

- ・修士論文の完成に向けて章節の構成を確定し、調査研究を進めながら草稿執筆に反映していくこと。
- ・修士論文の草稿を執筆すること。

【テキスト（教科書）】

特に用いない。

【参考書】

修士論文の作業の進捗状況に応じて、適宜、関連文献を提示する。

【成績評価の方法と基準】

平常点（参加姿勢）（70%）、課題提出（30%）の総合評価とする。修士論文の完成に向けた演習のため、自発的な取り組みの途中経過を毎回提示し、調査研究を段階的に進展させ、さらに論文としての熟度を高めていくことを重視する。

【学生の意見等からの気づき】

アンケート対象外につき該当なし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>行政学、地方自治論

<研究テーマ>持続可能性と自治体環境政策、地域環境ガバナンス、市民社会と自治体行政システム

<主要研究業績>

「アカウントビリティと自治体政策－説明責任の体系と再編」『自治体経営改革』（共著）、（ぎょうせい、2004）

「参加手法のイノベーション－自治体政策への活用に向けて－」『新しい自治のしくみづくり』（共著）、（ぎょうせい、2006）

「自治体環境政策の軌跡と持続可能性」『分権時代の地方自治』（共著）、（三省堂、2007）

「フィールドから考える地域環境 持続可能な地域社会をめざして」（共編著）（ミネルヴァ書房、2012）

「自治体の参加型政策システムと市民討議会の可能性」『地域開発』（vol.574,2012）

「上下流連携とサステイナビリティ」『自治体学』（vol.33-2,2020）

「人口減少社会における地域の持続可能性と政策論－（私）と（社会）の世代間継承可能性を手がかりとして－」『自治研かながわ月報』（NO.183,2020）

【Outline and objectives】

This seminar guides surveillance study to the student of the second grader of a master's course. Students tackle the following contents at a seminar.

- ① The check of the progress of surveillance study
- ② Readjustment of the details of a subject of research
- ③ Writing of the draft of a master's thesis
- ④ Additional surveillance study

SES600P2 - 204

論文研究指導 2 B

小島 聡

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この演習では、修士課程の2年生の学生に対して調査研究の指導を行う。学生は、演習を通して、以下の内容に取り組む。

- ①修士論文の草稿の検討
- ②修士論文の草稿の修正
- ③研究成果の意義と今後の課題に関する確認

【到達目標】

- この演習に参加する学生の到達目標は、以下の通りである。
- ・修士論文の構成について論理的な一貫性を構築できるようになる。
 - ・主題に即して説得力のある修士論文を完成させる執筆能力を身につける。
 - ・論文の内容について明確に説明する能力を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連している。

【授業の進め方と方法】

修士論文の完成に向けて、草稿修正に関する指導、追加的な調査研究の遂行に関する指導、そこから得た知見の評価と修士論文への反映に関する指導、修士論文の論理展開や技術・作法に関する指導を行う。毎回、自ら作成したペーパーに基づいて発表することをもとめる。提出したペーパーはその場でコメントするとともに、修士論文の草稿については、添削とコメントを行う。演習は、参加学生が、互いに他者の調査研究および論文執筆の進捗状況から学び合う場とする。なお、この授業は、対面授業を基本としつつも、COVID-19の状況による社会情勢や参加者の感染リスク等に応じて、Zoomによる双方向型授業の実施についても柔軟に対応する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
1	修士論文の草稿に関する報告	草稿について報告し、今後の修正課題について検討する。
2	追加的な調査研究の報告	追加的な調査研究の進捗状況について報告する。
3	追加的な調査研究の報告	追加的な調査研究の進捗状況について報告する。
4	追加的な調査研究の報告	追加的な調査研究の進捗状況について報告する。
5	修士論文の章ごとの報告	修士論文の章ごとに内容を報告し精査する。
6	修士論文の章ごとの報告	修士論文の章ごとに内容を報告し精査する。
7	修士論文の章ごとの報告	修士論文の章ごとに内容を報告し精査する。
8	修士論文の章ごとの報告	修士論文の章ごとに内容を報告し精査する。
9	修士論文の参考文献・資料に関する報告	修士論文の参考文献・資料について報告し精査する。
10	修士論文の全章に関する構成の最終確認	修士論文の全章に関する構成を最終確認し、重要な箇所について内容を精査する。
11	修士論文（案）の提出と報告	修士論文（案）を提出し、内容について報告する。
12	修士論文（案）の修正状況の報告	修士論文（案）の修正状況について報告する。
13	修士論文（案）の修正状況の報告	修士論文（案）の修正状況について報告する。
14	修士論文の最終案の報告と形式的調整	修士論文の最終案の報告と論文形式に関する調整を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

参加学生は、以下の時間外学習を行う（この授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とする）。

- ・修士論文の完成に向けて、追加的な調査研究を進めながら執筆に反映していくこと。
- ・修士論文を執筆すること。

【テキスト（教科書）】

特に用いない。

【参考書】

修士論文の作業の進捗状況に応じて、適宜、関連文献を提示する。

【成績評価の方法と基準】

平常点（参加姿勢）（70%）、課題提出（30%）の総合評価とする。修士論文の完成に向けた演習のため、自発的な取り組みの途中経過を毎回提示し、調査研究を段階的に進展させ、さらに論文としての熟度を高めていくことを重視する。

【学生の意見等からの気づき】

アンケート対象外につき該当なし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>行政学、地方自治論
<研究テーマ>持続可能性と自治体環境政策、地域環境ガバナンス、市民社会と自治体行政システム

<主要研究業績>

「アカウンタビリティと自治体政策－説明責任の体系と再編」『自治体経営改革』（共著）、（ぎょうせい、2004）

「参加手法のイノベーション－自治体政策への活用に向けて－」『新しい自治のしくみづくり』（共著）、（ぎょうせい、2006）

「自治体環境政策の軌跡と持続可能性」『分権時代の地方自治』（共著）、（三省堂、2007）

『フィールドから考える地域環境 持続可能な地域社会をめざして』（共編著）（ミネルヴァ書房、2012）

「自治体の参加型政策システムと市民協議会の可能性」『地域開発』（vol.574,2012）

「上下流連携とサステナビリティ」『自治体学』（vol.33-2,2020）

「人口減少社会における地域の持続可能性と政策論－〈私〉と〈社会〉の世代間継承可能性を手がかりとして－」『自治研かながわ月報』（NO.183,2020）

【Outline and objectives】

This seminar guides surveillance study to the student of the second grader of a master's course. Students tackle the following contents at a seminar.

- ① Examination of the draft of a master's thesis
- ② Correction of the draft of a master's thesis
- ③ The check about the meaning of the result of research, and a future subject

論文研究指導 2 A

高田 雅之

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

自然環境保全に関わる課題に関して、テーマ設定、研究手法の検討、分析評価などを含む修士論文の作成に向けた研究指導を通して、修士論文を完成させます。

【到達目標】

修士課程 2 年生を対象として、収集した資料及び取得したデータの分析と評価を行い、追加的に必要となる情報や知見等を明らかにした上でこれらを入力し、解析評価をとおして修士論文を完成させることを目標とします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連している。

【授業の進め方と方法】

研究課題の進捗に関する資料をもとに意見交換を行うとともに、関連する文献資料や事例を題材とした学習をとおして研究指導を行い、修士論文の完成に到達します。また、指導においては適宜フィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	中間成果の評価と検証	中間成果の評価と検証に関する論議と指導、関連学習
第 2 回	中間成果の評価と検証	中間成果の評価と検証に関する論議と指導、関連学習
第 3 回	中間成果の評価と検証	中間成果の評価と検証に関する論議と指導、関連学習
第 4 回	中間成果の評価と検証	中間成果の評価と検証に関する論議と指導、関連学習
第 5 回	中間成果の評価と検証	中間成果の評価と検証に関する論議と指導、関連学習
第 6 回	追加的な研究	追加的な研究に関する論議と指導、関連学習
第 7 回	追加的な研究	追加的な研究に関する論議と指導、関連学習
第 8 回	追加的な研究	追加的な研究に関する論議と指導、関連学習
第 9 回	追加的な研究	追加的な研究に関する論議と指導、関連学習
第 10 回	追加的な研究	追加的な研究に関する論議と指導、関連学習
第 11 回	追加的な情報収集と分析	追加的な情報収集と分析に関する論議と指導、関連学習
第 12 回	追加的な情報収集と分析	追加的な情報収集と分析に関する論議と指導、関連学習
第 13 回	追加的な情報収集と分析	追加的な情報収集と分析に関する論議と指導、関連学習
第 14 回	追加的な情報収集と分析	追加的な情報収集と分析に関する論議と指導、関連学習

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

修士論文の取りまとめに向けて、情報や知識の収集、データ分析、解析評価などの研究作業に取り組みます。本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

特定のものは使用しません。適宜資料を配布します。

【参考書】

随時紹介します。

【成績評価の方法と基準】

平常点（100%）：研究の進捗状況、毎回の学習意欲、課題への対応などを総合的に評価します。

【学生の意見等からの気づき】

該当なし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

自然環境政策、湿地生態学、景観生態学、自然環境地理学、保全生態学

<研究テーマ>

湿地における自然資源の持続的活用、生物多様性と生態系サービスの評価、湿原生態系の構造と人為的影響の評価、生物多様性オフセット

<主要研究業績>

「図説日本の湿地」（朝倉書店、2017）編集・共著

「湿地の科学と暮らし」（北大出版会、2017）共著

「湿地の博物誌」（北大出版会、2014）編者

「サロベツ湿原と稚咲内砂丘林帯湖沼群」（北大出版会、2014）共著

Combined burning and mowing for restoration of abandoned semi-natural grasslands, Appl Veg Sci 20, 2017.

Tropical Peat Formation, Tropical Peatland Ecosystems, Springer, 2016.

Effects of the expansion of vascular plants in Sphagnum-dominated bog on evapotranspiration, Agricultural and Forest Meteorology 220, 2016.

【実務経験のある教員による授業】

公務員、独立行政法人、民間企業

【Outline and objectives】

Regarding issues related to nature conservation, the students complete the master's thesis through research direction including theme setting, study methodology and analysis.

SES600P2 - 204

論文研究指導 2 B

高田 雅之

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

自然環境保全に関わる課題に関して、テーマ設定、研究手法の検討、分析評価などを含む修士論文の作成に向けた研究指導を通して、修士論文を完成させます。

【到達目標】

修士課程 2 年生を対象として、収集した資料及び取得したデータの分析と評価を行い、追加的に必要となる情報や知見等を明らかにした上でこれらを入力し、解析評価をとおして修士論文を完成させることを目標とします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連している。

【授業の進め方と方法】

研究課題の進捗に関する資料をもとに意見交換を行うとともに、関連する文献資料や事例を題材とした学習をとおして研究指導を行い、修士論文の完成に到達します。また、指導においては適宜フィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	成果に向けた解析評価	成果に向けた解析評価に関する論議と指導、関連学習
第 2 回	成果に向けた解析評価	成果に向けた解析評価に関する論議と指導、関連学習
第 3 回	成果に向けた解析評価	成果に向けた解析評価に関する論議と指導、関連学習
第 4 回	成果に向けた解析評価	成果に向けた解析評価に関する論議と指導、関連学習
第 5 回	成果に向けた解析評価	成果に向けた解析評価に関する論議と指導、関連学習
第 6 回	最終成果のまとめ	最終成果のまとめに関する論議と指導
第 7 回	最終成果のまとめ	最終成果のまとめに関する論議と指導
第 8 回	最終成果のまとめ	最終成果のまとめに関する論議と指導
第 9 回	最終成果のまとめ	最終成果のまとめに関する論議と指導
第 10 回	最終成果のまとめ	最終成果のまとめに関する論議と指導
第 11 回	修士論文のまとめ	修士論文のまとめに関する論議と指導
第 12 回	修士論文のまとめ	修士論文のまとめに関する論議と指導
第 13 回	修士論文のまとめ	修士論文のまとめに関する論議と指導
第 14 回	修士論文のまとめ	修士論文のまとめに関する論議と指導

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

修士論文の取りまとめに向けて、情報や知識の収集、データ分析、解析評価などの研究作業に取り組みます。本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

特定のものはありません。適宜資料を配布します。

【参考書】

随時紹介します。

【成績評価の方法と基準】

平常点（100%）：研究の進捗状況、毎回の学習意欲、課題への対応などを総合的に評価します。

【学生の意見等からの気づき】

該当なし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

自然環境政策、湿地生態学、景観生態学、自然環境地理学、保全生態学

<研究テーマ>

湿地における自然資源の持続的活用、生物多様性と生態系サービスの評価、湿原生態系の構造と人為的影響の評価、生物多様性オフセット

<主要研究業績>

「図説日本の湿地」（朝倉書店、2017）編集・共著

「湿地の科学と暮らし」（北大出版会、2017）共著

「湿地の博物誌」（北大出版会、2014）編者

「サロベツ湿原と稚内砂丘林帯湖沼群」（北大出版会、2014）共著

Combined burning and mowing for restoration of abandoned semi-natural grasslands, Appl Veg Sci 20, 2017.

Tropical Peat Formation, Tropical Peatland Ecosystems, Springer, 2016.

Effects of the expansion of vascular plants in Sphagnum-dominated bog on evapotranspiration, Agricultural and Forest Meteorology 220, 2016.

【実務経験のある教員による授業】

公務員、独立行政法人、民間企業

【Outline and objectives】

Regarding issues related to nature conservation, the students complete the master's thesis through research direction including theme setting, study methodology and analysis.

論文研究指導 2 A

高橋 五月

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

環境人類学的調査を行い、研究論文を作成するための指導を行います。

【到達目標】

文化人類学的研究を実践するために、エスノグラフィーの調査方法を学びながら、自らのリサーチプロポーザルを作成し、学位研究論文を書き上げるための準備を行う。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連している。

【授業の進め方と方法】

エスノグラフィーの調査手法に関する文献を講読しながら、演習形式によって、リサーチプロポーザルを作成するための指導をする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション	授業の説明
第 2 回	研究テーマを絞る	研究テーマに関連する文献を講読し、文献レビューを作成しながら研究テーマを具体的に絞り込む
第 3 回	研究テーマを絞る	研究テーマに関連する文献を講読し、文献レビューを作成しながら研究テーマを具体的に絞り込む
第 4 回	研究テーマを絞る	研究テーマに関連する文献を講読し、文献レビューを作成しながら研究テーマを具体的に絞り込む
第 5 回	研究テーマを絞る	研究テーマに関連する文献を講読し、文献レビューを作成しながら研究テーマを具体的に絞り込む
第 6 回	研究テーマを絞る	研究テーマに関連する文献を講読し、文献レビューを作成しながら研究テーマを具体的に絞り込む
第 7 回	研究テーマを絞る	研究テーマに関連する文献を講読し、文献レビューを作成しながら研究テーマを具体的に絞り込む
第 8 回	研究テーマを絞る	研究テーマに関連する文献を講読し、文献レビューを作成しながら研究テーマを具体的に絞り込む
第 9 回	研究テーマを絞る	研究テーマに関連する文献を講読し、文献レビューを作成しながら研究テーマを具体的に絞り込む
第 10 回	現地調査計画、準備、実行、データ分析	研究テーマに沿って、現地調査の計画、準備、実行、データ分析を行う
第 11 回	現地調査計画と準備	研究テーマに沿って、現地調査の計画、準備、実行、データ分析を行う
第 12 回	現地調査計画と準備	研究テーマに沿って、現地調査の計画、準備、実行、データ分析を行う
第 13 回	現地調査計画と準備	研究テーマに沿って、現地調査の計画、準備、実行、データ分析を行う
第 14 回	現地調査計画と準備	研究テーマに沿って、現地調査の計画、準備、実行、データ分析を行う

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は各 2 時間を標準とします。内容は主に、文献講読、プレリサーチの実施、リサーチプロポーザルの文献レビュー作成を含みます。

【テキスト（教科書）】

学生のテーマに応じて提示します

【参考書】

菅原和孝『フィールドワークへの挑戦』世界思想社（2006）、小田博志『エスノグラフィー入門』春秋社（2010）

【成績評価の方法と基準】

平常点（30%）、研究論文（70%）

【学生の意見等からの気づき】

特になし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 環境人類学、海洋人類学、震災人類学

<研究テーマ> 日本の沿岸漁業と近代化、震災と未来論、水族館の人類学

<主要研究業績> 『To See Once More the Stars: Living in a Post-Fukushima World (星の降るとき、3・11後の世界に生きる)』（共編 The New Pacific Press, 2014）、Hatchery Flounder Going Wild: Authenticity, Aesthetics, and Fetishism of Fish in Japan. Food and Foodways 22:5 - 23 (2014)、福島沖に浮かぶ「未来」とその未来『文化人類学』83(3):441-458、他

【Outline and objectives】

This course is designed to assist graduates students to carry out their research and complete theses.

SES600P2 - 204

論文研究指導 2 B

高橋 五月

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

環境人類学的調査を行い、研究論文を作成するための指導を行います。

【到達目標】

文化人類学的研究を実践するために、エスノグラフィーの調査方法を学びながら、自らのリサーチプロポーザルを作成し、学位研究論文を書き上げるための準備を行う。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連している。

【授業の進め方と方法】

エスノグラフィーの調査手法に関する文献を講読しながら、演習形式によって、学位論文を作成するための指導をする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション	授業の説明
第 2 回	研究テーマを絞る	研究テーマに関連する文献を講読し、文献レビューを作成しながら研究テーマを具体的に絞り込む
第 3 回	研究テーマを絞る	研究テーマに関連する文献を講読し、文献レビューを作成しながら研究テーマを具体的に絞り込む
第 4 回	研究テーマを絞る	研究テーマに関連する文献を講読し、文献レビューを作成しながら研究テーマを具体的に絞り込む
第 5 回	研究テーマを絞る	研究テーマに関連する文献を講読し、文献レビューを作成しながら研究テーマを具体的に絞り込む
第 6 回	研究テーマを絞る	研究テーマに関連する文献を講読し、文献レビューを作成しながら研究テーマを具体的に絞り込む
第 7 回	研究テーマを絞る	研究テーマに関連する文献を講読し、文献レビューを作成しながら研究テーマを具体的に絞り込む
第 8 回	研究テーマを絞る	研究テーマに関連する文献を講読し、文献レビューを作成しながら研究テーマを具体的に絞り込む
第 9 回	研究テーマを絞る	研究テーマに関連する文献を講読し、文献レビューを作成しながら研究テーマを具体的に絞り込む
第 10 回	現地調査計画、準備、実行、データ分析	研究テーマに沿って、現地調査の計画、準備、実行、データ分析を行う
第 11 回	現地調査計画と準備	研究テーマに沿って、現地調査の計画、準備、実行、データ分析を行う
第 12 回	現地調査計画と準備	研究テーマに沿って、現地調査の計画、準備、実行、データ分析を行う
第 13 回	現地調査計画と準備	研究テーマに沿って、現地調査の計画、準備、実行、データ分析を行う
第 14 回	現地調査計画と準備	研究テーマに沿って、現地調査の計画、準備、実行、データ分析を行う

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は各 2 時間を標準とします。内容は主に、文献講読、プレリサーチの実施、リサーチプロポーザルの文献レビュー作成を含みます。

【テキスト（教科書）】

学生のテーマに応じて提示します

【参考書】

菅原和孝『フィールドワークへの挑戦』世界思想社（2006）、小田博志『エスノグラフィー入門』春秋社（2010）

【成績評価の方法と基準】

平常点（30%）、研究論文（70%）

【学生の意見等からの気づき】

特になし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 環境人類学、海洋人類学、震災人類学

<研究テーマ> 日本の沿岸漁業と近代化、震災と未来論、水族館の人類学

<主要研究業績> 『To See Once More the Stars: Living in a Post-Fukushima World (星の降るとき、3・11後の世界に生きる)』（共編 The New Pacific Press, 2014）、『Hatchery Flounder Going Wild: Authenticity, Aesthetics, and Fetishism of Fish in Japan. Food and Foodways 22:5 - 23 (2014)、福島沖に浮かぶ「未来」とその未来『文化人類学』83(3):441-458、他

【Outline and objectives】

This course is designed to assist graduate students to carry out their research and complete theses.

論文研究指導 2 A

武貞 稔彦

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

修士論文執筆のための演習指導

【到達目標】

修士課程 2 年生を対象とする本演習では、各演習参加者が必要なりサーチを行ない、実際に修士論文を執筆、完成させると同時に確かな報告ができるようになることを目標とします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連している。

【授業の進め方と方法】

各回の演習は、受講者からの進捗報告、教員および演習参加者からのコメントを中心にすすめます。その過程で報告や発表（プレゼンテーション）の技術についても学ぶ機会が得られます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	研究構想の検討（第 6 回）	前年度の演習に引き続き、演習参加者による研究構想の報告と内容の検討を行う。（第 6 回）
第 2 回	研究構想の検討（第 7 回）	演習参加者による研究構想の報告と内容の検討を行う。（第 7 回）
第 3 回	研究構想の検討（第 8 回）	演習参加者による研究構想の報告と内容の検討を行う。（第 8 回）
第 4 回	研究構想の検討（第 9 回）	演習参加者による研究構想の報告と内容の検討を行う。（第 9 回）
第 5 回	研究構想の検討（第 10 回）	演習参加者による研究構想の報告と内容の検討を行う。（第 10 回）
第 6 回	研究構想の検討（第 11 回）	演習参加者による研究構想の報告と内容の検討を行う。（第 11 回）
第 7 回	研究構想の検討（第 12 回）	演習参加者による研究構想の報告と内容の検討を行う。（第 12 回）
第 8 回	修士論文執筆と進捗報告（第 1 回）	演習参加者による修士論文執筆状況の報告と内容の検討を行う。（第 1 回）
第 9 回	修士論文執筆と進捗報告（第 2 回）	演習参加者による修士論文執筆状況の報告と内容の検討を行う。（第 2 回）
第 10 回	修士論文執筆と進捗報告（第 3 回）	演習参加者による修士論文執筆状況の報告と内容の検討を行う。（第 3 回）
第 11 回	修士論文執筆と進捗報告（第 4 回）	演習参加者による修士論文執筆状況の報告と内容の検討を行う。（第 4 回）
第 12 回	修士論文執筆と進捗報告（第 5 回）	演習参加者による修士論文執筆状況の報告と内容の検討を行う。（第 5 回）
第 13 回	修士論文執筆と進捗報告（第 6 回）	演習参加者による修士論文執筆状況の報告と内容の検討を行う。（第 6 回）
第 14 回	修士論文執筆と進捗報告（第 7 回）	演習参加者による修士論文執筆状況の報告と内容の検討を行う。（特に中間報告に向けた発表準備）（第 7 回）

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

演習参加者との協議を通じて、修士論文執筆の進捗管理を行います。参加者は自ら執筆計画を立て、それに従って論文執筆をすすめて下さい。必要な先行研究事例のレビューや、フィールド調査も並行して実施することとなります。また、外部学会での発表も実施を目指します。

【テキスト（教科書）】

特に指定しません。必要に応じて資料を配布します。

【参考書】

随時紹介します。

【成績評価の方法と基準】

おおむね以下のバランスで総合的な成績評価を行います。修士論文（内容およびプレゼンテーション）70 %、演習における積極性と貢献度 30 %

【学生の意見等からの気づき】

少人数演習のため該当せず。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 開発の自然環境・社会環境への影響、開発援助、開発と倫理
<研究テーマ> 「望ましい（望ましくない）「開発」とは何か」「ダム建設に伴う立ち退きと補償、生活再建」
<主要研究業績>

"Japanese Experience of Involuntary Resettlement: Long-Term Consequences of Resettlement for the Construction of the Ikawa Dam," *International Journal of Water Resources Development*, Routledge, Vol. 25, Issue 3, September 2009, pp. 419- 430.

『開発介入と補償：ダム立ち退きをめぐる開発と正義論』勁草書房 2012 年, "Participation and diluted stakes in river management in Japan: the challenge of alternative constructions of resource governance" in Sato, J. ed., *Governance of Natural Resources: Uncovering the social purpose of materials in nature*. United Nations University Press, pp.141-161, July 2013

【Outline and objectives】

This is a second year seminar for authoring master thesis. Students will be able to 1) write his/her master thesis and to 2) make appropriate presentation for an academic audiences.

SES600P2 - 204

論文研究指導 2 B

武貞 稔彦

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

修士論文執筆のための演習指導

【到達目標】

修士課程 2 年生を対象とする本演習では、各演習参加者が必要なリサーチを行ない、実際に修士論文を執筆、完成させると同時に的確な報告ができるようになることを目標とします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連している。

【授業の進め方と方法】

各回の演習は、受講者からの進捗報告、教員および演習参加者からのコメントを中心にすすめます。その過程で報告や発表（プレゼンテーション）の技術についても学ぶ機会が得られます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	修士論文執筆と進捗報告 (第 1 回)	演習参加者による修士論文執筆状況の報告と内容の検討を行う。(第 1 回)
第 2 回	修士論文執筆と進捗報告 (第 2 回)	演習参加者による修士論文執筆状況の報告と内容の検討を行う。(第 2 回)
第 3 回	修士論文執筆と進捗報告 (第 3 回)	演習参加者による修士論文執筆状況の報告と内容の検討を行う。(第 3 回)
第 4 回	修士論文執筆と進捗報告 (第 4 回)	演習参加者による修士論文執筆状況の報告と内容の検討を行う。(第 4 回)
第 5 回	修士論文執筆と進捗報告 (第 5 回)	演習参加者による修士論文執筆状況の報告と内容の検討を行う。(第 5 回)
第 6 回	修士論文執筆と進捗報告 (第 6 回)	演習参加者による修士論文執筆状況の報告と内容の検討を行う。(第 6 回)
第 7 回	修士論文執筆と進捗報告 (第 7 回)	演習参加者による修士論文執筆状況の報告と内容の検討を行う。(第 7 回)
第 8 回	修士論文執筆と進捗報告 (第 8 回)	演習参加者による修士論文執筆状況の報告と内容の検討を行う。(第 8 回)
第 9 回	修士論文執筆と進捗報告 (第 9 回)	演習参加者による修士論文執筆状況の報告と内容の検討を行う。(第 9 回)
第 10 回	修士論文執筆と進捗報告 (第 10 回)	演習参加者による修士論文執筆状況の報告と内容の検討を行う。(第 10 回)
第 11 回	修士論文執筆と進捗報告 (第 11 回)	演習参加者による修士論文執筆状況の報告と内容の検討を行う。(第 11 回)
第 12 回	修士論文執筆と進捗報告 (第 12 回)	演習参加者による修士論文執筆状況の報告と内容の検討を行う。(第 12 回)
第 13 回	修士論文執筆と進捗報告 (第 13 回)	演習参加者による修士論文執筆状況の報告と内容の検討を行う。(第 13 回)
第 14 回	修士論文執筆と進捗報告 (第 14 回)	演習参加者による修士論文執筆状況の報告と内容の検討を行う。(特に最終発表に向けた発表準備) (第 14 回)

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

演習参加者との協議を通じて、修士論文執筆の進捗管理を行います。参加者は自ら執筆計画を立て、それに従って論文執筆をすすめて下さい。必要な先行研究事例のレビューや、フィールド調査も並行して実施することとなります。また、外部学会での発表も実施を目指します。

【テキスト（教科書）】

特に指定しません。必要に応じて資料を配布します。

【参考書】

随時紹介します。

【成績評価の方法と基準】

おおむね以下のバランスで総合的な成績評価を行います。修士論文（内容およびプレゼンテーション）70%、演習における積極性と貢献度 30%

【学生の意見等からの気づき】

少人数演習のため該当せず。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 開発の自然環境・社会環境への影響、開発援助、開発と倫理
 <研究テーマ> 「望ましい（望ましくない）「開発」とは何か」「ダム建設に伴う立ち退きと補償、生活再建」
 <主要研究業績>

"Japanese Experience of Involuntary Resettlement: Long-Term Consequences of Resettlement for the Construction of the Ikawa Dam," *International Journal of Water Resources Development*, Routledge, Vol. 25, Issue 3, September 2009, pp. 419- 430.

『開発介入と補償：ダム立ち退きをめぐる開発と正義論』勁草書房 2012 年, "Participation and diluted stakes in river management in Japan: the challenge of alternative constructions of resource governance" in Sato, J. ed., *Governance of Natural Resources: Uncovering the social purpose of materials in nature*. United Nations University Press, pp.141-161, July 2013

【Outline and objectives】

This is a second year seminar for authoring master thesis. Students will be able to 1) write his/her master thesis and to 2) make appropriate presentation for an academic audiences.

論文研究指導 2 A

永野 秀雄

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

修士論文を具体的に執筆し、秋に完成することを目指します。具体的には、内容の検討、立証、校正等に時間をかけて論文を書き上げていきます。

【到達目標】

高いレベルの修士論文を完成させることを目標とします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連している。

【授業の進め方と方法】

社会科学系の環境問題に関する修士論文の執筆について、個別指導を行います。

また、授業は、対面授業を予定していますが、コロナウイルスの感染が拡大した場合には、リアルタイムのライブ型配信授業とします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
1	修士論文テーマ、章展開の確認	修士論文のテーマ、章展開を確認し、執筆開始について検討の上、了解する。
2	修士論文の立証、資料、先行文献の確認	修士論文の立証、資料、先行文献を提出し、確認の上、立証要件を満たしているかを検討する。
3	修士論文第1章の執筆	修士論文第1章の原稿を提出して頂き、その内容を検討する。
4	修士論文第2章の執筆	修士論文第2章の原稿を提出して頂き、その内容を検討する。
5	修士論文第3章の執筆	修士論文第3章の原稿を提出して頂き、その内容を検討する。
6	修士論文第4章の執筆	修士論文第4章の原稿を提出して頂き、その内容を検討する。
7	修士論文第5章の執筆 修士論文の「はじめ」と「最後に」の執筆	修士論文第5章の原稿を提出して頂き、その内容を検討する。また、「はじめに」と「最後に」の原稿を提出して頂き、その内容を検討する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

講師より前回指導されたこと、及び、次回に必要なことをリサーチ、検討、起案すること。

【テキスト（教科書）】

特にありません。

【参考書】

必要に応じて指示します。

【成績評価の方法と基準】

授業への参加（30%）と、修士論文の内容・進捗状況（70%）により評価します。

【学生の意見等からの気づき】

該当科目ではありません。

【学生が準備すべき機器他】

特にありません。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>日米比較法（特に、環境法、労働法、先端技術法）
<研究テーマ>「環境監査と法」、「軍事基地騒音問題」、「インテリジェンス法制」

<主要研究業績>（近年のもの）

「米国国防総省によるサイバーセキュリティ成熟度モデル認証（CMMC）の導入：現行の NIST SP 800-171 の遵守制度を超えて」 CISTEC journal186 号 200 頁以下（2020 年 3 月）。

「米国におけるセキュリティクリアランス制度の大改革」 CISTEC journal185 号 223 頁以下（2020 年 1 月）。

「米国の重要インフラに関するサイバーセキュリティとセキュリティ・クリアランス法制（上）」人間環境論集 19 巻 1 号 13 頁以下（2018 年 12 月）。

【Outline and objectives】

This course aims to write and complete a master thesis in the fall. Specifically, we will spend time reviewing, verifying, and proofreading the content of the thesis.

SES600P2 - 204

論文研究指導 2 B

永野 秀雄

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

修士論文を具体的に執筆し、秋に完成することを目指します。具体的には、内容の検討、立証、深化、校正等に時間をかけて論文を書き上げていきます。

【到達目標】

高いレベルの修士論文を完成させることを目標とします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連している。

【授業の進め方と方法】

社会科学系の環境問題に関する修士論文の執筆について、個別指導を行います。

また、授業は、対面授業を予定していますが、コロナウイルスの感染が拡大した場合には、リアルタイムのライブ型配信授業とします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
1	修士論文全体の検討	修士論文全体を提出して頂き、その内容を検討する。
2	修士論文の最終稿の提出	受講生から、修士論文の最終稿（校正前段階）を提出してもらい、検討する。
3	修士論文の第1次校正	本文につき、幅を短くし、1行おきの出力で、基本的な校正を行ったものを提出してもらい、検証する。
4	修士論文の第2次校正	本文につき、通常幅での校正を提出するとともに、脚注の検証を行う。
5	修士論文の第3次校正	参考文献、その他について、最終的な校正を行う。
6	修士論文報告会用のプレゼンテーション資料の提出・確認	受講生が、修士論文報告会用のプレゼンテーション資料を提出し、内容確認、わかりやすさ、等を検討する。
7	修士論文報告会用のプレゼンテーションの練習	大学院教員向けの修士論文報告会用のパワーポイントを使ったプレゼンテーションの練習を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

講師より前回指導されたこと、及び、次回に必要なことをリサーチ、検討、起案すること。

【テキスト（教科書）】

特にありません。

【参考書】

必要に応じて指示します。

【成績評価の方法と基準】

授業への参加（30%）と、修士論文の内容（70%）により評価します。

【学生の意見等からの気づき】

該当科目ではありません。

【学生が準備すべき機器他】

特にありません。

【その他の重要事項】

特にありません。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>日米比較法（特に、環境法、労働法、先端技術法）

<研究テーマ>「環境監査と法」、「インテリジェンス法制」

<主要研究業績>（近年のもの）

「米国国防総省によるサイバーセキュリティ成熟度モデル認証 (CMMC) の導入：現行の NIST SP 800-171 の遵守制度を超えて」 CISTEC journal186 号 200 頁以下（2020 年 3 月）。

「米国におけるセキュリティクリアランス制度の大改革」 CISTEC journal185 号 223 頁以下（2020 年 1 月）。

「米国の重要インフラに関するサイバーセキュリティとセキュリティ・クリアランス法制 (上)」 人間環境論集 19 巻 1 号 13 頁以下（2018 年 12 月）。

【Outline and objectives】

This course aims to write and complete a master thesis in the fall. Specifically, we will spend time reviewing, verifying, and proofreading the content of the thesis.

論文研究指導 2 A

長谷川 直哉

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この演習では、論文研究指導 1 A・1 Bでの学習を踏まえて、修士論文を完成するための指導を行います。

【到達目標】

学術的に完成度の高い修士論文を執筆することを通じて、高度職業人として多面的かつ科学的な問題解決能力を涵養することを目標とします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連している。

【授業の進め方と方法】

参加学生のテーマや調査対象を踏まえ、学生とのディスカッションを通じて、データ解析と学術論文の執筆に関する指導を行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	修士論文執筆計画の発表と討議①	参加学生による修士論文の具体的な執筆計画の発表と討議
第 2 回	修士論文執筆計画の発表と討議②	参加学生による修士論文の具体的な執筆計画の発表と討議
第 3 回	修士論文執筆計画の発表と討議③	参加学生による修士論文の具体的な執筆計画の発表と討議
第 4 回	参加者による報告と討議①	参加者による研究の進捗状況についての報告と討議
第 5 回	参加者による報告と討議②	参加者による研究の進捗状況についての報告と討議
第 6 回	参加者による報告と討議③	参加者による研究の進捗状況についての報告と討議
第 7 回	参加者による報告と討議④	参加者による研究の進捗状況についての報告と討議
第 8 回	参加者による報告と討議⑤	参加者による研究の進捗状況についての報告と討議
第 9 回	参加者による報告と討議⑥	参加者による研究の進捗状況についての報告と討議
第 10 回	参加者による報告と討議⑦	参加者による研究の進捗状況についての報告と討議
第 11 回	参加者による報告と討議⑧	参加者による研究の進捗状況についての報告と討議
第 12 回	参加者による報告と討議⑨	参加者による研究の進捗状況についての報告と討議
第 13 回	修士論文中間発表準備①	修士論文の進捗報告と討議
第 14 回	修士論文中間発表準備②	修士論文の進捗報告と討議

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

収集したデータの解析と修士論文の執筆を行います。本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

特定のテキストは使用しません。

【参考書】

必要に応じて適宜紹介します。

【成績評価の方法と基準】

発表内容及び討議への貢献度：20%

修士論文：80%

【学生の意見等からの気づき】

毎回の講義で学生からの意見を聴取し、授業や論文指導に随時反映させています。

【学生が準備すべき機器他】

必要に応じてパソコンを使用します。

【実務経験】

損害保険会社の資産運用部門において、約 15 年間投資業務を担当しました。1999 年、ESG 投資の先駆的な取り組みである SRI（社会的責任投資）ファンドを組成し、ファンドマネジャーとして企業の ESG（非財務）側面を評価する手法を開発しました。また、（公財）国際金融情報センターに出向し、カントリーリストや国際金融システムに関する調査・研究に従事しました。

【関連資格】

日本証券アナリスト協会認定アナリスト（CMA）

【Outline and objectives】

In this seminar, we will provide guidance to complete your master's thesis based on your studies in thesis research guidance 1A and 1B.

SES600P2 - 204

論文研究指導 2 B

長谷川 直哉

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この演習では、論文研究指導 2 Aでの学習を踏まえて、修士論文を完成するための指導を行います。

【到達目標】

学術的に完成度の高い修士論文を執筆することを通じて、高度職業人として多面的かつ科学的な問題解決能力を涵養することを目標とします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連している。

【授業の進め方と方法】

参加学生のテーマや調査対象を踏まえ、学生とのディスカッションを通じて、データ解析と学術論文の執筆に関する指導を行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	参加者による報告と討議①	参加者による研究の進捗状況についての報告と討議
第 2 回	参加者による報告と討議②	参加者による研究の進捗状況についての報告と討議
第 3 回	参加者による報告と討議③	参加者による研究の進捗状況についての報告と討議
第 4 回	プレ最終発表①	執筆済み修士論文の発表と討議
第 5 回	プレ最終発表②	執筆済み修士論文の発表と討議
第 6 回	プレ最終発表③	執筆済み修士論文の発表と討議
第 7 回	参加者による報告と討議①	参加者による研究の進捗状況についての報告と討議
第 8 回	参加者による報告と討議②	参加者による研究の進捗状況についての報告と討議
第 9 回	参加者による報告と討議③	参加者による研究の進捗状況についての報告と討議
第 10 回	参加者による報告と討議④	参加者による研究の進捗状況についての報告と討議
第 11 回	参加者による報告と討議⑤	参加者による研究の進捗状況についての報告と討議
第 12 回	最終発表①	完成した修士論文の発表
第 13 回	最終発表②	完成した修士論文の発表
第 14 回	最終発表③	完成した修士論文の発表

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

収集したデータの解析と修士論文の執筆を行います。本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

特定のテキストは使用しません。

【参考書】

必要に応じて適宜紹介します。

【成績評価の方法と基準】

発表内容及び討議への貢献度：10%

修士論文：90%

【学生の意見等からの気づき】

毎回の講義で学生からの意見を聴取し、授業や論文指導に随時反映させています。

【学生が準備すべき機器他】

必要に応じてプロジェクターとパソコンを使用します。

【実務教員】

損害保険会社の資産運用部門において、約 15 年間投資業務を担当しました。1999 年、ESG 投資の先駆的な取り組みである SRI（社会的責任投資）ファンドを組成し、ファンドマネジャーとして企業の ESG（非財務）側面を評価する手法を開発しました。また、（公財）国際金融情報センターに出向し、カントリーリストや国際金融システムに関する調査・研究に従事しました。

【関連資格】

日本証券アナリスト協会認定アナリスト（CMA）

【Outline and objectives】

In this seminar, we will provide guidance for completing a master's thesis based on the learning in Dissertation Research Instruction 2A.

論文研究指導 2 A

藤倉 良

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

修士論文執筆のための個別指導

【到達目標】

論文研究指導 1 B で収集したデータの解析

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連している。

【授業の進め方と方法】

毎週実施するゼミで、関心事項の報告や他の院生の報告を通して議論し、必要に応じて研究テーマを修正しながら、データ収集を行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
1	報告及び議論	収集データの解析結果に関する報告とそれに対する指導
2	報告及び議論	収集データの解析結果に関する報告とそれに対する指導
3	報告及び議論	収集データの解析結果に関する報告とそれに対する指導
4	報告及び議論	収集データの解析結果に関する報告とそれに対する指導
5	報告及び議論	収集データの解析結果に関する報告とそれに対する指導
6	報告及び議論	収集データの解析結果に関する報告とそれに対する指導
7	報告及び議論	収集データの解析結果に関する報告とそれに対する指導
8	報告及び議論	収集データの解析結果に関する報告とそれに対する指導
9	報告及び議論	収集データの解析結果に関する報告とそれに対する指導
10	報告及び議論	収集データの解析結果に関する報告とそれに対する指導
11	報告及び議論	収集データの解析結果に関する報告とそれに対する指導
12	報告及び議論	収集データの解析結果に関する報告とそれに対する指導
13	報告及び議論	収集データの解析結果に関する報告とそれに対する指導
14	報告及び議論	収集データの解析結果に関する報告とそれに対する指導

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

各自が報告用レジュメと PPT ファイルを事前に準備する。また、ゼミでの指摘事項を踏まえた対応の実施。疑問点などについては適宜メールで教員と連絡をとりあう。

【テキスト（教科書）】

各回指導中に適宜指示

【参考書】

各回指導中に適宜指示

【成績評価の方法と基準】

データ解析の進捗状況 (100%)

【学生の意見等からの気づき】

ゼミに出席できない場合は電子メールや時間外の個人面談で対応する。

【教員の研究分野等】

以下を参照のこと。

<http://kenkyu-web.i.hosei.ac.jp/Profiles/18/0001732/profile.html>

【Outline and objectives】

Drafting master thesis.

SES600P2 - 204

論文研究指導 2 B

藤倉 良

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

修士論文執筆のための個別指導

【到達目標】

論文研究指導 2 A までに行った調査研究結果のとりまとめと修士論文作成。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連している。

【授業の進め方と方法】

毎週実施するゼミで、関心事項の報告や他の院生の報告を通して議論し、必要に応じて研究テーマを修正しながら、データ収集を行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
1	報告及び議論	修士論文の骨子に関する指導
2	報告及び議論	修士論文の骨子に関する指導
3	報告及び議論	修士論文の骨子に関する指導
4	報告及び議論	修士論文の骨子に関する指導
5	報告及び議論	修士論文の本文に関する指導
6	報告及び議論	修士論文の本文に関する指導
7	報告及び議論	修士論文の本文に関する指導
8	報告及び議論	修士論文の本文に関する指導
9	報告及び議論	修士論文の本文に関する指導
10	報告及び議論	修士論文の本文に関する指導
11	報告及び議論	修士論文報告会に関する指導
12	報告及び議論	修士論文報告会に関する指導
13	報告及び議論	修士論文報告会に関する指導
14	報告及び議論	修士論文報告会に関する指導

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

各自が報告用レジュメと PPT ファイルを事前に準備する。また、ゼミでの指摘事項を踏まえた対応の実施。疑問点などについては適宜メールで教員と連絡をとりあう。

【テキスト（教科書）】

各回指導中に適宜指示

【参考書】

各回指導中に適宜指示

【成績評価の方法と基準】

データ解析の進捗状況 (100%)

【学生の意見等からの気づき】

ゼミに出席できない場合は電子メールや時間外の個人面談で対応する。

【教員の研究分野等】

以下を参照のこと。

<http://kenkyu-web.i.hosei.ac.jp/Profiles/18/0001732/profile.html>

【Outline and objectives】

Completion of master thesis.

論文研究指導 2 A

宮川 路子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

環境マネジメント演習 I の次のステップとして修士課程 2 年生を対象として、修士論文作成のための研究調査活動、論文執筆の指導を行う。

【到達目標】

学生が適切なテーマについて、調査、分析、考察を行い、仮説を検証していく過程を指導する。

論理を組み立てる能力、データを解析する能力、そして結果について考察、説明する能力を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連している。

【授業の進め方と方法】

個別と受講者全体が集まる二つの形態による指導を行う。受講者が進めている研究内容について報告し、参加者全員で質疑・討論を行う。受講者全員が検討に参加することにより、研究がブラッシュアップされ、理解度が深まることを狙っている。個別指導においては、研究の進捗状況に応じて報告し、研究深化のための議論を行う。論を展開するうえで必要となる参考文献を選び、論理を構築する。

執筆に際しては、表現技法、論文形式についての指導も行う。

講義の方法は対面で行う予定である。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	修士論文の作成	先行研究について
第 2 回	修士論文の作成	これまでの研究、調査結果の報告、問題点の把握
第 3 回	修士論文の作成	問題点の解決について
第 4 回	修士論文の作成	調査についての報告
第 5 回	修士論文の作成	調査の問題点について
第 6 回	修士論文の作成	調査結果の解析
第 7 回	修士論文の作成	調査結果解析についての課題検討
第 8 回	修士論文の作成	解析結果の課題検討と考察
第 9 回	修士論文の作成	解析結果の課題検討と考察
第 10 回	修士論文の作成	これまでに得られた結果の総括と新知見の再確認
第 11 回	修士論文の作成	論文執筆の開始
第 12 回	修士論文の作成	論文執筆についての報告と内容の確認
第 13 回	修士論文の作成	追加的調査、文献検索についての検討
第 14 回	修士論文の作成	論文ドラフトの提出と修正

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

修士論文の完成に向けてテーマについての調査、研究を継続的に行う。

【テキスト（教科書）】

特に用いない。

【参考書】

研究、執筆の状況に応じて必要に応じ提示する。

【成績評価の方法と基準】

平常点 30 %、指示した課題の消化状況 40 %、研究内容 30 % として評価を行う。

【学生の意見等からの気づき】

該当なし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 公衆衛生学、産業保健

<研究テーマ> 就労者のストレスと健康

<主要研究業績> Subjective social status: its determinants and association with health in the Swedish working population (the SLOSH study), The European Journal of Public Health 2012 年

ソフト面から考える快適職場—職場のメンタルヘルス対策の一環として—

労働安全衛生広報 2010 年

マネジメントシステムによる産業保健活動産業保健 2 1 2010 年

【Outline and objectives】

As the second step after the Environmental Management Seminar I, the second-year students of the master's course will be given guidance on research and investigation activities and thesis writing.

SES600P2 - 204

論文研究指導 2 B

宮川 路子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

修士論文作成のための最終段階として、論文執筆の指導を行う。

【到達目標】

学生が適切なテーマについて、調査、分析、考察を行い、仮説を検証していく過程を指導する。

論理を組み立てる能力、データを解析する能力、そして結果について考察、説明する能力を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連している。

【授業の進め方と方法】

個別と受講者全体が集まる二つの形態による指導を行う。受講者が進めている研究内容について報告し、参加者全員で質疑・討論を行う。受講者全員が検討に参加することにより、研究がブラッシュアップされ、理解度が深まることを狙っている。個別指導においては、研究の進捗状況に応じて報告し、研究深化のための議論を行う。論を展開するうえで必要となる参考文献を選び、論理を構築する。

執筆に際しては、表現技法、論文形式についての指導も行う。

講義の方法は対面で行う予定である。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	修士論文の作成	論文ドラフトの提出と修正
第2回	修士論文の作成	論文ドラフトの検討と修正
第3回	修士論文の作成	論文ドラフトの検討と修正
第4回	修士論文の作成	論文ドラフトの検討と修正
第5回	修士論文の作成	論文ドラフトの検討と修正
第6回	修士論文の作成	論文ドラフトの検討と修正
第7回	修士論文の作成	論文ドラフトの検討と修正
第8回	修士論文の作成	論文ドラフトの検討と修正
第9回	修士論文の作成	論文完成にむけて検討
第10回	修士論文の作成	論文完成にむけて検討
第11回	修士論文の作成	論文完成にむけて検討
第12回	修士論文の作成	論文を完成させる
第13回	修士論文の作成	論文を完成させる
第14回	修士論文の作成	論文を完成させる

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

修士論文の完成に向けてテーマについての調査、研究を継続的に行う。

【テキスト（教科書）】

特に用いない。

【参考書】

研究、執筆の状況に応じて必要に応じ提示する。

【成績評価の方法と基準】

平常点 30 %、指示した課題の消化状況 40 %、研究内容 30 % として評価を行う。

【学生の意見等からの気づき】

該当なし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 公衆衛生学、産業保健

<研究テーマ> 就労者のストレスと健康

<主要研究業績> Subjective social status: its determinants and association with health in the Swedish working population (the SLOSH study), The European Journal of Public Health 2012 年

ソフト面から考える快適職場—職場のメンタルヘルス対策の一環として—

労働安全衛生広報 2010 年

マネジメントシステムによる産業保健活動 産業保健 21 2010 年

【Outline and objectives】

Guidance on writing the thesis is provided as the final step in preparing the master's thesis.

SES700P2 - 001

サステナビリティ特殊研究 1 A

金藤 正直

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本演習では、修士論文の作成を通じて習得してきた研究・調査の方法論と、修士論文の内容に基づいて、博士論文の構成・内容（素案）を検討し、報告するとともに、その結果を参考にしながら小論文（研究計画書）を作成していくことを目的とする。

【到達目標】

本演習では、博士論文の作成で行っていく高度な研究・調査のために必要な論理力、分析・調査力、執筆力、説明力、質問力を習得することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連している。

【授業の進め方と方法】

本演習は対面で実施する。履修者には、修士課程で習得した研究・調査の方法論と、修士論文の内容に基づいて、特定主体（家計、企業、自治体、地域、国など）における経営あるいは会計のモデルの特長や問題点、そして、実践適用可能性をさらに深く検討してもらう。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	修士課程までに行った研究・調査の内容（修士論文の内容）とそれに基づく今後の取組みについて確認する。
第2回～ 第3回	博士論文の構成・内容（案）の検討	博士論文の章・節の構成・内容（案）について検討する。
第4回～ 第12回	研究・調査の成果報告	第2回～第3回の構成・内容（案）に基づいて、研究・調査の成果を報告する。
第13回	博士論文の構成・内容（素案）の検討	これまでの研究・調査に基づいて、章・節の構成・内容（素案）を検討する。
第14回	小論文の作成	第13回の構成・内容（素案）に基づいて、博士論文の方向性を報告するとともに、その報告内容に基づく小論文（研究計画書）を作成する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

研究内容に関する著書・論文・報告書・新聞・雑誌記事などを読み、その分析・検討を計画的に行うとともに、その結果を博士論文のための小論文（研究計画書）の作成に反映させてください。

【テキスト（教科書）】

特に使用しませんが、毎回の報告ではワードあるいはパワーポイントを使用しますので、履修者はその報告レジュメの作成と配布をお願いします。

【参考書】

履修者の研究・調査の進捗状況に応じて、授業中に著書、研究論文、報告書、新聞・雑誌記事などを紹介します。

【成績評価の方法と基準】

本演習の成績は次の4点に基づいて評価します。

- ・ 討論への参加（発言内容）（20 %）
- ・ 報告用配布レジュメの内容（20 %）
- ・ 報告内容（プレゼンテーション能力）（20 %）
- ・ 小論文（研究計画書）の内容（40 %）

【学生の意見等からの気づき】

毎年、意見や要望を考慮に入れ、講義内容を改善しています。

【学生が準備すべき機器他】

必要に応じてパソコンとプロジェクターを使用します。

【その他の重要事項】

質問などについては電子メールで連絡ください。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

環境経営論、地域経営論

<研究テーマ>

企業や地域の持続的成長を実現するための経営・会計手法に関する研究

<主要研究業績>

- ・ 金藤正直（2014）「地域サプライチェーンとしての産業クラスターのマネジメント-サプライチェーン・マネジメントの適用-」二神恭一・高山貢・高橋賢編著『地域再生のための経営と会計』中央経済社、41-52頁。
- ・ 金藤正直（2015）「食料産業クラスターマネジメントを支援するバランス・スコアカードの構想」『産業経理』Vol.75 No.1、53-63頁。

・ 金藤正直（2016）「サステナビリティ・サプライチェーン・マネジメントの実践的展開モデル」『横浜経営研究』第37巻第2号、55-72頁。

・ 金藤正直（2018）「フードバレーの戦略的マネジメントを支援するバランス・スコアカードの適用可能性-フードバレーとかちの取組みを中心として-」『経済学論纂』第58巻第2号、65-84頁。

・ 金藤正直（2021）「健康経営の展望-どう評価・開示するか？-」『企業会計』Vol.73 No.2、87-90頁。

【Outline and objectives】

The purpose of this seminar is to consider the composition of a doctoral thesis and its contents.

SES700P2 - 002

サステナビリティ特殊研究 1 B

金藤 正直

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本演習では、修士論文の作成を通じて習得してきた研究・調査の方法論、修士論文の内容、サステナビリティ特殊研究 1 A で作成した小論文（研究計画書）の内容に基づいて、博士論文の構成・内容（素案）を再検討し、報告するとともに、その報告内容を参考にしながら、博士論文の中間報告と博士論文（学会誌（研究誌）などへの投稿論文も含む）の内容を検討していくことを目的とする。

【到達目標】

本演習では、博士論文の中間報告と博士論文の作成で行われる高度な研究・調査のために必要な論理力、分析・調査力、執筆力、説明力、質問力を習得することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連している。

【授業の進め方と方法】

本演習は対面で実施する。履修者には、修士課程で習得した研究・調査の方法論、修士論文の内容、博士論文のための小論文（研究計画書）の内容に基づいて、特定主体（家計、企業、自治体、地域、国など）における経営あるいは会計のモデルを検討してもらうとともに、このモデルの特長や問題点をアンケート調査、ヒアリング調査、ケーススタディから明らかにすることにより、同モデルの実践適用可能性や新たな見解を提案してもらう。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション	これまでに行ってきた研究・調査の進展について報告するとともに、博士論文の中間報告および博士論文（投稿論文も含む）の作成までのスケジュールを確認する。
第 2 回～ 第 11 回	追加的作業の確認	博士論文の中間報告および博士論文の作成のために必要な作業（アンケート調査、ケーススタディ、ヒアリング調査の実施など）を確認する。
第 12 回 ～第 13 回	博士論文の構成・内容（素案）の再検討・調整	これまでに行ってきた研究・調査の結果を、検討中の博士論文の構成・内容（案）に反映させ、論文内容を再検討し、調整する。
第 14 回	博士論文の構成・内容（素案）の決定	博士論文の構成・内容（素案）を再調整し、決定する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

研究内容に関係する著書・論文・報告書・新聞・雑誌記事などを読み、その分析・検討を計画的に行うとともに、その結果を博士論文の中間報告や、博士論文の中間報告書に反映させてください。

【テキスト（教科書）】

特に使用しませんが、毎回の報告ではワードあるいはパワーポイントを使用しますので、履修者はその報告レジュメの作成と配布をお願いします。

【参考書】

履修者の研究・調査の進捗状況に応じて、授業中に著書、研究論文、報告書、新聞・雑誌記事などを紹介します。

【成績評価の方法と基準】

本演習の成績は次の 4 点に基づいて評価します。

- ・ 討論への参加（発言内容）（10 %）
- ・ 報告用配布レジュメの内容（10 %）
- ・ 報告内容（プレゼンテーション能力）（30 %）
- ・ 博士論文の中間報告、投稿論文を含む博士論文（中間報告書）の構成・内容（50 %）

【学生の意見等からの気づき】

毎年、意見や要望を考慮に入れ、講義内容を改善しています。

【学生が準備すべき機器他】

必要に応じてパソコンとプロジェクターを使用します。

【その他の重要事項】

質問などについては電子メールで連絡ください。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>
環境経営論、地域経営論
<研究テーマ>

企業や地域の持続的成長を実現するための経営・会計手法に関する研究
<主要研究業績>

- ・ 金藤正直（2014）「地域サプライチェーンとしての産業クラスターのマネジメント-サプライチェーン・マネジメントの適用-」二神恭一・高山真・高橋賢編著『地域再生のための経営と会計』中央経済社、41-52 頁。
- ・ 金藤正直（2015）「食料産業クラスターマネジメントを支援するバランス・スコアカードの構想」『産業経理』Vol.75 No.1、53-63 頁。
- ・ 金藤正直（2016）「サステナビリティ・サプライチェーン・マネジメントの実践的展開モデル」『横浜経営研究』第 37 巻第 2 号、55-72 頁。
- ・ 金藤正直（2018）「フードバレーの戦略的マネジメントを支援するバランス・スコアカードの適用可能性-フードバレーとかちの取組みを中心として-」『経済学論纂』第 58 巻第 2 号、65-84 頁。
- ・ 金藤正直（2021）「健康経営の展望-どう評価・開示するか？-」『企業会計』Vol.73 No.2、87-90 頁。

【Outline and objectives】

The purpose of this seminar is to consider the composition of a doctoral thesis and its contents.

SES700P2 - 001

サステナビリティ特殊研究 1 A

北川 徹哉

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

博士論文のための研究方針の決定と知識の吸収

【到達目標】

1. 課題を設定する。
2. 既往の研究に関する文献調査を行う。
3. 課題解決への手段を構築する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連している。

【授業の進め方と方法】

調査とディスカッションを通じて、研究方針の策定と博士論文の執筆の準備を行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
1	現状分析	文献調査, 整理, 理解
2	現状分析	文献調査, 整理, 理解
3	現状分析	文献調査, 整理, 理解
4	現状分析	文献調査, 整理, 理解
5	現状分析	文献調査, 整理, 理解
6	現状分析	文献調査, 整理, 理解
7	第1～6回のとりまとめ	文献調査, 整理, 理解
8	解決方法の探索	抽出された課題の解決方法の検討
9	解決方法の探索	抽出された課題の解決方法の検討
10	解決方法の探索	抽出された課題の解決方法の検討
11	解決方法の探索	抽出された課題の解決方法の検討
12	解決方法の探索	抽出された課題の解決方法の検討
13	解決方法の探索	抽出された課題の解決方法の検討
14	第8～13回のとりまとめ	抽出された課題の解決方法の検討

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

全回：資料とスライドの作成

【テキスト（教科書）】

使用しない。

【参考書】

必要に応じて紹介する。

【成績評価の方法と基準】

資料とスライド（50%：論述の適切さ、到達目標1～3への到達度）、議論（50%：説明の正確さ、質疑応答の適切さ）により評価する。

【学生の意見等からの気づき】

該当なし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>環境流体, 気象社会論, 流体関連振動
<研究テーマ>強風の社会への影響と対策, 気象リスクヘッジ, 数値流体解析
<主要研究業績>屋外イベント入場者数を対象とする気象と日程に関する複合要因分析, 第25回風工学シンポジウム論文集, 2018, pp.121-126. 平均回帰 Ornstein-Uhlenbeck 過程による日最大風速の模擬データの作成, 土木学会論文集 A1 (構造・地震工学), Vol.73, No.3, 2017, pp.579-592. 淡路花博 2000 に導入された天候デリバティブについての一考察, 第23回風工学シンポジウム論文集, 2014, pp.19-24. Numerical investigation on flow around circular cylinders in tandem arrangement at a subcritical Reynolds number, Journal of Fluids and Structures, Vol.24, No.5, 2008, pp.680-699. 自動車励起ガストエネルギーを利用した発電の試み, 日本風工会論文集, Vol.32, No.2, 2007, pp.87-92.

【Outline and objectives】

Studies, investigations and discussions on the research issue for the doctor thesis.

SES700P2 - 002

サステナビリティ特殊研究 1 B

北川 徹哉

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

博士論文のための研究方針の決定と知識の吸収

【到達目標】

1. 課題を設定する。
2. 既往の研究に関する文献調査を行う。
3. 課題解決への手段を構築する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連している。

【授業の進め方と方法】

調査とディスカッションを通じて、研究方針の策定と博士論文の執筆の準備を行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
1	解決方法の探索	抽出された課題の解決方法の検討
2	解決方法の探索	抽出された課題の解決方法の検討
3	解決方法の探索	抽出された課題の解決方法の検討
4	解決方法の探索	抽出された課題の解決方法の検討
5	解決方法の探索	抽出された課題の解決方法の検討
6	解決方法の探索、中間報告会の準備	抽出された課題の解決方法の検討
7	第1～6回のとおりまとめ、中間報告会の準備	抽出された課題の解決方法の検討
8	解決方法の具体化、中間報告会の準備	解決方法のインプリメンテーション
9	解決方法の具体化	解決方法のインプリメンテーション
10	解決方法の具体化	解決方法のインプリメンテーション
11	解決方法の具体化	解決方法のインプリメンテーション
12	解決方法の具体化	解決方法のインプリメンテーション
13	解決方法の具体化	解決方法のインプリメンテーション
14	第8～13回のとおりまとめ	解決方法のインプリメンテーション

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

全回：資料とスライドの作成

【テキスト（教科書）】

使用しない。

【参考書】

必要に応じて紹介する。

【成績評価の方法と基準】

資料とスライド（50%：論述の適切さ、到達目標1～3への到達度）、議論（50%：説明の正確さ、質疑応答の適切さ）により評価する。

【学生の意見等からの気づき】

該当なし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>環境流体、気象社会論、流体関連振動
 <研究テーマ>強風の社会への影響と対策、気象リスクヘッジ、数値流体解析
 <主要研究業績>屋外イベント入場者数を対象とする気象と日程に関する複合要因分析、第25回風工学シンポジウム論文集、2018、pp.121-126。平均回帰 Ornstein-Uhlenbeck 過程による日最大風速の模擬データの作成、土木学会論文集 A1（構造・地震工学）、Vol.73、No.3、2017、pp.579-592。淡路花博 2000 に導入された天候デリバティブについての一考察、第23回風工学シンポジウム論文集、2014、pp.19-24。Numerical investigation on flow around circular cylinders in tandem arrangement at a subcritical Reynolds number, Journal of Fluids and Structures, Vol.24, No.5, 2008, pp.680-699。自動車励起ガストエネルギーを利用した発電の試み、日本風工会論文集、Vol.32、No.2、2007、pp.87-92。

【Outline and objectives】

Studies, investigations and discussions on the research issue for the doctor thesis.

SES700P2 - 001

サステナビリティ特殊研究 1 A

小島 聡

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この演習では、博士課程の1年生の学生に対して調査研究の指導を行う。学生は、演習を通して、以下の内容に取り組む。

- ①修士論文の成果の確認
- ②研究の方向性についてのブレインストーミング
- ③博士論文としての研究テーマの決定
- ④調査研究上の課題の確認

【到達目標】

この演習に参加する学生の到達目標は、以下のとおりである。

- ・博士課程における研究テーマを設定する。
- ・調査研究の設計図を作成した上で、作業に着手する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連している。

【授業の進め方と方法】

参加学生のこれまでの研究成果の報告と次の段階における問題意識を明確化した上で、具体的なテーマ、調査研究計画の作成と遂行に関する指導を行う。毎回、自ら作成したペーパーに基づいて発表することをもとめる。提出したペーパーはその場でコメントするとともに、必要に応じて、後日、添削や追加コメントを行う。なお、この授業は、対面授業を基本としつつも、COVID-19の状況による社会情勢や参加者の感染リスク等に応じて、Zoomによる双方向型授業の実施についても柔軟に対応する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
1	イントロダクション	これまでの研究ストックの確認と、現在の問題意識や構想に関するブレインストーミングを行う。
2	修士論文の報告	修士論文の詳細な内容とそこから浮かび上がった研究課題について報告する。
3	研究構想の具体化への着手	博士課程における研究テーマについて、代替案をいくつか提示しながら、その意義や実行可能性などについて比較検討する。
4	研究テーマの候補の検討	引き続き、複数の研究テーマを比較検討する。
5	研究テーマの確定	博士課程における研究テーマを確定する。
6	調査研究計画の作成	調査研究計画を報告しロードマップや研究のポイントを検討する
7	調査研究計画の精査	調査研究計画を精査し、ブラッシュアップを図る。
8	先行研究のリサーチ	選定したテーマに関する先行研究のリサーチを行い、その水準、自分のテーマのニッチ・意義・方向性について検討する。
9	先行研究のリサーチ	選定したテーマに関する先行研究のリサーチを行い、その水準、自分のテーマのニッチ・意義・方向性について検討する。
10	先行研究のリサーチ	選定したテーマに関する先行研究のリサーチを行い、その水準、自分のテーマのニッチ・意義・方向性について検討する。
11	調査研究の報告	調査研究の進捗状況について報告する。
12	調査研究の報告	調査研究の進捗状況について報告する。
13	調査研究の報告	調査研究の進捗状況について報告する。
14	調査研究計画の修正	調査研究の進捗をふまえて調査研究計画を修正する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

参加学生は、以下の時間外学習を行う（この授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とする）。

- ・自分のテーマを設定し調査研究を進めること。

【テキスト（教科書）】

特に用いない。

【参考書】

演習実施期間中に適宜、提示する。

【成績評価の方法と基準】

平常点（参加姿勢）（70%）、課題提出（30%）の総合評価とする。自発的な取り組みの途中経過を毎回報告し、調査研究を段階的に進展させていくことを重視する。

【学生の意見等からの気づき】

アンケート対象外につき該当なし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>行政学、地方自治論

<研究テーマ>持続可能性と自治体政策、地域環境ガバナンス、市民社会と自治体行政システム

【Outline and objectives】

This seminar guides surveillance study to the first grader of a doctoral course. Students tackle the following contents at a seminar.

- ① The check of the result of a master's thesis
- ② Brainstorming about the directivity of research
- ③ Determination of the subject of research as a doctoral dissertation
- ④ The check of the subject on surveillance study

SES700P2 - 002

サステナビリティ特殊研究 1 B

小島 聡

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この演習では、博士課程の1年生の学生に対して調査研究の指導を行う。学生は、演習を通して、以下の内容に取り組む。

- ①調査研究の工程の検討
- ②研究テーマに関する既存研究の動向の確認
- ③調査研究の遂行

【到達目標】

この演習に参加する学生の到達目標は、以下のとおりである。

- ・先行研究の動向についてリサーチペーパーにまとめる。
- ・研究テーマに関する新たな文献を探索しリスト化する。
- ・ヒアリング等のフィールド調査のプランを作成し着手する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連している。

【授業の進め方と方法】

サステナビリティ特殊研究 1 A に続いて、参加学生の研究テーマについて、毎回、自ら作成したペーパーに基づいて発表することをもとめる。提出したペーパーはその場でコメントするとともに、必要に応じて、後日、添削や追加コメントを行う。なお、この授業は、対面授業を基本としつつも、COVID-19 の状況による社会情勢や参加者の感染リスク等に応じて、Zoom による双方向型授業の実施についても柔軟に対応する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
1	先行研究における文献のレビュー	先行研究における重要文献について報告する。
2	先行研究における文献のレビュー	先行研究における重要文献について報告する。
3	先行研究のリサーチペーパーの報告	先行研究に関するリサーチペーパーを作成し報告する。
4	研究テーマに関する新たな文献の探索	研究テーマに関する新たな文献を探索し、リストを作成して報告する。
5	フィールド調査プランの提示	研究テーマに関するヒアリング等のフィールド調査プランについて報告し検討する。
6	調査研究の報告	調査研究の進捗状況について報告する。
7	調査研究の報告	調査研究の進捗状況について報告する。
8	フィールド調査の報告	フィールド調査の進捗状況について報告する。
9	小論文の課題設定	研究テーマに関する小論文の課題を設定する。
10	調査研究の報告	調査研究の進捗状況について報告する。
11	調査研究の報告	調査研究の進捗状況について報告する。
12	小論文の報告	研究テーマに関する小論文を提出し、内容を報告する。
13	小論文からの発展可能性についての検討	小論文をふまえて、どのように発展させるか、次のステップについて検討する。
14	調査研究計画の再調整	次年度の調査研究計画について再調整する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

参加学生は、以下の時間外学習を行う（この授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とする）。

- ・自分のテーマを設定し調査研究を進めること。

【テキスト（教科書）】

特に用いない。

【参考書】

演習実施期間中に適宜、提示する。

【成績評価の方法と基準】

平常点（参加姿勢）（70%）、課題提出（30%）の総合評価とする。自発的な取り組みの途中経過を毎回報告し、調査研究を段階的に進展させていくことを重視する。

【学生の意見等からの気づき】

アンケート対象外につき該当なし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>行政学、地方自治論

<研究テーマ>持続可能性と自治体政策、地域環境ガバナンス、市民社会と自治体行政システム

【Outline and objectives】

This seminar guides surveillance study to the first grader of a doctoral course as follows. Students tackle the following contents at a seminar.

- ① Examination of the process of surveillance study
- ② The check of the trend of the existing research on a subject of research
- ③ Execution of surveillance study

SES700P2 - 001

サステナビリティ特殊研究 1 A

杉戸 信彦

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

博士論文作成に向け、研究および議論を行う。

【到達目標】

博士論文の作成に向け、課題を発見し、解決に向けた調査を実施して、その成果を期末レポートとしてとりまとめる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連している。

【授業の進め方と方法】

対面授業を予定している。

研究の方向性を決め、文献レビュー等を行いながら研究テーマを具体的に定める。そのうえで、文献レビュー等をすすめながら調査計画を立案し、調査を実施してとりまとめを行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	研究の方向性の検討 (1)	研究の方向性について検討を行う。
第 2 回	研究の方向性の検討 (2)	研究の方向性について検討を行い決定する。
第 3 回	関連文献のレビュー (1)	研究予定内容に関する文献のレビューを行う。
第 4 回	関連文献のレビュー (2)	研究予定内容に関する文献のレビューを行う。
第 5 回	研究テーマの検討	研究の方向性についてあらためて検討を行い、研究テーマを具体的に定める。
第 6 回	関連文献のレビュー (3)	研究テーマに関する文献のレビューを行い、研究内容を検討する。
第 7 回	関連文献のレビュー (4)	研究テーマに関する文献のレビューを行い、研究内容を検討する。
第 8 回	調査計画の立案 (1)	研究内容に応じた独自の調査計画を検討する。
第 9 回	調査計画の立案 (2)	研究内容に応じた独自の調査計画を検討する。
第 10 回	調査結果のまとめ (1)	調査結果を報告し、まとめに向けた検討を行う。
第 11 回	調査結果のまとめ (2)	調査結果を報告し、まとめに向けた検討を行う。
第 12 回	調査計画の立案 (3)	研究内容に応じた独自の調査計画を検討する。
第 13 回	調査結果のまとめ (3)	調査結果を報告し、まとめに向けた検討を行う。
第 14 回	レポートの発表	発表および質疑応答・議論を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

調査や準備、とりまとめ作業等に取り組む（授業時間は発表や議論が中心となるため）。

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

授業中に紹介

【参考書】

授業中に紹介

【成績評価の方法と基準】

平常点 (50%)・期末レポート (50%)。平常点は研究への取り組みの状況等をもとに評価する。期末レポートは、調査の状況、また構成や論理の整ったレポートかどうか等をもとに評価する。

【学生の意見等からの気づき】

応用力や思考力、スキルなどの涵養を心がける。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>自然地理学、自然災害

<研究テーマ>変動地形、活断層、地震、土地条件

<主要研究業績>

1) 杉戸信彦, 2014. 大地震の歴史とメカニズムを捉える - 活断層への地理学的アプローチ. 木村周平・杉戸信彦・柄谷由香編, 「災害フィールドワーク論」, FENICS100 万人のフィールドワーカーシリーズ 5, 古今書院, 212p, 132-149.

2) 杉戸信彦・松多信尚・石黒聡士・内田主税・千田良道・鈴木康弘, 2015. 津波浸水域データと数値標高モデルの GIS 解析に基づく 2011 年東北地方太平洋沖地震の津波遡上高の空間分布, 地学雑誌, 124, 157-176. doi: 10.5026/jgeography.124.157

3) Sugito, N., H. Sawa, K. Taniguchi, Y. Sato, M. Watanabe, and Y. Suzuki, 2019, Evolution of Riedel-shear pop-up structures during cumulative strike-slip faulting: A case study in the Misayama-Godo area, Fujimi Town, central Japan, Geomorphology, 327, 446-455. doi: 10.1016/j.geomorph.2018.11.026

【Outline and objectives】

We conduct research and discussion for doctoral theses.

SES700P2 - 002

サステナビリティ特殊研究 1 B

杉戸 信彦

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

博士論文作成に向け、研究および議論を行う。

【到達目標】

博士論文の作成に向け、課題を発見し、解決に向けた調査を実施して、その成果を期末レポートとしてとりまとめる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連している。

【授業の進め方と方法】

対面授業を予定している。

研究テーマを具体的に定め、文献レビュー等を行いながら調査計画を立案し、調査を実施してとりまとめる。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	研究テーマの検討	研究テーマについて検討を行い、具体的に定める。
第 2 回	関連文献のレビュー (1)	研究テーマに関する文献のレビューを行い、研究内容を検討する。
第 3 回	関連文献のレビュー (2)	研究テーマに関する文献のレビューを行い、研究内容を検討する。
第 4 回	調査計画の立案 (1)	研究内容に応じた独自の調査計画を検討する。
第 5 回	調査計画の立案 (2)	研究内容に応じた独自の調査計画を検討する。
第 6 回	調査結果のまとめ (1)	調査結果を報告し、まとめに向けた検討を行う。
第 7 回	調査結果のまとめ (2)	調査結果を報告し、まとめに向けた検討を行う。
第 8 回	関連文献のレビュー (3)	研究テーマに関する文献のレビューを行い、研究内容を検討する。
第 9 回	関連文献のレビュー (4)	研究テーマに関する文献のレビューを行い、研究内容を検討する。
第 10 回	調査計画の立案 (3)	研究内容に応じた独自の調査計画を検討する。
第 11 回	調査結果のまとめ (3)	調査結果を報告し、まとめに向けた検討を行う。
第 12 回	調査計画の立案 (4)	研究内容に応じた独自の調査計画を検討する。
第 13 回	調査結果のまとめ (4)	調査結果を報告し、まとめに向けた検討を行う。
第 14 回	レポートの発表	発表および質疑応答・議論を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

調査や準備、とりまとめ作業等に取り組む（授業時間は発表や議論が中心となるため）。

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

授業中に紹介

【参考書】

授業中に紹介

【成績評価の方法と基準】

平常点 (50%)・期末レポート (50%)。平常点は研究への取り組みの状況等をもとに評価する。期末レポートは、調査の状況、また構成や論理の整ったレポートかどうか等をもとに評価する。

【学生の意見等からの気づき】

応用力や思考力、スキルなどの涵養を心がける。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>自然地理学、自然災害

<研究テーマ>変動地形、活断層、地震、土地条件

<主要研究業績>

1) 杉戸信彦, 2014, 大地震の歴史とメカニズムを捉えるー活断層への地理学的アプローチ-, 木村周平・杉戸信彦・柄谷由香編, 「災害フィールドワーク論」, FENICS100 万人のフィールドワーカーシリーズ 5, 古今書院, 212p, 132-149.

2) 杉戸信彦・松多信尚・石黒聡士・内田主税・千田良道・鈴木康弘, 2015, 津波浸水域データと数値標高モデルの GIS 解析に基づく 2011 年東北地方太平洋沖地震の津波遡上高の空間分布, 地学雑誌, 124, 157-176. doi: 10.5026/jgeography.124.157

3) Sugito, N., H. Sawa, K. Taniguchi, Y. Sato, M. Watanabe, and Y. Suzuki, 2019, Evolution of Riedel-shear pop-up structures during cumulative strike-slip faulting: A case study in the Misayama-Godo area, Fujimi Town, central Japan, Geomorphology, 327, 446-455. doi: 10.1016/j.geomorph.2018.11.026

【Outline and objectives】

We conduct research and discussion for doctoral theses.

SES700P2 - 001

サステナビリティ特殊研究 1 A

高田 雅之

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

自然環境保全に関わる課題に関して、テーマ設定、研究方法の検討、分析評価などを含む博士論文の作成に向けた研究指導を受けます。

【到達目標】

博士課程 1 年生を対象として、研究設計と計画作成、先行研究の調査、並びに手法と必要なデータのリストアップ、これらに沿った研究の推進を行い、2 年目の投稿論文作成に至る中間成果をまとめることを目標とします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連している。

【授業の進め方と方法】

研究課題の進捗に関する資料をもとに意見交換を行うとともに、先行研究論文や関連する文献資料・事例を題材として研究指導を行い、中間成果への到達を目指します。また、指導においては適宜フィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	課題設定	課題設定に関する論議と指導、関連テーマに関する先行論文研究
第 2 回	課題設定	課題設定に関する論議と指導、関連テーマに関する先行論文研究
第 3 回	課題設定	課題設定に関する論議と指導、関連テーマに関する先行論文研究
第 4 回	課題設定	課題設定に関する論議と指導、関連テーマに関する先行論文研究
第 5 回	課題設定	課題設定に関する論議と指導、関連テーマに関する先行論文研究
第 6 回	研究設計	研究設計に関する論議と指導、関連テーマに関する先行論文研究
第 7 回	研究設計	研究設計に関する論議と指導、関連テーマに関する先行論文研究
第 8 回	研究設計	研究設計に関する論議と指導、関連テーマに関する先行論文研究
第 9 回	研究設計	研究設計に関する論議と指導、関連テーマに関する先行論文研究
第 10 回	研究設計	研究設計に関する論議と指導、関連テーマに関する先行論文研究
第 11 回	研究計画作成	研究計画作成に関する論議と指導、関連テーマに関する先行論文研究
第 12 回	研究計画作成	研究計画作成に関する論議と指導、関連テーマに関する先行論文研究
第 13 回	研究計画作成	研究計画作成に関する論議と指導、関連テーマに関する先行論文研究
第 14 回	研究計画作成	研究計画作成に関する論議と指導、関連テーマに関する先行論文研究

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

博士論文への中間成果作成に向けて、情報や知識の収集、データ分析、解析評価などの研究作業に取り組みます。本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

特定のものはありません。適宜資料を配布します。

【参考書】

随時紹介します。

【成績評価の方法と基準】

平常点（100%）：研究の進捗状況、毎回の学習意欲、課題への対応などを総合的に評価します。

【学生の意見等からの気づき】

該当なし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

自然環境政策、湿地生態学、景観生態学、自然環境地理学、保全生態学

<研究テーマ>

湿地における自然資源の持続的活用、生物多様性と生態系サービスの評価、湿原生態系の構造と人為的影響の評価、生物多様性オフセット

<主要研究業績>

「図説日本の湿地」(朝倉書店, 2017) 編集・共著

「湿地の科学と暮らし」(北大出版会, 2017) 共著

「湿地の博物誌」(北大出版会, 2014) 編者

「サロベツ湿原と稚咲内砂丘林帯湖沼群」(北大出版会, 2014) 共著

Combined burning and mowing for restoration of abandoned semi-natural grasslands, Appl Veg Sci 20, 2017.

Tropical Peat Formation, Tropical Peatland Ecosystems, Springer, 2016.

Effects of the expansion of vascular plants in Sphagnum-dominated bog on evapotranspiration, Agricultural and Forest Meteorology 220, 2016.

【実務経験のある教員による授業】

公務員、独立行政法人、民間企業

【Outline and objectives】

Regarding issues related to nature conservation, the students receive research direction for doctoral dissertations including theme setting and study methodology.

SES700P2 - 002

サステナビリティ特殊研究 1 B

高田 雅之

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

自然環境保全に関わる課題に関して、テーマ設定、研究方法の検討、分析評価などを含む博士論文の作成に向けた研究指導を受けます。

【到達目標】

博士課程 1 年生を対象として、研究設計と計画作成、先行研究の調査、並びに手法と必要なデータのリストアップ、これらに沿った研究の推進を行い、2 年目の投稿論文作成に至る中間成果をまとめることを目標とします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連している。

【授業の進め方と方法】

研究課題の進捗に関する資料をもとに意見交換を行うとともに、先行研究論文や関連する文献資料・事例を題材として研究指導を行い、中間成果への到達を目指します。また、指導においては適宜フィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	情報・資料収集	収集した情報・資料に関する論議と指導、関連する先行研究調査
第 2 回	情報・資料収集	収集した情報・資料に関する論議と指導、関連する先行研究調査
第 3 回	情報・資料収集	収集した情報・資料に関する論議と指導、関連する先行研究調査
第 4 回	情報・資料収集	収集した情報・資料に関する論議と指導、関連する先行研究調査
第 5 回	情報・資料収集	収集した情報・資料に関する論議と指導、関連する先行研究調査
第 6 回	情報・資料分析	情報・資料分析に関する論議と指導、関連する先行研究調査
第 7 回	情報・資料分析	情報・資料分析に関する論議と指導、関連する先行研究調査
第 8 回	情報・資料分析	情報・資料分析に関する論議と指導、関連する先行研究調査
第 9 回	情報・資料分析	情報・資料分析に関する論議と指導、関連する先行研究調査
第 10 回	情報・資料分析	情報・資料分析に関する論議と指導、関連する先行研究調査
第 11 回	中間成果のまとめ	中間成果のまとめに関する論議と指導、関連する先行研究調査
第 12 回	中間成果のまとめ	中間成果のまとめに関する論議と指導、関連する先行研究調査
第 13 回	中間成果のまとめ	中間成果のまとめに関する論議と指導、関連する先行研究調査
第 14 回	中間成果のまとめ	中間成果のまとめに関する論議と指導、関連する先行研究調査

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

博士論文への中間成果作成に向けて、情報や知識の収集、データ分析、解析評価などの研究作業に取り組みます。本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

特定のものはありません。適宜資料を配布します。

【参考書】

随時紹介します。

【成績評価の方法と基準】

平常点（100%）：研究の進捗状況、毎回の学習意欲、課題への対応などを総合的に評価します。

【学生の意見等からの気づき】

該当なし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

自然環境政策、湿地生態学、景観生態学、自然環境地理学、保全生態学

<研究テーマ>

湿地における自然資源の持続的活用、生物多様性と生態系サービスの評価、湿原生態系の構造と人為的影響の評価、生物多様性オフセット

<主要研究業績>

「図説日本の湿地」(朝倉書店, 2017) 編集・共著

「湿地の科学と暮らし」(北大出版会, 2017) 共著

「湿地の博物誌」(北大出版会, 2014) 編者

「サロベツ湿原と稚咲内砂丘林帯湖沼群」(北大出版会, 2014) 共著

Combined burning and mowing for restoration of abandoned semi-natural grasslands, Appl Veg Sci 20, 2017.

Tropical Peat Formation, Tropical Peatland Ecosystems, Springer, 2016.

Effects of the expansion of vascular plants in Sphagnum-dominated bog on evapotranspiration, Agricultural and Forest Meteorology 220, 2016.

【実務経験のある教員による授業】

公務員、独立行政法人、民間企業

【Outline and objectives】

Regarding issues related to nature conservation, the students receive research direction for doctoral dissertations including theme setting and study methodology.

SES700P2 - 001

サステナビリティ特殊研究 1 A

高橋 五月

実務教員：

<研究テーマ> 日本の沿岸漁業と近代化、震災と未来論、水族館の人類学
 <主要研究業績> 『To See Once More the Stars: Living in a Post-Fukushima World (星の降るとき、3・11後の世界に生きる)』(共編 The New Pacific Press, 2014)、Hatchery Flounder Going Wild: Authenticity, Aesthetics, and Fetishism of Fish in Japan. Food and Foodways 22:5 - 23 (2014)、福島沖に浮かぶ「未来」とその未来『文化人類学』83(3):441-458、他

【Outline and objectives】

This course is designed to prepare students to accomplish graduate thesis.

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

環境人類学的調査を行い、研究論文を作成するための演習を実施する。

【到達目標】

文化人類学的研究を実践するために、エスノグラフィーの調査方法を学び、自らのリサーチプロポーザルを作成し、博士論文を書き上げるための準備を行う。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連している。

【授業の進め方と方法】

受講者の調査テーマに合わせた事例研究を講読する。演習形式によって、リサーチプロポーザルを作成するための指導をする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	研究テーマの検討と関連文献のレビュー（1）	受講者の研究テーマに沿った文献を選択し、文献レビューを通してその内容を検討する
第2回	研究テーマの検討と関連文献のレビュー（2）	受講者の研究テーマに沿った文献を選択し、文献レビューを通してその内容を検討する
第3回	研究テーマの検討と関連文献のレビュー（3）	受講者の研究テーマに沿った文献を選択し、文献レビューを通してその内容を検討する
第4回	研究テーマの検討と関連文献のレビュー（4）	受講者の研究テーマに沿った文献を選択し、文献レビューを通してその内容を検討する
第5回	研究テーマの検討と関連文献のレビュー（5）	受講者の研究テーマに沿った文献を選択し、文献レビューを通してその内容を検討する
第6回	研究テーマの検討と関連文献のレビュー（6）	受講者の研究テーマに沿った文献を選択し、文献レビューを通してその内容を検討する
第7回	研究テーマの検討と関連文献のレビュー（7）	受講者の研究テーマに沿った文献を選択し、文献レビューを通してその内容を検討する
第8回	研究テーマの検討と関連文献のレビュー（8）	受講者の研究テーマに沿った文献を選択し、文献レビューを通してその内容を検討する
第9回	リサーチプロポーザルの文献レビュー中間報告	中間報告と課題点についての研究
第10回	研究テーマの検討と関連文献のレビュー（9）	受講者の研究テーマに沿った文献を選択し、文献レビューを通してその内容を検討する
第11回	研究テーマの検討と関連文献のレビュー（10）	受講者の研究テーマに沿った文献を選択し、文献レビューを通してその内容を検討する
第12回	研究テーマの検討と関連文献のレビュー（11）	受講者の研究テーマに沿った文献を選択し、文献レビューを通してその内容を検討する
第13回	研究テーマの検討と関連文献のレビュー（12）	受講者の研究テーマに沿った文献を選択し、文献レビューを通してその内容を検討する
第14回	研究テーマの検討と関連文献のレビュー（13）	受講者の研究テーマに沿った文献を選択し、文献レビューを通してその内容を検討する

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

文献講読、プレリサーチの実施、リサーチプロポーザルの文献レビュー作成

【テキスト（教科書）】

特になし

【参考書】

受講者の研究テーマに沿った文献を選択する

【成績評価の方法と基準】

平常点（30%）、リサーチプロポーザル（70%）

【学生の意見等からの気づき】

特になし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 環境人類学、海洋人類学、震災人類学

SES700P2 - 002

サステナビリティ特殊研究 1 B

高橋 五月

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

環境人類学的調査を行い、研究論文を作成するための演習を実施する。

【到達目標】

文化人類学的研究を実践するために、エスノグラフィーの調査方法を学び、自らのリサーチプロポーザルを作成し、博士論文を書き上げるための準備を行う。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連している。

【授業の進め方と方法】

受講者の調査テーマに合わせた事例研究を講読する。演習形式によって、リサーチプロポーザルを作成するための指導をする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	研究テーマの検討と関連文献のレビュー（1）	受講者の研究テーマに沿った文献を選択し、文献レビューを通してその内容を検討する
第 2 回	研究テーマの検討と関連文献のレビュー（2）	受講者の研究テーマに沿った文献を選択し、文献レビューを通してその内容を検討する
第 3 回	研究テーマの検討と関連文献のレビュー（3）	受講者の研究テーマに沿った文献を選択し、文献レビューを通してその内容を検討する
第 4 回	研究テーマの検討と関連文献のレビュー（4）	受講者の研究テーマに沿った文献を選択し、文献レビューを通してその内容を検討する
第 5 回	研究テーマの検討と関連文献のレビュー（5）	受講者の研究テーマに沿った文献を選択し、文献レビューを通してその内容を検討する
第 6 回	研究テーマの検討と関連文献のレビュー（6）	受講者の研究テーマに沿った文献を選択し、文献レビューを通してその内容を検討する
第 7 回	研究テーマの検討と関連文献のレビュー（7）	受講者の研究テーマに沿った文献を選択し、文献レビューを通してその内容を検討する
第 8 回	研究テーマの検討と関連文献のレビュー（8）	受講者の研究テーマに沿った文献を選択し、文献レビューを通してその内容を検討する
第 9 回	リサーチプロポーザルの文献レビュー中間報告	中間報告と課題点についての研究
第 10 回	研究テーマの検討と関連文献のレビュー（9）	受講者の研究テーマに沿った文献を選択し、文献レビューを通してその内容を検討する
第 11 回	研究テーマの検討と関連文献のレビュー（10）	受講者の研究テーマに沿った文献を選択し、文献レビューを通してその内容を検討する
第 12 回	研究テーマの検討と関連文献のレビュー（11）	受講者の研究テーマに沿った文献を選択し、文献レビューを通してその内容を検討する
第 13 回	研究テーマの検討と関連文献のレビュー（12）	受講者の研究テーマに沿った文献を選択し、文献レビューを通してその内容を検討する
第 14 回	研究テーマの検討と関連文献のレビュー（13）	受講者の研究テーマに沿った文献を選択し、文献レビューを通してその内容を検討する

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

文献講読、プレリサーチの実施、リサーチプロポーザルの文献レビュー作成

【テキスト（教科書）】

特になし

【参考書】

受講者の研究テーマに沿った文献を選択する

【成績評価の方法と基準】

平常点（30%）、リサーチプロポーザル（70%）

【学生の意見等からの気づき】

特になし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 環境人類学、海洋人類学、震災人類学

<研究テーマ> 日本の沿岸漁業と近代化、震災と未来論、水族館の人類学
 <主要研究業績> 『To See Once More the Stars: Living in a Post-Fukushima World (星の降るとき、3・11後の世界に生きる)』(共編 The New Pacific Press, 2014)、Hatchery Flounder Going Wild: Authenticity, Aesthetics, and Fetishism of Fish in Japan. Food and Foodways 22:5 - 23 (2014)、福島沖に浮かぶ「未来」とその未来『文化人類学』83(3):441-458、他

【Outline and objectives】

This course is designed to prepare students to accomplish graduate thesis.

SES700P2 - 001

サステナビリティ特殊研究 1 A

武貞 稔彦

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

博士論文執筆のための演習指導

【到達目標】

博士課程 1 年生を対象とする本演習では、①博士論文執筆のための基礎的なスキルの獲得、および、②研究テーマ設定を目標とします。「研究論文」とは何かなるものかについてよく理解し、執筆に向けたリサーチを開始することが期待されます。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連している。

【授業の進め方と方法】

各回の演習は、受講者からの進捗報告、教員および演習参加者からのコメントを中心にすすめます。論文執筆やリサーチの基礎的なスキルに関しては、紹介する文献などを通じて学びます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	オリエンテーション	到達目標としての「博士論文」を概観する
第 2 回	研究の進め方の確認	研究の進め方について基本的な知識を確認する
第 3 回	研究テーマ検討	演習参加者の修士論文などをレビューするとともに問題関心を研究テーマに結びつける取り組みを開始する。
第 4 回	先行研究レビューと研究テーマ設定（第 1 回）	演習参加者による先行研究レビューと、研究テーマ設定に関する議論を行う（特に理論面）（第 1 回）
第 5 回	先行研究レビューと研究テーマ設定（第 2 回）	演習参加者による先行研究レビューと、研究テーマ設定に関する議論を行う（特に理論面）（第 2 回）
第 6 回	先行研究レビューと研究テーマ設定（第 3 回）	演習参加者による先行研究レビューと、研究テーマ設定に関する議論を行う（特に理論面）（第 3 回）
第 7 回	先行研究レビューと研究テーマ設定（第 4 回）	演習参加者による先行研究レビューと、研究テーマ設定に関する議論を行う（特に理論面）（第 4 回）
第 8 回	先行研究レビューと研究テーマ設定（第 5 回）	演習参加者による先行研究レビューと、研究テーマ設定に関する議論を行う（特に理論面）（第 5 回）
第 9 回	先行研究レビューと研究テーマ設定（第 6 回）	演習参加者による先行研究レビューと、研究テーマ設定に関する議論を行う（特に事例面）（第 1 回）
第 10 回	先行研究レビューと研究テーマ設定（第 7 回）	演習参加者による先行研究レビューと、研究テーマ設定に関する議論を行う（特に事例面）（第 2 回）
第 11 回	先行研究レビューと研究テーマ設定（第 8 回）	演習参加者による先行研究レビューと、研究テーマ設定に関する議論を行う（特に事例面）（第 3 回）
第 12 回	先行研究レビューと研究テーマ設定（第 9 回）	演習参加者による先行研究レビューと、研究テーマ設定に関する議論を行う（特に事例面）（第 4 回）
第 13 回	先行研究レビューと研究テーマ設定（第 10 回）	演習参加者による先行研究レビューと、研究テーマ設定に関する議論を行う（特に事例面）（第 5 回）
第 14 回	先行研究レビューと研究テーマ設定（第 11 回）	演習参加者による先行研究レビューと、研究テーマ設定に関する議論を行う（特に事例面）（第 6 回）

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

演習参加者と協議のうえ、各回の参考文献を選定します。それらの参考文献（主に先行研究）の内容について熟読のうえ、自らの研究テーマについてよく考慮し、準備することが望まれます。

【テキスト（教科書）】

特に指定しません。必要に応じて資料を配布します。

【参考書】

随時紹介します。

【成績評価の方法と基準】

おおむね以下のバランスで総合的な成績評価を行います。演習における積極性と貢献度 60 %、博士論文執筆準備の進捗状況 40 %

【学生の意見等からの気づき】

少人数演習のため該当せず。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 開発の自然環境・社会環境への影響、開発援助、開発と倫理
<研究テーマ> 「望ましい（望ましくない）「開発」とは何か」「ダム建設に伴う立ち退きと補償、生活再建」
<主要研究業績>

"Japanese Experience of Involuntary Resettlement: Long-Term Consequences of Resettlement for the Construction of the Ikawa Dam," *International Journal of Water Resources Development*, Routledge, Vol. 25, Issue 3, September 2009, pp. 419- 430,

『開発介入と補償：ダム立ち退きをめぐる開発と正義論』勁草書房 2012 年, "Participation and diluted stakes in river management in Japan: the challenge of alternative constructions of resource governance" in Sato, J. ed., *Governance of Natural Resources: Uncovering the social purpose of materials in nature*. United Nations University Press, pp.141-161, July 2013

【Outline and objectives】

This is the first year seminar for authoring doctoral thesis. Students will be able to 1) acquire basic knowledge and skills to write thesis and to 2) set appropriate research objectives and research questions in the thesis.

SES700P2 - 002

サステナビリティ特殊研究 1 B

武貞 稔彦

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

博士論文執筆のための演習指導

【到達目標】

博士課程 1 年生を対象とする本演習では、①博士論文執筆のための基礎的なスキルの獲得、および、②研究テーマ設定を目標とします。「研究論文」とはいかなるものかについてよく理解し、執筆に向けたリサーチを開始することが期待されます。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連している。

【授業の進め方と方法】

各回の演習は、受講者からの進捗報告、教員および演習参加者からのコメントを中心にすすめます。論文執筆やリサーチの基礎的なスキルに関しては、紹介する文献などを通じて学びます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	先行研究レビューと研究テーマ設定（第 1 回）	演習参加者による先行研究レビューと、研究テーマ設定に関する議論を行う（第 1 回）
第 2 回	先行研究レビューと研究テーマ設定（第 2 回）	演習参加者による先行研究レビューと、研究テーマ設定に関する議論を行う（第 2 回）
第 3 回	先行研究レビューと研究テーマ設定（第 3 回）	演習参加者による先行研究レビューと、研究テーマ設定に関する議論を行う（第 3 回）
第 4 回	先行研究レビューと研究テーマ設定（第 4 回）	演習参加者による先行研究レビューと、研究テーマ設定に関する議論を行う（第 4 回）
第 5 回	先行研究レビューと研究テーマ設定（第 5 回）	演習参加者による先行研究レビューと、研究テーマ設定に関する議論を行う（第 5 回）
第 6 回	研究手法の検討（第 1 回）	演習参加者による先行研究レビューと、研究テーマ設定に関する議論を行う（特に研究手法について）（第 1 回）
第 7 回	研究手法の検討（第 2 回）	演習参加者による先行研究レビューと、研究テーマ設定に関する議論を行う（特に研究手法について）（第 2 回）
第 8 回	研究手法の検討（第 3 回）	演習参加者による先行研究レビューと、研究テーマ設定に関する議論を行う（特に研究手法について）（第 3 回）
第 9 回	研究手法の検討（第 4 回）	演習参加者による先行研究レビューと、研究テーマ設定に関する議論を行う（特に研究手法について）（第 4 回）
第 10 回	研究手法の検討（第 5 回）	演習参加者による先行研究レビューと、研究テーマ設定に関する議論を行う（特に研究手法について）（第 5 回）
第 11 回	研究構想の検討（第 1 回）	これまでの先行研究レビュー等の結果に基づき、研究構想を検討する（第 1 回）
第 12 回	研究構想の検討（第 2 回）	これまでの先行研究レビュー等の結果に基づき、研究構想を検討する（第 2 回）
第 13 回	研究構想の検討（第 3 回）	これまでの先行研究レビュー等の結果に基づき、研究構想を検討する（第 3 回）
第 14 回	研究構想の検討（第 4 回）	これまでの先行研究レビュー等の結果に基づき、研究構想を検討する（第 4 回）

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

演習参加者と協議のうえ、各回の参考文献を選定します。それらの参考文献（主に先行研究）の内容について熟読のうえ、自らの研究テーマについてよく考慮し、準備することが望まれます。

【テキスト（教科書）】

特に指定しません。必要に応じて資料を配布します。

【参考書】

随時紹介します。

【成績評価の方法と基準】

おおむね以下のバランスで総合的な成績評価を行います。演習における積極性と貢献度 60 %、博士論文執筆準備の進捗状況 40 %

【学生の意見等からの気づき】

少人数演習のため該当せず。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 開発の自然環境・社会環境への影響、開発援助、開発と倫理
<研究テーマ> 「望ましい（望ましくない）「開発」とは何か」「ダム建設に伴う立ち退きと補償、生活再建」
<主要研究業績>

"Japanese Experience of Involuntary Resettlement: Long-Term Consequences of Resettlement for the Construction of the Ikawa Dam," *International Journal of Water Resources Development*, Routledge, Vol. 25, Issue 3, September 2009, pp. 419- 430,

「開発介入と補償：ダム立ち退きをめぐる開発と正義論」勁草書房 2012 年, "Participation and diluted stakes in river management in Japan: the challenge of alternative constructions of resource governance" in Sato, J. ed., *Governance of Natural Resources: Uncovering the social purpose of materials in nature*. United Nations University Press, pp.141-161, July 2013

【Outline and objectives】

This is the first year seminar for authoring doctoral thesis. Students will be able to 1) acquire basic knowledge and skills to write thesis and 2) set appropriate research objectives and research questions in the thesis.

SES700P2 - 001

サステナビリティ特殊研究1A

辻 英史

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

歴史学研究（ヨーロッパ史）に興味をもつ博士課程の大学院生を対象に、博士論文執筆のための支援をおこなう。

【到達目標】

3年間で博士論文を執筆すること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連している。

【授業の進め方と方法】

第1年は入学時の研究テーマをさらに推敲し、博士論文の内容として構築する。春学期では、独創性のある論文のテーマを設定するため、隣接学問領域を含めた幅広く知識を吸収することで問題意識を広げていく。

第2年は、史料収集をおこなう。先行研究および問題設定を踏まえて、必要な史料を探索・収集し、さらにそれを整理する方法を学ぶ。春学期ではまず刊行文献を扱うことから始める。

第3年は論文を執筆し、その進捗状況について報告する。

2021年度は対面を基本とし、場合によってはオンラインにより授業をおこなう。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	導入	各自のテーマと現在の状況の報告。
第2回	文献紹介①前半	各自が自分の研究テーマに関連する文献を報告する。
第3回	文献紹介①後半	各自が自分の研究テーマに関連する文献を報告する。
第4回	文献紹介②前半	各自が自分の研究テーマに関連する文献を報告する。
第5回	文献紹介②後半	各自が自分の研究テーマに関連する文献を報告する。
第6回	史料紹介①前半	各自が自分の研究テーマに関連する史料を報告する。
第7回	史料紹介①後半	各自が自分の研究テーマに関連する史料を報告する。
第8回	史料紹介②前半	各自が自分の研究テーマに関連する史料を報告する。
第9回	史料紹介②後半	各自が自分の研究テーマに関連する史料を報告する。
第10回	史料紹介③前半	各自が自分の研究テーマに関連する史料を報告する。
第11回	史料紹介③後半	各自が自分の研究テーマに関連する史料を報告する。
第12回	論文執筆状況報告①前半	各自が書き上げた部分を報告し、参加者と議論しつつ検討する。
第13回	論文執筆状況報告①後半	各自が書き上げた部分を報告し、参加者と議論しつつ検討する。
第14回	論文執筆状況報告②	各自が書き上げた部分を報告し、参加者と議論しつつ検討する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

報告箇所を準備しつつ論文執筆を進める。

【テキスト（教科書）】

授業中に必要に応じて指示する。

【参考書】

授業中にその都度個別に指示する。

【成績評価の方法と基準】

議論への参加（40%）、レポート（60%）により評価する。3年生はレポートに代えて博士論文執筆の進捗状況により評価する。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 歴史学（ドイツ近現代史）

<研究テーマ> 市民社会の歴史、ドイツ社会国家の歴史

<主要研究業績> 『歴史のなかの社会国家』（川越修と共編著）山川出版社、2016年；『社会国家を生きる』（川越修と共編著）法政大学出版局、2008年。

【Outline and objectives】

Small group workshop for doctoral candidates to improve methodological knowledge and to advance research plan.

SES700P2 - 002

サステナビリティ特殊研究 1 B

辻 英史

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

歴史学研究（ヨーロッパ史）に興味をもつ博士課程の大学院生を対象に、博士論文執筆のための支援をおこなう。

【到達目標】

3年間で博士論文を執筆すること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連している。

【授業の進め方と方法】

第1年は入学時の研究テーマをさらに推敲し、博士論文へ拡大深化させていく。秋学期は論文の内容をさらに掘り下げるため、論文で扱う分野に限定して先行研究を徹底的に読み込む作業をおこなう。

第2年は、必要な史料を収集する。先行研究および問題設定を踏まえて、必要な史料を探索・収集し、それを整理する方法を学ぶ。必要に応じて統計や文書館史料に取り組む。

第3年は論文を執筆し、その進捗状況について報告する。

2021年度は対面を基本とし、場合によってはオンラインにより授業をおこなう。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	導入	各自のテーマと現在の状況の報告。
第2回	文献紹介①前半	各自が自分の研究テーマに関連する文献を報告する。
第3回	文献紹介①後半	各自が自分の研究テーマに関連する文献を報告する。
第4回	文献紹介②前半	各自が自分の研究テーマに関連する文献を報告する。
第5回	文献紹介②後半	各自が自分の研究テーマに関連する文献を報告する。
第6回	史料紹介①前半	各自が自分の研究テーマに関連する史料を報告する。
第7回	史料紹介①後半	各自が自分の研究テーマに関連する史料を報告する。
第8回	史料紹介②前半	各自が自分の研究テーマに関連する史料を報告する。
第9回	史料紹介②後半	各自が自分の研究テーマに関連する史料を報告する。
第10回	史料紹介③前半	各自が自分の研究テーマに関連する史料を報告する。
第11回	史料紹介③後半	各自が自分の研究テーマに関連する史料を報告する。
第12回	論文執筆状況報告①前半	各自が書き上げた部分を報告し、参加者と議論しつつ検討する。
第13回	論文執筆状況報告①後半	各自が書き上げた部分を報告し、参加者と議論しつつ検討する。
第14回	論文執筆状況報告②	各自が書き上げた部分を報告し、参加者と議論しつつ検討する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

報告箇所を準備しつつ論文執筆を進める。

【テキスト（教科書）】

授業中に必要に応じて指示する。

【参考書】

授業中にその都度個別に指示する。

【成績評価の方法と基準】

議論への参加（40%）、レポート（60%）により評価する。3年生はレポートに代えて博士論文執筆の進捗状況により評価する。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 歴史学（ドイツ近現代史）

<研究テーマ> 市民社会の歴史、ドイツ社会国家の歴史

<主要研究業績> 『歴史のなかの社会国家』（川越修と共編著）山川出版社、2016年；『社会国家を生きる』（川越修と共編著）法政大学出版局、2008年。

【Outline and objectives】

Small group workshop for doctoral candidates to expand their abilities to research and analyze historical documents and to write their dissertations

SES700P2 - 001

サステナビリティ特殊研究 1 A

永野 秀雄

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

公共政策研究科の博士論文指導科目として、博士号取得に向けた研究テーマ設定の検討、基礎となるリサーチ方法、論文のまとめ方等について、個別の状況に応じて指導していく。

【到達目標】

米国法又は米国の公共政策に関する専門知識や高度な研究方法、論文執筆の力を体得し、最終的に博士論文を作成することを到達目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連している。

【授業の進め方と方法】

米国法又は米国の公共政策に一定の知識があり、英語論文・法令・判例等をある程度読みこなせる能力をもち、かつ修士号を取得した者を主たる対象とする。これまでに本人が蓄積してきた知識・能力と、本講義を通じて収集する最新情報に基づいて、米国法又は同国の公共政策を分析・検討する博士論文の作成を目指す。なお、米国法等の分析にとどまらず、わが国との比較検討ができれば優れた博士論文になると考える。

また、授業は、対面授業を予定しているが、コロナウイルスの感染が拡大した場合には、リアルタイムのライブ型配信授業とする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

なし/No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
1	博士論文のテーマ	学生の方の博士論文構想について、意見を聞きます。
2	博士論文レベルのリサーチ（1）	博士論文レベルの先行論文等の検索方法の指導。
3	博士論文レベルのリサーチ（2）	仮の博士論文テーマに関して、WEB上またはデータベース上の先行論文等の検索方法の指導。
4	博士論文レベルのリサーチ（3）	仮の博士論文テーマに関して、データベースでの先行論文等の検索方法の指導。
5	博士論文の書き方（1）	博士論文レベルの執筆方法の基礎について学ぶ。
6	博士論文の書き方（2）	博士論文レベルの論文に関する理論展開、立証、脚注における引用方式等を学ぶ。
7	博士論文執筆計画の策定	具体的な博士論文の構成と、執筆計画を策定する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

学生と相談し、進め方を決定していく。

【テキスト（教科書）】

適宜、推薦する。

【参考書】

適宜、推薦する。

【成績評価の方法と基準】

参加30%、進捗状況70%で評価する。

【学生の意見等からの気づき】

今後も、博士号論文の執筆に関する進捗状況を確認し、学会発表等への推薦等を継続して行っていく。

【学生が準備すべき機器他】

インターネット検索、法令・判例検索、学会発表練習のためのコンピュータ。

【担当教員の専門分野等】

専門領域は、日米比較法（環境法、防衛法、先端技術法など）。現在の研究テーマは、「環境監査と法」、「サイバーセキュリティと法」など。近年の論文は、以下のとおり。

「米国防総省によるサイバーセキュリティ成熟度モデル認証（CMMC）の導入：現行のNIST SP 800-171の遵守制度を超えて」CISTEC journal186号200頁以下（2020年3月）。

「米国におけるセキュリティクリアランス制度の大改革」CISTEC journal185号223頁以下（2020年1月）。

「米国の重要インフラに関するサイバーセキュリティとセキュリティ・クリアランス法制（上）」人間環境論集19巻1号13頁以下（2018年12月）。

【Outline and objectives】

As a research and writing instruction course of the Graduate School of Public Policy and Social Governance, this course provides a basic introduction of the research method and analytical method as the basis for setting the research theme of the doctoral dissertation.

SES700P2 - 002

サステイナビリティ特殊研究 1 B

永野 秀雄

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

公共政策研究科の博士論文指導科目として、博士号取得に向けた研究テーマ設定の検討、基礎となるリサーチ方法、論文のまとめ方等について、個別の状況に応じて指導していく。

【到達目標】

米国法又は米国の公共政策に関する専門知識や高度な研究方法、論文執筆の力を体得し、最終的に博士論文を作成することを到達目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連している。

【授業の進め方と方法】

米国法又は米国の公共政策に一定の知識があり、英語論文・法令・判例等をある程度読みこなせる能力をもち、かつ修士号を取得した者を主たる対象とする。これまでに本人が蓄積してきた知識・能力と、本講義を通じて収集する最新情報に基づいて、米国法又は同国の公共政策を分析・検討する博士論文の作成を目指す。なお、米国法等の分析にとどまらず、わが国との比較検討ができれば優れた博士論文になると考える。

また、授業は、対面授業を予定しているが、コロナウイルスの感染が拡大した場合には、リアルタイムのライブ型配信授業とする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

なし/No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
1	先行文献の調査	先行文献の調査に関する報告を受け、検証する。
2	学会における発表状況の報告	テーマに関連する学会における発表状況につき、報告を受ける。
3	今後の学会における発表テーマの検討	今年度中に発表可能な論文について、特定の学会における報告可能性を検討する。
4	博士論文の構成に関する検証	これまで行ってきた学会発表論文と博士号論文の章立てとの検討を行う。
5	博士号論文の構成の確定	博士号論文の構成を確定する。
6	博士号論文の本文校正	博士号論文の本文に関する校正を行う。
7	博士号論文のサイテーションに関する校正	博士号論文のサイテーションにつき、米国法の引用方式であるブルーブックに基づく校正を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

学生と相談し、進め方を決定していく。

【テキスト（教科書）】

適宜、推薦する。

【参考書】

適宜、推薦する。

【成績評価の方法と基準】

参加30%、進捗状況70%で評価する。

【学生の意見等からの気づき】

今後も、博士号論文の執筆に関する進捗状況を確認し、学会発表等への推薦等を継続して行っていく。

【学生が準備すべき機器他】

インターネット検索、法令・判例検索、学会発表練習のためのコンピュータ。

【担当教員の専門分野等】

専門領域は、日米比較法（環境法、防衛法、先端技術法など）。現在の研究テーマは、「環境監査と法」、「サイバーセキュリティと法」など。最近の論文は、以下のとおり。

「米国防総省によるサイバーセキュリティ成熟度モデル認証 (CMMC) の導入：現行の NIST SP 800-171 の遵守制度を超えて」 CISTEC journal186 号 200 頁以下（2020年3月）。

「米国におけるセキュリティクリアランス制度の大改革」 CISTEC journal185 号 223 頁以下（2020年1月）。

「米国の重要インフラに関するサイバーセキュリティとセキュリティ・クリアランス法制（上）」人間環境論集 19 巻1号 13 頁以下（2018年12月）。

【Outline and objectives】

As a research and writing instruction course of the Graduate School of Public Policy and Social Governance, this course provides a basic introduction of the research method and analytical method as the basis for setting the research theme of the doctoral dissertation.

SES700P2 - 001

サステナビリティ特殊研究 1 A

長谷川 直哉

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本授業は博士論文の執筆に関係する先行研究について検討を行ないます。参加者は博士論文の構想や論点を踏まえ、検討すべき先行研究のリストを作成し毎回報告をして下さい。本授業を通じて、報告者は先行研究の論点と博士論文で取り上げる研究テーマの関係性を整理を行うことを目指します。

【到達目標】

この授業では、博士論文のテーマの絞り込みを行う上で必要となる先行研究の到達点（論点）や研究方法を理解し、博士論文のフレームワークを作り上げることを目的とします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連している。

【授業の進め方と方法】

毎回、重要な先行研究について受講者による報告を求め、報告内容に関する討議を行ないます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業の方針・進め方
第2回	これまでの研究内容について	修士論文の内容についての報告
第3回	博士論文の研究計画	研究テーマ・研究方法についての報告
第4回	先行研究の抽出	検討すべき先行研究のリストアップ
第5回	先行研究に関する報告① [環境分野]	サステナブル経営に関する先行研究論文の検討
第6回	先行研究に関する報告② [環境分野]	サステナブル経営に関する先行研究論文の検討
第7回	先行研究に関する報告③ [社会分野]	サステナブル経営に関する先行研究論文の検討
第8回	先行研究に関する報告④ [社会分野]	サステナブル経営に関する先行研究論文の検討
第9回	先行研究に関する報告⑤ [ガバナンス分野]	サステナブル経営に関する先行研究論文の検討
第10回	先行研究に関する報告⑥ [ガバナンス分野]	サステナブル経営に関する先行研究論文の検討
第11回	先行研究に関する報告⑦ [海外文献]	サステナブル経営に関する先行研究論文の検討
第12回	先行研究に関する報告⑧ [海外文献]	サステナブル経営に関する先行研究論文の検討
第13回	先行研究に関する報告⑨ [海外文献]	サステナブル経営に関する先行研究論文の検討
第14回	先行研究に関する報告⑩ [海外文献]	先行研究における到達点の明確化

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

学生は博士論文の執筆に必要な先行研究を事前に整理しておくことが求められます。授業で指摘された点を復習し論点の整理を行ないます。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

特定のテキストは使用しません。

【参考書】

受講者のテーマに応じて授業内で適宜紹介します。

【成績評価の方法と基準】

研究報告：80%

討議への貢献度：20%

【学生の意見等からの気づき】

毎回の講義で学生からの意見を聴取し、授業や論文指導に随時反映させています。

【学生が準備すべき機器他】

パソコンを使用する場合があります。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

CSR・企業倫理・ESG投資

<研究テーマ>

企業と社会のサステナビリティ

<主要研究業績>

「企業社会の変容と共通価値の創造」『損害保険研究第76巻第3号』

2014年

「利益の質保証－企業価値評価を巡る投資家の責任－」『日本経営理学会誌第20号』2013年

【実務経験】

損害保険会社の資産運用部門において、約15年間投資業務を担当しました。1999年、ESG投資の先駆的な取り組みであるSRI（社会的責任投資）ファンドを組成し、ファンドマネージャーとして企業のESG（非財務）側面を評価する手法を開発しました。また、（公財）国際金融情報センターに出向し、カントリーリストや国際金融システムに関する調査・研究に従事しました。

【関連資格】

日本証券アナリスト協会認定アナリスト（CMA）

【Outline and objectives】

This class examines prior research related to the writing of doctoral dissertations. Participants should prepare a list of prior studies to be considered based on the concept and issues of the doctoral dissertation, and report each time. Through this class, the reporter aims to organize the relationship between the issues of previous research and the research themes covered in the doctoral dissertation.

SES700P2 - 002

サステナビリティ特殊研究 1 B

長谷川 直哉

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本授業は博士論文の執筆に関係する領域の最新研究と論文で取り上げる論点について検討を行ないます。参加者は博士論文の構想や論点に関する報告を毎回行い、担当教員が研究や調査の進め方についてアドバイスを行ないます。

【到達目標】

経営学分野におけるサステナビリティに関する専門知識、国内外の研究成果、研究方法、データ解析スキルを体得し、博士論文の執筆に必要な研究のフレームワークを確立することを目標とします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連している。

【授業の進め方と方法】

企業経営とサステナビリティ（E：環境、S：社会、G：ガバナンス）、非財務情報と企業価値の関係性等の分野で博士論文を執筆する者を主たる対象とします。修士論文の執筆を通じて蓄積してきた知見と、本講義で検討する最新の研究成果に基づいて、実証研究とその理論化についてのスキルを身につけるよう指導します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業の方針・進め方
第2回	サステナビリティをめぐる世界的動向①	文献サーベイ
第3回	サステナビリティをめぐる世界的動向②	文献サーベイ
第4回	サステナビリティをめぐる世界的動向③	文献サーベイ
第5回	価値共創仮説の検討①	国内外の事例研究
第6回	価値共創仮説の検討②	国内外の事例研究
第7回	価値共創仮説の検討③	国内外の事例研究
第8回	非財務情報と企業価値の関係性①	ESG 投資の検討
第9回	非財務情報と企業価値の関係性②	社会的責任投資の検討
第10回	非財務情報と企業価値の関係性③	統合思考の検討
第11回	非財務情報と企業価値の関係性④	ステュワードシップコードの検討
第12回	非財務情報と企業価値の関係性⑤	コーポレートガバナンスコードの検討
第13回	博士論文における実証研究の報告①	実証研究の中間報告
第14回	博士論文における実証研究の報告②	実証研究の中間報告

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

学生は博士論文の執筆に必要な最新研究を事前に整理しておくことが求められます。授業で指摘された点を復習し論点の整理を行ないます。

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

特定のテキストは使用しません。

【参考書】

受講者のテーマに応じて授業内で適宜紹介します。

【成績評価の方法と基準】

報告内容：80 %

討議への貢献度：20 %

【学生の意見等からの気づき】

毎回の講義で学生からの意見を聴取し、授業や論文指導に随時反映させています。

【学生が準備すべき機器他】

パソコン

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

サステナブル経営・企業倫理・責任投資・ビジネスヒストリー

<研究テーマ>

企業と社会のサステナビリティ

<主要研究業績>

「企業社会の変容と共通価値の創造」『損害保険研究第 76 巻第 3 号』

2014 年

「利益の質保証－企業価値評価を巡る投資家の責任－」『日本経営倫理学会誌第 20 号』2013 年

【実務経験】

損害保険会社の資産運用部門において、約 15 年間投資業務を担当しました。1999 年、ESG 投資の先駆的な取り組みである SRI（社会的責任投資）ファンドを組成し、ファンドマネジャーとして企業の ESG（非財務）側面を評価する手法を開発しました。また、（公財）国際金融情報センターに外向し、カンントリーリストや国際金融システムに関する調査・研究に従事しました。

【関連資格】

日本証券アナリスト協会認定アナリスト（CMA）

【Outline and objectives】

This lesson examines the latest research in areas related to the writing of doctoral dissertations and the issues raised in the dissertation. Students report on the concept and issues of the doctoral dissertation each time, and the teacher gives advice on how to proceed with research and research.

SES700P2 - 001

サステナビリティ特殊研究 1 A

藤倉 良

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

博士論文のテーマを設定し、骨子案を作成する。

【到達目標】

博士論文のテーマを設定し、骨子案を作成する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連している。

【授業の進め方と方法】

毎週土曜日のゼミに出席し、他の院生の報告を聞くと共に、過去 1 週間の進捗状況を報告し、議論を行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	オリエンテーション	受講生の関心の方向性を発表する。
第 2 回	関心テーマの絞り込み	関心テーマの概要をとりまとめ、論文の落としどころを考える
第 3 回	関心テーマの実現可能性	関心テーマを主題とした場合に、それを論文に至らしめることができるかを検討する。
第 4 回	論文の主題案	論文の主題案を決める。
第 5 回	関連情報の収集	論文に関連する情報を収集する。
第 6 回	関連情報の分析	収集した関連情報を分析する。
第 7 回	論文の実現可能性	関連情報の分析結果から、設定した論文テーマで研究遂行が可能か否かを再検討する。
第 8 回	論文のテーマ再確認	前回の検討に基づき、論文のテーマが妥当であることを再確認する。
第 9 回	研究テーマの検討	研究テーマについて発表し議論する。
第 10 回	研究枠組みの検討	研究を実施するための枠組みを検討する。
第 11 回	作業仮説の設定	作業仮説を設定し、妥当性や実施可能性について議論する。
第 12 回	方法論の設定	方法論を設定して発表し、議論する。
第 13 回	周辺情報の再収集	作業仮説や方法論に基づいて、関連する周辺情報を再収集する。
第 14 回	先行研究の収集	先行研究を収集する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

次のゼミまでに指示された作業を行うこと。

【テキスト（教科書）】

特に使用しない

【参考書】

藤倉良 (2007) 研究報告ということ, 人間環境論集, 第 7 巻, 第 2 号, pp.95-102

藤倉良 (2006) 研究をするということ, 人間環境論集, 第 6 巻, 第 2 号, pp.37-48

藤倉良 (2005) 論文を書くということ, 人間環境論集, 第 6 巻, 第 1 号, pp.81-87

法政大学リポジトリからダウンロード可能

【成績評価の方法と基準】

博士論文のテーマと骨子案の作成状況 (100 %)

【学生の意見等からの気づき】

毎回、議論を行う。

【学生が準備すべき機器他】

特になし。

【担当教員の専門分野等】

国際環境協力、環境システム科学

【博士課程院生が行った学会発表等】

① Masami Tsuji and Ryo Fujikura (2016) Safeguard Implementation of by Regional Development Banks - On Involuntary Resettlement -, 36th Annual Conference of the International Association for Impact Assessment, 11-14 May 2016, Aichi-Nagoya, Japan

② Tetsuo Kida and Ryo Fujikura (2016) Pollution Risks Accompanied with Economic Integration of ASEAN Countries and the Fragmentation of Production Processes, Brown Bag Lunch Seminar, UNIDO Headquarters, Vienna, 21th March, 2016

③喜田徹生、ASEANのフラグメンテーションと環境対策、第 16 回 国際開発学会春季大会、2015 年 6 月 7 日、法政大学

④澤津直也、大気汚染指数からみた中国の大気汚染の状況と評価のあり方に関する一考察、同上

⑤辻昌美、環境アセスメントの制度と運用 - 東南アジアを中心に -、同上

⑥西山照美、中国における自動車リサイクル産業発展に関する現状と課題、同上

⑦向井加奈子、藤倉良 (2014) 援助プロジェクトで行われた一村一品運動の評価と教訓、国際開発学会第 25 回全国大会 (千葉大学)、2014 年 11 月 29 日

⑧喜田徹生、藤倉良 (2013) 東南アジアにおける経済統合と越境開発 - タイ・ミャンマー国境におけるマキラドーラの形成に関する考察 -、国際開発学会第 24 回全国大会 (大阪大学)、2013 年 11 月 30 日

【Outline and objectives】

Identifying a subject of doctoral dissertation

SES700P2 - 002

サステナビリティ特殊研究 1 B

藤倉 良

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

博士論文のドラフト作成。

【到達目標】

設定されたテーマと骨子案に基づいて博士論文のデータ収集とドラフト作成を行う。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連している。

【授業の進め方と方法】

毎週土曜日のゼミに出席し、他の院生の報告を聞くと共に、過去 1 週間の進捗状況を報告し、議論を行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	研究方針の確認	サステナビリティ学特殊研究 1 A で設定した研究テーマの確認をする。
第 2 回	先行研究のレビュー	収集した先行研究をとりまとめる。
第 3 回	データ収集 1	データの情報源の確認
第 4 回	データ収集 2	データを収集する。
第 5 回	データ収集 3	データを収集する。
第 6 回	ヒアリング調査	ヒアリング調査の実現可能性を検討する。
第 7 回	ヒアリング対象選定	ヒアリングする調査対象を選定する。
第 8 回	ヒアリング調査準備	ヒアリング項目を決定する。
第 9 回	ヒアリング調査	ヒアリング調査を実施する。
第 10 回	ヒアリング調査解析	ヒアリング調査結果をとりまとめて解析する。
第 11 回	追加調査の確認	追加調査すべき事項を確認する。
第 12 回	追加調査の実施	追加調査を行う。
第 13 回	論文目次案作成	論文の目次案案を作成する。
第 14 回	論文骨子案作成	論文の骨子案を作成する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

次のゼミまでに指示された作業を行うこと。

【テキスト（教科書）】

特に使用しない

【参考書】

適宜指示する。

【成績評価の方法と基準】

研究の作業進捗状況（100 %）

【学生の意見等からの気づき】

毎回、議論を行う。

【学生が準備すべき機器他】

特になし。

【担当教員の専門分野等】

国際環境協力、環境システム科学

【Outline and objectives】

Drafting doctoral dissertation.

SES700P2 - 001

サステイナビリティ特殊研究 1 A

松本 倫明

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

博士論文のための研究指導を目的とする。

【到達目標】

博士論文執筆のためにテーマを設定し、研究するノウハウを習得する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連している。

【授業の進め方と方法】

対面授業を行う。院生は文献調査や研究の進捗状況について報告し、報告内容を議論する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	オリエンテーション	受講生の関心の方向性を発表する。
第 2 回	文献調査	文献調査の結果を発表し議論する。
第 3 回	文献調査	文献調査の結果を発表し議論する。
第 4 回	文献調査	文献調査の結果を発表し議論する。
第 5 回	文献調査	文献調査の結果を発表し議論する。
第 6 回	文献調査	文献調査の結果を発表し議論する。
第 7 回	文献調査	文献調査の結果を発表し議論する。
第 8 回	文献調査	文献調査の結果を発表し議論する。
第 9 回	研究テーマの設定	研究テーマについて発表し議論する。
第 10 回	研究テーマの設定	研究テーマについて発表し議論する。
第 11 回	研究テーマの設定	研究テーマについて発表し議論する。
第 12 回	研究テーマの設定	研究テーマについて発表し議論する。
第 13 回	研究テーマの設定	研究テーマについて発表し議論する。
第 14 回	研究テーマの設定	研究テーマについて発表し議論する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

受講生は発表のためのレジュメやパワーポイントのスライドを作成し、発表の準備を行う。本授業の準備学習・復習時間は各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

指導中に適宜指示する。

【参考書】

指導中に適宜指示する。

【成績評価の方法と基準】

研究の進捗状況を基準にする（100%）。

【学生の意見等からの気づき】

なし。

【その他の重要事項】

受講生は、数学、物理学、コンピュータ（Linux など）、英語の読み書きに関するある程度の能力は必要である。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>理論天文学

<研究テーマ>星形成、宇宙天気

<主要研究業績>

① "An origin of arc structures deeply embedded in dense molecular cloud cores", Matsumoto, T., Onishi, T., Tokuda, K., & Inutsuka, S.-i. 2015, MNRAS, 449, L123

② "Star Formation in Turbulent Molecular Clouds with Colliding Flow", Matsumoto, T., Dobashi, K., & Shimoikura, T. 2015, ApJ, 801, 77

③ "Protostellar Collapse of Magneto-turbulent Cloud Cores: Shape During Collapse and Outflow Formation", Matsumoto, T., & Hanawa, T. 2011, ApJ, 728, 47

【Outline and objectives】

This class is designed for obtaining knowledge and skills to write a doctoral thesis. Students will survey the previous works and make their themes for research. They will give talks about progress in their researches. The students need to have experience in programming, e.g., Python, and computer skills in Linux OS in advance. The students are also encouraged to have basic knowledge of physics, mathematics, and writing and reading skills of English.

SES700P2 - 002

サステイナビリティ特殊研究 1 B

松本 倫明

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

博士論文のための研究指導を目的とする。

【到達目標】

博士論文執筆のためにテーマを設定し、研究するノウハウを習得する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連している。

【授業の進め方と方法】

対面授業を行う。院生は文献調査や研究の進捗状況について報告し、報告内容を議論する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	今後のロードマップを確認する。
第2回	研究の方法	研究方法について指導する。
第3回	研究の方法	研究方法について指導する。
第4回	研究の方法	研究方法について指導する。
第5回	研究の方法	研究方法について指導する。
第6回	研究の方法	研究方法について指導する。
第7回	研究の方法	研究方法について指導する。
第8回	研究の方法	研究方法について指導する。
第9回	研究進捗の発表	研究進捗について発表し議論する。
第10回	研究進捗の発表	研究進捗について発表し議論する。
第11回	研究進捗の発表	研究進捗について発表し議論する。
第12回	研究進捗の発表	研究進捗について発表し議論する。
第13回	研究進捗の発表	研究進捗について発表し議論する。
第14回	研究進捗の発表	研究進捗について発表し議論する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

受講生は発表のためのレジュメやパワーポイントのスライドを作成し、発表の準備を行う。本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

指導中に適宜指示する。

【参考書】

指導中に適宜指示する。

【成績評価の方法と基準】

研究の進捗状況を基準にする（100%）。

【学生の意見等からの気づき】

なし。

【その他の重要事項】

受講生は、数学、物理学、コンピュータ（Linuxなど）、英語の読み書きに関するある程度の能力は必要である。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>理論天文学

<研究テーマ>星形成、宇宙天気

<主要研究業績>

① "An origin of arc structures deeply embedded in dense molecular cloud cores", Matsumoto, T., Onishi, T., Tokuda, K., & Inutsuka, S.-i. 2015, MNRAS, 449, L123

② "Star Formation in Turbulent Molecular Clouds with Colliding Flow", Matsumoto, T., Dobashi, K., & Shimoikura, T. 2015, ApJ, 801, 77

③ "Protostellar Collapse of Magneto-turbulent Cloud Cores: Shape During Collapse and Outflow Formation", Matsumoto, T., & Hanawa, T. 2011, ApJ, 728, 47

【Outline and objectives】

This class is designed for obtaining knowledge and skills to write a doctoral thesis. Students will survey the previous works and make their themes for research. They will give talks about progress in their researches. The students need to have experience in programming, e.g., Python, and computer skills in Linux OS in advance. The students are also encouraged to have basic knowledge of physics, mathematics, and writing and reading skills of English.

SES700P2 - 001

サステナビリティ特殊研究 1 A

宮川 路子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

公共政策研究科における博士論文指導科目として、博士号取得に向け、研究構想とテーマの選定、基礎となる資料収集、先行研究の調査、論点整理と分析、仮説の設定と検証、論文のまとめ方などについて個々の受講者の状況に応じて指導していく。

【到達目標】

博士号取得可能な専門性と研究能力を獲得し、論文執筆する能力を養うことを目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連している。

【授業の進め方と方法】

個別と受講者全体が集まる二つの形態による指導を行う。受講者が進めている研究内容について、その進捗状況を報告し、参加者全員で質疑・討論を行う。受講者全員が検討に参加することにより、研究がブラッシュアップされ、理解度が深まることを狙っている。講義の方法は対面で行う予定である。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	授業の進め方について話し合う
第 2 回	研究及び文献講読 (1)	研究構想を練り、テーマを選定する。 文献を収集し先行研究を調査、検討する。
第 3 回	研究及び文献講読 (2)	研究構想を練り、テーマを選定する。 文献を収集し先行研究を調査、検討する。
第 4 回	研究及び文献講読 (3)	文献を収集し先行研究を調査、検討する。
第 5 回	研究及び文献講読 (4)	文献を収集し先行研究を調査、検討する。
第 6 回	研究及び文献講読 (5)	文献を収集し先行研究を調査、検討する。
第 7 回	研究及び文献講読 (6)	文献を収集し先行研究を調査、検討する。
第 8 回	研究及び文献講読 (7)	文献を収集し先行研究を調査、検討する。
第 9 回	研究及び文献講読 (8)	文献を収集し先行研究を調査、検討する。
第 10 回	研究及び文献講読 (9)	文献を収集し先行研究を調査、検討する。
第 11 回	研究及び文献講読 (10)	文献を収集し先行研究を調査、検討する。
第 12 回	研究及び文献講読 (11)	文献を収集し先行研究を調査、検討する。
第 13 回	研究及び文献講読 (12)	文献を収集し先行研究を調査、検討する。
第 14 回	研究及び文献講読 (13)	文献を収集し先行研究を調査、検討する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

研究テーマについて調査、研究を進める。報告のためにレジュメ、資料等を作成する。

【テキスト（教科書）】

特に指定しない

【参考書】

随時紹介する

【成績評価の方法と基準】

平常点 10 %、発表 10 %、研究内容 80 % で評価を行う。

【学生の意見等からの気づき】

学生の意見を反映させながらニーズに応じて対応します。

【学生が準備すべき機器他】

特になし

【その他の重要事項】

特になし

【担当教員の専門分野等】

公衆衛生学、産業保健、分子整合栄養医学、統合医療、統計学

<研究テーマ> 栄養と健康、就労者のストレスと健康

<主要研究業績> Subjective social status: its determinants and association with health in the Swedish working population (the SLOSH study)

The European Journal of Public Health 2012 年

ビタミン D の健康効果 人間環境論集 19 巻号 79-101

日本の医療を含むサービス産業における過重労働の軽減化における課題：国民はサービスの質・量の低下を甘受することができるか 人間環境論集 20 巻 1 号 1-17

<https://eiyouyohou.com/>

【Outline and objectives】

As a doctoral dissertation instruction subject in the Graduate School of Public Policy and Social Governance, devise research topics and select themes for doctor's degree acquisition. We will provide guidance according to the situation of individual students regarding basic data collection, survey of prior research, discussion and analysis of issues, setting and verification of hypothesis, summary of the thesis etc.

SES700P2 - 002

サステナビリティ特殊研究 1 B

宮川 路子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

公共政策研究科における博士論文指導科目として、博士号取得に向け、研究構想とテーマの選定、基礎となる資料収集、先行研究の調査、論点整理と分析、仮説の設定と検証、論文のまとめ方などについて個々の受講者の状況に応じて指導していく。

【到達目標】

博士号取得可能な専門性と研究能力を獲得し、論文執筆する能力を養い、論文を執筆することを目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連している。

【授業の進め方と方法】

個別と受講者全体が集まる二つの形態による指導を行う。受講者が進めている研究内容について、その進捗状況を報告し、参加者全員で質疑・討論を行う。受講者全員が検討に参加することにより、研究がブラッシュアップされ、理解度が深まることを狙っている。講義の方法は対面で行う予定である。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	研究及び文献購読 (14)	文献収集し、先行研究を調査、検討する。
第 2 回	研究及び文献購読 (15)	文献収集し、先行研究を調査、検討する。
第 3 回	研究及び文献購読 (16)	文献収集し、先行研究を調査、検討する。
第 4 回	研究テーマの選定	先行研究の調査をふまえて研究テーマを選定する
第 5 回	研究テーマの選定	先行研究の調査をふまえて研究テーマを選定する
第 6 回	研究テーマの選定	先行研究の調査をふまえて研究テーマを選定する
第 7 回	論文構想について	論文構想を練る
第 8 回	論文構想について	論文構想を練る
第 9 回	論点整理	論文の論点を整理し、課題を設定する
第 10 回	論点整理	論文の論点を整理し、課題を設定する
第 11 回	研究中間検討	これまでの進捗状況を振り返り、まとめる
第 12 回	研究中間検討	先行研究との照らし合わせを行い、テーマ、論の展開などについて検討を行う
第 13 回	調査について	実施する調査についての検討を行う
第 14 回	1年のまとめ	先行研究の調査と検討 論文構想と執筆法 論点整理と課題の設定 分析・解析法とその選定 研究結果等の検証

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

受講者各人の研究テーマについて研究を進める。報告担当の授業時のためにレジュメ、資料等を作成する。

【テキスト（教科書）】

使用しない

【参考書】

随時紹介する

【成績評価の方法と基準】

自身の研究の進捗状況（報告内容）と質疑応答などの平常点：30%
論文執筆状況：70%

【学生の意見等からの気づき】

学生からの意見を聞きながら柔軟に対応していきます。

【学生が準備すべき機器他】

特になし

【担当教員の専門分野等】

公衆衛生学、産業保健、分子整合栄養医学、統合医療、統計学

【Outline and objectives】

As a doctoral dissertation instruction subject in the Graduate School of Public Policy and Social Governance, devise research topics and select themes for doctor's degree acquisition. We will provide guidance according to the situation of individual students regarding basic data collection, survey of prior research, discussion and analysis of issues, setting and verification of hypothesis, summary of the thesis etc.

SES700P2 - 001

サステナビリティ特殊研究 1 A

湯澤 規子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

博士論文および研究論文作成のための演習指導

【到達目標】

本演習では博士論文を作成するために、次の3つを目標にします。

- ①研究の核心となる「問い」を明確にする。
- ②それと関連する学術的背景を文献講読などにより把握する。
- ③実証研究の実施と報告。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連している。

【授業の進め方と方法】

演習参加者の報告とそれに対する議論、コメントを中心に進めます。実証研究については各進捗状況に対応して指導します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	参加者の「問い」を報告し、議論する。
第2回	研究を進めるにあたって	博士論文作成に向けてのスキルと、キャリア形成について情報を共有し、議論する。
第3回	「問い」の設定と先行研究レビュー（1）	演習参加者の「問い」を提示し、関連する先行研究のレビューを行い議論する（第1回）
第4回	「問い」の設定と先行研究レビュー（2）	演習参加者の「問い」を提示し、関連する先行研究のレビューを行い議論する（第2回）
第5回	「問い」の設定と先行研究レビュー（3）	演習参加者の「問い」を提示し、関連する先行研究のレビューを行い議論する（第3回）
第6回	「問い」の設定と先行研究レビュー（4）	演習参加者の「問い」を提示し、関連する先行研究のレビューを行い議論する（第4回）
第7回	「問い」の設定と先行研究レビュー（5）	演習参加者の「問い」を提示し、関連する先行研究のレビューを行い議論する（第5回）
第8回	研究論文作成に向けて（1）	前回の議論を踏まえて「問い」を再設定し、調査を実施した結果を報告し、議論する（第1回）
第9回	研究論文作成に向けて（2）	前回の議論を踏まえて「問い」を再設定し、調査を実施した結果を報告し、議論する（第2回）
第10回	研究論文作成に向けて（3）	前回の議論を踏まえて「問い」を再設定し、調査を実施した結果を報告し、議論する（第3回）
第11回	研究論文作成に向けて（4）	前回の議論を踏まえて「問い」を再設定し、調査を実施した結果を報告し、議論する（第4回）
第12回	研究論文作成に向けて（5）	前回の議論を踏まえて「問い」を再設定し、調査を実施した結果を報告し、議論する（第5回）
第13回	研究論文作成に向けて（6）	前回の議論を踏まえて「問い」を再設定し、調査を実施した結果を報告し、議論する（第6回）
第14回	研究論文作成に向けて（7）	前回の議論を踏まえて「問い」を再設定し、調査を実施した結果を報告し、議論する（第7回）

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

自らの問題意識に関わる論文、文献、資料などに積極的にアクセスし、自主的にそれらを集め整理、熟読し、自分のオリジナリティに自覚的になることを目指してください。学内外の研究会への積極的な参加をすすめます。

【テキスト（教科書）】

特にありません。

【参考書】

随時紹介します。

【成績評価の方法と基準】

演習における出席と報告内容（60%）、研究の準備状況（40%）を総合的に評価します。

【学生の意見等からの気づき】

特にありません。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞地域経済学、日本近現代史、人文地理学

＜研究テーマ＞地域づくりの理論と実践、食と農と暮らしの地域経済学、女性と家族の近現代史

＜主要研究業績＞

- ・『7袋のポテトチップス—食べるを語る胃袋の戦後史』（単著、晶文社、2019年）
- ・『胃袋の近代—食と人びとの日常史』（単著、名古屋大学出版会、2018年）
- ・『在来産業と家族の地域史—ライフストーリーからみた小規模家族経営と結城紬生産』（単著、古今書院、2009年）
- ・『ジェンダーから再考する地域と人間』『サステナビリティ—地球と人類の課題』朝倉書店、2-18年、104-113頁
- ・『地域づくりの系譜—山梨県甲州市の甚六桜とかつぬま朝市』『歴史地理学』58(1)、2016年、57-72頁

【Outline and objectives】

Practice for preparing doctor's thesis and research paper

SES700P2 - 002

サステナビリティ特殊研究 1 B

湯澤 規子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

博士論文および研究論文作成のための演習指導

【到達目標】

本演習では博士論文を作成するために、次の3つを目標にします。

- ①研究の核心となる「問い」を洗練にする。
- ②それと関連する学術的背景を文献講読などにより把握する。
- ③研究論文を作成し、その公表を目指す。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連している。

【授業の進め方と方法】

演習参加者の報告とそれに対する議論、コメントを中心に進めます。実証研究については各進捗状況に対応して指導します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	研究論文作成に向けて（1）	これまで議論を踏まえて「問い」を再設定し、調査を実施した結果を報告し、議論する（第1回）
第2回	研究論文作成に向けて（2）	これまで議論を踏まえて「問い」を再設定し、調査を実施した結果を報告し、議論する（第2回）
第3回	研究論文作成に向けて（3）	これまで議論を踏まえて「問い」を再設定し、調査を実施した結果を報告し、議論する（第3回）
第4回	研究論文作成に向けて（4）	これまで議論を踏まえて「問い」を再設定し、調査を実施した結果を報告し、議論する（第4回）
第5回	研究論文作成に向けて（5）	これまで議論を踏まえて「問い」を再設定し、調査を実施した結果を報告し、議論する（第5回）
第6回	調査の報告と検討（1）	博士論文作成に向けて調査に着手し、その報告と検討を進める（第1回）
第7回	調査の報告と検討（2）	博士論文作成に向けて調査に着手し、その報告と検討を進める（第2回）
第8回	調査の報告と検討（3）	博士論文作成に向けて調査に着手し、その報告と検討を進める（第3回）
第9回	調査の報告と検討（4）	博士論文作成に向けて調査に着手し、その報告と検討を進める（第4回）
第10回	調査の報告と検討（5）	博士論文作成に向けて調査に着手し、その報告と検討を進める（第5回）
第11回	調査の報告と検討（6）	博士論文作成に向けて調査に着手し、その報告と検討を進める（第6回）
第12回	調査の報告と検討（7）	博士論文作成に向けて調査に着手し、その報告と検討を進める（第7回）
第13回	調査の報告と検討（8）	博士論文作成に向けて調査に着手し、その報告と検討を進める（第8回）
第14回	調査の報告と検討（9）	博士論文作成に向けて調査に着手し、その報告と検討を進める（第9回）

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

自らの問題意識に関わる論文、文献、資料などに積極的にアクセスし、自主的にそれを収集整理、熟読し、自分のオリジナリティに自覚的になることを目指してください。学内外の研究会への積極的な参加をすすめます。

【テキスト（教科書）】

特にありません。

【参考書】

随時紹介します。

【成績評価の方法と基準】

演習における報告内容（60%）、研究の準備状況（40%）を総合的に評価します。

【学生の意見等からの気づき】

特にありません。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>地域経済学、日本近現代史、人文地理学
 <研究テーマ>地域づくりの理論と実践、食と農と暮らしの地域経済学、女性と家族の近現代史
 <主要研究業績>

- ・『7袋のポテトチップス—食べるを語る胃袋の戦後史』（単著、晶文社、2019年）
- ・『胃袋の近代—食と人びとの日常史』（単著、名古屋大学出版会、2018年）
- ・『在来産業と家族の地域史—ライフヒストリーからみた小規模家族経営と結城紬生産』（単著、古今書院、2009年）
- ・『ジェンダーから再考する地域と人間』『サステナビリティ—地球と人類の課題』朝倉書店、2-18年、104-113頁
- ・『地域づくりの系譜—山梨県甲州市の甚六桜とかつぬま朝市』『歴史地理学』58(1)、2016年、57-72頁

【Outline and objectives】

Practice for preparing doctor's thesis and research paper

SES700P2 - 001

サステナビリティ特殊研究1A

吉永 明弘

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

環境倫理学に関する博士論文の書き方を学ぶ

【到達目標】

環境倫理学の考え方を理解し、自分なりの問題意識をもって、それを文章化できるようにすること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連している。

【授業の進め方と方法】

対面で行う。演習形式で、各自の問題関心を文章の読み上げ形式で発表し、添削する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	倫理学と環境倫理学	倫理学と環境倫理学について概説する。
第2回	修士論文の概要紹介	受講者の修士論文の概要を共有する。
第3回	博士論文の書き方	博士論文の書き方について解説する。
第4回	研究経過の報告（1）	各自の研究経過を報告し、議論する。
第5回	研究経過の報告（2）	各自の研究経過を報告し、議論する。
第6回	研究経過の報告（3）	各自の研究経過を報告し、議論する。
第7回	研究経過の報告（4）	各自の研究経過を報告し、議論する。
第8回	研究経過の報告（5）	各自の研究経過を報告し、議論する。
第9回	研究経過の報告（6）	各自の研究経過を報告し、議論する。
第10回	研究経過の報告（7）	各自の研究経過を報告し、議論する。
第11回	研究経過の報告（8）	各自の研究経過を報告し、議論する。
第12回	研究経過の報告（9）	各自の研究経過を報告し、議論する。
第13回	研究経過の報告（10）	各自の研究経過を報告し、議論する。
第14回	これまでの研究のまとめ	各自の研究の現時点でのまとめをレポートする。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

各自が必要な文献収集を行ってください。

【テキスト（教科書）】

使用しません。

【参考書】

吉永明弘『都市の環境倫理』勁草書房、2014年

吉永明弘『ブックガイド 環境倫理』勁草書房、2017年

吉永明弘・福永真弓編『未来の環境倫理学』勁草書房、2018年

吉永明弘・寺本剛編『環境倫理学』昭和堂、2020年

【成績評価の方法と基準】

研究経過の報告（40%）と最終レポート（60%）。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【学生が準備すべき機器他】

特になし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>環境倫理学

<研究テーマ>都市の環境倫理・災後と人新世代の環境倫理

<主要研究業績>

『都市の環境倫理』

『ブックガイド 環境倫理』

『未来の環境倫理学』

【Outline and objectives】

Learning how to write a doctoral dissertation on environmental ethics

SES700P2 - 002

サステナビリティ特殊研究 1 B

吉永 明弘

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

環境倫理学に関する博士論文の書き方を学ぶ

【到達目標】

環境倫理学の考え方を理解し、自分なりの問題意識をもって、それを文章化できるようにすること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連している。

【授業の進め方と方法】

対面で行う。演習形式で、各自の問題関心を文章の読み上げ形式で発表し、添削する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	問題意識の共有	受講者の問題意識を表明しあう。
第 2 回	博士論文の書き方	博士論文の書き方を復習する。
第 3 回	研究経過の報告（1）	各自の研究経過を報告し、議論する。
第 4 回	研究経過の報告（2）	各自の研究経過を報告し、議論する。
第 5 回	研究経過の報告（3）	各自の研究経過を報告し、議論する。
第 6 回	研究経過の報告（4）	各自の研究経過を報告し、議論する。
第 7 回	研究経過の報告（5）	各自の研究経過を報告し、議論する。
第 8 回	研究経過の報告（6）	各自の研究経過を報告し、議論する。
第 9 回	研究経過の報告（7）	各自の研究経過を報告し、議論する。
第 10 回	研究経過の報告（8）	各自の研究経過を報告し、議論する。
第 11 回	研究経過の報告（9）	各自の研究経過を報告し、議論する。
第 12 回	研究経過の報告（10）	各自の研究経過を報告し、議論する。
第 13 回	研究経過の報告（11）	各自の研究経過を報告し、議論する。
第 14 回	これまでの研究のまとめ	各自の研究の現時点でのまとめをレポートする。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

各自が必要な文献収集を行ってください。

【テキスト（教科書）】

使用しません。

【参考書】

吉永明弘『都市の環境倫理』勁草書房、2014 年
 吉永明弘『ブックガイド 環境倫理』勁草書房、2017 年
 吉永明弘・福永真弓編『未来の環境倫理学』勁草書房、2018 年
 吉永明弘・寺本剛編『環境倫理学』昭和堂、2020 年

【成績評価の方法と基準】

研究経過の報告（40%）と最終レポート（60%）。

【学生の意見等からの気づき】

本年度新規科目につきアンケートを実施していません。

【学生が準備すべき機器他】

特になし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>環境倫理学
 <研究テーマ>都市の環境倫理・災後と人新世代の環境倫理
 <主要研究業績>
 『都市の環境倫理』
 『ブックガイド 環境倫理』
 『未来の環境倫理学』

【Outline and objectives】

Learning how to write a doctoral dissertation on environmental ethics

SES700P2 - 001

サステナビリティ特殊研究 1 A

横内 恵

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

博士論文執筆を目的として、演習形式で研究指導を行う。

【到達目標】

博士課程1年次の終わりまでに、修士論文を踏まえて博士論文のテーマを設定し、研究の構想を立てることを目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連している。

【授業の進め方と方法】

対面授業の予定である。受講者による報告、教員と他の受講者からのコメント、ディスカッションを中心として演習を進める。教員から課題を出したり、そのための文献を紹介したりすることもある。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	博士論文執筆という目標について理解を深める
第2回	研究の進め方の確認	研究を進めるために必要となる知識・スキルを確認する
第3回	研究テーマ検討	修士論文を振り返り、博士論文のテーマを検討する
第4回	研究テーマ検討	修士論文を振り返り、博士論文のテーマを検討する
第5回	研究テーマ検討	修士論文を振り返り、博士論文のテーマを検討する
第6回	研究テーマ検討	修士論文を振り返り、博士論文のテーマを検討する
第7回	研究テーマ検討	修士論文を振り返り、博士論文のテーマを検討する
第8回	研究テーマ検討	修士論文を振り返り、博士論文のテーマを検討する
第9回	研究テーマ検討	修士論文を振り返り、博士論文のテーマを検討する
第10回	研究テーマ検討	修士論文を振り返り、博士論文のテーマを検討する
第11回	研究テーマ検討	修士論文を振り返り、博士論文のテーマを検討する
第12回	研究テーマ検討	修士論文を振り返り、博士論文のテーマを検討する
第13回	研究テーマ検討	修士論文を振り返り、博士論文のテーマを検討する
第14回	まとめ	博士論文の研究テーマを設定し、秋学期の研究計画を立てる

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

報告者は研究報告準備を事前に行きたくて下さい。そのために必要となる文献等は、受講者の相談を受けながら選定します。準備学習時間・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

特に指定しない。

【参考書】

必要に応じて紹介する。

【成績評価の方法と基準】

総合評価による（目安としては、平常点70%、論文準備状況30%）。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

環境法、公法（憲法・行政法）

<研究テーマ>

環境リスクの法的制御、廃棄物処理法制

<主要研究業績>

①「順応型リスク制御と比例性：ドイツ遺伝子技術法の閉鎖系規律手続を題材として」大塚直編『環境法研究』7号（信山社、2017年）13-45頁。

②「廃棄物処理法に基づく生活環境影響調査の対象地域に関する一考察—高城町事件と東海村事件を事例として」大阪経大論集 67巻3号（2016年）113-134頁。

③「科学的不確実性を伴う環境リスクに対する法的制御の可能性と限界」OUGCブックレット8号「中国の食・健康・環境の現状から導く東アジアの未来」（2016年）62-74頁。

【Outline and objectives】

The course is designed as a seminar course for PHD students.

SES700P2 - 002

サステナビリティ特殊研究 1 B

横内 恵

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

博士論文執筆を目的として、演習形式で研究指導を行う。

【到達目標】

博士課程1年次の終わりまでに、修士論文を踏まえて博士論文のテーマを設定し、研究の構想を立てることを目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連している。

【授業の進め方と方法】

対面授業の予定である。受講者による報告、教員と他の受講者からのコメント、ディスカッションを中心として演習を進める。教員から課題を出したり、そのための文献を紹介したりすることもある。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	研究テーマ設定を確認し、研究構想の立て方について話し合う
第2回	研究構想の検討	受講者による報告とディスカッションを通して、研究の構想を立てる
第3回	研究構想の検討	受講者による報告とディスカッションを通して、研究の構想を立てる
第4回	研究構想の検討	受講者による報告とディスカッションを通して、研究の構想を立てる
第5回	研究構想の検討	受講者による報告とディスカッションを通して、研究の構想を立てる
第6回	研究構想の検討	受講者による報告とディスカッションを通して、研究の構想を立てる
第7回	研究構想の検討	受講者による報告とディスカッションを通して、研究の構想を立てる
第8回	研究構想の検討	受講者による報告とディスカッションを通して、研究の構想を立てる
第9回	研究構想の検討	受講者による報告とディスカッションを通して、研究の構想を立てる
第10回	研究構想の検討	受講者による報告とディスカッションを通して、研究の構想を立てる
第11回	研究構想の検討	受講者による報告とディスカッションを通して、研究の構想を立てる
第12回	研究構想の検討	受講者による報告とディスカッションを通して、研究の構想を立てる
第13回	研究構想の検討	受講者による報告とディスカッションを通して、研究の構想を立てる
第14回	まとめ	研究構想を確認し（場合によっては、研究テーマ設定の軌道修正もを行い）、今後の研究計画を立てる

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

報告者は研究報告準備を事前にしっかりと行ってください。そのために必要となる文献等は、受講者の相談を受けながら選定します。準備学習時間・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

特に指定しない。

【参考書】

必要に応じて紹介する。

【成績評価の方法と基準】

総合評価による（目安としては、平常点70%、論文準備状況30%）。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

環境法、公法（憲法・行政法）

<研究テーマ>

環境リスクの法的制御、廃棄物処理法制

<主要研究業績>

①「順応型リスク制御と比例性：ドイツ遺伝子技術法の閉鎖系規律手続を題材として」大塚直編『環境法研究』7号（信山社、2017年）13-45頁。

②「廃棄物処理法に基づく生活環境影響調査の対象地域に関する一考察—高城町事件と東海村事件を事例として」大阪経大論集 67巻3号（2016年）113-134頁。

③「科学的不確実性を伴う環境リスクに対する法的制御の可能性と限界」OUGCブックレット8号「中国の食・健康・環境の現状から導く東アジアの未来」（2016年）62-74頁。

【Outline and objectives】

The course is designed as a seminar course for PHD students.

SES700P2 - 001

サステナビリティ特殊研究 1 A

渡邊 誠

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

研究活動を遂行し博士論文を執筆するために必要な事項について学ぶ。本科目では、受講者が研究者になるために必要な高度な事柄を修得することを念頭に置いている。研究テーマの選定と資料収集、先行研究の調査と分析、論点の整理と検証、論文技法と表現法などについて、まずはその基礎的な内容を修得する。

【到達目標】

専門学会等への投稿論文および博士論文を執筆するために必要な事柄について学ぶ。受講者は研究を遂行するための高度な基礎力を身につけることができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連している。

【授業の進め方と方法】

本科目では、対面形式で授業を進める。受講者はあらかじめ準備してきた内容について報告する。それをもとに参加者全員で検討を行っていく。受講者は各々の進捗状況に応じて個別指導も受けることになる。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	授業の方針、進め方について
第 2 回	テーマの検討（現実性・妥当性の確認）	課題の洗い出しとテーマ選定のための検討。
第 3 回	テーマの検討（新規性・社会的意義などの確認）	課題の洗い出しとテーマ選定のための検討。
第 4 回	先行研究の調査と分析（先行研究の確認）	文献の調査と読み込み、論点整理。
第 5 回	先行研究の調査と分析（論点整理）	文献の調査と読み込み、論点整理。
第 6 回	分析手法・評価手法などの検討（確認）	分析手法・技法などの検討。
第 7 回	分析手法・評価手法などの検討（再検討）	分析手法・技法などの検討。
第 8 回	研究の企画と設計・計画（概要設計の確認）	研究計画と分析手法・技法、評価手法などの検討。
第 9 回	研究の企画と設計・計画（詳細設計の確認）	研究計画と分析手法・技法、評価手法などの検討。
第 10 回	研究の企画と設計・計画（計画の再検討）	研究計画と分析手法・技法、評価手法などの検討。
第 11 回	研究と表現（報告資料作成方法の検討）	文章表現と論文記述法、プレゼンテーション法の検討。
第 12 回	研究と表現（文章表現の検討）	文章表現と論文記述法、プレゼンテーション法の検討。
第 13 回	報告とディスカッション（研究遂行状況の報告）	研究テーマに関する調査・検討内容の報告と討論。
第 14 回	報告とディスカッション（研究遂行状況の検討）	研究テーマに関する調査・検討内容の報告と討論。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は各 2 時間を標準とする。各々のテーマについて調査・検討をすすめる、報告の準備を行う。

【テキスト（教科書）】

使用しない。

【参考書】

開講時に指示する。

【成績評価の方法と基準】

報告内容および討論参加の積極性など 100%。

【学生の意見等からの気づき】

各々の研究の進捗状況を勘案しながら進度を柔軟に考えていく。

【学生が準備すべき機器他】

特になし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>非線形力学、物性理論、計算科学
<研究テーマ>カオスとフラクタル、交通流のダイナミクス

<主要研究業績> Dynamics of group motions controlled by signal processing: A cellular-automaton model and its applications, Communications in Nonlinear Science and Numerical Simulation 11(2006)pp.624-634. An extension of optimal-velocity model and dynamical transition in congested phase (I & II), Far East Journal of Dynamical Systems 16(2011)pp.71-86 & 17(2011)pp.1-15.

【Outline and objectives】

This is a seminar to accomplish research themes for each member of this class in the doctor's course. We will mainly discuss the following processes: decision of research theme, analysis of previous works, derivation of the points at issue, the presentation methods, and other points required. This seminar deals with the basic aspects in preparing doctor's thesis.

SES700P2 - 002

サステナビリティ特殊研究 1 B

渡邊 誠

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

「サステナビリティ特殊研究 1 A」に引き続き、研究活動を遂行し博士論文を執筆するために必要な事項について学ぶ。本科目では、受講者が研究者になるために必要な高度な事柄を修得することを念頭に置いている。研究テーマの選定と資料収集、先行研究の調査と分析、論点の整理と検証、論文技法と表現法などについて、1 A に続いてその基礎的な内容を修得する。

【到達目標】

専門学会等への投稿論文および博士論文を執筆するために必要な事柄について学ぶ。受講者は研究を遂行するための高度な基礎力をさらに身につけることができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連している。

【授業の進め方と方法】

本科目では対面形式で授業を進める。受講者はあらかじめ準備してきた内容について報告する。それをもとに参加者全員で検討を行っていく。受講者は各々の進捗状況に応じて個別指導も受けることになる。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	授業の方針、進め方について。
第 2 回	研究テーマ確認（再確認）	論点整理と視点の持ち方の検討、研究テーマの確認。
第 3 回	研究テーマ確認（再検討）	論点整理と視点の持ち方の検討、研究テーマの確認。
第 4 回	研究報告と討論（報告）	調査内容の報告、主張内容の提示とその検討。
第 5 回	研究報告と討論（確認と検討）	調査内容の報告、主張内容の提示とその検討。
第 6 回	研究報告と討論（論点整理）	調査内容の報告、主張内容の提示とその検討。
第 7 回	研究報告と討論（主張内容確認）	調査内容の報告、主張内容の提示とその検討。
第 8 回	研究報告と討論（主張内容整理）	調査内容の報告、主張内容の提示とその検討。
第 9 回	研究報告と討論（論理性の確認）	調査内容の報告、主張内容の提示とその検討。
第 10 回	研究報告と討論（課題整理）	調査内容の報告、主張内容の提示とその検討。
第 11 回	研究の総合的評価（新規性確認）	報告内容の新規性、有効性、社会的意義などの検討。
第 12 回	研究の総合的評価（有効性確認）	報告内容の新規性、有効性、社会的意義などの検討。
第 13 回	論文執筆の手法・技法（論文表現法の検討）	執筆法と表現の検討、先行研究との関連性などについて。
第 14 回	論文執筆の手法・技法（論文表現法の確認）	執筆法と表現の検討、先行研究との関連性などについて。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は各 2 時間を標準とする。各々のテーマについて調査・検討をすすめ報告の準備を行う。

【テキスト（教科書）】

使用しない。

【参考書】

開講時に指示する。

【成績評価の方法と基準】

報告内容および討論参加の積極性など 100%。

【学生の意見等からの気づき】

各々の研究の進捗状況を勘案しながら進度を柔軟に考えていく。

【学生が準備すべき機器他】

特になし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>非線形力学、物性理論、計算科学
<研究テーマ>カオスとフラクタル、交通流のダイナミクス

<主要研究業績> Dynamics of group motions controlled by signal processing: A cellular-automaton model and its applications, Communications in Nonlinear Science and Numerical Simulation 11(2006)pp.624-634. An extension of optimal-velocity model and dynamical transition in congested phase (I & II), Far East Journal of Dynamical Systems 16(2011)pp.71-86 & 17(2011)pp.1-15.

【Outline and objectives】

This is a seminar to accomplish research themes for each member of this class in the doctor's course. We will mainly discuss the following processes: decision of research theme, analysis of previous works, planning of investigation, derivation of the points at issue, the presentation methods, and other points required. This seminar is a developed subject from 1A.

SES700P2 - 003

サステナビリティ特殊研究2 A

武貞 稔彦

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

博士論文執筆のための演習指導

【到達目標】

博士課程2年生を対象とする本演習では、①博士論文執筆のために必要な調査研究（文献調査およびフィールド調査）の実施、②調査結果に基づく研究テーマ設定やリサーチエッセンスの再検討、③博士論文の適切なアウトライン作成を目標とします。またあわせて、学術誌等に発表する査読論文を執筆します。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連している。

【授業の進め方と方法】

各回の演習は、受講者からの進捗報告、教員および演習参加者からのコメントを中心にすすめます。論文執筆やリサーチの基礎的なスキルに関しては、紹介する文献などを通じて学びます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	到達目標としての「博士論文」を確認すると同時に、必要な調査、査読論文の執筆について学ぶ
第2回	調査研究と論文執筆の進捗報告（第1回）	演習参加者による調査研究および査読論文執筆に関する進捗報告と議論を行う（第1回）
第3回	調査研究と論文執筆の進捗報告（第2回）	演習参加者による調査研究および査読論文執筆に関する進捗報告と議論を行う（第2回）
第4回	調査研究と論文執筆の進捗報告（第3回）	演習参加者による調査研究および査読論文執筆に関する進捗報告と議論を行う（第3回）
第5回	調査研究と論文執筆の進捗報告（第4回）	演習参加者による調査研究および査読論文執筆に関する進捗報告と議論を行う（第4回）
第6回	調査研究と論文執筆の進捗報告（第5回）	演習参加者による調査研究および査読論文執筆に関する進捗報告と議論を行う（第5回）
第7回	調査研究と論文執筆の進捗報告（第6回）	演習参加者による調査研究および査読論文執筆に関する進捗報告と議論を行う（第6回）
第8回	調査研究と論文執筆の進捗報告（第7回）	演習参加者による調査研究および査読論文執筆に関する進捗報告と議論を行う（第7回）
第9回	調査研究と論文執筆の進捗報告（第8回）	演習参加者による調査研究および査読論文執筆に関する進捗報告と議論を行う（第8回）
第10回	調査研究と論文執筆の進捗報告（第9回）	演習参加者による調査研究および査読論文執筆に関する進捗報告と議論を行う（第9回）
第11回	調査研究と論文執筆の進捗報告（第10回）	演習参加者による調査研究および査読論文執筆に関する進捗報告と議論を行う（第10回）
第12回	調査研究と論文執筆の進捗報告（第11回）	演習参加者による調査研究および査読論文執筆に関する進捗報告と議論を行う（第11回）
第13回	調査研究と論文執筆の進捗報告（第12回）	演習参加者による調査研究および査読論文執筆に関する進捗報告と議論を行う（第12回）
第14回	調査研究と論文執筆の進捗報告（第13回）	演習参加者による調査研究および査読論文執筆に関する進捗報告と議論を行う（第13回）

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

演習参加者と協議のうえ、各回の参考文献を選定します。それらの参考文献（主に先行研究）の内容について熟読のうえ、自らの研究テーマについてよく考慮し、準備することが望まれます。

【テキスト（教科書）】

特に指定しません。必要に応じて資料を配布します。

【参考書】

随時紹介します。

【成績評価の方法と基準】

おおむね以下のバランスで総合的な成績評価を行います。演習における積極性と貢献度 60%、博士論文執筆準備の進捗状況 40%

【学生の意見等からの気づき】

少人数演習のため該当せず。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞ 開発の自然環境・社会環境への影響、開発援助、開発と倫理
 ＜研究テーマ＞ 「望ましい（望ましくない）「開発」とは何か」「ダム建設に伴う立ち退きと補償、生活再建」
 ＜主要研究業績＞

"Japanese Experience of Involuntary Resettlement: Long-Term Consequences of Resettlement for the Construction of the Ikawa Dam," *International Journal of Water Resources Development*, Routledge, Vol. 25, Issue 3, September 2009, pp. 419-430,

『開発介入と補償：ダム立ち退きをめぐる開発と正義論』勁草書房 2012 年,
 "Participation and diluted stakes in river management in Japan: the challenge of alternative constructions of resource governance" in Sato, J. ed., *Governance of Natural Resources: Uncovering the social purpose of materials in nature*. United Nations University Press, pp.141-161, July 2013

【Outline and objectives】

This is the second year seminar for authoring doctoral thesis. Students will be able to 1) implement required research (literature research and field research), to 2) review own research objectives and research questions in the thesis, and to 3) construct appropriate thesis structure.

SES700P2 - 004

サステナビリティ特殊研究2B

武貞 稔彦

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

博士論文執筆のための演習指導

【到達目標】

博士課程2年生を対象とする本演習では、①博士論文執筆のために必要な調査研究（文献調査およびフィールド調査）の実施、②調査結果に基づく研究テーマ設定やリサーチエッセンスの再検討、③博士論文の適切なアウトライン作成を目標とします。またあわせて、学術誌等に発表する査読論文を執筆します。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連している。

【授業の進め方と方法】

各回の演習は、受講者からの進捗報告、教員および演習参加者からのコメントを中心にすすめます。論文執筆やリサーチの基礎的なスキルに関しては、紹介する文献などを通じて学びます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	到達目標としての「博士論文」を確認すると同時に、必要な調査、査読論文の執筆について確認する
第2回	調査研究と論文執筆の進捗報告（第1回）	演習参加者による調査研究および査読論文執筆に関する進捗報告と議論を行う（第1回）
第3回	調査研究と論文執筆の進捗報告（第2回）	演習参加者による調査研究および査読論文執筆に関する進捗報告と議論を行う（第2回）
第4回	調査研究と論文執筆の進捗報告（第3回）	演習参加者による調査研究および査読論文執筆に関する進捗報告と議論を行う（第3回）
第5回	調査研究と論文執筆の進捗報告（第4回）	演習参加者による調査研究および査読論文執筆に関する進捗報告と議論を行う（第4回）
第6回	調査研究と論文執筆の進捗報告（第5回）	演習参加者による調査研究および査読論文執筆に関する進捗報告と議論を行う（第5回）
第7回	調査研究と論文執筆の進捗報告（第6回）	演習参加者による調査研究および査読論文執筆に関する進捗報告と議論を行う（第6回）
第8回	調査研究と論文執筆の進捗報告（第7回）	演習参加者による調査研究および査読論文執筆に関する進捗報告と議論を行う（第7回）
第9回	調査研究と論文執筆の進捗報告（第8回）	演習参加者による調査研究および査読論文執筆に関する進捗報告と議論を行う（第8回）
第10回	調査研究と論文執筆の進捗報告（第9回）	演習参加者による調査研究および査読論文執筆に関する進捗報告と議論を行う（第9回）
第11回	調査研究と論文執筆の進捗報告（第10回）	演習参加者による調査研究および査読論文執筆に関する進捗報告と議論を行う（第10回）
第12回	調査研究と論文執筆の進捗報告（第11回）	演習参加者による調査研究および査読論文執筆に関する進捗報告と議論を行う（第11回）
第13回	調査研究と論文執筆の進捗報告（第12回）	演習参加者による調査研究および査読論文執筆に関する進捗報告と議論を行う（第12回）
第14回	調査研究と論文執筆の進捗報告（第13回）	演習参加者による調査研究および査読論文執筆に関する進捗報告と議論を行う（第13回）

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

演習参加者と協議のうえ、各回の参考文献を選定します。それらの参考文献（主に先行研究）の内容について熟読のうえ、自らの研究テーマについてよく考慮し、準備することが望まれます。

【テキスト（教科書）】

特に指定しません。必要に応じて資料を配布します。

【参考書】

随時紹介します。

【成績評価の方法と基準】

おおむね以下のバランスで総合的な成績評価を行います。演習における積極性と貢献度 60%、博士論文執筆準備の進捗状況 40%

【学生の意見等からの気づき】

少人数演習のため該当せず。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 開発の自然環境・社会環境への影響、開発援助、開発と倫理
<研究テーマ> 「望ましい（望ましくない）「開発」とは何か」「ダム建設に伴う立ち退きと補償、生活再建」
<主要研究業績>

"Japanese Experience of Involuntary Resettlement: Long-Term Consequences of Resettlement for the Construction of the Ikawa Dam," *International Journal of Water Resources Development*, Routledge, Vol. 25, Issue 3, September 2009, pp. 419-430,

「開発介入と補償：ダム立ち退きをめぐる開発と正義論」勁草書房 2012 年, "Participation and diluted stakes in river management in Japan: the challenge of alternative constructions of resource governance" in Sato, J. ed., *Governance of Natural Resources: Uncovering the social purpose of materials in nature*. United Nations University Press, pp.141-161, July 2013

【Outline and objectives】

This is the second year seminar for authoring doctoral thesis. Students will be able to 1) implement required research (literature research and field research), to 2)review own research objectives and research questions in the thesis, and to 3)construct appropriate thesis structure.

サステイナビリティ特殊研究2A

藤倉 良

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

論文を執筆し、博士課程中間報告会に向けて準備を行う。

【到達目標】

論文を執筆する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連している。

【授業の進め方と方法】

毎週土曜日のゼミに出席し、他の院生の報告を聞くと共に、過去1週間の進捗状況を報告し、議論を行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	論文骨子案の確定	論文の骨子案を確定する。
第2回	論文執筆	論文の執筆を行う。
第3回	論文執筆	論文の執筆を行う。
第4回	論文執筆	論文の執筆を行う。
第5回	論文執筆	論文の執筆を行う。
第6回	論文執筆	論文の執筆を行う。
第7回	論文執筆	論文の執筆を行う。
第8回	論文執筆	論文の執筆を行う。
第9回	論文執筆	論文の執筆を行う。
第10回	論文執筆	論文の執筆を行う。
第11回	論文執筆	論文の執筆を行う。
第12回	論文執筆	論文の執筆を行う。
第13回	論文執筆	論文の執筆を行う。
第14回	中間報告会の準備	中間報告会の準備を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

次回のゼミまでに指示された作業を行うこと。

【テキスト（教科書）】

特に使用しない。

【参考書】

適宜指示する。

【成績評価の方法と基準】

論文の進捗状況（100%）

【学生の意見等からの気づき】

密接に連絡を取り合う。

【学生が準備すべき機器他】

特になし

【その他の重要事項】

特になし。

【Outline and objectives】

Preparation for writing an academic article.

SES700P2 - 004

サステイナビリティ特殊研究2B

藤倉 良

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

博士課程中間報告会に向けて準備を行う。

【到達目標】

博士課程中間報告会の準備を完了し、中間報告を行う。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連している。

【授業の進め方と方法】

毎週土曜日のゼミに出席し、他の院生の報告を聞くと共に、過去1週間の進捗状況を報告し、議論を行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	論文執筆	論文の執筆を行う。
第2回	論文執筆	論文の執筆を行う。
第3回	論文執筆	論文の執筆を行う。
第4回	論文執筆	論文の執筆を行う。
第5回	論文執筆	論文の執筆を行う。
第6回	論文執筆	論文の執筆を行う。
第7回	論文執筆	論文の執筆を行う。
第8回	論文執筆	論文の執筆を行う。
第9回	論文執筆	論文の執筆を行う。
第10回	中間報告会の準備	中間報告会の準備を行う。
第11回	中間報告会の準備	中間報告会の準備を行う。
第12回	中間報告会の準備	中間報告会の準備を行う。
第13回	論文執筆	中間報告会の評価を受け、論文の執筆を行う。
第14回	論文執筆	中間報告会の評価を受け、論文の執筆を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

次回のゼミまでに指示された作業を行うこと。

【テキスト（教科書）】

特に使用しない。

【参考書】

適宜指示する。

【成績評価の方法と基準】

論文の進捗状況（100%）

【学生の意見等からの気づき】

密接に連絡を取り合う。

【学生が準備すべき機器他】

特になし

【その他の重要事項】

特になし。

【Outline and objectives】

Preparation for internal mid-term review.

サステナビリティ特殊研究2A

宮川 路子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

テーマに基づいて文献調査を行い、論文執筆を開始する。また、博士課程中間報告会に向け準備を行う。

【到達目標】

博士論文の完成を目指してより内容を深めていく。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連している。

【授業の進め方と方法】

個別と受講者全体が集まる二つの形態による指導を行う。受講者が進めている研究内容について、その進捗状況を報告し、参加者全員で質疑・討論を行う。受講者全員が検討に参加することにより、研究がブラッシュアップされ、理解度が深まることを狙っている。

講義の方法は対面で行う予定である。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	論文骨子案の確定	論文の骨子案を確定する。
第2回	論文執筆(1)	論文の執筆を行う。
第3回	論文執筆(2)	論文の執筆を行う。
第4回	論文執筆(3)	論文の執筆を行う。
第5回	論文執筆(4)	論文の執筆を行う。
第6回	論文執筆(5)	論文の執筆を行う。
第7回	論文執筆(6)	論文の執筆を行う。
第8回	論文執筆(7)	論文の執筆を行う。
第9回	論文執筆(8)	論文の執筆を行う。
第10回	論文執筆(9)	論文の執筆を行う。
第11回	論文執筆(10)	論文の執筆を行う。
第12回	論文執筆(11)	論文の執筆を行う。
第13回	論文執筆(12)	論文の執筆を行う。
第14回	中間報告会の準備	中間報告会の準備を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

次のゼミまでに指示された作業を行うこと。

【テキスト（教科書）】

特に使用しない。

【参考書】

適宜指示する。

【成績評価の方法と基準】

平常点（10%）、論文の進捗状況（90%）

【学生の意見等からの気づき】

お互いにしっかりと連絡を取り、報告を心がける。

【学生が準備すべき機器他】

特になし

【その他の重要事項】

特になし。

【担当教員の専門分野等】

公衆衛生学、産業保健、分子整合栄養医学、統合医療、統計学

<研究テーマ> 栄養と健康、就労者のストレスと健康

<主要研究業績> Subjective social status: its determinants and association with health in the Swedish working population (the SLOSH study)

The European Journal of Public Health 2012年

ビタミンDの健康効果 人間環境論集 19巻号 79-101

日本の医療を含むサービス産業における過重労働の軽減化における課題：国民はサービスの質・量の低下を甘受することができるか 人間環境論集 20巻1号 1-17

<https://eiyouyohou.com/>

【Outline and objectives】

To prepare for writing an academic article.

SES700P2 - 004

サステナビリティ特殊研究2B

宮川 路子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

博士論文作成に向けて研究を行う

【到達目標】

博士論文の作成に向けて、テーマを定め、文献調査、実地調査などを行い、結果をまとめる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連している。

【授業の進め方と方法】

個別と受講者全体が集まる二つの形態による指導を行う。受講者が進めている研究内容について、その進捗状況を報告し、参加者全員で質疑・討論を行う。受講者全員が検討に参加することにより、研究がブラッシュアップされ、理解度が深まることを狙っている。

講義の方法は対面で行う予定である。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	研究テーマの検討	研究テーマについて検討し、定める。
第2回	関連文献のレビュー (1)	研究テーマに関する文献の調査を行い、研究内容を検討する。
第3回	関連文献のレビュー (2)	研究テーマに関する文献の調査を行い、研究内容を検討する。
第4回	関連文献のレビュー (3)	研究テーマに関する文献の調査を行い、研究内容を検討する。
第5回	関連文献のレビュー (4)	研究テーマに関する文献の調査を行い、研究内容を検討する。
第6回	調査の計画 (1)	調査を計画する
第7回	調査の計画 (2)	調査を計画する
第8回	調査の計画 (3)	調査を計画する
第9回	調査の実施 (1)	計画に基づいて調査を行う。
第10回	調査の実施 (2)	計画に基づいて調査を行う。
第11回	調査の実施 (3)	計画に基づいて調査を行う。
第12回	調査結果を解析する	調査結果について解析を行う。
第13回	調査結果の解析、まとめ	調査結果を解析し、まとめる。
第14回	レポートの発表	発表および質疑応答・議論を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

適宜紹介します。

【参考書】

適宜紹介します。

【成績評価の方法と基準】

論文の進捗状況（100%）

【学生の意見等からの気づき】

お互いにしっかりと連絡を取り合い、報告を心がける。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>公衆衛生学、産業保健、分子整合栄養医学、統合医療、統計学
<研究テーマ>働く人のストレス、女性就労問題、心と身体の栄養療法

【Outline and objectives】

Conduct research for doctoral theses.

SES700P2 - 005

サステナビリティ特殊研究3A

金藤 正直

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本演習では、サステナビリティ特殊研究 1A・1B および 2A・B で作成した博士論文の構成・内容（原案）に基づいて、論文内容を具体的に検討し、また、その検討結果を報告していく。また、その報告内容を参考にしながら、研究報告（学会報告や博士論文の中間報告）、博士論文（学会誌（研究誌）などへの投稿論文を含む）の作成を進めていくことを目的とする。

【到達目標】

本演習では、研究報告と博士論文の作成に行われる高度な研究・調査のために必要な論理力、分析・調査力、執筆力、説明力、質問力を習得することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連している。

【授業の進め方と方法】

本演習は対面で実施する。履修者には、サステナビリティ特殊研究 1A・1B および 2A・2B で作成した博士論文の構成・内容（原案）に基づいて、特定主体（家計、企業、自治体、地域、国など）における経営あるいは会計のモデルを検討してもらうとともに、このモデルの特長や問題点をアンケート調査、ヒアリング調査、ケーススタディから明らかにすることにより、同モデルの実践適用可能性や新たな見解を提案してもらう。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション	これまでに行ってきた研究・調査について報告するとともに、研究報告や、博士論文の作成までのスケジュールを確認する。
第 2 回～ 第 6 回	追加的作業の確認	研究報告や、博士論文の作成のために必要となる作業（アンケート調査、ケーススタディ、ヒアリング調査の実施など）を確認する。
第 7 回～ 第 14 回	博士論文の構成・内容 （原案）の再検討・再調整	これまでに行ってきた研究・調査の成果を、検討中の博士論文に反映させ、その内容を再検討し、再調整する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

研究内容に関係する著書・論文・報告書・新聞・雑誌記事などを読み、その分析・検討を計画的に行うとともに、その結果を研究報告や、博士論文の作成に反映させてください。

【テキスト（教科書）】

特に使用しませんが、毎回の報告ではワードあるいはパワーポイントを使用しますので、履修者はその報告レジュメの作成と配布をお願いします。

【参考書】

履修者の研究・調査の進捗状況に応じて、授業中に著書、研究論文、報告書、新聞・雑誌記事などを紹介します。

【成績評価の方法と基準】

本演習の成績は次の 4 点に基づいて評価します。

- ・ 討論への参加（発言内容）（10 %）
- ・ 報告用配布レジュメの内容（10 %）
- ・ 報告内容（プレゼンテーション能力）（30 %）
- ・ 研究報告、博士論文の内容（50 %）

【学生の意見等からの気づき】

毎年、意見や要望を考慮に入れ、講義内容を改善しています。

【学生が準備すべき機器他】

必要に応じてパソコンとプロジェクターを使用します。

【その他の重要事項】

質問などについては電子メールで連絡ください。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

環境経営論、地域経営論

<研究テーマ>

企業や地域の持続的成長を実現するための経営・会計手法に関する研究

<主要研究業績>

・ 金藤正直（2014）「地域サプライチェーンとしての産業クラスターのマネジメント-サプライチェーン・マネジメントの適用-」二神恭一・高山貢・高橋賢編著『地域再生のための経営と会計』中央経済社、41-52 頁。

- ・ 金藤正直（2015）「食料産業クラスターマネジメントを支援するバランス・スコアカードの構想」『産業経理』Vol.75 No.1、53-63 頁。
- ・ 金藤正直（2016）「サステナビリティ・サプライチェーン・マネジメントの実践的展開モデル」『横浜経営研究』第 37 巻第 2 号、55-72 頁。
- ・ 金藤正直（2018）「フードバレーの戦略的マネジメントを支援するバランス・スコアカードの適用可能性-フードバレーとかちの取組みを中心として-」『経済学論纂』第 58 巻第 2 号、65-84 頁。
- ・ 金藤正直（2021）「健康経営の展望-どう評価・開示するか？-」『企業会計』Vol.73 No.2、87-90 頁。

【Outline and objectives】

The purpose of this seminar is to write a doctoral thesis based on the results of previous research.

SES700P2 - 006

サステナビリティ特殊研究3B

金藤 正直

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本演習では、サステナビリティ特殊研究3Aで再調整した博士論文の構成・内容（原案）に基づいて、論文内容を具体的に再検討し、また、その結果を報告する。さらに、その報告内容に基づいて、博士論文の作成を進め、完成することを目的とする。

【到達目標】

本演習では、研究報告や、博士論文の作成に行われる高度な研究・調査のための論理力、分析・調査力、執筆力、説明力、質問力を習得することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連している。

【授業の進め方と方法】

本演習は対面で実施する。履修者には、サステナビリティ特殊研究3Aで再調整した博士論文の構成・内容（原案）に基づいて、「博士論文に関する報告 ⇒ 内容の作成 ⇒ 作成した内容の加筆修正」というプロセスを繰り返し、同論文を完成してもらう。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	これまでに行ってきた研究・調査について報告するとともに、博士論文の作成および完成までのスケジュールを確認する。
第2回～ 第3回	博士論文の構成・内容 (原案)の再検討	これまでに行ってきた研究・調査の結果を、検討中の博士論文に反映させ、その内容を再検討する。
第4回	博士論文の構成・内容の決定(決定案)	博士論文の構成を最終調整し、内容を決定する。
第5回～ 第13回	博士論文の構成・内容の報告、作成、加筆修正	第4回に基づいて、博士論文の構成・内容に関する報告とともに、その報告を参考にしながら内容を作成し、加筆修正を行う。
第14回	博士論文の微調整と完成	博士論文の構成・内容を微調整し、同論文を完成させる。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

研究内容に関係する著書・論文・報告書・新聞・雑誌記事などを読み、その分析・検討を計画的に行うとともに、その結果を研究報告や、博士論文の作成に反映させてください。

【テキスト（教科書）】

特に使用しませんが、毎回の報告ではワードあるいはパワーポイントを使用しますので、履修者はその報告レジュメの作成と配布をお願いします。

【参考書】

履修者の研究・調査の進捗状況に応じて、授業中に著書、研究論文、報告書、新聞・雑誌記事などを紹介します。

【成績評価の方法と基準】

本演習の成績は次の4点に基づいて評価します。

- ・ 討論への参加（発言内容）（10%）
- ・ 報告用配布レジュメの内容（10%）
- ・ 報告内容（プレゼンテーション能力）（20%）
- ・ 博士論文の内容（60%）

【学生の意見等からの気づき】

毎年、意見や要望を考慮に入れ、講義内容を改善しています。

【学生が準備すべき機器他】

必要に応じてパソコンとプロジェクターを使用します。

【その他の重要事項】

質問などについては電子メールで連絡ください。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

環境経営論、地域経営論

<研究テーマ>

企業や地域の持続的成長を実現するための経営・会計手法に関する研究

<主要研究業績>

・ 金藤正直（2014）「地域サプライチェーンとしての産業クラスターのマネジメント-サプライチェーン・マネジメントの適用-」二神恭一・高山貢・高橋賢編著『地域再生のための経営と会計』中央経済社、41-52頁。

- ・ 金藤正直（2015）「食料産業クラスターマネジメントを支援するバランス・スコアカードの構想」『産業経理』Vol.75 No.1、53-63頁。
- ・ 金藤正直（2016）「サステナビリティ・サプライチェーン・マネジメントの実践的展開モデル」『横浜経営研究』第37巻第2号、55-72頁。
- ・ 金藤正直（2018）「フードバレーの戦略的マネジメントを支援するバランス・スコアカードの適用可能性-フードバレーとかちの取組みを中心として-」『経済学論纂』第58巻第2号、65-84頁。
- ・ 金藤正直（2021）「健康経営の展望-どう評価・開示するか？-」『企業会計』Vol.73 No.2、87-90頁。

【Outline and objectives】

The purpose of this seminar is to complete a doctoral thesis.

SES700P2 - 005

サステナビリティ特殊研究3A

杉戸 信彦

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

博士論文作成に向け、研究および議論を行う。

【到達目標】

博士論文の作成に向け、課題を発見し、解決に向けた調査を実施して、その成果を期末レポートとしてとりまとめる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連している。

【授業の進め方と方法】

対面授業を予定している。

研究の方向性を決め、文献レビュー等を行いながら研究テーマを具体的に定める。そのうえで、文献レビュー等をすすめながら調査計画を立案し、調査を実施してとりまとめを行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	研究の方向性の検討(1)	研究の方向性について検討を行う。
第2回	研究の方向性の検討(2)	研究の方向性について検討を行い決定する。
第3回	関連文献のレビュー(1)	研究予定内容に関する文献のレビューを行う。
第4回	関連文献のレビュー(2)	研究予定内容に関する文献のレビューを行う。
第5回	研究テーマの検討	研究の方向性についてあらためて検討を行い、研究テーマを具体的に定める。
第6回	関連文献のレビュー(3)	研究テーマに関する文献のレビューを行い、研究内容を検討する。
第7回	関連文献のレビュー(4)	研究テーマに関する文献のレビューを行い、研究内容を検討する。
第8回	調査計画の立案(1)	研究内容に応じた独自の調査計画を検討する。
第9回	調査計画の立案(2)	研究内容に応じた独自の調査計画を検討する。
第10回	調査結果のまとめ(1)	調査結果を報告し、まとめに向けた検討を行う。
第11回	調査結果のまとめ(2)	調査結果を報告し、まとめに向けた検討を行う。
第12回	調査計画の立案(3)	研究内容に応じた独自の調査計画を検討する。
第13回	調査結果のまとめ(3)	調査結果を報告し、まとめに向けた検討を行う。
第14回	レポートの発表	発表および質疑応答・議論を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

調査や準備、とりまとめ作業等に取り組む（授業時間は発表や議論が中心となるため）。

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

授業中に紹介

【参考書】

授業中に紹介

【成績評価の方法と基準】

平常点(50%)・期末レポート(50%)。平常点は研究への取り組みの状況等をもとに評価する。期末レポートは、調査の状況、また構成や論理の整ったレポートかどうか等をもとに評価する。

【学生の意見等からの気づき】

応用力や思考力、スキルなどの涵養を心がける。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>自然地理学、自然災害

<研究テーマ>変動地形、活断層、地震、土地条件

<主要研究業績>

1) 杉戸信彦, 2014. 大地震の歴史とメカニズムを捉えるー活断層への地理学的アプローチ. 木村周平・杉戸信彦・柄谷由香編, 「災害フィールドワーク論」, FENICS100 万人のフィールドワーカーシリーズ 5, 古今書院, 212p, 132-149.

2) 杉戸信彦・松多信尚・石黒聡士・内田主税・千田良道・鈴木康弘, 2015. 津波浸水域データと数値標高モデルのGIS解析に基づく2011年東北地方太平洋沖地震の津波遡上高の空間分布, 地学雑誌, 124, 157-176. doi: 10.5026/jgeography.124.157

3) Sugito, N., H. Sawa, K. Taniguchi, Y. Sato, M. Watanabe, and Y. Suzuki, 2019, Evolution of Riedel-shear pop-up structures during cumulative strike-slip faulting: A case study in the Misayama-Godo area, Fujimi Town, central Japan, Geomorphology, 327, 446-455. doi: 10.1016/j.geomorph.2018.11.026

【Outline and objectives】

We conduct research and discussion for doctoral theses.

SES700P2 - 006

サステナビリティ特殊研究3B

杉戸 信彦

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

博士論文作成に向け、研究および議論を行う。

【到達目標】

博士論文の作成に向け、課題を発見し、解決に向けた調査を実施して、その成果を期末レポートとしてとりまとめる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連している。

【授業の進め方と方法】

対面授業を予定している。

研究テーマを具体的に定め、文献レビュー等を行いながら調査計画を立案し、調査を実施してとりまとめるを行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり/Yes

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	研究テーマの検討	研究テーマについて検討を行い、具体的に定める。
第2回	関連文献のレビュー（1）	研究テーマに関する文献のレビューを行い、研究内容を検討する。
第3回	関連文献のレビュー（2）	研究テーマに関する文献のレビューを行い、研究内容を検討する。
第4回	調査計画の立案（1）	研究内容に応じた独自の調査計画を検討する。
第5回	調査計画の立案（2）	研究内容に応じた独自の調査計画を検討する。
第6回	調査結果のまとめ（1）	調査結果を報告し、まとめに向けた検討を行う。
第7回	調査結果のまとめ（2）	調査結果を報告し、まとめに向けた検討を行う。
第8回	関連文献のレビュー（3）	研究テーマに関する文献のレビューを行い、研究内容を検討する。
第9回	関連文献のレビュー（4）	研究テーマに関する文献のレビューを行い、研究内容を検討する。
第10回	調査計画の立案（3）	研究内容に応じた独自の調査計画を検討する。
第11回	調査結果のまとめ（3）	調査結果を報告し、まとめに向けた検討を行う。
第12回	調査計画の立案（4）	研究内容に応じた独自の調査計画を検討する。
第13回	調査結果のまとめ（4）	調査結果を報告し、まとめに向けた検討を行う。
第14回	レポートの発表	発表および質疑応答・議論を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

調査や準備、とりまとめ作業等に取り組む（授業時間は発表や議論が中心となるため）。

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

授業中に紹介

【参考書】

授業中に紹介

【成績評価の方法と基準】

平常点（50%）・期末レポート（50%）。平常点は研究への取り組みの状況等をもとに評価する。期末レポートは、調査の状況、また構成や論理の整ったレポートかどうか等をもとに評価する。

【学生の意見等からの気づき】

応用力や思考力、スキルなどの涵養を心がける。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>自然地理学、自然災害

<研究テーマ>変動地形、活断層、地震、土地条件

<主要研究業績>

1) 杉戸信彦, 2014, 大地震の歴史とメカニズムを捉えるー活断層への地理学的アプローチ-, 木村周平・杉戸信彦・柄谷由香編, 「災害フィールドワーク論」, FENICS100 万人のフィールドワーカーシリーズ 5, 古今書院, 212p, 132-149.

2) 杉戸信彦・松多信尚・石黒聡士・内田主税・千田良道・鈴木康弘, 2015, 津波浸水域データと数値標高モデルのGIS解析に基づく2011年東北地方太平洋沖地震の津波遡上高の空間分布, 地学雑誌, 124, 157-176. doi: 10.5026/jgeography.124.157

3) Sugito, N., H. Sawa, K. Taniguchi, Y. Sato, M. Watanabe, and Y. Suzuki, 2019, Evolution of Riedel-shear pop-up structures during cumulative strike-slip faulting: A case study in the Misayama-Godo area, Fujimi Town, central Japan, Geomorphology, 327, 446-455. doi: 10.1016/j.geomorph.2018.11.026

【Outline and objectives】

We conduct research and discussion for doctoral theses.

SES700P2 - 005

サステナビリティ特殊研究3A

武貞 稔彦

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

博士論文執筆のための演習指導

【到達目標】

博士課程3年生を対象とする本演習では、各演習参加者が必要なリサーチを行ない、実際に博士論文を執筆、完成させると同時に的確な報告ができるようになることを目標とします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連している。

【授業の進め方と方法】

各回の演習は、受講者からの進捗報告、教員および演習参加者からのコメントを中心にすすめます。その過程で報告や発表（プレゼンテーション）の技術についても学ぶ機会が得られます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	博士論文執筆と進捗報告（第1回）	演習参加者による博士論文執筆状況の報告と内容の検討を行う。（第1回）
第2回	博士論文執筆と進捗報告（第2回）	演習参加者による博士論文執筆状況の報告と内容の検討を行う。（第2回）
第3回	博士論文執筆と進捗報告（第3回）	演習参加者による博士論文執筆状況の報告と内容の検討を行う。（第3回）
第4回	博士論文執筆と進捗報告（第4回）	演習参加者による博士論文執筆状況の報告と内容の検討を行う。（第4回）
第5回	博士論文執筆と進捗報告（第5回）	演習参加者による博士論文執筆状況の報告と内容の検討を行う。（第5回）
第6回	博士論文執筆と進捗報告（第6回）	演習参加者による博士論文執筆状況の報告と内容の検討を行う。（第6回）
第7回	博士論文執筆と進捗報告（第7回）	演習参加者による博士論文執筆状況の報告と内容の検討を行う。（第7回）
第8回	博士論文執筆と進捗報告（第8回）	演習参加者による博士論文執筆状況の報告と内容の検討を行う。（第8回）
第9回	博士論文執筆と進捗報告（第9回）	演習参加者による博士論文執筆状況の報告と内容の検討を行う。（第9回）
第10回	博士論文執筆と進捗報告（第10回）	演習参加者による博士論文執筆状況の報告と内容の検討を行う。（第10回）
第11回	博士論文執筆と進捗報告（第11回）	演習参加者による博士論文執筆状況の報告と内容の検討を行う。（第11回）
第12回	博士論文執筆と進捗報告（第12回）	演習参加者による博士論文執筆状況の報告と内容の検討を行う。（第12回）
第13回	博士論文執筆と進捗報告（第13回）	演習参加者による博士論文執筆状況の報告と内容の検討を行う。（第13回）

第14回 博士論文執筆と進捗報告（第14回） 演習参加者による博士論文執筆状況の報告と内容の検討を行う。（特に中間報告に向けた発表準備）（第14回）

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

演習参加者との協議を通じて、博士論文執筆の進捗管理を行います。参加者は自ら執筆計画を立て、それに従って論文執筆をすすめて下さい。必要な先行研究事例のレビューや、フィールド調査も並行して実施することとなります。また、外部学会での発表も実施を目指します。

【テキスト（教科書）】

特に指定しません。必要に応じて資料を配布します。

【参考書】

随時紹介します。

【成績評価の方法と基準】

おおむね以下のバランスで総合的な成績評価を行います。博士論文（内容およびプレゼンテーション）70%、演習における積極性と貢献度30%

【学生の意見等からの気づき】

少人数演習のため該当せず。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 開発の自然環境・社会環境への影響、開発援助、開発と倫理

<研究テーマ> 「望ましい（望ましくない）「開発」とは何か」「ダム建設に伴う立ち退きと補償、生活再建」

<主要研究業績>

"Japanese Experience of Involuntary Resettlement: Long-Term Consequences of Resettlement for the Construction of the Ikawa Dam," *International Journal of Water Resources Development*, Routledge, Vol. 25, Issue 3, September 2009, pp. 419- 430,

『開発介入と補償：ダム立ち退きをめぐる開発と正義論』勁草書房2012年、

"Participation and diluted stakes in river management in Japan: the challenge of alternative constructions of resource governance" in Sato, J. ed., *Governance of Natural Resources: Uncovering the social purpose of materials in nature*. United Nations University Press, pp.141-161, July 2013

【Outline and objectives】

This is the third year seminar for authoring doctoral thesis. Students will be able to 1) write his/her doctor thesis and to 2) make appropriate presentation for an academic audiences.

SES700P2 - 006

サステナビリティ特殊研究3B

武貞 稔彦

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

博士論文執筆のための演習指導

【到達目標】

博士課程3年生を対象とする本演習では、各演習参加者が必要なリサーチを行ない、実際に博士論文を執筆、完成させると同時に的確な報告ができるようになることを目標とします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連している。

【授業の進め方と方法】

各回の演習は、受講者からの進捗報告、教員および演習参加者からのコメントを中心にすすめます。その過程で報告や発表（プレゼンテーション）の技術についても学ぶ機会が得られます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	博士論文執筆と進捗報告（第1回）	演習参加者による博士論文執筆状況の報告と内容の検討を行う。（第1回）
第2回	博士論文執筆と進捗報告（第2回）	演習参加者による博士論文執筆状況の報告と内容の検討を行う。（第2回）
第3回	博士論文執筆と進捗報告（第3回）	演習参加者による博士論文執筆状況の報告と内容の検討を行う。（第3回）
第4回	博士論文執筆と進捗報告（第4回）	演習参加者による博士論文執筆状況の報告と内容の検討を行う。（第4回）
第5回	博士論文執筆と進捗報告（第5回）	演習参加者による博士論文執筆状況の報告と内容の検討を行う。（第5回）
第6回	博士論文執筆と進捗報告（第6回）	演習参加者による博士論文執筆状況の報告と内容の検討を行う。（第6回）
第7回	博士論文執筆と進捗報告（第7回）	演習参加者による博士論文執筆状況の報告と内容の検討を行う。（第7回）
第8回	博士論文執筆と進捗報告（第8回）	演習参加者による博士論文執筆状況の報告と内容の検討を行う。（第8回）
第9回	博士論文執筆と進捗報告（第9回）	演習参加者による博士論文執筆状況の報告と内容の検討を行う。（第9回）
第10回	博士論文執筆と進捗報告（第10回）	演習参加者による博士論文執筆状況の報告と内容の検討を行う。（第10回）
第11回	博士論文執筆と進捗報告（第11回）	演習参加者による博士論文執筆状況の報告と内容の検討を行う。（第11回）
第12回	博士論文執筆と進捗報告（第12回）	演習参加者による博士論文執筆状況の報告と内容の検討を行う。（第12回）
第13回	博士論文執筆と進捗報告（第13回）	演習参加者による博士論文執筆状況の報告と内容の検討を行う。（第13回）

第14回 博士論文執筆と進捗報告（第14回）

演習参加者による博士論文執筆状況の報告と内容の検討を行う。（特に最終発表に向けた発表準備）（第14回）

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

演習参加者との協議を通じて、博士論文執筆の進捗管理を行います。参加者は自ら執筆計画を立て、それに従って論文執筆をすすめて下さい。必要な先行研究事例のレビューや、フィールド調査も並行して実施することとなります。また、外部学会での発表も実施を目指します。

【テキスト（教科書）】

特に指定しません。必要に応じて資料を配布します。

【参考書】

随時紹介します。

【成績評価の方法と基準】

おおむね以下のバランスで総合的な成績評価を行います。博士論文（内容およびプレゼンテーション）70%、演習における積極性と貢献度30%

【学生の意見等からの気づき】

少人数演習のため該当せず。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 開発の自然環境・社会環境への影響、開発援助、開発と倫理

<研究テーマ> 「望ましい（望ましくない）「開発」とは何か」「ダム建設に伴う立ち退きと補償、生活再建」

<主要研究業績>

"Japanese Experience of Involuntary Resettlement: Long-Term Consequences of Resettlement for the Construction of the Ikawa Dam," *International Journal of Water Resources Development*, Routledge, Vol. 25, Issue 3, September 2009, pp. 419- 430,

『開発介入と補償：ダム立ち退きをめぐる開発と正義論』勁草書房2012年、

"Participation and diluted stakes in river management in Japan: the challenge of alternative constructions of resource governance" in Sato, J. ed., *Governance of Natural Resources: Uncovering the social purpose of materials in nature*. United Nations University Press, pp.141-161, July 2013

【Outline and objectives】

This is a third year seminar for authoring doctoral thesis. Students will be able to 1) write his/her doctor thesis and to 2) make appropriate presentation for an academic audiences.

サステナビリティ特殊研究3A

長谷川 直哉

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

博士論文の完成に向けた演習はもとより、学会での研究発表や査読付き学術誌への論文投稿の準備、中間報告に向けた事前準備を計画的かつ着実に進めるための指導を行ないます。中間報告会終了後には、教員からの助言や批判点を整理した上で、論文改善へのフィードバック作業を進めます。

【到達目標】

博士論文全体構想の提示と、博士論文を構成する主要論点となる論文の提出とそれに基づいた報告が求められます。中間報告会における複数の教員による質疑および助言、批判、評価を通して、質の高い博士論文執筆に向けての高度な専門知識を身につけることを目的とします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連している。

【授業の進め方と方法】

受講者には論文もしくはそれに準ずる文章を提出を求め、中間報告会に向けた準備を行います。中間報告会終了後は複数の教員による助言や批判を踏まえて、論点や研究方法の質を高めるよう指導します。中間報告会には、報告をしない博士課程大学院生も全員参加することを求めます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

なし/No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	博士論文全体構想の提示と検討①	「研究計画書」、「サーベイ論文」、論文構成に基づき、博士論文全体の構想について報告
第2回	博士論文全体構想の提示と検討②	「研究計画書」、「サーベイ論文」、論文構成に基づき、博士論文全体の構想について報告
第3回	主要論点についての報告①	全体構想に基づく博士論文の主要章を報告
第4回	主要論点についての報告②	全体構想に基づく博士論文の主要章を報告
第5回	主要論点についての報告③	全体構想に基づく博士論文の主要章を報告
第6回	博士課程プレ中間報告①	博士課程の中間報告会の発表内容を報告
第7回	博士課程プレ中間報告②	博士課程の中間報告会の発表内容を報告
第8回	学会の研究発表の構想提示と検討①	学会での研究発表に向けた構想を報告。
第9回	学会の研究発表の構想提示と検討②	学会での研究発表に向けた構想を報告。
第10回	「全体構想の提示と主要章（論文）」の再検討①	中間報告会での指摘事項に基づき、「全体構想と主要章（論文）」を再検討
第11回	「全体構想の提示と主要章（論文）」の再検討②	中間報告会での指摘事項に基づき、「全体構想と主要章（論文）」を再検討
第12回	「全体構想の提示と主要章（論文）」の再検討③	中間報告会での指摘事項に基づき、「全体構想と主要章（論文）」を再検討
第13回	投稿論文（学術誌）の構想の提示と検討①	博士論文の申請に必要な査読雑誌に投稿する論文の検討

第14回 投稿論文（学術誌）の博士論文の申請に必要な査読雑誌構想の提示と検討② に投稿する論文の検討

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

学生は博士論文の執筆に必要な最新研究を事前に整理しておくことが求められます。授業で指摘された点を復習し論点の整理を行ないます。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

特に使用しません。

【参考書】

受講者のテーマに応じて授業内で適宜紹介します。

【成績評価の方法と基準】

研究報告：80%

討議への貢献度：20%

【学生の意見等からの気づき】

毎回の講義で学生からの意見を聴取し、授業や論文指導に随時反映させていきます。

【学生が準備すべき機器他】

必要に応じてパソコンを使用します。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

サステナブル経営・企業倫理・責任投資・ビジネスヒストリー

<研究テーマ>

企業と社会のサステナビリティ

<主要研究業績>

『企業社会の変容と共通価値の創造』『損害保険研究第76巻第3号』

2014年

『利益の質保証－企業価値評価を巡る投資家の責任－』『日本経営倫理学会誌第20号』2013年

【実務経験】

損害保険会社の資産運用部門において、約15年間投資業務を担当しました。1999年、ESG投資の先駆的な取り組みであるSRI（社会的責任投資）ファンドを組成し、ファンドマネジャーとして企業のESG（非財務）側面を評価する手法を開発しました。また、（公財）国際金融情報センターに出向し、カントリーリストや国際金融システムに関する調査・研究に従事しました。

【関連資格】

日本証券アナリスト協会認定アナリスト（CMA）

【Outline and objectives】

In this class, students will prepare for the completion of a doctoral dissertation, prepare a research presentation at an academic conference, submit a paper to a peer-reviewed journal, and provide guidance to advance systematically and steadily for interim reports. After the interim report meeting, we will give advice and criticisms from faculty members and provide feedback to improve the dissertation.

SES700P2 - 006

サステナビリティ特殊研究3B

長谷川 直哉

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この授業では、サステナビリティ経営（含む CSR）、企業倫理、ESG 投資（含む SRI）、ビジネスヒストリーなどの領域を中心に、博士論文の完成に向けた指導を行ないます。

【到達目標】

この授業では、博士論文執筆に必要な学会発表や査読論文の執筆が可能となるレベルまでのスキルアップを目指します。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連している。

【授業の進め方と方法】

受講者が無理なく博士論文の執筆できるように、個人別のスケジュールを作成し論文指導を行ないます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし/No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	博士論文全体構想の提示と検討①	「研究計画書」、「サーベイ論文」、論文構成」に基づき、博士論文全体の構想について報告
第 2 回	博士論文全体構想の提示と検討②	「研究計画書」、「サーベイ論文」、論文構成」に基づき、博士論文全体の構想について報告
第 3 回	博士論文全体構想の提示と検討③	「研究計画書」、「サーベイ論文」、論文構成」に基づき、博士論文全体の構想について報告
第 4 回	博士論文全体構想の提示と検討④	「研究計画書」、「サーベイ論文」、論文構成」に基づき、博士論文全体の構想について報告
第 5 回	博士論文全体構想の提示と検討⑤	「研究計画書」、「サーベイ論文」、論文構成」に基づき、博士論文全体の構想について報告
第 6 回	主要論点についての報告①	全体構想に基づく博士論文の主要章を報告
第 7 回	主要論点についての報告②	全体構想に基づく博士論文の主要章を報告
第 8 回	主要論点についての報告③	全体構想に基づく博士論文の主要章を報告
第 9 回	主要論点についての報告④	全体構想に基づく博士論文の主要章を報告
第 10 回	博士課程プレ中間報告	博士課程の中間報告会の発表内容報告
第 11 回	学会の研究発表の構想提示と検討①	学会での研究発表に向けた構想を報告。
第 12 回	学会の研究発表の構想提示と検討②	学会での研究発表に向けた構想を報告。
第 13 回	「全体構想の提示と主要章（論文）」の再検討①	中間報告会での指摘事項に基づき、「全体構想と主要章（論文）」を再検討
第 14 回	「全体構想の提示と主要章（論文）」の再検討②	中間報告会での指摘事項に基づき、「全体構想と主要章（論文）」を再検討

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

学生は博士論文の執筆に必要な最新研究を事前に整理しておくことが求められます。授業で指摘された点を復習し論点の整理を行ないます。本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

特定のテキストは使用しません。

【参考書】

受講者のテーマに応じて授業内で適宜紹介します。

【成績評価の方法と基準】

報告内容：80%

討議への貢献度：20%

【学生の意見等からの気づき】

毎回の講義で学生からの意見を聴取し、授業や論文指導に随時反映させています。

【学生が準備すべき機器他】

パソコン

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

サステナブル経営・企業倫理・責任投資・ビジネスヒストリー

<研究テーマ>

企業と社会のサステナビリティ

<主要研究業績>

「企業社会の変容と共通価値の創造」『損害保険研究第 76 巻第 3 号』2014 年

「利益の質保証－企業価値評価を巡る投資家の責任－」『日本経営倫理学会誌第 20 号』2013 年

【実務経験】

損害保険会社の資産運用部門において、約 15 年間投資業務を担当しました。1999 年、ESG 投資の先駆的な取り組みである SRI（社会的責任投資）ファンドを組成し、ファンドマネージャーとして企業の ESG（非財務）側面を評価する手法を開発しました。また、（公財）国際金融情報センターに出向し、カントリーリストや国際金融システムに関する調査・研究に従事しました。

【関連資格】

日本証券アナリスト協会認定アナリスト（CMA）

【Outline and objectives】

In this class, guidance will be given toward the completion of a doctoral dissertation in areas such as sustainability management (including CSR), corporate ethics, ESG investment (including SRI), and business history.

SES700P2 - 005

サステナビリティ特殊研究3A

藤倉 良

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

博士論文を完成させる

【到達目標】

査読付き論文が採択される

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連している。

【授業の進め方と方法】

毎週土曜日のゼミに出席し、他の院生の報告を聞くと共に、過去1週間の進捗状況を報告し、議論を行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	論文執筆	論文の執筆を行う。
第2回	論文執筆	論文の執筆を行う。
第3回	論文執筆	論文の執筆を行う。
第4回	論文執筆	論文の執筆を行う。
第5回	論文執筆	論文の執筆を行う。
第6回	論文執筆	論文の執筆を行う。
第7回	論文執筆	論文の執筆を行う。
第8回	論文執筆	論文の執筆を行う。
第9回	論文執筆	論文の執筆を行う。
第10回	論文投稿	査読付き学術誌に論文を投稿する。
第11回	論文投稿	論文の執筆を行う。
第12回	論文投稿	論文の執筆を行う。
第13回	論文執筆	論文の執筆を行う。
第14回	論文執筆	論文の執筆を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

次回のゼミまでに指示された作業を行うこと。

【テキスト（教科書）】

特に使用しない。

【参考書】

適宜指示する。

【成績評価の方法と基準】

論文の進捗状況（100%）

【学生の意見等からの気づき】

密接に連絡を取り合う。

【学生が準備すべき機器他】

特になし

【その他の重要事項】

特になし。

【これまでに採択された博士後期課程院生の査読付き論文】

- 西山照美(2019) 中国の自動車リサイクル産業における課題：日本の経験との比較から、公共政策志林,7,115-127
- Naoya Tsukamoto and Ryo Fujikura (2018) Evaluation of Japan's Policy for CO2 Reduction at the First Commitment Period of the Kyoto Protocol, International Journal of Environmental Science and Development, Vol.9, No.12 pp.368-374, doi: 10.18178/ijesd.2018.9.12.1131
- 庄子真憲 (2018) 東京23区における不統一なプラスチック製容器包装の分別収集、公共政策志林、第6号、pp.163-176
- 塚本直也、藤倉良(2018) 京都議定書による日本の温室効果ガス排出削減結果から得られる教訓、公共政策志林、第6号、pp.177-186
- Masami Tsuji and Ryo Fujikura (2016) Safeguard Implementation of by Regional Development Banks - On Involuntary Resettlement - , Proceedings - Final Reviewed Papers, 36th Annual Conference of the International Association for Impact Assessment, 11-14 May 2016, Aichi-Nagoya, Japan, <http://conferences.iaia.org/2016/final-papers.php>
- 澤津直也、松本礼史、藤倉良(2016) 中国における自動車リサイクル産業の収益構造：日本の経験との比較から、公共政策志林、第4号、95 - 115 頁
- 辻昌実、藤倉良(2016) アジア開発銀行の住民移転政策実施上の課題－異議申立プロジェクトの事例分析、公共政策志林、第4号、117 - 134 頁
- Tetsuo Kida and Ryo Fujikura (2015) Pollution Risks Accompanied with Economic Integration of ASEAN Countries and the Fragmentation of Production Processes, International Journal of Social Science Studies, Vol.3, No.5, 76-86, DOI: 10.11114/ijsss.v3i5.915

9.Kanako Mukai and Ryo Fujikura (2015) One village one product: evaluations and lessons learnt from OVOP aid projects, Development in Practice, 25:3, 389-400, DOI: 10.1080/09614524.2015.1020763

10. 澤津直也、藤倉良(2015) 大気汚染指数からみた中国の大気汚染の状況と評価のあり方に関する一考察、公共政策志林、第3号、155 - 161 頁

11.Tetsuo Kida and Ryo Fujikura (2014) A chance in Myanmar induced by the minimum wage policy in Thailand: A case study of Myawaddy industrial area, International Journal of Social Science Studies, Vol.3, No.1, pp.38-46

12. 向井加奈子、藤倉良(2014) 一村一品運動の継続を可能にする要因、公共政策志林、第2号、87 - 100 頁

【Outline and objectives】

Completion of doctoral dissertation.

SES700P2 - 006

サステナビリティ特殊研究3B

藤倉 良

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

博士論文を完成させる。

【到達目標】

博士論文を完成させ、公開審査会に合格する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連している。

【授業の進め方と方法】

毎週土曜日のゼミに出席し、他の院生の報告を聞くと共に、過去 1 週間の進捗状況を報告し、議論を行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	論文執筆	論文の執筆を行う。
第 2 回	論文執筆	論文の執筆を行う。
第 3 回	論文執筆	論文の執筆を行う。
第 4 回	論文執筆	論文の執筆を行う。
第 5 回	論文執筆	論文の執筆を行う。
第 6 回	論文執筆	博士論文を提出する。
第 7 回	公開審査会の準備	公開審査会の準備を行う。
第 8 回	公開審査会の準備	公開審査会の準備を行う。
第 9 回	公開審査会の準備	公開審査会の準備を行う。
第 10 回	公開審査会の準備	公開審査会の準備を行う。
第 11 回	公開審査会の準備	公開審査会の準備を行う。
第 12 回	公開審査会の準備	公開審査会の準備を行う。
第 13 回	公開審査会の準備	公開審査会の準備を行う。
第 14 回	公開審査会	公開審査会に臨む。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

次回のゼミまでに指示された作業を行うこと。

【テキスト（教科書）】

特に使用しない。

【参考書】

適宜指示する。

【成績評価の方法と基準】

論文の進捗状況（100 %）

【学生の意見等からの気づき】

密接に連絡を取り合う。

【学生が準備すべき機器他】

特になし

【その他の重要事項】

特になし。

【これまでの博士号取得者】

5名

【Outline and objectives】

Completion of doctoral dissertation

サステナビリティ特殊研究3A

宮川 路子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

テーマに基づいて文献調査を行い、論文執筆を開始する。また、博士課程中間報告会に向け準備を行う。

【到達目標】

博士論文の完成を目指してより内容を深めていく。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連している。

【授業の進め方と方法】

個別と受講者全体が集まる二つの形態による指導を行う。受講者が進めている研究内容について、その進捗状況を報告し、参加者全員で質疑・討論を行う。受講者全員が検討に参加することにより、研究がブラッシュアップされ、理解度が深まることを狙っている。

講義の方法は対面で行う予定である。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	論文骨子案の確定	論文の骨子案を確定する。
第2回	論文執筆(1)	論文の執筆を行う。
第3回	論文執筆(2)	論文の執筆を行う。
第4回	論文執筆(3)	論文の執筆を行う。
第5回	論文執筆(4)	論文の執筆を行う。
第6回	論文執筆(5)	論文の執筆を行う。
第7回	論文執筆(6)	論文の執筆を行う。
第8回	論文執筆(7)	論文の執筆を行う。
第9回	論文執筆(8)	論文の執筆を行う。
第10回	論文執筆(9)	論文の執筆を行う。
第11回	論文執筆(10)	論文の執筆を行う。
第12回	論文執筆(11)	論文の執筆を行う。
第13回	論文執筆(12)	論文の執筆を行う。
第14回	中間報告会の準備	論文の執筆を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

次のゼミまでに指示された作業を行うこと。

【テキスト（教科書）】

特に使用しない。

【参考書】

適宜指示する。

【成績評価の方法と基準】

平常点（10%）、論文の進捗状況（90%）

【学生の意見等からの気づき】

お互いにしっかりと連絡を取り、報告を心がける。

【学生が準備すべき機器他】

特になし

【その他の重要事項】

特になし。

【担当教員の専門分野等】

公衆衛生学、産業保健、分子整合栄養医学、統合医療、統計学

<研究テーマ>栄養と健康、就労者のストレスと健康

<主要研究業績> Subjective social status: its determinants and association with health in the Swedish working population (the SLOSH study)

The European Journal of Public Health 2012年

ビタミンDの健康効果 人間環境論集 19巻号 79-101

日本の医療を含むサービス産業における過重労働の軽減化における課題：国民はサービスの質・量の低下を甘受することができるか 人間環境論集 20巻1号 1-17

<https://eiyouyohou.com/>

【Outline and objectives】

To prepare for writing an academic article.

SES700P2 - 006

サステイナビリティ特殊研究3B

宮川 路子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

博士論文を完成させる。

【到達目標】

博士論文を完成させ、審査で合格する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連している。

【授業の進め方と方法】

個別と受講者全体が集まる二つの形態による指導を行う。受講者が進めている研究内容について、その進捗状況を報告し、参加者全員で質疑・討論を行う。受講者全員が検討に参加することにより、研究がブラッシュアップされ、理解度が深まることを狙っている。

講義の方法は対面で行う予定である。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	論文執筆	論文の執筆を行う。
第2回	論文執筆	論文の執筆を行う。
第3回	論文執筆	論文の執筆を行う。
第4回	論文執筆	論文の執筆を行う。
第5回	論文執筆	論文の執筆を行う。
第6回	論文執筆	論文の執筆を行う。
第7回	論文執筆	論文の提出
第8回	審査会にむけた準備	審査会の準備を行う。
第9回	審査会にむけた準備	審査会の準備を行う。
第10回	審査会にむけた準備	審査会の準備を行う。
第11回	審査会にむけた準備	審査会の準備を行う。
第12回	審査会にむけた準備	審査会の準備を行う。
第13回	審査会にむけた準備	審査会の準備を行う。
第14回	審査会	審査会で発表する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

論文執筆を進める。ゼミで報告するためのレジュメを作成する。

【テキスト（教科書）】

特に使用しない。

【参考書】

適宜指示する。

【成績評価の方法と基準】

論文の進捗状況による（100 %）

【学生の意見等からの気づき】

特になし

【学生が準備すべき機器他】

特になし

【その他の重要事項】

特になし。

【担当教員の専門分野】

公衆衛生学、産業保健、分子整合栄養医学、統合医療、統計学

<研究テーマ>栄養と健康、就労者のストレスと健康

<主要研究業績> Subjective social status: its determinants and association with health in the Swedish working population (the SLOSH study)

The European Journal of Public Health 2012年

ビタミンDの健康効果 人間環境論集 19巻号 79-101

日本の医療を含むサービス産業における過重労働の軽減化における課題：国民はサービスの質・量の低下を甘受することができるか 人間環境論集 20巻 1号 1-17

<https://eiyouyohou.com/>

【これまで指導した博士論文】

1名

【Outline and objectives】

Complete doctoral dissertation.

LAW500P2 - 007

環境法基礎 D

永野 秀雄、横内 恵、岡松 暁子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この授業では、これまで環境法を学んだことのない大学院生のために、環境法の全体像と概略を示すことを目的としている。このため、環境問題を、民事法、行政法、国際法の3分野から概略的な説明を行う。また、受講生が法律の素人であることを前提に、授業を行う。

【到達目標】

環境法の知識のない学生が、その全体像を把握することが、到達目標である。環境分野で仕事をの上で不可欠な知識を身につけて欲しい。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」に関連している。

【授業の進め方と方法】

まず、環境法がどのような法律分野から構成されており、環境問題に対して、どのような機能を果たしているのかについて概観する。また、基本的な文獻リサーチ方法についても説明する。次に、環境私法について、私人間の環境紛争で、民法に規定された不法行為という考え方がどのように機能するのかを学ぶ。そして、最後に、実際に起こった公害事案をもとにしながら、判例法の妥当性を検証する。

次に、環境行政法について、日本における環境行政法の展開を学んだ後、個別規制法と環境アセスメント、自然保護法及び環境行政訴訟を概観する。最後に、国際的な環境問題を検討するにあたり必要となる国際法の基本理論、国際社会の基本単位である国家の役割、国際法の特徴を概観した後、受講者の関心がある国際環境問題を取り上げながら、国際社会における紛争解決の仕組み、国家責任等について適宜判例を紹介しつつ検討し、国際環境問題への国際法からのアプローチの仕方を習得する。また、授業は、対面授業を予定しているが、コロナウィルスの感染が拡大した場合には、リアルタイムのライブ型配信授業とする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

春学期前半

回	テーマ	内容
1	環境法の概観（1）（永野秀雄）	環境問題と環境法
2	環境法の概観（2）（永野秀雄）	①環境法とは何か、②環境法の構成
3	環境私法（1）（永野秀雄）	①環境私法とは何か、②不法行為の基礎理論
4	環境私法（2）（永野秀雄）	損害賠償請求と差止請求
5	環境私法（3）（永野秀雄）	①環境訴訟における因果関係の立証、②複合汚染と共同不法行為
6	環境私法（4）（永野秀雄）	公害事案に基づく議論
7	環境行政法（1）（横内恵）	日本における環境行政法の展開
8	環境行政法（2）（横内恵）	個別規制法と環境アセスメント
9	環境行政法（3）（横内恵）	自然保護法
10	環境行政法（4）（横内恵）	環境行政訴訟
11	国際環境法（1）（岡松暁子）	国際法の基本原則と国際環境問題
12	国際環境法（2）（岡松暁子）	国際環境問題における国家責任法とその限界
13	国際環境法（3）（岡松暁子）	持続可能な開発と国際環境法の発展
14	国際環境法（4）（岡松暁子）	判例研究

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

教科書は使用しない。プリントを適宜配布する。

【参考書】

北村喜宣『環境法（第5版）』（有斐閣ストゥディア、2020年）。
黒川哲志・奥田進一編『環境法へのフロンティア』（成文堂、平成27年）。
繁田泰宏・佐古田彰・岡松暁子・小林友彦他編著『ケースブック国際環境法』（東信堂、2020年）。

【成績評価の方法と基準】

配分：授業内での発表、議論への参加・貢献度30%、期末レポート70%。
評価基準：3人の講師が、授業中に、それぞれ2つのテーマを提示する。この合計6つのテーマの中からレポートを1つ作成し、担当講師に提出する。選択したテーマにつき、判例や法律論文等を最低5つ以上参照して、レポートを書くこと。論点、構成、内容の理解度から評価する。

【学生の意見等からの気づき】

環境法の知識のない学生にも、そのレベルに幅があるので、学生の理解を確認しながら進めていきたい。

【学生が準備すべき機器他】

パソコンとパワーポイント、プロジェクター、ビデオ

【担当教員の専門分野等】

永野 秀雄

<専門領域>日米比較法（特に、環境法、労働法、先端技術法）

<研究テーマ>「環境監査と法」、「サイバーセキュリティと法」

<主要研究業績>（環境関連のもの）

①単著『電磁波訴訟の判例と理論—米国の現状と日本の展望』（三和書籍、2008年）。

②「気候変動と企業統治」鈴木幸毅・所伸之編著『環境経営学の扉—社会科学からのアプローチ』（文真堂、2008年）171-184頁。

③「米国における高レベル放射性廃棄物の処分と問題点」人間環境論集6巻2号（2006年）1-21頁。

横内 恵

<専門領域>環境法、公法（憲法・行政法）

<研究テーマ>環境リスクの法的制御、廃棄物処理法制

<主要研究業績>

①「順応型リスク制御と比例性：ドイツ遺伝子技術法の閉鎖系規律手続を題材として」大塚直編『環境法研究』7号（信山社、2017年）13-45頁。

②「廃棄物処理法に基づく生活環境影響調査の対象地域に関する一考察—高城町事件と東海村事件を事例として」大阪経大論集67巻3号（2016年）113-134頁。

③「科学的不確実性を伴う環境リスクに対する法的制御の可能性と限界」OUGCブックレット8号「中国の食・健康・環境の現状から導く東アジアの未来」（2016年）62-74頁。

岡松 暁子

<専門領域>国際法（国際原子力法、国際海洋法、国際環境法）

<研究テーマ>条約の履行確保、核不拡散、原子力の平和利用

<主要研究業績>

1. 繁田泰宏・佐古田彰・岡松暁子・小林友彦他編著『ケースブック国際環境法』東信堂、2020年。

2. 「国境を越える核関連物質・機器の国際管理」中野勝郎編著『境界線の法と政治』（法政大学出版局、2016年）105-131頁。

3. 「国際原子力機関の保障措置」山本武彦・庄司真理子編『軍縮・軍備管理』（現代国際関係学叢書第2巻）（志學社、2017年）127-142頁。

【Outline and objectives】

This course provides a basic introduction of environmental law for graduate students. Students will gain a brief explanation of environmental problems from three legal fields of civil law, administrative law and international law. This course presumes that students are not legal majors.

SES500P2 - 008

地球環境学基礎 D

藤倉 良

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

環境問題とは人間活動が自然生態系に及ぼす物理的、化学的、生物的な作用とその反作用である。「何がおきているのか」を理解し、「どうすればよいのか」を考えるためには、科学知識が欠かせない。本講義では気候変動を中心にしつつ、オゾン層保護、酸性雨など環境問題や、エネルギーや淡水などの資源問題について、発生メカニズムと対処に関する科学の基礎を修得し、地球規模や国境を超える環境問題に対処する基礎力を養うことを目指す。

【到達目標】

以下を説明できるだけの科学的基礎力を養う。
 人口増加と減少パターンの発生理由。
 オゾンホールが南極上空にできる理由。
 温室効果のメカニズムと気候変動の科学の不確実性。
 日本では酸性雨の生態影響が顕在化していない理由。
 生物多様性を保全しなければならない理由。
 資源のもつ意味。
 淡水、土壌、金属などの資源のもつ役割。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」に関連している。

【授業の進め方と方法】

中学卒業レベルの理科の知識を習得していることを前提にして、パワーポイントを用いて講義を進める。パワーポイントはハードコピーを毎回配布し、授業支援システムにもアップする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

なし/No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

春学期後半

回	テーマ	内容
第 1 回	序論	地球環境問題をとりまく諸状況
第 2 回	人口	人口が増加する要因、都市の人口問題
第 3 回	オゾン層	オゾン層が破壊されるメカニズム、オゾン層破壊物質、ウィーン条約、モントリオール議定書、国内対策
第 4 回	気候変動①	地球温暖化のメカニズム、将来予測
第 5 回	気候変動②	I P C C、国際社会、国際交渉、パリ協定
第 6 回	気候変動③	緩和策と適応策
第 7 回	越境する大気汚染	酸性雨、光化学オキシダント、PM2.5
第 8 回	生物多様性	生物多様性保全の意義、生態系サービス、遺伝資源
第 9 回	資源とは何か	「資源」の持つ意味、「資源の呪い」、資源に関する楽観論と悲観論
第 10 回	水資源	世界の水資源、国際流域の課題
第 11 回	土壌資源、窒素とリン	土壌の成り立ち、機能、窒素とリンの循環、リン資源
第 12 回	エネルギー資源①	化石燃料
第 13 回	エネルギー資源②	原子力、新エネルギー
第 14 回	金属資源	ベースメタル、レアメタル、リサイクル

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は各 2 時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

藤倉良・藤倉まなみ 『文科系のための環境科学入門』 有斐閣

【参考書】

講義中に指示する。

【成績評価の方法と基準】

最終回に行う試験(100%)またはレポート(100%)で評価する。

【学生の意見等からの気づき】

中学校卒業程度の理科の知識があれば理解できるように心がけるが、高校卒業程度の知識が必要な場合もある。

【学生が準備すべき機器他】

とくにない。

【担当教員の専門分野等】

環境システム科学、国際環境協力

【担当教員の関連する業績】

- 1.Ryo Fujikura, Mikiyasu Nakayama, Shanna N. McClain, and Scott Drinkall (2019) Addressing the Health Problems After Immigration Faced by the Marshallese in Springdale, Arkansas: Lessons Learned from the City of Vienna, Journal of Disaster Research, Vol.14, No.9, pp.1309-1316, doi: 10.20965/jdr.2019.p1309
- 2.Ryo Fujikura, Shams Asadi, Laura Kraus and Mikiyasu Nakayama (2019) Toward Successful Integration of Climate Immigrants: Lessons Learned from the Good Practice of the City of Vienna, International Journal of Environmental Science and Development, Vol.10(6): 171-177, doi: 10.18178/ijesd.2019.10.6.1167
- 3.Naoya Tsukamoto and Ryo Fujikura (2018) Evaluation of Japan's Policy for CO2 Reduction at the First Commitment Period of the Kyoto Protocol, International Journal of Environmental Science and Development, Vol.9, No.12 pp.368-374, doi: 10.18178/ijesd.2018.9.12.1131
- 4.Michael Lerner, Ryo Fujikura, Mikiyasu Nakayama & Manami Fujikura (2016) The Influence of Limits to Growth and Global 2000 on U.S. Environmental Governance, International Journal of Social Science Studies, Vol. 4, No. 8, 52-63, doi:10.11114/ijsss.v4i8.
- 5.Tetsuo Kida and Ryo Fujikura (2015) Pollution Risks Accompanied with Economic Integration of ASEAN Countries and the Fragmentation of Production Processes, International Journal of Social Science Studies, Vol.3, No.5, DOI: 10.11114/ijsss.v3i5.915
- 6.Tetsuo Kida and Ryo Fujikura (2014) A chance in Myanmar induced by the minimum wage policy in Thailand: A case study of Myawaddy industrial area, International Journal of Social Science Studies, Vol.3, No.1, pp.38-46
- 7.Ryo Fujikura and Tomoyo Toyota (Editor) (2012) Climate Change Mitigation and International Development Cooperation, (p.264) Earthscan, London
- 8.Ryo Fujikura and Masato Kawanishi (Editor) (2010) Climate Change Adaptation and International Development - Making Development Cooperation More Effective, Earthscan, London

【Outline and objectives】

Environmental problems are physical, chemical and biological consequences and reactions on natural ecosystems caused by human activities. In order to understand "what is happening" and "what should be done", scientific knowledge is indispensable. In this lecture, students will learn the basics of science regarding mechanisms and countermeasures of environmental problems such as climate change, ozone layer protection, acid rain and resource problems such as energy and freshwater.

ARS500P2 - 009

国際協力論 D

武貞 稔彦

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本講義のテーマは貧困削減のための国際協力、開発援助のありようである。SDGs（持続可能な開発目標）に示されているように、戦後国際社会の大きな課題の一つ-貧困-に立ち向かうために行われている営みである開発援助や国際協力は、どのような動機や意図をもって行われ、どのような効果をこれまでもたらしてきたかを検討し、将来の国際協力のあり方、さらには国際社会のあり方についても議論する。

【到達目標】

授業の到達目標は、(1) 現代の国際社会の中で行なわれる様々な国際協力や援助、特に、貧困、開発、環境をめぐる国際協力や援助の歴史と制度について基礎的な知識を獲得すること、(2) 国際協力や援助をめぐる現代の主要なトピックに関する基礎的な知識を獲得すること、および、(3) 誰が何のためにどのような国際協力や援助を行なっているのか、について批判的に見る目を養うことである。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連している。

【授業の進め方と方法】

各回の講義は、①教員による講義、②基本的な文献に関する学生の報告、③ディスカッションで構成する。事前に指定された文献を読んで各回の授業に参加することが必須であり、予習に十分な時間を割くことが必要となる。ただし、講義の方法や内容については、受講者の数や関心などに応じて変更する可能性がある。

報告対象とする文献については、2021 年度秋学期開始前に学習支援システム（Hoppii）を通じて通知／配布予定。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期前半

回	テーマ	内容
第 1 回	オリエンテーション 国際協力はなぜ行なわれるのか	国際協力という取り組みが必要とされる理由や背景-途上国の貧困と先進国との格差-について概観する
第 2 回	国際協力をめぐる歴史と制度 (1) 経済成長と国際協力	第二次世界大戦後の国際社会秩序形成と、その後 1970 年代までの国際協力の取り組みを、国際社会の政治／歴史の文脈に位置づけて概観する。
第 3 回	国際協力をめぐる歴史と制度 (2) 経済成長路線から人間開発路線へ	1980 年代、90 年代の国際協力の変遷をたどり、基本的な考え方／取り組みの重点の変化を概観する。
第 4 回	国際協力をめぐる歴史と制度 (3) 環境と持続可能な開発	2000 年代以降の国際協力の変遷を国際社会における課題設定や変動の中に位置づける
第 5 回	日本による国際協力	日本による国際協力の歴史と制度について概観する。そのうえで、その成果および評価を検討する。
第 6 回	「開発」とは何か: 開発と文化、社会科学	現在すすめられている開発の到達目標（行き着く先）について文化や社会科学の方法論の観点も含め批判的に検討する。
第 7 回	アフリカ	国際協力における近年の「大きな課題（問題）」であるアフリカについて、何が「問題」となっているのか、その由来や対応を含めて概観する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

特に指定しません。

【参考書】

斎藤文彦『国際開発論』（日本評論社）、下村恭民他『国際協力』（有斐閣）、外務省『日本の経済協力』（ODA 白書）を基本書とします。他は適宜紹介します。

【成績評価の方法と基準】

成績評価は、期末レポート (50%)、各回の担当報告の内容 (30%)、授業やディスカッションへの貢献 (20%) を総合的に判断して行う。

【学生の意見等からの気づき】

過去には議論の時間の充実（拡大）を求める声があったことから、授業運営には留意することとする。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 開発の自然環境・社会環境への影響、開発援助、開発と倫理
<研究テーマ> 「望ましい（望ましくない）「開発」とは何か」「ダム建設に伴う立ち退きと補償、生活再建」

<主要研究業績>

"Japanese Experience of Involuntary Resettlement: Long-Term Consequences of Resettlement for the Construction of the Ikawa Dam," *International Journal of Water Resources Development*, Routledge, Vol. 25, Issue 3, September 2009, pp. 419-430.

『開発介入と補償：ダム立ち退きをめぐる開発と正義論』勁草書房 2012 年、"Participation and diluted stakes in river management in Japan: the challenge of alternative constructions of resource governance" in Sato, J. ed., *Governance of Natural Resources: Uncovering the social purpose of materials in nature*. United Nations University Press, pp.141-161, July 2013

【実務経験のある教員による授業】

担当者は、途上国への経済協力に携わっていた経験がある。本講義においては、途上国駐在も含めた経済協力実務で得られた知見が活用されている。

【Outline and objectives】

This course is an advanced course for International Development and Development Assistance. Development is one of the global issues in the current world as shown in the Sustainable Development Goals (SDGs). International Development Assistance has been perceived not only as a strong tool for development of many societies and/or economies but also as a way to strengthen world peace. The class consists of lectures and readings focusing on the history and the objectives of international development efforts and relationship between rich countries and poor countries putting a special emphasis on Japan's role in the international society.

Completing the course, students are expected;

- 1) to acquire basic knowledge on history and institutions in international development efforts,
- 2) to acquire basic knowledge on current/important issues in international development, and
- 3) to critically analyze who engages in international development efforts and why.

POL500P2 - 010

市民参加の理論と実践 D

小島 聡、杉崎 和久、谷本 有美子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

市民参加は、政治学や行政学、さらに公共政策学の永遠のテーマといえるが、現代では、他の学問分野や個別の政策領域においても重要なテーマになっている。この授業では、市民参加の理論と動向から現代の政策過程とガバナンスについて俯瞰した上で、都市計画分野における市民参加に焦点を合わせて実践的な検討を行う。この授業は、参加学生が、市民参加を通して、歴史・理論・実践動向を学びながら、制度・手続・社会技術の手法とその活用、参加のガバナンス・マネジメントなどについて、学際的かつ政策領域横断的な視野を身につけることが目的である。

【到達目標】

この授業に参加することによる学生の到達目標は、以下のとおりである。

- ・市民参加の歴史・理論・実践に関する基礎知識と教養を習得する
- ・自治体政策と市民参加に関する基礎知識と教養を習得する。
- ・都市計画分野における市民参加の動向について理解する。
- ・市民参加の手法選択、市民参加の制度・手続の設計と運用、参加のガバナンス・マネジメントに関する政策思考力を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち「DP1」「DP3」に関連している。

【授業の進め方と方法】

講義の前半は、市民参加総論として、デモクラシーと市民参加の歴史や、理論と実践の動向、自治体政策と市民参加に関する概説を扱う。講義の後半は市民参加各論として、都市計画分野における市民参加について、運動から参加への制度化、市民だけではなく企業なども含む民間主体による都市空間の管理・運営について扱う。また数名のゲストスピーカーを招き、実務上の経験知などについて講義と討論を行う。討論は質疑応答にとどまらず、市民参加に関する研究会のスタイルで行う。最終回は、総括的な講義を行い、今後を展望する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

春学期後半

回	テーマ	内容
1	市民参加総論（1）	マスデモクラシーの形成史と市民参加、政策過程と市民参加の関係、熟議デモクラシーと現代の参加手法について検討する。
2	市民参加総論（2）	日本の現代史における市民参加の軌跡、自治体政策をめぐる市民参加の動向と論点について検討する。
3	住民投票とローカルデモクラシー	近年の事例を題材にしながら、直接民主制と間接民主制との関係性や公共政策の争点化等の観点で住民投票を検討する。
4	都市計画分野における参加の展開	法定都市計画への対抗概念としてのまちづくり運動から都市計画における参加の制度化の過程を検討する。
5	都市計画分野における参加事例	都市計画分野における市民参加の事例についてゲストから話題提供を踏まえて検討する。
6	市民参加の実効性を高めるための試み	市民参加の課題の持つ課題とその解決することを目的とした取組についてゲスト講師からの話題提供を踏まえて検討する。
7	市民参加の課題と展望	補足的な講義とともに、市民参加の課題と展望について討論し、授業全体を統括する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

この授業に参加する学生は、以下の時間外学習を行う。

- ・事前に配布する資料を読む。
- ・事前に提示する事項について概略を調べる。
- ・授業内で提示するテーマについてレポートを執筆する。

【テキスト（教科書）】

特に用いない。

【参考書】

- ①篠原一編『討議デモクラシーの挑戦 ミニ・パブリックスが拓く新しい政治』（岩波書店、2012）
 - ②米野史健ほか編『住民主体の都市計画 まちづくりへの役立て方』（学芸出版社、2009年）。
- 上記以外の参考文献については、授業内で紹介する。

【成績評価の方法と基準】

平常点（参加姿勢）（80%）、最終レポート（20%）の総合評価とする。参加姿勢については、講義に対する履修態度、毎回行う質疑応答、討論への積極性等を重視する。

【学生の意見等からの気づき】

・現代の市民参加はきわめて幅広い理論と実践領域にわたり、一人の教員がカバーしきれないのが実状です。こうしたことから、学際的なアプローチと専門家をゲストスピーカーとしてお招きすることで実践知を涵養する授業構成の有効性を実感しています。

【学生が準備すべき機器他】

必要に応じて、パソコンからプロジェクターに画像を投影する。

【担当教員の専門分野等】

小島 聡
 〈専門領域〉行政学、地方自治論
 〈研究テーマ〉地域の持続可能性と自治体政策
 〈主要研究業績〉
 『自治体経営改革』（共著）（ぎょうせい、2004年）
 『分権時代の地方自治』（共著）、（三省堂、2007）
 『フィールドから考える地域環境 持続可能な地域社会をめざして』（共編著）、（ミネルヴァ書房、2012）
 杉崎和久
 〈専門領域〉都市計画、市民参加手法
 〈研究テーマ〉公共的意思決定における市民参加のあり方、まちづくりの現代史
 〈主要研究業績〉
 『市民参加と合意形成』（共著）（学芸出版社、2005年）
 『住民主体の都市計画』（共著）（学芸出版社、2009年）
 谷本有美子

〈専門領域〉行政学、地方自治、市民自治
 〈研究テーマ〉中央政府における地方自治、国による自治体統制、人口減少時代の自治体政策と市民自治、大都市行政区の民主的統制
 〈主要研究業績〉
 『地方自治の責任部局』の研究—その存続メカニズムと軌跡 [1947-2000]（個人の友社、2019年）
 『分権社会と協働』（共著）（ぎょうせい、2001年）
 『分権改革の動態』（共著）（東京大学出版会、2008年）
 「大都市行政区の『区民会議』と市民参加のアジェンダー 神奈川県内の指定都市を題材に」（2016）『横浜市立大学論叢 人文科学系列』第 67 巻第 1 号

【Outline and objectives】

The purpose of this lecture is to acquire interdisciplinary and interdisciplinary views on citizen participation by participating students.

数理モデル概論 D

松本 倫明

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本科目では、コンピュータシミュレーションを用いた現状分析と将来予測のためのモデル化の手法について研究することを目的とする。

【到達目標】

はじめに代表的なシミュレーション事例を概観し、シミュレーションがどのように自然科学あるいは社会科学に寄与しているかを理解する。前半は、限りある資源（有限な資源）のもとで人間社会や生態系の動向を、システムダイナミクスを用いて定量的にモデル化する。これを通して環境問題を考える上での基本的な概念を考察していく。後半は、地球温暖化の数理モデルの概要を学び、地球環境問題について総括的に考える。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」に関連している。

【授業の進め方と方法】

対面授業を行う。本授業は、講義とコンピュータ実習を織り交ぜながら進める。コンピュータ実習によって、受講生は授業を深く理解することができる。また高度な数学的知識は必要とはしない。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期後半

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンスと環境モデル概論	本講義を受講するためのガイダンスを行う。環境モデルと環境シミュレーションを概観する。
第 2 回	システムダイナミクスによる環境モデル 1	人口爆発と指数関数的成長の数理モデル。
第 3 回	システムダイナミクスによる環境モデル 2	有限世界における成長の限界の数理モデルを用いた人口爆発モデル。
第 4 回	システムダイナミクスによる環境モデル 3	有限世界における成長の限界とフィードバックによる系の応答を考慮した人口爆発モデル。生態系モデル・COVID-19 への応用。
第 5 回	地球温暖化モデル 1	地球温暖化の予測モデルとその結果の概要。
第 6 回	地球温暖化モデル 2	地球温暖化の予測モデルと対策について考察。
第 7 回	総合討論	授業のまとめとして、総合討論を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

特に使用しない。資料を授業時に配布する。

【参考書】

開講時に紹介する。

【成績評価の方法と基準】

平常点ならびに討論への参加状況 60 %、実習課題 40 %とする。

【学生の意見等からの気づき】

なし。

【学生が準備すべき機器他】

授業では情報実習室を使用する。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 理論天文学

<研究テーマ> 星形成、太陽圏と宇宙天気

<主要研究業績>

① "An origin of arc structures deeply embedded in dense molecular cloud cores", Matsumoto, T., Onishi, T., Tokuda, K., & Inutsuka, S.-i. 2015, MNRAS, 449, L123

② "Star Formation in Turbulent Molecular Clouds with Colliding Flow", Matsumoto, T., Dobashi, K., & Shimoikura, T. 2015, ApJ, 801, 77

③ "Protostellar Collapse of Magneto-turbulent Cloud Cores: Shape During Collapse and Outflow Formation", Matsumoto, T., & Hanawa, T. 2011, ApJ, 728, 47

【Outline and objectives】

Students investigate several problems using computers via quantitative analyses.

SOC500P2 - 012

環境社会論 D

船戸 修一

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

国内の様々な具体例を通じて過疎地域や農山村地域の構造を把握し、「環境」と「地域社会」の持続性（サステナビリティ）を担保するための社会的な仕組みや制度のあり方について学ぶ。

【到達目標】

公害と地域社会・地域資源の管理・公共事業と地域社会・有機農業の地域的展開・自然資源と観光・地域社会と野生動物などの具体例を学ぶことによって「環境」と「地域社会」の持続性（サステナビリティ）を担保にするための方策を構想する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」に関連している。

【授業の進め方と方法】

本講義では単元ごとに映像を事前に視聴し、その内容理解のためのリアクションペーパーを課す。また単元ごとに論文を事前に読了したうえで、それぞれの論点について討論する。最終的には「環境」と「地域社会」の持続性に関するレポートの提出を課す。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

なし/No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

春学期前半

回	テーマ	内容
第1回	「環境」と「地域社会」	「環境」と「地域社会」の持続性の持続性を考える視点を考えるための論点を提示する。
第2回	公害（水俣病）と地域社会	水俣病がもたらした地域社会の分断ならびにその対応について考える。
第3回	ヒ素公害と地域社会	ヒ素公害がもたらした地域社会の分断ならびにその対応について考える。
第4回	公共事業（ダム建設）と地域社会	ダム建設による地域社会の変容について考える。
第5回	公共事業（原子力発電所）と地域社会	原子力発電所がもたらした地域社会の分断ならびにその対応について考える。
第6回	公共事業（原子燃料サイクル施設）と地域社会	原子燃料サイクルがもたらした地域社会の分断ならびにその対応について考える。
第7回	農山村にみる地域資源の利用と管理	地域資源をcommonsとして持続的に利用してきた仕組みと今後の環境ガバナンスのあり方について考える。
第8回	有機農業と地域社会	無農薬による農業を推進するにあたって地域社会で生じる分断とその対応について考える。
第9回	グリーン・ツーリズムと地域社会	都市農村交流事業によって地域社会で生じる問題とその対応について考える。
第10回	観光（世界遺産）と地域社会	世界遺産によって生じる地域社会の問題とその対応について考える。
第11回	野生動物と地域社会	地域住民の野生動物への関係性から獣害とその対応について考える。
第12回	縮小社会と田園回帰	人口減少や高齢化を抱える地域社会の問題とその対応について考える。

第13回 限界集落と関係人口 限界集落についての誤解を理解したうえでその対応を考える。

第14回 まとめ これまでの内容を復習する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

それぞれの単元に関わる映像・文献（論文や書籍）の予習ならびに復習を授業時間外でしておいていただきたい。なお本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

授業時に随時指定する。

【参考書】

授業時に随時紹介する。

【成績評価の方法と基準】

授業後のリアクションペーパーを40%、期末レポートを60%として評価する。

【学生の意見等からの気づき】

2021年度より開講する講義のため、なし。

【学生が準備すべき機器他】

資料配付・課題提出等のため学習支援システムの利用環境を整えておいていただきたい。

【その他の重要事項】

授業で取りあげる文献や映像は事前に紹介する。それを読了あるいは視聴したうえで授業に参加していただきたい。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

地域（農村）社会学 環境社会学

<研究テーマ>

地域資源（農業用水路や棚田など）の持続性（サステナビリティ）

に関する研究、人口減少・高齢化を抱える限界集落の実態とその持続性に関する社会学的研究、メディアにおける農業・農山村のイメージ生産と消費に関する研究

<主要研究業績>

『環境と社会』（編著、人文書院、2012年）

『環境社会学事典』（共著、丸善出版、2022年出版予定）

『農の6次産業化と地域振興』（共著、春風社、2015年）

『食と農のコミュニティ：地域活性化の戦略』（共著、創元社、2014年）

『キーワード地域社会学』（共著、ハーベスト社、2011年）

『用水のあるまち：東京都日野市・水の郷づくりのゆくえ』（共著、法政大学出版局、2010年）

【Outline and objectives】

Through various concrete examples in Japan, we will grasp the structure of depopulated areas and agricultural and mountain village areas, and learn about the ideal social mechanism and system to ensure the sustainability of the environment and local communities.

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本講義では、経営学および会計学の視点から、企業や地域における環境経営やサステナビリティ経営の仕組みを明らかにしつつ、その仕組みと国内外における先進的な企業の取組事例も考慮に入れながら、将来企業や地域において、有効かつ効率的に実施すべき環境経営やサステナビリティ経営の方法を理論的に検討していくことを目的とする。

【到達目標】

本講義では、国内外で刊行されたマルチステークホルダーの視点からの環境経営またはサステナビリティ経営に関する文献（理論研究の論文）を多面的に分析・検討し、その結果を論理的に整理し、報告していくための能力を習得することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP3」に関連している。

【授業の進め方と方法】

本講義は対面で行われる。第1回は、環境経営やサステナビリティ経営に関する研究論文とそれに関する著書や報告書を紹介しつつ、講義内で履修者に分析し、検討してもらう内容やポイントについて講義を行う。第2回以降、履修者には、研究テーマに関係する、あるいは関心のある研究論文を1つ選択してもらい、その内容を企業や地域の取組事例や関連研究などを加味しながら多面的に分析・検討し、その結果を報告してもらう。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	講義全体の流れとその内容、講義で使用する文献の紹介、その文献を分析・検討していくための方法やポイントを説明する。
第2回	環境・社会問題に対応する組織①	環境・社会問題に対応する組織のあり方に触れた論文（例えば、ブラハワードの論文）の内容を考察し、報告する。
第3回	環境・社会問題に対応する組織②	第2回で出された質問などへの回答を、関連する論文や、企業または地域の取組事例などを参考にしながら検討し、報告する。
第4回	環境・社会問題解決のための経営戦略①	企業が環境重視から持続可能性に展開していくために検討し、策定すべき経営戦略に関する研究論文（例えば、ハートやアンルーの論文）の内容を考察し、報告する。
第5回	環境・社会問題解決のための経営戦略②	第4回で出された質問などへの回答を、関連する論文や、企業または地域の取組事例などを参考にしながら検討し、報告する。
第6回	環境・社会問題解決のための新たな経営戦略①	企業が経済的価値と環境・社会的価値を同時実現していくための新たな経営戦略に関する研究論文（例えば、クリステンセンやポーター＝クラマーの論文）の内容を考察し、報告する。
第7回	環境・社会問題解決のための新たな経営戦略②	第6回で出された質問などへの回答を、関連する論文や、企業または地域の取組事例などを参考にしながら検討し、報告する。
第8回	経営戦略を実現するための組織編成・マネジメント①	第2回から第7回で取り上げられた経営戦略を実現していくための組織編成・マネジメント（コレクティブ・インパクトやコラボレーション）に関する研究論文（例えば、カンア＝クラマー、アドラー、リーの論文）の内容を整理し、報告する。
第9回	経営戦略を実現するための組織編成・マネジメント②	第8回で出された質問などへの回答を、関連する論文や、企業または地域の取組事例などを参考にしながら検討し、報告する。
第10回	経営戦略を実現するための組織編成・マネジメントの先進事例①	第8回と第9回で取り上げられた組織編成・マネジメントに関するガイドや先進事例（例えば、国連グローバルコンパクトやバタゴニアの取組）の内容を整理し、その結果を報告する。

第11回 経営戦略を実現するための組織編成・マネジメントの先進事例②

第12回 戦略策定や組織編成・マネジメントを支援する会計システム①

第13回 戦略策定や組織編成・マネジメントを支援する会計システム②

第14回 講義のまとめ

第10回で出された質問などへの回答を、関連する論文や、企業または地域における取組事例を参考にしながら検討し、報告する。

組織（第2回、第3回）の戦略策定（第4回～第7回）と組織編成・マネジメント（第8回～第11回）を支援する会計システムに関する論文（例えば、キャプラン、エクセル、セラフェイムの論文）の内容を整理し、報告する。

第12回で出された質問などへの回答を、関連する論文や、企業または地域における取組事例を参考にしながら検討し、報告する。

第13回までの検討内容を整理しつつ、その内容をもとに新たな方法論も検討する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

講義内容の理解および文献の分析・検討にあたっては、少なくとも次の3点について行ってください。

- ・経営学および会計学の基礎的知識を事前に学習し、身につけること
- ・毎回の講義内容を復習すること
- ・本講義に関連する新聞・雑誌記事やホームページなどの内容をチェックすること

本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

- ・講義では、テキストは使用せず、テーマごとに配布した資料を使用します。
- ・報告では、各自に配布した資料を整理したレジュメの作成および配布をお願いします。

【参考書】

講義中に著書・論文・雑誌・URLなどをいくつか紹介しますが、講義外に自主学習を行う方のために次の著書をあげておきます。

【環境経営/サステナビリティ経営】

- ・足立英一郎（2009）『環境経営入門』日本経済新聞出版社。
- ・蟹江憲史（2020）『SDGs（持続可能な開発目標）』中央公論新社。
- ・谷本寛治（2020）『企業と社会 サステナビリティ時代の経営学』中央経済社。

【URL】

- ・「CSR 図書館.net」〈<http://csr-toshokan.net/>〉。

【成績評価の方法と基準】

本講義の成績は次の4点に基づいて評価します。

- ・報告用配布レジュメの内容（20%）
- ・報告内容（プレゼンテーション能力）（30%）
- ・討論への参加（発言内容）（30%）
- ・レポートの内容（報告内容に基づくレポート）（20%）

【学生の意見等からの気づき】

毎年、意見や要望を考慮に入れ、講義内容を改善しています。

【学生が準備すべき機器他】

必要に応じてパソコンとプロジェクターを使用します。

【その他の重要事項】

- ・講義はワードあるいはパワーポイントを用いて進めていきますので、報告およびそのレジュメもワードか、パワーポイントを使用してください。
- ・質問などについては電子メールで連絡ください。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

環境経営論、地域経営論

<研究テーマ>

企業や地域の持続的成長を実現するための経営・会計手法に関する研究

<主要研究業績>

- ・金藤正直（2014）「地域サプライチェーンとしての産業クラスターのマネジメントーサプライチェーン・マネジメントの適用ー」二神恭一・高山貢・高橋賢 編著『地域再生のための経営と会計』中央経済社、41-52頁。
- ・金藤正直（2015）「食料産業クラスターマネジメントを支援するバランス・スコアカードの構想」『産業経理』Vol.75 No.1、53-63頁。
- ・金藤正直（2016）「サステナビリティ・サプライチェーン・マネジメントの実践的展開モデル」『横浜経営研究』第37巻第2号、55-72頁。
- ・金藤正直（2018）「フードバレーの戦略的マネジメントを支援するバランス・スコアカードの適用可能性ーフードバレーとからの取組を中心としてー」『経済学論叢』第58巻第2号、65-84頁。
- ・金藤正直（2021）「健康経営の展望-どう評価・開示するか? -」『企業会計』Vol.73 No.2、87-90頁。

【Outline and objectives】

The purpose of this lecture is to learn the management method for solving environmental and social issues in companies and regions.

LAW500P2 - 015

環境私法 D

永野 秀雄

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この授業では、これまで環境法を学んだことのない大学院生のために、環境私法を概説することを目的としている。この環境私法では、環境被害を受けた人々が、国や企業などに損害賠償を求めたり、その環境被害のもととなる汚染原因等を排出しないように求めたりする訴訟を扱う。具体的には、民法に規定されている不法行為という考え方が、大気汚染訴訟、水質汚濁訴訟といった様々な形の訴訟の中で、どのように機能するかを学んでいく。

【到達目標】

この授業の到達目標は、受講生の所属する組織または生活する地域が、環境にかかわる紛争に直面したときに、どのような法的なルールが適用されるのかを理解することにある。言い換えれば、受講生が、法の専門家（弁護士や企業法務部等）と協同してこのような問題に対処しえる知的枠組みを獲得することを目指している。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」に関連している。

【授業の進め方と方法】

まず、環境私法で最も基本となる民法に規定された「不法行為」という考え方を学ぶ。そして、この不法行為に関する理論が、環境紛争にどのように適用されるのかを概説する。

これに続いて、具体的な環境汚染原因ごとに、不法行為を中心とする法理論が適用されるのかについて解説する。大気汚染、水質汚濁、騒音・振動、日照、景観といった問題ごとに個別のルールが形成されているので、これを学んでいくことにする。

最後に、総合的な問題を扱う環境監査において、どのような法的規制が必要であり、今後どのように運営されるべきかを検討する。

また、授業は、対面授業を予定しているが、コロナウイルスの感染が拡大した場合には、リアルタイムのライブ型配信授業とする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期前半

回	テーマ	内容
1	不法行為の基礎（1）	①環境法とは何か、②環境紛争と環境私法
2	不法行為の基礎（2）	不法行為法とは何か
3	不法行為の基礎（3）	共同不法行為とは何か
4	不法行為の基礎（4）	複合汚染と共同不法行為
5	公害紛争処理制度等	①公害紛争処理制度、②協定による紛争解決
6	大気汚染訴訟の基礎	①共同不法行為理論の適用、②大気汚染訴訟の難しさ
7	大気汚染訴訟の展開	大気汚染訴訟の展開と現状
8	水質汚濁訴訟	水質汚濁訴訟の分析
9	悪臭訴訟、騒音・振動訴訟	①悪臭訴訟、②騒音・振動訴訟
10	日照・通風・風害訴訟	日照・通風・風害訴訟の分析
11	眺望訴訟、景観訴訟	①眺望訴訟、②景観訴訟
12	風評被害訴訟	風評被害訴訟の分析
13	嫌悪施設訴訟（1）	原子力関連の民事訴訟
14	嫌悪施設訴訟（2）	廃棄物処理場関連の民事訴訟

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

担当教員が作成した印刷物を Hoppi から配布します。

【参考書】

淡路剛久・大塚直・北村喜宣『環境法判例百選（第2版）』（有斐閣、2011年）。

【成績評価の方法と基準】

授業内での発表、議論への参加・貢献度 30%、期末レポート 70%。期末レポートは、環境私法のテーマの中から 1 つを取り上げ、法律論文等を 3 つ以上参照して、その問題に関するレポート（A4 で 10 頁程度）を作成すること。

【学生の意見等からの気づき】

今後も、わかりやすい解説に努めたいと思います。

【学生が準備すべき機器他】

プロジェクター。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>日米比較法（特に、環境法、先端技術法）
<研究テーマ>「環境監査と法」、「サイバーセキュリティと法」
<主要研究業績>（近年のもの）

「米国防総省によるサイバーセキュリティ成熟度モデル認証（CMMC）の導入：現行の NIST SP 800-171 の遵守制度を超えて」CISTEC journal186 号 200 頁以下（2020 年 3 月）。

「米国におけるセキュリティクリアランス制度の大改革」CISTEC journal185 号 223 頁以下（2020 年 1 月）。

「米国の重要インフラに関するサイバーセキュリティとセキュリティ・クリアランス法制（上）」人間環境論集 19 巻 1 号 13 頁以下（2018 年 12 月）。

【Outline and objectives】

This course provides a basic introduction of environmental civil litigation for graduate students. The course focuses on lawsuits in which people suffering from environmental damage sued the government of Japan and companies for damages and for the injunction of the pollutions and nuisances. Specifically, students will learn how the idea of torts in the Civil Code works in various forms of litigation, such as air pollution and water pollution cases.

ENV500P2 - 016

自然環境共生研究 D

高田 雅之

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

持続可能な社会に向けて、自然環境と人間活動との調和・共生を実現するためには、自然環境を取り巻く問題の本質を探り、科学的・社会的な視点から、社会の各主体によって相乗的で多面的に取り組まれることが望まれます。本講義では、生態系とそれをめぐる諸課題を理解し、それらに対してこれまで取り組まれてきた様々な手立てと、今後の共生実現に向けた政策の可能性について考究することをテーマとします。

【到達目標】

学生が以下の3点について知識と理解を深め、その要点及び自らの考えを説明し、さらに学術的視点で自らの研究に応用する力を身に付けることを目標とします。

- ①保全対象となる自然環境の特性と、人間活動によって引き起こされた問題の現状と課題
- ②人間による影響を減じ、機能と恩恵を維持するために取り組まれてきた政策とその意義
- ③国際的視点に立って自然環境との共生に向けて取り組まれている諸政策

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP3」に関連している。

【授業の進め方と方法】

「主な生態系の理解と保全上の難題」、「日本における自然環境保全のための基盤的な諸施策」、「生物多様性保全・自然再生・里山保全などの近年の重要課題」、「諸外国における多面的な取り組み事例」、「生物多様性と経済」などについて学びます。国内外の実例を交えたプレゼンテーションにより、知識と問題意識を積み重ね、持続可能な自然環境との共生に向けた自らの意見を養うことを通じて到達目標に向かいます。

授業は対面を基本とし、必要に応じてオンラインを併用して行います。また、課題提出後の授業、または学習支援システムにおいて、提出された課題からいくつかポイントを取り上げ、全体に対してフィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

なし/No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

秋学期前半

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンスと序論	講義の進め方、自然環境保全を取り巻く動向、生物多様性に関わる概念の進化
第2回	生物多様性のホットスポットと生物の進化	生物多様性のホットスポット、生物の大絶滅・大進化の歴史、哺乳類と人間の登場
第3回	生態系の理解1：森林・草原	森林生態系の構造と機能、半資源草原・高山草原の生態系
第4回	生態系の理解2：湿原・干潟	湧水湿地と泥炭地湿原・干潟生態系の特徴
第5回	貴重種の保護	レッドリストによるリスク評価、希少動物・希少植物の取り組み事例
第6回	外来種問題	様々な導入経路と影響、外来生物対策、国内外の事例
第7回	日本の自然環境保全施策1	自然公園と自然環境保全地域、鳥獣保護制度、野生動物の保護管理
第8回	日本の自然環境保全施策2	環境アセスメントの特徴と手続き、制度構築経過、戦略的環境アセスメント
第9回	里山と生物多様性	里山の資源循環と共生、生物多様性とは、生態系サービス、バイオミミクリ
第10回	自然再生	自然再生とは、近自然河川工法、グリーンインフラ
第11回	海外の自然環境共生事例1	フランスの地方自然公園とエコミューゼ、イギリスのトラスト活動
第12回	海外の自然環境共生事例2	ドイツのビオトープ、欧州農業環境政策
第13回	生物多様性と経済	生態系サービスへの支払い、生物多様性オフセット、認証制度
第14回	景観生態学	景観生態学とは、地理空間情報を用いた分析と事例

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

人と自然との関わりや、自然環境政策、生物多様性などに関するメディア、文献、事例に触れることにより自主的な研究を進めます。本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

特定のものはありません。講義において適宜資料を配布します。

【参考書】

毎回の講義において紹介します。

【成績評価の方法と基準】

平常点（50%）：毎回提出するリアクションペーパーにより理解度を評価します。

期末レポート（50%）：最終回に示すレポート課題によって総合的な理解度と考察力を評価します。

【学生の意見等からの気づき】

知識の詰め込みとならないよう、具体的な事例や挿話を交えながら、できる限り丁寧に説明し理解を促していきます。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

自然環境政策、湿地生態学、景観生態学、自然環境地理学、保全生態学

<研究テーマ>

湿地における自然資源の持続的活用、生物多様性と生態系サービスの評価、湿原生態系の構造と人為的影響の評価、生物多様性オフセット

<主要研究業績>

Combined burning and mowing for restoration of abandoned semi-natural grasslands, Appl Veg Sci., 2017.

Drastic declines in Brown Shrike and Yellow-breasted Bunting at the Lake Utonai Bird Sanctuary, Ornithol Sci., 2017.

Tropical Peat Formation, Tropical Peatland Ecosystems, Springer, 2016.

「図説日本の湿地」(朝倉書店, 2017) 編著

「湿地の科学と暮らし」(北大出版会, 2017) 共著

【実務経験のある教員による授業】

公務員、独立行政法人、民間企業

【Outline and objectives】

To achieve harmony and coexistence between the natural environment and human activities for a sustainable society, it is hoped that we will explore the essence of the issues surrounding the natural environment and address the issues from the scientific and social perspectives. In this lecture, the theme is to understand the ecosystem and the issues surrounding it, to learn the various measures that have been taken to address them, and the potential of policies for harmonization between human and nature.

SES500P2 - 019

環境工学の基礎 D

藤倉 良

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

環境問題とは人間活動が自然生態系に及ぼす物理的、化学的、生物学的な作用とその反作用である。「何がおきているのか」を理解し、「どうすればよいのか」を考えるためには科学知識が欠かせない。本講義では大気汚染、水質汚濁、廃棄物、土壌汚染、騒音・悪臭、有害物質など、ローカルな環境問題の発生メカニズムと対処に関する工学的基礎を修得し、そのような問題への対処方を考える基礎力を養うことを目指す。

【到達目標】

以下を説明できるだけの科学的基礎力を養う。
 大気汚染発生のメカニズムと処理技術
 上下水道の構造
 水質汚濁発生のメカニズム
 土壌汚染の特徴と対策技術
 感覚公害の特徴と騒音・振動・悪臭の原因と対策技術
 廃棄物の定義と現状
 リサイクルの意味と関連する諸制度
 リスク論の考え方と環境に関する基準の設定方法

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」に関連している。

【授業の進め方と方法】

中学卒業レベルの理科の知識を習得していることを前提にして、パワーポイントを用いて講義を進める。パワーポイントはハードコピーを毎回配布し、授業支援システムにもアップする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】**春学期前半**

回	テーマ	内容
第 1 回	序論	環境問題とはどのようなものか、環境科学の役割
第 2 回	大気汚染 1	大気汚染の歴史、ばいじん、硫黄酸化物
第 3 回	大気汚染 2	窒素酸化物、自動車排ガス、アスベスト
第 4 回	上水道	浄水場のしくみ、水質の維持と費用
第 5 回	下水道と浄化槽	下水道の構造、下水処理場のしくみ、浄化槽
第 6 回	水質汚濁	水質の指標、有機汚濁、富栄養化
第 7 回	工場排水と土壌汚染	工場排水の処理、土壌汚染の特徴と対策、地下水汚染
第 8 回	悪臭	感覚公害、悪臭の測定法、悪臭対策技術
第 9 回	騒音	音とは、騒音の評価法、騒音対策
第 10 回	廃棄物 1	廃棄物の定義、一般廃棄物
第 11 回	廃棄物 2	産業廃棄物
第 12 回	リサイクル	リサイクルの種類、関連法規
第 13 回	有害物質とリスク	有害の意味、リスクとはなにか、リスク認知
第 14 回	基準の決め方	環境基準と排出基準

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は各 2 時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

藤倉良・藤倉まなみ 『文科系のための環境科学入門』 有斐閣

【参考書】

別途、指示する。

【成績評価の方法と基準】

レポート（100 %）もしくは最終回に行う試験（100%）で評価する。

【学生の意見等からの気づき】

中学校卒業程度の理科の知識があれば理解できるように心がけるが、高校卒業程度の知識が必要な場合もある。

【学生が準備すべき機器他】

特になし。

【担当教員の専門分野等】

環境システム科学、国際環境協力

【担当教員の関連する業績】

- ① Ryo Fujikura, Mikiyasu Nakayama, Manami Fujikura (2016) Formulation Process of Diet Law and Cabinet Law in Japan - A Comparative Study of Basic Environmental Law and Basic Law on Biodiversity - , International Journal of Social Science Research, Vol. 4, No. 2, DOI: <http://dx.doi.org/10.5296/ijssr.v4i2.9703>
- ② Tetsuo Kida and Ryo Fujikura (2015) Pollution Risks Accompanied with Economic Integration of ASEAN Countries and the Fragmentation of Production Processes, International Journal of Social Science Studies, Vol.3, No.5, DOI: 10.11114/ijss.v3i5.915
- ③ Ryo Fujikura (2011) Environmental Policy in Japan: Progress and Challenges after the Era of Industrial Pollution, Environmental Policy and Governance, Vol. 21, No.5, pp. 303-308
- ④ Ryo Fujikura (2011) The Influence of Local Governments on National Policy-Setting Processes to Regulate Japan's Vehicle Emissions, Environmental Policy and Governance, Vol. 21, No.5, pp. 309-324

【Outline and objectives】

Environmental problems are physical, chemical and biological consequences and reactions on natural ecosystems caused by human activities. In order to understand "what is happening" and "what should be done", scientific knowledge is indispensable. In this lecture, students will learn the basic engineering knowledge regarding mechanisms and countermeasures of local environmental problems such as air pollution, water pollution, waste, soil contamination, noise, odor, harmful substances.

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

経済発展に伴い、環境問題が多様化・深刻化している。本授業では、経済学の枠組みを用いて環境問題を捉え、どのような政策が必要であるかを理論的に考える。本授業では、以下の2つを最終目的とする。①環境問題の「本質」を理解し、様々な環境問題に経済学を応用できるようになる。②日本の環境政策・制度およびそれらの問題点を理解し、必要とされる政策について理解を深める。なお、環境経済学を学ぶうえでミクロ経済学の基礎的な知識が必要となる。本授業では、関連するミクロ経済学を適宜説明しながら講義を行う。

【到達目標】

経済学の基礎知識と環境問題に対する理解を深めることができる。また、環境問題を解決するために必要な政策の思考力を得ることができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」に関連している。

【授業の進め方と方法】

対面での講義形式を基本とする授業を行います。毎回、講義と関連する課題（小テスト）を実施します。課題（小テスト）の解説を次の授業の冒頭に行います。また、コメントや質問に対する回答も授業の冒頭に行います。なお、一部の授業ではゲームを行い、学んだ理論と現実の差を体感します。また、グループディスカッションを通じて、政策の方向性などを議論します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

春学期前半

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス・環境経済学とは ミクロ経済学①（市場とは）	環境経済学を学ぶ際に必要最低限の経済学的知識を解説します。 需要曲線と供給曲線の意味および、市場の機能を解説します。
第2回	ミクロ経済学②（余剰分析） ミクロ経済学③（市場の効率性）	消費者余剰、生産者余剰、社会的総余剰について解説します。 市場の効率性・万能性について解説します。
第3回	公共財とは 外部性（様々な費用）	公共財の定義およびどのような問題があるのかを解説します。 平均費用、平均可変費用、限界費用など費用の概念を解説します。
第4回	外部経済（余剰分析） 外部不経済（余剰分析）	正の外部性について解説し、市場にどのような影響をもたらすかを解説します。 負の外部性について解説し、市場にどのような影響をもたらすかを解説します。
第5回	外部不経済の内部化	外部不経済が存在する場合、社会的に望ましい状態は何かを解説します。
第6回	コースの定理	当事者間の交渉によって環境問題が解決することができることを解説します。
第7回	政策による環境問題の解決 効率的な削減（ピグー税と排出量取引）	どのような環境政策が有効かを解説する。また、それぞれの政策の利点・欠点について議論する。
第8回	ゲーム①：排出量取引制度を理解する ゲーム②：排出量取引制度におけるプレイヤーを理解する	ゲームを通じて排出量取引制度の基本的な制度設計について学ぶ。
第9回	ゲーム③：排出量取引制度における費用軽減措置を理解する ゲーム④：排出量取引制度のまとめ	ゲームを通じて排出量取引制度の導入がもたらす様々な問題に対処する応用的な制度設計について学ぶ。
第10回	地球温暖化①：問題の所在 地球温暖化②：京都議定書	温暖化政策の基礎的な知識を解説する。また、京都議定書第1約束期間までの状況を解説する。
第11回	地球温暖化③：ポスト京都 地球温暖化④：各国の対策および事前評価	ポスト京都議定書（パリ協定まで）について解説し、各国の気候変動政策および事前評価について解説する。
第12回	廃棄物問題①：ごみ処理有料化政策 廃棄物問題②：自治体の取り組み	ごみ処理有料化政策が何故必要なのか、何を意図としているのかを解説する。また、自治体の取り組みと理論を比較する。

- 第13回 放射性廃棄物問題①：低レベル放射性廃棄物
放射性廃棄物問題②：高レベル放射性廃棄物
放射性廃棄物の最終処分問題について米国の取り組みを紹介しながら解説する。また、日本に必要な方策を考える。
- 第14回 大気汚染①：固定排出源の規制
大気汚染②：移動排出源の規制
日本における大気汚染対策を紹介し、今後の方策について考える。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とします。指定したテキストおよび参考書の該当する箇所を事前に読み、授業の準備を行ってください。
また、課題を行い、内容の理解度を深めてください。

【テキスト（教科書）】

『入門 環境経済学－環境問題解決へのアプローチ』, 日引聡・有村俊秀, 中央公論新社 (2002)

【参考書】

Richard Porter The Economics of Waste, Routledge, 2002.

【成績評価の方法と基準】

小テストおよび最終課題を総合的に評価します。具体的には、小テスト 45%、最終課題 55%の合計 100%点満点とし、60点以上が合格となります。

【学生の意見等からの気づき】

本年度授業担当者変更によりフィードバックできません。

【学生が準備すべき機器他】

電子ファイル（講義資料や追加資料など）を配布いたします。パソコン（タブレット）などをインターネットに接続できるようにしてください。

【その他の重要事項】

非常勤のため、メールでの問い合わせ（makoto.sug@gmail.com）を行っている。質問などがあつた場合、連絡ください。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>環境経済学、応用ミクロ経済学

<研究テーマ>環境経済学

<主要研究業績> Makoto Sugino, Toshi H. Arimura, Richard Morgenstern "The Effects of Alternative Carbon Mitigation Policies on Japanese Industries", Energy Policy, 62 1254-1267, 2013 年

【Outline and objectives】

Economic growth has increased the burden of environmental impacts in various dimensions. In this course, we will apply microeconomic theory to environmental issues and consider what kind of policy/regulations are needed to address these issues. This course has two objectives; 1) understand the "nature" of environmental issues and apply economics to counter these issues and 2) understand Japanese environmental policies/regulations and consider further, what kind of actions are needed. This course will also discuss microeconomic theory because it is essential in understanding environmental economics.

SOM500P2 - 023

公衆衛生研究 D

宮川 路子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

公衆衛生学は、疾病の治療を目的とする臨床医学とは異なり、疾病の予防を目的とし、さらに健康増進を図る科学技術である。人々を病気から守り、肉体的・精神的に健康な状態で社会生活を送れることを目的としている。これは人類が求める最も基本的かつ重要なサステナビリティである。現代社会には、ありとあらゆる健康問題が山積している。私たちが 21 世紀を健康に生き抜いていくためには、これらの健康問題について、適切な知識を持ち、情報の取捨選択を行っていく必要がある。

本講義では、学生が健康意識を高め、よい生活習慣、予防のためのノウハウを学び、健康寿命の延長を目的として公衆衛生の立場から幅広い知識を身に付けていく。

【到達目標】

本講義では、超高齢社会を生きる社会人にとって必要な健康知識と問題解決能力の習得を目的としている。予防医学、疫学の基礎を学び、様々な領域の専門家を招いて最先端の知識を得るとともにディスカッションを行ってさらに学生が理解を深める。

疫学、統計学的、社会学的的手法を用いた実態調査についても事例から方法論を学び、実際の研究調査の質を判断することができるようになる。学生はメディアにおいて氾濫している誤った健康情報から適切な情報を得ることが可能となる。学生は、将来健康問題に直面した際に正しい道を選択できるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP3」に関連している。

【授業の進め方と方法】

少子高齢社会において多様化する健康問題、医療費高騰、各種保健行動などについて議論するとともに、疫学、統計学的、社会学的的手法を用いた実態調査の例を論文より学び、対策を講じていく過程を学習する。また、疫学調査、産業保健、などさまざまなテーマを取り上げて専門家を招き、最先端の知識を得ると同時にディスカッションを行って、現代社会における健康、生命についての問題点を浮き彫りにしていく。講義の方法は対面で行う予定である。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期前半

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス 予防医学について	講義を受講するための心構え。 現代社会において必要とされる予防医学の基礎的知識を学ぶ。
第 2 回	分子整合栄養療法	健康の基本は栄養であり、細胞内の栄養バランスを適切に整えることにより、からだどこころの健康を保つことができることを学ぶ。
第 3 回	メンタルヘルスケア	産業保健の最重要課題であるメンタルヘルスケアについて学ぶ。また、メンタルヘルスケアにおいて重要なストレスと職場環境について学ぶ。
第 4 回	外部講師講義（日本の医療の問題点について）	個の医療から集団の医療へというテーマで学ぶ。
第 5 回	外部講師講義（疫学について）	疫学手法を用いた研究について事例紹介により理解を深める
第 6 回	医療と倫理	医療界に発生する様々な事件を参照し、生命倫理の問題点について学ぶ。
第 7 回	研究発表、まとめ	受講者による健康に関わるテーマの研究発表・ディスカッションを行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

資料は講義の際に配布します。

【参考書】

こころの超整理法

【成績評価の方法と基準】

出席、講義中の発言、参加態度、修士課程の学生に対するコメント、最終回の発表とレポートによる。

平常点：50%

発表：30%

レポート：20%

【学生の意見等からの気づき】

教科書に基づく基本的な知識の習得範囲を広げるとともに、専門家の講義とディスカッションをさらに充実させていく。

【学生が準備すべき機器他】

最終回の発表時にレジュメを準備する。発表にパワーポイントを利用する場合には、教授室からパソコンを借りて準備をする。

【その他の重要事項】

外部講師の講義については、依頼する講師の都合により、変更することがある。

【担当教員の専門分野等】

公衆衛生学、産業保健、分子整合栄養医学、統合医療、統計学

<研究テーマ> 栄養と健康、就労者のストレスと健康

<主要研究業績> Subjective social status: its determinants and association with health in the Swedish working population (the SLOSH study)

The European Journal of Public Health 2012 年

ビタミン D の健康効果 人間環境論集 19 巻号 79-101

日本の医療を含むサービス産業における過重労働の軽減化における課題：国民はサービスの質・量の低下を甘受することができるか 人間環境論集 20 巻 1 号 1-17

<https://eiyouyohou.com/>

【Outline and objectives】

Public health, unlike clinical medicine aimed at treating diseases, is science and technology aiming at the prevention of diseases and promoting health. It aims to protect people from diseases and to live social life in a physical and mental healthy state. This is the most fundamental and important sustainability that mankind desires. In modern society, all kinds of health problems are piled up. In order to live healthy, it is necessary for us to have appropriate knowledge about these health problems, and to select information.

In this lecture, students learn about healthy lifestyle and know-how for disease prevention, and wear broad knowledge from the viewpoint of public health for the purpose of prolonging healthy life span.

サステナブル経営論 D

長谷川 直哉

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この授業は、サステナビリティ経営と企業責任と企業家に学ぶ ESG 経営の二つのテーマを隔年ごとに講義します。2021 年度は「企業家に学ぶ ESG 経営」を取り上げます。明治期～現代に至る日本企業の経営者が、企業と社会の関係をどのように捉えて経営を展開してきたのかを SDGs や ESG の視点から再評価し、現代企業に求められるサステナビリティ経営のあり方について検討します。

【到達目標】

SDG に関する基本的な知識を習得したうえで、現代企業のサステナビリティ経営や脱炭素経営の実態を正しく評価する能力を涵養します。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP3」に関連している。

【授業の進め方と方法】

以下のテーマを中心に、教員による講義と受講者による報告等とを交えながら行います。

- (1) 企業活動のケーススタディ
- (2) 経営思想・経営理念の背景と変遷
- (3) 企業観と企業統治のあり方
- (4) ステークホルダーコミュニケーション
- (5) 非財務的要素と企業価値

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

春学期前半

回	テーマ	内容
第 1 回	伊庭貞剛 [住友財閥]	「自利利他公私一如」の事業精神
第 2 回	鈴木馬左也 [住友財閥]	「以德招利」の経営
第 3 回	岡田良一郎 [大日本報徳社]	「財本徳末主義」の経営
第 4 回	金原明善 [金原治山治水財団]	「ソーシャルビジネス」の先駆者
第 5 回	ウィリアム・メレル・ヴォーリズ [近江兄弟社・ヴォーリズ学園]	「スチュワードシップ」に基づく経営
第 6 回	高峰譲吉 [三共]	「研究とビジネス」の両利き経営
第 7 回	豊田佐吉 [豊田自動織機製作所] (トヨタ自動車)	「ニンベンのついた自動化」の実現
第 8 回	鈴木道雄 [鈴木式織機製作所] (スズキ)	社会の変化を掴む「経営構想力」
第 9 回	石橋正二郎 [ブリヂストン]	「理想」を目指して「独創」の道を進む経営
第 10 回	大原孫三郎 [倉敷紡績・クラレ]	「労働理想主義」の実践
第 11 回	波多野鶴吉 [ガンゼ]	「人財マネジメント」を通じた価値創造
第 12 回	矢野恒太 [第一生命]	「相互主義」による生命保険事業の確立
第 13 回	各務鎌吉 [東京海上]	「リスクマネジメント」を通じた社会課題の解決

第 14 回 平生鈺三郎 「共働互助の精神」による経営と
[東京海上・甲南学園] 教育の実践

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

指定した教科書・参考書や当該企業が発行する非財務報告書を参照しながら、この授業で取り上げた企業家の理念やビジョンが、現代の経営にどのように活かされているのかについて自己学習を深めて下さい。詳細については、初回授業において説明します。本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

Naoya.HASEGAWA (2020) "Sustainable Management of Japanese Entrepreneurs in Pre-War Period from the Perspective of SDGs and ESG"(English Edition), Palgrave Macmillan.

長谷川直哉 (2021) 『SDGs で読み解く責任経営の系譜－時代を超えた企業家の使命－』(文眞堂)
レジュメを毎回配布します。

【参考書】

Naoya.HASEGAWA (2020) "Sustainable Management of Japanese Entrepreneurs in Pre-War Period from the Perspective of SDGs and ESG"(English Edition), Palgrave Macmillan

長谷川直哉著『SDGs で読み解く責任経営の系譜－時代を超えた企業家の使命』文眞堂, 2021 年

長谷川直哉編著『企業家活動に学ぶ ESG 経営』文眞堂, 2019 年
長谷川直哉編著『統合思考と ESG 投資－長期的な企業価値創出メカニズムを求めて』文眞堂, 2018 年

長谷川直哉編著『価値共創時代の戦略的パートナーシップ』文眞堂, 2017 年

長谷川直哉編著『企業家活動でたどるサステナブル経営史』文眞堂, 2016 年

【成績評価の方法と基準】

期末レポート：80 %

発表・討議：20 %

【学生の意見等からの気づき】

毎回、企業家活動のケースを取り上げ、多様なバックボーンを持つ参加者の自由な討議を中心に授業を進めます。

【学生が準備すべき機器他】

必要に応じてパソコンを使用します。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

サステナブル経営・企業倫理・責任投資・ビジネスストーリー

<研究テーマ>

企業と社会のサステナビリティ

<主要研究業績>

「企業社会の変容と共通価値の創造」『損害保険研究第 76 巻第 3 号』2014 年

「利益の質保証－企業価値評価を巡る投資家の責任－」『日本経営倫理学会誌第 20 号』2013 年

【実務経験のある教員による授業】

【実務経験】

損害保険会社の資産運用部門において、約 15 年投資業務を担当しました。1999 年、ESG 投資の先駆的な取り組みである SRI (社会責任投資) ファンドを組成し、ファンドマネジャーとして企業の ESG (非財務) 側面を評価する手法を開発しました。また、(公財) 国際金融情報センターに Outreach、カントリーリスクや国際金融システムに関する調査・研究に従事しました。

【関連資格】

日本証券アナリスト協会認定アナリスト (CMA)

【Outline and objectives】

This class covers two themes, "Sustainability Management and Corporate Responsibility" and "ESG Management Learned from Entrepreneurs" every other year. In 2021, we will give a lecture on "ESG management learned from entrepreneurs". In the class, we will reevaluate the activities of Japanese companies from the Meiji era to the present day from the perspective of SDGs and ESG. Based on the results of the analysis, we will consider the ideal form of sustainability management required of modern companies.

LAW500P2 - 026

国際環境法 D

岡松 暁子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

国際環境法は、国際環境問題の特質ゆえに、形成・発展、形態、内容、履行確保において様々な特徴がある。本講義では、個別条約や判例を題材として、国際環境諸条約に見られるそのような特徴を抽出し、検討していく。

【到達目標】

国際社会における環境問題の本質を国際法的側面から理解する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP3」に関連している。

【授業の進め方と方法】

国際環境法の理論、判例についての講義を行う。各条約については、受講者による発表と全体討論を行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

春学期前半

回	テーマ	内容
1	国際環境法の対象と接近方法、国際環境法の形成と展開	国際環境法へのアプローチの仕方、国際環境問題の特徴の変遷とそれに対応した国際環境法の生成について概観する。
2	国際環境法の性質、国際環境法の制度化	国際環境法の性質とそれに対応した定立形式、制度化について検討する。
3	国際環境法の手続的義務、国際環境法上の義務の履行確保	国際環境法に特徴的に見られる手続的義務と、国際環境法上の義務の履行確保制度について考察する。
4	受講者による発表と討論①	受講者の関心のある国際環境条約についての報告と、それについての全体での討論を行う。
5	受講者による発表と討論②	受講者の関心のある国際環境条約についての報告と、それについての全体での討論を行う。
6	受講者による発表と討論③	受講者の関心のある国際環境条約についての報告と、それについての全体での討論を行う。
7	日本と国際環境問題	日本に大きな影響のある国際環境問題について検討する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

岩沢雄司編『国際条約集』有斐閣。
その他、適宜講読文献を指示する。

【参考書】

繁田泰宏・佐古田彰・岡松暁子・小林友彦編『ケースブック国際環境法』東信堂、2020 年。
小寺彰・森川幸一・西村弓編『国際法判例百選 [新版]』有斐閣、2011 年。
その他、適宜指示する。

【成績評価の方法と基準】

個別課題の発表、討論への参加、期末レポートによる。(100%)

【学生の意見等からの気づき】

これまでと同様の方法で進める。

【その他の重要事項】

受講者の人数により、授業の方法を変更することがある。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>国際法
<研究テーマ>国際法の履行確保、国際環境法、国際原子力法
<主要研究業績>

- ①永野秀雄・岡松暁子編著『環境と法－国際法と諸外国法制の論点－』（三和書籍、2010 年）
- ②「地球温暖化をめぐる法的紛争の現状と課題」『国際政治経済学研究』第 17 号、2006 年、19-33 頁。
- ③「貿易規制による森林管理－国際法上の可能性と限界－」『人間環境論集』第 6 巻第 1 号、2005 年、53-62 頁。

【Outline and objectives】

This course introduces students to the theory of international environmental law. Students may learn the specific legal framework of international environmental issues and gain better understanding by reading leading cases.

国際環境協力論 D

藤倉 良

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

開発途上国が持続可能な開発を達成するために、日本や国際機関はどのような支援を実施しているのか、また、今後、どのように支援を行うべきなのかを学ぶ。将来、国際協力の分野に進んだ学生には、援助のあり方を考える基礎を習得する。

【到達目標】

インフラ開発に伴う社会環境配慮と環境プロジェクトの相違を理解したうえで、世界銀行やアジア開発銀行、日本のODAがどのような仕組みで動いているかを理解する。その上で、以下の事例について学習する。

- ・過去に行われたダム建設に伴う住民移転から得られた教訓
- ・工業化に伴う公害対策の先例としての日本の公害経験
- ・開発途上国の資源環境問題の実例としての中国の諸問題
- ・気候変動対策における援助の方向性

これらをベースにして、持続可能な開発に向けた援助の方向性を見据える。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連している。

【授業の進め方と方法】

パワーポイントを用いて講義を進める。パワーポイントはハードコピーを毎回配布し、授業支援システムにもアップする。

国際協力の現場で働く実務家にプレゼンテーションを行って頂く予定である。海外勤務の方にはオンラインで行って頂く。このため、日程はプレゼンターの都合によるので、授業の全体スケジュールはそれに応じて変更される。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

なし/No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

秋学期後半

回	テーマ	内容
第1回	序論	国際協力とODAの仕組み
第2回	日本の環境協力の歴史	1970年代以降の日本の環境協力
第3回	開発途上国の環境政策1	開発途上国で環境政策がどのように進展してきたか。
第4回	開発途上国の環境政策2	開発途上国の環境政策にどのような課題が残されているか。
第5回	日中環境技術協力	JICAを通じた協力事例
第6回	中国の資源と環境	水資源、エネルギー、公害などについて
第7回	東南アジアの事例	ベトナムなどの事例研究
第8回	気候変動対策1	緩和
第9回	気候変動に関連する技術協力	緩和策に関連する事例
第10回	気候変動対策2	適応
第11回	日本の公害経験1	国の政策
第12回	日本の公害経験2	地方公共団体の政策
第13回	環境配慮	セーフガードポリシー
第14回	住民移転	ダムによる住民移転と生活再建の評価

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

講義中に資料を指示する。

【参考書】

井村秀文・松岡俊二・下村恭民編著 『環境と開発』 日本評論社

【成績評価の方法と基準】

レポート（100%）もしくは最終回に行う試験（100%）で評価する。

【学生の意見等からの気づき】

なるべく多くの事例を紹介することとする。

【学生が準備すべき機器他】

特になし

【担当教員の専門分野等】

環境システム科学、国際環境協力

【担当教員の関連する業績】

1.Kawanishi, M. and Fujikura, R. (2020), Assessment for the implementation of a national greenhouse gas inventory: the case of Japan, Management of Environmental Quality, Vol. ahead-of-print No. ahead-of-print. <https://doi.org/10.1108/MEQ-06-2020-0116>

2.Masato Kawanishi, Junko Morizane, Nela Anjani Lubis, Ryo Fujikura (2020) Issue interpretations and implementation analysis for the national greenhouse gas inventory: the case of Indonesia, Journal of Environmental Studies and Sciences, 10(4), 411-425, <https://doi.org/10.1007/s13412-020-00628-3>

3. Masato Kawanishi, Makoto Kato, Emiko Matsuda, Manami Fujikura, and Ryo Fujikura (2019) Comparative study on institutional designs and performance of national greenhouse gas inventories: the cases of Vietnam and the Philippines, Environment, Development and Sustainability, Vol.21, <https://doi.org/10.1007/s10668-019-00460-y>

4.Ryo Fujikura and Mikiyasu Nakayama (2019) Overview: Livelihood Re-Establishment After Resettlement due to Dam Construction, Journal of Asian Development, 5(1), 1-11, doi:10.5296/jad.v5i1.14420

5.Sunardi, Ariyani, M., Febriani, R., Maharani, G.S., Fu, R. H. Y., & Fujikura, R. (2019) Rebuilding livelihood of the rural and peri-urban resettlers in post-involuntary displacement of Saguling Dam construction. Journal of Asian Development, 5(1), 12-30, doi:10.5296/jad.v5i1.14423

6.Suwartapradja, O. S., Fujikura, R., Sunardi, & Fu, R. H. Y. (2019). Resettlement caused by Jatigede Dam project: Consequence of long delayed implementation of a project. Journal of Asian Development, 5(1), 31-44, doi:10.5296/jad.v5i1.14422

7.Nakayama, M., & Fujikura, R. (2019). Addressing the Livelihood of Non-Resettlers in Dam-Induced "Detached" Areas: The Case of the Shichikashuku Dam. Journal of Asian Development, 5(1), 45-55, doi:10.5296/jad.v5i1.14423

8.Masato Kawanishi, Makoto Kato, Emiko Matsuda, and Ryo Fujikura (2019) Comparative Study of Reporting for Transparency under the International Agreements on Climate Change and Ozone Protection: A Case of the Philippines, International Journal of Environmental Science and Development, Vol.10, No.1, pp.1-8, doi: 10.18178/ijesd.2019.10.1.1137

9.Masato Kawanishi and Ryo Fujikura (2018) Evaluation of Enabling Factors for Sustainable National Greenhouse Gas Inventory in Developing Countries, International Journal of Environmental Science and Development, Vol. 9, No. 10, pp.290-297, doi: 10.18178/ijesd.2018.9.10.1116

【Outline and objectives】

Students will learn international cooperation is being implemented by Japan or international organizations in order for developing countries to achieve sustainable development and how to support them in the future.

ARS500P2 - 028

国際協力フィールドスタディ D

武貞 稔彦

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

国際開発のプロジェクトや課題を現地で学ぶ。事前学習で訪問先のプロジェクトや訪問地域について理解を深め、現場を視察したうえで、報告書をまとめる。

【到達目標】

本講義および現地調査を通じて、学生は、1) 開発プロジェクトの理論と現地調査の手法を学び、実践を通して習得することができる、2) 報告書の作成を通じて、論文執筆の基礎となる文書作成能力を高めることができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連している。

【授業の進め方と方法】

文献講読と現地調査によって、開発援助プロジェクトのあり方を討議する。事前学習では、教員による調査手法などの講義、受講者による事前学習の発表、現地調査準備、報告書作成準備を行う。現地調査では、開発途上国で日本政府や民間企業、NGOなどが行っているプロジェクトの現場を訪問する。帰国後に受講者による報告書を作成する。

訪問先と時期については、参加者と協議のうえ決定する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

秋学期集中

回	テーマ	内容
第1回	序論	授業の趣旨、現地調査先、スケジュールの確認
第2回	事前学習作業分担	各自で現地に関する事前学習テーマを設定する
第3回	現地調査：事例1	現地調査の事例を紹介する
第4回	事例の討論1	調査内容についての討議
第5回	調査対象国についての事前学習1	調査対象国について専門家による講義
第6回	調査対象国についての事前学習2	調査対象国について専門家による講義
第7回	学生の事前学習発表1	受講生による事前学習成果報告
第8回	学生の事前学習発表2	受講生による事前学習成果報告
第9回	現地調査準備1	質問票の作成
第10回	現地調査準備2	スケジュール確認
第11回	事後報告書作成準備1	質問票の完成
第12回	事後報告書作成準備2	報告書の分担
第13回	現地調査	プロジェクト訪問
第14回	現地調査	プロジェクト訪問

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

講義中に指示する。

【参考書】

講義中に指示する。

【成績評価の方法と基準】

現地調査への参加状況（50%）と事前講義での報告や事後報告書の作成状況（50%）によって評価する。

【学生の意見等からの気づき】

現地調査は例年2月か3月に1週間程度で行う。訪問先及び日程は決定次第、公表する。

【その他の重要事項】

現地では英語でインタビューするので、それが実施可能なレベルの英語力を必要とする。

【費用負担】

現地調査に必要な旅費（往復航空運賃、宿泊費、食事代等）は自己負担となる。

ただし、大学院の海外における研究活動補助の制度を活用できる。

【担当教員の専門分野】

<専門領域> 開発の自然環境・社会環境への影響、開発援助、開発と倫理
<研究テーマ> 「望ましい（望ましくない）「開発」とは何か」「ダム建設に伴う立ち退きと補償、生活再建」
<主要研究業績>

"Japanese Experience of Involuntary Resettlement: Long-Term Consequences of Resettlement for the Construction of the Ikawa Dam," *International Journal of Water Resources Development*, Routledge, Vol. 25, Issue 3, September 2009, pp. 419-430.

『開発介入と補償：ダム立ち退きをめぐる開発と正義論』勁草書房 2012年、"Participation and diluted stakes in river management in Japan: the challenge of alternative constructions of resource governance" in Sato, J. ed., *Governance of Natural Resources: Uncovering the social purpose of materials in nature*. United Nations University Press, pp.141-161, July 2013

【Outline and objectives】

This course is a combination of lectures and field trip in order to understand and critically analyze the development project or issue in development. After completing the course, students will be able to; 1) understand the project formation/implementation and the theory and practice of field work, 2) strengthen the writing ability for thesis by preparing field reports.

CUA500P2 - 029

ヒューマン・エコロジー D

山内 愛子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

国際的な環境保全を目的とした際に実効性ある取り組みを行うことを前提とし、多様なステークホルダーとともに協働する手法について、主に海洋を現場とした活動を取り上げる。この授業を通じて、実社会で活用可能なステークホルダーエンゲージメントの方法論を深めるとともに、中長期的に環境保全やサステナビリティに取り組むためのツールを学ぶ。

【到達目標】

- 1) 国際的な環境保全のあり方について理解する
- 2) 国際的な潮流と日本独自の課題の調整を検討できる
- 3) サステナビリティの実現に向け、利用可能なツールとその使いかたを理解する
- 4) 国内外の多様なステークホルダーの重要性を理解し、ステークホルダーマッピングができるようになる
- 5) ステークホルダーとの連携を前提とした、環境保全等の活動計画が立てられるようになる

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」に関連している。

【授業の進め方と方法】

- 1) 前半は講義を通じて、国際環境 NGO の活動やステークホルダーとの連携について学び、実社会での活動のあり方への理解を深める
 - 2) 後半では、学んだ内容を活かし、実際に実施可能な計画が立てられるよう、グループディスカッションや演習を取り入れる
 - 3) 自分が選択した環境問題の解決に向けた活動計画を作成する
- 授業形態は、対面での講義となる。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期後半

回	テーマ	内容
第 1 回	国際的環境保全の実態	国際的な環境問題について、海洋問題を中心に国際環境 NGO の取り組み事例を紹介
第 2 回	サステナビリティとステークホルダー	環境保全活動の根幹となるサステナビリティを実現する上で重要なステークホルダーの役割について学ぶ
第 3 回	マーケットの力を利用した環境保全の事例	近年重要な位置付けにあるマーケットと環境保全の関係性を学ぶ
第 4 回	サステナビリティと多様なツール	ステークホルダーとの連携を可能にする様々なツールについて学ぶ
第 5 回	国際的な視点と国内の課題	国際的な潮流と国内の事情・背景をすり合わせた上で、期待される結果を生むような実践例を学ぶ
第 6 回	国際的な環境問題への貢献	日本で活躍するリーダーをスピーカーとして迎え、国際的視点を持った国内での活動事例を学ぶ
第 7 回	サステナブルな社会の構築に向けた先進的事例	米国を事例として、先進的な社会事例を学ぶ
第 8 回	環境問題とその原因	自分が解決したい環境問題を選択し、その課題や背景を考える
第 9 回	環境問題とその原因	グループディスカッションを通じて、自分では見えなかった課題や背景を探る
第 10 回	ステークホルダーマッピング	ステークホルダーマッピングの方法を学ぶ
第 11 回	ステークホルダーマッピング	自分が解決したい環境問題に関するステークホルダーマッピングをグループディスカッションを通じて行う
第 12 回	環境保全活動の計画	環境保全活動を行う際の計画立案方法を学ぶ
第 13 回	環境問題の解決に向けた計画発表	実際に取り組み可能な解決方法について発表を行い、パネルディスカッションを行う
第 14 回	環境問題の解決に向けた計画発表	実際に取り組み可能な解決方法について発表を行い、パネルディスカッションを行う

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

講義後半では、自分が解決したい環境問題を選択し、作業を行うため、事前に選択したい環境問題の知識等を深めること。また、ディスカッション等を通じて得られた他者の見解や意見について復習すること。本授業の準備学習・復習時間は各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

教科書は使用せず、毎回資料を配布します。

【参考書】

特になし。ただし、関心ある環境問題について参考文献が必要な場合には個別紹介します。

【成績評価の方法と基準】

独自の環境保全活動計画が完成することを目標とします（要提出）。計画では、

- 1 実践可能か？
- 2 解決を図ることが期待されるか？
- 3 ステークホルダーとの連携が十分検討されているか？

を元に評価します。

評価基準：

提出された環境保全活動計画書から、

- 1 実践可能性 60%
- 2 解決手法 20%
- 3 ステークホルダーとの連携度 20%

【学生の意見等からの気づき】

講義の後にアンケートを行います。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

水産学、海洋環境保全

<研究テーマ>

サステナブルシーフードと環境保全型漁業

<主要研究業績>

1 海と水産業の多面的評価－水産研究の新たな役割と方向性－
環境保全活動の目指す未来と水産研究・水産業に期待する役割、月刊海洋、2015 年 8,9 月号

2 S D G s ビジネス戦略 企業と社会が共発展を遂げるための指南書

(第 3 章 企業が取り組むべき SDGs

目標 14 海の豊かさを守ろう)、日刊工業新聞社

3 海洋の生物多様性保全と持続可能な利用、水産振興、2011

【Outline and objectives】

In order to practically contribute to the global conservation issues, the class will the examples of the multi-stakeholders engagement methodology for the marine conservation area. Through this class, you will learn the on ground stakeholders engagement and the tools to deliver mid-long term environmental conservation outcomes.

GEO500P2 - 031

サステナビリティ学事例研究 D II

杉戸 信彦

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

地震災害は、相対的に低頻度ではあるが発生した場合の影響が大きく、地域社会の持続可能性を考える重要な鍵のひとつとなる。本事例研究では、土地条件評価と地震発生予測の現状と課題を検討し、今後の土地利用や社会基盤のあり方を考える。

【到達目標】

日本列島における土地条件評価と地震発生予測を説明できる。
土地利用や社会基盤の課題を具体的に記述し、解決案を提示できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」に関連している。

【授業の進め方と方法】

対面授業を予定している。
主に講義形式。一部で図上作業も実施する。
リアクションペーパー等からポイントを選定し、全体に対してフィードバックを行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

秋学期前半

回	テーマ	内容
第 1 回	地形調査法と実習	変動地形と古地震の調査法を概観したのち、活断層の位置情報を知るための地形判読実習を実施する。
第 2 回	地震発生予測	地震発生繰り返しモデルや長期評価について検討を行う。
第 3 回	土地条件評価	日本列島の地形環境について自然地理学的な視点から概観したのち、地形と地質、災害脆弱性、地域危険度などについて検討を行う。
第 4 回	土地条件に関する実習	地形と地質、災害脆弱性、地域危険度などへの理解をさらに深めるため、地形や表層地質などの情報を用いた机上作業を行う。
第 5 回	地震と活断層	日本列島の活断層分布とその地域性、歴史地震、予測などについて検討を行う。
第 6 回	海溝型地震	日本列島における海溝型地震とその地域性、歴史地震、予測などについて検討を行う。
第 7 回	土地利用と社会基盤	災害危険区域や高台移転、防潮堤、建築基準など、土地利用および社会基盤に関わる話題について検討を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業内容に関わる文献等を参照して準備学習および復習を行う。
自然環境や自然災害、防災に関わる時の話題や映像等に積極的に触れる。
本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

担当教員が作成した資料を授業にて配布

【参考書】

授業中に紹介

【成績評価の方法と基準】

平常点（40％）・期末レポート（60％）。平常点はリアクションペーパー等によって評価する。期末レポートは、(1) 日本列島における土地条件評価と地震発生予測を説明できるか、(2) 土地利用や社会基盤の課題を具体的に記述し解決案を提示できるか、を問う内容とする。

【学生の意見等からの気づき】

知識と基礎力に加え、応用力や思考力をより涵養すべく、詳しく具体的な説明を心がける。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>自然地理学、自然災害

<研究テーマ>変動地形、活断層、地震、土地条件

<主要研究業績>

1) 杉戸信彦, 2014, 大地震の歴史とメカニズムを捉えるー活断層への地理学的アプローチ-, 木村周平・杉戸信彦・柄谷由香編, 「災害フィールドワーク論」, FENICS100 万人のフィールドワーカシリーズ 5, 古今書院, 212p, 132-149.

2) 杉戸信彦・松多信尚・石黒聡士・内田主税・千田良道・鈴木康弘, 2015, 津波浸水域データと数値標高モデルの GIS 解析に基づく 2011 年東北地方太平洋沖地震の津波遡上高の空間分布, 地学雑誌, 124, 157-176. doi: 10.5026/jgeography.124.157

3) Sugito, N., H. Sawa, K. Taniguchi, Y. Sato, M. Watanabe, and Y. Suzuki, 2019, Evolution of Riedel-shear pop-up structures during cumulative strike-slip faulting: A case study in the Misayama-Godo area, Fujimi Town, central Japan, Geomorphology, 327, 446-455. doi: 10.1016/j.geomorph.2018.11.026

【Outline and objectives】

Risk management for recurrent earthquake disasters is a key to improve social resilience, which supports future sustainable society, because earthquakes cause serious damages although their frequency is not high. We examine land-condition evaluation and long-term earthquake prediction, in order to propose future land use as well as to suggest how to use social infrastructures.

環境ガバナンス D II

横内 恵

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

環境法制度の内容を学び、その形成過程や運用実態における課題について議論する。

【到達目標】

本講義は、いくつかの環境法制度の内容を理解し、それを踏まえて、それらの制度の形成過程や運用実態における課題について議論することを通して、環境ガバナンスについての理解を深めることを到達目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP3」に関連している。

【授業の進め方と方法】

対面授業を実施する予定である。担当教員からの解説も行うが、基本的には演習形式で、受講者による報告や出席者間の議論を求める。本講義でとり上げる環境法制度は、受講生の希望に応じて決定する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

春学期後半

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	スライドやレジュメに沿って解説する。
第2回	イントロダクション	スライドやレジュメに沿って解説する。
第3回	環境ガバナンス概論（1）	スライドやレジュメに沿って解説する。
第4回	環境ガバナンス概論（2）	スライドやレジュメに沿って解説する。
第5回	報告とディスカッション	報告担当者による報告と、それに関するテーマでのディスカッションを行う。
第6回	報告とディスカッション	報告担当者による報告と、それに関するテーマでのディスカッションを行う。
第7回	報告とディスカッション	報告担当者による報告と、それに関するテーマでのディスカッションを行う。
第8回	報告とディスカッション	報告担当者による報告と、それに関するテーマでのディスカッションを行う。
第9回	報告とディスカッション	報告担当者による報告と、それに関するテーマでのディスカッションを行う。
第10回	報告とディスカッション	報告担当者による報告と、それに関するテーマでのディスカッションを行う。
第11回	報告とディスカッション	報告担当者による報告と、それに関するテーマでのディスカッションを行う。
第12回	報告とディスカッション	報告担当者による報告と、それに関するテーマでのディスカッションを行う。
第13回	まとめ	授業中に学期末レポート課題を実施する。
第14回	まとめ	小レポート課題の確認を含め、これまでの授業内容の総まとめをする。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

準備学習として、毎回の報告テーマに関して、教科書の該当ページを読む。復習として、報告レジュメやスライドを読み直す。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間が標準である。各受講者に計1回または2回の報告を求める予定である。

【テキスト（教科書）】

必要に応じて講義中に指示します。

【参考書】

必要に応じて講義中に指示します。

【成績評価の方法と基準】

授業中の報告 55%、平常点 30%、学期末レポート課題 15%

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【その他の重要事項】

履修に際しては、学習支援システムに掲載する「お知らせ」やオリエンテーション資料をよく読んでください。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

環境法、公法（憲法・行政法）

<研究テーマ>

環境リスクの法的制御、廃棄物処理法制

<主要研究業績>

①「順応型リスク制御と比例性：ドイツ遺伝子技術法の閉鎖系規律手続を題材として」大塚直編『環境法研究』7号（信山社、2017年）13-45頁。

②「廃棄物処理法に基づく生活環境影響調査の対象地域に関する一考察—高城町事件と東海村事件を事例として」大阪経大論集 67巻3号（2016年）113-134頁。

③「科学的不確実性を伴う環境リスクに対する法的制御の可能性と限界」OUGCブックレット 8号「中国の食・健康・環境の現状から導く東アジアの未来」（2016年）62-74頁。

【Outline and objectives】

The programme gives special knowledge and skills within several environmental fields.

ECN500P2 - 035

環境ガバナンス D III

湯澤 規子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

「食」と「農」と「地域」をキーワードとして、その関係性を歴史的に検討します。「自然環境」、「社会環境」の両側面から「環境」を捉え、様々な事例から持続可能な社会のしくみについて考えます。

【到達目標】

食と農と地域の歴史を理解し、地域環境を論じる基礎的知識と視角を身につけます。文献講読および具体的な事例を通して、現代社会の課題と今後の展望を考察することを目指します。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP3」に関連している。

【授業の進め方と方法】

講義を中心としつつ、ディスカッションペーパーにもとづく議論を適宜織り交ぜて、考察を深めていきます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期前半

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	食と農と地域を論じる視点
第2回	問題提起	近年の研究成果の検討
第3回	文献講読と討論（1）	食と農と地域に関わる文献講読（1）
第4回	文献講読と討論（2）	食と農と地域に関わる文献講読（2）
第5回	文献講読と討論（3）	食と農と地域に関わる文献講読（3）
第6回	文献講読と討論（4）	食と農と地域に関わる文献講読（4）
第7回	総括と展望	食と農と地域からみた環境ガバナンスについての全体討論

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

今のところ「食産業」を中心テーマとして下記の文献を候補としているが、参加者との相談で決定する。

・山本昌仁『近江商人の哲学－「たねや」に学ぶ商いの基本』講談社現代新書、2018

・金田章裕『和食の地理学－あの美味を生むのはどんな土地なのか』平凡社新書、2020

・川北稔『砂糖の世界史』岩波ジュニア新書、1996

・武田尚子『チョコレートの世界史－近代ヨーロッパが磨き上げた褐色の宝石』中公新書、2010

・白井隆一郎『コーヒーが廻り世界史が廻る－近代市民社会の黒い血液』中公新書、1992

ほか

【参考書】

・湯澤規子『胃袋の近代－食と人びとの日常史』名古屋大学出版会、2018

・湯澤規子『7袋のポテトチップス－食べるを語る、胃袋の戦後史』2019

その他、随時紹介します。

【成績評価の方法と基準】

報告（50%）と最終レポート（50%）で評価します。テーマについては、講義の初回で提示します。

【学生の意見等からの気づき】

参加者それぞれの問題意識を深められるように、ディスカッションの時間を活用したいと思います。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>地域経済学、日本近現代史、人文地理学

<研究テーマ>地域づくりの理論と実践、食と農と暮らしの地域経済学、女性と家族の近現代史

<主要研究業績>

・『7袋のポテトチップス－食べるを語る胃袋の戦後史』（単著、晶文社、2019年）

・『胃袋の近代－食と人びとの日常史』（単著、名古屋大学出版会、2018年）

・『在来産業と家族の地域史－ライフヒストリーからみた小規模家族経営と結城紬生産』（単著、古今書院、2009年）

・「ジェンダーから再考する地域と人間」『サステイナビリティ－地球と人類の課題』朝倉書店、2-18年、104-113頁

・「地域づくりの系譜－山梨県甲州市の甚六桜とかつぬま朝市」『歴史地理学』58(1)、2016年、57-72頁

【Outline and objectives】

We will examine this relationship from a historical point of view using "food", "agriculture" and "region" as keywords. We will consider the "environment" from both the "natural environment" and "social environment" and think about the structure of a sustainable society from various cases.

